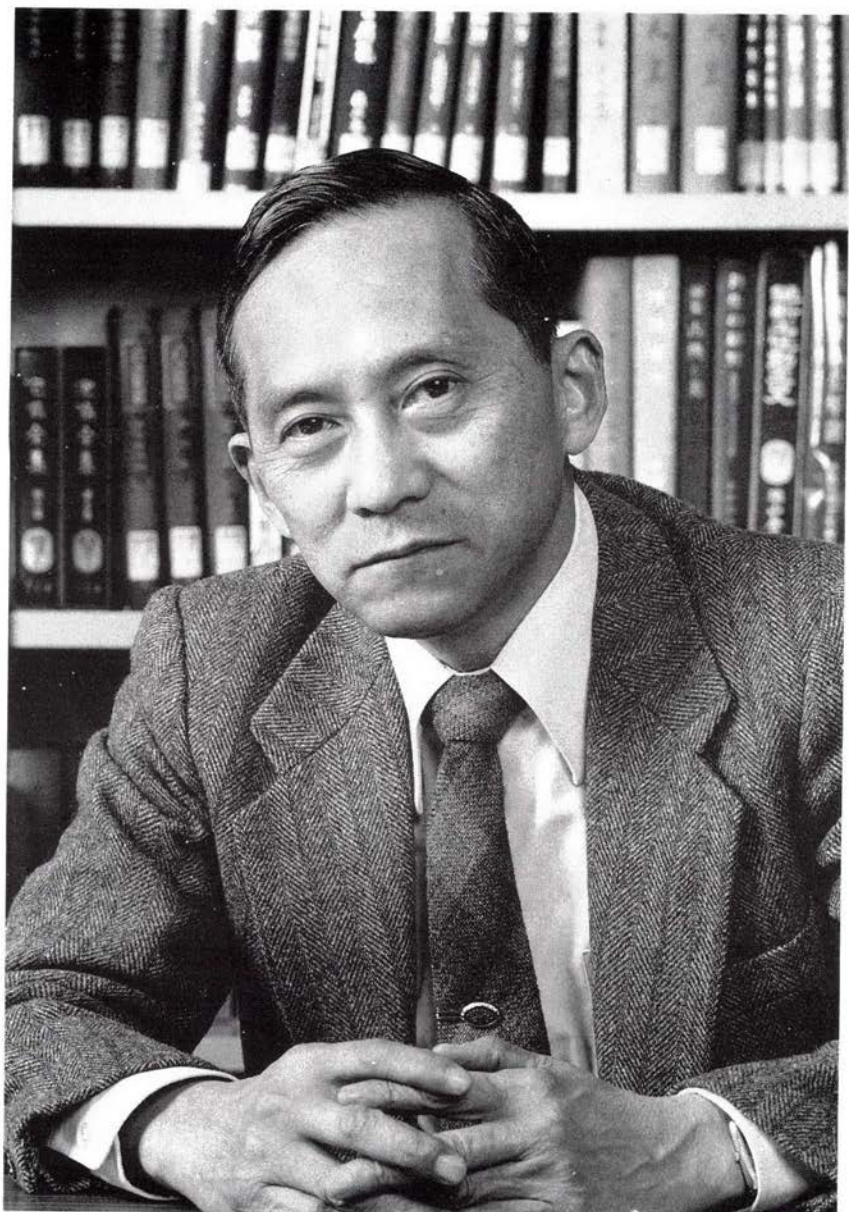


年々歳々

亜細亞大学名誉教授
夜久正雄 喜寿記念詩文集



著者（研究室にて）

御題 旅

昭和六十年歌会始預選

旅遠くルンビニの野に行き暮れて
橋の袂に螢飛ぶ見き

昭和六十二年初夏

夜久正雄書

● 朴允貞刻



『私のプロフィール』（先生の自己紹介書、亜細亜大学・日本経済短期大学）から

夜久正雄名譽教授

大正四年六月二十一日、東京府豊多摩郡渋谷町大字下渋谷五百七拾番番地に出生。今の渋谷区である。

私の生まれた家は、今は、りっぱな舗装道路になっていて、跡かたもない。しかし、近くの氷川神社の境内は昔ながらで、何年かには一度は訪ねて行って、一人遠い昔を懐しむ。そこで常盤松小学校を出て、東京府立一中に入学。今の日比谷高校である。自由なのびのびした校風であったが、四、五年のころ——つまり、昭和七、八年になるが、——左翼運動の波が押し寄せてきて、同期生の中で処罰される生徒が出た。主義を異にする生徒ではあったが、親しくしていたので、苦しかった。そのころから思想問題に深い関心を持つようになって、一高に入ったとき、昭信会という学内団体に入った。聖徳太子が大

陸文化を批判摂取して日本文明を創開されたご精神と、同じように、明治天皇が欧米文化を批判摂取して新日本文明の基礎を築かれたご精神とを仰いで、日本の前途に貢献しようとする同信思想団体である。

以来、一高昭信会を母胎として、東大精神科学研究会、日本学生協会、精神科学研究所と発展するにつれて、その一員として活動した。戦時中、この団体は、「反戦反軍自由・平和主義」の故をもって憲兵隊に弾圧されて解散したので、同じく一高昭信会同期の小田村寅二郎氏（元本学教授・国民文化研究会理事長）の紹介で、岩田愛之助先生にお会いし、本学の前身興亜専門学校の教員にいただいた。同時に、「愛国新聞」に執筆させていただいた。

憲兵隊にマークされた者を教員にして文章を書かせてくれた所は、他になかったろう。昭和十八年十

一月のことである。以後、今日に至る四十数年間、病気で死にそうになったことはあるが、本学の教員であることと、昭信会（今は国民文化研究会）の会員であることに変わりはない。

本学における経歴は、興亜専門学校自称教授にはじまり日本経済専門学校教授、日本経済短期大学教授（教務課長）、亜細亜大学教授（教務部長、教養部長・学内理事、学長室等歴任）、昭和六十一年三月定年退職、四月名誉教授（非常勤講師、理事）平成三年三月非常勤講師退職、現在五十年史編集顧問。

担当科目は、その時々によや異なるが、「道義・日本文学論」「文学概論」「国文学」「国語表現法」「日本語（留学生）」「日本思想史」「人間と環境（総合科目）」「日本文化と天皇（同上）」「教養ゼミ」等。

戦時中に結婚。一男一女。最終学歴は、東京帝国大学文学部国文科（昭和十四年卒）。著書は、昭和十九年『三条実美公歌集「梨のかたえ」とその研究』を第一冊として、以後、『歌人・今上天皇』、『古事

記のいのち』（W・ロビンソン氏英訳『THE KOIKI IN THE LIFE OF JAPAN』）『白村江の戦』、『詩と政治——明治の詩魂』、『日本文学における魂の行方』、『しきしまの道』研究、『増補新版・歌人・今上天皇』等。

自選歌集『流星』『戦後』『武蔵野』、『いのちありて』『旅遠く』。共著に『短歌のすすめ』『短歌のあゆみ』『ホイットマン詩選』『日本思想の系譜』『聖徳太子・仏典講説・勝鬘經義疏の現代語訳とその研究』等。共編著『三井甲之歌集』『三井甲之存稿』『天地四方（川出麻須美詩歌集）』『明治天皇詔勅謹解』『ホイットマン（アメリカ古典文庫）』等。ほかに、『古事記全巻朗読録音テープ』十巻完成。趣味は、旅、ヘボ将棋。

（理事）

はじめに

——夜久正雄名誉教授喜寿記念詩文集『年々歳々』刊行に当って

世話人の一人として 梶村 昇

戦雲が慌ただしくなってきた昭和十九年（一九四四）の十月二十二日、私は満洲のハルビンにゐた。九月十一日に東京を出てすでに一か月余り、リュックを背負って、ひとり放浪の旅としゃれてゐたのであるが、いささか郷愁を感じ始めたのであらうか、この日ハルピンの本屋に立ち寄つてゐる。その日の日記を見ると、柄にもなく三首連作の短歌を書いてゐる。とても紹介できるやうな代物ではないが、要するに、久しく手に触れなかつた書物の香をかぎたくて本屋に入った。何げなく眺めてゐたら、思ひがけなく、そこに夜久先生の本を見つけた。『三條實美公歌集梨のかたえとその研究』といふ銀の背文字を見て、驚きとなつかしさとが交錯し、急いで手にとつた、といふ歌である。この光景は、四十六年後の今でも、あざやかに思い出されるほどであるから、異郷での、先生のご本とのめぐりあひが、いかに私にとって感動的であつたかが分かる。

この日記の示すやうに、当時、私はすでに夜久先生を存じあげてゐた。先生のお名前を初めて知つたのは、これより二年前の昭和十七年六月頃であつたと思ふ。翌十八年に、先生は

興亜専門学校の教授として赴任されてゐる。先生のお年は、昭和の年に十を加へた年であるから、この時は二十八歳といふことになる。今で言へばもちろんだが、昔で言つても、なんと若い教授であつたといへる。

この頃、私は先生のお宅を何度かお訪ねしてゐる。麻布の有栖川宮記念公園のお近くであつたと思ふが、三、四段の石段を上がつた右側のお宅で、いろいろなお話を伺つたことをよく覚えてゐる。「梨のかたえとその研究」といふ先生にとつての最初のご著書は、翌十九年五月二十日に、初版二千部が刊行されてゐる。今の出版状況とは違つて、当時すでに物資も不足してゐた頃であるから、この種類の、しかもかう申し上げては失礼だが、二十七、八歳の青年の書いた本が、二千部も出るといふことは大変なことであつた。このことは、この書物がいかに貴重な研究であつたかといふことを示してゐるものと思ふ。

私の書架にこの本がある。内扉に「昭和十九年六月五日 著者夜久正雄先生ヨリ戴ク」と記してゐる。当時十八歳の私が、このやうな貴重なご本を戴く理由はないので、恐らくねだつて頂戴したのだと思ふ。懐かしくあちこち拝見してゐると、奥付けの前のページに、「序文はしがき正誤表」といふ小さな紙が貼つてある。それを見て驚いた。それは印刷したものでなく、まさしく先生の字で、十一か所の校正ミスを書き出し、それを一々赤字で訂正されてゐるのである。おそらく一冊づつ貼られたのであらうと思ふが、先生の今に変わらない学問研究におけるきびしいご態度に、改めて頭の下がるものを感じさせられた。

冒頭から私ごとばかり申し上げて恐縮であつたが、私にとつて夜久先生は、このやうな思

ひ出から始まり、以後、この武蔵野のキャンパスを中心に、今日まで五十年にわたりご指導ご交誼を頂いてきた方である。この度、先生が教壇をひかれるといふことで、期せずして多くの方々から、先生にこの五十年間の論稿をまとめていただかうといふ話もちあがり、それが「あとがき」に記されたやうな経緯を経て刊行されることになった。勝手な言ひ分ではあるが、これは私自身が生きてきた時代の記録のやうにも思へるので、ついついペンが走って、私ごとにかまけた次第、どうぞご宥賜りたい。

ご覧いただければ分かることであるから、ここで本書の解説めいたことを述べるつもりはないが、折角の場合なので、少し感想めいたことを述べさせていたいただきたい。

その一つは、本書は書名のとほり、夜久先生が「年々歳々」に書かれた詩文を集めたものである。さういふと、すこぶる私的なもののやうに思はれがちであるが、さういふことから離れて、第三者的な見方をすれば、本書は「激動の昭和史を生きた一人の私立大学の教授が、折りに触れて綴った精神の記録」であるといふ言ひ方もできる。しかも、それは華やかな、虚構にみちた政治の世界の歴史ではなく、いはば草莽に生きたものの真実の精神の軌跡である。この意味において、私は、本書は昭和の精神史を物語る貴重な記録であると思つてゐる。大袈裟にいふことは、先生のもつとも嫌はれることであるから、さう言ふつもりはないが、本書は、後世、昭和の国民精神史の研究をする場合、これに目を通さなければ研究そのものが偏頗に終る、といはれるやうな文献となつて残るであらうと思つてゐる。

もう一つの感想は、どなたもご覧になられてお気づきのやうに、冒頭の戦中の詩文から、

その後五十年になんなんとする平成の今日に至るまで、書き綴られたご論稿が、終始一貫、不動の信念・思想のもとに貫かれてゐるといふ事実である。自然科学のやうな分野でならともかく、先生のご専門は、国文学とはいへ、こと思想に関する問題がほぼ中心を占めてゐる。猫の目のやうに変る思想界で、しかも、戦前・戦中・戦後といふ、またと経験することのできないやうな激動の時代にあつて、その上、先生の一身上のことを申し上げせてもらへば、危険が身にふりかかつてきたこともあり、世論におもねらないために経済的に逼迫されたこともある中を、終始一つの信念で貫き通されたといふことは驚くべきことである。

かういふと、「変る」ことはすべて悪いことのやうに聞こえるかも知れないが、私は何も「変る」ことを咎め立てしようと思つてゐるのではない。「過つて則ち改むるに憚る事勿れ」ともいはれてゐるから、間違つたと思つたら変へることに憚りはなからう。しかし、いい加減の年齢になつたものが、右往左往、オポチュニズムによつて行動してゐる様は、なんとも興ざめがする。まして高名な思想家が、二転三転する図はみられたものではない。それ故にこそ先生のこの一貫した姿勢を実に貴いものと思ふのである。

このやうなことを言ひだすと、なぜ変らないのか、否、世間はなぜ変るのかなどと考へてみたくなるが、そんなことを言ひ出したら、「はじめに」どころではなくなつてしまふので止めるが、一つだけ言はせてもらへば、世間の人がかかるくる変るのは、頭で物を考へ、それに寄り掛かり過ぎてゐるからだと思ふ。浅はかな人間の知恵で考へたことが長続きすることはない。すぐにボロがでる。マルキシズムがいい例である。先生が有志らとともに終始その

誤りを説いてこられたのは、マルキシズムに間違ひがあつたといふことだけではなく、かうした考へ方全体に対する批判であつたのである。

考へるといふことは、たしかに頭で考へるしかなからうが、大事なことは、考へることの根底に、心情がなければならぬといふことであらう。先生は、学問も思想も、人間の情意に裏打ちされたものでなければならぬと説いてこられた。人文科学から情意を切り捨てることが科学的になる所以だといふ盲信が、学問を人間から遊離させてしまった。ここに学問の退廃が始まつたと先生は警鐘を鳴らし続けられたのである。もし頭で考へるだけで事が済むといふならば、先生は府立一中、一高、東大と、天下の秀才が羨望するエリートコースを最短時間で駆け抜けられた俊秀であるから、もつとも得意とする分野であるとさへいへる。しかし、先生にはその誤りが見えた。人間の世界を研究する学問に、人間が見失はれてゐるとはどういふことか、そのやうな偏頗な学問の姿に我慢ならないものがあつたのであらう。そこで、その匡正にほとんどの生涯をかけられたのである。

その学問の根底をなす情意の面においては、先生は、正岡子規・三井甲之直系の歌人としてつながつてこられた。子規が、写生を強調し、理屈を排したことを甲之が継承し、先生はそれを忠実に実行された。写生は真実を写すことであるが、理屈は頭で捏ね回した概念であるから、そのやうなものは歌にならないと子規は言つた。先生はそれに従ひ、真実を写し、理屈を排することを修練された。その結実は本書でご覧いただきたいが、一例のつもりで、今私の手もとにある先生のお歌を一つ紹介させてもらふ。平成二年に頂戴した年賀状に、

山ぎはのみづ旗雲のはしほの紅に映ゆ日は出でむとす

とある。山ぎはに出づる日を詠んで、事の深奥をかうまで表現できるものかと感嘆させられる。言葉の達人といふことであらう。言葉の達人とはまた人生の達人にはかならない。なぜならば生きるとは、真実の言葉を生きることであるから。

先生にとって短歌の創作は、事実を忠実に見ることの修業であり、心情陶冶の場であつたと思ふ。先生における学問・思想は、常に情意と一体であるから、先生の学問はこの訓練の上に成立してゐるといへる。それを名づけて文献文化史的研究といへるならば、その大いなる成果が、名著『古事記のいのち』（社団法人・国民文化研究会・昭和41初版）であつたといふことができる。ここに述べられた『古事記』の成立に関する説は、かうした研究方法によつてこそ生み出されるものであり、しかも、それは従来みることのなかつた新説であつて、学位論文に値するものであると私は思つてゐる。もちろん先生はそれを求めようともされなかつたが、その真価を知つた東洋文庫の東アジア研究所が、ユネスコの助成を得て、これを英訳し全世界に広めてくださった。（The *Kojiki in the life of Japan*）。さすがといふほかはない。

このやうなことをくどくどと書いてゐると、それが理屈だ、と叱られさうなので、この辺で筆を置かなければならないが、何しろ五十年にわたつたことなので、いくら書いても書ききれないものがある。中でも亜細亜大学アジア研究所の研究旅行に加はり、先生とご一緒に韓国（昭和48）、ネパール・インド（昭和51）、モンゴル（昭和52）、中国（昭和54）、ビルマ・スリランカ（昭和55）、バングラディッシュ（昭和58）と回り、『アジア研究所紀要』に、

先生の歌日記を私の拙文で綴ってきたのは楽しいことであった。その中で、ネパール・インド旅行の際作られた歌が、昭和六十年の「旅」と題する歌会始の詠進歌の選に預かったことは、私たちにとても忘れられない喜びであった。本書の内扉の写真が、その歌である。

書かなければならないことはまだたくさんあるが、みんな割愛させてもらひ、これをもって刊行の趣意にもならない「はじめに」の一文を終りにしたい。

最後になってしまったが、本書の刊行に当り、ご協力戴いた方々に、世話人一同、心から御礼を申し上る次第である。お願ひする範囲を限定させてもらったにもかかはらず、実にくの方々のご協力を得、すばらしいご本が出来上がった。先生のご人徳であることはいふまでもないが、改めてここに「ご協力戴いた方々に厚く感謝申し上げ、皆様とともに先生のご自愛、ご健勝を心から祈念したい。」

(平成三年一月五日)

はし が き

(一)

今回、私が亜細亜大学での講義を終へるに際して、ちょうど私の喜寿にもなるしするから、記念に本を出さないか、と、同僚教授の梶村さんに言はれた時、心に湧いたのは、学内で発表した文章や歌を集めて出してもらへないか、といふ思ひであつた。

私が興亜専門学校の教員になつたのは、昭和十八年十一月のことであるから、今日まで五十年近く授業を受け持つことになる。(専任教授としては五年前に定年退職したが、そのあと五年間非常勤で続けさせてもらった。)

その間、随時に、学内の発表機関に私は文章を書きつづけた。頼まれて書いたものもあるが、多くはその時々、大学の教育との関連で、自分で望んで出してもらったものである。

私は、授業の中では一般的問題は取り扱はないやうにした。そこで勢ひ、その時々の大學生の関心事に関連して、私の思ひを学内誌に発表する、それが大学の教師としてのつとめであると、考へたのである。だから私の教育活動の中心は、授業と学内誌への執筆発表とであつた、と言へると思ふ。

幸ひ、亜細亜大学では、昭和四十年頃から学内誌が設けられて、発表の機会に恵まれてゐた。したがつて、時流との戦ひの場に、事欠くことはなかつた。私は終始、亜細亜大学に籠城したやうな気持で、流の社会主義・共産主義と戦つた。

授業と平行して、私は書き続けたのである。

そんなことで、大学の授業を終へるに際して、書き続けたものが、すべて散逸してしまひ、跡かたもなくなつてしまふのに堪へがたくて、学内発表の詩文集を出してもらふことになつたわけである。

内容に自信があるわけではないが、次のやうな理由もある。

戦後の大学教育の苦心といふものがどういふものであつたか、それは私一人のことではなく、同僚の諸君はじめ、一般に大学教授の経験をしたものが味つたものであるが、その苦勞がどういふものであつたか、それを残しておきたい、知つてもらひたい、といふ思ひでもあつた。

これは私の我儘な執着であるが、そんなお願ひをしたところ、大学の各学部事務局国文学関係の方々から世話人の方が出てくださつて、広く大学全体ならびに卒業生諸君にまで呼びかけてくださった。そして多勢の発起人の方々が出てくださり、さらに多くの方々との協賛を得て、紀要に載せた学術論文を除いて、発表詩文のほとんどすべてを網羅する詩文集を作ることができた。

私は、他の大学で講義をしたことはほとんどないので、俗にいふ教へ子と言へば、亜細亜大学の卒業生以外にはない。しかし、社団法人・国民文化研究会では、一高昭信会以来の因縁で、その機関誌『国民同胞』に数々の詩文を発表して来たし、毎年夏の全国青年学生合宿教室で講義をすることも多かつた。その関係で、小田村寅二郎国文研理事長の間接的な御示唆もあつて、国文研の会員の方々にも声をかけていただくことにしたのである。その方々からも多勢の御協賛を得ることになった。またそのほかの知友の方々からも望外の御協賛を得た。大したこともできず、お役に立つことも少なかつた一生であつたのに、かくも多くの方々との御協賛を得たことについて、世話人の方々・発起人の方々・協賛の方々に深甚の謝意を捧げるものである。

さて「学内発表の詩歌・文集」と言っても簡単にはゆかなかつた。昭和四十年頃からのものはすぐわかるが、それ以前、興亜専門学校（昭和十四年四月創立）教授時代（昭和十八年十一月から昭和二十年九月まで）、つづく日本経済専門学校教授時代（昭和二十年九月から昭和二十五年三月まで）、つづく日本経済短期大学教授時代（昭和二十五年四月から昭和三十年三月まで）、つづく亜細亜大学商学部教授時代（昭和三十年四月から昭和四十年ごろまで）、以上の期間は、学内発表機関も乏しく発表の機会も乏しかった、したがって学内発表の詩歌論文もごく少なかった。しかし、授業と執筆とはずつとつづけてゐて、授業の内容に関連する論説を学外の雑誌などに発表してゐたのである。

特に、敗戦直後、学生諸君とホイットマンや万葉集を読んだことなど、当時の学生諸君の思ひ出となつてゐるが、それに関連する論説等の発表が学内ではできなかった。

また、戦時中の興亜専門学校での「道義」の時間に講義した内容も、学内の発表には見ることができない。

そこで、当時のことは、学外に発表したもので補ふことにしたのである。

古いもので、新聞などに書いたものは、変色したりして読めなくなつたものなどもあつたが、当時の学生諸君との精神的な交流の記念にもなると思つて、とりあげてみることにした。「学内発表の詩文集」の名とは違ふが、おゆるし願ひたい。

右のやうにして、戦時中の言論から、亜細亜大学の創立を経て、その発展に至る、今日までの間、中途、昭和二十五・六年頃、病気で一年間ほど授業と執筆とを休んだことはあるが、授業と執筆とは私の

教員としてのつとめであると信じて続けたのである。

右のやうなことで、本書は、年代順の詩文集とし、興専の教授時代を第一編にまとめ、日経専の教授時代を第二編とし、日経短の教授時代を第三編とし、亜細亜大学教授時代を第四、五、六編にまとめた。亜細亜大学の教員時代は第四編・昭和三十年代の創立時代、第五編・四十年代の大学紛争時代とし、第六編は、五十年代六十年代及び平成年間のをまとめた。

それに主題別の「師友追悼詩文集」を第七編とし、「書評集」(学内発表のもの——つまり先輩同僚教授の著書の批評紹介)を第八編とした。

また、第九編には年代順から除いた長文の論説、特に青々会(卒業生会)報の青々論壇に寄稿したものと、学寮研修会での講演速記などをまとめた。その最後の「今上御製—平成二年年頭のお歌について」は発表の機を得なかつた論稿である。

第十編は亜細亜大学学内の紀要——『諸学紀要』、『教養部紀要』、『アジア研究所紀要』——掲載の論文はじめ、その他の発表論説ならびに著書、訳書、編書、共著その他の刊行年表である。

以上をまとめると次のやうになる。

第一編 戦時中の言論・抄(興亜専門学校教授として・昭和十九年二十年)

第二編 敗戦の股鑑と復興の摸索(日本経済専門学校教授として・昭和二十年—二十四年)

第三編 日本経済短期大学一部二部教授として(昭和二十五年—昭和三十年)

第四編 亜細亜大学創立外史ならびに歌論等(亜細亜大学教授として・昭和三十年—四十年)

第五編 大学紛争の嵐の中で(昭和四十年—五十年代)

一、新制大学論抄ならびに過激派批判

二、随想折々——戦後大学の思想問題をめぐって

第六編 アジアへの道（昭和五十年―六十年）——国際化と国民文化——

第七編 師友（大学関係）追悼詩文集

第八編 書評集（大学関係）

第九編 論説・講話抄（青々会機関誌『青々会報』ならびに学寮機関誌等から）

第十編 自撰・執筆文献目録——年代順——（昭和十五年―平成二年）

三

本書の編集に当っては、五年前の定年退職時に、同僚の深山祐教授が、学内機関誌からコピーしてくださったものを基にして、東中野修道助教授が、頁数の計算その他をして下さって、全体の構成の目途を立てて下さった。

さらに、本の装幀から写真の配置・選択には、梶村昇教授及び加藤幸雄氏の指導をお願いし、困難な編集には岡部篤厚氏、校正には梶村教授・東中野助教授・山内健生非常勤講師の御協力を仰ぐことができた。そして最後に梶村教授に重ねてお願いをして「はじめに」の文章を得、「あとがき」を東中野助教授にお願ひした。諸氏の御指導御協力に心からお礼を申上げる。かうしてやうやくこの大冊の書籍を作りあげることができたのである。

掲載写真は多く加藤幸雄氏の提供ならびに接写をお願いし、中扉カットは、多く、年賀状としていただいた真島愛子女史の紋様の画を使はせていただいた。そのほか写真の提供についても多くの方々御

協力をいただき、他の方々の著書の中から無断で拝借したものもある。なるべく出典を記載して謝意を表するやうに努めたが、一般的のものもあるので、記載を省略したものもある。非売品でもあり、学内刊行物の延長にあるものであるから、おゆるし願ひたい。

詩文の配列は年代順を心がけたが、多少前後したところがある。詩文各篇すべて年代を入れるやうに努めたが、不明になったもので、年代を記入できなかったものもある。

漢字の字体については当用漢字に拠ることとし、かなづかひについては、ほぼ原発表のものに拠ることとした。そのため、「現代かなづかい」と「歴史的かなづかひ」とが混在するといふ不体裁を免れなかつたが、原発表のものをそのまま残したことで御諒解をえたい。これら不備はすべて著者の責任である。

終りに、世話人の方々はじめ発起人の方々、御協賛の方々のお名前を列記して、重ねて深甚の謝意を表し、あはせて亜細亜学園ならびに社団法人・国民文化研究会の一層の発展を祈つて擲筆する。

一、発起人御氏名(五十音順)、(◎は世話人)、(敬称略)

青島 勉	穂山 幹夫	秋山 罔之	◎鯨坂 芳文	安倍 勇
新井 康祐	荒井 紀子	荒木 邦夫	安藤 健	◎飯島 正
生野 善應	池上 巧	池島 政広	井田 晃由	伊藤 信勝
稲葉 幹次	井上 徹	今井 一見	今林 賢郁	岩越 豊雄
植芝吉祥丸	植竹 恒男	植村 利男	宇佐見義尚	牛島 栄子
碓氷 悟史	白田 勝己	内田 俊雄	内海 二郎	浦郷 義郎

清水 德蔵	佐藤 晴章	桜井 昭平	小柳陽太郎	小林 国男	小泉 明	国武 忠彦	木村俊一郎	菊谷 正人	神山 尊因	加納 祐五	加藤 壽延	柿山 隆	小野 公一	小澤 重男	大塚 彰三	大澤 啓蔵	江口 旻
末次 祐司	佐脇 考二	佐々木友三	小山 浩代	小林 熙直	鯉淵 信一	倉前 盛通	木屋 隆安	菊地 庄吉	亀井 孝之	兼清 弘之	加藤 伸吾	笠井 賢治	小野 吉宣	尾関 英正	大堀 芳作	小縣 一也	衛藤 藩吉
杉浦初久二	澤部 壽孫	笹部 益弘	最知 浩一	小堀 勝司	合原 俊光	栗田 充治	◎清瀬信次郎	岸村 正路	川口 博久	金子 郁雄	加藤 節也	銚 信弘	尾上 典子	小田 隆興	小笠原憲政	岡部 篤厚	江里口淳一郎
杉淵 忠基	渋谷 啓一	佐藤 司	斎藤 志郎	小牧 昌實	後藤 信幸	黒田 維訓	久我 雅紹	喜多 了祐	河村 讓	柁島 有三	加藤 幸雄	◎梶村 昇	荻野 道雄	小田村四郎	小倉 幸義	大塩 耕三	王子 愉
杉本 常	島津 和夫	佐藤 勝美	酒井 武	小松 芳明	小林 一俊	桑原 務	工藤 重忠	北島 照明	◎神沢 有三	上村 和男	加藤 龍一	片岡 健	香川 亮二	小田村寅二郎	長内 俊平	大島 正克	太田 文雄

古川健次郎	藤田 至孝	廣瀬 誠	菱屋 正芳	早川 英幸	長谷部雄次	成田 諭	中村 均	永島 学	外山 正夫	徳永 正巳	千葉 博男	田中 省三	多久 善郎	高殿 良博	関 礼子	鈴木 義男	須崎 成雄
古川 哲史	藤原 祥雅	深町健一郎	平楨 明人	林 勲	服部 正中	西俣 昭雄	中村 義彦	中島 省治	島海 利昭	徳永 善昭	張 祥義	田村 潔	竹内 俊雄	高橋 和彦	◎関口甲子男	須田 清文	鈴木 忍
逸見 謙三	布施 勉	深谷 義久	平沢 茂	坂東 一男	花岡美智子	西村 康一	名越二荒之助	中根 伸二	中里 良男	戸田 義雄	張 世國	田村 泰宏	武部 啓	高村 光紀	副島 廣之	住吉 俊彦	鈴木 賢英
保谷 幸村	二上 英治	福岡 政夫	平田 鉄夫	東 淳	馬場 房子	野沢 浩	夏目 重美	中野 泰雄	中澤 榮二	富本 哲弘	筑井 甚吉	千々和純一	竹前 文夫	宝辺 正久	十合 眺	関 秀雄	鈴木 雅教
星野 昭吉	古川 修	福田 忠之	弘重 植三	東中野修道	浜口 英作	野地 純一	名取 昭弘	中村 建	長島 俊男	塘添 敏文	土谷 博道	千葉 則夫	館 学	瀧川 叡一	高尾 清	関 正臣	鈴木 豊

星野 貢	星野 滿	本多 壮一	前田 終止	正岡 寛忠
松井 嘉和	松尾 忠	松本 幹男	松林幸一郎	松吉 基順
丸山 行雄	三浦 貞蔵	三浦 誠	水野 建雄	水野 宏
三村 芙美子	三宅 将之	宮崎 義之	宮田 斎門	深山 祐
宮脇 昌三	室伏 武	毛利 昭	毛利 和弘	森 万佐子
矢嶋美都子	安國 一	安田 定彦	安田 利雄	安元 繁行
矢野 祐弘	山内 健生	◎山口 年一	山路 忠重	山田 健一
◎山田 清市	山田 輝彦	山中 長悦	山本 博資	山本 忠士
柳本 正春	横澤 利昌	吉川 光	吉田 靖彦	吉田 裕史
依田 清一	李 廷江	渡辺 廣治	渡辺 昌介	渡辺 恒利
渡邊與五郎				

二、御協賛者御氏名(五十音順)、(敬称略)

相徳 和義	青島 勉	青砥 誠一	秋山 罔之	穉山 幹夫
鯨坂 芳文	東 淳	吾妻 哲夫	足立原茂徳	安倍 勇
安倍 博之	新井 康祐	荒井 紀子	荒木 邦夫	荒木 隆男
荒木 稔	安東 巖	安藤 健	安藤 正美	飯島 隆史
飯島 正	五十嵐寛暢	生野 善應	池上 巧	池島 政広

石井 雅晴	石村 僊悟	石村 暢五郎	磯貝 保博	伊藤 望
稻田 健二	稻葉 幹次	今井 一見	今泉 重郎	今林 賢郁
岩越 豊雄	岩下 方成	植木 伸子	植芝吉祥丸	植竹 恒男
上村 栄章	植村 利男	宇佐見義尚	牛島 栄子	碓水 悟史
内田 俊雄	内海 勝彦	江口 旻	江口 研治	衛藤 藩吉
榎元 光雄	江里口淳一郎	遠藤 尚巳	遠藤 好	遠藤 邦男
王子 愉	大岡 弘	大形 敏郎	大澤 啓蔵	大島 正克
大田 修身	太田さよ子	太田 文雄	太田 誠也	大高 一郎
大塚 彰三	大津留 温	大貫 之往	大林 善郎	岡 新
岡部 篤厚	岡村 義一	小笠原憲政	小縣 一也	小川 幸雄
荻野 道雄	小倉 幸義	長内 俊平	尾関 英正	小田 隆興
小田村四郎	小田村寅二郎	小田村初男	小田村泰彦	小野 公一
小野 吉宣	大日方 学	折内 幹	折田 豊生	折本 求
香川 亮二	笠井 賢治	河西 宏之	梶木 克彦	梶村 昇
鏝 信弘	桂 教夫	加藤 伸吾	加藤 幸雄	加藤 善之
加藤 龍一	兼清 弘之	金子 郁雄	金子 勇	金子 義博
加納 祐五	栴島 有三	神蔵 照雄	上村 和男	神山 尊園
亀井 孝之	川口 博久	川路 光子	川田 和秀	河端 宏

鈴木 豊	杉本 文雄	末次 祐司	渋谷 章	椎谷 福男	佐藤 弘輝	桜井 昭平	斎藤 志郎	小山 良	小牧 昌實	越山 洋一	小泉 明	倉本 滿義	窪 辰郎	久我 雅紹	木田 浩隆	岸村 正路	川本 和利
鈴木 義男	須崎 成雄	菅原 亨二	渋谷 啓一	塩谷 洋司	佐藤 正哲	佐々木友三	斎藤 広	近藤 繁	古宮 敬一	小林 明	鯉淵 信一	栗田 充治	窪田 澈	久々宮 章	吉川 理夫	木島 秀雄	菅 俊雄
鈴木 賢英	鈴木 忍	杉浦初久二	島津 和夫	嶋田 明政	佐野 博道	笹部 益弘	斎藤 洋	五条堀利男	小柳志乃夫	小林 一俊	合原 俊光	黒田 維訓	久保田 真	楠田 幹人	木村俊一郎	喜多 了祐	神沢 有三
須田 清文	鈴木多喜男	杉淵 忠基	清水 徳蔵	柴田 義治	佐脇 考二	佐藤 則夫	酒井 武	後藤 積	小柳陽太郎	小林 国男	古賀 秀男	桑野 昭二	熊谷 明子	工藤 重忠	救世学院	北島 照明	菊地 庄吉
隅田 忠義	鈴木 雅教	杉本 常	神野 辰郎	柴富 浩	澤部 壽孫	佐藤 晴章	坂口 秀俊	後藤 信幸	小山 浩代	小林 照直	國分 俊喜	桑原 務	倉前 盛通	工藤 節夫	清瀬信次郎	北島 道治	菊池 威

納所 実	名取 昭弘	永島 学	中野 泰雄	中島 繁樹	島海 利明	富田 隆行	徳永 善昭	角杉 通昌	張 祥義	田村 泰宏	竹村 隆夫	田口 讓二	宝辺矢太郎	高橋三七雄	高殿 良博	妹尾大之祐	住吉 俊彦
野沢 浩	錦戸 正大	長島 俊男	中村 建	中島 省治	中川 裕司	富樫 陽子	床田恒太郎	津村鎌之助	張 世國	千々和純一	館 学	竹内 俊雄	田頭 直機	高見沢祥卓	高橋 勇	宗 巖	関 正臣
野間口行正	西村 康一	名越二荒之助	中村 均	中田 一義	中里 良男	塘添 敏文	戸田 義雄	寺門 朗典	張 美玉	千野 政長	田中 省三	竹中 公人	瀧 静雄	高村 光紀	高橋 宏一	副島羊吉郎	関 礼子
橋田 光臣	西山 辰三	奈田 明憲	中村 義彦	中田 耕平	中澤 栄二	外山 正夫	井上 佳彦	寺田 金五	知脇 主税	千葉 則夫	玉置 正美	武部 啓	瀧川 叡一	財部 正人	高橋 隆	高尾 清	関口甲子男
橋本 公明	西山 八郎	夏目 重美	永井 寛二	中根 伸二	中島 勇徳	豊島 典雄	富岡栄八郎	徳永 正巳	筑井 甚吉	千葉 博男	田村 潔	竹前 文夫	多久 善郎	宝辺 正久	高橋ふじ子	高沢 正利	関口 靖枝

柳本 正春	森田 仁士	室伏 武	宮田 良将	三村芙美子	丸山 行雄	松尾 忠	正岡 寛忠	星野 貢	古川 修	藤田 至孝	福田 金八	広瀬 誠	平沢 茂	菱屋 正芳	原 正昭	早川 英幸	長谷部雄次
矢野 祐弘	諸角 雅夫	毛利 昭	深山 祐	三宅 将之	三浦 誠	松沢 秀人	松井 哲也	星野 満	古川健次郎	布施 勉	福田 忠之	深町健一郎	平田 鉄夫	日高 万明	原川 猛雄	林 広樹	波多 洋治
谷萩 香織	矢嶋美都子	毛利 和弘	宮本 昭司	都澤 勉	三重野悌次郎	松本 秋男	松井 嘉和	細田 勲次	古川 哲史	布瀬 雅義	藤井 貢	深谷 義久	平横 明人	日比野光男	馬場 幸一	林 正男	服部 正中
山内 健生	安國 一	望月 孝植	宮脇 昌三	宮崎 義之	三門 準	松本 幹男	松浦 成利	保谷 幸村	逸見 謙三	船谷 勇	藤川 明	福岡 政夫	広木 寧	平石 清久	馬場 房子	林 龍一	花岡美智子
山内 藤道	安元 繁行	森 万佐子	三好淳一郎	宮田 斎門	水野 建雄	松吉 基順	松尾 栄二	本多 壮一	星野 艶子	古井 博明	藤田 恒男	福沢 力	弘重 植三	平川 吉雄	東中野修道	林 勲	浜口 英作

山口 年一	山下 昇	山路 忠重	山田 健一	山田 清市
山田 辰巳	山田 輝彦	山田 博	山田 睦彦	山中 長悦
山本 茂夫	山本 忠士	横澤 利昌	吉川 光	吉田哲太郎
吉田 裕史	吉田 靖彦	吉村圭四郎	吉村 浩之	依田 清一
若林 憲二	脇田 孝夫	渡辺喜一郎	渡辺 昌介	渡辺 恒利
渡辺 廣治	渡邊與五郎	綿引 芳行	藤 寛明	

(なほ、救世学院殿ならびに松尾忠氏からは特に多数口の御協賛をいただいたことを記して謝意とする。)

年々歳々

総目次

年々歳々



年々歳々



総目次

はじめに (1)

はしがき (9)

第一編 戦時中の言論・抄 (昭和十九年・二十年) 1

(興亜専門学校教員として——担当科目「道義」)

一、抄録に際して

二、『愛国新聞』から

- (1) 第二次ブーゲンビル島沖航空戦(軍歌)
- (2) 戦時言論の任務
- (3) 危急時局の要請(上和下睦。諸於論事。則事理自通。何事不成。)
- (4) サイパン復仇を誓って(和歌)
- (5) 敵前回頭
- 新内閣強力新態勢の性格
- (6) 国民道義の根拠
- (7) 文教非常態勢私見

三、『愛国評論』から

- (1) 古代の表情
- (2) 障害の打開

四、『三条美公集梨のかたえとその研究』「はしがき」

第二編 敗戦の殷鑑と復興の摸索 (昭和二十年―二十四年) …………… 41

(日本経済専門学校教員として——担当科目「道義」「国語」)

- (1) ある復員兵士の話
- (2) 小林秀雄『無常といふこと』と亀井勝一郎『聖徳太子』
- (3) 岩波文庫復刻『草の葉』と『憲法義解』
- (4) 鈴木貫太郎述『終戦の表情』
- (5) エドガー・スノー『中国の赤い星』
- (6) ホイットマンの言葉(訳詩五篇)
- (7) ホイットマンの言葉『民主主義展望』抄訳
- (8) 航海文学と西部文学(木口公十氏に訊く)
- (9) 『シーホーク』と『南部の人』
- (10) 鹿菅渡の歌三首
- (11) 歌壇展望(『創作』五月号評)
- (12) 画展逍遙
- (13) 宗良親王『李花集』研究ノート
- (14) ホイットマン『パイオニア』——お、パイオニア(訳詩)
- (15) ベルジャエフについて
- (16) 共産主義私見
- (17) こんなことがあった(日本経済専門学校の末ごろ)

第三編 日本経済短期大学一部二部教授として

(昭和二十五年―昭和三十年) …………… 103
(担当科目「日本文学論」「文学概論」 役職―教務課長)

- (1) 秋ふけて(短歌)
- (2) 記念祭に寄す(日経短大校歌作詞)
- (3) 日経短大校歌(作詞・平山雅章作曲)

第四編 亜細亜大学創立外史ならびに歌論等（昭和三十年代）……………115

（亜細亜大学教授として——担当科目「国文学」「国語表現法」「研修」 役職——教務部長）

- (1) 亜細亜大学創立準備の思い出 (2) 『歌人・今上天皇』刊行ならびに出版記念会 (3) 昭和三十八年歌会始について（補訂） (4) 武蔵野ところどころ（短歌）

第五編 大学紛争の嵐の中で（昭和四十年、五十年代）……………143

（亜細亜大学担当科目——「国文学」「国語表現法」「研修」 留学生「日本語」総合科目「人間と環境」「日本文化と天皇」 役職——教養部長）

一、新制大学論抄ならびに過激派批判……………147

- (1) 教養部の特色と夢 (2) 戦歿同窓生の慰霊祭挙行に当りて (3) 文学と人生 (4) 大学における人間教育の回復 (5) 「君が代」に憶う（「明治百年記念連続講座会報」より） (6) 「大学の運営に関する臨時措置法案」寸感 (7) 最近のアジピラを分析する (8) 東大五月祭を見て——大学問題を考える (9) 大学を選ぶ (10) 大学の存在意義 (11) 建学の精神と教養部制とについて (12) 募集校歌選後評 (13) 和歌三題（法学部F・O・Cほか） (14) キャンパス雑詠抄

二、随想折々——戦後大学の思想問題をめぐって他（四十三年～五十年代）……………193

- (1) 武蔵境で下りて（桜橋・山林に自由存す・鷗外と太宰の墓・「武蔵野夫人」等） (2) 自然（ジ・エイシアとうだい） (3) ユージン・ライオンズ『ソヴィエトの神話と現実』を読んで (4) 和歌と学問 (5) 古都鎌倉 (6) 教育の中心——台湾を訪ねて——（灯台） (7) 回顧と展望 (8) G・M・トレヴエリアン（研究余話） (9) ソルジェニーツィンとドストエフスキー (10) ことば！（灯台） (11) カーター米大統領の就任演説 (12) 雲海の南ア連峰と富士（F・O・C短歌） (13) フィリップ・カール・ベード先生 (14) 日本への回帰 (15) 読書のすすめ (16) 学園の歴史を生きる (17) 御製の英訳とエール密書 (18) 精神病とノイローゼのちがい (19) 富士山十首（F・O・C山中湖畔から） (20) 長谷川如是閑の和歌 (21) 冷泉家と「敷島の道」 (22) 磐城・湯本の御製歌碑 (23) 私の「アルバイト考」

第六編 アジアへの道（昭和五十年～六十年代）……………

——国際化と国民文化——

- (1) Asia is One. (2) 神話と歴史—比較文化の問題点 (3) ホイットマン・アン・アメリカン (4) 国際文化の自覚と国際主義——聖徳太子と明治の留学生 (5) 韓国の国楽 (6) ピンクのカートン (7) 日本文明の密度 (8) 国際社会と国民文化 (9) 中国の動向について (10) 中国の古代青銅器と古墳の壁画 (11) 中蒙国境の緊迫状態 (12) ゴンチャロフの言葉から (13) 外国語熱と国語問題

- (14) 共産主義社会の実態と日本のマスコミの報道 (15) 共産主義社会の物価 (16) 日中文化交流について (17) 国際文化交流について (18) 文明の相互理解と国民文化 (19) 文明の相互理解は古典の理解から (20) 「秦始皇帝陵」と「毛主席紀念堂」——中国旅行から (21) 漢字の危機 (22) 高安の城 (23) 80年代年頭の展望 (24) Oh, East is East, and West is West. (25) 日本語は独立しているが孤立しているのではない (26) ダライラマ殿下歓迎の辞ならびに短歌 (27) 蘆溝橋事件とエドガー・スノー (28) 「教科書問題」とその次にくるもの (29) 文明と樹木 (30) 中華人民共和国の歴史教科書 (31) 東洋史学の先駆者・那珂通世博士と『古事記』と吉田松陰と (32) インド古代文明における神話・歴史・叙事詩の関係 (33) 『史記』本紀の始祖卵生伝説

第七編 師友追悼詩文集

- (1) 石幡五郎教授を偲んで (2) 戦歿校友追悼の辞 (3) 浜口瑛教授弔辞 (4) 倉岡克行教授弔辞
 (5) 故松浦珪三先生の最終講義 (6) 理事・藤原繁先生哀悼 (7) 平戸にて——井上孚磨先生歌碑のことなど (8) 学長・太田耕造先生にささぐ、挽歌十二首他 (9) 学長・早川崇先生の急逝に憶う (10) 稲葉昌幸教授・挽歌献詠 (11) 浅見方舟教授追悼 (12) 木村肥佐生先生の文章（追悼記）

第八編 書評集（主として大学関係）

- (1) ユージン・ライオンズ 『ソヴェエトの神話と現実』 (2) 岡本良知（本学教授）高見沢忠雄共著『南蛮屏風』 (3) 梶村昇教授著『法然』（角川選書） (4) 聖徳太子親筆『法華義疏』 (5) 「聖徳太子及び二王子像」と『法華義疏』 (6) 古川哲史教授著『日本の求道心』 (7) 国民文化研究会『日本への回帰』第十集 (8) 「信ずることと知ること」（小林秀雄著『考えるヒント3』） (9) ウイルヘルム・ヴントとマクス・ヴント（『プリタニカ』） (10) 木村肥佐生先生著『チベットの潜行十年』を読んで (11) 新版『プリタニカ』二題 (12) 林文月教授『源氏物語』（完訳） (13) 下村連教授『エーゲ海からテムズのはとりへ』 (14) 新刊『実りある教育を』 (15) 小田村寅二郎教授著『昭和史に刻むわれらが道統』 (16) 宮脇昌三教授著『権兵衛峠』『井月真蹟集』 (17) ホイツトマン『草の葉』第三版 (18) 下島連教授著『ケルティック・フリンジへの旅』——西洋文学の「奥の細道」 (19) バーバラ・ロビンソン画集紹介 (20) 下島連教授『遍歴——歴史と文学の間』出版祝辞 (21) 各国歴史教科書と神話——名越二荒之助教授『世界に生きる日本の心——二十一世紀へのメッセージ』にふれて (22) 『古事記』の外国語訳

第九編 論説・講話抄

（青々論壇——卒業生会青々会機関誌『青々会報』学寮機関誌等その他から）

(1) いはゆる「神話の復活」について（昭和四十三年）	495
(2) 日本思想とB・H・チェンパレン、和歌、その他（昭和四十六年）	511
(3) 短歌のすすめ（昭和四十八年学寮研修会）	523
(4) ネパール・インド初印象（昭和五十一年）	547
(5) 「建学の精神」について（昭和五十五年 学寮委員研修会）	564
(6) 昭和天皇の最後のお歌（平成元年三月）	593
(7) 今上天皇御製・平成二年年頭のお歌について（存稿）	606

第十編 自撰・執筆文献目録——年代順——（昭和九年～平成二年）

あとがき	649
------	-----

■ 中屏カット……真島 愛子画

■ 写真……加藤 幸雄写

第一編
戦時中の言論・抄

(昭和十九年・二十年)



第一編 戦時中の言論・抄（昭和十九年・二十年）

（興亜専門学校教員として 担当科目「道義」）

一、抄録に際して

二、『愛国新聞』から

- (1) 第二次ブーゲンビル島沖航空戦（軍歌）
- (2) 戦時言論の任務
- (3) 危急時局の要請（上和下睦。諧於論事。則事理自通。何事不成。）
- (4) サイパンの復讐を誓って（和歌）
- (5) 敵前回頭——新内閣強力新態勢の性格
- (6) 国民道義の根拠
- (7) 文教非常態勢私見

三、『愛国評論』から

- (1) 古代の表情
- (2) 障害の打開

四、『三条実美公歌集 梨のかたえとその研究』「はしがき」

一、抄録に際して

私は昭和十八年十一月興亜専門学校教授に就任した、と思っている。「教授」というのは、講師、助教の身分を経てなるものだとすることを、当時、よく知らなかった。高等専門学校の教員はみな教授と思っていたのである。東大の国文学科を卒業したので、高等専門学校の教員資格は持っていた。興亜専門学校の教員になった！そこで早速、興亜専門学校教授の名刺を作ってしまった。早稲田の時子山教授やら明治の赤神教授やら有名大家にお会いした時、この名刺を出して自己紹介をしたものである。ちょっと変な顔をされた先生方もあったが、こちらが全然無知なので、何も感ずるところはなかった。パカにつけるクスリはない、ということだろう。当時は、戦争末期で、教授だろうが講師だろうが、そんなとに気をつかっている時代ではなかった。最近になって、当時のものを調べていたら、この名刺が出て来て、ギョツとした。

亜大発行の『私のプロフィール』の私の項に書いたが、当時、私の先輩同志は、東京憲兵隊に拘留されて釈放されたばかりの時で、その関係者の私を教員に雇ってくれるところなどにもなかったはずである。それを、畏友の小田村寅二郎氏が興専常任理事の岩田愛之助先生に紹介して下さって、それで教員にしていたいたのである。私は、半ば得意になって、というかヤケクソだったか、——というのは、私どもを弾圧した東京憲兵隊に対してであるが——教授の名刺を作ったのだろうと思う。

岩田先生は、その時、教員としての給料では少なくて食ってゆけないだろう、ということ、『愛国新聞』

に執筆させていただいたのである。

したがって、それは、両方への就職のやうな形であった。

興亜専門学校には「立志」という立派な学内誌があったが、二号が十八年十二月に出て廃刊になった（『亜細亜学園四十年史』）。というから、私には執筆の機会はなかった。

私は主として、専修科の「道義」を担当した。興専でも教へたが、科目は何であったかちよつと思ひ出せない。橋本左内の「啓発録」とか山鹿素行の「武教小学」とか幕末志士の文を集めた「道義」の教科書があつて、それを教えた、ように覚えてゐる。

『愛国新聞』というのは岩田愛之助先生の主宰する愛国社の機関誌である。松木良勝氏が主宰し編集長は高山武次郎氏であつた。

授業の方は、時間給の講師（担当「道義」）のやうなもので、後に、専修科の指導を興専本科の五条堀君と担当することになったが、その専修科の学生は入学するとすぐ南方に発つて行つた。しかもその多くが万光丸で戦死してしまつた。出発に當つて「道義」の授業時間に声をかけた池田諒君一人が生き残つて、詳細を伝えることができたのは、何かの縁であつたのであろう。池田君がこのことを覚えて書いてゐるのを、何十年か経つて見た。教員の一挙手一投足が学生にどんな影響を与えるか、おそろしいものである。

そんなわけで、専修科は南方要員としてすぐ役に立つ錬成中心の教育であつたから、落ち着いて授業を続けられるやうな時期ではなかつた。

一方の「愛国新聞」の執筆は、早稲田の政治学の大家と並べて思想評論を書かせてくださった。随分高

く買ってくださいったものである。旬刊であつたから、必死の作業であつたらう、と今にして思うのである。狂つたように書きつづけた。学生や戦地の兵士と同じように必死の気持で米英と戦つていたのである。いま読み返してみると、国策通り独伊寄りの米英批判で、恥ずかしいものが多いが、反共という点では、一貫しているのが、せめてもの幸いである。国際関係では右のようなものであるが、明治の精神、思想を堅持する点では、その頃の思潮に対しての批判で、必死の研究だつた。その所論の多くは、後に、『詩と政治』（昭和四十九年）を刊行する時に収録した。読み返してみてもさして訂正するところを感じないのは、必死になつてはじめて真実が見えたのであろう。

次にその題目をかかげる。多くは大山正久の名で書いた。憲兵隊に遠慮したのである。「思想戦線」「社説」は無記名である。

『愛国新聞』寄稿論説

昭和十八年九月十五日号より

昭和二十年三月十五日に至る

昭和十八年

ムツソリーニの言葉——今も不屈に戦つてゐる

——（九月十八日）

◎第二次ブーゲンビル島沖航空戦（十一月二十一日）

○子規の学校教育論(上)(下)（昭和十八年九月二十五日、十月）

思想戦線——英国とソ連

昭和十九年

○滝廉太郎をめぐつて(上)(下)（十月十五日号、二十五日号）

○明治の志士・浦敬一（十一月五日号）

米英両国の野蛮性——詩人・ホイットマンの告白

無疲倦闘意力の力源——詔勅・御製を拝誦して

「万邦無比の精神力」振起の秋——第八十四議
会再開に際して

思想戦線——敵国非望の依拠——アングロサク
ソンの増長慢

思想戦線——ル大統領教書の非望——リンカー
ンを抹殺

思想戦線——イーデンの奸詐——アングロサク
ソンの常習虚構

○国木田独歩小論

○日露戦争従軍将士の和歌——山桜集

思想戦線——黄昏の英国「英国の敗北は英国の
勝利であらう」ウイリアム・ジョイスの結論

思想戦線——ムツソリーニとイタリヤ

思想戦線——ヒットラーとルーズベルト・その
コトノハノミチ私見

思想戦線——ドイツ第三国家の底力

ウインストン・チャーチル論抄——英人自身の
観たる

◎戦時言論の任務（社説・無署名）

思想戦線——アングロサクソンの自由
銃後の戦備

◎敵前回頭——新内閣強力新態勢の性格

思想戦線——アメリカ・デモクラシーの鬼畜性
格

◎危急時局の要請「上和下睦。諧於論事。則事理
自通。何事不成。」

○梧陰井上毅素描

○正岡子規論

○子規と漱石上下

憲法義解論序

思想戦線——アングロサクソンの根本氣質

H・S・チェンバレーンの英国論

思想戦線——各国愛国思想家の國際的結論ノ

ルウェー詩人ビョルンソン魂喚ひ

思想戦線——米国民性検討——南北戦争美化
の偽瞞宣伝

◎国民道義の根拠

◎文教非常態勢私見

大東亜戦争と正史編集

二、『愛国新聞』から

(1) 第二次ブーゲンビル島沖航空戦（昭和十八年十月二十一日発表）

- 一、霜月八日払曉の
南海基地に飛電あり
ブーゲンビル島沖合に
敵大船団見えたりと
堂々進む大編隊
爆音天地に轟けり
- 二、日もよし大詔奉戴日
好餌得たりと必殺の
巨弾を胸に飛び立つは
ラバウル海軍航空隊
四、目ざす沖合雲もなく
眼下に入りし大船団
此の敵如何で逃すべき
総員突撃令下る
- 三、隠忍此に幾月ぞ
重なる恨晴らさむと
五、疾風と襲ふ爆撃に
敵艦轟沈爆破して
修羅の巷となる見つゝ
凱歌も高く帰途につく
- 六、つゞいて基地を立ち來しは
世界に冠たる雷撃隊
抱く魚雷は必殺の
民のいのりぞこもるなる
- 七、暮れるゝに早き南溟の
空征く決死の触接機
あゝ神佑ぞ雲切れて
敵大艦隊眼下に
- 八、戦艦四隻巡洋艦
艦艇数多したがへて

北上するぞ笑止なる

見よ神兵の体当り

尾燈ともして突撃す

十五、戦艦四隻海底の

藻屑と消えつゝ艦船の

十二、弾幕衝いて悠々と

九、沫と発つ弾幕に

進む尾燈はもののふの

凱歌宇内にとゞろきつ

指揮官機先づ突込めば

あかき心の輝きよ

十六、指揮官機以下二十機の

敵戦艦の一隻は

指揮官花と散りにけり

自爆未帰還勇士らの

轟音高く傾きぬ

十三、指揮官すまぬと勇士らが

死しても已まぬ荒魂は

十、つゞいて突込む歴戦の

あふれづ涙ぬぐいつゝ

なほみいくさを守るらむ

勇士の巨弾に敵艦は

尾燈しるべに突込めば

十七、みいつ輝くみいくさに

轟沈炎上爆碎し

敵艦何ぞたまるべき

いのち捧げしつはものゝ

陣型全く乱れたり

十四、世界にその名轟かす

み霊とゝもにもろともに

十一、つゞく第二次攻撃隊

帝國海軍必殺の

つかへまつらむ 大君に

見よ指揮官機は必殺の

雷撃三次の蹂躪に

祈念に部下をみちびくか

敵艦隊は潰えたり

曲は友人に委嘱して次号に発表の予定なるも、それ迄試に、「勇敢なる水兵」の曲による（十一月二十一日）

(2) 戦時言論の任務 (昭和十九年)

去る十日の大日本言論報国会総会に於て、天羽情報局総裁は戦時言論の重大使命を論じ、

「言論が、武力経済と共に、聖戦完遂上極めて重要な一面であることは申すまでもない。実に言論、文筆は力である。戦力である。」

と、その時の挨拶を結んだと報せられてゐる。驕虜米英の北仏侵入によつて火蓋を切られた欧州戦局の激化に対処すべき国民的緊張を要求しつゝある今日の此の危急時局下に、天羽総裁が言論・文筆に携る者の奮起を要望したのは、洵に「言論は戦力である」からに外ならない。

あらゆる細目にくりひろげられた職分に分れて従事してゐる全国民の心を一つに結ぶものはコトバである。米英の戦争目的とする野望を抉摘批判して全世界諸民族に警告を發するばかりでなく、敵国自身の反省を促すものもコトバである。われ／＼をして喜んで耐乏の生活に堪へしめる志気を奮ひたしめるのも、此の生活の打開に智能を集中せしめるのもコトバである。兎も角戦時言論は敵の思想を粉碎して戦意を銷磨せしめる任務をもつてゐるばかりでなく、全国民の総力を結集する上に潤滑油的任務をもつてゐるとでも云ふべきであらう。油なしに機械は動かぬやうに正しい軒昂たる言論なくしては戦意の昂揚は望まれないばかりでなく、億兆一心総力發揮は困難となるのであつて、戦時に於ける言論の任務は実に重大である。

この放送者は、一体野菜がどのくらゐ配給されてゐるか、全然知らないやうだ。いも類は米と差引配給といふことも知らぬらしい。第一今はいも類など薬にしたくても見当らない。となると、闇で入手する以外に方法はないはず。

私共も闇で買ふとなれば、貯金どころか、その日〳〵の生活そのものが危くなる。貯金を奨励するなら、万人が真面目に正しく出来ることを話してもらひたい。』

といふのだ。今更〳〵にそのことの穿議を行つてどうのこうのといふのではないが、さういふ放送があり、それに対してかういふ寄稿があつたといふ事實は戦時言論の方向を考へる上に於て、示唆するところ極めて多いのである。われ〳〵は指導者層に同様の生活をしてもらひたい等と思つてゐるものではない。重要任務を帯びてゐる者が雑炊食堂に並んで時間を浪費せねばならぬ、といふ様なことでは国家の総力は發揮せられるものではあるまい。それ故万人全く平等の生活を要求する如きは、真に国を思ふ者の志ではない。しかし乍ら前記一文が万般に通ずるものであつて、未経験空虚のお説教をされると却つて逆効果ばかり増す結果になるといふことは、決して忘れてはならぬ鑑戒であらう。

国民生活の実情を無視した、或ひはそれに触れぬコトバが、まことしやかに語られると、其れはいたづらに国民精神を苛立たせるのみで語る人の意図に反してしまふ事が多いのである。此の事は殊に指導的地位にあるものゝ最も慎しむべき点である。例へば此の冬の野菜の冬枯れ時期に、野菜出廻りをねらつて買出を禁じた処置は、一施策としてその是非はまた別問題としても、その時当分の配給量で工夫してやれぬことはない、といふ様なことが云はれたのであるが、それが一般にどういふ影響を及ぼしたか

といふことを考へてみなければならぬのである。『自分達も耐乏生活をやつてゐるのだ、勝利の日を目ざして一緒に苦闘しやうではないか』といふ様な、国民生活の実情と人の心持の機微に触れるまことのコトバこそ、真に国民を奮ひ立たしめるものであることを知らなければならぬ。

貧窮に人となつた政治家の言論が世を動かすことを得るのは、その体験の告白が万人を感動せしめるからである。指導的地位にあるものに、この戦時に殊に要望されるのは、勤労奉公奮闘の生活を送りつつある国民生活全般に対する同情憶念の至情である。徒らなる机上プランや体験なしの上すべりしたお説教の如きは決して戦力を増強せしめるものではない。現下急迫時局に対応して国民総力を結集せしむるには、体験無視のイデオロギー論を禊祓して、体験随順の施策と言論を昂揚する外に道はない。ま心の表現としての詩が興らねばならないのである。全国民共感共鳴のよろこびを与へるところの、忠義奉公の情意の直接的表現こそ戦力そのものである。(社説・無署名)

(3) 危急時局の要請

(昭和十九年七月サイパン失陥)
『上和下睦。諸於論事。則事理自通。何事不成。』

サイパンに戦ふ同胞をおもふと正にいよいよといふ感じである。前線銃後の区別も薄くなつて、いづ本土に空襲があるか計りがたい。そして此の危急時局の要請するところが、国家総力の發揮であるといふこと——国家総力の發揮といふのは、結局国民ひとりひとりが全力を發揮して奮闘することに他なら

ないといふことも、既に論じ尽されたことで、誰にもよくわかつてゐる。要は如何にしてその実を挙げるか、といふことである。別言すれば、この危急時局はわれ／＼のひとり／＼に如何なる精神態度を要請し、或ひは銃後の精神に何物を要求してゐるかといふことを明らかにしなければならぬ。

その一つを自分は『上下和諧』の精神であると思ふ。最近或る工場を見学した際にもそのことを強く感じたのであったが、新聞の投書欄等を見ても殊にその感が深い。六月卅日附毎日建設欄に『奇襲査察』といふ題で出てゐた二つの投書の如きがその例である。一つは工場食について。後者は「為政者各工場の食堂を具さに視察して頂きたい。それも不意打ちの査察でなければならぬ。前ぶれがあると各工場はそれだけの準備をして待つてゐるから、真の現状を捕ふことは困難だ」といふので、粗悪な工場食についての注意を喚起したのである。

筆者が体験する機会に恵まれた工場食の如きも、恐らくはかうした投書の対象となるべき性質のものであらうが、丙量の食事に極少量の副食物であつて、そこには何の慰安をも見出すことの出来ぬ底のものであつた。食事毎に蠅が何十匹となく飯の上になたかつてゐる、著などで追ひ払つても飯の中の方まで逃げこんでしまふ奴がある、といふ様な有様で、汁や菜の中から蠅の出で来ることなど珍らしくない。文字通り第一線を偲ばせるもので、工員に対しては心から頭を下げざるを得なかつた。

と同時にかういふ工場食をそのままにして置いて、酒やビールや菓子類を配給することが一体どうい

ふ意味を持つかを考へさせられたのである。やつてゐることがちぐはぐだ。粗悪不衛生の食事では心身を頹廢せしむることは云ふまでもない。此の生活の基本的形態に改善を加へることなく、部分的に菓子の配給を試みたり、流行歌をきかせてみたところで其れは何になるものでもない。

一事が万事である。此処に蟠つて勤勞意欲銷磨の一原因となつてゐる問題は、また、国民生活の各所に転在してゐやう。かうした問題を解決することによつて大増産に移ることが現戦局の要請に外ならない。問題の解決の道は簡單明瞭である。上に立つものが下の者の生活にあたゝかい配慮を行ふ、さういふ協同の精神を振起することだ。せめて工場長とか何々課長とか云はれる人が工員と同じ食事をし、同じ屋根の同じ部屋に、一週に一日でも過してみたら解決のつく問題が、生産隘路の一つとして未解決のまま放置されてゐるといふことは、われ／＼に深い示唆を与へるのである。

個人主義とは我利我利盲者といふばかりではない。自分のことばかりしか考へることの出来ぬ者だ。つまり、他人の苦しみ、他人のよろこびに感ずることの出来ない驕慢の人物である。此が机上プランの作成によつて国民の苦しみをかへりみぬボルシェヴィスト、自己の野望に眼眩んで世界諸国民共存の生活をかへりみることの出来ぬ米英首脳の主張と同性質の個体主義で、かうした個体主義を死敵として戦ふ日本は銃後に於て「和」の精神を覚醒せしめ、「上下和諧」の生命威力を發揮せねばならない。戦争はわれわれのひとり／＼の心の中に於ても日々戦はれてゐるのである。危急時局は、銃後のわれ／＼に、自らかへりみではづるなき奮闘を要請してゐるのである。

此の秋に当り、聖徳太子の十七条憲法を仰ぎまつること切なるものがある。

「一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す。……然れども上和らぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」

「七に曰く、人各任掌あり、宜しく濫れざるべし。其れ賢哲官に任ずるときは、頌音即ち起り、奸者官を有つときは禍乱則ち繁し。世に生れながら知るもの少し。剋く念うて聖と作る。事に大小無く、人を得て必ず治まる。時に急緩なく、賢に遇へば自ら寛なり。……」

(大山正久)

(4) サイパンの復仇を誓つて

父は子の夫は妻のいのちたちて斬り入りにけむかよせく仇に

天にます神目守りたまふとますらをらすゝみにすゝみ身をすてにけむ

はらからのたふとき屍はあなかなしえみしらが手にゆだねられけむ

このかたきうたでやむべきはらからの屍を仇にゆだねてやむべき

ぬばたまの夜床にひとり手をあはせ魂のおらびをなげきしぬびつ

○
神州の民のこゝろをこゝにみよと涙のごひて告ぐべかりけり

天にます神目守りたまふはらからのいまはのいくさ人知らずとも

(5) 敵 前 回 頭 (昭和一九・七・二四)

新内閣強力新態勢の性格

(昭和十九年七月)十七日海相更迭、新海相野村直邦大将は同日午後八時記者団に対し談話を行ひ、「今回海軍大臣が更迭したことについては、今日作戦の方面においても重大なる決戦態勢に入つてをり、軍政軍務の方面においても諸事急速に取り捌いて行かねばならぬ。今回従来の態勢を建て直し軍令部総長と海軍大臣とがそれぞれその任務に粉骨碎身するものであつて、この決戦段階突破に邁進せんとする帝國海軍の強い決意に出づるものである」と、率直明白にその所信を發表されたのである。

つづいて十八日午後三時サイパン全將兵の戦死が發表せられ、全国民は悲憤の涙を呑んだ。その同日、梅津大将の参謀総長親補によつて、陸軍に於ても、作戦・軍政「それぞれその任務に粉骨碎身する」態勢に復帰して、帝國陸海軍は「この決戦段階を突破する」不敗の態勢を整へたのである。

顧みれば本年二月東条大将の参謀総長親補、島田大将の軍令部総長親補により、軍令・軍政の最高責任者を同一人格とすることによつてその緊密化の企図せられた態勢は、急迫戦局に即応して、再び「建

直され」伝統的態勢にして且つ陸海軍の「強い決意」を表現する態勢にかへつた。此の意義は深く、この態勢から溢れいづる力はやがて米英驕虜の頭上に大打撃となつて加へられる、であらう。

且つこの海相談話に「この決戦段階突破に邁進せんとする帝国海軍の強い決意に出づるものである」と説明せられた通りに「強い決意」をハッキリと国民の心に刻印して無言の激励となつたのである。

同十八日東条内閣は総辞職を執行し、二十日情報局より桂冠の理由が発表せられ、サイパン全將兵の戦死の報によつて深い緊張感にあつた国民の耳朶を打つたのである。情報局発表は、内閣総辞職の理由を率直明白に表現して、深い感銘を与へた。その一語一語は皆でない程切実に響いて、寧ろ国民精神を振起せしめるものであつたことは、決戦非常の際に於ける内閣総辞職が、次なる挙国総決起の捨石となるといふ不可思議を実現したのである。東条内閣総辞職によつて益々戦意の昂揚すべきことは、驕米首脳部の認めるところでもあるが、われ／＼の確信である。此の不可思議は国体の威厳である。東条内閣総辞職によつて日本は益々強くなる。情報局発表の全文は次の如くである。

『大戦勃発以来政府は大本營と緊密一体の下戦争遂行上あらゆる努力を重ねたりしが、現下非常の決戦期に際し愈々人心を新たにし、強力に戦争完遂に邁進するの要急なるを痛感し広く人材を求めて内閣を強化せんことを期し百万手段を尽し之が表現に努めるたるも遂にその目的を達成するに至らず、茲に於て政府は愈々人心を一新し挙国戦争完遂に邁進する為には内閣の総辞職を行ふを適當なりと認め東条内閣総理大臣は閣員の辞表を取纏め十八日十一時四十分拝謁を仰せ付けられたる上之を闕下捧呈せり。

決戦下事茲に至れるは、上宸襟を悩し奉り恐懼に堪へず、又前線統後に於て必勝に邁進を続けつゝ

ある一億国民諸君に対し政府の微力を謝すると共に戦争完遂の爲機を失せず、更に強力なる内閣の出現を期待して已す。

十八日木戸内大臣は後継内閣首班に対し御下問を拝し、同日夕刻より宮中に重臣会合し二十日組閣の大事は小磯、米内両大将に降下せられ、二十二日閣員名簿の捧呈を見、決戦段階を突破して宸襟を安んじ奉るべき重任を負うて小磯、米内連立内閣は成立発足したのである。

二十二日午後全国民の緊張と深甚の期待の裡に小磯、米内連立内閣は発足した。即ち小磯、米内両大将は廿二日午後一時三十分打揃つて天皇陛下に拝謁仰付けられ閣員名簿を捧呈した後、同二時半小磯首相の親任式を執り行はせられ引続き三時半から小磯首相待立の下に各閣僚の親任式を御挙行、こゝに磯米内閣は成立したのである。

東条首相が現役陸軍大将にして内閣総理大臣兼陸軍大臣たりしに對して、新内閣は小磯大将内閣総理大臣、杉山元帥陸軍大臣、藤原銀次郎氏軍需大臣となり、一人格に責任と権限とを集中することによつて閣内の統一を求めんとするかに見えた態勢はこゝに建直され、各自分掌を明らかにして各々その任務に粉骨碎身する態勢となつたことは、十七日の海相更迭から一貫する政治態勢と見らるゝのであつて、此に所謂統帥と國務とは本来の態勢に復帰し、統帥と國務との調整を、協力一致の關係に置くことゝなつたのである。此の意義は深い。

且つ又各閣僚に皆その道の練達の士があたることになつたことも国民の与望を荷ふに足るものがあり、内閣の態勢そのものが全国民の戦時態勢を陣頭指揮するに至つて、いよく真の意味での挙国一致は実現の緒にいたのである。外務大臣の留任及び外務大臣の大東亜大臣の兼任も、現戦局の要請

に応ずるものといふべく、正に新内閣の態勢は、不動の伝統に深く根ざして不可測の将来に対処せんとする強靱な性格を示して、謙抑臣道を垂示した。これこそ国民の願ひであつた。

明治天皇御製拝誦

民

ほどく／＼にこゝろをつくす国民のちからそやがてわが力なる

忠

まめやかにつかふる臣のあればこそわがまつりごとみだれざりけれ

をりにふれて

さだめたる国のおきてはいにしへの聖の君のみこゑなりけり

日本海海戦に於ける東郷司令長官の命令一下敢行せられた連合艦隊の敵前弾雨下百八十度回頭は、敵艦隊殲滅の基をなした。今次内閣の更迭による新態勢の確立をしてさながら政治回頭たらしめ、大勝利への基たらしめうるか否かは大臣諸公をはじめ全国民の今後の奮闘にかゝつてゐるとは云へ、新内閣に無限の信頼と希望とをかけるは、草莽の民のよろこびである。東条内閣の桂冠理由の公表にある如く、「人心を新たにし」「広く人材を求め」として果さず遂に桂冠した経緯の殷鑑は、新内閣に人心を一新するに足る人材の活用と上下和諧「大和」の基調となるべき言論の洞開とを要望するのである。政治とは畢竟人である、といふのが陳腐の言であれば、政治とは、人とコトバとであるから

である。

(七月二十四日大山正久)

(6) 国民道義の根拠 (昭和十九年)

過日予算総会の席上作田高太郎議員の質問に対して小磯首相は、

「今日道義が面白からぬことがあるのは憂慮してゐる」と答弁し、更にその原因何処にありやとの質問に対して、「道義の低下が政府施策の到らざる点に基因する所もあると考へる、この点につき今後大に注意しなければならぬ」と答へて、国民道義心の低下が政治施策の不充分に一因することを率直に認められたのである。

元来国民道徳心の消長と政治の興衰とは相昇降するのであつて、銃後道義の衰頽の徴候は戦時下政治の全般に涉つての反省を必要とするものと見られる。議會に於て取上げられ首相の憂慮するところも、決して経済施策の巧拙に重要な原因を有する關取引の問題にのみ限るものではないであらう。綱紀紊乱の如きは云ふまでもないとしても、お役人の役得、縄張り争ひ、立身保身出世のための事なかれ主義等々の如き刑法圏外の精神的弛緩状態の如き、或ひは行政末端窓口の不親切、或ひは民間に於ける錢湯の盗難、配給物資の不正獲得、軍需工場に於ける過剰人員の獲得、等々に到る道徳的不正行為全般に涉つての反省が為されねばならない。勿論「水清ければ魚住まず」といふこともあり、国民すべてが聖人君子となることを求める如きは、却つて人生の総合的複雑開展を灰色の道徳律によつて阻害するに至る危険があるから、国民道義の昂揚は、べからず主義で達成出来るものではなく、それはなによりも「政治」

の問題となるのである。公定何錢の野菜を何十錢で買つたと云ふ様なことよりも全体的に戦意の昂揚と国力の充実に向つて国民生活の活動を發揮せしめる様な「政治」こそが、国民道義の振起を招来しうるものである。それはまた戦闘意志の奔騰と緊張感の振起とを必要とするであらうし、またそのためには、指導者が戦局の真相をおさるゝところなく一般国民に訴へることゝ、国民の憂国の衷情に事情の許す限り自由な表現を与へうる如き諸施策を必要とするであらうが、今はその問題は措いて、直ちに国民道徳の根柢について考へてみたい。

元來国民道徳の興衰が指導的階層の道義心の興衰に支配されることは論をまたぬところであつて、利己主義一点張りの幹部の經營する工場は、例へそれが軍需工場であつても、工員の怠惰、重要物資流用等の不正行為の濫発をのがれたいのである。上に立つものゝ不正弛緩行為は些細なことであつても下部のものに甚大な精神的影響を与へるのが常であり、それがまた人情の常であることを否定することが出来ない。「上の行ふところ下之を習ふ」であつて、銃後戦意の昂揚と云ひ道義の振起と云ひ、指導的階層の責任は彼らの想像以上に重大と云はねばなるまい。故に国民道義の問題は遂に指導的地位にあるものゝ忠誠心如何に帰着せしめらるゝに至るのである。

道義と云ふのみでは足りない。道義の根柢となす忠義感情の振起こそが不撓不敗の戦力の基をなすのである。政治の衝に当る者にこの忠義感情が脈々として鼓動してゐるならば、さうしてその至誠が自から同胞親和の言動となつてあらはれるならば、全国民の協力一致の感情湧出し、一般国民は国民生活の困苦となるべき如何なる強力非常施策に対しても身を挺することを躊躇するものではないのである。臣道と云はずして敢て忠義感情と云つたのは、御宸念如何あらせたまふかと拝察し奉る赤子の衷情こそが、

天日を仰ぐ如くに大御心を仰ぎ奉るその感激こそ道義の依拠となるのである。この赤子の衷情に一億手をたづさへてよみがへるならば苦戦恐るゝに足らずであるから、上に立つものに承詔必謹、君言臣承、至誠謙抑の熱烈な忠義感情が脈うつてゐるならば、自からにして下を化し、大みついは八紘に光被するに疑念あるべくもない。

明治維新の大業を翼賛した志士の主導精神は実にこの忠義感情——直接には孝明天皇の大御心を拝受し奉り御宸念を貫かせたまへと祈る赤子奉仕の至情であつたことが、今日殊にかへりみしめられるのである。吉田松陰が安政某年元旦

九重のなやむ御心おもほへば手にとる屠蘇も呑み得ざるなり

とよみ、月照が辞世に、

大君のためには何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも

また、頼三樹三郎の辞世に、

まかる身は君の世思ふ真心の深からざりししなりけり

と痛切悲痛の慟哭をとどめ、平野次郎が、

大内の山のみかまき樵りてだに仕へまほしや大君の辺に

宮部鼎蔵が、

いざごども馬に鞍置け九重のみはしの桜ちらぬそのまに

と詠み、副島蒼海が、嘉永六年、

内姦未剪除。外寇矧逼迫。夢我謁帝傍。泣奏大平策。

とよみし如きがその一例である。

此らの詩歌に表現せられた、御宸念貫徹させたまへと祈り奉り、大御心如何あらせらるゝと偲び奉る衷情こそ天皇親政復古維新の主導力となり、万策はそこに根拠をもつて展開したことを回顧するとき、殊に、今日の国難を打開すべき戦意の根拠もまたこゝにあるべきをおもふものである。

かくの如く考察して我らはこゝに謹みて昭和二十年歌御会始に下し賜はりし御製御歌を拜誦し奉るのである。

御製 社頭寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

皇后宮御製

御民らのこゝろさながら神垣のさむさにかちて梅もさくらむ

神靈と交感させたまふ神秘内容を托させたまふ御製の大御調の緊張——殊に、「風さむきしもよの月に世を祈る」の切迫せる大御調を拝しまつり、御歌の「御民らのこゝろさながら」「神垣のさむさにかちて梅もさくらむ」と国民の奮闘生活の上に御心を垂れさせたまふ皇后陛下の御仁慈を拝しまつる時、感激と独立不撓の戦意を恵ましめらるゝのである。

(夜久正雄)

(7) 文教非常態勢私見

(昭和二十年)

最近学校廃止論が処々に見え読売報知の社説にも主張されてゐた。その論旨とするところは、学徒の勤労効率を最高度に發揮させなければならぬといふ国家非常の要請に対して、現在の文教施策の余りにも緩慢にして皇国危急存亡の事態に応じ兼ねる点を指摘し、第一、中等学校以上の全面的廃止を断行し、それを補ふ意味に於て第二、大規模の英才教育、第三、勤労配置の適正化、第四、勤労学徒に対し教育

的意味を含めたる労務管理の徹底——以上その論旨の概要であつて、此の如きが学校廃止論の代表的意見であらう。

学校を廃止すべきか否かを決定する基準となるのは云ふまでもなく国家の要請である。

現在、国家非常事態の青少年学徒の上に課してゐる任務は、此を要約すれば、軍需生産に於ける勤労分野、将来国軍の下級将校として立つに要する身心の修練、将来の国家の中堅指導層を結成すべき青少年としての文化科学上自然科学上の技術の修得、此の三点に要約されるであらう。当面焦眉の急務は、仮に一步を譲つて、軍需生産面に於ける勤労にありとして、果して、学校廃止がその目的たる勤労効率の向上に寄与しうるであらうか？

現在、動員学徒の勤労能率に就いて各種の論議があるに拘らず、全体としてその熱誠による勤労効力が非常の成果を収めて生産部門に於ける学徒の位置は動かすべからざるものゝあることに異論をとらへる人はあるまい。学校廃止によつて、此の全国何十何百万かの上級学徒から、学徒たるの矜持と、使命感と、責任感とを奪つたならば、果して現在の勤労能率を維持しうるであらうか。学業を擲つて国家の急に挺身してゐるのだといふ純粋な感じこそ学徒の勤労動力である。若し学校を廃止すれば、この動力が失はれることによつて、少くとも現在の能率を維持することは困難になること、正に火を瞭るより明らかであると云ふべきであらう。

更に学校廃止によつて青少年の教育が放棄されることは国民生活全般に重大な影響を与へざるを得ぬ。私利私欲物質的欲望から比較的遠ざかつてゐる青少年学徒の自己の身分に対する自覚と純粋な熱情

とを放棄したならば、その国民精神の上に及ぼす影響は実に測り難いものがあると云はざるを得ぬのであつて、それは今日の老壯者が若い学徒の捨身の熱情によつてどれ程救へられるところが多いかを顧みてみれば自ら明らかになるであらう。

故に学校廃止論は、実地に就て考へれば到底行はれ難い極論であつて、寧ろそれは文教当局に対する叱咤鞭撻の語としての意義を有するのであらう。

実際今日まで文部当局の学徒勤労働員に対して払つて来た施策は、殆んど無為に非ずやとも見られる様な為体であつて、実に寒心にたへない。「行学一体」とか「勤労即教育」とかいふ言葉を繰返すのみでは全く何の役にも立たない。行学をして一体たらしめ、勤労をして教育たらしめるには、文教当局と教育者とに教育の熱意が必要である。此の熱意がなければ「如何なる嘉言」もただ表面の飾りに過ぎぬことになるのであつて、文教当局に教育の熱意を見るべき施策に乏しいことが、結局学校廃止論の如きを生み出したのであらう。

此の四、五月を期にして学徒動員懸案の配置転換が行われるのであらうが、動員学徒の配置は教育上重大な問題であつて、今日までの状況には遺憾の点が非常に多かつたことを指摘しなければならぬ。この問題を中心にして各新聞の投書欄に幾度学徒の表情が訴へられたことであらう。而も例へば自然科学研究者の薄遇についての投書が解決の喜びを見たとの再投書のある如きに比して、勤労働員学徒の仕事なき苦悶の訴へは、幾度かくり返されながら解決を見たとの報にも接することが出来なかつたのであ

る。元來「資本と経営との分離」されつつある今日に於ても、論者の構想に反して、悪質企業経営は跡を絶たぬのであつて、最近の新聞投書欄にも、女子挺身隊が某工場長の私宅の女中に動員されたり、掃除婦として使用されてゐるといふ悲鳴が訴へられてゐる。此の如きは、恐らく特殊の事例といふよりも、企業経営者の勤労働員に対する誠意の鈍磨を象徴する事件とみるべきであらう。故に、動員学徒の不正配置、殊に過剰人員獲得の為に学徒を無為に遊ばせて置く如きは、起り易い事であつて、此に対して文部省当局は、青少年教育の見地から、学校当局と連絡協力し、断乎たる処置に出づべきであつた。

或ひは学徒の修得した、また修得しつゝある学業技術に対して何等の顧慮もなき動員配置状況は、学徒の熱意を著しく消耗せしめるのであるから、学徒の胸裡に奔騰する愛国の熱誠に活舞台を与へるべき努力、且つ施策が要望されるのである。此の点に於ても反省すべき点は必ずや少なからぬものがあらう。理工系学徒を一般勤労に動員して置いて、他方に於て小規模の且つ識者専門家からもその効果を疑はれてゐる英才教育とか行ふ如き、真意奈辺にありやと疑はざるを得ぬ。

以上、勤勞学徒の配置に就いて敢て多言したのは、工場に於ける学徒の過剰人員が人心を損ふこと驚くべきものがある故である。且つそれは一般勤労働員とは異つて、文部当局と学校当局との熱意ある協力によれば比較的簡単に解決される筈の問題であるからである。且つ亦、文教の責任者たる文部当局が此の如き見地から企業経営者に反省を求めることが、一般的に必ずや人心作興の一助となるに違ひないからである。一片の通達を發するを以て能事終れりとなす如きは戦時文教当局の潔しとするところではあるまい。

学徒動員配置の適正化は、学徒総力の發揮の上から最重要問題であるが、此とても尚、文教当局とし

ては消極的受身の最低限度の仕事に他ならぬ。更に勤労働員学徒の教育に対して積極的施策が断行されねばならぬのである。機動性と速度とに乏しいといはれる現代施策に対して、文教当局にのみそれを求めることは酷であるかも知れないが、青少年学徒の報国の熱情を真に戦力たらしめる上に違算ならむことを望むのは、止み難い要望である。此の躍々たる報国の熱情を、戦力として育成することに失敗すれば、それは逆作用を生ずる危険があるのみではない、此の如きことになれば其は文教当局者の忠義感情の欠除なりとして責めらるべきことになる重大事である。

彼此勘考して敢て二、三の私見を提示して識者の批判叱正を仰ぐたよりとし、その上で施策の資に供したいと思ふ。

一、配置転換、配置の適正化、適材適所主義を実行するために動員配置事務を一元化し弾力化すべく、学徒動員本部の拡大強化。組織の如何はともあれ本部長に青少年学徒の熱誠に応ふるに足る人格高邁忠誠心熱烈の大人物を仰ぎたきこと

二、学徒動員の常態化に鑑み、動員学徒教育内容の転換をはかり、農民にもあれ、理工化にもあれ勤労作業に相応する生産技術教育の振興。一般中学校は、名称の如きは兎もあれ、大略、農学校、工業学校等の実業学校化し、高等学校文科の如きにも技術教育を普及し、全面的に一国自然科学技術知識を向上させること

三、配置転換に当つては学校側の経験を充分採り入れること。殊に学校工場の飛躍的促進

四、教育方法を座学から身心の総合的訓練に嚮はせるために寄宿制度を活用する一面、ラジオ、図書、音楽、其の他を利用し、一般教養の向上に資し知力の低下を補ふこと

五、動員学徒の自発的熱意を汲み上げ学徒相互の精神的連絡機関を設け相策励研鑽せしむること
施策の当否は暫らく措く。要は文教当局が真に「朕ガ百僚有司ハ励精職務ヲ奉行シ」「億兆一心国家ノ
総力ヲ拏ゲテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ」との聖訓をかしこみ奉り、全国動員
学徒の燃ゆる熱誠に相応すべき教育の熱意を發揮して、教育者を督励し文教非常の態勢を醸成確立する
ことだ。然らざれば、学校廃止論は与論化して遂に青少年教育は非常の混乱に陥り、ひいては国民道徳
心の混乱をも免れざるを得ぬに至る危険なしとせぬ。

(大山正久)

三、『愛国評論』から

(昭和二十年になると、『愛国新聞』は言論統制やら用紙の関係やらあまり出なくなつたらしい。
代つて『愛国学生』に「タケミカツチの神について」その他を書いた。また『愛国評論』に「古代
の表情」「障害の打開」を書いた。)

(1) 古代の表情 (昭和十九年)

古代の表情
晩秋の一日、機会を得て奈良東大寺三月堂の天平時代諸像を拝観した。有名な日光・月光両菩薩像の
悠容迫らざる輪廓、四天王諸像の深刻悲痛な表情——すべて天平時代の代表的傑作としてその世界的価
値については説き尽されたところであらう。自分は美術について何等専門的研究を積んだ者ではないが、

此等天平の彫刻が、その伝統に回生した鎌倉時代運慶達の彫刻と共に、写真等で見るロダン等に決して劣るものでない世界第一等の彫刻であることを感じた。殊に、四天王像の深刻悲痛な表情を、丁度折悪しく雨の降り出した日のうすくらがりの中で仰いでみると、かうした諸像を作つた当代の名も知らぬ彫刻家達の心持が惻々と迫つて來る様に覺えた。天平時代と云へば、

青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふがごとくいまさかりなり

と歌はれた奈良時代、万葉集の大伴家持達の生きてゐた時代であらう。その末期には道鏡などの出た時代であるから、時代の表面に浮動した仏教といふか僧侶の類廢はひどいものであつたらう。政治生活の表面にはかうした僧侶や大宮人が「咲く花の匂ふがごとくいまさかりなり」といふ様な絢爛たる生活を送つてゐた、その同時代の底には、此等諸像に表現された名もない仏師達に代表される民衆の深刻悲痛な精神が日本の運命を支持して生きてゐたのだ。此の彫刻に表現された、深刻な、悲痛な心持は、防人の歌や東歌に表現された東國の名もない民の、勤勞と愛恋と出陣との交錯する生の緊張に通ふ。何時の時代にも名もない民草の生活は、悲劇的情調を宿す奮闘の生活である。——かう思つて自分は目頭の熱くなるのを覺えた、しかし、此の時代の底に沈んで人知れず勤勞の生に苦闘奮闘する民衆の悲痛な情緒の表現は、防人の歌や東歌として、或いはいま目の前にしてゐる此の天平芸術として永遠にとゞめられたのである。万葉集の有名専門的歌人の歌は忘れられるときがあらう。しかし、防人の歌は、永遠に日本人の胸に生きつゞけるに違ひない。天平時代の表面に浮かびあがり、浮きたゞようた絢爛たる僧侶や大宮人の生活はあとかたもなく消え失せたであらうが、名も知らぬ仏師達の深刻悲痛な民衆の悲劇的人

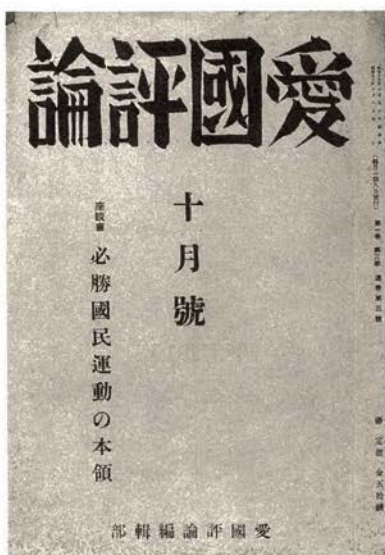
生観は永遠の芸術としていま曠古の大戦争に従事奉公するわれらの胸に朽ちざる力を与ふるのである。

同日奈良博物館で見た埴輪「武装男子像」の表情も忘れ難い。その実に明るい、やゝ悲哀を帯びた微笑は、抒情詩的で、同時に男性的な典型的日本人の心情を表現する表情だ。「おい」と声をかけたい様な生々した表情をもつてゐる。その胸の中からあの防人の歌が生れたのであらう。埴輪といふと考古学的研究の対象としてのみ考へられるらしいが、かうした埴輪の表情は、われ／＼の古代祖先の芸術的天稟を示すのではあるまいか。埴輪の壺や家の模型などにしても厭味のない簡明な素朴さはどうだ、自分はその間に、古代日本人の生きたあたゝかい血の脈拍を感じる。その形式、その素材、その技術は原始的であるが、そこにこもつてゐる精神は高貴である。好奇心や好古癖の対象として済ますことの出来ない、崇高な芸術的表現であることを感じた。推古朝の仏像に就いて故黒上正一郎先生が「その形式は三韓を介して支那南北朝の様式をつたへたものであるけれども、法隆寺本尊・薬師仏・夢殿観世音・中宮寺弥勒像の如きに於けるその光背の火焰の揺らぐが如き生きたる力、またその尊容の朗かにしてかなしき緊張をたゞふる微笑との対象は永く太子を中心とする時代の精神生活を象徴するのである」（『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』）と云はれた言葉は、古事記・万葉と埴輪・天平芸術との関連についても想ひ起される。

防人の歌や東歌の中に日本国民最高の詩歌がある様に、埴輪の中にも最高の芸術がある。かうした埴輪の男子像や家や壺は、シキシマノミチのシヲリと伝統とを皇室に仰ぎまつることの出来る無上の幸慶に生きる日本国民の、地下水の様に潜流する芸術的天稟を啓示するのである。其らの美術史に於ける位置は和歌史上に於ける「読人知らず」の絶唱に比せられるであらう。事実、和歌史を顧みてみれば、無

数の読人知らずの絶唱がある。それは屢々といふよりつねにと云つてよい位、当代専門歌人の歌を凌ぐのである。現代に於ても何かあれば斎藤茂吉氏とか佐々木信綱氏とか専門歌人の間違ひの多い技巧的な歌が新聞紙上にあらはれるが、名もたゞぬ同胞の間にうたはれて世に喧伝されぬ歌の中に、かうした専門歌人の歌を遙かに凌ぐ悲劇的奮闘生活の素直な表現がある。——と云ふことは、この決戦危急の戦局に於て、真に銃後の力となつてゐる精神が、決して時代の表面に浮び出て活動してゐる人々へののみ限られてゐるものでないことを示すのである。と云ふよりも寧ろ、名も立たぬ民衆の悲劇的奮闘生活こそ国運を支持する真の力であることを告知するのである。高い地位と安楽な境遇に満足してゐるところからは真の詩歌芸術は生れず、真の詩歌は悲痛な奮闘生活の所産であるからである。

天平芸術を觀、埴輪を見、推古朝佛像を拝觀し、奈良での一日に想ひはさまぐにとんだ。兎も角か



うした名も知られぬ作者の悲痛な調子をもつ詩歌や深刻な表情の彫刻や此らの芸術を生み出した国民的奮闘の生活が、現在も尚国力をなしてゐることを忘れてはならない。世の表面に立たぬところにも真面目な、悲痛な、奉公の生活のあることを忘れぬならば、少ばかり地位が高いからと云つて、或ひは権力的地位にあるからと云つて、威張り散らす様なことがどんなに馬鹿馬鹿しいことかわかる。

官製朗読演説のお説教の聴衆が、防人の歌の作者であつたり、天平芸術の彫刻家達であつたり、埴輪の作者達であつたとしたら、その光景は思ふだに冷汗ものだ。威張つて誇張する余裕もなくなつた時、眞の力が發揮されるものと思ふが、いまこそ官民、謙仰臣道規律に覺めて一体たるべき秋であらう。

(2) 障害の打開（昭和二十年）

元旦の電車の中でもう喧嘩をしてゐる人間がある。足を蹴つた！ とか、蹴つたとは何だ、かういふ時代に人の足を蹴る様な者があるか、こんな混んだ電車の中だ、足の当る位当り前だ、俺がかういふ時代に人の足を蹴る様な人間だといふのか、蹴つたとは何だ！ と、夢中で云ひ合つてゐる。しかしそんなことはどうだつていゝことだ。もつと大きな、個人の生死をも超越する皇国の興廢が、昭和二十年頭に立つ一億臣民の双肩に繋つてゐる筈だ。

僕の隣りに坐つてゐるのは、中年の婦人と二人の子供たちである。その婦人の鉤裂きのモンベと乱れた髪、着物でも入つてゐるのか風呂敷包みが二つ、窓外に眼をやつてゐる静かな放心は、一見して空襲罹災者だとわかる。大晦日か、元日の暁か？ しかし、見よ！ 母の肩にもたれかゝつてゐた少女が顔をあげて、喧嘩の方を見た時の眼の光りを。静かな、そしてたしかな眼の光りには、疲れもなく悲しみもなく、はつきりと敵を見つめて喧嘩などどうでもいゝと云つた様なその不敵な眼の中に、自分は日本の洋々たる将来を感じた。

此の戦争が勝利か全滅か、それ以外に道がない戦争だといふ感じがあれば元日の電車の中で喧嘩をす

る気になる筈がない。日常生活に困難や障害が加はれば兎角喧嘩早く殺気立つて来るのも已むを得まいが、此処がお互いの心の持ち様だ。相共に苦闘してゐるのだ、とおもへば、寧ろ戦友としての親和感が恵まれるではないか。人の足を蹴ることもなからうし、知らずに蹴つとばしたからと云つてさう怒ることもあるまい。

此は元旦の電車の中の喧嘩で誰しも馬鹿々々しいと思ふが、大同小異の問題が余りに多いではないか。工場の管理にしても、お役所の窓口にしても、当事者の心持ひとつで解決のつく問題が少くない。さうしたわれわれの心持の持ち様で解決しうる問題を、組織の責や、他人の責や、人員の不足や、等々責任の転荷を行ふことに汲々たることの如何に多いことか。自己の責任を痛感するといふことは、決して楽なことではない。しかしわれわれがお互ひに此の危急の戦局に直接する各自の職責に於て悔いなくまた慚なく戦ふことなくして戦勝を期する如きは楽天安逸国を破るものだ。戦局は楽観すべくもないが、かうした心の持ち様によつて解決すべき問題を確認して、その解決に努めることによつて生ずる日本の力は殆んど無限とも云へるのではなからうか。而もこの精神の覚醒は、一文の予算をも要せず、何十枚もの書類も要せず、組織の変更をも要しない。また日時をも要しない。今日にでも出来ることだ。此の出来ることを措いて、銃後に於て濫りに特攻神風精神を口にする如きは心あるものゝなしうるところではない。もつと手近かな出来ることから片付けなければならぬ苦だ。事実と人情とに即して各自勉勵奉公するところに、個人的能力を超える団体的威力が前線將兵の決死の勇戦に呼応しうることになるのである。

此をつらめて言へば道義の昂揚である。さういふとお説教めいてつまらぬことになつてしまふが、致

方ない。戦時下に自己一身の立身利害のみに汲々として銃後を紊る如き者は、地獄に墮ちる、といふ様なことにでもなつてゐれば、道義の振作も効果的だが、道徳の威厳は功利打算を超越するので、此に人心の秘奥に参じ、魂の底からの結合と覚醒とを成就する詩と宗教的情操とが昂揚されなければならない。其は同時に現日本の前線と銃後の事実を直視することだ。また直視せしめることだ。

畏くも今次議會に賜はりし勅語に「朕力戦線ノ陸海將兵ハ決死敢闘隨処ニ勁敵ヲ擊破シ」と宣らせ給ひ、「決死」と宣らせ給ひ、「勁敵ヲ」と宣らせ給ひ、「朕力銃後ノ一億臣民ハ勇躍奮勵戦力ヲ生産ニ増強シ連年万難ヲ克服シテ以テ今日ニ及ヘリ」と畏くも御嘉賞の大御言葉を賜る。誰か感激懺悔せずをられよう。更に「今や戦局愈々危急」と宣らせ給ひ、直ちにつゞけさせ給ひて「真ニ億兆一心全力ヲ傾倒シテ敵ヲ擊摧スヘキノ秋ナリ」と宣らせ給ふ「真ニ」と宣らせ給ひ「全力ヲ傾倒シテ」と宣らせ給ひ、「敵國ノ非望ヲ」と宣らせ給はずして「敵ヲ」と宣らせ給ふ大御言葉に心して勅語を拝し奉る時、たゞ畏くこく心おのゝくのみである。今更何を説く要もない。有難き畏き大御心を安んじ奉るべく大御言葉のままにまに仕へまつらむと誓ひまつるのみである。

四、『三条実美公歌集』 梨のかたえとその研究 「はしがき」 (昭和十九年)

昭和十九年五月二十日、愛国新聞社出版部発行『三条実美公歌集・梨のかたえとその研究』刊行。初版二千部とある。当時としては相当な部数である。この印税で私は亡父の墓石を建てることできた。印税がこれほど大きかったのはこれがはじめて最後になった。

はしがき

拙い労作になる此の一篇を、今生に会ふを得ざりし恩師黒上正一郎先生、先生につらなる梅木紹男・新井兼吉・河野稔の三先輩、御懇情をいたゞきし先生の御母堂様、荒瀬達也先輩、若くしてたゞかひたふれしシキシマノミチ同信の友、藤原義夫・野中孝夫・百武尚美・江頭俊一・池田正一の子兄、近くニューギニア戦線に於て壮烈なる戦死を遂げし同志手塚顯一兄、シキシマノミチに連る物故師友先輩諸氏の靈前におくる。

刊行に当り、序文をたまはりし三井甲之先生、刊行を快諾されし愛国新聞社松木良勝氏、刊行について終始配慮をいただきし同社出版部山口晃二氏、口絵作成の便をたまはりし三条公爵家、終始激励を寄せられし同信諸友に対し、衷心謝意を表すと共に、今後の勉勵を以てこたへむとするものなり。

戦局重大の秋、敢て本書の刊行を志したる著者の微衷を、重ねて引用する左記三井甲之先生の所論に汲まれたし。

「明治維新に當つては堂上縉紳に三条実美公があり、民間志士に吉田松陰先生があり、ともにシキシマノミチをふみわけてこゝに天朝の御学風が古朝廷の雄略偉慶として復古実現せむとしつゝも、明治大正の御代に於て立身出世した維新の功臣は



三条実美公

伊藤博文公山縣有朋公以下、シキシマノミチと疎隔せしめられた人々のみであった。

明治天皇御製

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道
おのが身を修むる道は学ばなむしづがなりはひ暇なくとも

と聖諭せさせ給ひしところを謹承しまつるものを重臣高官の間に見出し得なかつたのであるが、順逆の諸縁に一弛一張する間に国力は漸次充実せしめられつつ、今昭和の大御代を迎へて史上前古未曾有の重大時局に際して「我国体の外国と異なる所以の大義を明にし、闔国の人は闔国の為に死し、臣は君の為に死し、子は父の為に死するの志確乎たらば、何ぞ諸蛮を畏れんや」といふ松陰先生の遺言をしのび、宣戦詔書に宣ふところの「陸海將兵」「百僚有司」「衆庶」もろともに「億兆一心国家ノ総力ヲ拏ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ違算ナカラムコトヲ期セヨ」と宣はせ給ふ勅命を畏みまつり、「皇祖祖宗ノ神靈上ニ在リ」の聖訓に皇国三千年の伝統の威力を眼前に喚起して之を現実賦活するために全国民一丸となるべき事実法則と体験原理とを求めむとする時、三條実美公が、明治天皇の輔翼の重臣であつた史実を回顧し、明治二十四年五十五歳の壯齡を以て他界せられしことを深思せむとするのである。菅原道真公の忠誠は朝廷の慰靈祭祀から「天神」の民間信仰に展開して明治時代にまで伝へられたのである。楠公の七生報国の精神は吉田松陰先生によつて中継伝承せられつゝあるが、これら靈魂の系統に情意の血

脈を通ずるために今日此の急時局下に三條公の和歌を研究し読誦することが、戦力増強補給とともに急速整備せらるべき要務である。」(三井甲之氏「三條實美と敷島の道」より)

昭和十九年四月 著者識

第二編
敗戦の殷鑑と復興の摸索

(昭和二十年～二十四年)



第二編

敗戦の殷鑑と復興の摸索（昭和二十年～二十四年）

（日本経済専門学校教員として——担当科目「道義」「国語」）

『民生新聞』（昭和二十一年～二十二年）から

- (1) ある復員兵士の話
- (2) 小林秀雄『無常といふこと』と亀井勝一郎『聖徳太子』
- (3) 岩波文庫復刻『草の葉』と『憲法義解』
- (4) 鈴木貫太郎述『終戦の表情』
- (5) エドガー・スノー『中国の赤い星』
- (6) ホイットマンの言葉（訳詩五篇）
- (7) ホイットマンの言葉『民主主義展望』抄訳

『興風』（昭和二十二年～二十四年）から

- (8) 航海文学と西部文学（木口公十氏に訊く）
- (9) 『シーホーク』と『南部の人』
- (10) 鹿菅渡の歌三首
- (11) 歌壇展望（『創作』五月号評）
- (12) 画展逍遙
- (13) 宗良親王『李花集』研究ノート
- (14) ホイットマン『パイニア』おゝパイオニア（訳詩）
- (15) ベルジャエフについて
- (16) 共産主義私見
- (17) こんなことがあった（日本経済専門学校の末ごろ）

(1) 或る復員兵士の話（昭和二十一年）

おう、かへつて来たよ。会へるとは思はなかつたなあ。今度はだめかと思つた。うーん病氣をしてネ、これでまだいゝ方さ。一時はすっかり瘦せちまつて、骨ばっかりさ。それでも後送、後送とやつて来たんだから、大したものさ。コレラ、赤痢、チフス、栄養失調、マラリヤ、——兎も角、去年半年の間、胃腸病と熱病は先づ大抵卒業さ。よく生きてゐたもんだよ。うん、中国兵がよくやつてくれてネー、助つたわけさ。尤も、俺も自信はあつたがネ。なあと、意気と純情さへ在れば外人にだつて友人は出来るものさ。上海の病院にゐた晩、終戦で抑留されたわけだが、すっかり可愛がられてよ、それで少しはもち直したんだ。上海にたどりついた時は、もう泥んこでガイコツときてるんだから、みぢめなものだつたがネ。

あんまりよくしてくれるんで——尤もネその中国兵がマラリヤに罹つた時、俺がお手のものだらう、薬をやつたら、テキメンによくなつてネ、それに恩義を感じた、といふこともあるんだがネ——中国人は義理がたいからネ——まあ俺が、どうしてそんなに良くしてくれるのか？つて訊いたんだ。さうしたらその兵隊がネ——立派な男だつたがネ——何か北支の戦闘かなんかで一時俘虜になつたことがあるんださうだ、その時何とかいふ日本の新兵が、病氣の時介抱してやつたんで、その恩を一生忘れない、お前も東京の者だらう、その新兵あ東京の男だつた、だからだと、かういふんだ。

その兵隊の名前を云つて探してくれつて云ふんだ、どうしてゐるかネー。俺にとつてあ生命の恩人に

なるがネ。すごいものだネ——それに、その男の云ふにはネ、自分は十四の歳から兵隊になって各地を転戦してきて日本の兵隊が支那でどんなことをやって来たかよく知つてゐる、と云ふんだ、しかし、さういふ暴行や凌虐に、いま自分達が復讐すれば、又何時か時が来れば、日本が又復讐するといふことが何時かはあるだらう、それでは復讐が復讐を生んで、永久の平和と人道との世界は来ない、中国には人道がある——かういふのだ。

その時、俺ははつきり負けたと思つたネ。尤も、俺達だつて支那の奥地で、いゝこともやってやつたがネ、立派な軍人もゐたけれど、どうも頭の上にとんでもない脳天ホイラーがゐるよ、妾の三人持つてゐるつていふ閣下などがゐる目茶目茶にしてしまったんだがネ。実際、奥地で中国人とつき合つたといふことは、大きな事だつたネ……これで、俺も二十五から三十二迄、一兵卒で戦つて来たが、その間が無駄とは思はんネ。男と男のつき合ひもあつたからネ。平和な日本をつくり出すのも、かういふ人間じゃないかな。日本人のいちばんわるいところもよいところも見えて来たからネ。

えツ、内地にかへつてどうだつてノ？食へる野草があるだけでもまだいゝさ。もつと暖い気持ちで迎へられると思つたがネ、まあ、そんなことはどうでもいゝさ。七年も支那にゐて家へかへる道も忘れたよ。しかし俺なんか家があるから云ふことはないさ。広島にかへる奴が、別れる時汽車の窓にしがみついて泣いてゐるがネ。それに終戦からでも病院で一日に十人は死んだ、死んだ奴あ可愛想だよ。まあ死んだつもりで、人の為になることをやるのさ。なあに、陛下のお言葉だけは確かだから、その通りすれあいゝんだらう。他の奴の言葉など全部当てにならんからネ。

家をさがして嫁をもらつて、はつはつハ、七年もおふくろが待つてくれたからネ。少しは孝行も

しなければならんさ。これからだ、ほんもののであるのは。

(2) 小林秀雄『無常といふこと』と

亀井勝一郎『聖徳太子』（昭和二十一年）

終戦後一ヶ月間の出版界はまづ再版物と際物的出版とのざわめきで暮れたと云つてよいであらう。その中に、確乎たる清澄な二つの孤高の聲がきこえてくるやうに思ふ。小林秀雄『無常といふこと』と亀井勝一郎『聖徳太子』との二著である。両方とも戦時中の執筆によるものであるが、戦後思想界の二つの大きな収穫となつたのである。此の二つの、生命をかけた著述について詳しく論評することはしばらく措き、此処に簡単に一読の感想を記して紹介に代へようと思ふ。

亀井氏が戦争最中のあのほげしい日々にあつて畢生の仕事として太子伝の執筆を続けてをられたことは、同氏の『大和古寺風物誌』の文章の中に見えて、その出版が待たれてゐたものであつた。

小林氏の長い間の沈黙は、室町から鎌倉へかけての古典の批評を内容にする本書によつて破られたわけである。

共に、今日の思ひを今日の言葉で表現した本格的著述である。戦後の出版界も此処に漸く本格的なものを打ち出しはじめたやうに思ふ。その意味で、確かに画期的著述であり出版であると言ふことが出来るよう。

今日のやうに、動揺のはげしい時代に直面すると、人は必然的に、変転する姿勢によつて動かされる

ことのない独立不羈の思想家の言葉を求めるものである。平和安逸の時にあつては耳にすることの厭はれる真実の思索の価値が、混乱の時代ゆゑに輝きをますのである。政治家の言葉に信をおけなくなつた人々が、孤高の思想家の言葉に耳かたむけようとするのは此の故であらう。『無常』とはかくのごときであらうか。

小林氏は云ふ

「……室町時代といふ、現世の無常と信仰の永遠を些かも疑はなかつたあの健全な時代を、歴史家は乱世と呼んで安心してゐる。」

と。此の言葉にこもる痛烈な批判的精神は、同時に『徒然草』『平家物語』『西行』『実朝』の文学的価値に心うばはれた精神である。此は、今日に生きる者の無常の感慨が「永遠の信仰」を求めて歴史にむかひ古典にむかつたといふことに他ならない。ともあれ、「現世の無常と信仰の永遠を」思ふことなく安心してゐたのは史家ばかりではなかつた。少くとも日露戦争以後の日本人のこゝろもちは、総じて此の、「現世の無常」を痛感するこゝろもちがうすく、五大強国とか三大強国とか云つてをれば、それで己がそれに値するやうな錯覚に陥つてゐたのである。父祖の努力の上に安居して、その地位があたかも己の実力によつてかちえられたかのやうに思ふ、あの道楽息子心理に似通ふもの、——云はゞ、はかない夢を見てゐたわけである。勿論、「無常」の国際社会即ち人生は、実力なきものゝ夢を許すわけはなかつた。其の結末は敗戦といふ悲劇であつた。敗戦によつて夢がさめたやうにおもふ、そのこゝろもちが、人生無常の痛感こそ、再建の地盤となるに違ひない。

長い間の夢が覺めて、たのみの杖を投げすてられ、きびしい現実に向はされる時、人ははじめてゆれ

やまぬあらしのなかに彷徨する己をかへりみる、そのころもちは享楽と不徳との絶望的頹廢に陥るか、同胞協力による再建の地盤を求めて永遠の信仰にむかはうとするかの、岐路に立つ。だから、深い宗教的信仰とたくましい現実主義とは両立しうるし、其はひとつの精神の表裏に他ならない。現代は無信仰であるといはれる。其は同時に無常の痛感の喪失であり、同時にまた現実を追求する意欲にとぼしいといふこと、即ち、科学的精神の欠乏に他ならない。

「世界虚假唯佛是信」と仰せられた聖徳太子であつたればこそ、あの日本の危機を乗り切る現実的政治的威力をもつことが出来たといふことをおもはなければならぬ。またあるひは本誌前号の木口氏の「歌人としてのリンカーン」に見られるやうな人生無常の痛感を身につけたリンカーンであつたればこそ、あの南北戦争当時のアメリカの国難に処してあやまらなかつたのであらう。政治家に人生無常の痛感がなければ、その政治は畢竟はかない悪夢と化し去るといふ、此の今日の至深の体験にひとつの表現をあたへたものとして、僕は此の二つの著作を受けとつた。

亀井氏は言ふ。

「明治をすぎて大正昭和となれば人間は著しく無神論の傾向を帯びるのであるが、この状態のもとに普及された太子の像とは何か。歴史とは何か。万人が「知」ってしかも信じない。「尊敬」して、しかも「忘」れる。これは精神の遭遇する惨酷な受難ではないか。何人がこの迫害の張本人であつたか。文教の府と強権による形式化された神聖が、国史における尊貴の方々の真姿を蔭蔽し、形式主義の犠牲と化したことはすでに述べたとほりである。信仰のもつあらゆる柔軟性は剥された。同時に無神論を根底とした党派の、神聖に対する攻勢が強権的性質を帯びてきてゐることを直視すべきである。受難は更に

激烈をきはめるであらう。

……内面ふかく常在する危機を思ふとき、安心立命の境など一の夢想にすぎぬではないか。畢竟、自分の死屍をもつて語る以外にないやうな境地へ、一步一步追ひつめられてゆくのが信仰といふものではないか。歴史は私を攪乱し信仰は私を翻弄する。私は太子の御生涯にいかなる解決をも悟りをも求めなかつた。永劫に消えないやうな苦悩の音声と「空」の嘆きのみが、いよいよ切にひびいてくるのである。真相とは魔力だ。人智によつて解説しうるが如き真相は真相ではあるまい。真相は人間を攪乱する。そしてその深淵にひきずり込んで行く。長くこれを凝視するものが殉教者となる所以である。

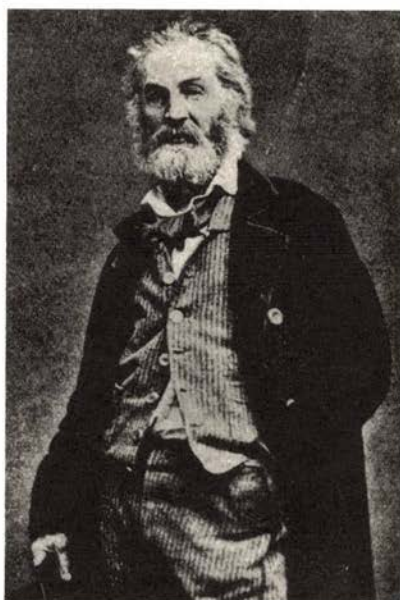
受難の日に太子に遭ふことを許されたものは幸ひなるかな、何故なら「継ぐ」は、たゞかゝる日ににおいてのみ可能だからである。」

卒読の感想を記して紹介にかへる。就いてみられたい。いづれ詳細の批評を加へうる折があらう。(S・K) (『無常といふこと』(十五円) 『聖徳太子』(十八円) 創元社(昭和二十年十月)

(3) 岩波文庫復刻『草の葉』と『憲法義解』(昭和二十一年)

岩波文庫の復刻二つ。いづれも星二つ。星は二つであるが定価は四十銭ではない。『憲法義解』が四円、有島武郎選訳のホイットマン詩『草の葉』が七円。一本一円の水飴をしやぶつたと思へば決して高いとは云へないが、読書人の嘆きは深い。新旧両書を前につくづく眺めてまことに感慨無量である。

『憲法義解』は明治の政治的良識の集約であつて、伊藤博文私著の形で発表された憲法の義解である



W. Whitman

が、事実上の執筆は井上毅・梧陰と推定されてゐる。我々は此を読んで、何よりも明治の先覚が、古今中外の史実に殷鑑する該博無比の知的研究と、其を駆使する国民的情意とを以て、畢生の努力をこゝに傾けたあとをたどらしめられて、まことに今昔の感にたへないものである。

帝国憲法の改革が現在着々と進行してゐるが、さうして其は、日本の民主主義的傾向の助長に必至の大業であるが、義解に示された様な慎重な学問的研究の情熱は失ひたくないものである。別して義解が欧米民主議会主義の長所を摂取しようとした努力はかへりみらるべきであらう。此の憲法をまもることを怠つた罪の結果として今日の我々が立つてゐることを思ひ、憲法改革の国民的努力の過程に於て、我々は此の義解を胸に抱きしめるのである。今『憲法義解』は古典の一つとなつた。此処から、今日の敗戦に至る歴史の深刻な反省からこそ、世界の進軍に歩調を合せうる新憲法草案が起草されるであらう。

有島武郎の『草の葉』翻訳もまた大正時代の文化的遺産の一つであらう。訳詩六十篇、ホイットマン年譜、感想ワルト・ホイットマンを含む有島武郎のライフ・ワークである。訳詩は生硬でとりつきにくいのが、年譜・感想は研究成果がよくあらはれてゐて、ホイットマン研究には必読の価値がある。訳詩は著者自ら語る如く実にむづかしい事であらう。何より

も其は至難の精神作業だからだ。

兎もかくも、彼が遠くアメリカまで出かけて行って研究をつゞけたホイットマンに対する捨身の情熱は、高く評価しなければならない。

アメリカ・デモクラシーの最高の表現者としての詩人ホイットマンに対する研究のあとを、われくは此の書をひらいてたどることが出来る。大正十二年初版、昭和九年岩波文庫第一刷、本書は昭和廿一年三月十日第八刷。訳詩としての芸術的価値について満足のゆくものではないが、大正十二年の翻訳詩がそのまゝ現在も名著として出版されることに對して、筆者有島武郎に賛辞を送るよりも、寧ろそれから今日に至る約廿年間の文化的歩調の何と緩慢なりしことよと嗟嘆するのである。

青年は起つて此の凝滞を破らなければならない。ホイットマン翻訳は（翻訳は外国文学研究の結論である）日本読書組合の高村光太郎監修のホイットマン全集刊行計画を第一として、各方面に於て進められてゐる。ホイットマンを日本語に撰取することは現代日本の、地味な、しかし輝しい歩みである、その歩みを確実に歩んだといふのが本書の価値である。改正は不断に相続されなければならない。其は現代の我々の任務となる。（S・K）

(4) 鈴木貫太郎述『終戦の表情』(月刊労働文化別冊 昭和二十一年八月刊)

終戦当時の首相として日本の未曾有の転機に当たった鈴木さんの言葉、われ／＼の聞きたいものゝ一つであった。

四六版六三頁三円五〇銭の本小冊子はさうした要望にこたへたものであらう。

一年の沈黙を破って語られたその言葉は極めて簡単なものであるが、正に傾聴に値する。重大転機に際した政治家に毀譽褒貶はつきものである。「敗因を衝く——軍閥専横の実相」の著者田中隆吉元少将は、その書中に、「鈴木貫太郎氏は至誠の人と言はれてゐる。然し乍ら氏自ら語るが如く、一介の武弁に過ぎず、政治には無知にして、経済には全くの門外漢である」と評し、組閣当時の経緯に闕説して「正にロボットである、齢八十にして耳遠く、而も何等経論なき鈴木氏を総理に推薦せる重臣は誠に罪な連中と言はねばならぬ」と云つた。

鈴木氏が身を国政の指導的地位に置きながら、その戦争終結の信念を直ちに実行にうつしえなかつた点、或ひは首相としての約半年の間大勢の推移を如何とすることが出来なかつた点、ソ連に調停を依頼したことの可否等、結果からみてもう少し何とかしてもらへなかつたかと思ふのは誰しもであらう。かうした漠然とした鈴木氏に対するわれわれの考へに対して『終戦の表情』は一応の解答を与へるものである。

「さてこゝに敗戦一ヶ年静かに過去を振り返つて見ると、種々の悪夢が念頭に浮かんで来て、我が国



の最近二十年程の歴史がまざまざと思ひ起されてくる。

人間はたとへ間違つたことであっても、それを繰り返し繰り返し耳にしてゐるといつの間にかそれが真実にそのやうに聞こえて来、やがてそれ以外の事は一切間違つてゐるかのやうな錯覚に捉はれて了ふものだ。

日清、日露の両戦役以来、日本は大陸政策といふものを唱へ、血に依つて購なつた特殊權益とか、大陸には一切の資源があるやうな妄想にとりつかれて了つた。日本は島国であり、資源の少ない国であるから誠に無理からぬ話であるが、その大陸を手に入れるためには一切の没道義なことも平然として行ひ、大陸さへ手に入れ、ば世界を相手にして戦争出来るやうな誇大妄想的な考へ方に転落して行つた。さういふ空気は明治末期から、大正、昭和を通じて、満洲事変勃発頃には頂点に達し、この気持ちは更に拡大して隣邦支那を侮視し、東洋の盟主といふことを自ら唱へるやうになつた。誠に救はれない道義的転落である。しかもこれに対して冷静な批判をし、世界状勢を説くものは、非愛国者のやうに取り扱はれ、遂に侵略政策を談じ、日本の古典を談ずる以外には、凡ての思想を禁圧する勢ひに迄発展して行つた。世界には曲学阿世がはびこり、御用学者、御用事業家、画的統一主義者が横行して日本国中が天狗の寄り合ひ世帯みたいになつて了つた。

或る軍人などは、満洲には金が出る油が出る何でも資源があるなどと吹聴してゐたが、出たものは石炭と鉄だけだった。かうした国家的物欲が昂じて、遂に魔がさしたとでも言はうか、世界を相手にする飛んでもない戦争を始めて了つた。だがこれは国家の宿命だったかも知れない。もう近年になつては、これを事前に止めるなどと言ふことはどんな政治家が出て也不可能だったかも知れない。」

この一文を含む一文の見出しは、「誇大妄想から現実へ」となつてゐる。含蓄深い思想的反省である。日露戦争勝利の弛緩が、われわれにはかない夢をみさせたといふ、此の思想史に対する考へ方は重大であると思つた。かういふ点がはつきりしてはじめて日本再建の設計が可能になるのである。

かういふ健全な、さうして不動の信念を鈴木氏が貫いてゐることを見落してはならない。淡々として語りつゞける氏の言葉は、至情と冷静な展望とに織りなされて、何か明るい道をさししめしてゐる。殊にその忠誠心に発する陛下御日常についての言葉は必読のものと云ふべきであらう。口述であるために、文章にありのまゝの感情のうつつてゐないのがうらみであるが、現下必読の書である。簡単に紹介しておく。ついで見られたい。(S・K)

(5) エドガー・スノー『中国の赤い星』(昭和二十一年)

戦後すぐにエドガー・スノーの『中国の赤い星』の翻訳書が出た(昭和二十一年)。それを読んで、日本は毛沢東の戦略に負けたのだと思つた。

一九三六年(昭和十一年)七月十六日、毛沢東はスノーに対日戦略を語つたと書いてある。

「第一は、中国における日本帝国主義に対抗する民族統一戦線の達成、第二は、世界反日統一戦線の結成、第三には、現在日本帝国主義下にある抑圧人民の革命的行動です。」と。(増補決定版『中国の赤い星』松岡洋子訳——筑摩叢書29。六四ページ)

第一の戦略は、同年十二月の「西安事件」となって実施された。中国共産党の指導下にあった張学良が西安で蒋介石を軟禁し、周恩来が登場して、国共合作(国民党と共産党との合作)となり、中国の対日統一戦線を決定した。

第二の戦略については、中国共産党というよりも、コミンテルンの戦略で、ゾルゲ事件(昭和十六年発覚)がその象徴であると言つてよからう。ゾルゲは日本の北進を押へてこれを南進に切りかへるために、尾崎秀実と組んで、時の日本政府ならびに世論を動かしたのである。日本は北のソ連に対してでなく南の米英仏に対して進取することになった。対ソ戦に備へた陸軍は、南方に向かつたのである。アメリカは日本を敵として中ソを援けた。

第三の戦略は、日本の革命であるが、(これは、敗戦直後の二・一ゼネストの挫折によつて一旦抑止された。その後、中国共産党が火焰ビン作戦による暴力革命を日本共産党に強要し、それを日本共産党が蹴った、といふ話は有名である。野坂参三や尾崎秀実は戦後は英雄であつた。大学紛争の時、東大正門には毛沢東の写真が掲げられてゐた。)

「夷を以て夷を制す」とは中国の伝統的政策である。戦争中のことはお互ひに水に流すのが礼だが、毛沢東の偉大な戦略にふたたび陥らぬようによほど用心しないといけない。

(6) ホイットマンの言葉 訳詩五篇（昭和二十一年）

海外の諸国に

新世界——このなぞをとき、アメリカを定義し、そのたくましいデモクラシーを定義するものを

諸君が求めてゐるといふ。

よし、それなら、僕の詩をおくる、

その中に諸君のもとめたものがある。

ヴェテランの民

ヴェテランの民——勝利の民！

土に生く民、たゝかひのまうけもかたく——ひた押しすゝむ辺境の民！

（軽信の民にあらず、頑迷の民にあらず）

今し自身の法則に自立する民、

熱情とあらしの民。

父さん早く野良から来て

「父さん早く野良から来てよ、ピートから手紙が来てゐる。
母さん早く表へ来て頂だい、兄さんから手紙が来てゐる。」

見よ！ 秋だ。

見よ！木々は日ましに色こく黄に紅に染み、

しづかな風に木の葉をひらめかせて、冷々したオハイオの村々に和やかな諧調をあたへてゐる、
果樹園のりんごは赤くみのり、うれた葡萄が垂れさがつてゐる。

（葡萄の匂ひがするだらう、

ついさつきまで蜜蜂がぶんぶんいつてゐたそばの匂ひがするだらう。）

空には、見よ！ かくもおだやかなかくも清らかな雨上りの空、——すばらしい雲が浮んでゐる。
地上またすべてしづかに生々と美しく——田畑はよく実つてゐる。

地上は見たす限り豊作だ——しかも、その野良から、

お父さん、はやく戻つて来てくれ、娘がよんでゐる。

お母さん、はやく戸口までやつてきてください、まっすぐ戸口まで。

いきせききつて母は走ってくる、何か不吉な予感に足はふるへ、髪をなほし帽子をなほすゆとりもなく。

早くあけて——あゝ此はあの子の字ではない、しかしあの子のサインがしてある。

あゝ誰かの代筆だ、あゝいたましい母親の心持、眼がくら／＼する、文字がひらめく、彼女は主な言葉だけつかまへる。

きれ／＼の言葉——「胸をうたれた、騎兵の小ぜりあひ、入院、いまはよくない、しかし、すぐよくなるだらう。」

あゝいまぼくの眼には、数々の町と田畑のつらなつて万物ゆたかなるこのオハイオの野の只中にたゞひとつの姿しか見えぬ、色青さめ頭はしびれ、気も遠くなつて、

戸口の柱にもたれてゐる母親の姿。

泣かないで、ねえ、母さん。（年頃になつたばかりの娘がむせび泣きながら声をかける。幼い妹たちはだまりこくつて恐ろしさうによりあつまつてゐる）

ねえ、母さん見て。手紙にはすぐよくなるッて書いてあるワ。

あゝだがかわいさうな少年よ、彼はよくなるならいだらう、（またよくなる必要も既がないのだ、あのを、しい魂は。）

みんなが戸口に立ちすくんでゐるあひだに、彼はもう死んでゐるのだ。
ひとり息子は死んでしまつた。

しかしお母さんはよくならなくてはならない。

かの女はやがてやせたからだに喪服をまどひ、

昼の食事に手をつけず、夜はとぎれとぎれの眠りも目覚めがちに、

真夜中に目をさまして、嘆き悲しみ、たゞひとつのねがひに身も心もさゝげるのだ。

——若しも人知れずこの世を去ることが出来たら、黙つて此の世から脱れ去り、
戦死したあの一人息子をさがしあてゝあとをつけ、あの子といつしよにゐることが出来たら——と。

和解

すべてのものゝ上に、高空の如き美しい言葉を。

「たゞかひとその殺戮行為とはやがて完全に終はらなければならぬ。

死と夜との姉妹は、来る日も来る日もたえず、やさしく、このけがれた世界を洗ひ清めてゐるではな
いか」

——いま、僕の敵が死んだのだ。僕と同じ様に立派な男が死んだのだ。

まだ棺に入つたまゝ、蒼白の顔をよこたへてゐるのが見える。ぼくは近よつて、
身をかがめ、棺の中の真白な顔にそつと唇をあてる。

ヴァージニアの森にさすらひ疲れて

（秋であつた）ふみしだかるる木の葉の音に耳かたむけながら、
ヴァージニアの森に疲れた歩みをはこんでゐた時、とある木の下にひとりの兵士の墓を見た。

致命傷を負つて退却の際に葬られたのだ——僕にはすぐすべてがわかつた、

——午食の休止、その時、

出発！ 一刻の猶予もない、——だが、此のしるしが残された、墓のそばの立木にうちつけた銘碑の
走り書き。

「を、しく、心ふかく、誠実な、なつかしいわが戦友」

どれくらゐ立ちつくしてゐたらうか、我にかへつて家路についたが、

——そして、それから幾春秋、また幾見聞がすぎたらうか。

しかもをりをり、うつりゆく季節と見聞とのあひまあひまに、

突然、ただひとり居るときにも、また雑踏する港の只中にあつても、

僕の臉に浮んでくるのはあの名もない兵士の墓であつた、ヴァージニアの森の中のあの素朴な碑文。

「を、しく、心ふかく、誠実な、なつかしいわが戦友」

(7) ホイットマンの言葉 『民主主義展望』抄訳（昭和二十二年）

ホイットマンの父は大工職の半農であつたから、公立小学校を卒業したホイットマンは勿論正規の学業につくことが出来ず、十一歳から十三歳迄弁護士事務所や医者家の家に雇はれて独学した、十二から十七迄、印刷職工の見習工となり十八の歳は郷里の小学校教員になり、十九歳の時、週刊ロングアイランダーを発行したと思はしくなく、二十歳の時には印刷工として自活する傍ら教鞭をとつてゐた、それから『草の葉』第一版を出す迄ニューヨークの印刷工、農事の手伝、新聞記者、家業の大工等々転々として職を変へた、三十六の時『草の葉』第一版を出して、彼の生涯は決定したが、其は収入の途にはならなかつたからその後もいろ／＼な仕事についた、云はば『草の葉』に生命を賭した「浪人」になつたと云へやう、彼の生涯そのものが民主主義の実現であつた。

勿論こゝで『草の葉』と云つたのは、芸術至上主義的詩作を指すものではない、寧ろ厳密に云へば當時のアメリカの直面する全思想問題の解決、と云ふ意味である。その解決の一切をホイットマンは『草の葉』の中にたゞみこんだのである。——かういふ——と云つても職業上の遍歴ばかりでなく内的経験をも含めて——多年の遍歴によつてホイットマンは當時のアメリカを内面から観察体験した。そして、詩の任務を確信したのである。『民主主義展望』は、一八七一年（明治四年に当る）五十一歳で発表した時事評論である。

当時『草の葉』は既に第四版を出し、その文学的価値も漸く揺ぎないものとなつて来た頃である。ホ



○
イトマンは一方に於て自己の詩によって当代アメリカの内的要求に応へると共に、『民主主義展望』に於て、時代の内的欠陥を剔抉し、詩の任務を高揚したのである、以下抄訳してみよう。

「現在及将来に対して最も広く且つ最も密接な関係を有つてゐる合衆国今日の根本的欠陥は、母国出身の文学者著述者の一社会が、或ひはその社会に対する明瞭な觀念が、欠除してゐるといふことである。その社会は、既成の僧院的な如何なるものとも全く異り、はるかに高度の近代的性格を有つてゐて、我々の今日の出来事や国土に匹敵しうるものであり、アメリカ的知能趣向、信仰の全集団に浸透し、その中に新たなる生の息吹を吹きこみ、それに決意を与へ、大統領及び国会議員の選挙の内部根底に影響を及ぼすことによつて、流行皮相の普選よりもはるかに強く政治に影響を与へうべきものである。且つ、正しき教師、学校、風習を生み出し、放出し、その最も宏壮な結果として、ひとつの宗教的・道徳的性格を、合衆国の政治的・生産的知的地盤の根底として成就せねばならぬ——さういふ一社会が現在欠除してゐるで

はないか？」

○ 「恐らくあらゆる時代を通ずる真理であるが、或る一国民の中心点は、——その国民自身が真にそこから指揮され、また他国民をそこから指揮しうるその中心点は、国民文学であり、殊にその原型の詩である。過去のあらゆる国々にもまして、ひとつの偉大なる独創的文学が必ずやアメリカ・デモクラシーの正しく、且つ信頼するに足ることを立証するに至らねばならぬ。」

「偉大なる文学が一切に滲透し、一切に色彩を与へ、諸々の集団と個人とを形成し、微妙な方法と不可抗力とをもって一切を思ひのまゝに構成し、維持し、破壊する——といふ事実には気付いてゐるものは稀である。思へば、此の大地に生まれ出たすべての国民の上に、何故、特殊な二国が、極めて小国であるに拘らず、言語を絶して巨大に、美しく円柱の如くに聳立してゐるのであらうか？ 永遠のユダヤが、不朽のギリシヤが、一対の詩の中にいまもなほ生きてをる。」

(8) 航海文学と西部文学

—— 木口公十氏に訊く（昭和二十二年）

アングロサクソン民族は先ず第一に海洋民族である。海洋民族の特性は、日本民族の伝統で云へばサノヲノ命の御性格が、その代表的表現である。アングロサクソン民族は元来ゲルマン民族であり農民であつたが、後ゲルマン民族と分れてその農民たる根本性格の基礎の上に更に独自の風格を築き上げた

のである。即ち、彼等は、北海の荒浪の上の生活——いはゆるヴィキングの生活——からして彼等の特性を鍛へあげた。此の民族的な根本的性格は不変である。

北海の荒浪を乗り切つてイギリスに渡つた彼等は、英本国に定着した後、更に大西洋を横断してアメリカ大陸に發展して行つた。此はイギリスのルネッサンスと云はれてゐるエリザベス時代であつて、国民的緊張の時代であり、外にはスペインと角逐してその海上のヘゲモニーを握るに至つた時代である。そしてまた、チャールズ・キングスレイの有名な小説『ウエスト・ワード・ハウ』に表現されてゐるウエストワード・ムーヴメントの時代でもあつた。かうして、西へ、西へ、といふ掛け声に従つてアメリカ大陸に取りつた彼等は、東部の沿岸から進發して、東部から中部へ、中部から更に西部へ、と開拓發展して行つたのである。未だかつて斧も入らざる洪荒たる原始林を開拓し、熱砂を踏み、氷河を越え、土人の襲撃をうけながら、西へ、西へ、と進展したのである。所謂フロンティア・スピリット西部開拓精神が、今もなほ重んぜられなつかしがられてゐるのも、この「西への運動」のうちに斃れていつた幾多無名の民族的英雄の血と汗と、恋愛と労働との不滅の記憶に彩られた彼らの民族的性格から理解できる。

暴風の海上生活に於ては、何時いかなる変化が起るか想像しえない、「ある、かと見ればなきゆく海原の波」の上の生活であつて、不可測の天然に常に対して居る——殊に航海術の幼稚な時代であつた——から、これと全力をあげて戦ふことにより、不撓不屈の意志と、現実的精神と、運命に対する随順の信とを鍛練されたのである。イギリス文学の中には航海文学ナヴィゲイターズ・リタラチャーともいふべきものがあつて、大航海大探検家の苦闘の浩瀚な記録が残つてゐるのも、この民族性の証左である。

ハクルートやパーチャスの記録した幾多の世界航海記を読み、また「現代ならびに前時代の誇りうる第一人者、一七七四年二月十四日、太平洋オハイオの土人のために殺さる、時に享年五十一歳」といふ墓碑銘にその悲劇的生涯を暗示するクック大佐の『発見の航海』、キャプテン・スコットの南極大陸探検の記録等をよめば、この間の消息にふれうるであらう。彼等大航海者として盛名を歴史にとどめた人々が、安住にたへがたい衝迫にうながされて、未開の天地に突入し、慘憺たる生涯を終へてゆくあとを辿ると、彼等の民族の本能的性格の一端にふれるやうに感じられる。祖先の民族移動を神話と童話の世界に夢見つゝ大和島根に安住して年久しく、引込みじあんな、老人じみてしまったわれわれ——の性格に對比して、彼等のなまなましい民族としての開拓的本能の強さと若さとに心うたれるのである。

また、自然科学の発達もこの海上生活と原始的大陸開拓の生活とから大きな刺戟を受けて生まれたのである。海上生活は自然に支配されるから、自然をあるがまゝに、精微に見極めて判断しなければ自分が危い、目標のない大海に乗り出すには星を研究しなければならない、自然科学の生きた知識がそこに必要となる。かうして自然科学の発展が促された。

アメリカの西部文学もまた、この西へ、西へとふ民族本能から発したものの一つで、荒々しい自然を舞台にする原始的の生活に対する彼らの本能的なあこがれがそこに見られる。プレート・ハートの『ボーカー平からの追放者』とか、チャルス・M・ラッセルの『犬喰い男』、ドッグ・イーターなどを読んでみるとその一斑が知られる。この西部文学と前述の航海文学とをつらねて、こゝにわれわれはアングロサクソン民族の根本的性格の一角にドシンと衝き当たつたやうな気がする。

(9) 『シー・ホーク』と『南部の人』(昭和二十二年)

戦後いくつかのアメリカ映画を見て、改めて現代アメリカの国民精神に敬意を払はされた。『ラインの監視』や『カサブランカ』『わが道を往く』の、名もなき民の英雄的精神の表現、『キューリー夫人』『エイヴ・リンカン』の、至高の人格に對する切實な尊崇の念、かういふものにそれぞれの角度から心打たれた。殊に、『南部の人』と『シー・ホーク』とは、本誌木口公十氏の研究と考へあはされて、アングロサクソン民族の今日の大をなすに至る途上の不撓不屈の開拓者の精神の一端を示してゐて、実に面白かつた。

『シー・ホーク』はエリザベス朝を背景にする一キャプテンの劇的生活を、『南部の人』は、アメリカ南部の棉栽培に於ける名もなき民の開拓の苦闘を表現してゐる。航海文学と西部文学、海洋民族としての英国人と大陸開拓民族としてのアメリカ人、——アングロサクソン民族のたくましい息吹が、この二映画を貫いてゐる。フランス映画を人間心理の明暗を追ふ傾向の強い映画とすれば、アメリカ映画は、大自然を背景にして、繰りひろげられる人間の開拓的行動の世界を中心とすると云ふことが出来ようか。アメリカ映画は、たしかに、現代アメリカの国民精神に開く、一つの確実な「窓」である。映画の技術的優劣は知らないが、かういふ意味で『シー・ホーク』と『南部の人』は、アングロサクソン民族の自伝の一章であると思つた。

(10) 鹿菅渡の歌 二首 (昭和二十二年)

火を噴きし昔ゆめむか開聞のみ岳もだせりゆふべの空に

『国民同胞和歌集明治篇』所載「航海」二七首連作中の一首である。恋人と別れて船中の人となった作者の目に、夕空に黙し立つ開聞岳がうつってゐる。作者は後年、かうもうたつてゐる。

薩摩から開聞岳の絵葉書をくれた友人に

これを見るとむかしの恋人でも出て来たやうだ。

もとのまゝの山のすがた、

いたゞき半分雲にかくれて

前には噴き立つ海がひらいてゐる。

君はおぼえてゐるか、

この頂上の岩にぼくの写真がかくしてあるのだ。

ぼくはいくどもこの山の麓をとほつた。

夕暮の、船の上でふりかへりふりかへり佐多の岬をまはつたこともあつた。

枕崎からはやてに追はれて来たときには、

電をふらす雲が見るまに山を包んだつけ、

それもこれも、もう七年の昔だ！

君はそんな運命におちてしまひ、

ぼくは今のありさまだ。

こんなことを思ふと、

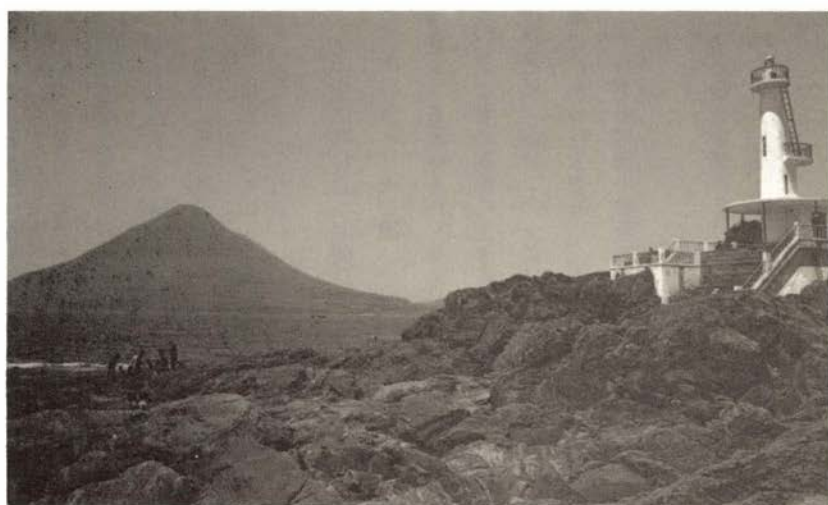
ぼくはどうしていゝかわからなくなる。

夕の空に黙し立つ開聞岳をながめて、作者の胸中に湛へられて湧きかへる情熱は、己が姿を開聞岳に見たのである。火を噴いて爆発した己が昔をなつかしみ夢みてをるのであらうか、開聞のみ嶽は、内に湧きかへる地熱をたゞへて、じつとおし黙って立ってをる、夕の空に。——作者の情熱は自然を渾融し、自然は作者の胸裡に生きる。記紀の歌謡、万葉集人麿の歌に見られるやうな、奔騰する民族的情熱の所産である。僕はこの一首にも、明治の御代を支へた強烈な国民的情意の脈搏を感じる。其は日本古代創業の精神の回生であり、世界に出た新日本の夜明けのをたけびである。

それから約三十数年の後、同じ作者は、

あさ日さす庭のしげみにかゞやきて星よりも濃き露ひとつあり

ありがたき国土なるかな朝廷に紅梅さきて雲のしづけき



開聞岳遠景

とうたつてゐる。庭のしげみに輝く露をながめて
「星よりも濃き」といふ、広大な連想の世界！
作者の心は感覚的世界を包んで、大空のやうには
てしなくひらいてゐる。大地に立つてみ空を仰ぎ、
天地の間に生れて天地をつなぐ人の運命を、作者
はそのまゝに生くるのである。夜ぞらに輝く星は
作者のしたしい友である。「星よりも濃き」とい
ふ稀有のそして自然の表現！しげみに輝く一滴
の露は、はてしない夜ぞらに輝く永久の星かげに
結びつけられる。作者の心は自然のやうにひろく
ゆたかである。かくして感覚は思想に、現実には理
想に、部分は全体にたゞしく抱納され、生命をあ
たへられる。「ありがたき国土なるかな」といふ「う
ちつけ」の、素直な、自由瀟灑な表現「紅梅さき
て雲のしげき」といふひろいゆたかな大局的視
野。この二首を「火を噴きし昔ゆめむか」の歌と
思ひあはせて、こゝに、地上現世の万象を無窮の
歴史と無限の天空とにつなぐ作者の思想に、限り

ない憧憬の心もちを抱かさせられる。それは、将来と過去と、天と地との間に人としてたゞしく生きる作者のたふとい心持を示すものである。これが人の人たるたゞしい心持であると思ふ。

(11) 歌壇展望 『創作』(昭和二十二年)五月号評

若山牧水創設喜志子夫人主宰『創作』の五月号三二頁数百首の歌読んで、現日本国民の情意生活の低調なのに今更ながら痛心を禁じえない。疲労か？ 放心か？ 弛緩か？ 吾々日本国民の精神生活は複雑な分裂拡散にまかせられて、これを詩化し生命化する強い統一意志に欠けてゐる、ために、真の詩作の衝動となるべき緊張した感激が消え去らうとしてゐるやうに思はれる。牧水の、有名な、

幾山河越え去りゆかばさびしさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

の歌は、『雲か萍か』の作者故田代順一の連作中の一首、

幾山河越え去り来れば道のべに木びきうたひて生木を裂けり

の、意志的現実的表現と強い格調とに及ばないと思ふが、それでも尚ロマンチックな感情にあふれてゐて、作者の感動の深いことはよくわかる。この切実な感動が、『創作』五月号中の諸作には極めて稀薄

である。感動のうすい経験から無理に歌をよまうとすれば、ヒネクレた歌になつてよむにもシヤクにきはる様な歌が生れ易い。其の表現が比較的スナホでも日常の瑣繁事を散文に記すのと大差ないので、歌よむ意義がないと思ふ。だから『創作』の問題は、表現技巧の問題ではなく、生活の問題であり、思想の問題である。これを表現技巧の問題として解決しようとする、同誌に山崎一郎といふ人の書いてあるやうに、斎藤茂吉門の「俊秀」と云ふ山口茂吉氏の、

夏の夜の月明ければこの夜らの清きを蜂の翔ぶことあらむ（アララギ九月号）

熱高きこの身癒えなばたゝかひの頃よりの罪滅びゆくべし（同、十二月号）

この日ごろ勤休みて街ゆかず街には「あはれ」多かるらむに（八雲新年号）

といふ歌について、「その観入の深まりを思はせるに十分であつて、圏点の箇所にそれを見ることが出来る。そして、これは単に対象の新しいのみに心を奪はれてともすれば生の深まりへの思考志向を忘れようとしてゐる近時の歌壇の風潮に対して、一つの示唆を与へるものであらう」といふやうな歌論が出てくるのではあるまいか。

引用の山口氏の作に山崎氏の附した圏点の部分は、筆者としては感心しない。技巧的には美しい言葉が使はれてゐるとは思ふが、内容の浮薄さを蔽ふことは出来ない。圏点の部分は所謂「思はせぶり」の表現だ。第一首は、「さういふこともあらう」とでもこたへるより外ない。かういふそこはかかない空想的な気持は、それだけでは歌によむには無理だ。僕らはもつと緊張した充実した情意を欲する。

第二首、第三首の圈点の部分の概括的な表現はその傍觀的なそして思ひ上った考へ方に誰しも問題を感じないではゐられないと思ふ。第二首殊に然り。「たゞかひの頃よりの罪」とはどういふことか知らないが、余りにも漠然としてゐて捉へどころなく——これが流行するところだらうが——然もその罪が「滅びゆくべし」と強く断定的によみ下し、然もそれは、「熱高きこの身癒えなば」といふのだから、自己満足の度が強すぎると思ふ。

この三首はいづれも一言で云へば、「文勝」質」もので、形式と内容とが一致せず、ために芸術としては失敗であるが、これに感心するのは、結局「創作」短歌の問題を、生活の、乃至思想の問題とせず、表現技巧の問題として解決しようとする誤謬にもとづいてゐる。山崎氏の「創作」誌上の作は、次の四首である。

時事断片

電産爭議解決の記事を読み居り給与形態に心とめつゝ

忽ちに読み終へて淋しけふよりはタプロイド版となりし新聞

オーバーの襟深々とうつむきて自動車を降りし吉田総理大臣

政局をめぐる動きを否定して教授グループの弁明文が載る

此らは確かに五七五七七・三十一音ではあるが、歌ではない、と僕は思ふ。それは作者の情意が歌のシラベにのつてゐないからだ。極言すれば新聞の見出しにすぎない。この何処に詩があるのだらうか？

『創作』五月号の歌の多くは、かういふ傾向が多分にあつて、芸術的表現の動因となる創造的情意の

強い脈搏を感じることが出来なかった。僅かに、喜志子夫人の

暗澹

闇き方におちゆかんとする渦潮の渦に挙りて巻かれゆくはや
厳しくもたへつゝ来しは今のこの厳しさに尚たへよとなりし
いまこそその危き時に何してかおのれおのれの安きにはつく

の三首、中村柊花氏の「春五首」

雪解水遽かにかきみうら川の流れ音に鳴る夜となりにけり
ほそぼそとひと夜を降りし春雨に鳴りいちじるき裏川の水
天地のなげきの声をきく如し夜ら鳴りつゞく谷川の音
谷川の流れの音は常闇の天の真洞ゆ聞えくるらし
雨風の日々定まらず春に入る天のいとなみ哀しくぞ思ふ

第二、三の歌に、情意の律動のまゝにそれを歌のしらべにこめて歌ふ正しい作風を見出すのみであった。喜志子夫人「海辺独語」の中に、

まちまちし君がなさけの品々は四ん月六日の今日とゞきたり傷みもせず

に始まる五七五七七形式の五首連作があり、その最後は、

わが友よ遠く遙けきわが友よこのよろこびを受けさせたまへ泣きて申すを

である。短歌、旋頭歌と異つた所謂佛足石歌の歌体に倣ふことによつて、短歌形式に安住して安易な表
現に就くことを逃れようとする創造的努力を示して、たのもしいものがあるが、内容の平凡さが、と同
時に感動の浅いことが、却つて特殊の詩形を破綻にみちびいてゐると思つた。寧ろ旋頭歌の形式でよむ
べきではなかつたらうか。佛足石歌体とも云ふべき五七五七七・七の詩形については尚評論すべきであ
るが、今こゝには佛足石歌碑の十七首中数首を引用して読者の参考に供するにとゞめる。最後の句は小
字で記してある。(次田潤編『上代歌謡』より引用)

御跡作る石の響は天に到り地さへゆすれ父母がために諸人のために

三十あまり二つのかたち八十種と具れる人の踏みし跡どころ稀にもあるかも

善き人の正目に見けむ御跡すらを我はえ見ずて彫りつく玉に彫りつく

丈夫の進み先立ち踏める跡を見つしのはむ直に逢ふまでに正に逢ふまでに

丈夫の踏み置ける跡は石の上に今も残り見つつ偲べと永く慕べと

これの世は遷り去るともことはにき残りいませ後の世のためまたの世の爲
この御跡を廻りまづれば跡主の玉の装ひ思ほゆるかも見る如もあるか

佛足石歌は、その殆んどすべてが短歌の形式に対してリフレインの様に最後の句がついてゐるのに比して、喜志子夫人の旋頭歌は、最後の句が充実してゐる。こゝに詩形としての問題がある。(二十二年六月)

12 画展逍遙(昭和二十二年)

アメリカ児童画展。豊富な資材を縦横に駆使して、色彩にも構図にも画面の大きさにも、材料にも、技巧にもすべてのびくとして独創的である。その色彩と線と輪廓は、既成の絵のそれを模倣したものではなくて、生の自然から子供達が自分でちかきりとしてきたものだ。此の独創的パイオニア的精神の閃きは現代アメリカの力源であると思つた。絵を見ながら辿つてゆくと、使用された絵具やブラシなどの陳列棚があつて、その前に子供達が一杯になつてのぞいてゐた。勿論、資材の豊富さも、此の優秀な絵画の生れる条件ではあるけれども、それを我々の芸術の貧困の言譯にしてゐてはならない。ゆたかな独創的精神の閃きに身をふれるべきだ。画題にパイオニアの生活の多いことも注意された。

近代日本洋画展。さして期待して行つたわけではないが、国立博物館の表慶館の入口を入つて、明治初年の洋画陳列の第一室に足を踏み入れた時、僕はその中にたちこめる本物の芸術の雰囲気に圧倒されてしまつた。高橋由一の「本牧海岸」にはじまる、明治諸大家大作の重厚豪華な油絵の色彩、或ひは



「海の幸」(部分)

水彩小品の清純な抒情詩的敘景、スケッチ・ブックに書きとめられた鉛筆画の流動する線と明暗。そのひとつひとつが、それぞれ作者の永遠の感激をつたへて息づいてゐる。僕は、しばらくぶりで本物の絵を見るよろこびに眼がうるむのを覚えた。そして、明治の祖先の歩いた苦難の、しかし憧憬に充ちた道を想つた。雅楽千年の伝統に立つ人々が洋楽を撰取して、不朽の明治唱歌を作曲したやうに、この人々も西洋画に学び、それに心酔し——殆んどすべての人が洋行し、西洋の自然と人物とを題材にして——明治の精神を描きとめたのである。

明治十五年に生れて四十四年に三十歳で死んだ青木繁が二十二、三の歳にあの「海の幸」と「海景」とをのこして、天才的短生涯を数篇の絵画に永久化したのは、明治の楽壇に於ける瀧廉太郎の生涯さながらであつた。ひとつひとつの絵についてはこゝで述べてゐる暇がないが、明治の祖先が絵の道で歩んだ精神は、世界の絵画の大海に堂々と乗り出した雄大な独創的精神であつたことがわかる。絵画の専門的研究者はこれを模倣とみるのであらうが、幸ひ僕はずぶの素人だから、こゝに本格的芸術の大道を見るのみであつた。模倣といふには余りにも普遍的であり、また或ひは青木繁のやうに余りにも個性的である。ともあれ、僕はこの明治初年から明治の中期頃までの日本洋画の開拓者の絵に涙を流し、真の芸術の伝へる、あの、身を包む無限の雰囲気の中にひたつたのである。さうして、芸術は量ではないとひとしと痛感した。

これから大正に入つて、藤島武二、岡田三郎助、満谷国四郎、岸田劉生となると、絵は技術的な意味で個性を強め、同時に西洋画の影響が辿られるやうになつてくる——と見えた。こゝにひとつの問題を感じとつたが、絵の素人の僕にはまだよくわからない。終りに画展陳列の大家の名を摘記して、本論の根拠とするとともに、画展に対する感謝のしるしとする。

高橋由一、川村清男、浅井忠、原田直次郎、青木繁、藤島武二、岡田三郎助、満谷國四郎、中村彝、岸田劉生、佐伯祐三、牧野寅雄。

13 宗良親王『李花集』研究ノート（昭和二十二年）

竹間月といへる心を

窓ちかき竹の葉わけにもる月の影さだまらぬよはの秋風

秋の夜更、机辺にもれくる月光であらうか、畳に、障子にうつるまきやかな月の光であらうか、窓前の竹の葉ごしにさす月の光が、秋風に吹き乱れる竹の葉のそよぎの影を落して明暗参差する。——作者の心は、一瞬もとまらぬ光と影との参差点滅の中に没して、とまらぬ自然の動きをありのまゝに表現しようとする。——この時そこに表現されるものは作者の情意であり、境涯である。

「窓ちかき竹の葉わけにもる月の」といふ上の句は、概括的表現をとつて複雑な光景を緊密な言語に綜括し、「影さだまらぬ」といふ、ありのまゝの、うちつけのコトバの中にとけこんでゆく、この概括

的表現から一転して「影さだまらぬ」とうたひあげたまふその御言葉は、そのまゝ漂泊流転の御生涯の述懐となつて、親王のみ声をいまにきゝまつる思ひあらしめる。精微な観察と柔軟な感受とは精妙な表現と照応して作者の尊貴なたましひをしめす。この一首に、宗良親王漂泊孤忠七十年の御生涯の懐ひが圧縮されてゐるやうに思はれるのである。

次の歌もかうした、精微な自然観賞のうちに動乱的悲劇的御生涯の閃く御歌である。

遠江國に侍りし頃、月歌とてよみ侍りし

湊江や夕しほ深くなるまゝに月にぞ浮ぶうらの松ばら

静止した自然ではない。湊江のうらの松原が、「夕しほ深くなるまゝに月にぞ浮ぶ」のである。ひたと寄る夕しほの深まるとともに、光をます月の光に浮んで、浪とともにゆれただようである濱松原のかけ、——薄明の月光と波にうかぶ松影の無限の動揺との中に、作者は無限進行の人生を味つたのである。

この自然観賞に於ける精微な観察は、作者の情意の緊張と現実追求の強靱な意志のちからを示すのである。それはまた、複雑な人生の関連をそのまゝに理想の中に統一してゆくシキシマノミチの真髓を示して、動いてやすまぬ自然をさながらに正確に表現する、不撓不屈のたましひを示すのである。このやうにして親王は、その数十年にわたる孤忠漂泊の悲劇的御生涯にたへぬかれたのではなからうか。稀有深刻の御体験が親王の詩作のライト・モチーフである。とともに、詩作が親王の「無疲倦不断戦闘意志

の源泉」となったのではなからうか。

御歌の表現過程をしのびまつるとき和歌は親王にとつて宗教であつたやうに拝されるのである。

嵐にまよふ浮雲も我が身のよそならず覚え侍りしに

吹きはらふ嵐をいたみ中空にうきたつ雲は我が身なりけり

「嵐をいたみ」と、動乱の時代的環境の中に悲劇的運命を荷ひ給ふかなしきみ心を暗示し給ひ、「浮き立つ雲は我が身なりけり」と強くを、しく言ひ放ちたまふ、起伏ををさめてひとすちによみくだしたまふ強きしらは、悲痛の運命に随順して撓まぬを、しき奉公の御精神の律動である。

都を出でて後は時の間も安き心地なくて

世の中の浪のさわぎにこぎ出でしあまの小舟ぞ寄る方もなき

（宗良親王の御生涯ならびに李花集を中心とする御歌については、川田順氏『定本吉野朝悲歌三部作』（吉野朝の悲歌、宗良親王、吉野朝の悲歌続篇）の、博綜精緻な研究に詳細である。

(14) パイオニア！ おゝパイオニア！

W・ホイットマン

(昭和二十二年訳)

集れ日焦けの面々よ

順序正しくならぶのだ、

おのおの武器をあらためろ。

ピストルもったか？

。とき刃の斧は？

パイオニア！おゝパイオニア！

こんなところに

うろうろできるか？

おい、前進だ、危難をおかして。

ぼくらは若い、鉄腕人種だ、

みんなぼくらによりかゝる。

パイオニア！おゝパイオニア！

われらは無窮の仕事をとって

おう、お若いのに、西部の若者、

永久の重荷と教をになふ。

はやるをおさへ元氣いっばい、

パイオニア！おゝパイオニア！

あふれる男子のほこりと友情。

すべての過去をうしろにのこし

しかとこの眼に、西部の若者、

われらのいづるは新たなの世界、

真先かけて踏みゆく見たぞ。

力いやまず変化の世界、

パイオニア！おゝパイオニア！

生き生きとかたく我らにはにぎる

労作の世界、前進の世界。

年よりたちは立ちどまったか？

パイオニア！おゝパイオニア！

海のむかふでつかれてくちけ

かれらは首垂れ教をとちるか？

崩るゝ岩角投げうち投げすて、

パイオニア！おゝパイオニア！

懸崖降り峡路ぬけて

けはしい山の上高く、

——征服しつゝ、固守しつゝ、

をゝしく、危険をおかしつゝ、

未踏の進路をすゝむのだ。

パイオニア！おゝパイオニア！

原始の森を伐りたふし、

河川をせきとめ大地を掘りたて

鑛山ふかくぶちつらぬいて

広い地表を測量し

未開の土をすき返す。

パイオニア！おゝパイオニア！

パイオニア！おゝパイオニア！

コロラド男だ、われわれは、

巨大な峯から、ロッキーマンから

高地の草原、鑛山、溪谷、

野獣のあと追ふ径から來たのだ。

パイオニア！おゝパイオニア！

ネブラスカから、アーカンサス

から、

中央内陸人種だわれら、

ミッソーリからだ、大陸の血を

身ぬちにまぜて。

南部すべての、北部すべての、

戦友の手をすべてにぎつて。

パイオニア！おゝパイオニア！

パイオニア！おゝパイオニア！

おう、無敵の無息の人種！

おう、最愛のこよなき人種！

すべて

いとしくわがむねうづく！

おう、かなし、だが心はをどる、

すべていとしく恍惚となる。

パイオニア！おゝパイオニア！

前へ！前へ！密集部隊、

挙げよ、偉大の母なる主婦を、

やさしい主婦を、すべての上に、

み星のやうな主婦をふれ、高く、

(下げよ、諸君の頭をすべて)

挙げよ、牙ある好戦の主婦、

きびしく、

平然、武装した主婦を。

パイオニア！おゝパイオニア！

見よ、わが友ら、快男子

背後の群に屈しちやならぬ、

千年万年重なる過去の

幾百万の亡者の遊面

背後にせまり

われらをうながす。

パイオニア！おゝパイオニア！

前へ！前へ！密集部隊、

前へ！前へ！密集部隊、

前へ！前へ！密集部隊、

パイオニア！おゝパイオニア！

つねに待機の加勢はつゞく、
死者のすきまをたちまちみだし
戦ひをこえ、敗北をこえ

つねに

動きてとゞまることなく。

パイオニア！おゝパイオニア！

おゝ、

進みつゝたゝかひたふる！

たふれ死すべき

われらいくたり？

死期が来たのか？

さらば進軍途上こそ

こゝこそわれらの死場所だ、

すぐにたしかに

ギャップはみちる。

パイオニア！おゝパイオニア！

ありとあらゆる世界の脈搏、
かれらは脈うつ

われらのために、

西部の動きに

しらべをあはせて。

たゞひとりのはたもろともに

確乎と前へすゝみつゝ

すべての脈搏

われらのために。

パイオニア！おゝパイオニア！

博綜多彩の人生儀列、

すべての形、すべての見もの、

持場について働く人々、

海の人々、陸の人々、

すべての主人、奴隷とともに。

パイオニア！おゝパイオニア！

あはれすべての黙たる愛人、

獄の囚人、悪漢、真人間、

よろこぶ人々、かなしむ人々、

生きている人々、死にゆく人々、

(ありとあらゆる人

もろともに。)

パイオニア！おゝパイオニア！

ぼくもまたわがからだと霊と

われら——奇妙な三・一体は

道草しながらさまよひすゝむ

追ひ迫り来る亡霊どもに

とりまかれつゝこの岸を。

パイオニア！おゝパイオニア！

見よ、驚進する、ころがる地球！

見よ、

めぐりなるはらからの天球、

むらがる太陽、恒星すべてを、

すべてのまぶしく輝く日々を、

夢あまたもつ神秘の夜々を。

パイオニア！おゝパイオニア！

これらの成るはわれらより、

かれらはわれらとともにある。

すべて世に

不可欠の仕事せむとて

後なるものは胎児の姿で

われらの背後にまっつゑる。

われら今日先頭きつて、

人の旅路を清めてすゝむ。

パイオニア！おゝパイオニア！

おう、おまへたち、西部の娘ら、

おう、若い娘ら、としまの娘ら、

おう、おまへたち、

母たち妻たち、

離れてはならぬ、この列に

かたくむすんで、動くのだ。

パイオニア！おゝパイオニア！

大草原にひそむ詩人たち！

（死んだ他国の詩人は休めよ、

君らは仕事を終へたのだ。）

やがて諸君はうたひくるのだ、

やがてわれらの詩人は立つて

われの中を歩くのだ。

パイオニア！おゝパイオニア！

甘い喜びのためではない、

クッション、スリッパ、平和や

学問のためでもないぞ

安全な富、飽きあきする富、

気楽な慰安は、われに不用だ。

パイオニア！おゝパイオニア！

大食漢は飽食するか？

でぶの眠ぼけは眠つてゐるか？

やつらは戸を閉め

かんぬきかけたか？

でもよし、

われらは粗食に甘んじ、

大地にしいた毛布にねるのだ。

パイオニア！おゝパイオニア！

はや日は暮れたか？

過ぎ來し道は辛かったか？

われらは途上にくづをれて

居眠りをして立止つたか？

よし、このすぎゆくひとゝきを

君らが君らの進路に立つて

すべてを忘れて眠るをゆるす。 かなたに夜明けを呼び醒す、
パイオニア！おゝパイオニア！ きけ！高く朗らかに パイオニア！おゝパイオニア！

高なるひゞきを、
〔草の葉〕渡鳥篇）

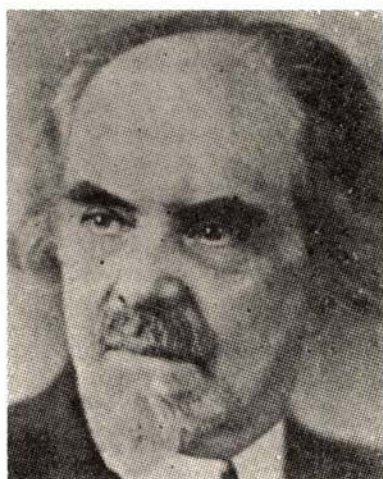
——ラツパの音のひゞくまで。 早く！軍の真先に！

遠く、遠く、 早く！汝が場所につけ！

15) ベルジャエフについて（昭和二十二年）

ニコラ・ベルジャエフ『ロシア革命』（英訳）。著者は最近病没した亡命ロシア人、長くフランスに在つて特異な文明批評家として知られた宗教思想家。本書は「ロシアの宗教心理と共産主義無神論」「共産主義の宗教」の二篇から成り、共産主義が畢竟宗教の代用物であることをロシア民族の宗教思想史に照して明らかにしたもの。マルキシズムはロシア人にとつてその宗教的渴望をいやす反宗教的宗教であつたといふのが彼の結論であるが、僕が特に興味を覚えたのは、マルキシズムが他ならぬロシアに最初に移入されていつたその思想的経路の分析である。著者はロシア人として、亡命の悲運とおのが祖国のいたましい革命の体験から、祖国の根源的な精神的再建を志して近代ロシアの思想的遍歴の分析へと向つたのである。その一部を摘訳してみよう。

「十九世紀のロシア思想は、ドイツ理想主義にはぐくまれてそのテーマを採用し、独自の方法でそれを発展させた。それは根のない思想で、この欠陥は国民的な性格であつた。それは、ある組織された



ニコラ・ベルジャエフ

してそれを何か絶対的なものに変へてしまはうとする傾向、相反する極端に走る傾向、奇妙な禁欲主義、世俗的な善とブルジョア道德に対する軽侮、人間生活就中社会生活に正義を実現しようとする熱狂的要求。人々はかうした性格が全く矛盾した諸傾向の中にあらはれてゐるのを認めることが出来る。

大体以上のやうな調子で、ロシア正教からロシアのニヒリズム、無神論への發展、次いでそこからマルキシズムへの飛躍といふ思想的過程を分析したものである。これを読むとロシア革命が突発的事件ではなく、ロシア国民の精神的歴史の連鎖の痛ましい一環であることが分る。稿を改めて紹介したい。

文化形式を夢想しうるだけであつたのだ。」

「十九世紀のロシア文化知識階級の精神的組織の中には、その後の發展の性格を特徴づける数々の性格が現はれた。同時代の生活からの遊離、支配者からも民衆からも離れた一階級としての深淵の意識、宗教的信仰からはなれて、あるときは宗教的にあるときは社会的にむかふ終末論的感情、悲劇的結末の期待、極端主義、歴史的發展の段階と漸進的性格に対する無理解、相対的な価値を否定

16 共産主義私見——その克服のために——
(昭和二十四年国労組合資料)

一

「一個の怪物がヨーロッパを徘徊している、共産主義の怪物が。」——云うまでもなく、『共産党宣言』の冒頭の一句である。一八四八年、今から約百年前のことだ。このマルクスの脅迫的な一句をもじって、近刊アメリカ国務省編纂の『共産主義の思想戦略』（邦訳時事通信発行）は、冒頭、「今日世界を一個の怪物が横行している、共産主義の怪物が。」と置いた。正に今日、マルクスの亡霊が全世界を徘徊している。

百年も前のドイツ系ユダヤ人マルクスの経済観と社会観と歴史観とが、今もなお共産党員の金科玉条として固守されている。マルクスの言葉は教祖の言葉となり、マルクスとエンゲルスの著作は経典となった。そしてこのマルクス教は数多いたましい殉教者を生み、篤信の教徒は共産党員として共産主義革命のために捨身献身の奉仕的生涯を送るのである。

ロシア共産党に追われて西欧に亡命した哲学者ニコラ・ベルジャエフ (Nicholas Berdyaev 一九四八年歿) が、その名著『ロシア革命』(The Russian Revolution 一九三一年初版)の中でくりかえしているように、正にマルクシズムは一の宗教である。たゞこの宗教は神を認めない。そればかりではない、「宗教は民衆のアヘンなり」と言つて、あらゆる既成の宗教を否定した。しかし、人は宗教なしに生きることが出来ないから、一切の宗教を否定したものが自ら宗教の位置にいたのである。ベルジャエフ

の言葉をかりれば、「共産主義は一の新しい宗教を主張するところまで前進してくる。そして、若し共産主義が実行に移されるとするならば、それは宗教的活力と宗教的信仰の威力の偉大な蓄積を必要とするのである。そうして、正確に見て、共産主義はそれ自身一つの宗教であるからこそ、他の一切の宗教を迫害し、宗教的寛容をもたないのである。共産主義的無神論は還俗主義や自由主義と何一つ共通のところがない。共産主義は自己自身唯一真実の宗教であると考えて、何人もその外側で生きることが許さないのである。

それは、神の選民としてのプロレタリアートに対する宗教的崇拜を強要する。それは、神と人間とに代えるために呼びよせた社会集団というものを礼拝祭祀する。その社会集団こそ唯一絶対の、道德的判斷及び行為の基準であるとし、それが一切の正義と真理とを表現し包含するとする。共産主義はキリスト教でもなく人道主義でもない新しい道德性を創り出す。それは、その正統的な神学をもち、それ自身の礼拝(例えば、レーニン礼拝)をきずきあげる、またそれ自身のシンボル、お祭り、「赤の洗礼」、「赤色葬儀」をつくる。それは、すべての人の義務となる独断的教義とシステムをもち、異端を暴露し、異端者を破門する。」(筆者訳)

共産主義運動が純真な青年層に燎原の火のような勢いでひろがってゆくのは、『資本論』の理論よりも寧ろこのマルキシズム運動に内在する宗教的な性格と熱情とそこに立脚する公式理論の安易さによるのである。そして、キリスト教が宗教と政治とを全く別の二世界とするのに対して、マルキシズムはすべてを政治一色でぬりつぶそうとするから、マルキシズムはその根本的な性格が政治運動である。だから、共産主義運動は、心理的には宗教的であり、外面的には政治運動である。これが、無信仰の現代

人の宗教上の不安と政治経済上の不平に乗じて、全世界にひろがるのである。

こう考えるとマルクスの理論——唯物史観、階級闘争論、剰余価値説、等々——のまちがいを指摘するだけでは、マルクシズム運動を克服することは出来ない。ベルジャエフが指摘するように「宗教心理が裏返しになった共産主義の反宗教心理」を克服するためには、まず第一に、マルクシズム運動が現代の不安と危機とに対応して勃興した一種の新らしい似而非宗教であることを認識しなければならない。政治的な抑圧や迫害は、マルクシズム運動を克服しつくすことは出来ないのである。それは却って彼らの宗教的熱情を激化し、その対立意識を強めるにすぎなかった。

この意味で、われわれはマルクシズム運動の精神的な内容を、われわれ自身の問題として真剣にとりあげ、その正邪真偽を判断し、現代文明の不安と危局に対処する真実の信仰を生み出さねばならないのである。再びベルジャエフの言葉をかりるならば、「ロシアの社会主義が政治的な問題でなくて宗教的な問題であり、神の問題、永遠の、あらゆる人間生活の合理的再建の問題であるというあの事実に対して、ドストエフスキーほど深い洞察をもつたものはなかった。社会主義は、広く云えば、十九世紀ロシア・インテリゲンチヤの殆んどすべての支配的な宗教的信仰であった。それはあらゆる道德的判断を決定した。就中それは感情であった。サン・シモンやブルードンやカール・マルクスをロシア人が受け入れたのは宗教的であった。彼らは同じやうに宗教的な精神でマテリアリズムに飛びついたのである。」このマルクシズムの宗教的な性格については、ベルギーの社会学者アンリ・ド・マンもその名著『マルキストの精神的自伝』の中で述べている。またベルデイエフの見解はカソリックによって支持され、例えば邦訳カソリック・ダイジェスト一九四八年十二月号「共産主義は宗教か」の如きと同じ見解が示され

ている。

日本に於ても大体同様のことが云えるのであって、明治大正昭和とつづく三代の国民思想の歴史の中で、マルクシズム運動は独自の地位を占め、大正末期から昭和へかけての所謂大学出を中心にするインテリゲンチヤ・ジャーナリズムで最も優勢な勢力を構成したのである。そうして西洋文化の吸収がキリスト教の移入を伴わなかった間隙に乗じて、既成の宗教を離れた日本の知識階級の新しい「信仰」となったのである。これが戦後再び猛烈な勢いで活動をはじめたのは、戦前戦中に加えられた弾圧によって強められ蓄積され潜在したエネルギーが爆発し、戦後の変乱、殊に戦時の熱狂的な超国家主義の崩壊にともなう不安と信の喪失とに対して、その全体主義的傾向に代るものとして立ち現れたからであろう。だから、私は、いまの日本のマルクシズム運動もやはり宗教的だと考えている。そうして、その克服には、この認識が大切だと思うのである。

二

私はこの短い論説によってやゝこしいマルクス理論の理論的な批判を行わうとは思わない。それにはそれぞれの専門的な批判が既に行われているのであって、例えば小泉信三博士の『マルクス死後五十年』とか、山本勝市博士の『計画経済の根本問題』とか、川合貞一博士の『マルキシズムの哲学的批判』等々、乃至は、近刊の池田賤男著『社会学者のマルクス観』（欧亜社）の如きは、各国社会学者のマルキシズム批判の紹介と共に、諸外国のマルキシズム批判の重要文献が列記されている。日本のジャーナリズムでは殆んど故意にと云つてよい程等閑に附されているマルクシズム批判の学術的作業は、先進諸国では既に結論的段階に達しているらしい。そこで理論闘争は稿を改めるとして、私はこゝでは、最も常識的な、

しかしぬきさしのならぬマルクシズムへの疑惑を、ひとりの勤労者としての立場から述べてみたいと思う。

戦後われ／＼の耳目にうつってきた新らしい世界のひとつにソヴェイト・ロシアの現状がある。ソ連は、今日米英その他で「鉄のカーテン」と呼ばれている程の国であるから、その実状は戦争中乃至戦前でも殆んど我々の察知を許さなかつた。ひとつには日本軍閥が世界の真実の報道に制限を加えて、事実をわれわれの目から奪つていたということもあるが、殊にソ連の実情については、われ／＼は殆んど知るところがなかつたのである。

これはアメリカについても同じことが云える。ジャズの国享楽の国として軽蔑の念をもつて報導されていたアメリカ観が根本的な誤りであつたことを、われ／＼はアメリカ占領軍の進駐によつて知つた。

この目で見たアメリカ人とアメリカ人を通して考えられるアメリカという国とは、決して単なる物質文明万能の享楽主義の国ではなかつた。

それと同じように、復員や引揚の同胞の語り伝えるソ連の実情は、マルクスの理論にうたわれているような地上の天国ではなかつた。今日マルクスの共産主義理論が比較的忠実に行われている国といえは、それはソ連をあげるより他にない。だから共産主義の理論を検討するにあつては、ソ連の実情ほど参考になるものはないわけである。而も、私の耳にした最も確実な体験談によれば、ソ連の実情は共産主義の論理的な帰結に他ならないものである。人によると、ソ連の共産主義は歪曲されている、寧ろそれは純正な共産主義への過渡的段階であつて、現在のソ連の混乱は終局に於ては清算され、マルクスの理論通りの地上の天国が実現されると説く人もある。簡単に云えば、ソ連の混乱はマルクスの理論が

まちがっているからではない、それはソ連をとりまく資本主義国家が悪いのだ、というわけである。しかし、それにしては、ソ連の实情は、余りにも共産主義のまちがいを示し過ぎてるように考えられるのである。

だから私はこゝで、共産主義の理論とソ連の实情とを対照してみようと思う。若しそれが対応しているならば、日本に於て共産党が政権を握るということは、とりも直さずソ連の实情に近い状態にわれ／＼がおかれるということに他ならないのである。それに堪えうるだろうか？

三

さて、私はこゝでこの小論文をお読みの方に、ソ連についての見聞をおもひおこしていただきたいと思う。アメリカ軍の進駐と、日本人がソ連の各地に連行されて実際のソ連を見たという二つの体験は、これからの日本人のものゝ考え方に計りしれない作用を及ぼすだろう。殊に後の体験は現代の世界の思想問題を解決するかえがたい鍵となるに違いない。

さて、戦後、連合国に降服した日本人が満州やシベリヤや蒙古やその他の土地でロシア人によって加えられたいたましい凌辱や残虐の血涙の哀話については、しばらくおこころ。また戦後四年の今もなお数十万の同胞がソ連に抑留されたままであるということについても、こゝでは触れまい。

「時計をとられた」という。これは復員引揚者の殆んど異口同音に語るところであった。これから考えてみよう。それは時計だけではない、鉛筆、万年筆、衣類等々民衆の日常消費物資の極度の不足の問題である。この事実は恐らく共産党員と雖も認めざるを得ぬところであろう。ソ連の実際についての見聞をわれ／＼が卒直に受け入れるならば、敗戦後の窮乏の日本人の生活水準の方がむしろソ連民衆の生活

水準よりも高いかと考えざるをえない程である。勿論、物質的生活の利便が文明の尺度であるとは考えられないから、生活水準の高低で民族の優劣を判ずるなど馬鹿なことだ。

だが、マルクスの経済理論から云うと、この馬鹿なことも案外馬鹿にならないのである。何故ならマルクスは、資本主義の行詰りの結果として必然的に革命が起り、その革命によってプロレタリアート独裁の共産主義社会が訪れ、資本主義の桎梏にあえいだ生産力は解放される、と説いたからである。

若しこの理論が真実ならば、共産主義革命は米英の如き高度の資本主義国家に起る筈であつた。それが何故ロシヤの如き後進国に起つたのか？ ということは問わないとして、赤色ロシヤは果して、マルクスの云うように生産の飛躍的な上昇を来したか？ という点、その答は、ソ連民衆の窮乏の日常生活の事実ということになる。しかし実際に於てはソ連の生産力はその大部分が軍備に投入されたのであつて、ソ連民衆の耐乏生活はその反面にすぎない。しかし、それならば、ソ連と、資本主義国乃至マルクシズムの所謂帝国主義国との相違点は一体何なのか？ 且つまた、一般民衆の日常生活を各国に比を見ぬ程度にまで切りつめる理由とするものは、果して何なのだろうか？ それが、将来の世界総赤化後の共産主義世界の夢だ、とするならば、その理想主義は帝国主義侵略と何が違つているのであるか？ ともあれ、われらの見聞するソ連民衆の日常生活の困窮はマルクスの理論からはわからない問題のひとつである。

そこで、次に分配の問題が出てくる。共産主義革命によつて飛躍的に増大する筈であつた生産が、革命後三十年経ても、資本主義の生産の上昇率に追いつけないことは一応別にして、共産主義の得意とする「平等の分配」の問題はどうなつていゝのだらうか？ 一般に資本主義は生産中心の理論であり、社会

主義は分配の理論である、と云われる。しかし生産と分配とは離すことが出来ないので、分配の社会化はひいて生産の社会化に及ぶのである。その結果は如何なるものだろうか。

先ず共産主義理論を實行しようとして起つた生産の不足によつて、分配すべき物資の供給が極めて乏しいのであるから、それを平等に充分に分配することは出来ない。自由主義経済の社会ではこの分配の尺度になるものは物資の価格であるが、社会主義計画経済の下では何だろう。ソ連ではこれを労働の量でとつた。だから労働時間及び量の多寡に応じて物資の分配を行うことにしたのである。例のノマルと云うのがそれだ。その日その日の食糧が、その日その日の労働の時間量によつて配給されるという生活は自由主義経済の社会では最低の労働生活である。これが国全体の勤労生活であるということは、文字通り、国民のすべてが最低のプロレタリアになるということに他ならない。

今日、われ／＼は金がなくて毎日苦しんでいるが、労働基準量に達しようとして毎日苦しむのよりはましかも知れない。金は借りることも出来るが、労働は借りることが出来ない。病気が直ぐ死と結びつく世界は恐ろしい。そしてこの分配を取扱うものは、これは誰か人間がやらなくてはならないのだから、分配を受ける者の生殺与奪を掌中に握ることになる。而も自由主義経済の社会では、政治と経済は一応分離するのを立前とするから、政治的権力は直接経済活動に作用しない。だからそこでは、政治的権力と経済力とは一応別個のものとして立っているわけである。つまり、金権政治とか賄賂政治などが行われる余地があるのである。徹底した計画経済の社会ではその余地はない。政治は即ち経済である。政治的権力は同時に経済力を意味する。それは例えば工場を支配し、同時に工場の従業員に日常の物資を支給するのである。丁度、商業機能の欠除した封建制社会の大名の如きものである。

そこで、この支配者、政治力の把持者が誰かという問題になる。普通これを国家だということで、計画経済というものが金持の身勝手を抑えて、国民全体の利益を計りうるように考えさせるのであるが、その場合の国家とはそもそも何ものだろうか？ それは、物資の生産と配分とを一元的に計画統制するものでなければならぬ。五カ年計画とか Gosplan というのがそれだろう。しかし、委員会も役所も、結局は人間の構成しているものだ。だから、統制の主体になる国家というものは、国家を代表する誰かということになる。普通これは官僚が扱うのである。

ソ連でも例えば、工業生産の政治的指導の機構については、ヴィクトル・グラヴチenko「私は自由を掴んだ」(リーダーズ・ダイジェスト四七年一月号に要約掲載)に詳しく書かれている。それはスターリン元帥の命令から、何々委員会、何々専門委員会等々を経て、各工場の生産責任者に至る大きな組織であるが、結局は、官僚の機構と同じである。また、ミシエル・コリアゴフの「共産党とトルストイ」(カソリック・ダイジェスト四八年十二月号)は、共産党の博物館管理の実情を報告することによって、この問題に答えてくれる。つまり、何人かがこのこの社会主義計画経済の社会の支配者にならねばならないのである。これが、まさに「国家と云われたもの」、実体である。つまり、「資本家の自由競争をモットーとして、生産や流通はたゞ商品価格の変動で調節されるのを原則とし、」マルクスの所謂「見えざる手」によって動かされる「無政府の生産」と非難される自由主義経済社会に代る共産主義計画経済の社会は、政府独裁経済の社会となり、つまり共産党の独裁経済となつたのである。この点に於て、共産主義はナチズムやファシズムと同じく、全体主義警察国家と呼ばれるのである。(W・C・ブリット「大地球そのもの」参照。)

そこで、マルクスの階級闘争理論によるプロレタリアの独裁ということは、事実としては、全国民をプロレタリア化し、その上に共産党の独裁を樹立するということになって、こゝに再び新しい且つ強固な階級が形成されたのである。つまり、共産党員と非共産党員という二つの階級が対立する。共産党員の団結の力は、恐らく會ての士農工商の武士の団結や、欧州貴族の団結にもまさるものがある。その力は更に政治的なものだけではなく、経済的な面をも支配し、科学も芸術も宗教も支配するのであるから、史上未曾有の強力な独裁権力ということが出来る。

一般民衆、殊にプロレタリアの飛躍的な向上を指向した共産主義が、事実には、共産党の独裁に終つて、一般民衆の生活状態の改善どころか、寧ろその搾取に立到つたということは、現代史最大の悲劇である。

しかも、在米ソ連研究家ダヴィッド・ダリンが、精密な資料にもとづいて立證するソ連の強制労働者が、千四百万人に及ぶというに至つては、そして、その中に日本やドイツの捕虜がいるということを書けば、何人も深い人道的なショックを与えられないではいられないだろうと思う。マルクスもエンゲルスも、恐らくはレーニンすらも予想しえぬことが起つたのである。強制労働者！それは、現代の奴隷である。(この問題については、前述ダヴィッド・ダリンの『ソヴェイト・ロシヤの強制労働』(David Darin: *Forced Labour in Soviet Russia*, 1946)その他、例えば、カソリック・ダイジェスト四八年十一月号「脱走記」「この犬を見よ」などに戦慄すべき情報を与えられている。)勿論、監獄の生活が恐ろしいものであることは各国同じであるとしても、千四百万の奴隷の存在を許す国家の成立には、何か異常な欠陥が認められるのである。

このような社会の形成にたえるためには、どうしてもその社会の支配階級にならなければならない。だから、共産黨員にとつては、共産主義革命は、政權の奪取となり、共産主義社会は彼らの樂園ともなりうるであろう。しかし、非共産黨員の一般民衆にとつては、たとえ生粹の労働者であろうと、マルクスの夢は、被支配者にとつての地獄である。殊に少くとも、共産主義に反対する者は、現代の奴隷にならなければならないということは、思想の自由の根本的な否定であつて、人類文化の進化に逆行する恐怖政治の再現に他ならない。支配者と被支配者がこのように懸け離れる社会の形成に、われ／＼は我慢することが出来るだろうか？

社会主義計画経済の社会に於ける個人の自由の問題、マルクスの宗教観、唯物史観、その他についてもなお考えてみたいが、それはまた機会をまつこととして、以上のやうな考えから、私はマルクシズムに反対である、ということ、しかしマルクシズムを克服するためには、その誤謬指摘だけではなく、マルクシズムの指摘する現代文明の欠点をも含めてわれ／＼の生きているこの現代社会の諸々の政治的、経済的、精神的欠陥の補填と改革の実現に、われ／＼自身が「生みの苦しみ」をなめなければならぬ、ということを云ひたい。そうして、実際に於ても、「働く者」の「働き甲斐のある」社会を創り出したいと思うのだ。まじめに一心に働く者が、独立した個人としての明るい生活を営むことの出来るやうな、そういう社会を創り出さなければならないと思う。そうした「生みの苦しみ」こそ、マルクシズムを克服しうる真の力の源泉となるに違いない。

引揚 列車

時ならぬ駅のどよめきあな悲し復員列車をむかふるそのこゑ

がう／＼と入りくる汽車をむかへたる人のどよめきおらぶににたり

歓呼とも号泣ともつかずいたましきどよめきあがる底ごもりつゝ

とまりたる列車の胴にしるされし復員といふ文字もいたまし

シベリア地区引揚と書かれたる列車の窓に人ものいはず

幾年のゆめをうつゝによるめきておりたつ人らさちあれとはに

人の名を大きく書きし旗たてゝあはれその名の人さがすらむ

おりし人むかへたつ人言もなくあひいだくらむそのこゝろはや

そのこゝろかつしのびつゝけがれたるいくさおもへばいきどほろしも

ためしなき民のなげきをとこしへにひそめてぞこの御代はながれゆく

(昭和二十四年三月三十一日)

17 こんなことがあった(日本経済専門学校の末ごろ) (回想記 昭和四十年頃記)

ドタ靴の思い出

いつだったかこんなことがあった。何かの用でぼくは久しぶりに東京駅におりた。ちょうど朝のラッシュアワーで勤め人の流れがプラットフォームをいそがしげにすすんでいって地下道への階段にすいこまれてゆく。その人の流れのあとから病気のからだをばこんでいたぼくは、ふと、その人たちの服装に気がついた。みんな立派な服装をしている。それにその靴の、それぞれに立派なこと。ぼくの靴といったら、海軍から復員した弟が復員の土産にくれた兵隊用の靴で、丈夫なことは無類の代物だが、重いゴム裏の靴だ。皮が丈夫なのでいつまでも痛まないから裏のゴムさえとりかえれば一生でもはけるだろう。どた靴というやつだ。そいつを引きずって歩いていて、その人の流れをみると、ぼくのような靴をはいているものは一人もない。と思ったたら、急に自分のはいっている靴が不恰好で重くて、こんな靴をはいている自分がみじめになった。

世の中が不景気だとか、戦後の困窮だとかいっているが、そんなのは口先だけで、実際この連中は困っちゃあいないんじゃないか。然し、あんな若い連中がそう裕福な事もないんだから、ああいふ連中は

全くの一張羅なんで、家にかえれば何ひとつもっているわけでもない。下宿か何かで、着たきりすずめなんだ。そう思ったらおかしくなって、おもわずひとりでニヤツとした。それで少しは腹の虫がおさまったけれど、この人の流れの見る人ことごとくがぼくのような靴をはいていないということは、妙に心にこたえた。そういうときふと心にうかんでくるうたがある。「くのため身をおもはずつとめてしなれのはてぞも何なげかめや」という自分のうただ。それを口ずさみながら、じつと人々の流れが階段にすいこまれてゆくのを見ていた時、ぼくの心にあるひとつの考えがひらめいた。

いまぼくはこうやってこの連中と比較してみじめになったりニヤツとしているが、要するにひとくらべているので、靴が変わったわけでもない。どだい、この、靴なんていうものが最近のものなんで、鎌倉時代なんかは、ぼくら程度のはみんなは、だ、だったに違いない。それにくらべれば、このおれのどた靴だって貴重品の部類で、いまこうやってみじめになっているこの自分を鎌倉時代においたら、服装だけは、頼朝にだって負けないかもしれぬ。

第一、鎌倉時代なんかに生れたら、こうやって生きていられたかどうかさえ問題だ。そう思えば文明の恩恵はほぼ平等だし、それにまた、いまから逆に六百年もたった人間から見れば、このおれもこのおれから見れば立派な人の流れも同じようなもので、その頃の未来人は、われわれがひどく不便な服装をしていた、とわれわれをあわれむだろう。そうかんがえたら気が楽になった。

人とくらべてよくよしても一生、しっかりと自分に根をおいてくらしでも一生だ。短い一生をひとに勝つことばかりかんがえてあくせくして、欲が欲を生む無限地獄にあえぐ人間が何と多いことだろう。ま、しかし、軽い、水の入らない靴の方がいいことはまちがいない。だからいまは、中古千円、舶来自

慢の赤靴をはいているから御心配なく。呵々。

三人だけの入学式

今度、戸田君（本学教授・現在東大講師）がやめるといのできいてみたらもう十年になるという。十年ひと昔というが、栄枯盛衰のこの十年間にはこんな場面があった。日本経済専門学校から四年制の大学を申請して認可されなかった直後で、一番苦しい時代で、四年制として募集した学生は、認可がおりなかったために志願をとり消してしまった。まだ短期大学の制度もできていなかったので旧制の専門学校の将来は不安そのものである。そこに応募する学生が少ないのは当然だ。定例の五月五日の入学式が迫ってきても志望者がさっぱり集まらない。私が教務課長とかいうことでやっていたので、いまはもう郷里に引退して悠々余生をたのしんでいる江畑さんに、入学式に集る新入生の予想をきいてみたわけだ。江畑さんが慎重に計算して十五人とふんだ。十五人なら入学式をやって、ぐいぐい押していって補欠募集で定員までもってゆこう、ということになっていよいよ五月五日の朝になった。

定刻になって教職員と在学生は集ったが、新入生が見えない。寮にいる、とか何とかで、呼びにいってみると三人だという。ともかく式場に入ってもらおう、ということでき式をやる教室に入れた。

行って見て、さすがのぼくもちょっとおどろいた。新入生が三人、一番前の机に、三人掛けて目白おしに並んでいて、そのまわりに、在学生の委員連中が、ずらっと立ち並んでいる。専門学校時代の三年生だからみな大柄で、いまの学部の学生くらいの貫録の連中が、新入生の三人を大事に抱えこむようにして立っているの、新入生はその圧力で三人掛けになってしまつて、よりそっているわけだ。どうに

もかっこうがとれていない。しかし、入学式だから延期だとか何とかいうわけにはゆかないので、強行するほかない。形のごとく式ははじめられずんでゆくが一向に気がのらない。本体が余り小さすぎるのだ。ちょうど戸田君の話す番になって彼はその巨軀を壇上に立たせた。

すぐ目の前の新入生に話をするわけだが、今度は上からかぶさるような形になって、そばで見ているはらはらする。ぼくは戸田君とは学生時代からの友人なのでどんな話をするだろう、と気をもみながら見ていたら、開口一番「諸君は幸福です」というのだ。何のことかとおもうと「私の入学の時は、三人です」という。そういえば、戸田君は東大の宗教学科だからそうかも知れない、とおもって、ぼくも思わずつりこまれて話をきく、入学生もやつと安心した表情になる、といったようなことで、その入学式はなごやかない気持のものになった。あとで学生もふえ、その三人の新入生は皆立派に卒業していった。戸田君がやめるといので、その日の雄姿をありありとおもいおこした。

第三編 日本経済短期大学一部二部

教授として (昭和二十五年～昭和三十年)



景 菊 文



第三編 日本經濟短期大学一部二部教授として

(昭和二十五年～昭和三十年)

(担当科目) 「日本文学論」「文学概論」 担当役職 教務課長

- (1) 秋ふけて(短歌)
- (2) 記念祭に寄す(日経短大校歌作詞)
- (3) 日経短大校歌(平山雅章作曲)

(1) 秋ふけて (短歌)

日本経済短大・文芸部『芸文』(創刊号)

(昭和二十五年十二月・片桐誠一編集兼発行人)より

まへことば——昭和二十四年秋ふけて私が病床にしたしむやうになった時、笹野、谷人先生から見舞にいたゞいた歌信の歌を、前に掲げて、私の病床詠を並べてみた。特に先生の歌を掲げたのはいつか紹介したいと思ひつづけてゐたので、この機会に発表させていたゞくのである。一年に近い病床生活の何よりのなぐさめとし、力とし、光と仰ぎ、葉ともいたゞいた師の歌のひとつを、このやうな形で発表するのは、自分ひとりでよんでゐるのが勿体なくて一人でも多くの人によんでもらひたいと思ふからに他ならない。私の歌に權威をもたせようと意図してゐるわけではない。呵々。目ある人は見るべし。

昭和二十五年九月三十日 興亜会館一隅にて 仰臥執筆。

秋ふけて

笹野 谷人

秋ふけて (短歌)

あきふけて風をいとへどしきしまのみちにつながる信はもえつゝ
この信をつらぬきとほすこゝろざしたわむべしやはあらしふくとも
一世を睥睨し天地の間を逍遙すとふ志おもふやまひのところに
たゞいまのいまのまさかにあふぎみる天てらすひかりきはみあらむや

とぼしき光をみつゝこの光みちわたるみ空に心はあそぶ

ふりつゞく雨

夜久正雄

ふりつゞく雨あしわびしかぜのせき長くつゞきて脊さへいたきに
なぐさむることもありやと窓によりてしみゝふりふる雨の音をきく
ふる雨の木の葉うつ音木々のしづくの地におつる音にぎはしきかな
樋はしる水のひゞきはよどみなく雨水よろこびをどるがごとし
目つむりてきけばにぎはし雨の音をゝぐながるゝ地にしみゆく

風吹けば

風ふけば梢の松葉かたなびき光りかゞよふ秋ばれぞらに
風のむた松葉は光りなびきつゝさわ鳴りおこる松風の音
自然はうつくしきかな風のむたかゞよふ松葉消えゆく松風
世のうきはしばし忘れむ秋ばれのそらにかゞよふ光のなかに
秋ばれの一曰しづかにくれはてゝさむき夜ぞらにきらめくむら星

明治神宮参拝

笛太鼓祭りのはやしきこえつゝのどかなるかな神のみそのふ
千よろづのはらから死して幾年ぞ今日のみまつりのどかなりけり
列なめてともにもうでしなき友らおもかげにたつこの参りちに
いまも目にありてかなしきなき友と並みゆくおもひ胸にあふれつ
日のもとの国のひかりのかぐやきし明治の御代はとほくなりいき

をりをりの歌

音もなく雲の端いづる月かげを抱きし吾子とともに見るかな

くろ雲を月はなるゝやかぐやきて無心にあふぐ吾子の面てらしつ（以上二首連作）

わが顔を両手にだきていつとなく眠りいりたる吾子のかなしき

井戸端にあふぐ竹むらむら竹のしだり秀枝にさす朝日かな

さしのぼる朝日まばゆくおしはなつ光のさぎり木むらをこめて

枝しげみ伐りおろしたる庭松の幹高々と夕月のさす

いちじろき星かげさむし夕月の光ほのさす松の梢に（以上二首連作）

宵々の月清けれど出ても見ず早ね早おき身をいたはりて

なかぞらの月のぞかむとあはれわれ廁のくもの巢にかゝりつる

朝鳥の来鳴くきゝつゝ目をさますならひほこるかふみもよまずして（以上三首連作）

(2) 日本經濟短期大學記念祭（昭和二十五年）に寄す

一

世は波風のさわぎつゝ、

暗雲低く迷へども

吾らは日経健男子

武蔵の野辺に集ひきて

天地にかゞやく人類の

文化の光あふぎつゝ、

明日の日本のいしずゑと

身をねり心みがくなり

三

広茫はてなき大陸に

怒濤さかまく海原に

疾風すさぶ大空に

ゆきてかへらぬはらからの

かなしき心しのぶとき

誰かむなく世ををへむ

ふるへ世のため国のため

吾らは日経健男子

二

見よ青春のあつき血を

聞け青年の雄叫びを

吾らは日経健男子

野末にのぼる武蔵野の

朝日のごとくさはやかに

清く自由にあらがねの

大地のごとくたゆみなく

明日の日本をきづくなり



ち — に か が や く じ ん り い の —
 ひ — の し の と く し さ わ や か に —
 な — の し こ ろ し し の ぶ と う き —
 わ — の し る し で ん と う の —



ぶ ん か の ひ か り — あ お り つ つ あ す
 き — よ く じ ゆ う に あ ら が ね の の た い
 た — れ か を か む な し く よ を お える ん よ ふ る
 ぶ ん か を か た る — ひ の ま る よ ま も



の に ほ ん — — の い し
 ち の ご と く — — — た く ゆ
 え よ — の — た め く に
 れ せ い しゅ — ん — ひ か



ず え と — み を ね り こ こん
 み え な と く — あ を す の に ほ こん
 の た め り — あ す れ ら は に ほ こん
 り あ り — わ れ ら は に は つ つ



ろ み — が く — な り —
 を き — ず く — な り —
 けい けい — ん だ — ん じ —
 けい けい — ん だ — ん じ —

日経短大校歌

(3) 日経短大校歌

作詞 夜久正雄

作曲 平山雅章

軽快に



1. よ は な み か ぜ の さ—わ ぎ つ つ —
 2. み よ せ い し ゅ ん の あ—つ き ち を —
 3. こ う ほ う は て な き た—い り く に —
 4. あ あ た た か い の よ—は あ け て —



あ ん う ん ひ く く ま—よ え ど も —
 き け せ い ね ん の お—た け び を —
 ど —と う さ か ま く う—な ば ら に —
 の —ぼ る あ さ ひ は し—ん せ い の —



わ れ ら は 日 経 け ん だ ん じ —
 わ れ ら は 日 経 け ん だ ん じ —
 し っ ぶ う す さ ぶ — お お ぞ ら に —
 ど く り つ の た み — て ら す な り —



む さ し の の べ に つ ど い き て て ん
 の ず え に の の ぼ る づ さ い き の の あ さ
 ゆ き し か の の え ら ん む さ し の の の あ か
 あ ら し の な か に ぬ ら へ は ら が え る の の か へ

第四編 亜細亜大学創立外史

ならびに歌論等

(昭和三十年代)



第四編

亜細亜大学創立外史ならびに歌論等（昭和三十年代）

（亜細亜大学教授として 担当科目 「国文学」「国語表現法」「研修」

役職 教務部長

- (1) 亜細亜大学創立準備の思い出
- (2) 『歌人・今上天皇』刊行ならびに出版記念会
- (3) 昭和三十八年歌会始について（補訂）
- (4) 武蔵野ところどころ（短歌）

(1) 亜細亜大学創立準備の思い出（昭和四十年記）

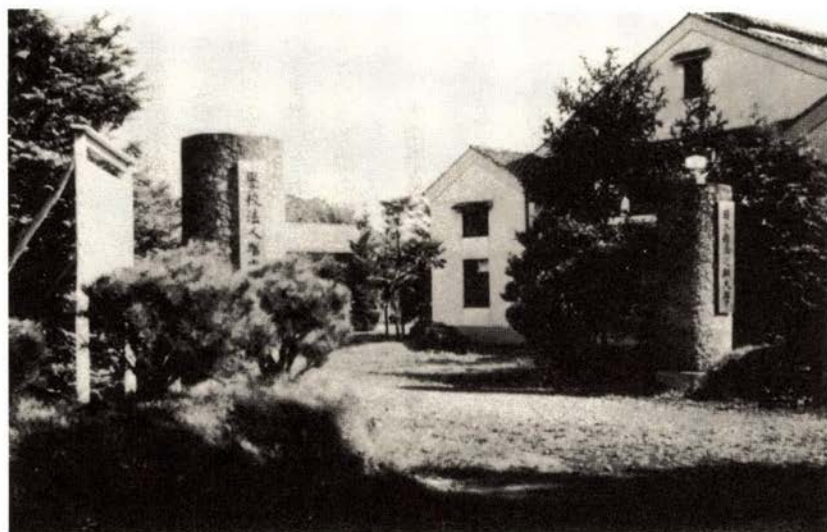
亜細亜大学創立当時のことを思うと、いろいろな場景がありありと目に浮んで来る。そのひとつひとつはみな重要な意味を持っているはずなのだが、その意味をはっきりと思いついたり、殊にそれが何年何月何日のことであったか、調べてみるひまがいまは無い。それでいまは、切れ切れの思い出を切れ切りのまま書いておくことにする。これらの一こま一こまはやがて、時間的に整理されて、亜細亜大学創立史という苦闘の史劇の中に組みこまれるであろう。

太田学長の亜大創立基本精神

太田先生の亜大創立の基本精神は、当時たしか趣意書のような形で出された記憶しているが、いま簡略なものとなって学則第一条に示されている。そして当初の構想は、当時の日本経済短期大学（経営科昼夜二部制）を昇格させて亜細亜大学政経学部政経学科とすにであった。文字通り太田学長の陣頭指揮で、施設経営関係は藤原繁部長が担当し、教学関係は私が担当した。

政経学部案から商学部案への変更

最初の政経学部政経学科案による教員組織については、佐藤通次博士が中心となって人選が進められた。しかし、文部省側の勧告があつて、そんな大型な学部組織では無理だということで、商学部商学科案



亜細亜大学創立当時の正門風景

に変更することになったのである。当時那須に
隠遁してをられた佐藤博士が度々上京、精力的
に教員組織を推進されたお姿が目につく。当時
佐藤博士の御紹介で、田辺忠男博士、木内信胤
教授、杉靖三郎博士たちにお目にかかったこと
などなつかしい思い出である。政経学部案を中
止したのは、勿論、日本経済短期大学経営学科
から最短距離の商学部商学科への昇格が、実現
可能の道であることを示唆されたからにはかな
らない。

お世話になった人々

商学部商学科案としての教員組織編成の上で
最もお世話になったのは細野孝一教授である。
それは、当時の文部省春山大学課長が元文部大
臣の太田先生の大学設置申請に非常な協力をし
てくださったので、春山さんが紹介してくだ
さったのである。細野氏の教員組織の中には、

大来佐武郎氏をはじめ後になってアジア経済研究の権威者として有名になられた方が多かった。春山さんのお名前を出したので、当時文部省の方々には随分御厄介をおかけしたので、他の方々のお名前をもあげておかねばならないと思う。教員組織関係で、担当事務官であった大学課の小島事務官はいうまでもない、太田学長の文部大臣時代の秘書官であった小林行雄氏が当時大学学術局長だったので、上の方から見ていてくださった。私の同窓の天城勲氏、小川修三氏などには、ずい分勝手なお願いをしたものであった。

無我夢中であった

総じて無我夢中だった。当時は、大学が出来るとそのかげに教務関係担当者が倒れるという話があるくらいであった。教員資格がほとんど始めて審査されるような状態であったから、誰がどうなるか見当がつかないのである。太田学長の御紹介で、橋爪明男教授をお迎えするためにお目にかかった時、教授が、誰がおれを審査するのだ、とおっしゃった言葉は忘れられない言葉だった。商学部教授として橋爪先生が名を列ねてくださったことは非常に重みがあったと思う。

亜大創立はそれ自体が夢であった

いずれ申請時の教員組織が亜大創立史のなかに発表されると思うが、私はその方々に改めて心からのお礼とおわびとを申し上げたいと思う。その方々は、給料がいくらだとかいう話なしに、亜細亜大学の趣旨に賛同して就任を承諾された方々だった。それは一面、無茶な話だったが、亜細亜大学を創立すると

いうことは、それ自体が夢であったのである。その夢に賛同してその方々は就任を承諾してくださったのである。

太田学長の識見

当時のことを反省して、文字通り感佩していることが二つある。二つとも学長に関することだが、一つは亜細亜大学の名称についてである。当時「亜細亜」という名前は、一般の関心の外にあった。アメリカとヨーロッパとが、関心の中心であった。亜細亜は戦争中の関心事と結びついていて、若い人からは好まれなかった、というより、関心が持たれなかったのである。ある有力な人が私にこの名称の変更をすすめた。私はそれを学長にお伝えした。政経学部を商学部に変更することを承諾された学長も、この名称の変更については断乎として反対された。そして、十年の後には必ずこの名称の価値が再認識されると予言された。事実はその通りであった。当時、亜細亜大学の学生募集広告を見て、アサイア大学と読んでわれわれをあわてさせたような受験生も、いまではなくなつた。世界の関心もまた亜細亜に集まっていると言つてよい。

もうひとつは、建学の精神として「自助と協力」をかけたことである。大学に建学の精神のあることを知らない大学生が増えてゆく状態で、はつきりとその建学精神を明示されたことは、大学の基礎を定められたものである。しかもその内容がわかり易く平明で深いものであることは、学長先生の識見のあらわれである。

創立当時の教員組織

創立当時の大学の教員組織を見ると、短大専任者として後藤実敏、関口甲子男の、両教授と私の三名があつて、それぞれ亜細亜大学の方が兼任になつてゐる。これはいつてみればこの三人で短大を支えたというような意味である。誰が見ても専任者にまちがいないという三人が短大に残つたのである。大学の教員資格と短大の教員資格には差が無いのだが、とかく世間は短大教員を低く見るので、このことはあとでこの三人が損をする事になつたので記しておくのである。

ないないづくしの時代

建物でも教員組織でも、今から考えればそれ程苦勞することも無いようなものだが、当時担当者たちが死ぬほどの思いで苦勞したわけは、一に経済的な見通しが立たなかつたからである。短大学生の数も少く、卒業生も戦後の不況の中でまだ苦闘している有様であつて、要するにお金がなくて、建物も建たず、教員を迎えることが困難であつたのである。

夏服の背広上着がなかつた

夏の間が申請準備で、暑い日々をかけ回っていた私は、夏服の背広の上衣がなくて、ワイシャツ姿でやつていた。いまだつたらそんな姿で人を訪問したら門前払いを食うが、当時はまだ戦後の不況時代でそれほど奇異にはみえなかつたらしい。それにしても亜細亜大学の教務担当者としてはあまりみすばら

しかつたと見えて、ある先生は、私とその先生と同じく東大出身者であることを信じられなかったらしい。学士会名簿を調べて、それに私の名前がないものだから、憤慨されたことがあった。私は東大卒業の時不精をして学士会入会の手続をとらずそのままにしてしまったので、名簿にはないが卒業者名簿には載っていて、まちがいに東大卒の文学士であるので、そのことを説明するのに骨を折った。そこでこの話に同情した会計課から上衣代というのをいただいて、夏服の上衣を買ったことがある。笑い話だが当時の実情である。

廊下とんび

廊下とんびという言葉を知った。文部省の誰だったか、私のことを廊下とんびと言っているよ、と知らせてくれた人があった。私はその言葉の意味を知らなかったたので、訊いてみたが、言葉を濁して教えられなかった。ほめられているとは思わなかったが、気にもしなかった。夢中だったのである。あとになって、近頃になって考えてみると、なるほどうまいことを言ったものだと思う。文部省の廊下を、あっちへばたばた、こっちへばたばた、うろたえてとび廻っているあわれなとんびというわけである。当時の私は正に「廊下とんび」だった。当時の職員諸氏にはみな厄介になったが、特に教務にいた関口甲子男現教授には厄介のかけ通しだった。私と一緒に行動してもらうことが多かったし、複雑な書類の作成からさしかへまで大半はその手を煩はした。稲葉現教授、杉浦現助教授が日常教務事務を遂行して私たちの申請事務担当者、後顧の憂い無からしめたことも大変なことだったと思う。学生部には佐藤忠吾現教授、神沢現教授が、文書課に梶村現教授がいて支援してくれた。

当時の私を支えていたもの

随分辛いことが多かったが、当時の私を支えていた考えは自分が亜細亜大学という日本の運命を開拓するひとつの大学を創造する仕事にたずさわっているという信念であった。荒廃した戦後の世界にひとつの大学を創造しているという確信が、私を支えていた。

教員招聘の方針

当時の国民思潮はいわゆる進歩的文化人のリードするものであって、マルクシズムに同調しないものはすぐ反動とか右翼とか呼ばれる有様であった。大学教員の相当数はマルキスト乃至その同調者であった。しかし亜細亜大学は私学で独自の見識に立つてよいはずであると考えたので、マルキシズムの信奉者ならびに同調者を教員として迎えることはしないという方針を取った。これは、教員招聘の範囲を狭めたことになって、当時は苦勞したが、その後二回の大学紛争に当って、大学を過激派学生の暴動から守る根本の力となったものである。(未完)

(2) 『歌人・今上天皇』(昭和三十四年初版) 刊行

ならびに出版記念会(昭和三十五年二月十五日)

初版まへがき

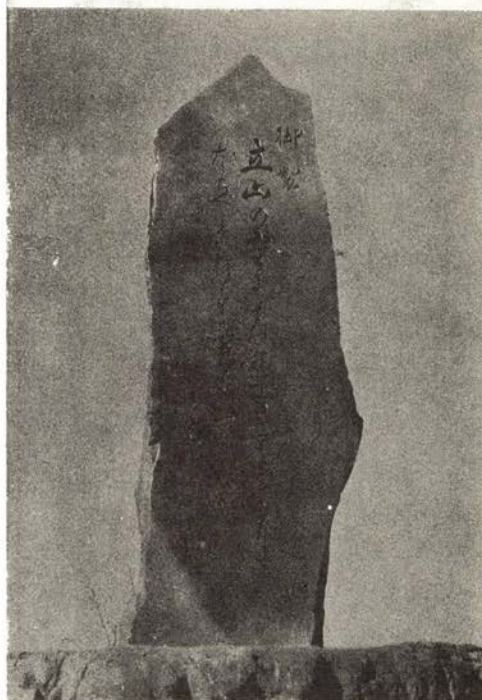
むかしぼくらは小学校の国語読本や中学校(旧制、いまの高等学校にあたる)の国語教科書の中で、明治天皇の御製を誦する機会を与へられたものである。戦時中は中学校の朝礼の時などに明治天皇の御製を朗誦する学校も多かった。しかし、その多くは形式的、儀礼的なものであつて、教育勅語と同じだが、直接に、強い感動をもつて読んだり聞いたりはなかつた。だから、明治天皇の御製といふと空虚なお説教の代名詞程度にしか考へられず、自分たちの思想とか生活とか、自分たちの心もちとは縁のない存在と考へてゐたわけである。しかも、形式的儀礼的には、最高の敬重を要求されたので、かへつて反抗的な気分をおこすやうな結果になつたのであつた。心から尊敬するものに対して深く頭を下げることは自然の表現だが、よくわからないものに強ひて頭を下げさせれば、その結果は、強い反抗的気分の生まれるのが自然で、ぼくらはどちらかといふと、かういふ気分の中で、昭和六、七年前後の青少年時代を送つたのである。

だから今になつて、御製といふものを直接よく研究することなしに、御製なんかつまらない、あれは誰か他の人が作つてあげたのだ、などと言つて、頭から反撥する大人が大学出の人に多いのは無理のないことである。自我の目ざめる青少年時代に、淡い反抗的気分の対象となつた御製が、青年時代の人生

『歌人・今上天皇』刊行ならびに出版記念会

歌人・今上天皇

夜久正雄著



明治書院

『歌人・今上天皇』初版・表紙

觀の確立に対して無縁な存在となり、その反抗的気分をますのみで、そのまま成人してしまった人が多いのである。だから、御製について、話したり書いたりすると、すぐ強い反撥にであふのであるが、それはまた、さういふ話や記述が、形式的な權威をにかけて、聞き手や読者を圧迫しようとしたり、あるいは、同じことだが、自己の權威をますために御製を利用しようとするものがあつたりしたためだらうとおもふ。ぼくなどもさういふ罪深い所業におちいつたことを今に悔いてゐる一人である。しかし、いまの時代は、天皇の權威を失墜させようとする言論の方がかへつて盛んな時代だから、御製についての研究も、輕蔑冷笑されこそすれ、研究者を權威づけることにはならない。その点、研究者にはかへつて氣易くありがたいと言へる。それに、短歌とか文学作品とかの研究批評といふものは、研究対象の價值に対する考察であつて、研究や批評が正しかったり間違つてゐたからといつて、研究対象自体の價值が増したり減つたりするものではないらしい。いくら御製をほめたからといつて御製がよくなるわけでもない、いくらけなしたからといつてわるくなるわけでもない。それはただ一人の研究者または読者が、かういふふうに御製を味つた、といふことを表現して、他の読者や研究者の参考にするにとどまるものである。

さて、といつても大分前のことになる。昭和二十八年の天皇誕生日に、ラジオで徳川夢声、武者小路実篤、亀井勝一郎三氏の、「今上天皇について語る」といふ座談会があつた。これはききのがせない、どんなことを話すだらう、と思つて、三氏のことばに耳をかたむけた。いい座談会で、三者三様に話が必要です、武者小路、徳川両氏の間で、天皇のお人がらについての話が出て、その時のことばははつきりおぼえてゐないが、要するに、今上天皇のお人がらが、かぎりなく誠実な、善意のお方で、かうい

ふ人とは会ったことがない、といふ話になり、徳川氏がたしか亀井氏に、かういふお人柄がおうだにはあらはれてゐないのだろうか、と質問した。今上御歌の中心に迫る、この鋭い、正確な、そして同時に短歌の本質をとらへた質問に、ぼくはおもはず息をつめて、どなたかが蘊蓄をかたむけて今上御歌の解説をするのを待った。ところが、御歌とお人柄との関係に関するかぎり、残念ながら、話は一向進展せず、夢声氏の質問は解答を見ずに終つてしまつたやうにおもはれた。本稿はいはばこの質問に応ずる解答である。

さて今上天皇の御歌の価値について現代の歌人はどう考へてゐるのだろうか？

斎藤茂吉は御歌について「御発想が如何にも御自由で具体的で、従来のいはゆる御製調とも謂ふべきものから、著しく展開してゐることに瞠目した」（『天皇歌集・みやまきりしま』所載の論文より）と言ひ、その「展開」は「すべて、終戦後の御詠に属する」といつてゐる。「従来のいはゆる御製調」については「歴代天皇の御製を拝読すると、お歌柄の上に何か一貫した特質と言つたものが感ぜられるやうに思ふ」と言ひ、「清纯とか、おほかとか、平明とかいふやうな抽象的な言葉を以て表現される、共通したある匂ひがあるのではあるまいか」と言ふ。釈道空（折口信夫）もまた、異なる見地から同一の感じをのべてゐる。「昭和御製と宮廷ぶりの歌」といふ御歌論に、まづ短歌の歴史についての独自の見解をのべ、「帝王の御歌」の特質についてかう述べてゐる。「その中、不思議な程、他と異つてゐるのは帝王の御歌であつた。歌を読むと同時に、その組みあはされた個々の題材の關係などを了解する。その先に、いち速く来るのは、外形要素——しらが、まづ特殊だと言ふことに氣のつくことである。知識で

もない、權威でもない、圧力でもない、おほどかにしてあたたかに、清くしてまどかなもの、さういふ形式要素が、何よりも強く我々に響くことに心づく。これはおそらく、我々の持つてゐる伝統的な短歌に対する直感と言ふものが、既に綜合された感覚から出發してゐて、これが宮廷ぶりだと言ふことを、一刹那無意識に感じ、瞬間に他と判別することが出来るからであらう。だから私の話は別に神話を語り、呪詞マジを説いてゐるのではない。論よりも証拠、文学史上の証拠であり事実である。次いでは科学の裏書きが出て来るはずである」と。また近ごろ『文藝春秋』の随筆欄に木俣修氏が、「今上陛下の御歌」と題する小論を寄せ、「歴代の天皇の御製に比べて陛下の御歌にはその人間としての御感情が何のおほからいもなくいきいきと流れていて、それぞれに御歌がわれわれの身近にぐんぐんとせまつて来るような思いがする」「自由でとどこおりのない人間的な御抒情の中におかすことのできない位を保たせておられる御歌風こそ、天皇ぶりの昭和の新風といつてよいのではなからうかと思う」と言ふ。

私自身の感想をのべると、今上天皇の御歌をよむと、自分のくるしみや悲しみがとけてゆくやうな感じがする。われわれが生きてゆく上には、理不尽な目にあつて苦しみなやむ時もあるし、どうにもならぬ悲しみに沈むこともある。さういふ時、今上天皇の、殊に戦後の御歌をよむと、その御歌には、自分の苦しみよりもつとはげしい苦しみをへてきた人の息づかひが感じられ、自分の悲しみよりもつと深い悲しみがたたへられてゐるやうに感じられて、自分の苦しみや悲しみが御歌の作者の大きな悲哀と苦悩とにつつまれてしまふのである。ここに、いまの世の中をもつとも深く味ひ、もつとも誠実に生きてをられるお方がある、とおもふと、勇気が湧くのである。この感じ、この感じを伝えることができれば、くどくどと理屈めいたことを書く必要はない。ぼくは、ただ、この感じをたしかめようとして、御

歌を研究したのである。そして、いま、この感じは自分ひとりの感傷ではない。この感じをもたらすものは、御歌の価値である、と信ずるのである。人はこれを信仰とよんで笑ふかもしれない。それはそれでいいが、そのために、御歌の芸術的価値は、かはることがないものとおもふ。

(昭和三十四年十月十五日)

出版記念会(補記)

昭和三十五年二月六日に旧版の出版記念の会が開催され、当日の模様について、角田時雄氏主宰の『伊勢春秋』昭和三十五年二月十五日号では第一面全面に詳細に報道してくださいました。すなわち

「世話人代表太田耕造氏をはじめ安岡正篤、甘露寺受長、土屋文明、久松潜一、井上孚麿、永田菊四郎、今田竹千代、秋岡保治、浅野晃、佐藤通次、小田村寅二郎氏ら、学界思想界多彩の顔ぶれをはじめ、青年学生も多数参加して出席者二百余名、この種の会合には全くまれに見る盛況であつたが、この日会場の和やかにして肅然たる雰囲気の中には、今にして漸く表面に現はれんとしてゐる「恋闕」(天皇をおしたひすること)の国民感情が、春の若草のごとく萌え出でつつある息吹きがひしひしと感ぜられた。これはまことに意味ふかい情景であり『歌人・今上天皇』の出版は当日の諸氏の発言から見てもあらゆる意味で戦後の思想史に大きな機縁をもたらすものではないかと思はれる示唆をふくんでゐた。これはもはや単なる出版祝賀会とはいへない重要な意義をもつ。」

とあり、当日の諸先生の御発言があはせて掲載されてゐました。この御発言には期せずして今上天皇の

お歌お人柄についての諸先生のお考へが述べられてゐまして、重要な意味をもつものと思はれました。いまその中から、直接お歌について触れられた太田耕造・久松潜一両先生の御発言をここに引用させていただきます。

〃世話人代表 太田耕造氏の所感——

今上天皇は特に神事を重んぜられ、神嘗祭における御態度の如きは歴代天皇の故事にもまさる熱意を示されるのを常とする。このことは日本精神の本質、その拠つて来る所を明かにしてゐるものと思ふ。今日の如き時代に、今上天皇の御歌によつて日本語の本質が最高度に發揮されることは、言葉の乱れのみならず、思想・道徳の乱れに対しても無言の教へとなるであらう。

〃久松潜一東大名譽教授の所感——和歌の本道を示された——

今上天皇が学問に理解を持たれてゐることは周知のことであるが、ここにまとめられた御歌を拝見すれば、平易な言葉でおほらかな表現が多く、帝王調といふべきもので、大きな広い深い御心持が窺はれ、普通人には見られない御歌である。歌は本来技巧よりも本當の心、至純のまごころそのままに歌ふべきものであることを、陛下がお示しになつてゐるとも言へるのである。国文学としては今後研究すべき大事なテーマであり、向ふべきところを示された思ひである。

この出版記念の会の後に、谷口雅春先生ならびに谷口清超氏は『生長の家』誌に御懇篤な御紹介を賜はり、また今上天皇のお歌についての御感想を発表されました。なほまた師友先輩の諸氏からいろいろな誌面で御紹介御激励を得たのであります。

亡くなられた小泉信三先生や亀井勝一郎氏からのお言葉も忘れがたいものでした。小泉先生は、皇太子さまに御推薦くださることを御約束してくださいました。亀井さんは「目のさめるやうない歌でまぶびつくりしてゐるところです」と書き送ってくださいました。

それぞれお歌を読む上に指針となるお言葉と思はれますので引用させていただきます。

〔歌人・今上天皇〕——昭和五十年——改訂増補版自序より

(3) 昭和二十八年歌会始について（昭和三十八年）

(一)

かつてこの歌会始めに出席した英詩人のエドモンド・ブランデン氏はその感想を著書の中に書いています。この儀式こそ、あわただしい近代文明の中に落ち着いた調和的な精神をもたらす東洋の精髓であると。

皇太子殿下の英語教師であったバイニング夫人も非常な感激を覚えたと書いて、この儀式のゆつたりとした進行のリズムは実にすばらしいといっている。

こういう人々はこの中に単なる異国趣味を見ただけではないだろう。きわめて簡素な背景の中に進行する儀式全体のふんいきというものが、すべての人間の心を落ち着かせる豊かさをもっていて、それがことばのわからない外国の詩人たちの心をうったのだとおもう。確かにこの儀式の中には舞楽とか能とに通ずるものがある。

昨年初めてテレビで公開されて、このふんいきがわれわれ一般の者にも伝えられるようになったのである。多少たいくつな感じもないではないが、ゆったりとして充実していて心が清められる。

さて、この「宮中歌会始め」というのは、明治二年から恒例の宮中行事になったもので、初めは天皇・皇后と宮中の高官の歌の会であったが、明治七年からは一般の詠進が行なわれるようになり、十二年にはこの一般の詠進歌の中の優秀作を選んで天皇のご前でよみ上げるという「ご前披露」が行なわれるようになったのである。元来、「短歌」というものは、国民のすべてがよみ味わうことができるという点に、その特質があるのだから、この明治十二年の「歌会始め」の儀式は短歌の理想とするところを具現したということができよう。

この儀式は、平安朝の古式にのつとるといわれている。明治以前は断続的に行なわれていたもののようにであるが、明治二年以降、皇室の喪中以外は欠くことのない重要な行事となったわけである。

今上天皇もことにこの行事を重大視されているもようで、敗戦直後の昭和二十一年の諸事混乱の年の新年にも欠かされることはなかった。ことに戦後になって、選に預かった一般の作者が歌会に出席できるようにになったのは、今上天皇のお考えによるものであるといわれている。

今年のお歌は次のとおりである。

那須の山そびえてみゆる草原にいろとりどりの野の花は咲く

「那須の山そびえてみゆる」という展望と「いろとりどりの野の花は咲く」という眼前の事象の確認とが「草原に」によって結合して、平凡なありふれたおことばづかいの中になんともいえぬおおらかさ、

高貴な清らかさを感じるのである。「いろとりどりの野の花は咲く」というのは、去年のお歌の、

武蔵野の草のさまざまわが庭の土やはらげておほしたてきつ

という「草のさまざま」というおことばとよく似ていて、多様な自然の生物のひとつひとつにお心をお注ぎになるご愛情をよく示している。自然に対して無意識に開かれたこの精神は同時に人生の多様性の受容に通ずる広い寛容な精神の表現がみられるのではなからうか。皇太子殿下のお歌に、「アフリカ」の「オリックス」といったことばが、そのまま大胆に使われているのも清新で豪快な感じがする。

選歌は、昨年もそうであったが、すべて、国民の勤労生活の直接の表現で、生活の喜びも苦しみも緊張も楽しみも、ありのまま現われていて気持ちがいい。天皇と国民とがうたいかわすという歌会始めの目的はここにあるのであろう。

したがって歌会始めに「詠進」するということは、国際的にもその高貴さが認められている儀式に参加することであって、入選目あての投機であってはならない。盗作のごときは、国宝の仏像に傷をつけるような行為である。何万首の歌から十数首を選ぶのに、それが「未発表の自作」であるかどうかを知らぬことは選者には不可能だ。

明治天皇は「詠進歌」は入選作だけでなくその他もすべておよみになったということである。今上天皇もそのようになさっているのではあるまいか。それでいいので「入選」するかどうかは、多分に偶然の伴なうことで、そのために高貴な儀式をけがしたり、生涯の恥辱となるようなことのないようにしたい。

新年早々「盗作問題」を論ずるというのも全く味気ないことであるが、専ら今日この頃の話題で、何かと意見を聞かれることが多いので書いておく。

今年「盗作」ではなくて「改作」であるという。去年、一昨年と「替玉」だが今年「盗見」というわけか。カンニングにかわりはない。つまり、今年の「歌会始」の入選歌十三首中の一首、

尾根までもつづく草原つらぬきて新幹線の測量旗立つ

が、住吉大社観月祭献詠集の第二位入選作

父祖の血の通う青田を貫きて新幹線の測量旗立つ

と、すぐその次に書いてあった第三位入選作

尾根までもつづくみかんの山々が帰省列車の窓に見えきぬ

という歌の、上の句と下の句との組み合わせであるというのである。作者は偶然的暗合だというわけで作であると主張している。短歌は三十一音の短詩形だから、こういう暗合は理論的にはありうる。しかし、その確率は、いろは四十八字音として、四十八の三十一乗、それに拗音その他が加わり字余りがあるから、この数はもつと大きくなる。ちよつと計算してみて下さい。つまり短歌の暗合というのは、ほとんど無限分の一となつて、頭の中では考えられるが、実際にはほとんどありえない。もしあつたとすれば、それは前作を無意識的に模倣した、とみられるのである。

今度の作が、改作であるか、自然の暗合であるかということとは、結局、他の人にはわからないことで、本人がどうしても「盗作」でも「改作」でもないといえれば、その主張は通る。

しかし、読売新聞で報道している作者の談話を読んでみると、どうも作者には不利だ。自分の入選作をおぼえていなかったらしいのはもちろん致命的だが、それ以外にも、無意識の中にぼろを出してしまったような点がある。

第一は、作者がこの歌は、十国峠で見た雄大な草原と熱海か何処かで見た東海道新幹線の測量旗とを組合わせて作ったものだ、といっていることだ。これは、短歌の本質についての根本的な誤解である。作者は、短歌によって自分の感動を切実に表現しようとするのではなく、ある考えを組合わせて自分の心情とは別に短歌を作ろうとしていたことになる。こういう考えからすると、他人の歌の上の句と下の句とを結びつけて一首の歌を作るということが短歌になりうる。こういう意味で、これが自分の作であるといっているのかも知れない。短歌というものは、自分の心持を表現するものであるという本質がわかっていないらしい。

作者が悪い!!これで問題がすむだろうか。わたしはそうはいかないと思う、もともと「盗作問題」が大騒ぎされるのはどういうわけだろう。これが普通の新聞の歌欄の盗作であったとしたら、これほどの問題にはならない。「歌会始」だからこそ問題になるのである。だから盗作問題が社会的に大騒ぎになるのは「歌会始」の儀式そのものを大事にしたいという国民感情があるからだと考えられる。その中にはまた皇室に対する敬愛の感情がある。短歌の原理の「誠実」と同じ原理が、天皇と国民との間になければならないという感情が潜在しているとみてよいのである。もし、天皇に対する尊重の念もなく短歌の真実性に対する信もないなら、「歌会始」は、一種の手軽な懸賞の場にすぎなくなるだろう。

さて、もう一度もともにとどって、作者の歌を読み返してみよう。これが盗作であるといわれてみると、

たしかにそんな節がないでもない。入選十三首の歌のほとんどすべては、国民の勤労生活からじかに切りとってきたような、切実な生活感情のあふれた、わかりやすい歌であるが、山下さんの歌は意味があまりまいである。

「屋根までもつづく草原」を「つらぬく」とはどういう光景だろうか。元来「つらぬく」という言葉は「玉を貫く」というように「つら」列を貫通するような意味がある。限界のあるものを「つらぬく」というのである。無限の広野を「つらぬく」、しかも「測量旗」が「つらぬく」というのでは、イメージがはっきりしない。原作の田所さんの「青田をつらぬく」のが、正しい「つらぬく」のつかい方である。しかも、その「青田」が「父祖の血の通う」青田だからこそ、それを「つらぬく」「新幹線の測量旗」に無限の感慨がある、というのである。これは単に自然の風景ではなく、自分の生活と思想と深い関連を持った問題なのである。ここに原作のもつ切実さがあり、また「青田をつらぬく」という言葉のもつ心の痛みがあらわされているのである。

しかしこの歌は「草原をつらぬく」となって、「つらぬく」という言葉が、単なる視覚的なイメージをあらわす、うすつべらなこけおどかしの表現になっている。それに「屋根までもつづく草原」のはるか遠くまで「測量旗」が立ちつづいている、そんな遠くの「測量旗」まで目に見えるだろうか。また、「屋根までもつづく」その草原の屋根の上まで「測量旗」がつづくことがありうるだろうか。それは、どこなのだろうか。こう考えてくるとこの歌の取柄は末句の「新幹線の測量旗たつ」という堅い漢語音が近代文明の粋をあつめた新幹線にふさわしいという点だけである。しかもこれが模倣では、救いようがない。この歌は、原作とみられる歌にくらべてみると、一種のでっちあげにすぎないということにな

る。

入選歌必ずしも名歌ではなくてよいが、切実な生活感情のあふれたものであつてほしい。昨年、一年二回の盗作は替玉であつたから選者には責任がない。しかし、改作、つまり改悪の組み合せ短歌が入選したということは、選者にとつても反省の資とすべきであろう。もっともそのために、せつかく民衆に解放されて、天皇と国民との真実の交流の場となつてゐる「歌会始」を、また昔のような閉鎖的なものにしてもらいたくはない。盗作を防ぐのは結局は社会全体の良識ということになるだろう。来年は、もうこんなことのないように、これをニセモノはバレルという自業自得のいましめとして、ホンモノのさかえる国としたい。たしかに「選歌」のほとんどは勤労生活からじかに生まれたもので国民生活の真実があるのだから、その方を信じることにしよう。

例えば

艦橋のめがねにうつる都井岬草原に馬駆くる見ゆ

この歌の緊張と充実、

夕食の合図送れば草原の吾子はグローブ高くさしあぐ

この自然な心の動き、「佳作」の中の

草の原刈り伏せ行けば余吾の湖夫が漕ぐ舟見えてたのしも

この格調の高さ、

移り来てひと夜明かしし草原に蜂の巣箱を妻と見まはる

養蜂家の境涯のにじみでた生活の歌　こういう歌をよんでいると、たしかにここに日本のうたつてゐる

のが聞えるではないか。はたらきながらうたっているこの歌声の中に日本のいのちがある。「いろとりどりの野の花は咲く」という天皇の御前に、いつわりなき真情を吐露している日本の民のまことの歌がある。この歌心を信じよう。

(4) 武蔵野とところどころ (昭和三十九年)

深大寺は毎年三月三日だるま市を開く。遠近より人つどひ来てだるまを求め福をいのる

深大寺だるまの市を妻と来て本尊開扉にあひまつりけり

御衣のひだかるやかにほほえみてゐますみほとけをろがみまつる

けふことにひらける厨子に早春の光あかるき白鳳の仏

いつくしみあまねきみ像おもかげにだるまの市を行きもどりつつ

出て見れば初空に日は音もなく満ちてあり
けりいざ旗立てむ 昭和三十六年元旦 夜久

自筆短冊

小金井駅北口に石柱あり、その上に女身裸像をかかけ、世界平和宣言と題す。

すはだかの乙女の像を天にかかげ小金井市は世界平和宣言す
軍備なきはだかの国の宣言にふさへり街の乙女の裸像

多摩墓地に若き日の友の墓をたづねて

桜咲く多摩墓地ひろみやうやくにたづねあてたる君がおくつき
そうそうと鳴る松風のもとにして清くあかるき君がおくつき
みはかべのわか草はらに妻とゐて君にささぐるうたをおもへり
君しらぬ妻と来りてみはかべにただ松風の音聞かんとは
若き日の夢とざしたるみ墓べにおこりては消ゆ松風の音

車中所見

ガムをかむ若者多し要するにアメリカ人のまねをするなり
ガムかむは個人の自由、しかりしかり、大学自治の教室にても
風俗はアメリカのまね、精神は中ソかぶれか、日本人いづこ
くちやくちやと口たえまなく動かせば考へる力うしなふといふ

歳末二首

あたたかき日和つづきのあまりにもおだやかにして心おちぬず
イエス、イエス、アイ・シー、すなはちサンキュウと言ひてやむべきことならなくに

年始

ゆく年を古都鎌倉の宿に来てテレビ見るともなくながめつつ
期待せし五山の除夜の鐘の音は巷の車の音にまぎれつ
ひとねむり覚むればすでにカーテンのすきままばゆく年明けにけり
にひ年を古都鎌倉の浜行けば潮騒たえず心をあらふ
ひろまへの人波に身はもまれつつあなにぎにぎし初詣でする
老いたるも若きも高きもいやしきもひとしくまゐる神のひろまへ

(本学国文学教授)

第五編
大学紛争の嵐の中で

(昭和四十年、五十年代)



第五編 大学紛争の嵐の中で（昭和四十年、五十年代）

亜細亜大学担当科目「国文学」「国語表現法」「研修」 留学生「日本語」
総合科目「人間と環境」「日本文化と天皇」 担当役職 教養部長

一、新制大学論抄ならびに過激派批判（昭和四十年代）

- (1) 教養部の特色と夢
- (2) 戦歿同窓生の慰霊祭挙行に当りて
- (3) 文学と人生
- (4) 大学における人間教育の回復
- (5) 「君が代」に憶う（——「明治百年記念講座会報」）
- (6) 「大学の運営に関する臨時措置法案」寸感
- (7) 最近のアジ・ピラを分析する
- (8) 東大五月祭を見て——大学問題を考える
- (9) 大学を選ぶ
- (10) 大学の存在意義
- (11) 建学の精神と教養部制とについて
- (12) 募集校歌選後評
- (13) 和歌三題（法学部 F・O・C ほか）
- (14) キャンパス雑詠抄

二、随想折々——戦後大学の思想問題をめぐって他（四十三年～五十年代）

- (1) 武蔵境で下りて（桜橋・山林に自由在す・鷗外と太宰の墓・「武蔵野夫人」等）
- (2) 自然（ジ・エイシア灯台）
- (3) ユージン・ライオンズ「ソヴィエトの神話と現実」を読んで
- (4) 和歌と学問
- (5) 古都鎌倉
- (6) 教育の中心——台湾を訪ねて——（灯台）
- (7) 回顧と展望
- (8) G・M・トレヴェリアン（研究余話）
- (9) ソルジェーニツィンとドストエフスキー
- (10) ことば！（灯台）
- (11) カーター米大統領の就任

- 演説 (12) 雲海の南ア連峯と富士(F・O・C・短歌) (13) フィリッブ・カール・ペー
ダ先生 (14) 日本への回帰 (15) 読書のすすめ (16) 学園の歴史を生きる (17) 御製の英
訳とエール密書 (18) 精神病とノイローゼのちがひ (19) 富士山十首(F・O・C・山
中湖畔から) (20) 長谷川如是閑の和歌 (21) 冷泉家と「敷島の道」 (22) 磐城・湯本の
御製歌碑 (23) 私の「アルバイト考」

一、新制大学論抄ならびに過激派批判（昭和四十年代）

- (1) 教養部の特色と夢
- (2) 戦歿同窓生の慰霊祭挙行に当りて
- (3) 文学と人生
- (4) 大学における人間教育の回復
- (5) 「君が代」に憶う（「明治百年記念講座会報」より）
- (6) 「大学の運営に関する臨時措置法案」寸感
- (7) 最近のアジ・ピラを分析する
- (8) 東大五月祭を見て——大学問題を考える
- (9) 大学を選ぶ
- (10) 大学の存在意義
- (11) 建学の精神と教養部制について
- (12) 募集校歌選後評
- (13) 和歌三題（法学部F・O・Cほか）
- (14) キャンパス雑詠抄

(1) 教養部の特色と夢 (昭和四十一年)

「本学教養部の特色」ともなれば、重要なテーマで、それこそ教授会の承認が必要となるが、年頭の御挨拶というところで、大言壮語をさせていただけよう。

かつて太田学長は、大学教育の内容についての講演の中で、「精神・思想・技術」と言われたことがある。「技術」は「科学」に通ずるものであるから、この三つは、学問の体系ともいえる。

日本における西洋流の学問・教育は、この三つのうちの技術面を偏重して、知識・技術の伝達が大学教育の中心であるとして今日に至っている。

大体のところはそれでいいのだろうが、しかし人間の「精神・思想」が大学の過程にも重視されることを看過してはならない。

今の新制大学は、旧制高等学校を吸収して発足したのであるから、「精神・思想」の確立が大学教育の目的の一つであることを忘れてはならない。

精神・身体の鍛練を目的とする「体育」、及び人生観・思想の確立のため、ならびに専門過程の基礎をなす「一般教育」ならびに「外国語」とで構成される「教養部」は、旧制大学の予科的性質よりも、旧制高校の性質をもつべきだろうと思う。

教養部がいわば独立したのはこのためだし、またこれが、現日本の学制から失われた人間教育の場を復活する試みともなるのである。

本学教養部が小定員の「研修」に力を入れてマス・プロ大学の弊を少しでも補おうと努力するのもこのためだ。この点で本学は他の大学に率先して——とは言わないが、良心的な各大学とともに、大学教育の面で、創造的な先駆的な努力を続けているのである。

一方、本学の総合的な目標がアジア文化の交流にあることはいうまでもない。そのためには本学がアジア文化研究のセンターとならなければならない。文学部とか人文学部とか教養学部とかの設立が要請されているのはこのためである。

現状のままでも本学教養部のスタッフは、もちろん外国語のスタッフを含めて、一学部一、二学科くらいの実力があると自負しているが、アジアの亜細亜大学、世界の亜細亜大学となるには、一層の充実が必要である。設備も勿論である。いずれ結成されるであろうが、日本アジア学会ともいうべきものの年次大会が本学で開催されて、世界のアジア学者が本学に集って、アジアを論じ、アジアの連帯を議す、そのパネル・ディスカッションを学生が傍聴する、というようなイメージは、初夢として大きすぎるだろうか。

(教養部長)

(2) 戦歿同窓生の慰霊祭挙行に当りて (昭和四十一年)

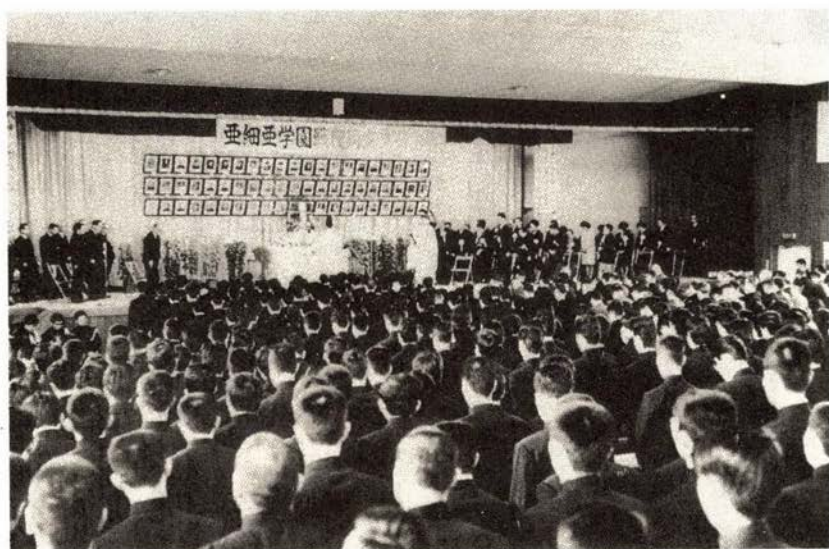
本学同窓会の青々会の諸君が戦歿同窓生の慰霊・記念の行事を行うということを知り、私は衷心から賛同する。

國のために身命をささげた卒業生諸君にとつてなつかしい同輩であり、いまの学生諸君にとつては同窓会の先輩にあたり、われわれ教員にとつてかつての学生であった人々―この人々の、その青春の生命を國のためにささげた行為と精神とに對して追悼・慰霊のいとなみをとり行なうことは、本大学が大学全体として、実現すべきことと考へるのである。行事の形式や方法については今後の研究にまつべきものとして、慰霊の精神そのものにおいて反對する人はなからう。

戦歿卒業生の総数は八十有余名である。それら諸君の消息の一端は、次の梶村助教授の文章に記されているごとくである。

戦歿同窓生の消息

今から二十三年前、すなわち昭和十八年十月一日、日本中に学徒出陣の命令が下された。当時、本学園は興亜専門学校と称し、創立して日の浅い学校であった。しかし、アジア復興の文化的使命を創立の精神とし、全学生塾生活をし、自ら額に汗して働き、且つ、学ぶという特異な校風によつて、その頃もすでに、受験生の愛読書(?)であった「蛩雪時代」に「日本における特異な校風をもつ二つの学校」として、一つは羽仁もと子女史設立の自由学園、他の一つは興亜専門学校がとりあげられるほど世間に喧伝されたものであった。当時は、もちろん今みられるような立派な校舎など一つもなく、見渡す限りの畠と林の中に、ポツツと二棟の校舎と、それに較べれば立派な五棟の塾(寮)とが建っているだけだった。二年生以上は知っているだろうが、先程取り除かれた昭々、誠明の二寮はその中の二つであった。そのような状態であったから、学生は、まず、学園づくりから始めなければならなかった。放課後、あるいは日曜日には、机を作るもの椅子を作るもの、木を植えるもの、それぞれ分業で働いた。今、学内



亜細亜学園戦歿者同窓生慰霊祭（昭和41年11月312教室）

に亭々として聳えているイチヨウ並木は、当時の学生が、多摩墓地の奥から、一人で一本ずつ担いできて植えたものである。今は倉庫となつて、みる影もなくなっているが、北門を入つて左側の奥の建物は、かつての図書閲覧室で、そこに座つて夜遅くまで口角泡を飛ばして、国家を論じ、人生を論じた机も椅子もみんな当時の学生の手製のものであつた。

学徒出陣の命令の下つたのはこのような時であつた。「二十才以上の学生は直ちに戦陣に赴け」という命令である。ある人は出征の前夜まで読んでいた本に、静かにしおりをささみ、ある人は後輩と別れの盃をくみかわして、その頃、建つたばかりの武道館、それは昨年まで合併教室として使われていた南門を入つて右側の建物であるが、その前に並んで記念撮影をした後、残された教職員と僅かな学友と、それに、武蔵境の町の人々に送られ

て、歩武堂々と出征していった。総勢一五五名であった。「また、この武威野へかえってこよう。興亜神社で会おう」と異口同音に言いかわして、出かけていった。

一時にこれほど多くの学生が出征したのは、この時が初めて最後であったが、これ以前にすでに多くの学友が海外に出かけていた。それは、本学の使命であったアジア復興の建設面を受けもつということのためであった。蒙古の奥深くに建てられた西北学塾に留学し、ラマ僧にまじってモンゴルの平和工作に従事し、また、中国に渡って通訳として活躍し、また、南は遠くアズハル大学に留学し、回教徒の中に入って宣撫工作をし、ボルネオ、スマトラ、ジャワ、セレベスと、学友たちはほとんどアジア全域にわたって活躍した。

しかし昭和十九年から二十年になると、戦局はますます日本側に非となり、学友戦死の悲報は日を追って多くなった。建設計画に従事するためにボルネオに向った船が、目的地に着かないうちに沈み、多くの学友が海中の藻屑と消えたという報も受けた。レイテ沖の海戦に、撤退作戦のため、ひとり艦に残り従容として戦死した西島中尉（三期生）の話も伝ってきた。母校の上空を低空飛行し、右に左に機翼をゆるがせ、最後の別れをして戦死していった江副中尉（三期生）、いよいよ敵が沖繩を攻めてきた時、「済まんようだが先へ往く」といって特攻隊となって戦死した上田中尉（四期生）等々、ついに戦死者は五十名を超えるに至った。（梶村 昇記）

思えば戦後二十年になる。あの戦いの日に、いまの新本館前の広場——当時の校庭に集まって、いまの南門——当時の校門を出て征って再び帰ることのなかった学生諸君のことをおもうと哀惜にたえな

い。とりわけ彼ら諸君が、死んだら母校の庭で会おうと誓って出て行ったことを聞く時、慰霊の行事の一日も早く挙行されることを願わずにはおれない。同窓生諸君の心情はさらに切なるものがある。さらに戦歿学生を子弟にもたれた御両親兄弟のお心は想像にあまりあるものを感じる。

敗戦のあとのしばらくの間、残念ながら国民の一部には、戦死者を誹謗する者さえあったのは事実である。「太平洋戦争は侵略戦争だから戦争で死んだ者は犬死にである」というのである。そういうことを言ったある中学校の教員に、戦死者を父にもった女生徒が物も言えずに、むしろぶりついで声を放って泣いた、という話を聞いて、私も目が熱くなった。この女生徒の気持ちだが、当時の国民感情の真実であつたと思う。

戦争の原因と経過と結果とをよく研究して批判するのはよい。しかし、その批判は、戦死者の心情を誹謗することとは別のことである。

戦死者は身命を国にさへげた人々である。国のために死んだ人々である。国というのは国民全体のことであり、その中には生き残つたものも含まれている。戦死者の死は、他のものの生きのこるためであり、国のいのちの存続のためであつたのである。われわればかりではない、われわれの子孫までも守つてくれたのである。国のいのちのために、惜しむべき自己の生命をささげたことは、むだ死にどころか、人間として最高の行為ではなからうか。

彼らの死を、尊敬の対象とするか軽蔑の対象とするかは、生存者自体の価値を示すことになる。人生の目的をただ単に自己一身の利を追うことのみに見出す人々にとっては、彼らの死はむだ死にであらう。しかし、人生の生き甲斐を自己一身をこえて国のため何らかの寄与を行いたいという、理想を抱くもの

にとつては、戦死者の死は崇高な死と仰がれるにちがいない。戦争の勝敗が彼らの死の価値をきめるのではない。

死者をまつるのは、生きているわれわれであつて死者ではない。死者は、まつることによつて、追悼することによつて、生きているものの精神の世界によみがえるのである。私は在学生諸君が、この精神の世界の機微に感じて、こぞつてこのいとなみに参加してほしいと思う。この地、この学校で学んだ戦歿同窓生の慰霊をこの大学において行うことのできるのは、現在の在学生諸君であり、われわれこの大学に奉職する教職員であり、同窓生諸君であつてそれ以外ではない。

聞けば、戦歿卒業生諸君のご両親はすでに高齢に達せられた方が多いということである。そうしたお方のお一人から次のようなお手紙が寄せられているということである。

「学校でわが子の慰霊をなされて下さるとのこと、ただ、うれしく、うれしく涙にくれております。そして、わが子の辛いを思っております。あの子は、生前から、人の情けをありがたく受ける子どもでございましたので、さぞかし地下でうれしく思っていることと存じます。」(富山市在住岡本素平氏―興亜専門四期生―ご母堂くに氏)

せめて遺族の方々が生きていられる間に、母校の隆盛な姿と、当時の諸君と同年輩の同じ母校の学生諸君の意気発刺たる姿とをみていただき、そこに還つてまつられるわが子たちのみ霊に母校で会つていただきたいと思います。

(亜細亜大学新聞 昭和41年6月20日 青々会報)

(3) 文学と人生（昭和四十一年）

しばらく前、九州の学生諸君が行なった合宿研究会の記録をもらったが、その中に、福田恆存氏の文章の一節が引用してあつて感銘を与へられた。その感銘が今も心にひびいている。それはかういふ言葉であつた。

「失敗者は失敗の必然性を身につけたがるが、いふまでもなく、それは自己確認のためである。私たちは自己がそこにあることの実感がほしいのだ。その自己の実在感は、自己が居るべきときに居るときに、はじめて得られる。いひかへれば、自己が外部の現実と過不足なく一致しているときに、あるひは自己表現が、自己の内部の心情と過不足なく一致しているときに。が、この二つは同じことを意味する。」

「人間・この劇的なもの」よりの抜粋といふことである。たしかに、われわれの心の平安といふものは、自分がなすべきことをなしつつあるといふ実感の中にあるといへよう。しあはせとか幸福といふものも、つきつめれば、自分の欲望の満足にあるのではなく、自己の義務を果すところにあるといへよう。義務といへば堅くるしいが、本分とでもいつたらよいかもしれない。あるいは、つきあひといへばよい。つまり、「自己が外部の現実と過不足なく一致してゐる。」状態をいふわけである。別の言葉で言へば、自分自身の心の奥深いところからくる真実の欲求といふものだらう。

ここで殊に私が心を打たれたのは、さうした「自己の実在感」といふものが、「自己表現が、自己の

内部の心情と過不足なく一致してゐるとき」に感ずる、あの一種の解放感、満足感と同じであるといふ指摘である。ここにいふ「自己表現」といふのは「文学」とおきかへてもよいのではないか。

われわれが自己の思ひを言葉に表現しようとして苦勞する。苦勞に苦勞を重ね、一語一語吟味して自己の真実の表現をはたさうとする、その努力は、われわれが実人生において自己の真実を貫かうとする努力と同じ性質のものだといへよう。文学の苦しさも楽しさもここにある。大きな言葉の海の中から一語一句をさぐりあてる、そして混沌として限りのない世界から、自己の個性の刻みつけられた一つの文、一つの語を創造する、その苦しみと楽しみとが人生の生きがひに通ずるものなのである。

かう考へてくると、文学といふものは、専門家だけの仕事ではないことに気がつく。人間の誰でもが味はふことのできることであり、またかういふ心の経験がなくては人生の真実の生きがひを感ずることができぬ、といふやうな、いはば、人間文化の本質に根ざすものなのである。

さういへば、言葉そのものが、人間文化の基礎なのである。近刊の「日米フォーラム」に、ハーヴァード大学古生物教授の肩書をもつロード・シンプソンといふ人の「人間の生物学的特質」といふ論文が載つてゐるが、その説くところの人間の特質は、言語の所有といふことである。人間と動物とを分つ根本的な特徴は言語である。さらにいへば、文明と未開とを分つものは、文字の所有であるといはれてゐる。言葉は人間の本質そのものなのである。この言葉のはたらきについてはなれることができなものが文学であることを考へれば、文学のはたらきの重要さは理解されよう。文章は「経国の大業」と言はれたのである。「言語は君子の枢機なり」といはれたのである。

その文学・文章の、戦後日本の状態はどうだらう。ジャーナリズムとマス・コミの発達が、文章のマ

ス・プロをさそって、作家から文章に苦勞する時間を奪つたかに見える。文章の濫造は、精神の弱화에ほかならない。その上、戦後の表記法の変革が、精神と思想との断絶をもたらした。青年が、読むにも書くにも文章に苦勞するところからは、何もかも生れはしないだらう。文学にたづさはるものは、ともかく、文章に苦勞しようではないか。そこにおのづと、人生の生きがひも感じられてくることであらう。冒頭に引用した福田氏の一文は、そのことを指摘してくれたものである。

(四一・一一・二五)

(4) 大学における人間教育の回復(昭和四十二年)

最近、大学における人間形成の重要性ということがしきりに言われる。その通りであるが、その際ひとつ大きなことが見落とされているのでなからうか。それは、学生の人間形成は、教授と学生との交流によって行なわれるということである。学問を通じて教授と学生との間に魂のふれあいがあつてはじめて、学生の人格は向上しうるのである。

最近、各大学でおこっている騒動の原因が一部学生運動家の計画的騒動にあることはいうまでもないが、その計画が成功する原因の大半は、大学内部における相互不信の感情にあると思う。学生が教員を罵倒して許されているような状況は既に大学教育の崩壊過程である。

学生の教員に対する信頼を回復して正常な教育を行なうためには、我々教員が大学教師として恥ずかしからぬ講義をすることが先決であるが、学生諸君も又講義を通じて教員の心の姿勢を汲みとる努力を

払ってもらいたいと思う。学問は、一般に、客観的普遍的真理を追求するものであるが、社会科学や人文科学においては、真理の探究は、研究者自身の人生観、学問態度と切り離すことはできない。自然科学や語学についてさえ同じことが言えるだろう。ただ単に、「哲学」とか「社会学」とか「数学」の講義を聴講し、その単位を取った、というのではなくて、何々先生の「哲学」を、何々先生の「社会学」を、何々先生の「数学」を取ったというところに大学に学ぶ妙味と真髄とがあるはずである。そうであれば大学教育は、ラジオやテレビの講義と選ぶところはなくなる。

師について学ぶということが学問の根本であって、この謙虚さがなくては人間形成も何もあつたものではない。師に学び、師を越えてゆくとところに学問の進歩があり、文化の継承があるはずである。学生諸君がこうした態度で講義を受けるならば、本大学に師と仰ぐ教師のいないはずはない。卒業に際して、心から「先生」と呼ぶことのできる教師を求め得たならば、諸君の大学生活は成功であつたということができよう。

次には友人である。大学においてこそ生涯の友を得ることができる。学友会のクラブ活動は、真の友情を生み出すことができよう。

人間形成とは、要するに魂の交流によって実現されるものである。文化もまた交流によってこそ開展するとすれば、師弟友人間の魂の交流のはたす役割は無限であると言えよう。これが大学発展の基礎である。

（昭和四二年一九六七年四月 「学友会」雑誌）

(5) 「君が代」に憶う (「明治百年記念連続講座会報」より) (昭和四十三年)

いつだったか——たしか去年の二月頃だったかと思う——問題の朝日新聞の「声」という投書欄で「君が代」論議がさかんに行なわれたことがある。

アメリカ駐在の商社員の男の子が、アメリカの高校に入っていてたまたまあるミーティングにまねかれた、その席で各国からの留学生がそれぞれの国の国歌をうたったが、日本の高校生は、「君が代」をうたうことができなかった。そのためにアメリカはじめ諸外国のクラスメートからはげしく非難された、というのである。そこでその商社員は、子どもが国歌「君が代」を知らなかったことは、また子どもに教えなかったことはすまなかったが、「君が代」の歌詞にも問題があるのではないか、という真面目な反省を書いて投書したのであった。これが発端となって論議がさかんに行なわれた。

私は、戦前の教育を受けた者だから、「君が代」は国歌であり、国歌は国旗と同じく国民的敬意をもって扱われるべきものであり、国歌を知らないなどとはとんでもないことだと思っていた。ところが、念のため、在学生や若い卒業生たちにたずねてみたところ、その多くは、学校でおそわらなかったということだった。また、式などでうたうこともなかったということだった。したがって、アメリカに留学しなくても、「君が代」を知らない若者は少くないことがわかった。知っていても、歌詞の意味は、何だかわからない、というのである。オリンピックの歌かと思ったというのも無理はない。

数年前、外国語大学で「いろは」歌を漢字仮名まじり文で書かせる問題が出たことがある。外国語大

学は競争率の非常に高い語学専門の大学で、受験生はコトバについて敏感な性質を持っていると考えられているところだ。つまり、この問題は国語の問題としてむずかしい問題だと考えられたわけである。昔の受験生だったら間違はずがないから、入試問題としての価値はほとんどないはずである。

この時は驚いたが、高校卒の若者が「君が代」を知らないという話には、もっと驚いた。そこまでは驚いた、ですませたが、歌詞の意味の解釈については驚いただけですまされない問題が起った。それはこういうことである。「君が代」の歌詞は「存じの」とく次のとおりである。

君が代は千代（ちよ）に八千代（やちよ）にさざれ石の巖（いわほ）となりて苔のむすまで

君が代の意味

この第一句「君が代」の意味について、こういう意見があらわれたのである。

元来この歌詞は、古今集の賀の部にある「我が君は云々」の歌が改作されて伝えられたものであるから、「君が代は」の「君」というのは、古今集の「我が君」と同じ意味で、つまり、「あなた」という第二人称のことだといふのである。そうすれば民主主義にかなうから、若し「君が代」を戦後の国歌として生かすにはこう考えたらよいというわけである。

この考えには、歴史の事実を勝手になおすという共産主義国家でよく行なわれる恐ろしい虚偽があるが、それはそれとしても、もしかりにこういう意味の国歌としたらどうなるだろう。国民的集會に集まった多数のものが、おたがいに「あなたのいのちがとこしえのように」と顔見合せてことほぐことを儀式にするわけである。われわれの感覚からすると殺風景きわまる。それも「さざれ石のいはほとなりて苔



明治100年記念特別連続講座（312教室）

のむすまで」では、いくらなんでもあまりにオーバーだ。

ともかくこういう学者ぶった考えが一番危険で、もとの歌が「古今集」にある賀の歌だ、などと言われると、ついそうかなと思ったりしてしまう。知識があやまちのもとになるのである。古今集の歌の意味は右のとおりでいいとしても、今日われわれのうたう国歌としての「君が代」の「君」は、「天皇陛下」という意味である。それは、「君が代」は国歌として作曲され、いまの作曲で明治十三年十一月三日の天長節（天皇の御誕生日を祝する日、今日のいわゆる天皇誕生日）にはじめて演奏される。その後、明治二十六年学校の祝祭日にうたわれることになったというこ

とによっても明らかである。

もつとも「古今集」所載の「わが君」の語義についても、倉野憲司博士は今年六月の古事記学会の公開講演で当時の文献を参照して「天皇」の意味であると断言しておられる。また「君が代」制定の背景となった明治維新の王政復古・天皇制の政治体制というものは、幕末志士たちの悲願でもあったので、その勤皇の精神が国歌「君が代」の精神なのである。幕末志士の歌に、「君が代」をことほぐ歌はいくらでもある。歴史の事実をまげることがは許されない。それでは天皇制の歌だから国歌としてはふさわしくないとと言えるか。ノー！

日本国憲法は、いろいろ問題はあるが、第一章天皇の第一条は、明白に「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」であると規定してある。「天皇陛下万才」は、すなわち「日本国万才」である。「君が代」はいまもなお国歌であることに変わりはない。

声たからかに「君が代」をうたおうではないか。祖先の霊も声をあわせてくれるであろう。

（河出書房の「日本歴史大辞典」の「君が代」の項は、〈国歌ではないが国歌に準ずる〉とか、歌詞が民主主義に反するように書いてあるが、事実には則する正しい考えではない。「大辞典」だからといって盲信してはならない。）
（教養部長・教授・国文学）

(6) 「大学の運営に関する臨時措置法案」寸感（昭和四十四年）

今や「大学立法粉砕」は流行語となったが、粉砕を叫ぶ学生が法案全文をよく読んで反対しているの

かどうか疑がわしい。元来、大学は教育基本法その他の法的根拠にもとづいて設立されているのだから「大学立法粉碎」は、大学の存在を否定する「偽瞞的」アジテーションである。また反対が私大教員や学生からはじまったのも変だ。

問題の「大学の運営に関する臨時措置法案」——これが正式の名称である——は、主として国立大学を対象とする臨時措置法である。例えば、国立大学でこのまま「紛争」（第二条の「定義」によると、占拠、封鎖、授業放棄その他）がつづくと、左翼教員と活動家学生との共同管理のような形になるが、それはそれとして、その教員や学生の経費の大部分は税金によつてまかなわれるから、国は「紛争大学」の存在を支援する結果になる。学生一人あたりの国の負担額は勿論、日本育英会という国の育英資金の貸与もつづけられるというわけである。

法案の第八条の「二」として、「前号の規定による休職者には、俸給、扶養手当、調整手当、暫定手当及び期末手当のそれぞれ百分の七十以内を支給する」とあり、「十」に、「日本育英会は、当該学部の子生に対しては、日本育英会法第十六条第一項一号の学資の貸与を行なわないものとする」とあるので、こういう法律ができなければ、大学占拠がいくら長びいても、いくら長期間授業が行なわれなくとも、教職員の給与は平常通り、昇給もあり手当も増額することになる。授業放棄の学生も国の育英資金をもらいつづけるのだろう。

このごろのいわゆる「過保護」の最たるもので、こういう非常識な事態をチェックしようというのがこの法案の目的（第一条）の一つらしい。

私立大学はどうかと言えば、「紛争」が長びけば経済的に崩壊する。

だから、私は、「粉碎」を絶叫する前に、よく読んで考えることをすすめる。反対の理由はむしろ別にある。それは大学紛争の永続を目ざす政治運動だということである。政策としての適否は別として至極当然の「臨時措置法案」がこれほどの反対をまきおこすところに今日の異常さの根がある。法案を読んでみるとそれがよくわかる。

(7) 最近のアジ・ピラを分析する（昭和四十四年）

四月以降、亜大の学生に対してくばられた、いわゆる「全闘連」のピラは大変な数で、よくまあ飽きずと同じことを繰り返すものだと思う。しかし、これが彼らの手で、ウソでもデタラメでも何十回何百回とくりかえして宣伝すると人はいつのまにかそんなことが本当にあるような気になる——こうした群集心理につけこんだ宣伝方法をとっているのである。一人一人考えてみればデタラメなこととわかる事柄が、くりかえして宣伝されると、いつのまにか多数の心理に潜在的に入っている、群集心理になって發揮され、大衆集会を指導する結果になる。これはヒトラーのナチスのとった宣伝方法で、その後は共産主義運動が利用している。いわゆる大衆団交などといわれる世界では、この群集心理で事がはばれるので、彼らはそのためにシツコク宣伝をくりかえすのである。

数名の学生が

だいたい「全闘連」などという名前からしてそうで、「全学闘争委員会連合」というのだそうだから、名前から見れば相当数の組織のように見えるが、実体はごく少数の学生の集りであって、多数の学生の

意見を代弁するものでも何でもない。流行に躍る数名の学生が、組織の手先となって、亜大の解体に狂奔しているにすぎない。そう見てとれば事は落着するが、新聞などに、「民主化を目ざす全關連の学生」などと書くと、相当の組織のように見えてしまって、「全關連」というものが、民主化運動の「先進的」組織であるように錯覚してしまうのである。

彼らがどんなことを言っているか、して来たか、それを見れば、「民主をめざす」など、とんでもない。次はごく最近の「全關連」のアジ・ピラの中の一節である。

「我々はこのような大学が現存していることに、疑問と怒りをいただき断固として亜大そのものの解体と東急独占資本体制打倒綱領的スローガンを打ち立てなくてはならない。」

「このような大学」というのはその前の文に説明があつて、それによると「戦犯体制による帝国主又大学」というのである。「又」は中共文字である。日本語では「義」と書く。

亜細亜大学に対して「戦犯体制による帝国主又大学」という判断をくだして、亜細亜大学が「現存していることに疑問と怒りをいただき」「断固として亜大そのものの解体」——つまり亜細亜大学をツブすことを、「綱領的スローガン」——指導方針——としなければならない、というのである。

大学解体を目的として

こういうヒドい文は学園の一員として引用するのも苦痛だが、彼らの意図が、共産主義的革命運動であり、そのために亜細亜大学を解体し、東急KKを打倒するという、破壊的なものであることをはつきりさせるために引用したのである。われわれの大学をツブすことが「民主化」なのか。いったい何の権利あつて、彼らは、自らの大学そのものを破壊し、数万の人の構成する大企業を「打倒」と公言す



大学紛争—東大安田講堂

ることができるのか。血迷うにもほどがある。

それにこの文のどこに「民主主義」があるか。元来「民主主義」とか「民主化」というのは、主として全体の意志を決定する場合の手段方法についていっているのであるから、「民主化をめざす」ものが、自己の意見を暴力的行為をもって他に強要すること自体が、「非民主化」ではないか。「全闘連」が「民主化をめざす」ものではないことはこれではつきりする。つまり彼らのいう民主化運動とは、亜大をつぶすことなのである。共産主義国家における粛正の悲惨事はこうして起るのである。民主主義というのは、他をも認める、ということが根本である。自分が絶対であるということを考えないようにすることである。法のもとの平等の存在を認めるもので、ここに人権の思想があるのに、彼らは、人権を叫んで、大学や会社の存在そのものを破壊しようとするのである。これは、今に始まったことではない。休暇前から、「亜大の存在

を許すな」など書いていたので、この「亜大解体」が彼ら「全闘連」の一貫する意図であったことがわかる。

ピラの書き手は学生ではない？

ガリ版の字体はプロ並みである。しかも、ひとの原稿をまる写しにしたものとは思えないほど筆跡がなめらかである。前例の「所謂」などという使い方をする者が原稿を書き、それを当用漢字音訓表で教育を受けた者がガリ版に書き写したと仮定すると、そういう場合には必ず写しあやまりができるものだが、これにはそういうあとはない。したがって、この系統のガリ版ピラは同一人物が原稿を書き同時にガリ版を切ったものと推定される。だから、この人物は、戦前の国語教育で育つたものと考えられる。つまり、現在、三十五、六才以上の年齢になるだろう。旧体の国字をこのように使いこなすところを見ると、もっと年をとっているかもしれない。いずれにしても、学生ではあるまい。しかも、この系統のピラの中には、終始亜大のことが書かれているので、この人物は毎日「全闘連」の学生の報告を受けて、それに対する抗議ピラを書き、彼らの運動の情宣活動を指導したものと思う。同一筆跡の六月末のピラにマルクシズムによる教育解釈の長い論文など書いているところを見ると、元教員のマルキストといったところではなからうか。

前の学生が書いたと思われるピラをS型となづけ、後のリーダーらしい人物の書いたピラをL型と名づけておこう。

ところで、このS型もL型も全闘連の名で出されていることを心にとめて、次のピラの説明を聞いてほしい。

九月十一日にくばられたL型ピラは、「不当処分、白紙撤回闘争に決起せよ」という見出しで、処分に抗議するが、抗議の中心は、教師が、「資本主義体制にひたり切って」「体制を強化する意図をもって」「自らの地位を守るために」処分を行ったというのである。そうしてそれを、「全ての労働者、市民、学生のみなさん、とりわけ亜大に学ぶ学生諸君」に訴えるという。何となくもつともらしい泣きおとし的口調である。

戦闘的見出しを並列

ところが翌十二日にくばられたS型ピラはどうだろう。「不当処分粉碎!」「九月十六日連帯集会に結集せよ」という見出しで、戦闘的文句を並べ立てている。その中には、九月一日から闘争を大爆発させたのだと言って、前記引用のように、亜大が「存在していることに、疑問と怒りをいただき断固として亜大そのものの解体」を「綱領的スローガン」として「打ち立てなくてはならない。」と書いてある。

L型ピラには学問と真理と教育の意味は如何と真剣な問いかけを行なった学生を大学が処分したとあるが、その処分学生の主張は、このS型ピラに「亜大解体」とはつきり書いてある。

共通点は「全ての労働者、市民、学生の皆さん」に呼びかけ、亜細亜大学解体のための包囲攻撃をかけていることである。処分学生が入学直後にくばったピラの中の文句に、「亜大を日大に!」という文句があり、また最近入手した某々自己批判書なるピラに、亜大は日大より手ごわいことがわかった、と活動家が自己反省したことが書かれているところからすると、今度の全闘連の市民、労働者への訴えは、日大闘争における解放区でも夢みているのかも知れない。

アジ・ピラに二つの系統

さて、四月以来の「全闘連」のピラをよく見ると、二つの系統のあることがわかる。ひとつの系統は、学生が交代で書いたと思われるものである。

ガリ版の字体がいろいろで、誤字があつたりして全体としてきたないし、書くことも受け売りだった支離滅裂だつたりしている。「战」(戦)だとか「又」(義)だとか「仿」(働・動)だとか中共文字がまじっている。

「全闘連」が学生運動なら、こうしたピラだけでいいはずだが、もう一つの系統がある。それは同じガリ版刷りのピラであるが、字体が同一のものである。これは五月以降、二日に一度くらいの割合で、やはり「全闘連」の名でくばられているが、前の系統とは、書き手のちがうピラである。つまりこれは、一人の人物が、つづけて書いているものである。字体にクセがあるが、よほど慣れた書きぶり、字づらもきれいで読みやすく、誤字もほとんどない。「所謂」(いわゆる)とか「所詮」(しよせん)とか、「就中」(なかんずく)等という漢字の使い方をすると、当用漢字音訓表で教育された者ではないことがわかる。仮名づかいは、正確に現代かなづかいで書かれているが、これは歴史的かなづかいで教育されたからこそ、現代かなづかいを正しく使えるという一例になるように思うので、戦前の教育を受けたものであろう。

全学一致して警戒を

なお処分のことについては、不思議なことに、七月一日頃くばられたし型ピラに、「僕らには『退学令状』が送られて来た」と書いてある。そうするとし型ピラは、活動家を煽動して不法行為を助長させ、

つづいて行なわれる処分を利用して、学生の同情をあつめ、これを亜大解体への闘争とする企図をもつものではなからうか。

亜大は全学一致して警戒を厳にしなければならない。(広報室)

(四四・九・一九 A S I A)

(8) 東大五月祭を見て

——大学問題を考える——

(昭和四十四年)

五月三十一日(日)東大五月祭を見に行く。在学中も卒業後も無関心で、見に行った記憶はない。昔は、法医学の性犯罪関係の標本があるとかいう話だった。だが今はどうだろう、という程度の関心しかなかった。しかし、今年は別で、紛争後の東大がどうなったか様子が見たいと思って、出かけたのである。

一時半頃、正門前につく。門の前で、演説をやっている。全共闘のアジテーションかと思つたら、勝共連合の反共演説だった。感心して中に入る。なつかしい銀杏並木だが、催物の立看板やパンフレットの売店が並んで雑然たるところに人が雑踏している。この辺から巣立った人物が近代日本の政治経済文化を動かして来たところだが、それにしては少し分よごれている。昔はこんなことはなかった。東大生はこのうす汚さになれてしまったらしい。これで大学と言えるだろうかと思つた。

安田講堂寄りの法学部教室の前にトラックがとまっています、何か劇の道具のようなものをおろしてい

るのが見えるが、そのあたりに人が大勢集まって、何か口々にわめいている。内ゲバかと思って、——三十日に全共闘が「なぐり込みをかけた」という新聞記事を見たので、そう思ったのである——行ってみると、やがて、シュプレヒコールの声があがった。よく聞いてみると、「ミンセイ・カエレ」と言っている。さては全共闘かと思つたら、どうもそうではないらしい。何かさかんに言いあつていらしい。やがて、「民青・帰レ」の叫び声をかきけすように、建物の屋上のマイクが叫び出した。それによると、どうも、勝共連合と五月祭実行委員会との言いあらそいらしい。すると、五月祭実行委員会はミンセイということになる。よくわからない

安田講堂を見に行く。立入り禁止の貼紙がしてある。それによると、この立入り禁止を犯すものは、法律違反になるのだそうだ。大学の禁止だけでは効力が発生しないらしい。東大裁判の証拠物件にでもなっているのだろうか。だから講堂は外側だけしかわからないが、各所に破損のあとが見える。当時の様子は新聞などで見たが、思い切つて、中も見せてくれるとよかった。国の建物をエリート大学生がどんなに破損したか、——現代教育の教訓であるのに。

この反省なしに大学教育の改革はない。

工学部にまわる。工学部の建物らしいのに、大きな幕が張りめぐらしてあつて、カンボジャ侵略米帝排撃とかいう抗議文が書いてあつた。大隅のロケット打上げで成功して気を吐いた航空工学科の建物にも、セクトの貼紙がところ嫌わずはりめぐらされている。農学部は少しはましかと思つたが、ここでも公害問題を取りあげて——それはいいが——国家権力の排撃と資本主義打倒といったところである。コノテガシワの苗木を売っていたのが、たったひとつのやすらぎだった。もっとも、農学部の方は人があ

まり来ないので、静かでひろびろとしていて、気持がよかった。その食堂で、やすい昼食を食べた。国立で授業料も安く、結構清潔な食堂で、比較的安い食事をとることができる。そしてセクトの祭りをする東大生は甘やかされていると思った。工学部や農学部からまわったのは、学部の性質上、思想的にも穏健だろうと思つてだったが、私の考えは甘かつたらしい。工学部や農学部がこの程度だから急進的な医学部や文学部が、展示に、アジピラに、講演会に、民主主義を看板にした共产党的宣伝をくり返すのはいうまでもない。

法学部は見なかったが、そのアピールの「人權擁護」は「平賀書簡、飯守発言に見られる司法権の侵害、長沼事件と第九条、我々の学ぶこの学園から学問の自由を奪い根こそぎ大学を変えようとする大学立法そして中教審答申、云々」という政治意識に基くものであり、講演会講師は藤原弘達氏をのぞいてほとんど左翼の政治家と学者である。だから法学部自治会は、いわゆる全共闘系とは戦つたらしいが、思想的背景は同じものといえる。

理学部は、五月祭実行委員会のアピールには、「米日独占資本の科学技術政策、軍国主義帝国主義復活政策との闘い」というような左翼的言辞をにかけているが、さすがに展示の内容は、地道な研究の普及と見えた。私はここではじめて「宇宙線」を見た。見る者も質問などして、まあ、東大の五月祭というのがこんなであればと思えた。しかしこれは、一部のまた一部で、東大五月祭が一括して、民青の宣伝だといわれてもしかたがないだろう。三十日全共闘が殴り込みをかけたのは、この民青とのあらそいらしい。また経済学部の立看板に、「経済学部はちよつとちがいます」とか書いてあったものことらしく、ノン・セクトは経済学部のみということなのだろう。すると、他の八学部自治会はすべて

民青がとったことになる。私も驚いたが、これを読んでもとても信じられない人もあるだろう。立看板やピラや展示などはなくなってしまうが、パンフレットは残っている。東大五月祭がセクト民青の祭典だという私の印象に疑いをもつ人は、五月祭パンフレット（六十四頁）もあるので、六十四頁を読んでもらうといいが、その冒頭の次の文を見てもらってもよい。第四三回五月祭パンフレット全六十四頁の冒頭、「基本方針」の書き出しは、次のとおりである。

〃日本国民は七十年代変革の歴史にあらたな一ページを切り拓いた。京都府知事選挙での民主勢力の堂々たる勝利は、支配層の七十年代反動連合抗争に重大な打撃を加え、民主主義の強固な砦を守り抜いたのである。京都府民の勇断は、耐え難い生活破壊、人間無視に苦しむ国民諸階層に、その闘う筋道を鮮明にさし示した。〃

つまり、日本共産党の押し立てた蛭川知事六選が民主主義の勝利である。それにつづけ、というわけであるから、「共産主義」という言葉は使われていないが、ここでいう「民主主義」は共産党の「民主主義」すなわち「共産主義」実現の手段なのである。（パンフレット全体にわたってマルクス・レーニン主義とか共産主義という言葉はほとんど使われていない。日本民主青年同盟の「民主」が「共産」と同じ意味であるように、パンフレットの中の「民主主義」を私は「共産主義」と読みかえることができると思つた）。

これが、国立大学の筆頭に立つ東京大学の学生自治会の五月祭の基本方針の冒頭の文章であるから五月祭実行委員会はミンセイと言われてもしかたがないのである。

ミンセイ（民青）は、いうまでもなく日本民主青年同盟の略称で、この同盟は、同盟規約前文に「共

産主義青年同盟らしいの革命的伝統をうけつき」「人類がたつした最高の科学であるマルクス・レーニン主義を学ぶ」共産主義革命運動であることを、その綱領に明記する団体である。

五月祭を一巡して、私はもう「大学」はここにはないと思った。革命家の養成機関としての価値はあろうが、国の大学教育の模範であった東京大学は、実質的に崩壊してしまっているというのが私の感想である。革命家にしても、国の金で革命の準備をするような人間に大衆のついてゆくはずもない。だから真正の革命家も出ない。ただ広汎な、なしくずしの革命運動が行われているというほかはない。

昔は、各大学が東大の真似をしたものだが、もうそんな必要はない。東大は模範にはならない。各大学は東大追隨の目を覚ますべきで独自の道を行くほかない。亜細亜大学の学生諸君は、胸を張って歩けがよい。われわれは亜細亜大学学友会がセクトに占領されていないことを誇りとすべきである。

(9) 大学を選ぶ (昭和四十四年)

むかしは大学を選ぶのに、教師で選んだ。〇〇大学には〇〇先生がいて〇〇学を講義している。その講義を聴いて勉強したい。——これが大学入学の動機であった。そのころは大学の数も少く、大学生もごく少数だった。

次に、大学の数が増し、大学教授の数も増すにつれて、教師の知名度も低くなると、学生は大学を学風で選ぶようになった。この学風は学閥とも結びついている。

官界に進みたいものは東大の法学部を目指すし、ジャーナリストや文学者として活躍したいとおもう

者は早稲田大学に、実業界に出ようと思うと慶応大学に、外交官や貿易に出たいものは外国語大学に、商業貿易方面に行くには商大に、というふうになった。自分の将来の職業によって大学を選ぶようになったのである。教師の影は薄れたが、まだ学風というものがあつたからそれぞれの大学生は自分の入学した大学についての自負があつた。東大はじめ学閥も強かつたが、反発も強かつた。各大学はいわば自由に競争したのである。

戦後、六・三・三・四制度によって新制大学ができると、当然、大学の平均化と画一化とが生じた。学生も学風で選ぶというようなロマンチストは少なくなって、もっぱら学閥によって大学を選んだ。自分の将来が有利になるようにと考えて有名大学を選ぶようになったのである。だから、大学で学ぶ必要はないので、大学卒業の資格を得ればよいということになった。大学生の数も一気に増大して、教師は道で逢つても見知らぬ学生に卒業証書を渡すようになった。いわゆるマス・エデュケーションである。

そこで学生は単位を取るためにのみ聴講する、という味気のない師弟関係が出来た。これは師弟関係などとも言えない、物質的關係である。教師も学生ひとりひとりの心の動きに直接ふれることはできないまま、筆記試験という方法によって、単位を認定するということになる。

しかし、学問というものは、教師の個性と結びついたものであり、殊に社会科学とか人文科学とかいわれる範囲の人生の学問においては、そうでなければならぬ。大学で経済学を学んだ、というのでは本当ではない。誰の、何先生の経済学を学んだ、と言えるようであればならない。

ところが実際は、試験答案に教師の名前を間違つて書くような学生が出来てしまう。あるいは学生が教師におまえよばわりをする。はなはだしいのは学生が教師に暴行を加える。学生は教師に対して学者

としての敬意を持っていない。しかも、そうした学生を処分することもできない。これでは学問は行われない。学問の場をまもることもできない。その意味で、多くの大学は崩壊してしまったのだ！

一例をあげれば、あの安田講堂の占拠の後で、何の教育処分をも行なわれない東大は、ただ学生と教師とのなれあいが存在しているにすぎない。ああいうのはもう大学ではない。大学の幻影にすぎない。教師全員を信頼できない学生は大学を去るがよし、教師はその責任を負うて大学を去るがよい。いまのよくななれあいは学問と教育との冒瀆にすぎない。

学問と教育とは、教師と学生との信頼関係によつて実現されるからである。教師も努力するから学生諸君も努力してほしい。四年間学ぶ大学に一人の師を見つけられないはずはなからう。教師に学んで教師を超えてゆくのが、真の教育というものではあるまいか。それがまた学問の本道ではなからうか。

(教授、教養部長)

(10) 大学の存在意義 (昭和四十七年)

最近の大事件といえは、誰しもあの連合赤軍の事件を思い出す。しかもあの残酷非道な犯罪行為を犯したのが退学者や卒業生を含めて大学の学生中心であったということは、恐ろしい事実である。

彼らの家庭とか中学時代、高校時代のことが報道されたのを見ると、そのほとんどが立派な家庭のおとなしいやさしい性質の子で、学校でもまじめな生徒だったという。それが大学に入ったトタンに変化して急激に左傾し、セクトに入つてさらに変わり、やがて赤軍の兵士になって家にも帰らなくなったとい

うのである。

ある学生の如きは教師の扇動に乗ったくらいさえある。つまり、彼らの思想は大学の中で形成されたというしか考えようがない。彼らの関係した大学が特定の大学に限られているのは、それなりの地盤があつたわけだが、彼らの出身大学の教師からは反省の声も聞かれない。それはそれとしていつどこでこういう学生が出るかわからないと思うと、大学に職を持つ教員としては、安閑としてはいられない。改めて大学の存在の意義について考えなければならぬと思う。

さて、「大学」が研究と教育の機関であることは自明のこととされている。現代日本の大学制度は学校教育法という法律によつて規定されている。大学が設立されるには、設置者が国の大学設置審議会に對して申請し同審議会がこれを審査して可としたものを文部大臣に答申し、国によつて認可されるのである。これが「大学」で、勝手に「大学」を呼称してはならないはずのものである。だから「大学校」などは、制度的には各種学校の一つということになる。「大学」は、「学校教育法」ではこのように規定している。「大学は學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の學芸を教授・研究し、知的道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする」

この目的を実施するためには教員の数が何名以上とか校舎や校地がどれくらいとか、こまかな規定が設けられているので、それを前記の大学設置審議会が審査するのである。いずれにしろその目的は、「教育と研究」とであつて、各大学は学則第一条にこの目的をにかけているのが普通である。亜細亜大学も学則第一条にこの点を明確にしている。これは当然のことで、大学は「教育と研究」の場なのであつて、営利事業でないことは勿論、就職の手段だとか、スポーツの練習場だとか、社交の機関だとかいうのは、

付随した目的である。ましてや大学を革命運動のセクトの拠点とするときはとんでもないことである。さて、この「教育」というのは、一言でいえば「教師」が行なうのであって、「学生」が「教師」を「教育」するのではない。一部の大学で行なわれる大衆団交と称する人民裁判的弾劾行為を見ると「学生」が「教師」を「教育」しようとしているとしか思えないから、内容的に見るとそれは「大学」ではないが、念のため言っておいたのである。「学生」「教師」となるためにはまた別の道があつて、「教師」となる「学習」をしなければならぬ。「教職課程」などがその一つであることを大学生が知らないはずはない。

したがって大学が「教育と研究」の場であるということは、学生にとっては、大学が「学習」の場だということである。「学習」とは「学問」といつてもおなじことである。

そこでこの「学問」とは何かということが問題になる。「学問」を「専門的知識」と割り切つてしまえば事は簡単だが、そうもいかないことは、前述の「学校教育法」の大学の目的にも「知的道德的及び応用的能力を展開させる」と言つて、「知的道德的能力」の「展開」をも「教育」の中に含めていることでもわかる。

ましてや、大学にはそれぞれ大学の建学の精神というものがあり、「教育」には「教育」の理想があり哲学がある。次代の国民生活を荷う指導者を育成するのが「大学」だからである。亜細亜大学が建学の精神として「自助と協力」をかかげるのは教育の理想を示したものであつて、「学問」が単に専門的知識の教授にとどまらぬことを示すのである。

また亜細亜大学学則第一条に、本学の使命として、「特に日本および亜細亜の文化社会の研究と建設

的实践に重点を置き、もって亜細亜融合に新機軸を打ち出す人材を育成するをその使命とする」と記されたのも、一般原則の中の本学の特徴を示したのである。

そう言った意味での「学問」の「教育」は、教師の人格的感化が学生に及ぶということであるから、教室における授業だけではなかなか困難で、課外活動とか寮生活とかの中で教師と学生とが語りあい生活を共にすることによって果される場合が多い。学生側からすれば、単に教室で授業を受けるだけでなく、学生の自治活動に参加したり課外のクラブ活動に加わって友人を見つけて、いわゆる大学生活をエンジョイするうちに自然に学ぶことが多かろうと思う。

だからと言って、授業をおろそかにされても困る、大学の中心はあくまで授業と学習とであることを忘れては困る。

その授業というのは、一定の学科課程によって行なわれている。それは、大学の設立の目的にしたいが、同時に一定の法的基準にしたがって、主として教員が研究して制定したものであるから、教員側からすると、ある総合的な体系を持っているが、学生の目にはばらばらなものに映りやすい。それで、授業がつまらないとか、わからないということになりやすい。そのところで一步ふみこたえて、授業をおもしろく聴くのは自分だ、という風に心を持ち直して、聴いてもらいたいと思う。ぼくら亜大の教師は、学生諸君に満足のない点もあるだろうが、熱心をやってきた。また学生諸君も、今日まで全体として、熱心に聴講してくれたと思う。

大学紛争の嵐の中で、亜細亜大学は「大学が教育と研究の場である」ことを守り通して一步一步その使命に向って進んできたのである。それがいまようやく亜大の声価を高めている。新入生諸君を迎えて

さらにこの道をとともに前進したいと思う。(四七・四・五、THE・ASIA)

(やくまさお〓教養部教授・国文学・国語表現法・研修担当)

(11) 建学の精神と教養部制について(昭和四十四年)

「教養部」という言葉は新制大学以来の言葉ですから、父兄の方の中にははっきりした意味をとりかねる方もあろうかと思えます。そこで、この制度の説明からはじめて、大学教育の一端にふれてみましょう。それにはまず一言、「建学の精神」にふれたいと思います。

例年、新入生を迎えて、教務関係のガイダンスが行なわれますが、その際、私は次のような話をしておりませう。

現在の大学は、それぞれその建学の精神によって立っています。——いや、立っているはずなのです、と言った方がよいかも知れません。戦後は、学制の改革などのため、大学が画一化してしまいました。特色のあった旧制高校が廃止になって大学に昇格してしまったり、専門学校も同じ運命をたどり、有名な私立大学は創立以来あまり年数を経たために創立者の精神を遠ざかったりしたせいでしょうか、大学の特色ともいふべき建学の精神がかえりみられなくなってしまいました。

学生諸君にその母校の建学の精神をたずねても答えられない人が多くなりました。「建学の精神なんものがあろうか」という学生の多いのが現在の状態です。

本学は、前身校の興亜専門学校以来の教育精神にもとづいて昭和三十年大学になった、比較的新しい

大学ですから、建学の精神を忘れるわけにはゆきません。それは、本大学の大学としての存在価値なのですから、これを忘れたら存在の意義を失います。

現在は、いわゆる大学紛争という名で呼ばれている大学教育の大動揺の時代ですが、その原因の一つは、各大学がその建学の精神を忘れたところにあるのではないのでしょうか。

さて、本学の建学の精神を一口で言うことは困難ですが、学則第一条にはこうあります。本学は、学校教育法の定めるところにより、広く一般教育に関する知識を授けるとともに、深く専門の学術を研究教授するを以て目的とし、特に日本及び亜細亜の文化社会の研究と建設的实践に重点をおき、以て亜細亜融合に新機軸を打出す人材を育成するを以てその使命とする。

右の文章の前段は一般的規定で後段が本学の特色使命として目ざすところであります。つまり大学の一般的規定を充足した上に、その特色を盛りこむということであつて、両者は重なっているのです。

なおくわしくは太田学長の「建学の精神を語る」という著述がありますので、私は学生諸君に必ずよく読むようにすすめます。

さて、本学の大学教育は、右の建学の精神にもとづき、その学科課程を編成するのでありますが、大きくわけますと、専門課程と教養課程とに分かれます。

専門課程は、法学部なら法学、経済学部なら経済学、経営学部なら経営学というように専門の学術を教授する課程で、教養課程と言いますのは、人文・社会・自然の三系列による一般教育、外国語、保健体育の三つの部門から成り立つ課程です。

人文系列は、哲学とか歴史とか文学とかの学問で、一口に言えば、人生の意味とか価値とかを追求す

る学問と言えましよう。人間形成の基礎となるべき学科です。

社会系列は社会科学部部門で、本学では専門の経営学、経済学、法学の基礎部門でもあり関連科学の部門でもあります。

自然系列は、自然科学各分野及び概論、方法論等の部門です。外国語と保健体育については説明を略します。

この専門課程と教養課程とのあり方には三つのタイプがあります。

本学は、昭和三十年創立当時商学部一学部のいわゆる単科大学当時は、横割り型で、一学部制ですから「教養部」がありませんでしたが、三十九年に経済学部が出来、総合大学への道をとりましたので、学部が商学、経済学の二学部に分かれ、各学部共通の教養課程を担当する「教養部」が設置されたのであります。

同時に、専門科目を低学年から教授する方が、学生の好学力を刺激してよい結果が見られる、という見地に立って、専門科目を一部分下におろし、高学年生にかえて必要と思われる教養科目のある部分上にあげ、左図のⅡとⅢとの併用型として定着したのが現教養部であります。

全国大学の大体の傾向を見ますと、旧帝大はじめ国立大学では、横割り型の教養部制をとり、私立大学は縦割り型、横割り型どちらかの型が多いようです。東京大学は、旧制一高を中心に「教養学部」を作りましたので、それが教養部をも兼ねているような形らしいです。これは大学の規模とも関係がありますので、一概にどれがよいとも言えません。各大学それぞれの経験と方針とによって行なうべきこと、各大学の研究にまつべきところでしょう。本学も衆知を集めて論議を重ねて今日の型に定着しまし

た。

したがって、本学におきましては一、二年次生の間に所定の単位を取得できませんと二年次で留年するということになります。毎年学年末になりますと私も私ども教養部教員の頭痛の種になりますのが、こういう学生諸君ですので、何とか早く全員進級できるように努力してください。

例年私は右のように新入学生諸君に話をしております。御参考になりましたでしょうか。

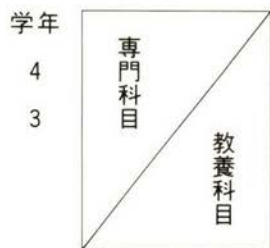
I 縦割り型



II 横割り型



III 楔(くさび)型



(12) 募集校歌選後評（昭和四十六年）

【佳作一席】

法学部二年 今西有三

一、樺さやかに風をうけ

霧なす東白みけり

ここ武蔵野の学園に

自助の気概を基として

切磋琢磨の日々を積む

集うは亜細亜我等が誇り

（以下略）

【佳作二席】

経済学部三年 中野真理

一、紫におう武蔵野の

白くそびえる学舎は

独立不羈の若人が

建学の意志貫ぬきて

心を開く我等が母校

おお亜細亜 亜細亜

（以下略）

力のもった応募作品

二月十九日にメ切られて、集まった応募作品のコピーがわれわれ選者のもとに配布されたのが、二月二十五日である。よく読んで各自意見を持ち寄って第一回の会議を持ったのが、三月二十二日のことである。そこで、佳作、中野真理君。努力賞、南祥一郎君、川村宏君が決った。佳作、中野真理君の選定は各自の意見が中野君の作品を佳作とすることに一致していた、というべきである。努力賞二編につい

ては、それぞれ推薦があつて、その意見が全員に同意されたのである。

ところが、学友会の方に届けられていた一編のあることがわかつて、そのコピーが配布された。それについての意見を持ち寄つたのが、第二回の会合であつた。四月二十四日のことである。その意見は選者すべてこれを中野君の作品の上あるいは同列に置くという点で一致していた。そこで、佳作二編とし、一席を今西有三君、二席を中野真理君としたのである。

その理由は主として、今西君の作品の方が、勇壮であるという点にある。中野君の作品は、よく洗練された表現で完璧に近いが、繊細で、男子学生の多い大学の校歌としては、力が弱いという判断が、選者全員一致の意見であつた。作品の長所が、そのまま校歌としての短所になつていたので、どうにも致し方がない。

今西君の作品は、第一節がきわ立ってすぐれている。特に第一句「樺さやかに風をうけ 霧なす東白みけり」は、武蔵野を象徴する名句で、いわばこの一句がこの一編を佳作一席にしたと思われるほどである。つづいて、「ここ武蔵野の学園に」というつづきもよく、第一節は文句がない。しかし、第二節以下に、原作では「高低緩急綏々として濁世を諫め世を開く」とかいう難解な、よくこなれない表現があつたり、「万古の流れ多摩川に」という第一学生歌と同じ句法があつたりして、欠点がある。これを「校歌」に選定するには、あまりにも荒けずりである。

応募諸君の参考になるかと思うので、私見の添削例を書いておく。

二、靈峰富士を仰き見て

緑の大野ひらけたり

ここ武蔵野の学園に

つたへしいのち若人が

(以下同じ)

三、多摩の流れは変るとも

まことの月の影清し

乱雲漂ふ現世に

(以下同じ)

なお、中野君の作品については、第三節「醒が井の」は歌謡の語句としては難解なので、改めるべきだという意見で山田教授が「真清水の」と改めた。

以下が選評というよりも選定の経緯で、この中に選者全員の意見が含まれている。

個々の作品についてはまた選者それぞれの感想があると思うので私がそれをひとつひとつお伝えするわけにはいかない。したがって以下は選者のひとりである私自身の感想というべきものである。それを二、三述べてみる。

ともかく、この種の応募で、二十数編の作詞が集ったということは、学生諸君の理想のあらわれで頭がさがる。そのひとつひとつが力をこめて作られているので、その努力は大きなもので、うまいとかまづいとかいうこととは別に、愛校心にふれることができる。

経験のある人にはすぐわかるが、三節の詩句をつくるのは、やさしいことではない。しかも題材がある程度きまっている。建学の精神をもちこむことも必要だろう。武蔵野の環境をよみこむことも必要だろう。そしてまた、今までの学生歌になかったような斬新な表現が必要である。それは、心から湧いて

くるものでなければならぬ。応募者は、このように考えて、幾晩か努力したにちがいないと思う。

そうおもえば、どれをも取りあげたいと思うほどである。しかしそれでは「選」にはならないので甲乙優劣をつけることになるが、その際、今度の選で感じたことは新鮮さということである。どうしても、現在の第一学生歌や第二学生歌にひかれて、その語句や調子にまねるようになってしまう。それでは、第一学生歌を抜き出ることができないのである。それならば、全く突飛なものでいいかというところはゆかない。

第一学生歌のできた時は、これは前例がないので作りやすかったかも知れない。しかし、今度はそれを抜き出したものでなければ、校歌としての資格はえられない。そういう見地からすると、今度の作品は、佳作にとどまると思う。

努力賞にもよい作品があった。川村君の第一節は、清新な感じがして気持ちがいい。

一、紺青のまぶしき空より

爽かに風は渡りぬ

この武蔵野に根をおろし

共につちかうアジアの未来

空を越え国を越え

集う我らの志は高く

我ら共に真理求めん

真理求めん

南祥一郎君の第二節は、ごつごつしたところがかえって、捨てがたい。
二、平和の願いを守りつつ

世界歴史の道程を

正し、国家の繁栄を

基盤に、自助を遵守する

(13) 和歌三題 (法学部 F・O・C にてほか) (昭和四十七年)

法学部 F・O・C にて (五月六日)

若きらとひと夜語りて心足らひ朝霧こむる松林ゆく

霧こむる赤松林の下かげにむれさきにはふ富士つつち花

霧こめて富士は見えざれ富士ぎくら富士つつちいまを咲きさかりけり

はかなくて清くすがしき富士ぎくら乙女ぎくらといへばともしも

朝霧のこむる林に羽音してなくうぶ声の山ほととぎす

朝鳥のなく音聞きつつ霧に濡れて林を行けばものもひもなし

目の下に富士の樹海のひろごりて遠うぐひすの声きこゆなり (紅葉台)

学寮御岳合宿にて（四月一日）

きだはしに立ちてあふげばそそり立つ杉の梢を朝雲のゆく
おのづから朝風ふくかそそり立つ杉のこず糸の枝葉さゆらぐ
低山の幾重かすみとつらなりてはての広野も見分かざりけり
あをげらも鳴きはじめたり暁の山の小鳥の聞きあかなくに
鳴る沢のひびきかなしも朝がすみこもりて深き杉の谷より
ついたちのけふ人もなき暁の御岳神社にまうでまつりぬ
神さぶる杉の梢に明がらす翔るを見れば神代おもほゆ

葉山にて（四月十四日）

朝なぎの葉山の海見ゆ朝鳥のしきなく庭の木々の木の間
裏山の木々を木づたひ鳴く鳥をこの朝床に寝ながらに見る
若きはうまいせりけりきぞの夜おそくまで歌をつくりあぐみて

(14) キャンパス雑詠抄 (昭和四十八年)

見おろせば日ざしあかるきキャンパスを学生たちは思ひもなげに
よにもことなきがごとしもキャンパスを行きかふ学生の姿のどかに

懸命に勉強すると書く文の文字の誤りを何といふべき

読み書きをなほざりにせし政策のあやまりつひにここに至れり
学生を責むるべからず学生をかくみちびきし責めを思ふべし

七百の新生はわが声に応じて姿勢を正して礼す

乱れたる教育の場に大学の正しき姿を示さむと思ふ

見下せば色とりどりの服装の学生ゆききす構内大道を

キャンパスに学生のみちあふれつつ大学ことなくすごすうれしさ
大方の大学は学生運動に荒れはてたれどわが大学は

吸ひさしの煙草手にして入り来て処分を受くる学生いたまし

親にさかひ兄とあらそひ教師らとたたかひていかになりゆかむとす
処分せし学生たちのゆくさきの心にかかる教員われは
マルクスの教へにくるふ若者の大勢しむる世とならんとす
処分する我もつらいと嗚咽して処分を告げぬ学生部長は

校庭にけふ珍らしきざわめきは卒業判定を見る学生ら
叫びあり笑ひこゑあり賑やかにどよめく声よ学生の声
留年を知る学生うちしをれ家にかへりてひとりなげくらむ
失敗は若ものの常、このなげきいましめとして立ちあがらなむ
にぎはへる声々きけば心なごむストライキなくロックアウトなく

(48年秋 亜細亜大学新聞)

二、随想折々 —— 戦後大学の思想問題をめぐって他

(四十三年～五十年代)

- (1) 武蔵境で下りて(桜橋・山林に自由存す・鳴外と太宰の墓・「武蔵野夫人」等) (2) 自然 (3) ユージン・ライオンズ『ソヴィエトの神話と現実』を読んで (4) 和歌と学問 (5) 古都鎌倉 (6) 教育の中心 —— 台湾を訪ねて —— (灯台) (7) 回顧と展望 (8) G・M・トレヴェリアン(研究余話) (9) ソルジェニーツインとドストエフスキー (10) ことば!(灯台) (11) カーター米大統領の就任演説 (12) 雲海の南ア連峰と富士(F・O・C短歌) (13) フィリップ・カール・ベータ先生 (14) 日本への回帰 (15) 読書のすすめ (16) 学園の歴史を生きる (17) 御製の英訳とエール密書 (18) 精神病とノイローゼのちがい (19) 富士山十首(F・O・C山中湖畔から) (20) 長谷川如是閑の和歌 (21) 冷泉家と「敷島の道」 (22) 磐城・湯本の御製歌碑 (23) 私の「アルバイト考」

(1) 武蔵境で下りて (昭和四十三年)

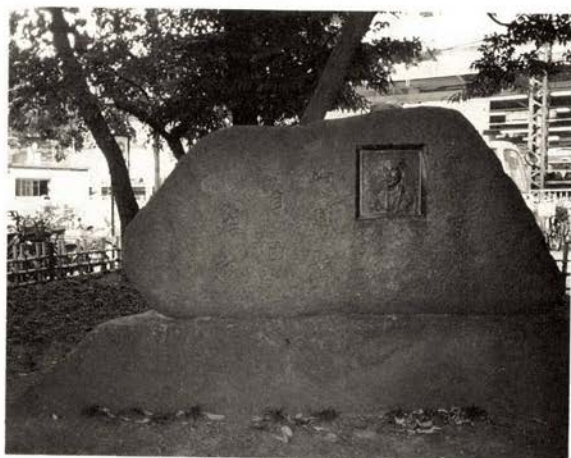
桜橋

「今より三年前のことであった。自分は或友と市中の寓居を出でて三崎町の停留場から境まで乗り、其処で下りて北へ真直に四五丁ゆくと桜橋という小さな橋がある。」

国木田独歩の名作「武蔵野」の一節である。「境」は、いま駅の名が「武蔵境」と変ったが、地名の「境」は残っている。「境」の名が文学作品に登場したのはこれがはじめてであろう。境の駅から北に「四五丁」というのは、四五百計のことである。

「桜橋」はいまもある。昔は、木の橋だったというが、いまはコンクリートの橋である。その橋のたもとに独歩の記念碑が立ててあって、この一節が、文学散歩で有名な詩人、野田宇太郎さんの筆で刻まれている。それほど、この一節は有名なのである。さて、独歩の文章はこうつづいてゆく。

「それを渡ると一軒の掛茶屋がある。此茶屋の婆さんが自分に向って『今時分、何しに来たのだ』と問ふた事があった。自分は友と顔見合せて笑って、『散歩に来たのよ、ただ遊びに来たのだ』と答へると、婆さんも笑って、それも馬鹿にした様な笑ひかたで、『桜は春咲くこと知らねえだね』と言った」とある。いま、勿論この「掛茶屋」はない。いま、この辺の人はもう、「掛茶屋」という言葉さえ知っていないかどうかわからない。若い人ならなおさらである。「掛茶屋」というのは、路傍によしずなどをさし



独歩詩碑—山林に自由存す—

かけて道を通る人を相手にする茶屋のことを言う。おそらくいま境にはこうした店は一軒もあるまい。それに「何しに來ただア」とか「知らねえだね」というような、昔の関東地方の農村に行なわれたと思われるような方言をつかう老婆もいないはずである。

独歩が「武蔵野」を書いたのは、明治三十一年であるというから、いまから七十年も昔のことになるのである。その文章が新鮮で生き生きとしているために、七十年も昔のことと感ぜないが、題材はすっかり変ってしまったわけである。独歩がたどった小金井堤は、昔ながらであるが、名所の桜は戦時中の伐採と自動車の排気ガスとのために衰えて、昔の美しさを見るよしもない。また独歩が「四顧し傾聴し、諦視し、黙想す」と書いた林は境から消えてしまった。そのあとに亜細亜大学が聳えているというわけである。ただ独歩が林中に思索した心は、亜大のキャンパスに残してほしいと思う。

ある友

もう一つ。前に引用した桜橋の一節に出てくる「ある友」というのは、「武蔵野」によると「今は判官になって地方に行つて居るが」と書いてあるが、むしろ彼の

愛人であつたらしい。この恋は悲劇的結末となつたが、そこから書きはじめて、執拗に一人の女性を追求していったのが、有島武郎の「或る女」(大正八年)である。この一節の後日譚としてはあまりにもいたましいが、文学史の不思議な因縁を感じさせられる。

山林に自由存す

さて、独歩は、武蔵境の隣りの三鷹駅にも、碑がある。「山林に自由存す」という彼の詩の一句が、肖像とともに刻まれて、三鷹駅の北側に建てられている。

この碑のそばを通りながら、

「山林に自由存す、われこの句を吟じて血のわくをおぼゆ」という彼の詩をくちずさむ人も多いであろう。

鷗外と太宰の墓

三鷹駅から南へ、これも五、六百メートルもあろうか、禅林寺というお寺があつて、その墓地に、鷗外と太宰治の墓がある。

鷗外の墓石は大きく、有名な遺言どおり「森林太郎墓」と中村不折の書を刻んで、堂々と建っている。その前に、井頭公園ぞいの玉川上水で死んだ太宰治の墓がつつましげな風格で建っている。いつだったか訪ねた時、ちょうど椿が咲いていた。鷗外の墓には真赤な椿が丈高い木に一杯に咲きさかり、太宰の墓には、白い椿がしずかに咲いていて、心うたれるものがあつた。

「武蔵野夫人」

大岡昇平の「武蔵野夫人」（昭和二十五年）は、戦後の名作の一つであって、武蔵野の名に因縁が深い。その舞台となった「恋が窪」は武蔵境からはちよつと距離がある。武蔵国分寺のあとのあたりの国分寺駅の北にあたる。そこから出てくる「野川」という川は、いまでも小さな川で人の注意をひかないが、武蔵野の文化にとっては欠くことのできない川である。「武蔵野夫人」の主人公である勉という戦争がえりの青年が、興味をもったのもこの野川であった、というので、この作品には、独歩が七十年前武蔵境で見たり聞いたりした当時の武蔵野の面影がしのばれるのである。何年か前、私も「野川」に興味を持って、その源から流の末まで目で見えてたしかめたいと思って、努力したことがある。地図の上では、多摩川に落ちることがわかっているが、それをまちがいなく自分の目でたしかめるのは、大変なことだと思つた。しかし、そうした確実な知識というものを身につけるといふことは楽しいことである。

(2) 自 然

いまのような時代に、「自然鑑賞」などというと、逃避のように見られやすいが、「自然」とはそんなものではない。われわれの心が人生の出来事にふれて意気沮喪する時、自然はわれわれの心をなぐさめてくれる。なぜそうなるのか、考えてみればわからなくなることだが、事実である。大自然の懐ともいふべき絶景の中で自殺する人の心理を私は知らないが、自然を最後の友として逝くのではなからうか。自

然は人の心の友となり、人の心をそだててくれる。

宮沢賢治という詩人は、「風とゆききし、雲からエネルギーをとれ」とうたった。高村光太郎の詩にも「自然」に対して、「父よ」と呼びかけた語があった。ホイットマンは「自然」をほとんど神とした。

たしかに「自然」はそういう力をもっている。「母なる大地」という、「大地」ということばにも「自然」のおもかげがある。しかし、自然からわれわれが力をとるのは、その道を学ばなければならない。

芸術とか文学の多くはそうした道を教えるものである。だから子どもには大きな自然の風景の美しさはわからない。幼ない子どもに山頂の美しさを見せてやろうと思っていたら、まわりの景色などには関心なく、その草の中に見つけた虫を追いかけることがあった。だから、きまった方法があるわけではないが、自然のうつくしきを感じてそこから力をとるにはおのずからその道のあることは疑いない。

ある科学者は現代文明の異常な混乱の原因が人間の過密現象にあると言った。鼠の群を過密状態におくと闘争と乱交との世界となって、ヒッピーや瘋癲のようなものまで続出するということである。

この反対が、風光明媚な土地から大人物が輩出するということだろう。それに精神病院のあるところはたいがい風光明媚なところだ。これは自然が人の心をいやす力をもっているからである。

金もいらず、金にもならぬが、大自然にあつて道を学びたい。

(3) ユージン・ライオンズ『ソヴィエトの神話と現実』を読んで（昭和四十五年）

ソ連の現実を描く

ユージン・ライオンズ著／小穴毅訳『ソヴィエトの神話と現実』。原名は Worker's Paradise Lost とあるから、「失われた労働者の天国」という意味で、「労働者の天国」と銘打って建国したソ連が、天国と似ても似つかぬ世界を現出したことを書いている。副題が「共産主義五〇年のバランス・シート」とあり、ソ連革命建国以来五〇年間の歴史がつぶさに描かれている。内容は、マルクス・レーニン主義の標榜するところと違ってソ連の現実がどんなにみじめなものであったかを、実証的に説明している。

私なども、学生時代に、マルクス主義的計画経済が社会主義を実現する方途であると考えたことがある。経済学もろくに勉強しないでそう考えたのだからお話にならないが、そんな風な考え方をするのは私ばかりではない。

社会主義の「悪夢」

資本家、金持は利潤追求一点張りで、貧しい者を支配し酷使する。金の力で政治も道徳も破壊する。そんな人間をそのままにしておいては、人生は闇になる。現に闇だ。国家も亡びてしまふ。よろしく、金持から金をとりあげて、各人がその労働に応ずる報酬を受け、誰からも支配されない自由の世界を生きていくことができるようにしなければならぬ。利潤を追求するようなことはやめて、必要なものを必要なだけ作るようにしなければならない。国の財宝は平等に分配して、お互いに侵すことなく侵かされる

こともなく、支配することもなく、生活するのである。

ざっとまあ、こんな夢を抱いて、そのためには、金持の手から政治的権力を奪い取らねばならない、それが社会主義を実現する道である、と考えるのである。

いま考えてみると、右のような考えには大きなまちがいがあることがわかる。簡単に言うると、右の考えの中には、人生はこれこれだけでなければならぬ、という考えが強く、また、そのようにできる、つまり社会とか国家とかを自分の考えるように変革できる、という考えがある。頭の中にえがいた理想のイメージというものにあわせて、社会とか国家とかを変革しようというわけである。ところで理想のイメージというのは、現実の人生の中の悪と思われるものがない世界をいうのである。人間の欲望は、自己保存につながるもので、それは悪いものであるとして、その欲望のない世界を考えるわけである。そのため、自分の欲望をなくそうとするのではなく、欲望の働かない世界を作ろうとするのである。その理想の世界では、人は悪を忘れることになる。

“自覚のない理想”

つまり、悪のない世界になるのである。なぜなら、現実の人生の悪は、社会の罪であるから、社会が変われば悪はなくなる。われわれが悪をなさうにももう悪をすることができない世界ができるのである。自分が悪人であることを気にすることはない。それは自分が悪いのではない。社会や国家が悪いのである。自分が悪いなどと考えるのはセンチメンタルである。——こう考える。

自分の頭に描いた理想のイメージに、自分を変身できるということは、その人間に自信を与える。社会主義の活動家が、文字通り活動家でありうるのは、この自信にもとづく。これは別の言葉でいえば、

無反省、傲慢というものである。人生から、また自分の心から悪をとり去ることはできない。自分は凡夫である、という実感があると、人生がイメージ通りになるといふ自信は生れない。自分の力に応じたイメージを作り出すようになる。悪はいつでも自分の心の中にあると思えば、社会や国家の組織が変わっても、自分は悪人であることに変わりはないはずである。これが自覚である。

悪のない世界を描くことはやさしい。共産主義を頭の中で描くことはやさしい。しかし、それを表現できると考えることは、大きなあやまりで、要するにこれは自覚がないことに帰着する。自分でおれは聖人だと考えているものにとつて聖人はもっとも遠い存在である。理想のイメージに社会国家を変革しようと考えることは、自己を神と化すことに他ならない。

真理と信念はちがう

マルクシズムは絶対の真理だという。絶対の真理などというものは、抽象的な論理方式にしかない。一十一二というようなものを絶対の真理というのは、マルクシズムのよくいう必然性ということばと同じで、人生に関して絶対の真理を把握したと自称するものは例外なく間違っている。絶対の真理をつかむことができないということが絶対の真理なのである。われわれには各自、信ずるところがあるのみである。これはめいめいの信念で、普通の真理ではない。ましてや、絶対の真理などといえるものではない。

人生社会国家人類の真実は、何よりも現実の人生をありのままに観察することからはじまる。人生の観察とは人心の洞察であるが、これも他人の観察の基準になるのは自己の心情であるから、自覚反省が思考のもととなるのである。人々、己れを知る道から出発せねばならぬ。それは他人と比較することと

同じでもある。表現は自己反省で、他の観察は比較である。

まちがっていた利潤追放

利潤は悪である。こう考えて利潤を排除したソ連共産主義社会の建設に、餓死者五百万が生れたという。ソ連が、革命以来五十年を経て、利潤とか市場とかを考えなくてはならなくなったのは、最初の考えがまちがっていたからである。そのまちがいの根本は、人生とか社会とか自己とかいう人間の真実をありのままに認めることを怠ったところから起ったもの。

むかし私は山本勝市博士の「計画経済の根本問題」という書物を読んで、その中でマルクス・レーニン主義にもとづく市場否定の計画経済が、国民経済を崩壊する過程を知って、学問のまちがいが恐ろしい結果を生むことを知った。山本博士の説は有名な経済計算の問題の指摘で、ミーゼスとかハイエクなどの説とともに、マルクシズムの有力な経済学的批判である。

この批判の根本は上述の思想上のあやまりの指摘で、経済生活の事実の認識を怠って空想的な計画経済をあこがれた結果のまちがいを指摘したのである。最近ソ連から帰って、ソ連における価格問題についての研究を発表した吉田靖彦氏の論文によると、コンピュータも遂に市場による価格形成に代ることができなかつたことを書いている。これはユージン・ライオンズの説を裏づけるものである。

自由も個人もない

マルクシズムは科学的真理であるというぬぼれば、実はマルクスのうぬぼれにすぎなかつたので、世界、国家の事実は、マルクスの予言のとおりにはならなかつた。それどころか、プロレタリアの経済的な向上を約束したマルクシズムの経済政策は、逆に、共産党員以外のすべての人間のプロレタリアート

化に終わってしまったのである。貧しき者の解放を謳ったその革命は、すべてのものの束縛に終わってしまったのである。中国の共産主義革命が如実にこれを示している。テレビなどで見る中国大衆の大集会に、老若男女無数の人々が、手に手に毛語録をかざして、毛首席の万才を叫んでいるのを見ると、ヒトラーに率いられたナツイチオナーレ・ゾツイアリスムス即ちナチスの大集会を思い出される。そこに自由な個人はいない。つまり共産主義によるプロレタリアートの解放は、共産黨員以外の全国民のプロレタリアート化にはかならずわかれるのである。

共産主義実施五十年の歴史の事実を究めて理論の是非を検討しなければならぬ。それが現代の知識階級の仕事である。

(教授、教養部長)

(4) 和歌と学問 (昭和四十五年)

「貧窮問答の歌」で有名な山上憶良は、奈良時代の大歌人であって、「山柿の門」といつて柿本人麿と並称された人である。彼は同時に大唐に留学した当時の新知識で、儒教・仏教に通じた外国学者でもあった。

その山上憶良の長歌の中に、こういう意味の文句がある。——神代から言い伝えて来たことに、「そらみつ 大和の国は 皇神の いつくしき国、言霊の幸はふ国」と、語り継ぎ、言い継ぎつづけてきたのだ。このことは、現代の人もことごとく目前に見て知っている。「好去好来の歌」より——と。

「皇神」は「祖先の神々」の意味で、「皇神のいつくしき国」は「神代の定めそのままに、——憶良の歌詞で言えば、「地ならば大君います」天皇統治の伝統のたえることのない、という意味である。「言霊の幸はふ国」は、簡潔に言えば、「和歌の盛んな国」という意味である。つまり、「皇神のいつくしき国、言霊の幸はふ国」とは、「建国の精神のさかんな国、和歌のさかんな国」という意味である。前者は、宗教倫理であり後者は文学芸術である。この両者を表裏の關係に置くのが、憶良の伝承した歌詞の意味であつて、ここに日本上代の学問の体系を見ることが出来る。万葉集の歌人たちは、その意味で、日本流の学問に生きたのである。

平安時代の初期の学問が大唐一辺倒の漢詩文中心であつて、それに対する「古今集」が、和歌の復興であつたことはよく知られている。当代一の漢詩漢文をのこした菅原道真是遣唐使をやめて、「新撰万葉集」を撰している。道真の和歌は大鏡に残されて、今日まで愛唱されている。彼も立派な歌人だったのである。「古今集」の撰者の紀貫之は、明治の子規に痛撃されて歌人としての榮譽を失つたが、「男もすなる日記といふものを女もしてみんとするなり」ではじまる「土佐日記」の和文は、やがて「源氏物語」を生み出すかながきの散文文学の嚆矢をなすものとなつた。「古今集」の序文は、貫之が書いたものだが「ちからをもやはずして、あめつちをうごかし、めにみえぬおに神をもあはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるはうたなり」と言つた。歌は宗教倫理、——人の心をみちびくもの——と言うのである。歌を詠めないことは教養の低いこととされ恥とされたのである。こうして武士もまた歌を学んだ。戦国乱世の中から道灌、謙信、信玄、秀吉たちの秀歌が生れることになる。

では、僧侶はどうだろう。聖徳太子が詠まれた長歌は「日本書紀」に残っているし、短歌は「万葉集」と「法王帝説」とに残っている。太子は三経義疏の著者であるとともに歌人であったということになる。また「万葉集」には沙弥満誓など僧侶の歌もある。鎌倉時代になると、「愚管抄」の著者慈円、道元、明恵には歌集があるほどで、仏の道と歌とは両立している。

鎌倉時代の高僧として名高かった無住法師は名著「沙石集」に、

「和歌の一道を思い解くに散乱塵動の心をやめ、寂然静閑なる徳あり。又、言すくなくして、心をふくめり。惣持の義あるべし。惣持といふは、即ち陀羅尼なり。」

と言っている。「陀羅尼」というのは、梵語 *Dharani* を総持・能持と訳し、「真言」の意味である。この一文はやや抽象的だが、同じことを述べた次の一文などさらによくこの消息にふれているといえよう。

「離別哀傷の思ひ切なるにつきて、心の中の思ひを、ありのままにいひのべて、万縁をわすれて、此の事に心すみ、思ひしづかなれば、道に入る方便なるべし。」

「心澄み、思ひ静かなれば」ということは、短歌創作の機微にふれている。そして、その「思ひ」が、仏道に入るたよりとなるというあたり、宗教と芸術との一致を説くともみられよう。表現による解脱感情が、礼拝専念の忘我の感情に通ずるというのである。

国学の開祖と言われる契沖というのは、この無住の歌論の継承者である。万葉集の研究で有名だが、彼は、儒仏神三道を貫くものが和歌であると喝破した（「厚顔抄」）。本居宣長の「うひ山ふみ」は、学問入

門の手引書であつて、国文学の入門書ではない。彼は、古典の学習と和歌創作とを、日本人の学問の第一歩としてあげたのである。明治維新の志士の主流はこの伝統をついだ。維新志士和歌集が集大成せられたとしたら、それは万葉集をつくものとなるであらう。

こうして、明治まで、盛衰はあるが、日本の学問の中核は和歌であつた、ということができると思う。しかし、明治以来の学問は、西洋の学問を追うことに急で、和歌を中核とする日本の学問の伝統とは離れてしまった。最近、科学の限界を指摘して宗教倫理の復興を説いたトインビーの言葉などを読んで、改めて、和歌と学問の関係をかえりみさせられたのである。

（教養部教授 国文学者）

(5) 古都鎌倉（毛利と島津）（昭和四十五年）

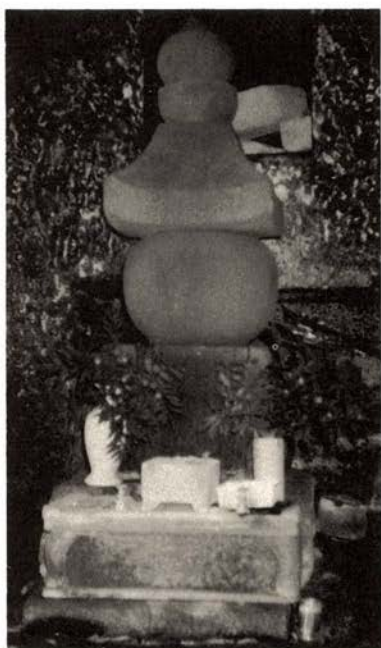
いつだったか、忘れたが、古都鎌倉をぶらついて、大江広元の墓の前に出たことがあつた。大江広元というのは源頼朝をたすけて鎌倉幕府の体制を作つた学者である。その時、そのそばに毛利季光と島津忠久の墓があつて、驚いた。毛利は幕末から明治にかけて活躍した長州藩の祖先であり、島津は同じ役割を果した薩摩藩の祖先であるというのである。毛利は大江の出であり、島津は頼朝の近侍だったとか書いてあつた。

この薩長二藩の祖先は、これで見ると、頼朝の時代に鎌倉にあつたが、それぞれ地方の守護となつて下り、力を養い、戦国群雄の一となつたが、秀吉の全国統一に屈服した。そして関ヶ原の合戦の時、両藩とも家康に抵抗した。関ヶ原の敗戦のさなかを、薩摩の武士が一同となつて退却し、例の丸に十字の

旗印をひるがえして堂々と撤退したという話は、薩摩武士の豪勇と団結心を伝える。江戸時代になっても、幕府の隠密は、薩摩には入ることができなかった。入れば生きてもどることはできなかったという話である。薩摩の方言はまねることができないからだ、という話もあるが、それは、江戸の隠密の言い訳としておこう。

この島津が頼朝の近侍だったというのは面白い。元来、源氏というのは、「源氏物語」でもそうだが、皇族の出身者という意味で、源頼朝は清和源氏といわれるように、清和天皇の出であるということ、そればかりではあるまいが、勤王の家柄である。頼朝もそうだが、その子の源実朝などは、今日とも変らぬ勤王思想の持主であった。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも



源実朝墓（寿福寺）

というのは、実朝の願いである。だからこそ彼は北条氏に殺された、と言ってもよい。

頼朝の側近にあつて、鎌倉幕府政治中のブレインとなつたのが、大江広元である。大江広元のことはよく知らないが、大江氏が藤原氏の専政に対する反対派であつたことは明らかであろう。後三条天皇の親政は、

藤原氏の摂関政治すなわち藤原氏の独裁政治に対する改革であったが、その有力ブレインの一人に大江匡房（まさふさ）という学者がいた。

大江氏は、学問の家柄である。この大江は、阿保親王の出ともいわれている。そうすれば、歌人在原業平の在原氏と同族なのである。

「伊勢物語」の主人公、在原業平は、美男で歌人で無法者でもあったが、彼は皇族の出である。父は平城天皇第一皇子阿保親王であり、母は桓武天皇の皇孫である。業平の仕えた惟喬（これたか）親王は、歌人紀貫之で有名な紀氏出身の、すなわち紀名虎の娘を母とした。そのために、藤原氏出身の母をもつ清和天皇と皇位を争って敗れた。その時のブレインが在原業平であつたらしい。漢文学全盛時代に歌人として立ったのが、在原氏とか紀氏とかいうのもおもしろい。外国思想の教養で政治の実権を握るものに対して、いわば一種の国民思想で戦つたのが在原業平たちといえないだろうか。

惟喬親王と在原業平や紀有常（きのありつね）などの集りについて「酒をのみ飲みつつやまと歌にかかれりけり」（公務を休み漢学に精を出さず、酒を飲んで歌に熱中するだけだつた）と書いてあるのは、幕末志士の悲憤慷慨の酒宴と同じともとれる。東下りの「身を要なき者と思ひなして東の方にすむべき国求むとて行きけり」という有名な一節は、中央政局において一敗地にまみれた落魄の志士の放浪の旅とこれぬこともない。

この在原業平と兄弟であつたのが大枝氏で、大枝氏が大江氏になつたのである。在原氏は長くつづかなかつたようだが、大江氏の方は、学問の世界にかくれ、それこそ在原業平の遺志をくんで、院政時代、鎌倉時代とその勤王思想をつたえ、やがて毛利となつて地方に下り、秀吉、家康と天下を争つたが敗れ

て、地方に蟠踞し、やがて、明治維新前夜からふたたび中央に返り咲いた、ということになる。これと、頼朝の近侍の島津の後裔との協力が、明治維新の原動力といわれている。まさか、関ヶ原の戦の仇討というわけでもあるまいが、不思議なめぐりあわせを感じるのである。

幕末の薩長連合は、一回かぎりの、その意味では偶然的歴史の事実であるが、七百年前、この大江広元の墓のあたりで顔を合せたこともあろう二人の武士の、六百年後の末裔の連合だと思つくと、歴史の因果を感じないではいられない。あまり割り切つて考えるのもどうかとおもうが、歴史の血脈というものは、おもしろくもある。かなしいものである。

古都鎌倉の、人の訪れることもまれな、大江広元の墓の前のくさむらの中に立つて、ふと想つたことであつた。

(THE ASIA 45年4月1日号)

(6) 教育の中心 (灯台THE ASIA) — 台湾を訪ねて —

年末のあわただしい時期であつたが、中華民国台湾を訪ねて、教育界の空気にふれる機会を得た。

私の参加したセクションは「芸術・情操教育」の部門で、主として書画・音楽教育の部門であつたが、道徳・宗教教育と芸術教育との関係について、真剣な討議が行なわれた。

さて中華側教師諸氏の発表によると、現在中華民国の美術教育の目標の一は、「中華文化の復興」ということで「中夏(華)文化の精髓として中国書・画」を美術教育の中心にしているということであつた。

このことは、国の教育全体について言えることで、孔孟の教えである儒教をバックボーンとしている

ことがひしひしと感じられた。教育の施設・方法は西欧風（日本の戦前のものにそっくり）であるが、その根本精神は、中国文化の伝統の継承にあることがわかった。

台北の一中学校を見せてもらったが、実に清純な感じで、それでいて自由闊達なところがあって、うらやましいような感じだった。儒教倫理の感覚が一本ピンと筋を通してという風だった。

自国の文化と歴史の尊重を教育の中心にすることとは中華民国に限らない。韓国でも三国時代の英雄を顕彰していた。インドそのほかでも同じだろう。欧米諸国は勿論のことで、各国みな自国語と自国の文化と歴史の継承が教育の主目的で、そこに立ってはじめて国際的な文化交流に参加しうるのである。自国の文化を知らない人間は他国の文化を知ることができない。日本人がエコノミック・アニマルと言われるのは、日本の中でもエコノミック・アニマルだからである。極端に言えば日本そのものが精神文化の伝統を忘れてエコノミック・アニマルになってしまったからである。

ともかく、大変なことになってしまった、というのが、台湾を視て日本をふり返っての印象である。

(7) 回顧と展望 (THE ASIA 100号) (昭和四十五年)

亜細亜学園というのは、考えてみれば、教職員、学生あわせて約八千人の集団社会である。卒業生を加えれば、大変な数になる。この集まりがひとつのまとまりを保つためには、その内部の人々の心が通い合っていないければならない。そのために生れたのがこのTHE ASIAで、この百号がどんなはたらきをしたのかふりかえってみると、一々数えきれないほどいろいろの役割を果して来ていて、今では

とり立てていうこともできないほどである。簡単な例をあげてみても、試験の時間割の発表など、THE ASIIAの無かった時はどうしていたのか、思い出せない。教員の動静などでも、各学部や部にかかれていて会うことが少なくなってしまったので、今ではTHE ASIIAで知ることができるが、THE ASIIAが無かったらどうするだろうと思うと、他に方法が無いような気がする。

戦後の日本の大学は戦前にくらべて急激に大量化したのに、それに対する情報対策は十分に行なわれなかった。学生が疎外されると感じたのも無理はない。学生ばかりではない。教員にとっても大学の様子がわからなくなってしまうと、自分の大学が占拠されたことをマスコミで知るといった悲喜劇が起ったりしたのである。これで、学園の統一が保てるわけではない。

その点、企業の方が敏感で、大企業はみな部内情報に金をかけている。亜細亜学園がいわゆる大学紛争にまきこまれなかったことは、教員と学生との信頼関係の絆を切らなかったことで、今日になってみると、かけがえのない歴史の宝になったと思う。大学紛争にまきこまれた大学がいま、その歴史の傷をいやすのにどんなに苦労していることか、またその傷がいやしがたいものとして残っていつまでも再発するおそれとなって学園の人々の心をおびやかしているか、想像もできないほどである。そんな中で今日亜細亜学園が平和に教育と研究を進めているのは、文字通りあり難いことなのである。

大学紛争の一般化した当時は、紛争のないことが沈滞していることだと考えたむきもあった。「闘争」を目的にする考えからすれば「平和」は敵になるが、「敵」ともいえないので、「沈滞」というのである。しかし「沈滞」とは「無気力」だから、無気力で平和を守ることができない。亜細亜学園をいわゆる大学紛争から守って「大学」の存立をつづけるには、容易ならざる「気力」が必要であったのである。「闘争」と戦う

「気力」が必要だったので、この気力が当時のTHE ASIAにみなぎっていたことが、私には思い出される。亜細亜大学は「闘争」意識がひくい、とか、右翼だとか、アカデミックではないとか、何とか学園の気力を削ごうとする誹謗がおこなわれる中で、THE ASIAの果して来た役割は本当に大きなものがある。日本のジャーナリズムが大きく左翼化していることは累次の大事件の報道にあらわれたことであるから、そういう風潮に抵抗すれば、右のような誹謗に面しなければならないのは当然のことである。

私は本学園に籍を置いてから約三十年になる。碌々為すこともなかったが、この頃何かやると本学園の求めてきた良さが目にあられてきたように思われる。学園内に各種の暴力学生のようなものがおらず、学生は自由でしかも自主的に清潔な環境を維持して、授業やクラブを通じて学習につとめている。この状態を支えているものは、他ならぬ教員、職員、学生のひとりひとりの胸にある本学園の理想なのだから、それが弱くなってイデオロギーの侵入を許せば、いまの日本のおうよその大学と同じように、大学構内とは言いがたい、乱雑狂乱の光景を呈することになるのだろうと思う。

学外のマスコミの影響力がますます強くなる中で、亜細亜学園が、一すじの道を貫いてゆけるかどうか、その道のパイオニアとなるのがこれからの「THE ASIA」だと思う。

(教養部教授・国文学・国語表現法担当)

(8) G・M・トレヴェリアン (昭和四十九年)

昭和二十三、四年頃だったかと思う。私は文寿堂という当時の新興出版社の手伝いをしていて、米英書の翻訳入札に出向いたことがあった。中井清太郎さんという一高の先輩が責任者で、あてずっぽうの翻訳料をつけて入札したが、その中に、トレヴェリアンの『英国社会史』(一九四四年)があった。私はイギリスの史学など門外漢だったが、入札してしまったので、意気揚々と大冊の原書を持ち帰った。ところが、中井さんがあわてて、たしか林健太郎さんに照会して、はじめて名著であることがわかったのだと思う。結局、林さんが翻訳してくださることになって、出版することができた。

邦訳を読むと、史料に文学作品を縦横に使った英国社会史で、読み易く親しみ易く、こんな社会史が日本にもほしいものだと思つづく考えた。

そのとき私はG・M・トレヴェリアンという歴史家の名前を頭に刻みこんだ。彼は有名な『万国史』の著者マコーレーの甥にあたるのである。さて、彼の『イギリス史』の邦訳が出たので、早速購入してみたところ、その巻頭にJ・H・プラムという人の「G・M・トレヴェリアン」という論文の邦訳があつて、私ははじめてトレヴェリアンの全貌をうかがうことができた。

それによるとトレヴェリアンは現代屈指の歴史家であつて、数々の名著があり、その絶頂を形成するのが、最後の著作となつた『英国社会史』であるということである。

『英国社会史』は一九四四年の出版で彼は一九六二年に死んでいるから、最後の著作とは言えまいと思

うが、「著作目録」を見ても晩年の大作であることに変わりはない。この書物の成功について述べたあとで
プラム教授はこうつけ加えている。

「おそらく最もしばしば忘れられ、無視されていることは、彼の文学的技巧の老練さである。トレヴェ
リアンは生れながらの作家であり、生来の話上手である。」

「歴史家に見られる自在な詩心というものは、わが文学独特の現象であり、トレヴェリアンのため
にイギリス文学史は特別席を設けてくれるであらう。」

「もし一つの特色を選び出すとすれば、この詩人的気質が当然それに当ることになる。けだし、
あらゆる歴史家の中で、トレヴェリアンはイギリス史の詩人であるからである。」

これはプラムのトレヴェリアンに対する讃辞であるが、トレヴェリアン自身はこう言っている。

「われわれすべてに歴史が訴えるものは、つまるところ、詩的なものである。」

彼のこの歴史観はケンブリッジ大学の地位を捨てさせることになったのである。

それについてプラムの説明している言葉は、日本の史学界の傾向とも考えあわせて興味深いもので
ある。

「……………トレヴェリアンが二十世紀になってケンブリッジ大学でますます幅をきかせてきた、重箱の
隅をほじくるような煩瑣な学風の萎縮的な零囲気から逃れたということである。重要な事項にも些細
な事項にも等しい熱意をもって行なわれる論争的学風の長所なるものは、トレヴェリアンにとって、
少しも魅力がなかった。彼は流砂のように変り易い歴史上の抽象的論議にはますます嫌気がさしてい
た。ケンブリッジ大学の歴史家が専念している経済史、外交史、国制史のごとき歴史の分野も、トレ

ヴエリアンをあまり引きつけなかった。それらは物語を欠き、人間生活のぬくもりを欠いていた。これらの理由で、彼のうちなる芸術家はそこを逃れ、それを主張してやまなかった。」

このトレヴェリアンに立派な文章を書くことを教えたのは、ハロー校のロバート・サマヴェルであったということである。サマヴェルは、ウィンストン・チャーチルの先生でもあったということである。こういう話を讀むと、イギリスでは、大歴史家は大文章家であったということになる。

そうするとJ・T・アダムズの『米国史』(The Epic of America—1931)は、トレヴェリアンの『イギリス史』(History of England—1928)に競うものであったのかも知れない。そんな想像がわいてくる。英語国民の力のもととはこんなところにあるのだろう。

米英人の現実的精神というものも、この歴史の事実に詩を感じるところにあるのだろう。

アジアでは唐がそうだった。太宗以下房玄齡、魏徵、杜如晦たちはみな、政治家であるとともに歴史家であった。それが国力のみなものであった。そしてその歴史とは実証であるよりもむしろ文学であったのである。(THE ASIA 四九、四、二五)

(9) ソルジェニーツィンとドストエフスキー (研究余話・49年5月15日)

ソ連作家ソルジェニーツィンのマルクシズム批判とその追放は、一九七四年の大事事件の一つである。

日本の大新聞はこの問題を言論自由の問題としか取扱わないが、それにまちはないが、問題の核心は、ソルジェニーツィンの共産主義批判にあるのである。



ドストエフスキー



ソルジェニーツィン

ソルジェニーツィンはソ連を追放されたが、それに先立って昨年秋、ソ連指導者にあてて長文の書簡を送っていたことが明らかになった。

「週刊朝日」三月二十九日号は「独占特報」と銘打って「共産主義を捨てロシアに帰れ」というセンセーショナルな題をかかげて、「ニューヨーク・タイムス」に発表されたこの書簡を紹介した。

いずれ全文の訳文が発表されるであろうが、たしかに注目すべき内容である。

この書簡を送る一方、彼は内外の友人に対して「自分は健康であるし、いかなることがあっても自殺する意志はない、したがって自分が死んだとソ連当局が発表したら、当局によって殺されたのだ」と伝えたという。

ソ連当局は黙殺するよりほかに方法がなかった。追放の記事はブラウダのわずかな数行の記事であつたという。

彼は、「私にとって一番大切なのは、まさにロシア人の運命である」という愛国的見地から、マルクシズムを捨てよと説くのである。

ソ連の指導者にマルクシズムの放棄を説くのは無意味だという考えに対して、ソルジェニーツィンは、ひとつの先例をあげている。

それは独ソ戦争におけるスターリンの措置である。スターリングラードの攻防戦を中心にするヒットラーとの死闘の時、スターリンは、「万国の労働者よ団結せよ」などといわなかった。スターリンは、「賢明にもイデオロギーをわきへおしやり、それをほとんど問題

にしないで、その代わりにロシア古来の旗じるしを時としてはロシア正教の旗をひるがえしたのだ」
この例にならえ、と彼はいうのである。

しかしマルクシズムをすててソ連は生きのびられるか？ という問に対してソルジェニーツインは答える。

ロシア国民の首カセとなっているマルクシズムを棄てれば、ロシア国民は「生き生きと呼吸し、ものを考え、前進できるように」なる、と。

ではどんな政治体制をとるのか？ という問に対して、彼は「専制主義だと考えている」と、『週刊朝日』の記事にあったがこの書簡の抜粋を載せた『タイム』を見たら、『週刊朝日』の「専制主義」はどうも「オリソリテリアニズム」を訳したものでらしい。『タイム』によるとそれは「クリスチャン・オーソドクシイ」（ギリシャ正教・ロシア正教のことだろう）に支えられたものであるべきだ、と言っているのである。

そうするとドストエフスキーの考えたことと同じなのである。

ドストエフスキーが革命思想に反対だったのは周知の通りであるし、ロシア正教にロシアの将来を見た熱烈な愛国者であったことも有名なことである。

革命の指導者たちはドストエフスキーの著書を禁じた。それがたしかロシア正教の解禁とともにドストエフスキーの解禁になったらしい。

前に私はソルジェニーツインの『イワン・デニエーソヴィッチの一日』をテレビ映画で観て感動した。ドストエフスキーの『死の家の記録』はじめシベリア流刑の物語に一脈通ずるものを感じたのである。

『イワン・デニエーソヴィッチの一日』はスターリン治下の強制収容所で苦しむ囚人の一群の一日を描

いたものだが、冷酷な強制に抵抗するロシア魂といったものが、この陰惨な劇にわずかな救いを与えているのである。

彼はマルクシズム全体主義の強制力の下で抵抗しては殺されてゆく人の心に、未来へのわずかな光を見たのにちがいない。

ドストエフスキーは革命運動に加担したという嫌疑で死刑を宣告されたが、許されて、シベリアに流刑された。そして流刑地でロシア人というものを表裏くまなく体験させられたのである。そしてそのロシアの民衆の奥深い魂に救いを見出したのである。

西欧化されてロシアをわすれたインテリゲンチヤがロシアの魂を象徴する女性の無償の愛に救われる、というのが、『罪と罰』その他のテーマである。

ソルジェニーツィンはドストエフスキーのあとをつぐ英雄的作家である。彼の言葉を読むと、プーシキンからゴーゴリをへてドストエフスキーにつづくロシア十九世紀の偉大な文学者たちが、彼の口を借りて、ロシアと世界とに訴えているように思えてならない。

ソルジェニーツィンがロシアをマルクシズムから解放できれば、それは世界にとつても大きな救いとなるであろう。

(教養部教授・教養部長)

10 ことば /

いつだったかヘレン・ケラーの少女時代を扱った映画に「奇蹟の人」があった。盲目で聾啞の美少女ヘレンは、動物のような本能的な、手におえない少女であった。この少女にコトバを教えようとして女家庭教師が必死の努力をかたむける。何年間かの努力も成功しない。ヘレンの両親は、あまりにはげしい教師のしつけにたえられず、ついに教師を解雇する。やがて教師の去る日が来る。その朝のことである。

とうとうヘレンはコトバを知る。ウォーターという手文字 *water* と、井戸のポンプからほとばしり出て自分の手を冷たくぬらす「水」というものが一致したとき、「ウ・オ・ー・ター」と叫んで、ヘレンはおどろあがつてよろこぶのである。

言（コト）と事（コト）とが心の中で一つになったのである。その時ヘレンがおどりまわってよろこんだのは、くらやみにはじめて光がさしこんだからであろう。はじめて精神の世界がひらけたのである。やがて、急速に、ヘレンは人間らしくなる。こうしてヘレンは立派な人になった。コトバは光なのである。

ヘレン・ケラーのこの物語は、カッシーラーをはじめ多くの学者たちによって引用されているが、言語の力をわれわれの目の前にまざまざと見せてくれた。

幼児が言葉を学びはじめて、「これなあに？」「これなあに？」と聞いてまわるのも、同じ心のはたらきである。幼児にとって、ことばを知ることが、大きなよろこびなのである。

これは詩歌創作のよろこびとも通ずる。自分の言葉が自分の心と一致する時、人は安心するのである。正直の頭に神やどる、という諺もこのことを言うのであろう。だから、美德の根本は正直だと思ふ。

言と事とが一致するのをマコトというのである。仏教では、真言と言ひ、真実と言う。漢字で「誠」(言成る)と書くのも、似た意味あいがある。アメリカではこれをアイデンティティーというのであろうか。リアライズ、リアリティーなども通ずる意味あいがある。

ことばは大切である。ことばは人間そのものである。それは具体的には国語である。

(11) カーター米大統領の就任演説(昭和五十二年)

昨年の五、六月頃だったかと思う。当時ようやく登場してきたカーター大統領候補の演説をテレビで聞いた。その内容はきわめて道徳的なもので、「正直」をモットーとする政治を行ないたいという主旨のものだった。あまり素朴な内容なので、これで大統領選挙に勝てるのだろうかと思つたが、「正直」をモットーとして大統領が出馬するということの意味を考えないではいられなかった。それはもちろんニクソン元大統領のウォーター・ゲート事件と関係があるが、そればかりではない。アメリカ人の道徳的な感情に訴えたものである。そのカーター氏が現職のフォード大統領を破つて当選したのである。そして、今度の就任演説となった。

これは、全文の翻訳が日本の各新聞に掲載され、ジャパン・タイムズには、原文も載っている。既に読まれた方も多いと思う。きわめて内面的なもので、政策よりも政策のもとになる思想を語つたも

のである。

まず就任式の意義について語る。それは、高校時代の教師ミス・ジュリア・コールマンの言葉が示している。『時代の変化に適合するとともに変ることのない原理を堅持しなければならない』、ということである。

ここで高校時代の恩師の名前が出てくることも意外だが、その教訓を大切にするという精神も、尊いものである。

「変ることのない原理、プリンシプル」とは何か？ それは、アメリカの建国精神である、と大統領は言うのである。――

「私は今日、新しい夢を提示するのではなく、むしろ、古い夢に対する新しい信頼を呼びおこす」と。「古い夢」とは言うまでもなく、建国の精神である。

こうして、アメリカは、不変の建国精神を堅持しつつ、世界の動きに適合する、――と世界に向って宣言する。

この時、日本人は、どうするのか？ 深く考えなければならぬと思う。日本人が日本人自身の国家理想――建国精神を堅持することこそがカーター大統領の就任演説に呼応することになるので、日本人が、アメリカの建国精神を堅持する、というわけにはゆかないのである。復古・維新は生命興隆の原則であることを、大統領の演説は示している。

(THE ASIA 52年2月5日(出号))

(12) 雲海の南ア連峰と富士 (F・O・C短歌) (昭和五十一年)

今年のF・O・Cは雨にたたられて遂に山中湖畔から富士を見ることができなかった。ところが、本部の適切な判断で、帰途、富士山の五合目に立ち寄り、雪を置いた雄大な富士山をまぢかく見ることができた。そのうえ、南アルプス連峰が雲海のはてに連つて、すばらしい眺めであった。F・O・Cで見る富士山は格別なものだから、今年はどうかと思つて心配したが、最後になつて、南アルプス連峰と
いうおまけまでついたことになる。

雪白き大富士見ゆ四合目を過ぐるすなはち霧雨晴れて

雪おける大雪山肌あきらかにま近く見えて端(は)山のごとし

雪おきてま白き富士の稜線のたくましきかなさくなだり落つ

雲海のはてにつらなる雪山は南アルプス連峰といふ

思はざる眺めうれしも南アルプス連峰晴れて一望に見ゆ

雲海の雲動きつつ晴れ渡る雪の連山見つつ飽かなくに

駒岳、仙丈、北岳、間の岳、のう鳥、塩見、一望に見ゆ

13) ファイリップ・カール・ペーダ先生（昭和五十二年）

大阪大学で女子学生のジーンズ姿での受講を禁じて有名になったファイリップ・カール・ペーダ先生の言動は、実に、日本の大学教授に対する一大警告であった。昔の言葉ではこれを「頂門の一針」という。その意味は「頭の上に一本の針をさすように、人の急所をおさえて戒めを加えること。痛切な戒め」（『広辞苑』）ということである。頂天に針をさされては、全身にひびいて、身動きもできない。針を抜いてもらうよりしかたがないが、そう感ずる大学生も大学教師も多くはないらしい。日本の大学の多くは麻痺してしまっていて、角力でいう「死に体」だからである。

ペーダ先生の書いた文章がサンケイ新聞に載った。耳に痛いことばかりであるが、その最後にこう書いてあるのは、特に心にひびいた。

「——私が日本の若者にいいたいの、君たちが日本のマスメディアと日本人の先がけとなつて、外国の借りもの文化に対して選択力を持つてほしいということ。そして消滅しつつある日本のすばらしい伝統をもちたててほしいということだ。

最後に——大学は学ぶところであつて遊ぶところではない。本物の花はプラスチックの造花よりはるか

に美しい」

ボストン生まれの米国人教師が、日本人を愛するが故に職を賭けて行なったこの「戒め」をムダにしては申しわけがない。お互い、真剣に考えよう。

(THE ASIA 52年)

14) 日本への回帰 (昭和五十二年)

詩人の萩原朔太郎の晩年の著作に『日本への回帰』という本がある。昭和十三年の出版である。欧米の文明をひたすらに追い求めた結果が、一種の自己喪失に終ることに気づいた時、かえるべき故郷は日本文化の伝統の外にないことを、詩人は直観したのであろう。

こうした思想の転回を経験したのは、朔太郎一人ではない。これは大正から昭和へかけて、いわゆる戦争前の自由な思想を代表する多くの思想家の経験でもあった。和辻哲郎の『古寺巡礼』(大正八年)、『日本古代文化』(大正九年)、『日本精神史研究』(大正十五年)は、そうしたものの早い時期のものであり、竹山道雄の『古都遍歴・奈良』(昭和三十二年)は、比較的遅い時期のものである。

戦争中「無常といふ事」を書いた小林秀雄氏は、現在本居宣長をライフ・ワークとしていることとである。元来小林秀雄氏は、フランス文学とドストエフスキーから出発したとも言えるのである。

そのほか、フランス文学研究の河上徹太郎氏の『吉田松陰』、同じ仏文出の中村真一郎氏の源氏物語論や頼山陽研究、英文学者土居光知氏の日本文学研究、『日本精神史』を書いた亀井勝一郎もその出発はフランス文学の研究からである。

明治以来の日本の識者の思想の軌跡をふり返ってみると、漢詩文や儒教の教養を身につけた、武士の伝統をつぐ人々が、欧米の文明を吸収して、近代日本文明の基礎を作ったが、その後継者は、欧米文化を追いかけるのに急で、自国の文化を軽視してしまった。それが、明治末年から大正へかけての風潮で、欧米文化を模倣した結果がいわゆる排外思想となって、遂に自国文化を否定するに至ったのである。その結果が天皇政治否定の人民政治主義となったり、共産党の天皇制打倒運動となったりしたのである。

これに対して、民族国家主義の一部には、国際交流を否定するような固陋な国粹独善主義を唱えるものが現われて、自己過信となり、やがてこれが軍人の思想を動かして、軍国主義的な傾向を生み、英語は敵だと言ったり全体主義のナチスやソ連との提携を考えるようになって、遂に対米英戦争に突入してしまつたのである。

そして、敗戦後はその反動で、民主主義と平和とをスローガンとするアメリカ一辺倒から、ソ連の共産主義一辺倒、さらに中共の毛沢東礼讃一辺倒に及んで、今日に至つたのである。戦争中の極端な国家主義の反動として極端な反国家主義、国家否定の思想が一般化して、「国民」は「人民」となり、「人民」はめいめいの幸福を追求するというので、マイ・ホーム主義が今日の流行となつてしまつた。

戦争中も、敗戦後も、一般国民は無我夢中で働いたが、それは国を守るためでもあり、国の復興のためでもあったが、いまはちがう。利益を生み出すことより利益の分け前が問題になっている。これもある意味では納得がゆくが、全体の利益を生み出すことを忘れて分け前を要求すれば、自他ともに没落することは目に見えているのである。そうわかつていながらどうにもならないところに現代日本の急所があつて、もう一度、敗戦でもしなくては、日本は助からないかも知れない。

日本人は、日本全体の動きをもっとしつかりと見極めてゆかなければならないと思う。「日本への回帰」が今日の課題であるというのは、そういうことなのである。社団法人国民文化研究会が青年学生合宿教室のレポートを同名の書物として連続して出すのもまたこの意味である。

(亜細亜寮誌「自琢」第十二号昭和五十一年度)

(15) 読書のすすめ (昭和五十一年)

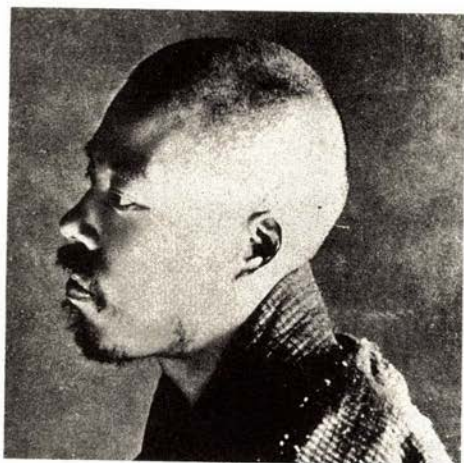
このあいだ江崎礼於奈氏(ノーベル賞をもらった物理学の大家)の書いた文章の中にこういうことが書いてあった。

アメリカの大学は将校(社会のリーダー)の養成機関で、大学に入ると学生は、いよいよこれからだ、これからリーダーたるにふさわしい教養と知識とを身につけるのだ、と発奮する。高校時代は結構あそばせてくれるが、大学はきびしい。——というのである。

それに対して、日本の大学は、兵隊養成の講習会のようなもので、これでは日米のひらきはひどくなるばかりだというのである。

日本は戦後、アメリカの真似をしたが、大学教育のきびしさは学ばなかった。スポーツ選手などでも、アメリカでは、二科目落第点をとると失格してしまうということを、本学の杉浦教授が空手道指導のためにアメリカの大学を訪問して帰国して話しておられた。

これもだいたい前の話になるが、交換教授でアメリカに呼ばれてハーバード大学の大学院のセミナーに



正岡子規

参加していた友人の話である。

ある時、友人のアメリカ文学の教授と車に乗って走らせていた時、たまたまヒッチハイクで同乗してきた大学生があつた。するとそのアメリカ文学の教授がその大学生に、アメリカ文学の単位を取ったかどうか聞いたそうである。大学生は取った、と答えた。すると教授は重ねて、それでは、誰の何は読んだことがあるか、誰の詩集は、誰の小説は、と畳みかけてたずねて、大学生があまり多く読んでいないのを知ると、それでよく単位がとれたと慨嘆したそうである。そして、その大学生の学んでいる大学の質を論じはじめたというのである。

つまり、アメリカの大学生は「読書」しないではすまないようにできているのである。これにくらべると、日本の大学生の読書は何と貧弱なことよと思わざるをえない。

昔は、大学生に「愛読書は何か」という質問をすることがよくあつた。いまはもうしない。週刊誌があつたり、平気で「愛読書なし」という回答がかえってくるからである。

しかし、亜細亜大学の学生はそんなことはない。次の文章は、一年間、正岡子規の『歌よみに与ふる書』という候文の歌論を読んだ「研修」の学生の書いた文章である。「読書のすすめ」と言っているんなお説

教をするよりも、この一文の方が新入生にとっては、いい刺激になるかと思っただけでかかせることにした。名前は略させてもらう。原文通りである。こんなふうにながら読めればよいと思う。

「歌よみに与ふる書」を読んで

それまで絶対的に崇拜されていた古今集をしりぞけ、万葉集のまことのすばらしさを主張した子規は、初めてふぐを食べた人と同じくらい、勇気があつたらう、などといったならば、怒られてしまうだろう。しかし、そこを敢えていえば、どちらも、自分の命もろともすべてを、それに賭けているという点では同じだと思うのだ。ふぐはさておくにしても、今まで右であることが当然であると思われていたことを、実は左であるべきことが本当なのだと主張することの困難さは、想像を絶するものがあつただろう。しかし、子規は、それを主張する。子規は、見たとおりに、ありのままに読めと主張する。それが歌だと主張する。子規は、現代の短歌の父であり、母なのだ。子規が、文学史上、一段高い地位に置かれるのは当然のことだと思う。

また、子規の人生の視点はいつたどこにあつたのだろうか。明快で一貫した論理といい、その強い言いきりの口調といい、病床にあり、「死」をその背中にしよつていた子規であつたはずなのに。というよりも、逆に、その「死」が、彼に短くはあつたが、線の太い人生を送らせ、そしてまたこれらの文章を書かせたのかもしれない。「死」の存在を実感し得た人間の強さは、私などの想像をはるかに超えていると思う。なぜならば、そういう人間だけが「生」を実感し得るのだろうか。それにしても、やはり彼は天才だったのだろう。凡人ならば、その主張も軽い叫びのようなものになってしまうのだろうか、彼の場合、その主張はあくまでも力強く、どうとでもとれるようなあいまいな言いまわしはなく、重みがあ

るのだ。これは、真実の「生」を全うすることへの激しい意志が働いているからだと思う。彼は、人生を通して歌を、歌を通して人生をみつめていたのだと思う。

高校時代の文学史のテキストを開いてみれば、正岡子規は、古今集を批判し、万葉調を唱えたと書かれている。だがしかし、文学史のテキストに書かれた二、三行の文の意味の深さに気づく人は、少ないのではないだろうか。私も今回の研修に学ばなければ、きつと生涯、真の子規を知る機会はなかったと思う。私は、「歌よみに与ふる書」ただ一冊を読んだにすぎないけれど、単に子規の歌論を学んだというだけでなく、子規の主張を通して、子規の生きざま、ひいては、明治の人間の息吹に触れることができたと思う。

終りに。

夜中に眼が冴えてしまい、ねつかれずに困った時、この「歌よみに与ふる書」をふとんの中でしばしば読みました。子規のもののいい方、まずボンとこの歌はまずいなどといってしまふところがたまたまなく好きで、クスリと笑ってしまうのです。そしてその後で、私などが高校の時に訳もわからず、良い歌だと教えられ、憶えさせられ、念仏のようにとなえさせられた歌が、これこれこういう理由で拙い歌なのだ、子規独特の説明をきかされ、そして、納得させられてゆくという、自分の心の中の過程が楽しく、それで、何とはなしにひとり時々読むのです。

気がついてみたら、一年がたち、この研修も終了です。本当に一年なんて、何と短いものなのでしょう。

先生、四月からこんどは何を読むのですか。今から楽しみにしています。一年間、いろいろ御世話に

なり、

ありがとうございます。

(F・O・C参加学生へのパンフレット) 52年

16 学園の歴史を生きる (昭和五十四年)

前理事の『藤原繁先生追悼集』が、一周忌を記念して刊行された。先生の教え子たち——本学の卒業生の手によって、立派な本が出来上ったのである。先生もさぞかし地下でおよろこびになっておられるだろう。先生のたましいはこの本の中のにこつていると思われる。

先生の書かれた『本学園生たちの記』という学園の歴史は、前に「青々会報」に載ったものであるが、今度こうして一冊の本となったのを読むと、「血湧き肉躍る」感動の物語で、一気に読みとおさずにはいられなかった。

特に、第一章の「興亜専門学校前史」から「興亜専門学校設立」まで、戦争中、日本思想によるアジア興隆のための日本一の専門学校を作ろうとして、先生はじめ理事者、教員、学生全員が一丸となって奮闘したあとをたどると感激させられる。それも、学業だけでなく、校舎や寮舎の建設から、セレベス、ボルネオ、モンゴルへの派遣学生、学徒勤労動員による農場や工場における作業など、みなひとつの魂の発露としてくりひろげられている。やがて出征しては、何人もの学徒が陸・海軍の特別攻撃隊となって奮戦し、九十六柱の戦死者を出したのである。ともかくみんなひとつになって奮闘した——それが、興亜専門学校の歴史である。正に、一篇の劇として受けとれる。

やがて、終戦となり、興亜専門学校は日本経済専門学校と校名を変更して存続することになるが、これとてナマヤサシイことでなかったことが、「興亜から日経へ」という文章によって知られる。昭和二十一年のことである。

その「日本経済専門学校」の理事・校長として予定された太田耕造先生をはじめとして理事・役員のはとんどの人が、占領軍による追放の憂き目にあったところから、苦難は倍加することになるのである。学制改革による新制大学昇格運動の挫折(昭和二十四年)、日本経済短期大学への移行(昭和二十五年)の頃は、いつ大学がつぶれるかと思つたような時代であつた。

昭和二十八年の香港からの私費留学生の受入れ、つづく昭和三十年亜細亜大学の設立は、一面において興亜専門の魂の復活であり、一面においては、新しい大学への飛躍であつた。日本経済専門学校の校長に予定された太田先生が亜大の学長として復活されたのである。そして、今日の大学がある。

生きるとは歴史を生きることであらう。われわれは亜細亜大学の歴史を日々描いているのである。「学園生たちの記」を読んでその感を深くした。

(五十四年十二月)

(17) 御製の英訳とエール密書(昭和五十一年)

一、御製の英訳

佐藤教授の文中、ニューヨークのジャパン・ハウスで見られたという御製の英訳は、主として下島連

教授の訳されたものである。拙訳が失敗で、改めて下島教授の訳されたものであるから、私はせいぜい協力者であるにすぎない。このことは、昨年十月十日のサンケイ新聞に詳しく報道されたので改めて書く必要のないことと思うが、なお一言、補っておきたい。

また、御製の英訳を、ジャパン・ハウスで佐藤教授の見られたのが、「皇室御物展」の前日のパーティーの会場であったというから、十月十二日のことである、サンケイ新聞の記事が十月十日である。したがって、ジャパン・ハウスの掲示は、サンケイ新聞の発表と平行して行なわれたと見られる。つまり、御製の英訳の掲示は、サンケイ新聞の記事によったものでなく、それ以前に用意されたものである。つまり、この掲示は、小田村教授の示唆にもとづく安川駐米大使のはからいであったと思われるのである。当日、ジャパン・ソサイエティーの会長のロックフェラー三世も見えていたというので、この御製の英訳は、来会の人たちにも読まれたにちがいない。

とすると、これは、今年の天皇御誕生日に際してニューヨーク・タイムズが宮内庁を通じて御製の御発表をお願いしたことと関係がありそうに思う。佐藤教授の文章が無ければこの間の事情はわからない。紙上をかりて謝意を表する。

御製は五十年元日の新聞に発表された御歌である。英訳を併せ記すと、次のとおりである。佐藤教授の話によると、詞書の箇所が訳詩のあとに書かれてあったということであった。

御製 米大統領の初の訪日

大統領は冬晴のあしたに立ちましましぬむつみかはせし幾日を経て

Farewell to honorable Mr.Ford, the President of the United States of America,
Who visited Japan for the first time as the incumbent President.

On bright morning of November, Mr.president, you've taken off our land and soared
into the blue deep,

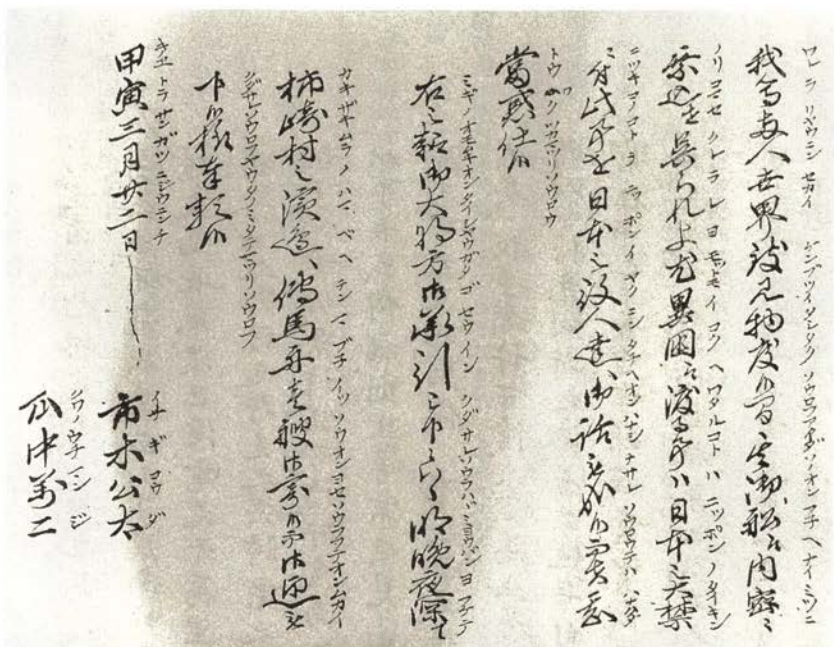
Leaving the warm memory of our friendly talks,
Oh, these blessed days!

二、エール密書

佐藤教授の文中の「エール密書」は、おそらく吉田松陰が、渡航を前にして提出した文書なのではないかと思う。

ペリーの『日本遠征記』にこう書いてあるのが、それだろう。

「或る日、一団の人々（ペリー艦隊の士官たち）は郊外を通り越して田舎に入り込んだ。その時二人の日本人がついて来るのを発見した。……（中略）……彼等はあたかも、自分達の行動を見ている同胞が誰



吉田松陰の密書（エール大学蔵）

も手近にないかを確かめるように秘かに眼をあちこちに配り、それから士官の一人に近づき、その時計の鎖を讀めるやうな振りをして、畳んだ紙を上衣の胸に滑り込ました。彼等は意味ありげに唇に手をあてて、秘密にしてくれと懇願して急いで立ち去った。『岩波文庫』

「この手紙は日本語で書いた一通の手紙なることが明かになった。艦隊乗組の通訳ウィリアムズは、それを逐語的に次のやうに翻譯した。」

（同書）

そして、詳しい翻譯文がのせてある。これを読んで、ペリーは、日本の将来を予見したのである。もつともペリーは、この手紙の主が吉田松陰であるということを知らなかつ

た。ただこの手紙の趣旨に感動して、何とかしてこの二人を助けたいと思ったのである。それが、この手紙を秘匿した理由であろう。そして翻訳官ウイリアムズの手に残されて、イエール大学のウイリアムズ文庫に残されることになったのであろう。吉田松陰の文書としてばかりでなく、日米関係の第一ページをいろいろの記念として貴重な文書である。せめて写真版でも見せてもらいたいものである。

(五一、一〇、三一)

18 精神病とノイローゼのちがい (昭和五十四年)

精神病学の権威でプロ野球のコミッショナーとしても有名な内村祐之先生(往年の名投手)がなくなりました。先生は内村鑑三の長男であられた。私は、東大の文学部の出身であるが、在学中たまたま先生の精神病の講義を聴講することができた。もちろん先生は医学部の教授であられたが、この講義は他学部にも開放されていたのである。私はこの講義から非常な感銘を受けた。というのは、当時先生は、精神病の病院として有名な松沢病院の院長を兼任しておられて患者を教室に呼んで来てくださって、臨床的な講義をしてくださったのである。

そして、精神病の患者というのは、自分が狂っているという自覚のない人を用いなのであって、その点、ノイローゼとは本質的にちがうということを、納得させてくださった。

このことは、それ以後、人間について考えるうえで、非常に参考になった。というより、いまでも、人間について、精神について、思想について考えるうえの原則として、利用させていただいている。

精神的な「なやみ」ごとがあると、われわれはユーウツになったり、「なやみ」を忘れようとしてハシヤいだりする。我を忘れてバカサワギもするが、我にかえればバカサワギであることがわかる。それがわからなくなる。——つまり我にかえることができなくなったのが、本当に狂っているのである。狂っているのがわからなくなってしまうのが、本当に狂っているということである。どうもこれが人間の精神の基本的な原則とおもわれる。バカにつけるクスリはない、というが、己れは聖人だ、という人間ほど愚昧な人間はあるまい。

それ以来四十年、その間、先生にお会いしたこともなく、お話をうかがったこともないが、忘れることのできない一年間の講義であつた。

(五四年)

19 富士山十首— F O C 山中湖畔から —

若きらと湖畔の宿に語らひつ富士をながめつ一日すごしぬ

月かげに白く浮べる富士がねは夢のごとしも晴れたる夜空に

窓あけて見ればうれしも富士がねはいただき白くけさも晴れたる

富士白くそびゆる空を朝鳥のかげつばらかにかけりゆく見ゆ

空かぎる山のは白く雪おきてさくなだりおつ富士のいただき

富士がねのいただき雪、日のさしていよいよ白し朝けの空に

山のはのすそ遠長くひきなびけそびゆる富士のすがたををしも

この大き富士の姿に言絶えてただわれは見る心にうつれと

日の本の国の姿をしめすなる富士にむかひてうた高うたふ

富士うつす湖(うみ)のほとりをいろどりてあそぶ若もののだよめき聞ゆ

(やくまさお||教養部長||国文学・日本思想史・人間と環境など担当)

(20) 長谷川如是閑の和歌 (昭和五十四年)

図書館の展示会は例年の行事で勉強になる。今年は「文化勲章受賞の人々」という題で、長谷川如是閑、齊藤茂吉、和辻哲郎、鈴木大拙の四人の展示があった。

中で特に私が驚いたのは、長谷川如是閑の和歌の色紙であった。

かみつよのやまとの道はちかきよのおのづからなるみちにかよへり

近代ヨーロッパの国民国家の本質は、すでに日本の古代に実現されていた、というのが、如是閑の説である。彼は、日本が明治維新によつてはじめて近代国家になったという欧米追隨の学者たちの説をげしく批判した。また大正時代以来、日本の知識層が、ドイツ観念論一辺倒の観念論者に陥いつたのを慨嘆してやまなかつた。その思想がこの和歌にあらわされていると思う。また、和歌をよむ、ということが、日本文化の伝統に対する彼の謙虚な態度を示していると思う。言葉もひねくれたところがなく、あっさりしていて、日本語の自然の姿にかなっている。

思想的な和歌だから感情の高まりが感じられないが、それはまた別の問題だろう。ともかく和歌をよんだということが貴いことである。

いまはづしたためがねをいくら探してもなしとあきらめればかけているなり

おもしろい歌だ。何か、外国文明をあこがれてそこに理想を求めていたら、それは自分の国にあった、というような感じと似ている。口語を使ったところは発想の具体的な感懐を示していて、不自然とは思えない。思想論のおもむきがあるが、あくまで具体的な日常の経験を詠んでいるところがおもしろい。万葉ふうの古語をつかったりしてひねくれた有名歌人の歌よりもずっとしたしみ易い。この歌が単なる思いつきでないことは、もう一首同じような歌のあることでわかる。

今つかつた万年筆を探しあぐみ席にもどれば眼のまへにあり

大正デモクラシーの一方の旗頭でもあつた氏の、おそらく晩年の「日本への回帰」の心境を示すものであろう。
(五四年七月)

(21) 冷泉家と「敷島の道」(昭和五十五年)

冷泉家の秘蔵の古文書類が公開されるということである。藤原定家自筆の『明月記』——つまり本人の書いた、今から七百五十年ほど前の日記が出て来た——、そのほかにも同時代の文献が沢山出て来るというので、平安・鎌倉時代を研究する専門家たちは、公開を一刻も早くと気もそぞろのようである。

冷泉家というのは、藤原一門で、歌人として高名な、俊成——定家——為家——につづく家系の一である。つまり、為家の長子の為氏が二条家を興し、その同母弟の為教(第二子)が京極家を興し、『十六夜日記』で有名な阿仏尼の子の為相(第三子)が冷泉家を興したのである。それぞれ和歌の流派を立てて争つた。

私はこの時代の専門家ではないが、以前、「敷島の道」という言葉の由来を調べたことがあって、それが、俊成・定家にはじまり、冷泉家の祖である為相には、次の歌のあることを知つたのである。

これのみぞ人の国より伝はらで神代をうけし敷島の道

為相の歌の意味は、日本には儒教や道教や仏教が入ってきたが、この和歌だけが神代以来の日本独自の道である、という信念である。

鎌倉時代の初期は、国語についての自覚が高まり、今日の漢字かなまじり文のはじまりとも言える、『平家物語』が出た時代で、和歌の自覚が「敷島の道」という言葉で表現されたのである。『古今集』には単に「うた」とあったのが、『新古今集』では「敷島の道」と言われるようになった。つまり日本思想史のバックボーンは「敷島の道」であるという自覚である。

冷泉家の古文書発見の知らせで私の心にもつ先に浮んだのはこのことであつた。そしてまたさらに驚いたことは、この秘蔵の古文書発表の決断をなさつた冷泉家御当主為任氏の夫人が、その感想として次の和歌を示されたことであつた。

敷島の道のおきてをまもりつつ幾代へにけむみ親とうとし（テレビ発表のまま）

稲荷山鉄剣の銘文の発見による雄略天皇時代への回想、太安万侶墓誌の発見による『古事記』の確認、高安城の倉庫礎石の発見による当時の国防努力、冷泉家古文書公開にともなう「敷島の道」の復活——こう考えてくると、祖先の霊が現代のわれわれに強く語りかけていることを感じる。問題はわれわれがこれをどうヨムかである。

（やく まさお || 理事・教養部長・国文学・日本思想史・人間と環境など担当）（五五年五月）

(22) 磐城・湯本の御製歌碑（昭和五十八年）

この間、勿来（なこそ）の関を觀に行つて、『いわきの文学散歩』（雫石太郎著）という本を購入した。開けて見ると、湯本温泉郷の紹介の文章のはじめに、御製歌碑のことが書かれていて、写真まで載っている。私はその足で直ぐ湯本に行つてみた。

御製歌碑は、書かれた通り、湯本駅から百米も行かない御幸山公園の入口に立っていた。碑面に

御歌

あつさつよき磐城（いはき）の里の炭山（すみやま）にはたらく人を、しとそ見し

と二行書きに書かれている。昭和二十二年の御歌である。歌碑の石は二米ほどの、ついたて風の黒い花崗岩のやうな石である。湯本駅構内にあつたのをここに移されたということである。御製は、「大貫経吹謹書」とある。

碑の側面に、次の銘文が書かれている。夕闇の迫るなかで、汽車の時間に追われながら写したので、多少の誤記があるかも知れないが、大よそは間違いない。次の通りである。

「曠古の大戦に敗れ、産業ごとく疲弊し人心また荒怠す

時に天皇皇后石炭産業が祖国復興の根幹なるを惟（おも）ひ

昭和二十二年八月五日

地下数千尺熱湯湧出する酷熱の石炭切羽（きりは）に臨まれ親しく御慰励あそばさる

市民ひとしく感激し生産に奮尽今日を得たり

往事を追懐すれば髣髴として感激今に新たなり

昭和三十九年四月二十九日 大越 新謹書

昭和二十二年八月五日といえは、前年の十一月三日に公布された「日本国憲法」が五月三日に発効して、「天皇制」は一応安定はしたが、極東国際軍事裁判は進行中で天皇の戦争責任の追及の声はなおほげしいものがあつた。そうした時期に、天皇が炭鉱労働者を「慰励」するために「地下数千尺の酷熱の石炭切羽」に入つて行かれたのである。

天皇制反対の強い労働組合の主張とは別に、その時の炭鉱労働者たちは、天皇を迎えて思わず万歳の叫びをあげたことを、当時の新聞は一斉に伝えたのである。ヘルメットをかぶつて、労働者にかこまれて微笑していらつしやる天皇のお姿が新聞に載つて、全国民に深い感動を与えたのである。

歌碑建立の由来を記した銘文にある通り、日本産業復興の原動力は、実にこの国難打開の決意を秘めた君民一体の感激の中から生まれたものである。当時は、石炭は、「黒ダイヤ」とまで言われた時代であつて、石炭産業が他の産業の根幹であつた。この常盤炭鉱の「天皇御歌」と建碑由来の解説文とは、実によく当時の国民生活の動向を物語っている。敗戦直後、亡国の危機に見舞われた時、天皇は偉大な力を發揮されたのである。その力のあかしとなるのが当時の御歌であることをこの歌碑は実によく伝えている。私はこの歌碑が永遠に伝えられんことを願う思いにそこを去りかねたことであつた。（五八、十二）

23 私の「アルバイト考」

金を得る苦勞を知る

「アルバイト」という言葉は、元来「学術的業績」の意味で使われていたので、「先生の学生時代のアルバイトについて書いてほしい」などと言われると、一瞬とまどってしまう。それほど世の中が変ったのである。

ではこの「アルバイト」という言葉が、いつ頃から使われたのかとなると、これもよくわからない。ほく自身、学生時代に、家庭教師に行くのに、「アルバイトに行くよ、」などと言って出かけたようにも思えるが、どうだろうか。お金のことを、マネーと言わないで、ゲルトなどと言ったのはたしかで、これが、昭和八年旧制中学卒業、昭和十四年旧制大学卒業の私の言語感覚である。

当時、私のように、何か働いて金を得なければ学業を続けられない学生は、苦学生と言っていた。

だから「アルバイト」は、皆必要に迫まられてやっていたのである。遊ぶためとか酒を飲むためとかいうのは、例外中の例外だったと思う。

だから「アルバイト」をしない学生が大半だったし、夜間部の学生は別として、昼間部の学生で昼間の仕事をしていたら、卒業はできないから、夜の仕事をすることになる。

そこで、家庭教師が、当時の学生アルバイトの本命である。休みに肉体労働でかせいだ学生もあつたが、これは、戦後の主流になるが、戦前は少なかつた。

私は家庭の事情で「アルバイト」をさかんにやった。中学の上級生の時、新聞の勧誘のために入ったお屋敷が同級生の家で、驚ろいて逃げ出したこともあった。旧制高校に入ってから、専ら家庭教師でよく働いた。月謝がどの位だったか、覚えていない。家計を助けていたのである。最初に教えた生徒は、いま会社の社長で、いまでも交際している。そのあと、何人かの生徒をもったが、それぞれ大きな家の子どもたちだったから、それぞれ立派に成人したと思うが、戦争にまぎれて、お互いに消息を知らない。航空機の設計についての英語のパンフレットの翻訳をやった。何もわからないまま訳していったが相手に気の毒だった。女子大生の英語の教科書の翻訳というアルバイトもやったが、あの翻訳では及第で来たかどうか。これは雇主の方が落第であるから致し方あるまい。金のためにやったので、その中から得たものがあつたかどうかわからないが、働いて金を得ることと、一人に教えるということがどんなにむずかしいかは骨身にしみて知った。

第六編
アジアへの道
— 国際化と国民文化 —

(昭和五十年～六十年代)



第六編

アジアへの道——国際化と国民文化——（昭和五十年～六十年代）

担当科目 前と同じ

担当役職 五十年学園理事となり、学長室勤務、六十年定年退職、名誉教授

となる

- (1) Asia is One. (2) 神話と歴史 (3) ホイットマン・アン・アメリカン (4) 国民文化の自覚と国際主義——聖徳太子と明治の留学生 (5) 韓国の国楽 (6) ピンクのカーテン (7) 日本文明の密度 (8) 国際社会と国民文化 (9) 中国の動向について (10) 中国の古代青銅器と古墳の壁画 (11) 中蒙国境の緊迫状態 (12) ゴンチャロフの言葉から (13) 外国語熱と国語問題 (14) 共産主義社会の実態とマスコミの報道 (15) 共産主義社会の物価 (16) 日中文化交流について (17) 国際文化交流について (18) 文明の相互理解と国民文化 (19) 文明の相互理解は古典の理解から (20) 「秦始皇陵」と「毛主席記念堂」——中国旅行から (21) 漢字の危機 (22) 高安の城 (23) 80年代年頭の展望 (24) Oh, East is East, and West is West. (25) 日本語は独立しているが、孤立しているのではない (26) ダライラマ親下・歓迎の辞ならびに短歌 (27) 蘆溝橋事件とエドガー・スノー (28) 「教科書問題」とその次にくるもの (29)

文明と樹木 (30) 中華人民共和国の歴史教科書 (31) 東洋史学の先駆者那珂通世博士と『古事記』と吉田松陰と (32) インド古代文明における神話・歴史・叙事詩の関係 (33) 『史記』本紀の始祖卵生伝説

(1) Asia is One. (昭和五十年)

昨年末、韓国に行った時、偶然のことだったが、韓国の大学の教養課程でとりあげられているテキストの一覧表を見ることができた。韓国の歴史、文学、思想の古典のあるのは当然のことであるが、そのほかは儒教の古典と欧米の名著の名があつて、日本の古典がない。これも当然なのだがやはりさびしい気がした。

帰国してある教授にその話をしたら、その教授が言下に言われるには、——日本の大学と同じですネ、と。

そう言われてふり返つてみたら正にそのとおりである。

しかも韓国の『三国史記』と『三国遺事』にあたる『日本書紀』と『古事記』とは、日本の大学では特別にとりあげられていないのだから、韓国の大学で日本の古典をとりあげないのも当然と言わなければなるまい。

しかも、『三国史記』も『三国遺事』も、日本の大学の教養課程でとりあげられたことはあるまい。

日本の大学も韓国の大学も——と言つてよいだろう——全体として欧米を向いているのである。

それは歴史の流れで致し方ないが、このままでは、アジアの国々のお互いの理解は、大変むずかしいことになる。

日本中心に考えて恐縮だが、いまのうちは、日本語を話す人、日本文化を知っている人が、韓国にも

中華民国にも大勢いるが、あと二、三十年もたったら、ひどい断絶が生じるにちがいない。

国際交流ということは国民文化の相互理解が基礎になるのである。この相互理解を忘れて、アジアの国々がそれぞれ欧米の近代文明を追いかけることだけをつとめると、結局、誰がアジアで覇権をにぎるかということになって、それはやがてアジアの内乱という争いになるのである。

岡倉天心などのもつとも恐れたのはこのことであった。「アジアは一なり」というのは、アジアの諸国民の相互理解と文化的の自覚とを説いた言葉なのである。



岡倉天心碑（五浦記念館）

(2) 神話と歴史 比較文化の問題点 (昭和五十年)

白川静氏の『漢字』(岩波新書・一九七〇年四月第一刷)は、文章として残されなかった中国神話を発掘して興味の尽きない好著であるが、その中にこんな一節があつて考えさせられた。

「周は、西方の諸族を連合して殷をうち、帝辛が再度にわたる東征によつて国力を消耗しているときに、これを破つて周王朝を建てた。しかし周には、殷に代りうる神話がなかつた。……かからは、その王朝の秩序の基礎として、新しい原理を求めねばならなかつた。

……周はすでに帝の直系者たる神話をもたず、帝を至上神とすることはできなかつた。それで周人は、帝を非人格化した一つの理念としての天を、窮極のものとした。これによつて周は古い神話と断絶した。神話の世界は滅んだ。そして理性的な天がこれに代わつた。それは中国の精神史の上でも、最初の革命的な転換であつた。」

これに対して、私が度々論じてきたことであるが、『万葉集』の「中大兄三山の歌」等に見られるように、日本の古典神話は、「滅びることなく」、「伝説とも、歴史とも「連続」していることが自覚されているのである。神話・伝説は記録時代に生きているのである。神話と伝説と歴史との間に、「断絶」が無い。

天照大神は、神話の中で皇祖の神であるが、伝説時代にも、歴史時代にも、——さらに現代でも皇祖の神として敬仰されていることに変わりがない。

この「断絶」と「連続」とのちがいは、神話を死んだもの——自分たちの世界と切りはなされたものとして研究するか、あるいはいま生きているもの——自分たちの世界とつながりがあるものとして研究するかという研究態度のちがいにもなるのである。

孔子の手を経たと言われる中国最初の歴史——『春秋』——は、魯の国の歴史であるから神話篇の無いのは当然のこととしても、二十五史の最初になる『史記』が、『五帝本紀』からはじめて、神話を載せなかったのは、中国における右の神話と歴史との断絶にもとづくものであろう。

これに対して、『古事記』『日本書紀』が、ともにその冒頭に神話を置いたのは、神話と歴史との連続という日本文化の本質を自覚していたからであって、この時すでに日本文化の本質は世界に向つて明らかにされたのである。

『古事記』の獨創性については言うまでもないが、中国史書になつた『日本書紀』でも、巻一卷二を神代巻としたのである。

六国史を継ぐ意気込みで漢文で書かれた『大日本史』が、『日本書紀』に依りながら、神武天皇から始めて、神代を削除したのは、中国史書になつたからであらう。

神話を否定して歴史を書いた『春秋』や『史記』の歴史哲学は、漢学者に影響して無意識のうちに神話蔑視を生み出したのである。

大乘仏典を読むと、仏教の説明に比喩として宇宙創造神話が用いられていて、仏教教理と神話との接続が考えられるが、これは、宗教哲学と神話との連続であつて、建国の神話と歴史とのそれではない。

さて、目を転じて、ギリシャ神話やエジプト神話について書いたものを見ると、当然のことながら、

それらは遠い昔に滅んだ国の神話として、つまり死んだ神話として研究されているらしい。そのためにか、神話というとすぐそれを虚構としてとらえる考えが強く働いて現代との関連が軽んじられる。そればかりではない。総じて神話的観念は、すべてこれを未開野蛮として片付けてしまう。

ユダヤ民族の神話と歴史とを描いた『旧約聖書』が『古事記』と似ているが、これを研究する欧米人は、当然のことながら、異民族の神話として研究するのである。

アメリカの学者がアメリカ・インディアン神話を研究するのも、その根本態度においては、自分たちの祖先の文化の研究ではない。自分たちとは「断絶」している未開社会の研究にとどまるのである。

ところが日本では、神話と歴史とは一貫して、神話は日本歴史の真実を語るものとして、後代に伝えられ、今日に生きているのである。

したがって、日本人が日本神話を研究するのに、神話と歴史との間に断絶のある中国神話やその他の国の神話を、それぞれの国の人々が研究するのと同じような、最初から否定的態度をもつてするのは正しい方法とは言えない。

山本健吉氏によると、柳田国男博士はその「日本民俗学」を「自省の学」としたので、「人類学」の一分科とすることを拒んだということである。

また『民族心理学』十巻という比較文化の壮大な業績をあげたW・ヴントも、晩年の名著『諸国民とその哲学』において、「自分がドイツ人であり、ドイツの学問の立場よりして他国民の哲学的業績を判断するものなることを決して拒否するものではない」と言い、「精神科学」の原理の第一に「主観的判定の原理」を挙げたのである。

比較文化、比較神話学、比較言語学、比較宗教学、比較文学、比較思想等々最近特に比較研究が盛んであるが、この比較が、国民文化から研究者自身を抽出して架空の見地から諸国民文化を裁断するような結果になつては問題である。比較研究と言つて、研究者自身の立つ国民文化の地盤を見失うのは、眞の学問の姿ではあるまい。

(アジア研究所報・第一号・五〇・六・三〇)

(3) Whitman an American. (昭和五十年)

W・ホイットマンは、デモクラシーの詩人として、戦後は高校の国語教科書にもその訳詩が載つてゐるアメリカの代表的詩人である。彼は、リンカーン大統領の死を悼んで長短四篇の不朽の追悼詩をのこしたが、そのもつた感情は、リンカーン暗殺の報の伝わつたその日の手記に、なまなましく記されてゐる。

——「この国の統一は多くの人々に助けられて来たのだが、もし一つの名、ひとりの人を取り出さねばならぬ場合には、かれこそ、すべての人にもまして、これを将来の時代に対してまもりとげた人なのである。かれは暗殺された——が、国家の団結は暗殺されない——サ・イラア！一人たおれ、また一人たおれる。兵士はたおれふす、波のように沈む——だが、大わだの隊伍は永遠に押し進む。

死はその任を果し、抹殺する、百人を、千人を、——大統領を、大將を、大尉を、兵卒を、——だが、国民は滅びず、

短いノートの一節であるが、ホイットマンが祖国の永久のいのちをひしひしと感じていたことのよく

わかる一文である。

彼の詩集は『草の葉』Leaves of Grassと云つたデモクラシーのバイブルと言われるが、その初版は、表紙にも扉にも著者の名が記されていない。これを受けとった人は誰が作者なのか見当がつかなかったろうと思われる。ホイットマン自身は、いわば「名もなき民」の一人という気持で出版したのだろう。

詩も全部無題であるが、後に「自我の頌」Song of Myselfになつた最初の長詩は、読みすすんでゆくと、中に一箇所ホイットマンの名が出てくる。作者の名が一箇所だけ詩の中に出てくるのである。Walt Whitman, an American, one of the roughs, a Kosmos とある。以下まだ形容詞がつづくが、これがホイットマン生涯の出発点における自己認識である。

人間であることとアメリカ人であることはひとつの己れとして意識されていたのである。これがホイットマンの信念であつた。

ホイットマンの崇拜者であつた内村鑑三が、自己の墓碑銘の冒頭に、I for Japan と記したのと同じ信念なのである。『草の葉』初版は一八五五年、さきのリンカーン覚書の手記は一八六五年、そして一八九二年死ぬまで、生涯、ホイットマンの信念は変わることがなかつた。真に世界的なるもの、——それはまた真に国民的なるものである。

(4) 国民文化の自覚と国際主義——聖徳太子と明治の留学生（昭和五十年）

『自由民主』四月号に、英語学者の渡部昇一氏の「日本という名の逆説（パラドックス）」という論文

が載っている。これは大変おもしろい論旨の文章で、一口で言うと、日本が近代化できたのは、物真似という能力によるものであるが、この物真似——つまり外国の科学技術を取り入れる能力——こそ、日本の独創である、という趣意である。

しかも、模倣によって日本文化の連続性が断たれることはない。そこで、「日本を理解するには逆説によらねばならぬ。日本の模倣は独創的であり、木造は石造よりも恒久的で、新しがりやなのは古いものが断えずにあるからである。そして敗れた天皇の下に勝者よりも繁栄している国なのである」と結ぶ。ところで、幕末に欧米文明に接触すると、日本は多数の留学生を送り出して欧米文明を吸収し、近代化の基礎をつくった。このことは、誰しも認めるところであるが、これについて渡部氏は次のように書いている。

「留学生の制度というのは、ある意味では組織化された物真似制度であり、その制度はけっして物真似によって作られたのではなかった。それは民族の記憶によって作られたのである。その民族の記憶というのは聖徳太子にさかのぼるといってよいであろう。そこには明治維新当時の日本の発想法がさながらに動いているのである。

聖徳太子は比類なく聡明なお方であった。その聡明の質が明治の日本のリーダーたちと似ているところが面白い。すなわちよその国の優秀さがすぐおわかりになったのである。

当時の隋の文明は世界最高のものだった。太子にはそれがすぐわかった。他の国の文明の優秀性がわかるのはそれほど簡単なことではない。丁度、われわれが他人の長所がなかなかわからないように。太子は隋の文明の優秀さがおわかりになると同時に、すぐそれを摂取できることを確信なされ、さらにそ

れを超えることができるであろうということも一挙に洞察なされたらしいのである。

こういうパターンがあればこそ明治以後の日本人も、まず外国の長所をすぐに認め、それと同時に、それは摂取できると思ひ、さらにそれを超えることもできると思つたのである。なんと聖徳太子そのままではないか。日本以外の国には聖徳太子はいない。したがって白人の作つた近代技術文明に直面した時、なすすべを知らなかつたのだ。清の西太后がどうあがいたかを見ただけでもわかる。有効な反抗は何一つできずに西洋文明に屈したのである。日本には遣隋使や遣唐使という過去の記憶が残つていた。直ちに西欧の優秀性を認め、これを摂取し、これを超えるという伝統に従つたのである。」

渡部氏はこう書いて、東郷元帥の例をあげている。

東郷元帥は渡部氏の言うとおりにイギリスに留学して、イギリス海軍にならつて日本海軍を作りあげ、遂に日本海海戦の勝利によつてイギリス海軍を超えたのである。

いま横須賀に行くと、日本海海戦の時の連合艦隊の旗艦三笠が保存してあるのを見学することができ。その中の陳列室に、東郷元帥のイギリス留学中のノートがあるが、当然のことながらそれは英語で書かれたものである。あの、見るからに東洋流の提督が、英語で自然科学の講義のノートをとることができたことを知つて私は感動した。東郷元帥の教養のもとはもちろん和漢の学で、元帥は和歌を詠んでもあるし、書も立派なものである。東洋流の教養に立つてイギリス海軍の技術と精神を摂取したのである。

これは日本海海戦の参謀であつた秋山真之についても言えるし、旅順港閉塞隊の指揮官広瀬武夫についても言えることである。漱石や鷗外については言うまでもない。こういう明治時代の指導者たちは、



伝阿佐太子筆・聖徳太子及び二王子像

ほとんどみなと言ってよいほど誰も外国語に堪能であった。しかも、みな日本人としての自覚が強く、日本文化の伝統に生きた人たちであった。

『大日本帝国憲法』は国家の基本的原理を示す成文の憲法であるという点では、たしかに欧米諸国の憲法の「真似」であるが、内容的には、日本の伝統としての国体の表現なのである。『教育勅語』も、その普遍的徳目においては、欧米倫理を摂取しているが、それをつらぬく忠孝の大原理は、日本の国体からくるものである。

渡部氏の言われる通り、こういう明治時代の指導精神の原型を求めれば、たしかに聖徳太子の事業が浮びあがってくるのである。聖徳太子の「十七条憲法」と「三経義疏」による大陸の国家組織と大乘仏教との摂取が、そのよい例である。

表面的に見ればこれは大陸文化の「物真似」である。しかし、「十七条憲法」や「義疏」の章句について、直接その思想内容を見ると、そこに国民的自覚にもとづく精密な批判と選択とが行なわれていたことがわかる。このことは明治の「憲法」についても言えることである。渡部氏の言う「他の国の文明の優秀性がわかるのはそれほど簡単なことではない」というのは、何を真似るべきかということがわかることであるから、当然、真似るべきではないこともわかることなのである。「批判」できるから「摂取」できるのである。そこに日本文化の連続性が確保されるので、自分を棄てて、一切を外国に真似るのであれば、それは外国文明に吸収されることと同じになる。

文化は交流によって発展するから、交流がなくなれば文化は頹廢して滅亡する。（「自閉症」は精神の発達を停止する。）

しかし、交流に際して主体性を失えば、それは他国の文明への隷属となり、自国の文化の喪失となるのである。これが国民文化の運命である。したがって、国民的自覚と国際交流とはたとえてみれば車の両輪のような関係である。それは国民国家の生命の表裏両面の活動なのである。

聖徳太子の大陸文明を摂取して日本文化を創造推進された事業が明治の近代化の指針となったという渡部氏の論文は、まことに示唆にとむものである。日本文化の連続性も、こういうところにこそ見るべきであろう。つまり、渡辺氏の言うところを押しすすめて言うところ、外国の文明の優秀なところを真似てそれをこえてゆくところにこそ日本の文明の優秀性がある、ということになる。閉鎖的な国粹主義も排外的な国際主義もともに日本文化の真髄ではないということなのである。

そういう意味で、日本文化のすすむべき道を示されたのが聖徳太子である。その聖徳太子を暗々裡に仰いで、日本の近代化を推進したのが明治の先覚者たちであった。ここにおのずから日本の進むべき道が示されている。そして、——大きなことをいうようだが、——この成否は世界各国の動向——つまり「人類の福祉と世界の平和」に重大な影響を及ぼすにちがいない。つまり日本人が世界史の上に負っている使命ということである。

(教養部教授・教養部長)

(5) 韓国の国楽 (昭和五十年)

韓国芸術文化団体総連合会主催の韓国伝統芸能を観た。韓国の誇る国立国楽院と国立舞踊団による東京公演である。人間無形文化財の金素姫・朴貴姫・韓英淑さんを含むので韓国国楽の最高水準を示すも

のであろうと思うが、それにしてもスバラシイ演奏演舞で、勃興する韓国人の意気を満喫させられた。このような国楽がどのようにして伝えられたのか、また復興したのか——これも知りたいが、日本の雅楽と舞楽と平家琵琶と勸進帳と明治唱歌と——これくらい並べなければこの韓国国楽には対抗できないような感じさえした。

ギリシヤの悲劇をギリシヤ国立劇団の演出で観た時にも感じたが、文化民族の魂を表現した芸術は、それぞれにスバラシイものであるということである。同時に、世界で第一級の芸術として通るものは、民族的国民的特質の表現であるということである。

「百済時代に創られた宮中貴族音楽のひとつ」と解説にある「寿斉天」（国楽院演奏）は日本の雅楽とよく似ている。これは、日本と百済との関係を改めて考えさせる。

韓英淑さんの「サルプル」は凄壮そのもので、韓民族の胸にたまった愛人離別の悲哀をあらわしたものであろう。

「剣の舞」は、「新羅時代に創られた男性舞踊のひとつ。花郎道精神（武士道精神）を謳いあげた雄渾な踊りであるが、李朝から女性が加わっておどるようになった」と解説にある。たまたま、そのころ、見せてもらったコリア・ヘラルド紙に、大統領特別補佐官・哲学者バク・チョン・ホン博士が、急激な工業化の機運に際して、人間尊重の精神を失ってはならないと述べ、この敬愛の精神（Spirit of piety）こそ古代新羅王朝の花郎道の倫理綱領の基礎であったと述べているのを読んだので、この「剣の舞」を演じた動機を知ることができた。近代日本が「武士道」によって勃興したことは世界周知のことであるが、今日これをかえりみる人は少ない。韓国はいま新羅・花郎道によって、復興しようとしているので

ある。

金素姬、朴貴姫さんたちの「伽倻琴併唱と散調」は「伽倻国に創られた十二弦の楽器」に「併せて高音で唱う」ものであるが、その声調は雄大悲壯、魂を震わしめるものである。「伽倻国」は、任那のものであるとも言われている。歌詞の意味はわからなかったが、古代の英雄たちのロマンスを聴くような思いがした。

そのほか、雄壯な「長鼓の舞」とか、悲壯な「大琴独奏」とか、一言で言えば男性的な音調が、頹廢的な歌曲に慣れた耳にとどろきわたり、心に浸みるのであった。

韓国は、この国楽の精神で興隆するに違いない。

(Ⅱ教養部教授)

(6) ピンクのカーテン (昭和五十二年)

ニューヨーク勤務の若い友人が、ニューヨーク・タイムズに載った天皇・皇后両陛下のお歌とその英訳の切抜を送ってくれた。そしてそのことを知らせる手紙の中にこういう一文があった。

「最近の日本の状況は、新聞で見える限り太平ボケもいところだと憂慮されますが、それでも日本の深層で、確かなものに対する情緒の積み重ねが行なわれているように感じています」

「太平ボケもいところだと憂慮されます」とは、全く同感である。殊に「新聞を見る限り」と書いてある。

私もこの三月、二週間ほどネパールとインドとを旅行したが、帰ってきて新聞やテレビを見ると、正に「太平ボケ」としか言いようのない、夢のような世界がくりひろげられていると思った。

旅行中、日本の新聞も読まず、日本のテレビも見なかったのが、よかつたらしい。

ネパールの首都カトマンズはいま中共とインドの接点である。チベットのゲリラ部隊が制圧されたことは、日本の新聞には出なかったが、アジア研究所の所報に出ている。

チベットのラサから国境のコダリを通ってカトマンズに通ずる中共製の道路と、カトマンズから南へインドに通ずるインド製の道路と、これがカトマンズで一つになっている。平和なカトマンズの道路を毎朝ネパール兵士が行進する。ネパールの独立意志は痛いほどわかる。

どこの国にも見られるこうした光景を見て来ただけで、日本の新聞やテレビが「太平ボケもいところ」に見えるのだから不思議である。

新聞やテレビで、ロッキード事件に目をとられている間に、ろくな論議もなく核防条約の批准が行なわれてしまった。国内の派閥の争いに明け暮れて、国際関係のきびしさを忘れたいい例である。

「鉄のカーテン」とか「竹のカーテン」とかいう言葉があった。これは社会主義国の報導の規制を言ったが、日本のテレビや新聞は、日本人の見るものをピンク色にボカしてしまうのではないか。そう思った。

(7) 日本文明の密度 (昭和五十一年)

奈良の国立博物館の入口のところ、上代の仏教寺院の所在を示した日本地図の模型図がある。ボタンを押すと、その時代の寺院の遺跡を示す豆電気が点灯するといふ仕組みになつてゐる。

飛鳥時代は四十数寺で、大和中心に点々とちらばつてゐる。法隆寺とか四天王寺とか、有名なお寺が多い。

なるほど！と思つて、次の白鳳時代(天智・天武朝の頃)の標識のあるボタンを押すと、——驚いた。豆電氣は、日本全国にわたつて、——五百数十だつたらうか——晴れた夜ぞらの星よりも繁く、飛行機から見る都会の灯の海のやうに、燦然と輝き出たのである。

飛鳥時代と白鳳時代、——この間、七、八十年とみてよからう。四十数寺からその十数倍の五百数十寺に増したといふのである。

さらに、天平時代(西暦七五〇年頃)には、なほ増加して、その数は約千寺に近かつたと思ふ。いま日本の大学の数——短大を含めて——ほどもある。

明治以来百年間に出来た大学の数と上代仏教寺院の数とは、その数約千といふことで、不思議な暗号を示してゐるが、これはよく考へてみる価値がある。

千二百年前の仏教寺院の中で今日昔ながらの姿を見せてゐるのは法隆寺その他ごくわづかである。しかし、今日見るかげもない姿の飛鳥寺などが、当時壮麗なものであつたことが遺跡の発掘によつて知ら

れてゐる。それを思ふと、天平時代に日本全土に散在した千寺の寺院は、その規模がそれぞれ法隆寺程度であつたと想像できるのである。これは、当時の世界文明の偉観であつたにちがひない。

シナやインドには、日本にはない巨大な文明の成果があつたのは事実である。竜門・雲崗の石仏群とか、長安・洛陽とか、敦煌とか、乾陵とか、タジマハールとか。

しかし、八世紀に、法隆寺のやうな千寺近くもの木造寺院が日本列島に散在して、丹青の美を緑の天地に輝かしてゐたことを思ふと、それほどどの文明の密度が当時のシナ文明にあつたか、インド文明にあつたか、と問ひたくなる。

日本文明の密度の高さは、世界に誇るべきことだと思ふ。

しかし一面、これが方向を誤るとどんなことになるか。恐ろしい結果が現はれるのである。日本にある千の大学に象徴される日本の近代文明の行方が心配である。(THE ASIA 五一・五・三〇)

(8) 国際社会と国民文化 (『留学生文集』創刊号(昭和五十年))

モンゴルの大使館に行つていた鯉淵さんが帰国して、お土産にモンゴルの民謡のレコードをくださつた。はてしない草原にむかつて朗々と歌われる唄の、意味はわからないが、雄大な声調に心のあらわれる思いがした。

これを聞いていると、気のせいとか、日本の馬子唄によく似ているように思われる。追分節とも似ている。追分節はもととも馬子唄だというから、それはあたりまえなのだろう。

今年は文化庁でアジア民族芸能祭を行ったので、アジア諸国の民族舞踊とそれにともなう民族音楽を觀賞する機会が多かったが、伝統芸術というものはそれぞれすばらしいものに思える。ひと真似は、おもしろくない。

国際的な文化の交流というのは、国々の文化が交流するということであつて、国々の文化の相互影響を言うものである。そして文化が発展するのであるが、国々の文化が発展するのであつて、共通の文化というものが出来るのではない。文化というのは、現在のところ国民生活に基礎をもつからである。共通の文化に見えても、それはそれぞれの国の文化に根を下ろしてはじめて生きてはたらくのである。

したがつて、われわれが人類の文化の発展に寄与できるのは、自国の文化の紹介と伝達ならびに他国の文化の研究と導入とによつて寄与できるのである。自然科学者、特に数学者などが例外と思われるが、それとでも、岡潔博士によれば数学にも国民的性格が反映すると言われるので、そうなれば、あらゆる文化は、国民文化をもとにして交流すると見なければならぬ。

そこで、国際的な交流の前提になるものは、まず自国文化の伝統を体得することではなければならない。これは、自国文化の歴史伝統を知りつくしてから外国文化の研究をせよと言うのではない。そんなことは出来はしない、しかし、自国文化を学ぶ心の乏しいものには外国の文化を正しく学ぶことさえむづかしいのである。現代の文明社会は、国家生活というものがあつて、人間の生活は国家単位で行なわれており、国家は自然に文化的統一を旨とするものである。国語の統一、憲法の制定、宗教についての統一というふうに、国家内部の統一的要求はなくなるわけにはいかないのである。

そこで、くり返すが、人類の文化は、その現実の姿としては、国民文化としてあらわれている。そこ

で、国際的な文化の交流ということは、国民文化の相互尊重ということになる。文化の根本的基礎はその国の言語であることは言うを俟たない。そこで、国際的な文化の交流には、外国語の研究が欠かせないことになるが、外国語の勉強の基礎になるのは、本国語についての学習なのである。外国人から本国語についての説明を求められて、充分に説明できないようでは、国際的交流は一方的なものになってしまう。また、外国人に外国語のことを質問することができないようでは、その国の文化をよく知ることもできない。

本学の留学生会の諸君が、それぞれ本国の文化伝統を代表する意気込みで、本国の文化を、日本人学生諸君に伝達してほしい。また、日本人学生諸君から日本文化を学んでほしい。真の愛国者同士の交流が、私は、本当の国際的交流だと思ふのである。

いつだったか、前会長のベマ・ギャルボ君が、社団法人国民文化研究会の青年学生会宿教室の余興に、アジア各国の民族衣装の一部分ずつをとって、一人の人間が着たら、どんな姿になるか、各国語をませあわせたウタを歌ったらどんなになるか、——という実験をやってくれた。珍妙なその姿と唄とに、会場は大爆笑にわいたが、それは本国の文化の根を失ったコスモポリタンが陥った分裂症の姿であった。そんなふうにはならない。

(留学生会顧問)

(9) 中国の動向について (昭和五十一年)

毛沢東中共主席が死去した時、日本の各新聞は一斉に、第一面に大活字でその死を伝え、何ページに

もわたってその偉大な功績をたたえ、日本の首相、大臣、役人、民間、ほとんどあらゆる分野にわたって追悼のことはを集めた。そうして、今後の中国について論じた。——文革派と実権派との対立とか、後継者は誰かとか、独裁か集団指導かとか、軍か党かとか。それはそれとしておもしろい問題だから考えてみるにこしたことはないが、ただ最も重要な認識が欠けているのではないかと思う。それは、中国共産党中央委員会の発表した訃告の意味である。これは大変長い標題になっているが、各紙ともその全訳を載せていたので、誰でも読むことができる。次の通りである。まず標題は——「中国共産党中央委員会、中華人民共和国人民代表大会常務委員会、中華人民共和国國務院、中国共産党中央軍事委員会の全党、全軍、各民族を含む全人民に告げる書」というものである。中国が中国共産党の独裁国家であることは一目瞭然である。したがってこの中国共産党の意志というものが、今後の中国を動かす何よりも大きな意志なのである。

そこでこの訃告全文をよく読むと中国を動かす根本の意志がわかるが、その最後の言葉は次のとおりになっている。日本人としてこれをどう受けとめるか、追従や追悼にふけてなどはいられまい。忘れないうちに再録しておく。

「われわれは毛主席の遺志を継いでマルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想の学習につとめ、マルクス、レーニンの著作と毛主席の著作に励み、ブルジョア階級とすべての搾取階級を徹底的に覆し、プロレタリア独裁をブルジョア独裁にとつてかえ、社会主義で資本主義に戦い勝ち、わが国を強大な社会主義国家に建設するために、人類に対する比較的大きな貢献をかちとるために、最終的に共産主義を実現するために奮闘しなければならない。不敗のマルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想万才！……万

10 中国の古代青銅器と古墳の壁画 (昭和五十二年)

(一) 中国古代青銅器の美

昨年のことになるが、中華人民共和国古代青銅器展が東京の国立博物館で開催された。殷周時代の青銅器は、東京でも見られるし、台北の故宮博物館でも見たことがあるので、特別の期待は持たなかった。秦始皇帝陵出土の陶製の武人俑(等身大)とか陶製の馬像とかを見ておかうと思つて出かけたのである。ところが、第一室に入るなり、そこに陳列されてゐた殷(商)時代初期(紀元前十六世紀頃といふ)の青銅器の壮大きさに圧倒されてしまった。息をのんで立ち尽くしては見て廻つた。

青銅器の大きさにも驚いたが、その形や模様の厳肅さは、見るものの心を緊張させずにはおかない。しっかりとした形のもつきびしさである。壮嚴といふ言葉があてはまる。——さういった美しさである。谷川徹三氏は「総じて殷周の青銅器は神秘を秘めた厳しく荘重な形の迫力に充ちた威圧感にその特色がある」と言つてをられる(毎日新聞「驚異の中国古代青銅器展」)。その通りであると思ふ。そして「四羊方尊」をあげて「雄偉な上に華麗なこの精作は他に比べるものがないのではないか。」と絶賛してをられる。これも全く同感であつた。

私はこの莊嚴とも言へる青銅器の一つ一つの前に立つてその器形や文様を味はひながら、このきびし



中国古代青銅器

い形と文様を支へてゐるものは何だらうかと思つた。この青銅器、儀器で、礼儀——つまり秩序を示してゐるといふことである。そこに私は、国家形成の求心的な強烈ないのちを感じた。

国家成立以前の、混沌たる世界から、国家といふ秩序ある統一体を形作り、それを維持してゆかうとする強い文化意志を感じるのである。

我々現代人はすでにある国家の中に生まれて来た。そこでかへつて国家を束縛と感じやすい。しかし、国家を作り出して来た文化意志といふものは、創造的意志であつたにちがひない。それは今日でも働いてゐなければならぬはずのものであるが、今日人々は、出来上つた国家の恩恵になれて、かへつてその恩恵を忘れてゐるのである。

私は殷周青銅器に、国家形成のいのちを感じた。これが、人々をひきつけるのである。自由世界に欠けやすい秩序の感覚がここにある。極端に言へば、全体主義のきびしさとも言へよう。共產主義社会のもつ秩序のきびしさと言つてもよい。しかし、共產主義は、一部指導者の智的計画であるから、国家形成のやうな全民族の自由な情意の支持をうることができない。つまり、共產主義社会からは、世界の人類を動かすやうな芸術は生まれまい。中華人民共和国は、殷周青銅器を発掘は出来ても、それ

に比べうるやうな芸術作品を作ることはできない。ソ連も同じであらう。ソ連作家の中で世界的に高い評価を得てゐるのがソルジェニーツィンといふ反共作家であるといふのが、歴史の皮肉である。

あとで瀧川政次郎博士にお目にかかった時うかがつたが、青銅器展の大方鼎（大きな方形の鼎）は、刑器であらうとのことであつて、ぞつとした。解説には「牛や豚や羊をまるごと煮る」とあつたが、動物ではない——あるいは動物ばかりではないと思はれる。共産主義国の拷問を思ひおこして、ぞつとしたのである。とすれば、かういふ青銅器は無い方がありがたい。

(二) 中国古代陵墓の壁画

昭和四十八年七月、東京国立博物館で行はれた「中華人民共和国・出土文化展」に行つてみたら、春秋時代から漢唐に至る古墓から発掘されたおびただしい文物財宝が展示されてゐて圧倒される思ひであつた。

殊に唐時代の懿徳太子墓・章懐太子墓の墓道の壁画は、模写ではあるが、その壮大さ華麗さは驚くべきものであつて、高松塚の壁画とは、その大きさに於て、比べものにならない。

貝塚茂樹博士がかうした智識に立つてなほかつ、高松塚の壁画を第一等のものとしたのは、やはり日本人の感受性に立つたものと思はれるが、いまはその問題についてではなく、かかるおびただしい財宝文物を墓に納めて、秘匿したのはどういふことなのだらうかと考へてみた。

墓は盗掘されないやうに万全の方法が講ぜられたといふのであるから、副葬された文物財宝を後世に

伝へようとしたものではない。二度と地上に現はれないやうに地中に封じられたのである。

これについて、貝塚博士が、「死者の靈魂の不死、少くとも観念的にはそう信じていることが、こういう厚葬の基礎になっている」と書かれたのが、その理由であらう。

一世を驚した「馬王堆一号前漢墓」（湖南省長沙・前漢時代・紀元前二世紀）の「彩繪帛画」は、天上人間界地下界が上中下の三段に画かれてゐるが、天上界地下界とも人間界とあまり変りがない。人間が死んで天上界に行くにしても地下界に行くにしても、そこで人間界と同じやうな生活をすると思ふならば、副葬品は財を尽してするのが、「孝」なのであらう。

殷の帝王の墓から多数の殉葬者が発掘されたのも同じ理由にもとづくのであらう。

かうした中国の墓にくらべると日本の古墳の内部の規模はほんの小さいものである。壁画と言っても高松塚の壁画と章懐・懿徳太子の墓道の壁画とを比べてみれば、規模の大小の差は一目瞭然である。日本は地下の墓室ではなく、地上の形に永遠のものを残さうとしたやうに思へる。前方後円墳の形がそのひとつである。神社建築もそれである。これは、石造ではない、木造で、建て代へるのである。永遠のものそのものでなく、むしろ永遠の形を残したとも言へよう。

聖徳太子がおなくなりになった時、当時の人々は、太子が「天寿国」に再生されたと信じたらしい。それでもその御陵墓は、三骨一体の現磯長陵で、規模は唐の太子のものに遠く及ばない。

皇極天皇の時、蘇我蝦夷が己が祖の廟を葛城の高宮に建てて、天子の舞たる八佾の舞をし、全国民の力を集めて雙つの墓を作つて、一を「大陵」と言つて自らの墓とし、一を「小陵」と言つて子の入鹿の墓とした、といふ記事がある（「日本書紀」）。これなどが、中国式の靈魂復活の信仰による中国式巨大

墳墓であつたかも知れない。今日残っている飛鳥の石舞台は、さうしたものの名残であらう。それにして中国皇帝の陵墓にくらべれば小規模のものだらう。

いづれにしろ、日本の古墳は、中国の古墳とはその性質がちがふやうである。ただ単に日本の物質文明が遅れてゐた、つまり日本が貧しかったからといふわけでもないやうだ。死後の世界についての考へがちがふのである。

日本人は、個人の靈魂の不滅を信するよりも、民族の靈魂の不滅を信じたやうに、私には思へる。神社建築に見るやうに、ものそのものの不滅よりも、ものの形の永続性を信じたのである。天皇統治の永遠を信じた国民と、王朝の交代を前提とした国民との差が、そんなところにも出てゐるのである。日本人は自分は死ぬが国はつづく、——このことを自明のこととして生きてゐる。中国の人は、自分の生きている国が永遠につづくとは信じてゐない。だから、永遠に生きるには、自分が永遠に生きなければならぬ。貝塚茂樹博士が、「私は今度陳列された古墳の発掘物をながめて、今更ながら、中国人の不朽を求める願望の強烈さに驚かざるをえない」と言はれるのはもつともで、それには、右のやうな理由もあると思ふ。

日本人の不朽の願望は、自己そのものではなく、自己をふくむ家とか国とか郷土とか自然とかの不朽にむけられたのである。しかも、靈魂は精神化されて、言靈となり名となった。巨大な墳墓や贅沢な副葬品や殉葬者は必要がないのである。

もちろん中華人民共和国もかうした巨大な墓を誇っているわけでもない。「解説」によると誇るべきものは、精巧美麗な副葬品を作つた工人労働者の技術であるといふことである。しかし数千体の武人俑

を埋蔵してゐると見られる秦始皇帝陵を発掘しながら、その秦始皇帝を崇敬した中国指導者は、古代世界帝国のまぼろしを追つてゐたのではないかとさへ思ふ。

(アジア研究所報・第八号・五二、一〇、二九)

(11) 中蒙国境の緊迫状態 (昭和五十三年)

私は昨年八月から九月にかけて、北京からモスクワ行の国際列車に乗つて、中華人民共和国とモンゴル人民共和国との国境を通過する経験をした。

両国とも国境近くに強力な軍備をしていることがひしひしと感じられた。モンゴル側にはソ連の軍事基地があつて、国境の町はソ連人の住宅が大部分であるような印象だつた。中国人には、特別な施設らしいものは見られなかつたが、漢民族が坵の家を作つて、ゴビの砂漠を西へ西へと進出している気配は、軍備以上の迫力があつた。

それよりも、北京の防衛である。北京郊外の工場の地下壕を見学させてもらったが、工場従業員千何百人かが入れるようになってゐるのである。それを説明してくれた妙齡の女工員が、「戦争になったら私達はここに入って何ヶ月も戦うのです」と、事もなげに言うのを聞いて、空恐ろしい感じがした。後で、日本の新聞記事を見たら、包頭のゴビ地帯にトーチカ状の出口があつて、それは包頭の工場の地下壕からの出口であつた。北京の工場の地下壕は、食糧、炊事その他生活できるように準備されており、各工場が地下壕で連絡できるようになってゐるということであつた。北京の工場従業員の大半は、



中蒙国境標石

戦争になったらこうした地下壕で生産をつづける覚悟になっているのである。

これに対して、ソ連がどういう戦備をしているか、ちよつとわからないが、ソ連側——つまりモンゴル側では、攻撃される心配はないので、攻撃方法について考えているのだろうか、それにしても現在は、地上戦闘ということはすぐわかってしまうので、戦備が行なわれず、すべて地下での戦いにうつって来ているのではあるまいか。

中国とモンゴルの国境は、竜虎相うつ、一触即発の形勢である。これは誰の目にもわかることであるのに、あまり報道されないのはどうしたことか。日中平和条約というのは、日本人が対ソ防衛のために、大都市のすべてに無報酬で地下壕を掘るといふ未曾有の大事業をやっている中国人と日本人が手をとって、一緒にソ連と戦おうということだ。その覚悟なしに口さきだけで仲良くやろうということではない、——と私は国境の緊張状態を見て思った。

(五三、五、二五)

Q2 ゴンチャロフの言葉から (昭和五十三年)

古川哲史教授の「外人の眼に映じた日本の社会と倫理」という論文(『日本思想史講座別巻1日本人論』所載)を読んでいたら、幕末に日本を訪れたゴンチャロフというロシアの作家がこんなことを書いている。「いかにして日本人のねむりをさますか」という題の文章の一節である。

「彼ら(日本人)は外国人と通商を始めることをきめたとしても、外国人が市街地を自由に旅行した

り、個人的交際を結んだりすることは、いつまでも禁じておくであらう」と。

そんなことで、「日本人のねむりをさますことができるか」と、ゴンチャロフは言ったのだが、私はこれを読んでいて、すぐ現代の中国——プロレタリア独裁制（中国憲法）の中華人民共和国——の現状を憶った。

最近、日中友好平和条約締結の動きがニュースに流されているが、友好条約ができれば、日本人は、右のゴンチャロフの言うような、自由な国内旅行や自由な個人的交際ができると考えているのではないだろうか。もしかしたら、現在すでにそうしたことが自由に行われていると考えている人がいるのではないかと思う。とんでもないことである。中華人民共和国の人は、自由に日本の国内を旅行することができ、日本人と自由に交際することができる。これをチェックするものが、もしあるとすれば、中国大使館であつて、日本政府ではあるまい。しかし、日本人は、中国を自由に旅行し、自由に交際することはできない。ひとつ、ひとつ許可を得なければならない。

これは日中両国人民の対等の交際ではない。日中友好は対等の交際でなければなるまい。私の外国旅行の経験はそう広いものではないが、自由な旅行、自由な交際の許されないのは中華人民共和国がはじめての経験であつた。大韓民国、中華民国、ネパール、タイ、インド、香港はみな自由である。欧米諸国が自由なことはいうまでもあるまい。社会主義国モンゴル人民共和国は、自由にはできないようだが、中国ほどきびしくはないようだ。ソ連はどうなのか——人に聞くと、自由ではないようだが、平和共存で大分緩和されてるらしい。

ゴンチャロフが百年前に日本について述べたことが、いまの中華人民共和国はじめ社会主義国にあて

はまるのは、歴史の皮肉と言うべきではあるまいか。

(五三、六、五)

13 外国語熟と国語問題 (昭和五十三年)

最近、本学の学生諸君の間に、外国語熟が高まつて来て、外国語を勉強する学生が増えてきたことは、大変結構なことで、今後とも大いにガンバってほしいと思う。

ただその際、外国語の学習と平行して国語の読み書きを勉強することを忘れないでほしい。

近代日本のリーダーとなるには、外国語特に欧米語の習得が一つの条件であったことは、歴史の事実である。明治時代の後半からは殊にそういう傾向が強い。文学や科学や技術という文化の方面ばかりではない、企業や政治で活躍した人物も、ほとんどが欧米留学の経験者である。今日では保守主義のかたまりのように思われている明治時代の將軍たち——乃木大将でも東郷元帥でも秋山將軍でもみな留学の経験者で、欧米語の会話はもちろん読み書きのできた人々である。

大正時代から昭和へかけて、この傾向はますます強くなって、英語は旧制中学の必修科目となり、大学入学の条件となったのである。こうなると、欧米語は、欧米の文化を知る手段ではなくて、ただもう立身出世の手段になってしまう。

世は、欧米風の風俗を追い、翻訳小説や翻訳哲学の氾濫となり、リベラリズム、デモクラシー、マルクスイズム、ソシアリズムの流行となった。自国文化の伝統を忘れるのみか、これを排撃するにいたった

のである。

この反動が大東亜戦争中起って、英米語は敵性語などと言われたりしたが、そのまた反動が戦後に来て、英米語が大企業の入社試験に行われ英米語が出世の条件となっているのが現状なのである。

さてここで一つ考えておかなければならないのは、明治時代のリーダーたちが、自国文化の伝統をしっかりとしつけていたことである。それが彼らの強みであったので、「和魂洋才」は彼らの血肉であった。今上天皇御即位五十年の式典で三木前首相が式辞を述べたが、中で、明治天皇の有名な御製を読み誤ったことは、当時新聞でもとりあげられていた。誤りは誰でもあるので私にはそれを追求するつもりはないが、まことに象徴的な出来事であったと思う。明治時代のリーダーたちにはおこりえないことなのである。

外国語の習得に平行して国語を勉強してほしいと思うのは、こういう意味からである。外国人と交際してすぐ質問されることが、日本の文化であり哲学であり宗教であることは、誰しも経験することである。これに答えられなくては国際文化の交流などと大きなことは言えない。国際社会とは各国文化の国際的交流にほかならないからである。

(五三、六、一五)

14 共産主義社会の実態と日本のマスコミの報道(昭和五十三年)

ヴェトナムの内戦がアメリカ軍の撤退で終わったことは周知の通りであるが、当時の日本のマス・コミ

はこぞつてヴェトナム民族解放戦線を支持した。アメリカではこれをヴェトコン——つまりベトナム・コンムニストと呼んだが、日本では民族解放戦線と呼んだのである。これはあたかもヴェトナム民族が——殊に南ヴェトナム人民が、アメリカと南ヴェトナム政府の弾圧政治から「解放」されるというような印象を与えたのである。ところが、この「解放」の実態がどんなものであつたかは、まず当時のサイゴンに進駐した民族解放戦線軍とは、ソ連製戦車を先頭にする北ヴェトナム正規軍であつたということ、予感され、つづいて南ヴェトナム人の多数のアメリカ・フランス亡命と、さらにいまにつづいているヴェトナム人民の海外脱出の決死行で暗示されている。共産主義社会の中の非党員の生活がどんなに苦しいものか——どこでも党員の数は限られているので、共産主義社会とは新しいカースト制のようなものだ——が、最近になってすこしずつ日本のマスコミにのるようになった。

カンボジアの実態についての報道はもつとひどい。クメール・ルージュ（赤いクメール——つまりカンボジア共産主義者）をカンボジア民族解放戦線と呼んで、シアヌーク殿下の政府の支配に対する英雄的抵抗運動のように報道していた日本のマスコミは、ごく最近になって、ルーマニアの新聞記者の現地報道に驚駭して、その恐るべき実態についての報道を伝えたのである。

都市人口を強制的に農村に移動したということについては、何か新しい農業社会が到来するような幻想を抱いた人も、貨幣経済をなくしてしまつたと聞き、ブノンペン（プノンペン）の荒廃した姿を写真で見ても、その原始社会への転落ぶりに慄然としたにちがいない。しかしこれはルーマニアの記者によるのである。

さて、中国についてはどうだろう。四人組による文化大革命を謳歌した日本のマス・コミは、今度は四人組の罪悪を摘発しているが、要するに時の中国政府の言うことを報道しているにすぎない。中華人

民共和国の民衆生活というものの実態には少しもふれていない。これは北京の街を歩いてみれば誰にだつてすぐわかることなのである。私が北京で見聞きしたことに合致するのは、日本記者の文ではない。「毛沢東を入れた五人組」という『諸君』五月号に載った仏人記者の見聞記であつた。

(五三、九)

15 共産主義社会の物価 (昭和五十三年)

この前、この灯台欄に、中華人民共和国(共産主義中国)の民衆生活の実態について述べたら、早速批判があつた。

新聞やテレビで見ると、中国(中華人民共和国)の物価はおどろくほどやすい。家賃なんかは、ただみたいだということではないか。それで暮らしにくいはずはない。——という批判である。

たしかに、テレビなどで報道するのを聞いていると、そう考えられる。野菜の値段など、ちょっと聞くだけで、日本の値段の十分の一くらいである。

しかし、物価がヤスイとか、タカイというのは、収入に照らして考えなければならない。カンボジアでは、生活必需品の物価がない、ということである。完全配給制なのである。——これが、暮らしよいか!

『アジア研究所紀要』第四号「中国モンゴル紀行」に梶村教授の書いているところによると、昨年十月、中国の鉄道労働者の賃上げが発表されて、最低三二元、中級で五四元という。これは、鄧小平氏復活の政策転換による賃上げとして報道されたのである。日本円に換算すると、四千八百円から八千円

ということになる。日本の「鉄道労働者」の二十分の一か三十分の一とみてよいであろう。つまり、月給が日給と同じくらいになってしまうのである。

収入が十分の一で消費物価が十分の一なら、生活程度は同じになれるかも知れない。しかし物価が十分の一で、収入が二十分の一とか三十分の一とかでは、暮らしていくことになる。物価ひとつとつてもその身になって考えるのが大切なのである。

去年の夏聞いたところでは、自転車も時計もそれぞれ百元ということだった。つまり、月給の二倍か三倍ということになる。日本のそれとくらべてみるとよい。

私が八千円の月給をもらったのは、昭和二十五年の頃だった。したがって、中国の一般の生活は、昭和二十五年ごろと変わらないのではあるまいか。

中国の物価がヤスイなどというと、中国人のウラミを買うだろう。しかし、いま私は、共産主義社会の民衆生活の困苦を見下したりしているのではない。むしろ、恐ろしい力が蓄えられていると見てゐる。民族の力は困難の中にくたえられるからである。

(五三、一一、四)

⑯ 日中文化交流について（昭和五十三年）

日中平和友好条約の締結にともなって、早速問題になるのは、日本と中国との文化交流であるが、その際、次のことが大切だと思ふ。

中国は、文明（文化ではない）の進歩においてかつてはアジアの先進国であった。中国周囲の民族は、インドを除いて、みな中国文明を吸収して、国の独立と文明とをかけたのである。韓民族の文明も日本の文明もモンゴル民族の文明もヴェトナムの文明も、みな漢字を媒介にする中国文明の影響や刺激をうけて発展したということができよう。これは大ざっぱに言って、約千年ほど前のアジアの諸国の文明の歴史の事実である。

このため、中国の周辺の国々では中国文明に対する畏敬の念が強く、中国文明の研究にきわめて熱心であった。日本などは熱心すぎるほどであって、いまでも、日本の文明は中国文明の一支脈であるという見地をなす人さえあるくらいである。

そのせいか、逆に、中国人の日本文明に対する理解度は、きわめい低いように思われる。日本文明は、明治以来、欧米諸国で深い研究が進められている。そのいい例は、日本の古典の欧米語訳で、日本の古典の中で日本人の教養として読むべきものはほとんどみな英訳されているとみてよいであろう。また、日本人自身の自国文化の研究も欧米語で発表されている。岡倉天心、新渡戸稲造、内村鑑三の英語による著書などがそれである。

ところが、欧米の日本文化研究に匹敵するようなものが、中国人にあるか、———というと、皆無ではあるまいか。

古事記、万葉集、源氏物語、平家物語、和歌、俳句、日本書紀等には、皆、英訳が出ているが、中国語訳はあるまい。（註・のち、古事記・万葉集訳は刊行され、源氏の中華訳も出た。）

いま欧米の優秀な智識人たちは、アジア文化の伝統を日本文明に求めて、人類の文化を精神的に統一

しようとして必死の努力をしているように見える。

日本の優秀な智識人たちは、欧米追隨の夢からさめて、日本への回帰によって、日本文化の伝統を自覚しつつある。

日本と中国との友好関係を永続させるためには、中国の知識人たちが、日本文明の研究に本気で取り組んでほしいと思う。一時の利害だけの友好関係は、永続するものではない。相互理解が平和な国際関係の基礎であることを考えると、これは、最も重大な問題ではないかと思う。そしてこれが、日中友好の永続のパロメーターになると私は思う。

日本と中国とは同じところも多いが違ふところも多い。日本における中国文学の権威吉川幸次郎博士は、日本における虚構の文学は、中国をはるかに抜き出ていると言っておられる。古事記とか源氏物語は、中国文学の模倣ではなく、日本人の独創の世界的文学である。

(五三、一一、一三)

17) 国際文化交流について (昭和五十四年)

『アジア研究所所報』第二号の「アジアの窓」に、私は、日中文化交流について、中国側からの日本文化研究がとほしいということを書いた。そして、こう書いた。日本の知識人は、中国文明のエスプリとして中国古典を読むことを怠らなかつた。『論語』とか『孟子』とか李白とか杜甫とかは、日本人の古典かと思われるほど日本人の心に親しまれてきた書物であり詩人である、

それにくらべて、『古事記』とか『源氏物語』とか『万葉集』とか『平家物語』とか、今日すでに英訳されて欧米人にも親しまれはじめた日本の古典の中国訳があるのか？と書いて、中国の知識人の日本文明に対する研究の不足を指摘したのである。

早速、反響があつて、まず第一に『万葉集』には、錢稻孫という人の中国語訳のあることを知らせていただいた。『漢訳万葉集選』（一九五九年三月、日本学術振興会）という書物である。まだその本を読んでいないので何とも言えないが、書名からして「選」であることが想像される。全訳である必要もないが、英訳は、日本人訳であるが全訳が出ていることと比べるとどうだろう。

それにしても、日本古典の中の『万葉集』の選訳だけというのでは、欧米訳にくらべてもずい分さびしいことだと思う。

ごく最近まで、日本の文明は中国文明の一支流であるという説が一般化してしまっていたので、中国人が日本文明を中華文明の一変形のように考えて、あまり敬意をはらわなかったのも無理はないが、二十世紀の世界の諸文明の激しい交流は、そうした独断を許さなくなつたのである。そこに、欧米知識人の日本文明に対する強烈な研究熱があるのである。文化は交流によつて発展する、というのは、文明史の事実であり原則である。

かつて、中国文明インド文明を中心にして大陸の先進文明をむさばるようになつて、近くは欧米文明を吸収しつくしたと思われぬまでに吸収したことにこそ、日本文明の近代の発展の秘密があるのではないか。

そしてその吸収のほげしさは遂に自己喪失に近づいてきて、改めて日本文明の伝統をその源流にまで

さかのぼって顧みなければならぬ、というのが、現在の日本の思想状況である。健康な国際交流とはこの遠心力と求心力とのバランスの上に行われる。

留学生諸君よ。日本の欧米化・近代化の外面だけでなく、日本文明の中核をなすもの、日本文明のエスプリである古典を勉強してほしいと思う。それは二千年の日中文化交流の歴史の上で画期的な問題なのである。片恋のうらみを述べているわけではない。中国文明の発展のためにも必要な文化的事業なのである。

最近、新聞を見ていると、プロレタリア独裁の中華人民共和国では、日本の技術導入について非常な熱意を示している。それはそれで一応はそれなりの交流ができるが、それでは本当の文化交流はできない。中華民国も同じではあるまいか。

（『留学生文集』昭和五四、一、一〇）

18 文明の相互理解と国民文化（昭和五十一年）

中国文学の権威・吉川幸次郎博士は、毎日新聞元旦号に「文明の三極」と題する文章を寄せておられる。

その要旨は、中国文明と西洋文明を比較して、これを文明の二極とし、さらにそれとの比較から、「日本は、文明の更なる一極であるように見える」と論じられたのである。そして、世界が一つであるためには、「それぞれの文明の伝統が、まず相互にもっとよく把握されねばならない」と言われる。そのためには、日本人が他国の文明を理解するために努力すべきことは言うまでもないとして、「逆にまた

西洋の、また中国の、日本文明に対する理解は、トインビーのような識者をのぞき、なお甚だ遺憾な状態にある」と、結んでおられる。

まことに、警世の発言というべきである。

中国文明と西洋文明とを比較して、これを文明の二極とすることは、東洋文化とか西洋文化とかいいう言葉からしても、すでに定説である。ところが、それに対して、日本文明を「更なる一極であるように見える」と言われたことは、重大な意味があるのである。いまその意味を述べる前に、吉川博士が、日本文明を代表する文献としてどういうものをあげたか、これを見る必要がある。

それは次のものである。日常の文学としての和歌・俳句、虚構の文学としての「源氏物語」、日本神話（「古事記」「日本書紀」をさすものとみてよからう）、道元、親鸞、日蓮の三人、以上があげられている。

ちなみに、吉川博士が西洋文明を代表するものとしてあげられたものは、キリスト教神学、ギリシャの叙事詩、詩劇、自然科学、聖トマス、ホメーロス、ダンテ、シェイクスピア、プルターク等である。

中国文明を代表するものとしては、朱熹（朱子）、孔子、孟子、「詩経」、陶淵明、杜甫、白居易、蘇軾、「史記」、「資治通鑑」等があげられている。

「源氏物語」や「万葉集」や「古書記」「日本書紀」等は、それぞれ英訳その他の外国語訳があるが、中国語訳は少い。中国の人は、日本文明が自国中国文明と対等の、文明の一極であることを認めない人が多い。日本文明は、中国文明の模倣か、せいぜいその一支脈にすぎないとする考え方は、中国人はもちろん欧米人にも滲みついているらしい。それをまた読みかじり聞きかじった日本人が、自国文明の独

自性を自覚しないのである。

吉川幸次郎氏の関説したトインビー博士すら、その著述には、日本文明に対する考え方の変遷があったて、日本文明の真の理解に近づいたのは、その晩年の三度目の日本訪問によるものであったと、戸田義雄博士はその近著『宗教の世界』で論じている。

それは当然と言えば当然なので日本の学者の多くが、日本文明の独自性についての理解が足りないからなのである。国文学や国史学等日本文明の専門家をのぞいて、前記の日本文明の代表的文献を読んでいる学者がどれほどあるだろう。イギリスの学者でシェイクスピアを読んでいる人がいたらそれは学者と言われないだろうが、日本の学者で、記紀や源氏を読まなくてもすむというのは、どうしたことだろう。

こんな話もある。中国哲学の権威である岡田武彦博士が、コロンビア大学で、「貝原益軒の実学と朱子学」という講演をしたところ、米国在籍の一中国人学者が「中国の哲学も日本においては哲学者でなくなっている」と発言して、はしなくも論争となったということである。（『高校と教育』昭和50年10月5日号「日本文化の再発見」）。

岡田博士はこう書いておられる

「世間では日本の思想文化はすべて中国の受けうりで独創的なものは殆んどないではないかとよくいわれるので、日本の中国学研究者はそれをごもつともだとして肯んずる傾向があるが、かねがねそれを不満に思っていた私はこの際と思つて一言言わせてもらったのである」と。

今日の世界は、国際交流の時代である。国際交流には文明の相互理解がもっとも大切で、戦争は国際

間の誤解から起こることが多いのである。そう考えれば、文明の相互理解は平和の条件ということになる。だからこそ、相互理解が大切であるが、相手を正しく理解し、相手に自分を正しく理解してもらうには、まず自分が自分のことを理解しなくてはならない。つまり、自覚がなくてはならない。この理解と自覚とは一つのもので前後関係とか軽重関係で処理はできないが、文明の相互理解には他の文明を理解する努力をはらうことはもちろん大切なことだが、それと同時に自国文明に対する研究自覚が欠くべからざることなのである。日本人が自国の文明に対する正しい自覚を喪ったところに、中国人や欧米人が日本文明を軽視するに至った理由があると思う。文明自立の気概のない国を尊敬する国はない。

吉川幸次郎博士が「文明の三極」と言ったのは、内外の文献を味読した結果であることを思わないではいられない。それが、国際社会に登場する日本人の条件なのである。

(教養部長・国文学担当)

19 文明の相互理解は古典の理解から (昭和五十年)

「アジアは一つ」とは、岡倉天心(一八六二—一九一三)が、『東洋の理想』(“The Ideals of the East”)という英文の書物(明治三十六年ロンドンにて発刊)の、冒頭にかかげた言葉である。

有名な言葉だし大学の名と関係があるから、本学の学生なら誰でも知っていよう。では、「その意味は？」と聞けば、いろいろな答えが出てくるにちがいない。そこで、「この本を読んだか？」と聞いてみる。「読んだ」と答えられる学生は、ごく少ないのではないか。それで意味が分かるというのはおか

しい。天心は、Asia is One. という意味を説明するためにこの本を書いたのである。「アジアは一つ」は、言わば天心の研究の結果なのであって、空想による独断ではない。その証拠に、この題には、一種の副題が付いているのである。

“The Ideals of the East with Special Reference of the Art of Japan”

これがこの本の題名である。日本の美術を中心にして中国、印度の美術を研究したうえで、天心は「アジアは一つ」と言ったのである。天心のこの言葉を理解するためには、この書物を読まなければならない。

言葉と意味、表現と思想との関係はこのように密接である。

○

さて国民生活（または民族生活国家生活）というものは、歴史的に発展してきたものであるから、その国民、民族、国家の本質を知るには、その国の文化の歴史を知ることが、まず第一にしなければならない研究である。

例えばアメリカを知るには、現在のアメリカのさまざまな表現を知るとともに、過去のアメリカの代表的な表現——その中心は「古典」である——を知る努力をはらわなければならない。いま日本で『アメリカ古典文庫』という叢書が出ているが、これはこういう要求にこたえているものである。ヨーロッパの各国についてもこういった「古典文庫」が出来るとありがたいが、まだ日本のヨーロッパ研究はそこまで進んでいないのか、そういう企ては聞かない。

しかし、イギリスを知るにはシェイクスピアと英訳バイブルを読まねばならないとか、ドイツを知る

にはゲーテやフィヒテを読まなければならないとか、いうようなことは常識である。さらに欧米文明を知るには、その源流をなすギリシヤ・ローマの古典や新旧訳聖書を読まなければならないくらいのことは、日本のインテリなら誰でも知っている。

ところで、アジアの文明についてはどうなのだろう。

例えば中国を知るには、何を読んだらいいのか。もちろん、いまの中華人民共和国を知るには毛沢東の文章を読まなければならない。しかし、中国文明の長い歴史は、毛沢東ひとりのもではないので、いわゆる「四書五経」が中国の古典である。「四書五経」とは、『大学』『中庸』『論語』『孟子』の「四書」と、『易経』『詩経』『書経』『春秋』『礼記』の「五経」を言う。これに『史記』くらいは加えなければならぬから、これだけ読むのは大変である。しかし、一応の目安はついている。

これにならって、日本の古典をあげたらどうなるか。『古事記』『日本書紀』『万葉集』『祝詞』『源氏物語』『古今集』あたりまでは欠かせまい。法然・親鸞・道元・日蓮、『太平記』・芭蕉などつづく。

ところで、韓国の古典として何をあげるべきだろう。『三国史記』『三国遺事』は欠かせまい。モンゴルでは『元朝秘史』をあげねばならない。

次にインドはどうだろう？ 近代インドについては、ガンジーの文章によることとして、インドの古典をどう選んだらいいだろうか。インドの神話・叙事詩には、『マハバーラタ』『ラーマ・ヤーナ』があるが、これを読んだだけでは、仏教はわからない。仏教は、その経典を見るよりほかないが、日本人は大乗経典（漢訳の法華経とか維摩経とか勝鬘経とか）に慣れているが、それだけでもすまないという。当然その源流としてのヴェーダ類がある。

イランとインドネシアとはコーランが必読書となるが、ほかにどのような古典があるのか、私にはまだわからない。タイ、ビルマ、ラオス、カンボジア、——こういう国々の古典はいったい何なのだろうか。

しかし少なくとも、アジアを知るには、アジアの国々の古典を理解するところからはじめなければならぬと言えるのではないか。

そうして、アジアの人々の相互理解は、こうした各国の古典による相互理解からはじめるべきであろう。

○

いま述べたような、各国古典を各国の人々が読みあう時に、はじめて、標題の岡倉天心の言葉が生きてくるのである。岡倉天心は、それをやったので、天心は、日本と中国とインドの文明を研究して、標題の「ASIA is one.」と言ったのである。アジア各国の文明をその特殊の姿において展望する視点が大切なのであって、結論だけが大切なのではない。

岡倉天心の『東洋の理想』『日本の覚醒』『茶の本』が欧米人のアジア観、日本観に大きな影響を与えたという意味で、日本人のアジア研究の必読の書とするなら、中村元博士の『東洋人の思维方法』は、言語と仏教との比較研究によって、日本、中国、西藏、印度の「思维方法」の相違をきわ立たせて、天心の説を補足した意味で、これも必読の書と言うべきであろう。天心も中村博士も、アジアの各国を心から——つまりその文化を——知ろうとした点で、同じ思想にもとづいたものといえることができる。結論が大事なのではない、その研究の過程そのものに価値があるのである。

20 「秦始皇陵」と「毛主席紀念堂」 中国旅行から (昭和五十二年)

中国旅行から

先月、中国の古都西安に行った機会に、秦の始皇帝の陵墓を見ることができた。西安の東北方・臨潼の驪山の麓にある。説明書によると、「内外両城があり、内城は方形で周囲二千五百メートル、外城は長方形で周囲六千三百メートル、現存封土の高さ四十メートル」とある。なだらかではあるが、すそのひろい小山の姿で、日本最大の古墳といわれる応神陵・仁徳陵よりはるかに大きく見える。応神陵は全長四百五メートル、後円部の高さ三十六メートルとあるから、始皇陵に比べるとほぼ内城の規模である。高さはあまり変わらないが、周囲がはるかに大きいのである。しかもこの封土の底深く地下宮殿があるといっているのであるから、天皇陵よりはるかに巨大な古墳である。時代もはるかに古く西暦紀元前二四七年から二二一年にかけて、七十万人の人工を役使して造築されたと説明されている。

この陵墓から一・五キロはなれた地点から発見されたのが、例の等身大の武士俑と馬俑とである。折よく、発掘現場を見せてもらったので、その規模の大きさがよくわかった。

これは、陵の東方に、東方に向けて作られた巨大な陶俑坑で、地下に推定八千の武士俑(一・七八メートル×一・八七メートル)と馬俑を並べたものである。始皇帝側衛の前軍という。

深く掘られた坑の底に敷きつめてあって、その上に四列縦隊で武士俑の並んでいる姿は、実に

壮観である。しかもその武士の顔がひとつひとつ違っていて、向きも、前方を向いて立つものと外側を警戒するもののが、交互に並べられている。古代の専制君主の近衛軍団なのであろう。殷周時代に行なわれた殉葬に代えて陶俑が用いられているのはヒューマニティーの進歩といえようが、しかし、それでもこれだけの陶俑を作るのにどれほどの智慧が尽され、汗が流されたか、と思わざるをえない。それ全部地下に埋めて、皇帝の再生に備えるとは！日本の天皇陵とは規模はもちろん思想が全くちがうのである。それは、ひいては、日本の天皇と中国の天子・皇帝との思想のちがいを示しているのである。

さて、数日後訪れた北京の毛沢東主席記念堂には、遺体を収めた水晶棺が安置されていた。始皇帝の

棺も水晶製とのことである。偶然

の一致かと思ったところ、始皇陵の上に植えられていたザクロの木が、記念堂の前の植込みの並木となっているのには驚いた。毛主席が秦始皇帝を崇拜しているとは聞いていたが、この一致はそのあらわれにちがいない。そう思ってみると、この二人の間にはその徹底的な画一化の大事業の点で共通な



秦始皇陵・陶俑坑の武人俑

ものがあるように思われる。

秦始皇帝は万里の長城を築いて北方の衛りとしたが、毛主席時代に作られた地下壕はソ連の原爆攻撃に備えるたとされているが、その集計は長城に匹敵するのではないかと思う。

始皇帝の文字の統一は地方の文字を統一したものであるが、毛主席在任中の新字体の使用はこれに比せられよう。表意文字としての漢字の本質からすると、現中国の字体変革は革命的であつて、始皇の文字の統一に比せられる。

次に、始皇帝の事績とされている度量衡と貨幣の統一とは、新中国では特にあげることはないだろう。中華民国時代に統一されているのを継続しているらしい。ただし年号は、「公元」（西暦）、長さは「公尺」（メートル）に統一されている。面積「公里」はヘクタール等。

始皇帝の事績のもう一つには、「焚書坑儒」があるが、これは四人組による文化大革命の際の智識人の下放とか批林批孔とかに該当する。中国の書店では儒学の書物などほとんど見られないという事実が対比されよう。

さらに、始皇帝の作った阿房宮はどうだろう。これは壊滅して伝わらないが、その豪勢さは『史記』に伝えられている。私は今度北京の「人民大会堂」を観て、その豪華絢爛たる姿は、阿房宮のそれをおもわせられた。全部が大理石で作られている宏壮な殿堂であり、しかもそれに段通（敷物用織物）が敷きつめられ、州別に分けられた各室にはその土地から献納された豪華な工芸品が陳列されていた。このような富の集中は、もちろん個人の権力によるものではないが、驚くべきものである。国家が皇帝に代つたとみるほかないが、目に見た限りでは阿房宮もかくやと思われた。一人人を容れる会議場に立つと、

阿房宮に一人を容れたということとの一致が、偶然でないと思われた。

記念堂参観

声もなくすすむ兵士の列のあとをわれらもすすむ記念堂へと

ざくろの木植ゑてありけり西安の秦の始皇帝の陵に見しごとく

水晶の大き棺ひつぎの中にして大きく白き人の死に顔

始皇帝の水晶のひつぎにならひけむ毛沢東主席の棺なりけり

毛主席の死に顔の前を兵士らは頭もさげずにただ見つつゆく

すすみゆく兵士のまなこに悲しみもおそれも見えずただ見つつゆく

(理事・教養部長・国文学など担当)

(21) 漢字の危機 (昭和五十六年)

○漢字の書取り ○大学入試共通一次マークシート方式 ○漢字の力 ○表意と表音

私はここ二十年くらいになるだろうか、毎年、大学入試の国語の出題と採点とにたずさわって来た。大学受験生の学力は年々下って来ているように思うが、今年は、特に、漢字の書取りのできないが目立った。

以前は、できない場合には書いていないことが多いのであったが、今年は、ほとんど全部書いてある。だがそれは、漢字の字音が同じならどう書いてもよい、というふうなのである。「セイ」という字音に性という字をあてることの多いことなどは、理由がわかるからまだよい。ほとんど勝手気儘に漢字を当てているのである。

以前は、おもしろいまちがいがあると、採点しながら笑ったりしたことがあるが、今は、笑いもめつたに起らない。グロテスクなのである。片仮名もまともに書けない学生が多い。シとツの区別などほとんどの学生があやふやである。

つまり、文字を書く能力が、恐ろしいまでに低下した、とみるほかない。

その理由は、根本は戦後の国語政策の失敗にあることは勿論であるが、近い原因としては、共通一次試験があげられると思う。マーク・シート方式とか言って、文字を書かない試験を大学入試の共通一次

試験にしたので、受験生が正しい文字が書けなくなったのは当然のこととしなければならぬ。また、文字が書けなくても点を取ることができる試験なら、受験生が文字を書かないで点を取る工夫をするのもあたりまえなことである。

だいたい当用漢字・現代かなづかいという表記法の革命をやったのは、文部省の国語課が中心であった。いままた文部省が、国公立大学入試の共通一次試験をマーク・シート方式でやっているわけである。不思議なことに、何でも反対の野党が、あるいは日教組が、このことにあまり文句を言わないのは、同じ思想だからだろうか。日本国憲法の思想も同じで、要するに、欧米思想を基準にして日本思想の是非を判断するやり方なのである。

日本語の表記法と欧米語の表記法は根本的にちがう。——それぞれ千年以上にもなる長い歴史にもとづいてちがっているのだから、日本語の表記法を欧米語の表記法と同じようにしようとしたり、欧米語にもとづくペーパー・テストの方式を、日本語によるペーパー・テストにあてはめて、文字を書かないですむマーク・シート方式で大学共通一次試験をやるのだから、その災害は恐るべきものとなる。当然のことである。

経済同友会は、昨年十一月、企業経営者の新入社員に国語表現能力に関する評価を基として、教育問題委員会の名で「国語教育の新たな展開を求めて」という報告書を発表した。私は、そこに書かれていることに全く賛同したが、もう四・五年たって、共通一次試験で大学に入った学生が入社試験を受ける頃になったら、会社側は、漢字使用のアンキーぶりに、改革の意欲も喪失してしまうのではないかと思う。

学生の書くものに「誤字やあて字が多い」ということは、大学教師の共通の悩みであったが、今度の入試にあらわれたまちがいは、いままでと性質がちがう。マルクシズム風には、量的なまちがいが質的なまちがいに革命的な変化をとげたところでも言うところである。一口で言えば、表意文字としての漢字を表音式に使う傾向が強くなったのである。これは漢字の本質を無視する傾向で、実に恐ろしいことと言わなければならない。

戦後の国語政策は、欧米諸国のローマ字式の表記法を進んだものとして、漢字使用を制限し、簡略化しようとしたのである。この考え方からすれば、日本のインテリが、漢字が書けなくなっても文句はないはずである。

そこで、問題は、漢字という表記法の価値の問題となる。表意文字としての漢字は、中国に生れて、その周囲、特に、韓国やヴェトナムや満州、日本に伝播した。各国は漢字を受容してこれを使用し、数百、千年の文化的努力の間に、各国独自の表音文字を作り出して、漢字と表音文字とを併用したのである。中華人民共和国は、漢字を略体化し、さらに表音文字としてこれを使用しようとしてきているが、いまのところ、未だ表意・表音併用といつてよからう。韓国は一旦漢字使用を全廃しようとしたが、最近、漢字・ハングル併用である。中華民国台湾は、伝統の漢字使用を継続しているが、ヴェトナムは、漢字から作った字喃（チュノム）を棄ててローマ字化してしまった。

右のようなことで、表意文字としての漢字は、大陸本国においてすら危機に瀕しているが、しかしまだ、日本・韓国・大陸中国・台湾においては、表意文字としての長所を發揮して、いわば東アジア共通の文字としての役割を果しているのである。国際交流がやかましく言われる現代、このアジアの文明の

共同の文化伝統を放棄する愚を、一体誰が企てているのであろうか。

日本の文化ということから言えば、漢字文から漢字かなまじり文に発展して今日に至っているのだから、漢字の正しい使用ができなくなることは、文化伝統の崩壊そのことなのである。

私は、むずかしい漢字を覚えたり使ったりすることを奨励するつもりなど全くない。ただ漢字を表意文字として使うことは、日本人の文化能力であって、これを失ったら大変だ、ということを書き切りたいのである。

日本の文明は、誰でもすぐわかるように、中国文明を吸収して発展して来たのである。仏教も漢訳仏典として伝来したのである。論語も法華経も、今日われわれはそれほど苦勞せず読むことができる。その力は、伝統の力であって、これが一旦低下したら大変なことになる。祖先とわれわれの絆が断絶する。漢字が読める、漢字が正しく書ける——この力は、日本人が、長年にわたり数知れぬ祖先の努力によって伝えられて来た力であって、日本文明継承の力であるとともに、日本人がアジアの文明を伝えることのできる基礎能力でもある。この力を強める努力こそ教育の果す役割であるものを、漢字制限をやった文部省が、また、学生の漢字表記の能力を無視するような大学入試共通一次試験というのをやるのを見ていると、その結果が心配でならない。

〔『アジア研究所報』才二二号 五六・五・一〇〕

(22) 高安の城き（昭和五十五年）

近年、考古学の発見が続いた。稻荷山の鉄剣の銘文とか太安万侶の墓誌とか、古代史の研究にあたら

しい光をあてるような発見があいついだ。表題の高安の城の倉庫の礎石の発見は、土地の人々の努力によるもので、世の中の騒ぎにはならなかったが、前の二つの発見に劣らぬ重要な意味を語りかけてくれる。

高安の城というのは、天智天皇即位の前年（称制六年）西暦六六七年、大阪の高安山に築かれた朝鮮式の城をいうのである。

高安山は、いま志貴山から生駒山に通ずるハイウエーがあつて、その途中にある。数年前、私はここを訪れた。頂上に小さな祠があつて、参拝した時、不思議な戦慄があつて、白村江の敗戦の戦死者の霊が語りかけてくるように感じた。

唐または新羅の侵攻に備えて、その年ここに城を築いたのである。白村江の戦に敗れた後の国防の一環であつた。

白村江の戦（六六二年）は、戦争中のタブーであつたせいもあつて、戦後、日本史の中に花々しく復活した。復活した、と書いたのは、この敗戦は明治時代の政治家にとつては歴史の殷鑑であつたからである。

戦前戦中は、日本は不敗の国であると言ひふらして、白村江の戦——日唐戦争——の敗戦の経験を省りみるものがなかつた。

戦後は、敗戦の事実だけがとりあげられて、白村江の敗戦後、天智天皇、天武天皇、藤原鎌足たち当時の政治家軍人たちが、敗戦後の国家の防衛にどんな努力をほらつたか、それを省りみる人は乏しいようである。敗戦の歴史という点では大東亜戦争をのぞいてほとんど唯一の経験と言つてよいのだから、

高安城跡

西暦六六七年天智天皇が対馬国
金田城、讃岐国屋島城とともに築
造された古代の山城、白村江の戦
後、百濟領に進出した唐の勢力の
侵攻に備えたもの、

当時畿内の田の税である榎と塩
を倉庫に貯蔵した。城域は高安山
から信貴山にかけての山地に広が
る。

大阪府側の急なかけは自然の防
壁、高安山頂は高安烽跡、奈良県
側の緩傾斜地には「高安城を採る
会」によつて昭和五十三年四月倉
庫跡の礎石群が発見されている。

八尾市教育委員会

高安城跡標識

その経験から教訓を学ぶべきであろう。そ
れが歴史の研究というものだろう。——い
まからでも。

白村江の敗戦後、当時の政治家たちは唐、
新羅と外交的交渉をつづけながら、北九州
から瀬戸内海にかけて、最終的にはこの高
安の城まで城を築いて、当時としては不敗
の防衛戦を堅め、軍備を充実し、その上で
唐と講和したのである。これが奈良時代か
ら平安時代を通じて約五百年間の平和の基
礎となつたのである。

高安の城は、その事を語っているのであ
る。

いにしへのたかやすのきはここかと
ぞここをどりのぼる城のいただきに
そそけだつくしきひびきはいにしへ
のきのへにうせにし人のみたまか

高安の城のへに立ちてのぞめども浪速の海はもやこめにけり
ここに唐のいくさをやぶらむと城をたてにけむ人々あはれ
くにのまもりおこたるまじと高安の城のへの神にいのらしめられぬ

(理事・教養部長・国文学・日本思想史・人間と環境など担当)

23 80年代年頭の展望(昭和五十五年)

新年明けましておめでとうございます。

さて、一九八〇年・昭和五十五年の年頭の展望とでも言えば、よほど景気の良いことを書きたくなるが、とてもそんな気にはなれない。前年の、国の内外の姿が、全く樂觀を許さないからである。

昨年の後半における内外の重大事件を列挙してみよう。——近いところから。

ソ連は色丹島(日本の固有領土であることをソ連政府自身が認めている)に軍事基地を作った。これに対して第一次大平内閣外務大臣園田氏は「脅威と認めないように」と言った。そして、第二次大平内閣は国防予算をGNP〇・九パーセントにおさえた。さらに十二月の新聞報道によると、極東ソ連空軍は日本全土を戦闘爆撃機の爆撃射程内に入れた、と、米国防省が日本の防衛庁に伝えた、と、いう。日本海もソ連海と言われているという。

日本をよく知っておられた韓国朴大統領の暗殺事件——全貌はまだよくわからない。

中国とベトナムとの戦争は一旦停止したが、なお再発のおそれがあるとさえ言われている。ベトナムのラオス、カンボジア侵攻が非難されているが、カンボジア民衆が共産党の波尔・ポト政権から解放された。事実は否定できまい。かつてアメリカのベトナム撤退を鬼の首でも取ったように報道した日本のジャーナリズムは、共産主義者の支配するこのインドシナ半島の地獄のような姿を何と見るのだろうか。カンボジア・ベトナム難民はどうなるのだろうか。

中国は、文革・紅衛兵・四人組時代の清算に入っていて、その時代に弾圧された人物の復権が行なわれている。復権は弾圧の事実を暴露することになる。イデオロギーの狂信者がどんな残酷なことをしたかは、中国の国内の事実の中にもあらわれている。また、中国は価格統制の撤廃を行なったという。これはソ連革命の際のネップと同じく一時的のものなのか、原則的のものなのか、予断を許さないが、大転換であることは事実である。

イラン学生暴挙は、さらに石油と回教とをめぐって燃えつづけるにちがいない。

しかも政府は政権維持に熱中している有様である。となると、われわれはどうしていいかわからない。石油の高くなるのを心配してなどいられないと思うが、どうだろう。

八〇年代年頭の展望である。

24 Oh, East is East, and West is West. (昭和五十五年)

標題の「東は東、西は西」という言葉はインド生まれのイギリスの大詩人キプリングの有名な言葉で

ある。「東」はアジア、「西」はヨーロッパの意味で、二つの文化はおたがいに理解することができない——という意味に使われてきた。わたしたちもそんなふうを考えていた。ところが最近、下島連教授のお話で、そういう理解のしかたは大変まちがっているということを知ることがあった。

下島教授のお話によると、この詩は、「東と西とのバラッド」(一八八〇)という詩の冒頭の言葉であるが、次のようにつづくのである。

東は東、西は西

両者はあい会うことはない、

ゴッドの最後の審判の庭に

天と地とがあいあう日まで。

ここまでは、はじめにのべた東と西はあうことはないという意味で、そのあとがあることをわたしは知らなかった。つぎのようにつづくのである。

ただしかし、ふたりの強い男同士が

——その二人が地球のはてとはてから来たとしても——

面と向って立ち向うとき、そこには

国境も育ちも生まれも

東も西もありはしない。

つまり、東の強い男と、西の強い男、この男同士は、おたがいに理解しあうことができる、というのである。この場合の「強い男」Strong man というのは、一言で言えば、国のためや人のためにいのちを

投げ出すことのできる男という意味だろう。それぞれ自分の国のことを本当に思うもの同士は、たとえ戦わなければならないことがあっても、その心はい通ずるものだ、というのである。

国際的に通用する日本人の育成ということがさかんに言われるが、それは、日本人としての自覚と誇りをしっかりと身につけた人物をいうのである。キプリングの詩はそれを語ったのだ。

(25) 日本語は独立しているが孤立しているのではない (昭和五十五年)

大分前のことになるが、日本テレビで「麻葉と山岳ゲリラ——魔のゴールデン・トライアングル走破」という記録が放映された。それを見ていたら、カチン族、パオ族、ラフー族などの、タイの北部国境地帯の山岳民族のゲリラ部隊が、大同団結する模様がうつつし出された。その儀式のあとで、夜を徹して行なわれたという舞踊とその音楽を聞いて、私は驚いた。

何年前か前、ネパールの山村コテンの村落で、われわれ一行を歓迎してくれたタマン族の歌と踊りと、全く同じものに聞えたからである。しかも、その中には、コテンでもゴールデン・トライアングルでも日本人と見分けがつかないほどよく似た顔の人がいたのである。これは、ネパールからアッサム、北部タイ、雲南へと通ずる照葉樹林帯に属する地域の人々なのである。この照葉樹林帯の北東の端に日本があることはよく知られている。

さて、日本語が韓国語(朝鮮語)やモンゴル語に似ていることは、これもよく知られていることだし、モンゴルの民謡の中に、日本の追分そっくりの節の歌があることも、周知のことである。つまり、日本

語は北の方に親類の言語がある。これをアルタイ系の言語というが、これは別の言葉でいうと、膠着語ということなのである。簡単に説明すると、語順が日本語と同じで助詞とか助動詞のような後置詞を持つ言語とみればよい。一人称主語を使わないで、文を構成する、——ということも共通らしい。

欧米人は、トルコ語を膠着語の代表のように考えているが、日本語も同じなのである。

この膠着語は、北の方にあるのかと思っていたら、南の方にもある。前述の照葉樹林帯の民族の言語は、ネパール語、ビルマ語など膠着語的である。

また最近、国語学の権威である大野晋博士によつて、南インドのドラヴィダ語の一つであるパミール語（スリランカ北東部の言語）が、日本語に酷似している、という説が発表されている。

欧米語は屈折語、中国語は孤立語と言われて、膠着語とは、文法構造を異にしているため、日本語は、世界の中の孤立した言語のように考えられてきたが、そんなことはない。アジアには親類の言語が沢山あることがわかってきたのである。

ヨーロッパ人は、インドのサンスクリットに接した時、それが自分たちの言語に似ている。同系の言語であることに気がついた。これが比較言語学のもとである。日本人も、日本語に似た言語を大事にする気になっていいのではないか。膠着語の研究は、日本人の得意の舞台になってよいはずである。

55年7月

（教養部長・国文学・日本思想史など担当）

(26) ダライ・ラマ猊下歓迎の辞ならびに短歌（昭和五十五年）

学長先生が御病氣中でございますので、代りまして、大学を代表しまして、一言、ダライ・ラマ猊下歓迎の御挨拶を申し上げます。

私どもは、敬愛するペマ・ギャルポ君はじめ、梶村教授、倉前教授、西ワシントン大学客員教授として出張中の木村教授の方々から、チベット民族の困難な現状につきまして、うかがうことができました。そこで、日本のジャーナリズムの表面にあらわれている——共産主義がチベット民族を解放したというようなマヤカシの情報とは、全く別の、チベット民族の真実の姿について知ることができました。

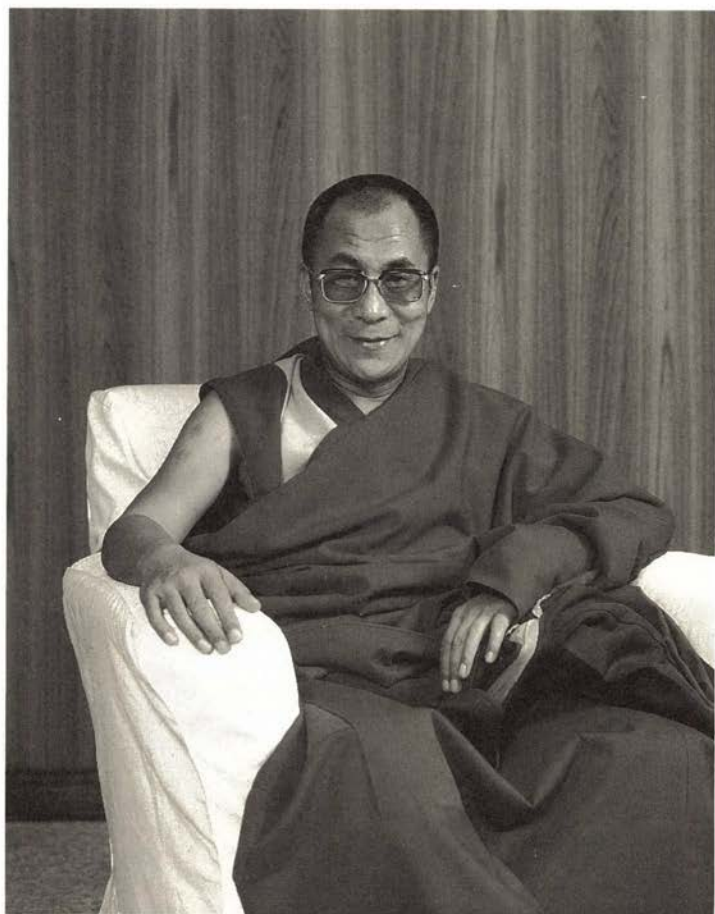
ですから、民族の苦難にみちた運命に対して深くご同情申し上げるとともに、その苦難にまげずに奮闘しておられるペマ君たちの方々に対して深い尊敬の心持ちをいだけております。

とりわけ、民族の運命を双肩に担われて奮闘していらっしゃる、ダライ・ラマ猊下に対しまして、深い敬意を抱いているものでございます。

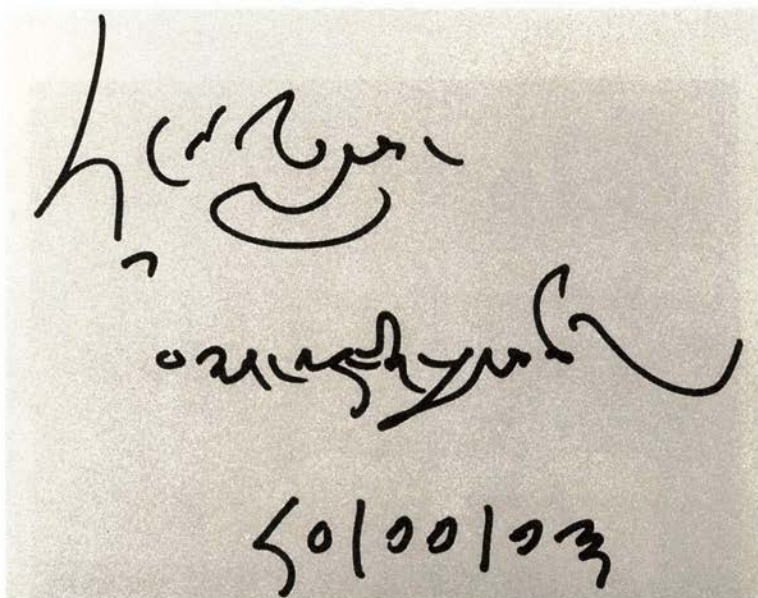
今回、はからずも、猊下をお迎えして、お話を承わる機会を得ましたことは、願ってもかなえられない、まことに、ありがたい、千載一遇の機会と存じます。

私どもは、チベット民族の苦難打開の運動に対しまして、政治的にはほとんど何のお手伝いもできない状態であると思えます。しかし、真実を知り、これを人から人に伝えることはできるはずでございます。学問を志すものは、この勇気を失ってはならないはずであります。

ダライラマ 猊下 歓迎の辞



ダライ・ラマ 猊下 (加藤幸雄氏撮影)



ダライ・ラマ 狛下筆蹟（御署名）

では、つつしんで、狛下のお話を承りたいと存じます。

（THE ASIA 五五、一二、一五）

ダライ・ラマ 狛下御講演

み言葉は心にいまも響くなり

ひと日のすぎて今朝となりても

宗教は人のこころのやさしさを

そだつにありととき給ひけり

にくしみといかりとをもてたたき

あふ世をうれひますみ言葉かなし

チベット民族六百万人のさいはひ

のためにすところのりたまひけれ

あたたかき大きみ手なりき別るるにたまひし握手つつむがごとく

(理事・教養部長)

(27) 蘆溝橋事件とエドガー・スノー(昭和五十六年)

児島襄氏著『天皇』(文春文庫)第三巻の中の、「蘆溝橋の銃声」(これが支那事変の発端となる)という箇所を読んでいたら、こんなことが書いてあつて、へー！と思つた。——エドガー・スノーが、はじめたばかりの日支両軍の戦闘の真只中に現れたというのである。

状況は、詳しく書かれているので、それを読んできたが、蘆溝橋(北平Ⅱ北京郊外)のほとり、誰が撃つたともわからぬ数発の実弾音から事件は生まれたのである。その頭初、日支両軍の戦闘をやめさせようとして、蘆溝橋城を出た寺平大尉(北平特務機関補佐官)は、ばったりスノーと会つたというのである。

「蘆溝橋城の」城門は内側に土囊を積んで応戦態勢をととのえている。寺平大尉は、冀察外交委員林耕雨、中国軍第三十七師団参謀王啓元少佐と同行することにして、城壁の銃眼からロープにすがつて下におりた。

オープンカーに星条旗をひらめかせた米人記者らしい男が近より、ロンドンの『デイリー・ヘラルド』紙通信員エドガー・スノーと名のり、三人を城壁の前に立たせてスナップした。

寺平大尉は、エドガー・スノーの自動車に便乗を頼み、蘆溝橋駅で森田中佐と連絡したのち、北

平の特務機関にむかった。王少佐は蘆溝橋城にもどり、林委員は寺平大尉とともに北平に行った」
（『天皇Ⅲ』一八二ページ）。

結局、停戦の交渉は失敗し、日支両軍の戦闘は拡大し、やがて、中国全土に及ぶ支那事変となるのである。その発端のところに、エドガー・スノーが現われた！ 私は思わず目をみはって書物を読み返してみた。やっぱりそれはエドガー・スノーにまちがいない。

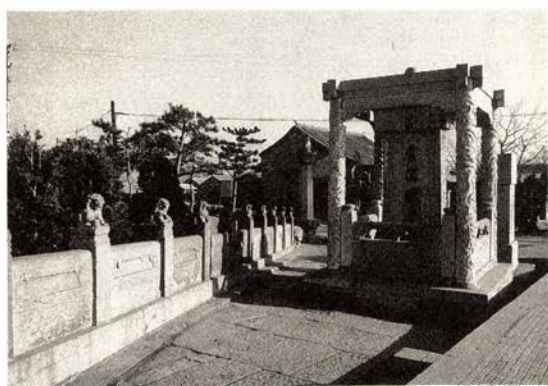
何故私がそんなに驚いたのか？ それは、スノーという人物について、私が次のように考えていたからである。私は、数年前こんなメモを書いておいた。「大東亜戦争の教訓ノート——毛沢東の戦略」と題する。題は長い短い文章である。

戦後すぐにエドガー・スノーの『中国の赤い星』の翻訳書が出た（昭和二十一年）。それを読んで、日本は毛沢東の戦略に負けたのだと思った。このことを日中友好条約の覇権問題で思い出したので、読み返してみた。

一九三六年（昭和十一年）七月十六日、毛沢東はスノーに
対日戦略を語ったと書いてある。

「第一は、中国における日本帝国主義に対抗する民族
統一戦線の達成。第二は、世界反日統一戦線の結成。

第三には、現在日本帝国主義下にある抑圧人民の革命



芦溝橋碑

的行動です。」と。(増補決定版『中国の赤い星』松岡洋子訳——筑摩叢書29。六四ページ)

第一の戦略は、同年十二月の「西安事件」となって実施された。中国共産党の指導下にあった張学良が西安で蒋介石を軟禁し、周恩来が登場して、国共合作（国民党と共産党との合作）となり、中国の対日統一戦争を決定した。

第二の戦略については、中国共産党というよりもコミンテルンの戦略で、ゾルゲ事件（昭和十六年発覚）がその象徴であると言つてよからう。ゾルゲは日本の北進を押えてこれを南進に切りかえるために、尾崎秀実と組んで、時の日本政府ならびに世論を動かしたのである。日本は北のソ連に対してでなく南の米英仏に対して進攻することになった。対ソ戦に備えた陸軍は、南方に向かったのである。アメリカは日本を敵として中ソを援けた。

第三の戦略は、日本の革命であるが、これは、敗戦直後の二・一ゼネストの挫折によって一旦抑止された。その後、中国共産党が火焰ピン作戦による暴力革命を日本共産党に強要し、それを日本共産党が蹴った、という話は有名である。野坂参三や尾崎秀実は戦後は英雄であった。大学紛争の時、東大正門には毛沢東の写真が掲げられていた。

「夷を以て夷を制す」とは、中国の伝統的政策である。戦争中のことはお互いに水に流すのが礼だが、毛沢東の偉大な戦略にふたたび陥らぬようによほど用心しないといけない。

さて蘆溝橋事件というのは、昭和十二年七月七日の夜からのことである。スノーは、前年の七月十六日に延安で毛沢東の対日戦略を聞いているのである。その後、十二月に西安事件があつて、毛沢東の中国共産党と蒋介石の国民党とは、「合作」して、対日戦争に踏み切つたのである。

蘆溝橋事件の最初の銃声は「謎」とされている。それはそれとして、毛沢東の戦略をよく知っていたスノーが、その事件の真只中にオープンカーであられたというのは、偶然にしてはタイミングがよすぎる。スノーは事件の起るのを知っていたのではないかと思われるのである。一步譲って、偶然の出来事としても、彼は、停戦の協力者ではなく、毛沢東に共鳴する全面戦争への協力者であったにちがいない。児島襄氏も書いている。——「蘆溝橋事件にたいして、いち早く積極的姿勢をしめたのは、関東軍と中国共産党であった」と。関東軍が北支に進入する気配を示したことはよく指摘され、批判もされている。しかし、中国共産党の戦略は批判の対象にならないのだろうか。関東軍が、言ってみれば、戦争から社会革新へ！ という構想のもとに独断的な戦闘行動に出ていたとすれば、中国共産党は、戦争を革命へ！ という戦略への布陣を行っていたのではないか。平和的意志は、むしろ天皇を頂点とする日本政府ならびに軍中央部と、国民党を率いていた蒋介石総統の側にあつたことを、当時の史実は明瞭に語っているのである。しかし、結果的には、この関東軍を中心にする陸軍の力が暴走して日本の指導階層の平和維持の努力は敗れ、蒋介石もまた西安事件によって、中国共産党の戦略に屈服し、国共合作・徹底抗日戦に踏み切ってしまったのである。

そんなことで私は三度スノーの『中国の赤い星』を読み返してみた。筑摩書房刊、宇佐美誠次郎訳『新版・中国の赤い星』（筑摩叢書29）という本である。これを見ると、蘆溝橋事件当時のことは、同じスノーの『アジアのための闘い』という著書に述べられているとのことである。（「訳者あとがき」）これは読むことができなかつたが、児島襄氏の記述は恐らくこの書物によつたのではないかと思う。『中国の赤い星』の最終章は蘆溝橋事件について次のように書いている。

「日本のもっとも有能な指導者は戦争絶対中止の要をさとっていたが、（中国）共産党は、日本がふたたび中国にたいして静穏な政策をとることはできないということを理解していた。そして共産党のこの予言は、七月八日の蘆溝橋事件の勃発によって完全にその正しいことを証明された。……そして共産党はこのような戦争（対日戦争）を単に民族独立の戦いとしてのみでなく、一個の革命運動と解釈していることを、想起しなければならない。……」

そして『中国の赤い星』の記述は、「一九三七年七月二十日 北京にて」と書いて終っている。蘆溝橋事件から二週間ほど後のことである。この事件の拡大によって、毛沢東の戦略が実現されたことを信じて、スノーは筆を措いたにちがいない。ちょうどリヒャルト・ゾルゲが日本の南進決定を最後の電報としたように。

スノーはさらに一九三九年に「旭日の影」という章を加えて改訂版を出した、というから蘆溝橋事件はそこに詳しく述べられたことと考えられるが、一九五二年宇佐美誠次郎氏が訳出する際には、この部分を削除して、一九四四年に書いた「エピソード」を付した版の訳出をすすめ、スノーは訳者に「旭日の影」は訳出しないようにとの申出を行ったということである。

蘆溝橋事件当時におけるスノーの政治的活動については、なお『アジアの戦い』などの文章を読まないとよくわからないが、毛沢東の戦略の信奉者として行動したことは、その著書によって知ることがきる。

三年ほど前、北京大学を訊ねて構内を散歩していたら、スノーの立派な墓があって、いまさらのように中国共産党と彼の深い関係を思わせられた。

(29) 「教科書問題」とその次にくるもの (昭和五十七年)

(一) 「教科書問題」の次は？

十月九日の読売新聞夕刊に、第一回「日中間人会議」に出席している中国の孫平化・日中友好協会副会長は、九日昼すぎ、同会議終了後、東京都内のホテルで記者会見し、次のように語ったと記されている。

「また、孫氏は、日本軍国主義復活問題に関連して閣僚の靖国神社参拝に関する質問に答え、中国の国民感情を刺激し、傷つけるような言論と行動が再び現われるならば、中国国民がこれに憤慨するのは当然だ」と語り、今後も続くと見られる閣僚の靖国神社参拝に、そのつど、厳しく批判するとの態度を表明した」と。

これによると、孫平化・日中友好協会副会長は、「閣僚の靖国神社参拝」は、「日本軍国主義の復活」と考えるので、今後、そのつど「厳しく批判する」というのである。日本人戦死者をまつる神社に閣僚が参拝するのが、なぜ、日本軍国主義の復活になるのか？日本人の常識では全く納得できないが、彼のいうところは、次のようなことであろう。——靖国神社にまつられている人物の中には、大東亜戦争の戦死者もある、大東亜戦争は、日本軍国主義者のおこした「侵略」戦争である、大東亜戦争で死んだ

日本人は、侵略戦争の手先であった、そこに参拝するということは、日本軍国主義者を礼拝することになる。中国を侵略し、中国人民を「いたる所で、焼き、殺し、奪い、残虐の限りをつくし」、「何千万、何百万の中国人民を殺した」（中国の歴史教科書Ⅱほるぶ出版、『世界の教科書Ⅱ歴史・中国2』から引用）その人間を礼拝するのは、「中国の国民感情を刺激する」———というのであろう。

日本政府が、大東亜戦争を「侵略」戦争と断定する限り、大東亜戦争の戦死者を閣僚として礼拝することはおかしい、その矛盾を「今後、そのつど、厳しく批判する」というわけである。

閣僚の靖国神社参拝ということは、政党の関係では、社会党、共産党が反対しているが、日本人過半数一般の感情からすれば、当然のこととして共感こそされ、これを非難するのは当たらないとするのが日本人の過半数の常識である。孫平化氏の発言は、この日本人の過半数の感情と常識とに真向から挑戦するものである。「日中友好協会副会長」の孫氏がこれを知らないはずはないと思われるが、敢えてここまで強く言うその論理の根本は、「侵略」を「進出」に変えたことが、「日本軍国主義の復活」であるとして、是が非でもこれを改めさせようとする論理と同じだからであろう。

結論的に言えば、「教科書問題」も「靖国神社参拝問題」も同じく、「日本軍国主義の復活」である、ということになる。これは、社会党、共産党、日教組、総評、——つまりは、日本における社会主義者共産主義者の主張するところと同じ意見なのである。しかも、孫平化氏は、「教科書問題」は外交的に結着したとしても、「閣僚の靖国神社参拝」に関しては、「今後も、そのつど、厳しく批判するとの態度を表明した。」というのである。

孫平化氏は、「日中間人会議」で、「満州国建国之碑建立や映画『大日本帝国』閣僚の靖国神社公

式参拝を例にあげながら、「軍国主義的傾向」にあると断じた」（読売新聞十月九日朝刊）ということである。

これからすると、孫氏の言うところは、次のようになろう。

教科書問題については外交上は一応の結着がついた、満州国建国之碑建立は取止めになったらしい、「大日本帝国」も自粛したらしい。次は、「閣僚の靖国神社参拝」である。これが終ればまた次は何か出てくるであろう。厳しく対応する。

この考えは、日本の社会主義者が新聞などで最近言っていることと全く同じことなのであるから、孫氏は、日本人に対して社会主義政策を支持することを求めたことになるのである。孫氏の発言は、社会主義の思想攻勢と言われてもしかたがないのではなからうか。

「教科書問題」も「靖国神社閣僚参拝問題」も、ともに国内の思想問題として、この二、三年来ジャーナリズムのとりあげてきた問題である。この日本の国内の思想問題に対して、政府及び与党に反対する野党側の主張の後押しをするということは、外交上重大な意味をもつことになる。昭和四十七年の日中共同声明には、「日中両国間には社会制度の相違があるにもかかわらず、両国は、平和友好関係を樹立すべきであり、また、樹立することが可能である」とし、昭和五十三年の平和友好条約の第三条にある「……内政に対する相互不干渉の原則に従い」とする精神に、反するものとなるのではなからうか。

(二) 「教科書問題」の総括

いわゆる教科書問題が日本の大事件となったのは、中国の肖向前外務省第一アジア局長の渡辺駐中国

公使に対する申し入れがあったからである。それは、七月二十七日朝日新聞夕刊によると次の通りであるという。

「最近、日本の新聞が文部省の歴史教科書検定について多くの報道をした。これから判断すると、検定の過程で、日本軍国主義が中国を侵略した事実について改ざんが行なわれている。たとえば華北侵略を「進出」と改め……」

これがきっかけとなって、大東亜戦争は「侵略」戦争であるのに、これを「進出」というのは、歴史の改竄であるという、文部省の検定に対する非難が連日のように大新聞の紙面を賑わすこととなり、テレビもこれに同調したのである。朝日、読売、毎日の三大新聞ならびにその系列のテレビ、NHKテレビ、日教組、社会党、共産党、中国の新聞、政府が文字通り連帯して、「改竄」の「訂正」を日本政府に迫った。外務省はこれに同調した。

大東亜戦争は侵略戦争である、というのは、極東軍事裁判の判定であるが、戦勝国が戦敗国を裁いたものであって、当時日本国民にはこれに反論する自由が無かったが、占領が終れば反論の自由はあらずである。自国の戦争を侵略戦争であったとするのは、革命の論理であって、私などは断じて服すことはできない、と、思つて、日本政府の動きを心から憂えていたのである。

ところが、九月に入って、『諸君』という雑誌に載つた渡部昇一氏の「万犬虚に吠えた教科書問題」という論文を読んで、驚いた。——「華北侵略を「進出」と改めた」教科書は無い、というのである。私は、心配してただけに、まさかと仰天したのである。つづいて読んだ『週刊文春』九月九日号は「日本テレビ・朝日・道新などの歴史的大誤報から教科書騒動はじまった——窓外「華北・侵略」

進出」書きかえの事実なし」という記事を載せてその間の事情を詳しく書いています。その中に、八月二十五日付朝日新聞に、次の記事があったと書いてある。

〈文部省は……：「今回の検定で……中国側が指摘しているような、日本軍の華北への侵略、中国への全面侵略の『侵略』を『進出』などに変えた例は、いまのところ見当たらない」ことを明らかにしている。朝日新聞社のその後の調査によってもこの発言は事実と認められている〉

というのである。私は朝日新聞をとっていないので、調べてみたら、たしかにそう書いてある。

つまり、事件のきつかけとなつた『侵略を進出と書き改めさせた』という報道は誤報であつた、というのを、当の朝日新聞が認めたのである。『諸君』の渡部昇一氏の論文は、八月十日現在の執筆である旨が記されているが、その中に、朝日新聞に対する照会の要旨が述べられている。八月十日までは朝日は、誤報であることを認めてはいない。八月の二十五日、問題が一応結着を見た段階で誤報を認めたのである。そうすると、この誤報の意図は、結果的に云うと、文部省の教科書検定方針について、大東亜戦争を「侵略戦争」と書かせる約束をとり付けることにあつたということになる。

当時、文部省の教科書検定に対する反対が日教組はじめ社会主義的傾向の学者・執筆者にあり、さらに最近はその検定を右傾化——軍国主義復活の傾向——と見なす考えが、ジャーナリズムの表面に現われていた。一方、社会科教科書の中の、社会主義的傾向の記述に対する是正の意見があつて、「教科書問題」が、日本国内の思想問題として争われていた。大東亜戦争を「侵略戦争」とするか否かは、日本人の戦争観の問題であるから、論争のあるのは当然のことである。

ところで、中国側のこの問題に対する抗議が、誤報にもとづいて行われたのであるから、誤報である

ことがわかれば直ちに撤回されるべきであるに拘らず、日本政府は、中国の抗議に屈服して改訂の約束をってしまったらしい。

そこで、今度の事件は、結果的に思想的に見ると、共産主義の中国が共産党社会党ならびにその思想傾向の日教組総評等の社会主義思想のあとおしをして、成功したことになる。共産主義中国の日本人民に対する社会主義の思想攻勢が今回の「教科書問題」の本質である。そして朝日・毎日・読売という日本の三大新聞がこれに同調し、中国側の抗議の貫徹に協力したということは、一面、この三大新聞の思想傾向を暴露したものと云えよう。三大新聞と論調を異にしたサンケイ記者の鈴木首相訪中の随行が中国側に拒否されたことが、その証拠とも云えよう。

日本には、反米、反ソはあるが、反中華人民共和国という思想感情は稀薄である。「教科書問題」や、次におこるであろう「靖国神社閣僚参拝問題」などで、中華人民共和国が日教組的社会主義的見解を支援することは、逆に日本人の国民感情を刺激するにちがいないことを警告したい。それと同時に、それが果して何を意図するものなのか、冷静に判断することを、心がけねばならないと思う。

「教科書問題」については、朝日・毎日・読売、NHKはともに一方的なので、私は主として、サンケイ新聞、「諸君」、「文芸春秋」、「週刊文春」、「週刊・世界と日本」、「師と友」、「生政ニュース」、「国民同胞」等の諸論文ならびに記事によって研究した。他にも、「正論」、「世界週報」、「月曜評論」などが正しい批評ならびに報道を行っているということである。

私は、「教科書問題」は終っていないと思う。なお第二弾三弾と思想的な爆弾が炸裂することが予想されるので、今後嚴重警戒を要する。十月十五日記（『アジア研究所報』第二八号、五七、一一、八）

(29) 文明と樹木 (昭和五十七年)

ビルマのバガンは、西暦一〇四四年から一三二五年まで、バガン王朝の都であった。そこに多くのパゴダが残っている。ビルマのパゴダというのは、煉瓦作りの仏塔・寺院で、中に、これも煉瓦を本にして漆喰(しつくい)で固めて造形した仏像が安置され、壁には彩色の壁画が描かれている。高さ数十メートルから三、四メートルのものまである。例えば法隆寺の金堂の大きさの程度は、ごく一般的な大きさと比べてよい。それが、五千あるという(英文のバガン紹介パンフレットによると、four million pagodasと書いてあるが、thousandのまちがいでないかとおもう)。

中に、高さ六十二¹⁾のタツピンニュ・テンブルというのがあって、そこから見る夕陽のパゴダは、写真家の夢であるという。当日も、世界各国から写真家や観光客が来ていたが、たしかに壮大無類の景観であった。イラワジ川のはとりの荒野に、無数のパゴダが立ち並んでいて、それが次第に暮れてゆく。修復されたものは、白色や金色に輝いているが、その多くは歳月によつて上塗りが消え煉瓦がむき出しになったまますれかけている。巨大な王朝の夢のあとである。その多くは、十一世紀から十三世紀に作られたというので、ビルマの文明の古さをあらためて考えさせられた。

しかし、あたり一面、いわば酷熱の砂漠で、人は住んでいない。人は、イラワジ川のはとりのわずかな木の繁みにまですく住んでいるだけである。

このいわば砂漠化した古代文明の廃墟に立つて、われわれは、ここで消費された樹木のことを思わざ



バガンのパゴダ風景

るを得なかったのである。これだけのパゴダに要する煉瓦を作るために、豊かな森林が伐り倒されてしまったにちがいない。そして残ったものが砂漠である。インドでも中国でも巨大な文明のあとが砂漠化した姿を私は見た。ビルマは日本と同じ照葉樹林帯に属するところで、森林の豊かな土地であるから、

なおさら、バガンの廃墟は、文明と樹木との関係をはっきり示していると思った。

そして、文明をとり入れながら樹木を残してしかも石と土とかでなく、木の文化を発展させてきたわれわれの祖先の智恵を、つくづくえらいものだと思った。

(30) 中華人民共和国の歴史教科書（昭和五十八年）

昨年の夏、教科書問題が起つて、国論が沸騰した時、では、中華人民共和国では、大東亜戦争をどう扱っているのだろうか、—そう思つて、その教科書を調べてみた。日本の歴史教科書の記述について中国人が関心を持つのに、日本人が中国の教科書に関心を持たないのはツカしいと思つたからである。

中華人民共和国の歴史教科書は、ほるぶ社出版の「世界の教科書Ⅱ歴史」という叢書の中に「中国1・2」として翻訳されている。原書は『中国歴史・全日制十年制学校初中課本』とあり、原著者は「人民教育出版社 中小学通用教材歴史編写組」とある。「初中」つまり「初級中学」用で「日本の中学校に相当する」学校の「2学年3学年で学ぶ」教科書であるということである（同書解説）。原書は見えないが、写真によると、左横書き新字体である。翻訳も左横書きである。（日本の歴史の教科書が左横書きなのはこれが模範になっているのだろうか。）

『中国1』は、有史以前の北京原人「原始社会」から清朝末までで、時代区画は次の通り。

1、原始社会

(1) 我国領内の原始人群

(2) 氏族共同体

2、奴隸社会

(1) 奴隸社会の形式と発展（夏・商）

- (2) 強力な奴隸制国家（西周）
 - (3) 奴隸社会の崩壊（春秋）
- 3、封建社会

- (1) 封建社会の形成と初步的發展（戦国・秦・漢）
- (2) 封建国家の分裂と民族大融合（三国・西周・南北朝）
- (3) 封建社会の繁栄（隋・唐）
- (4) 民族融合のいっそうの強化と封建經濟の繼續發展（遼・宋・夏・金・元）
- (5) 強固な民族統一国家と、次第に衰退する封建制度（明、清アヘン戦争以前）

「中国史」というのは、一般に、「二十四史」などと云はれるように、王朝の交代の歴史と考えられてきたが、右の目次を見ると、それを唯物史観でまとめていることがわかる。孔子についても階級史観から評価している。

『中国2』は、近代であるが、目次項目は次の通りである。

- 1、アヘン戦争、太平天国運動
- 2、中国資本主義の発生、甲午中日戦争
- 3、戊戌変法、義和団運動
- 4、辛亥革命
- 5、中国近代の文化と科学
- 6、中国共産党の創立と第一次国内戦争

7、第二次国内革命戦争

8、抗日戦争

9、第三次革命戦争

10、国民経済の回復と生産手段所有制の社会主義的改造

「10」は、「人民公社」などの制度のことを言っているので、ソ連にならって共産主義的社会主義的な制度を確立したことを言うのである。記述は一九五六年で終わっているので、その後の中ソ分裂、文化大革命、四人組、中国経済の諸問題に及んでいない。社会主義革命のバラ色の夢にとどまっているという感じである。

大東亜戦争(太平洋戦争)も、こういう論理で扱われていて、「中日戦争」は、「革命の一時期」とみられている。つまり、中国の近代史現代史は、革命史にはかならない、というのである。この中国近代史の記述については、唯物史観マルクシズムにもとづく記述であるから、日本との国際関係については特に反論すべきところが多いが、いまは一つ一つの記述よりも、それがマルクシズム革命史観であるということを書きとどめる。歴史の見方が全く常識とは異なるのである。

この点は「小異」ではなくて「大異」なので、今後の日中関係について、充分注意する必要がある。中国政府は、自由主義的な史観によって自国の青少年が洗脳されることを欲しないであろう。同じように日本政府は、こういう史観で日本の青少年が洗脳されることを警戒しなければならないはずである。

私は、忘れることができないが、一九七〇年の大学紛争当時、東京大学の正門に中国の毛沢東主席の肖像が掲げられていて、誰もそれをとり降すことができなかった。これは、当時の日本の学生運

動が、中国の革命戦略——すなわち、学生運動↓労働運動↓労働運動ストライキ↓解放区↓武装蜂起——をモデルにしていたことを示すのである。

中国革命運動の日本への影響は、敗戦直後の二・一ゼネスト、六〇年、七〇年の安保反対闘争であったが、いづれも失敗に終わった。日本人はいま漸くマルクシズム社会主義の魅力圏内から離脱しようとしているが、中国全土の青少年が、唯物史観で教育されているという事実を目をそらすことはできない。

以下、批評を加えることなく、大東亜戦争(太平洋戦争)と朝鮮戦争とについての、同書の記述を紹介する。中国の青少年の意識について知っておくことは、日中関係をあやまらないために必要なことであろう。

(一)「満州事変」について

「一九二九年、資本主義世界に重大な経済恐慌が発生した。日本帝国主義は経済恐慌から脱するため、蒋介石が大規模な内戦を全力で行っている機会に乗じて、わが国の東北を占領し、ついで全中国を併呑することを決定し、中国を植民地に変えようと妄想した。」

(二)「支那事変」について

「日本帝国主義は中国を独占し、中国をその植民地に変えるため、ひそかに長期間たくらんでいた全面的な侵略戦争をひきおこした。一九三七年七月七日夜、日本軍は一人の兵士が失踪したことを口実に、北平西南の宛平城内部に進入して捜索しようとした。現地の駐屯軍はこのすじの通らない要求を拒否した。日本は遂に宛平城に向って射撃を開始し、同時に蘆溝橋を猛烈に砲撃した。わが国の駐屯軍は全国人民の抗日の熱いたかまりの影響下にあつたので、奮いたって反撃した。これが『蘆溝橋

事変」である。これより、中国革命は抗日戦争の時期に入る。」

(戦争の勝敗を超えて革命こそその目的であったことが、この文でよくわかる。)そして、

(三)「……国民政府軍は四川省重慶に移転し、軍隊の主力を中国の西南と西北に集中して、日本との戦いを回避した。」

日本侵略軍はいたる所で焼き、殺し、奪い、残虐の限りをつくしたため、無数の都市と農村が廃墟と化し、何千万何百万の中国人民が殺された。日本軍は南京を占領した後、気違いじみた大虐殺を展開した。南京で平和にくらしていた住民は射撃演習的にされ、刀で切られ、石油で焼き殺され、生き埋めにされ、はては、心臓をえぐりとられる者もあった。一カ月余りのあいだに殺された者は三十万を下らず、焼かれたり壊されたりした家屋は全市の三分一に達した。」

「南京大虐殺」の「三十万」が誇張であることは、鈴木明氏が「南京大虐殺のまぼろし」という書物で詳細に論じたところである。

なお、「朝鮮戦争」については、

「わが国の人民が国民経済を回復させるために努力奮闘していたちようどその時、一九五〇年六月、アメリカ帝国主義は強引にも朝鮮侵略戦争をひきおこし、同時にわが国の神聖な領土である台湾を占領した。」

右の記述からはじめて、次の記述で終る。

「中国、朝鮮両国人民の軍隊は、三年一カ月の血まみれの奮戦の後、アメリカ侵略軍とそれに従属した軍一〇九万人以上を殲滅した。これにはアメリカ軍三九万人以上が含まれている。中国、朝鮮両国

人民の軍隊はまた、敵機一万二〇〇〇機以上を撃墜、破壊した。一九五三年七月、アメリカ帝国主義はやむなく停戦協定に調印せざるをえなかった。」

中国ならびに「朝鮮」の損害については一言も書いてない。そして、結論として次のように述べている。

「抗米援朝戦争の勝利は、アメリカ帝国主義の侵略計画を粉碎し、中国、朝鮮両国とアジアの平和と安全を防御するとともに、世界各国の人民が帝国主義に反対する闘争、民族解放のための革命闘争を大いに鼓舞したのである。」

朝鮮戦争について、アメリカの歴史教科書はまさか、「アメリカ帝国主義の侵略計画」にもとづく「侵略戦争」と書くはずはあるまい。また、中華人民共和国も、そうした記述をアメリカに要求することもあるまい。

各国とも、自国の立場に立って自国の歴史を書く。それが、国際的な常識である。嘗ての敵国の立場に立って自国の歴史を書くのは、敗戦によって狂ってしまった、としか言いようがない。

(『アジア研究所報』第三二号、五八、一一、一五)

(31) 東洋史学の先駆者・那珂通世博士と『古事記』と吉田松陰と

(昭和六十二年)

以前、アジア各国の建国の古典に目を通したいと思って、那珂通世訳の『成吉思汗実録』(明治四十年

一月刊)を読んだ。この原書は、モンゴル語を漢字音で写した中国の書物であるため、中国語訳も日本語訳も出ていなかった。それを那珂通世博士(一八五二—一九〇八)が初めて明治四〇年に訳出刊行したのである。日中両国ははじめ世界のアジア研究にとって偉大な貢献をなした訳業として知られている。

またその訳文が、味の深い文語訳なのである。

「上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。その妻なる惨白き牝鹿ありき。騰吉思を渡りて来ぬ。

云々」

からはじまる。そして、

「字端察兒は、先驅に奔りて、孕める婦人を拏へて『何姓の人ぞ汝』と問へり。その婦人言はく

「札挈赤兀煬(名)阿当罕兀喚合、我」と云へり。」

などである。

私はモンゴル語を知らないが、チングス汗当時のモンゴル語は、日本語に訳したらこんなになるのではないか、と思つて、深い感動を味はつた。

また同書の「和文訳本の標題」という題下に述べられた次の一節など、誠に同感を禁じえぬものがあった。

「初は蒙古古事記と名づけんかと思へり。いかにと云ふに、我が古事記は、日本最古の古書にして古伝を古伝のまゝに正直に書き表はし、古伝を研究するには最も善き書なるに、日本紀(日本書紀)出でて、古伝に文飾を加へ、何事も漢様に書き改められたれば、後の人は、その文の漢めきたるに眩惑して、その真伝に違へることを忘れ、後の史書は、日本紀にのみ拠る事となりたるを、近世に至り、古学者

起りて、復古を唱へたるより、始めて古事記の貴きことは、世に知れたり。」と。

これを見ると、博士は本居宣長の『古事記伝』の方法論をその大著『成吉思汗実録』に実行したことになる。

また、前記の例文のように、一部分ではあるが、会話の文で、人称主語が文末に来るところがあった、それが日本語とはちがって、かえって異国の言語という感じなのである。それに、この主語の文末に来る語順は、中村元博士が『東洋人の思惟方法』（昭和二十二年初版）の中で、古代インド語の文の特徴としてあげていたところであった。その時そういう語順のセンテンスがあることを知ったが、それがこの『実録』の中で、モンゴル語の訳として、折々出てくるのを知って、実におもしろかった。あとで知ったが、ウィグル語にも似たような語順がある。

そんなことで、那珂通世という人には、ひそかに敬意を払っていたが、今度『日本書紀』の紀年法について調べていて、博士の『上世年紀考』（明治三十一年）を読んで、敬意は畏敬に変わった。

さらに博士が「外交釋書」という表題の下に編集した、主として日中古代交流の歴史を記述する論文を読んで、その周到な研究に一層の感銘を受けた。

前に私は『白村江の戦』（昭和四十九年刊）を書くために、当時の日・韓・中の史料を対照してみた。その時使わせてもらった朝鮮史編集会編『朝鮮史』の三国史料対照の研究も、その大本がこの那珂博士の研究にあることを、今度那珂博士の文章を読んで初めて知ったのである。そして、博士の研究が日本人の近代における東洋史研究の嚆矢であることを知り、改めて博士の偉大な業績に感嘆したのである。

那珂博士のライフワークは「支那通史」(明治二十一年)であったということである。しかもその漢文の支那通史は早く中国で採用されたとのことであり、また井上梧陰の『梧陰存稿』に「支那史を読む」と題する一篇があるが、これがこの書についてであるという。日中両国の学問の指針となったことが知られる。つまり、博士は日中両国近代における東洋史の始祖というわけなのである。日本ではじめて東洋史の教科書を書いたのも、また東洋史学科を作ったのも那珂博士だということで、私は畏敬の念をますばかりであった。

すっかり感激してこの話を、西洋史学科出身の東中野助教授のところへ持ちこんだ。

東中野さんは吉田松陰の研究者でもあるので、この「那珂」という姓に興味をもち、すぐ調べてみたところ、この「那珂」は、もと「江幡」であることがわかった。那珂通世の養父は、那珂通高で、通高は吉田松陰が若き日に、江戸に遊学した折り、江戸で、宮部鼎蔵とともに意気相投して、ほとんど血盟の友情を交はしたとみられる人物——江幡五郎のことであることがわかった。(吉田松陰「東北遊日記」)

江幡五郎は松陰と別れて後、幕末維新の動乱の中に数奇な運命をたどり、結局、維新後もなお旧盛岡藩士として幽囚の生活を余儀なくせられたのである。その養嗣子が、ほかならぬ那珂通世であることが、「文学博士那珂通世君伝」(文学博士・三宅米吉述(大正四年八月十五日発刊)『那珂通世遺書』所載)でわかった。

東洋史といい支那史といい、日中両国における近代史学の先覚となった那珂博士が、同時に国学と松陰との系譜につらなることを知ったことは、私にとっては日・中・韓三国を結ぶ、不思議な、驚嘆すべき人物の発見でもあったのである。

(アジア研究所所報 四七号・六二、七、一)

(32) インド古代文明における神話・歴史・叙事詩の関係 (昭和六十二年)

(一) ガンジス河の神話と伝説から考えはじめ

——『ラーマーヤナ』について——

インドに行った時、デリー郊外のマハトマ・ガンデイのお墓にお詣りした。

マハトマ・ガンデイ(一八六九—一九四八)は、現代インド独立の英雄で、自身過激派に射殺されたばかりでなく、その孫娘が後年首相となって暗殺された、——そういう現代インド独立の悲劇的英雄である。したがって、建国の父として丁重に葬られ記念の墓が建てられているのである。

そこにお詣りをして知ったことであるが、そのお墓には、遺骨・遺骸は葬られていないということであった。遺体はダビ(火葬)に付されてガンジス河に流した、ということである。

また、インドの観光案内書などに紹介されている珍らしい光景の一つに、ヴェナレスというところのガンジス河の流れで、実に沢山の人がミンギをしている光景の写真がある。

それは主に生きている人たちのミンギであるが、同時に死んだ人を火葬にしてその遺灰(遺骨ではない)を流すことが行なはれる。火葬をする費用のない遺族は、死んだ人をそのままガンジス河に流す——ミンギをしている人のそばを死体が流れてゆくというのはゾッとするが——そういうことが言われている。

遺体を灰にしてガンジス河に流す、これがヒンズー教の葬送儀礼である、と聞いて、マハトマ・ガンデイの場合もそういうことなのか、と、納得したものの、いったいそれはどういう意味なのか？よくわからなかった。

われわれ日本人は、一般に遺体は遺骨にして故郷の墓地に埋葬する、そうしないと落ち着かないのである。だから、このインドの遺灰をガンジス河に流してしまふという葬送のしかたは、何だかたよりない、どこかに行ってしまうように感じられるのである。死体を河に流してしまうなどは論外である。

ところで最近、私は、『ラーマヤナ』（ラーマ物語）という本を読んでいて、右の疑問の答を得ることができた。『ラーマヤナ』というのは、ヒンズー教の聖典で、いはばインドの古代叙事詩である。ラーマというのは、紀元前何世紀か、インドの有史以前に栄えたコーサラ国（ガンジス河中流の古代国家、大乘仏教で有名な勝鬘夫人の生国である）の伝説上の王子である。この王子は、天界の神々をなやます鬼神ラーヴァナを倒す使命を帯びて、ヒンズー教の主神・宇宙維持の神ヴィシュヌ神の生れかわりとして、主都アヨーディアの王ダシャタ王の王子として生れた。やがて、隣国ヴィデーハのジャナカ王の娘となっているシーターと結婚する。シーターは「田のあぜ」の意味で、大地から生れ出た女性である。このシーターを、ランカー（スリランカ）に宮殿をもつ魔王ラーヴァナが掠奪する。ラーマ王子は猿王スグリーヴと同盟し、猿ハヌマトの助けを得て、ランカ島の鬼神ラーヴァナを倒し、遂にシーターを救い出す。そして、首都アヨーディアに帰還し、コーサラ国の王位に即く。——これが『ラーマヤナ』の梗概であるが、全訳は全七巻のうち二巻が岩本裕氏の訳で東洋文庫本で二冊出ている。一年一巻の訳とすると、日本語で全訳の完成するのは、三、四年さきのことになるかも知れない、そういう大部のも



左
ガンガー女神
右
ヤムナー女神（五世紀の女神像）



山崎利男氏著『悠久のインド』から

のである。

この『ラーマヤーナ』第一巻の中に、ガンジス河に遺灰を流すことによって昇天したサガラ王の六万人の王子たちの物語が語られている。それは、概略次のような物語である。

これは、ラーマ王子が師事していたヴィシュヴァーミトラという聖者が、ガンジス河を初めて見たラーマ王子の問に答える形で語った、ガンジス河の誕生と発達についての物語である。

○

山の王ヒマヴァット（ヒマラヤ山）と妻メーナ（メール山の娘）との間に、長女ガンガと次女ウマーがいた。長女ガンガは天神たちの招請にしたがって天界に上り、次女ウマーはルドラ（シヴァ神——インド教の三大神の一、破壊神であると共に創造神）の妃となった。

シヴァ神は美しいウマー妃とのみ交ったので、神々は、神妃の子が生れるとだれも対抗することができなくなるとおそれて、シヴァ神に、その精液を身体の中に貯めておくように、願った。シヴァ神は承知したが、結局精液はあふれ出て大地に放出された。しかし大地はこれを受けとめることができなかつた。それを見て、神々は、火神アグニ神に精液を受けとめてくれと頼んだ。アグニ神は、シヴァ神の精液からシュヴェータ山とシヤラ森とを造った。そしてカールツテイヤ（軍神スカンダ＝韋駄天）が火神から生れた。神々は喜んでシヴァ神とウマー神妃とを祀ったが、ウマー神妃は子どもを生めないことをうらんで、神々の妻にも子どもが生れないように、と呪咀した。また大地にも同じ呪咀をして、シヴァ神とともに、ヒマラヤ山の最も高い頂で、苦行に入ってしまった。

神々が困ってブラフマー神（バラモン教の最高神＝梵天）に、指揮を願うと、ブラフマー神は、火

神が天上のガンガーに、神々の指揮者であり敵を滅ぼす息子を生ませることができよう、その子をウマー神妃が寵愛する」と語った。そこで神々は、カイラー山に赴いて、火神アグニ神に、その精液をガンガーに注ぐことを強制した。

火神がガンガー女神に会って燃えさかると、ガンガーは輝く胎児を身体中の穴から放出した。それが、ヒマラヤ山の金や銅や鉄となり、彼女の分泌物は錫となり鉛となった。そして、カールツティケーヤ(スカンダ)が誕生したのである。

さて、話変って、ラーマ王子の先祖になるアヨーディヤ王国王サガラ王は、ヒマヴァット山中のプリグ仙の泉(プリグールプラストラヴァナ山)において苦行した。そして百年を経た折、プリグ仙は、サガラ王を祝福して、サガラ王に王家を興す一人の愛児と六万人の息子を生むことを予言した。この予言はその通り実現された。そして幾年月か経て、ヴェーダ聖典に通暁するサガラ王は国家的な祭典(アシシュヴァメーダ馬祀祭)を執り行なうことになった。

祭典はヒマヴァット山のシャンカラシユヴァシユラ山と睨みあっているヴィンディヤ山との間で行なわれることになった。ところが祭祀用の馬が、羅殺女の姿をしたインドラ神(ベーダ神話に見える雷霆の神)に盗まれてしまった。そこで王は六万人の息子たちに、清められた駿馬を探し出して連れもどして来いと命令する。

六万人の息子たちは皆大力の持ち主で、父王に命じられた通り、馬を探し出そうとして大地を掘りに掘った。そのためあらゆる生物を殺した。そこで神々は恐れおののいてまたブラフマー神に救いを求めた。

すると、ブラフマー神の答へるには、この大地はヴァースデーヴァ（クリシュナ神）の妃だから、やがて息子たちはクリシュナ神によつて焼き殺されるに違いない、と答えた。

息子たちは馬を探しあぐねて一旦あきらめて王のもとに帰つたが、王に言われて、また大地を掘りつづける。そして遂に、馬を盗んだカピラ仙に権化したヴァースデーヴァを見つけ出して、打ちかかった。しかしまたブラフマー神の予言通り、彼らはカピラ仙の「フン」という一息で、みな灰の塊となつてしまつた。

一方、六万人の息子たちが帰つて来ないので、サガラ王は一人の愛児の子、つまり王の孫になるアンシユマツトに、駿馬を探す旅に立たせる。

アンシユマツトは、六万人の息子たちも会つた地下の方象（方角を支えている象）と会つて、自分が馬を連れもどせるといふ予言を聞く。そして、その通り、祭祀用の馬を連れもどすことができた。そのとき空の王者スバルナの姿を見た。スバルナはアンシユマツトに声をかけた。

「勇士よ、悲しむな。王子たちの殺戮は世間から是認されたことだ。あの偉大な力の持主たちを焼きつくしたのは、無限の威力を持つカピラなのだ。智慧のある者よ、かれらにありふれた水を供養しても、何にもならないのだ。ヒマヴァットの長女のガンガー河の水で、勇士よ、偉大なる腕の持主よ、叔父たちへの水の供養をせよ。世間を清める彼女は、灰の塊となつたかれらの死を洗い清めよう。そして、世間の人々から愛されるガンガー河の水で濡らされて、六万人の王子たちは天国へ赴くであらう。大きな幸運を持つ者よ、馬をつかまえて、立ち去れ、勇士よ。そして、祖父の祭りを達成させるがよい。」（このスバルナの言葉は『ラーマーヤナ』訳文そのままの引用）

しかし、これで話は終わったのではない。なぜならガンガー河は天界の女神であるから。

そこでガンガーを地上に降下させるために、コーサラ国歴代の王が苦行した。サガラ王三万年、アンシュマット王三万年、ディリーパ王三万年の苦行を経て、次のバギーラタ王が一年の苦行の後、ブラフマー神がこの苦行に感じて、シヴァ神に懇請することを教える。かくて、バギーラタ大王が「足の拇指で大地に立って」シヴァ神に敬意を示して一年、シヴァ神は、ガンガーの降下を承諾し、彼女を頭で支えようと言った。

そしてなほ神話的な描写はつづくが、かくて、王仙であるバギーラタ王はガンガーとともに地下界に入り「ガンガーの水を汲み、灰にされた大叔父たちを見て、茫然とした。しかし気を取り直してガンガーの最高の水を灰の塊に注ぎかけると、かれらの罪障は浄められ、天国に達した。

○ ヴィシュヴァーミトラ仙は、右のように語って、次のように附け加えている。それは、この物語が、ヒンズー教の中でどういう意味を持っているかを語っているのである。

「以上、余の話したところがガンガー河に関する詳細な物語だ。さようなら、ごきげんよう。勤務の時間も過ぎた。この物語を波羅門たち、王侯・武士たち、ならびにその他の人々の間で読誦し、祖霊たちを喜ばせ、神々を楽しませる人は、財産・名声・長寿・子孫を得て、しかも死後には天国に赴くであろう。ガンガー河の降下についての、この永遠につづく美しい物語を聴く人は、ラーマよ、あらゆる欲望を満足させるとともに、その人からあらゆる罪障は消滅し、彼は寿命を長くし、名声を高めるのだ」

つまり、右のガンジス河の神話・伝説が、ガンジス河のミソギとそこに遺灰を流すこととの「意味」を語っているのである。

ガンジス河でミソギをする人々の群、遺灰や、時には遺体をも流すこと、——それらは目に見える人間の行為である。その行為が、いかなる意味をもっているか、その思想というか精神というか、それを示すのが、この神話であり伝説である。

「事実」というのは、本来、行為（出来事）とその思想とが一つになったものとして考へなければ、意味がない。「事実」という言葉も、「事」とその「実」（意味）とをあはせていう言葉にちがいない。それを単に、外にあらはれた行為のみを指してそれを「歴史的事実」とするのは、片手おちではなからうか。それはそれとして、ともかく、私は、ガンジス河のミソギと遺灰を流すことの意味を、右のガンジス河の神話とそれを継ぐコーサラ国の建国伝説ともいうべきサガラ王以下の歴代王の物語とによって、理解することができたのである。こんなことはヒンズー教の研究者にとっては、当然の智識であろうが、未知の者にとっては大きな驚きであった。改めて神話・伝説のもつ現代的な意味を悟らされたのである。

現代インドの民族的行事の意味を、紀元前に成立したとみられる『ラーマヤナ』の中の叙述によって理解することができるということは、不思議と言へば不思議であるが、別に珍らしいことではない。各国ともに、その民族的な宗教行事や習俗の中には、その建国神話や英雄伝説が生きている場合が多いのである。そういう意味で、各国の民族思想を理解するには、その神話・伝説を学ぶことが重要なのである。（『ラーマヤナ』についての記述はすべて岩本裕氏訳（東洋文庫本）に拠るものである。記して謝意と敬意とを表するとともに、全訳完成を祈るものである。）『アジア研究所報』・六一、一一、三〇（

(二) 古代インド文明の類型的考察

前号に述べたガンジス河の神話・伝説は、『ラーマヤナ』と並んでインドの二大叙事詩の一つである『マハーバーラタ』（大バーラタ戦争記）の中にも出ていうことである。これについては上村勝彦氏の『インド神話』の中に、「第五話ガンジスの降下」という題で述べられている。『ラーマヤナ』との相違点も指摘されているが、「話の筋は大体同じであるが、細部において若干伝承が異なる。」と述べられているので、話の趣旨そのものは変わらないようである。

ただ右の点からみると、『マハーバーラタ』にも『ラーマヤナ』第一巻と同じように、いろいろな神話伝承が語られているようである。前記『インドの神話』の「叙事詩の神話」は主として『マハーバーラタ』に拠る旨が記されている。そう見てくると、二書ともに、神話・伝説の書とみることができようである。

『マハーバーラタ』は、十万頌（一頌は十六音節二行から成る）の大冊で、もちろん日本語の全訳はない。内容の梗概は、『インドの神話伝説Ⅰ』（世界神話伝説大系13、一九二九年初版一九七九年改訂）によると、

「ハステイナープラ城（パンチャラーの首都）に拠るパーンダヴァ王家とインドラプラスタ（クルの首都。現在のデリー）に拠るクル王家とが、ガンジス河とヤムナー河との間、クルクシュートラの大平原で、大会戦を行う物語で、中に大聖クリシュナ（ヴィシュヌ神の化身）の「バカヴァッド・ギーター」を含んでいる。」



インド・ベナレス

『ラーマーヤナ』の全訳者岩本裕氏の解説によると、
「……その中核をなしているバラタ族の大戦争の物語は全体の約五分の一に過ぎない。そしてその物語の間に、その登場人物の口を通して実に数多くのエピソードが物語られるのである。ここに挿入されたエピソードは、伝説・昔話そのほかあらゆるジャンルの説話であるばかりではなく、史詩があり

宗教史があり哲学詩さえ含まれており、古代インドの宗教、神話、伝説、風俗、法制、社会などに関して重要な資料となっている。……また、ヒンドゥ教の聖典として今日もなお数億の教徒に無限の福音をもたらすという『バカヴァッド』『ギーター』（神の歌）は、もとバーガヴァタ教の聖典であつたと考えられるが、パーンダヴァ王族の勇士アルジュナにバーカヴァタ教の教主クリシュナが語る烈々の言葉として、『マハーバーラタ』の中に挿入されているのである。」とある。

『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』との成立の先後については、問題があるようであるが、松村武雄博士は、前記『インドの神話』の

「インドの神話伝説解題」に、

「インド・アーリア民族の文化は、自ら三期に分つことができる。第一期は（B.C. 1500～B.C. 1000）、五河地方に居を定めていた時代、第二期（B.C. 1000～B.C. 500）は、ガンジス河地方に移住した時代、第三期（B.C. 500～）は、南方開拓時代である。」

として、

「インド最古の宗教学的な神話文学である『リグ・ヴェーダ』は、即ちこの時代（第一期）の偉大なる産物である。」

とし、

第二期は、諸種族闘争の時期とし、「ヤジュル・ヴェーダ」「ブラーフマナ」「ウパニシャッド」が現われ、「長篇の叙事詩『マハー・バーラタ』の如きは、這般の文化事業の反映である。」としておられる。そして第三期は、「いままで足を入れなかつた南方辺境の地に活躍を試み、インド文化の光華を全インドに輝かせた時代である。『ラーマヤナ』は疑いもなくこの民族南進の反映である。」としておられる。

神話・伝説に登場する地名からしても、——即ち、『リグ・ヴェーダ』神話がパンジャブ地方、『マハーバーラタ』がガンジス河上流クル・パンチャラ地方、『ラーマヤナ』がその中流コーサラ地方及びスリランカであることから、松村博士の説は大よそのところは納得されるのである。

『古代インドの文化と文明』の著者K・C・チャクラヴァルティ氏は、『マハーバーラタ』は『ラーマヤナ』よりも後の成立とみておられるようであるから、その点の修正が必要になるかも知れない。しか

しバラタ戦争の英雄たちがラーマ王子よりも古い英雄と考えられたのかどうか——それを考えたり、インド・アーリア文明がパンジヤブ地方から南下して、ガンジス河沿いにくだつてきたことは、ありうることであるから、インド・アーリア文明の発展は、『リグ・ヴェーダ』の神話から二大叙事詩へと発展し、その直後に、仏教、ジャイナ教という、ヒンズー教に対する二つの大きな宗教改革が行われたとみることは、あやまりないのではなからうか。

C・K・チャクラヴァルティ氏によると、

「インドの伝統によれば『ラーマヤナ』は詩篇カフヤであり、その作者ヴァールミーキはインド最古の詩人、また『マハーバータ』は歴史書である。しかし、史実に基づく時代では、西紀二世紀のアジヴァゴーシヤ（馬鳴）が本当の意味で最古の歴史家である。」

とあつて、馬鳴の著作が二つ紹介されている。一つはブツダの二大弟子の対話であり、一つは『ブツダチャリタ』（ブツダ行状記）であるという。二書とも、紀元前五世紀のブツダの伝記的叙述というもので、統一インドの歴史ではない。神話・英雄叙事詩を継ぐべきアショカ王（前二七四即位）のマガダ帝国史とかマウルヤ王朝史とかカニシカ王（一二八頃即位）の歴史とか、チャンドラグプタ王（三二〇即位）のグプタ朝の「歴史」は、遂に記されなかつたのである。

もつとも大乘仏典の背景が、マガダ国（王舎城鷲の峰の説法——法華経）を中心に、コーサラ国（大法鼓教・勝鬘経）ヴリジ国（維摩経）など、ガンジス流域の古代国家に及んでいることを考えると、大乘仏典というものが大乘仏典による古代国家の宗教的統一を物語つたものとも思える。それがアショカ王の大帝国の神話的伝説的背景とみられないこともない。それにしてもそれは釈迦伝で、叙事詩であると

しても歴史とは言いにくい。

いずれにしろ、インドの古代文明は、神話と叙事詩とがあつて歴史を欠いている、という見方は否定できないようである。叙事詩が宗教改革の仏教教典もしくはジャイナ教経典につづいて、歴史につづかなかつたのである。これは『旧約聖書』と『新約聖書』の関係に似ている。『新約聖書』を中心とするイエス・キリストの宗教は、ギリシャ・ローマにひろがり、世界にひろがって、数多くのキリスト教文明国家を生み出すことになつた。仏教もまた、アジアにひろがって、中国、日本、韓国、チベット、タイ、ビルマ、セイロン等に仏教国家を作り出したのである。しかし、『新約』を生み出したユダヤ民族は『旧約』のユダヤ教に固執し、『仏教』を生み出したインド民族は一旦はアショーカ王たちの仏教国家を作るが、その歴史を書くことがなく、のちに仏教をもヒンディー教にとりこんでしまつて、前述の通り、『ラーマヤナ』『マハーバラタ』を民族の宗教的な紐帯としている、ということなのである。(なおインドの神話伝説の地域性は、日本神話の高天原神話と筑紫神話と出雲神話の地域性を考えあわせることができるのではないかと思う。)

附記

なほ、前述の『ラーマヤナ』という、インドの神話・伝説の書は、現代インドの国民思想の統一の中心である、ということである。

このことは、『ラーマヤナ』の研究者の多くが語つているところであるが、いま前にも挙げた『古代インドの文化と文明』(K・C・チャクラヴァルティ著 へ一九六一年再刊) 橋本芳契・橋本実訳・一九八四年第二刷)の中からの文章を引用させていただく。

「……インドのどんなところでも、これら史詩の英雄によって為されたことの思い出話があり、それが老若男女、貧富を問わず、バラモンであるとないとを論ぜず、かみはマハートマ・ガンデーから、しもは最下賤民のチャングーラ（旃陀羅）に至るまで全インド人の心情を動かしている。

大衆というものは、ウパニシャッドにこめられた哲学的真理を理解するということもなければ、ヴェーダの規律や儀礼を守るといふこともできないのである。宗教と道徳の理念は、大衆にはそれら史詩を通じて宣布されたから、これらの史詩の民衆生活に与えた実際上の影響には、はかり知れず大きいものがある。

ラーマは、全インドを通じて尊敬され崇拜されている理想的男児・理想的戦士、そして理想的王者なのである。彼の生い立ち、結婚、追放、彼の敵手ラーヴァナによる妻の誘拐、また彼との遭遇と戦闘、最終的な勝利、そして最後に、自国民を満足させんがために追放した献身的で貞潔であったシーター、それらが全インド人によって親炙シナされている主題なのである。

これらのエピソードといろんな苦難とは、過去三千年にわたって、各人に涙を催させずにはいかなかった。そしてラーマが現在でも常に変らず、強い、また真実の生きた精神力であると言っても何ら誇張はないのである。ヒマラーヤからコモリン岬（インド南端）まで、インドのいたる所で、いずれかのラーマ寺院やその神像、あるいはこの神への忠実な従者ハヌマンの像を見ることができ、また各所で祭礼の季節には、『ラーマーヤナ』に出てくるエピソードにちなんだ野外劇が開かれる。ほとんどの場所では「ジャイ・ラーム・ジー・キ」（ラーマ神に勝利あれ）と言ってお互いあいさつを取り交わすのである。それは奇妙に思われる。けれども、『ラーマーヤナ』がインド人のあいだで強い

紐帯となっていることは本当である。『ラーマヤナ』は宗教経典としては神聖であり、またロマンス（小説）としても魅力的である。これらふたつの大史詩（註・『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』）に関して、ネールはその著『インドの発見』中に次のように書いている。

『私はこの二書ほど大衆の心に、かくも持続的かつ普及的な影響をおよぼしたどんな著作も、どこにも見うけることができないのである。遙かな古代に生じながらも、これらはなおインド人の生活に生きてはたらいっているものであり、少数の知識階層にしか通じない、原文サンスリット語の中にはなく、翻訳や改作の中に、また伝説や伝承がすっかりしみついたいろんな現象の中に生きているのであり、人民の生活を織りなす綾の一部をなしているのである。』

（名誉教授、『アジア研究所所報』第四五号 六二・一・三一）

(33) 『史記』本紀の始祖卵生伝説（昭和六十二年）

——「東アジア諸国の始祖伝説の比較」（アジア研究所紀要第十三号所載）補説——

開国始祖の卵生伝説について、東アジア諸国がその記述法の模範を仰いだと考えられる司馬遷（前四五一前八六）の『史記』の「本紀」には、次の通りに記されている。

まず「殷本紀」に

「殷の契は、母を簡狄といった。有娥氏の女で、帝嚳（黄帝の曾孫）の次妃であった。かつて、一族

の婦人三人で出かけて川で浴みしているとき、玄鳥つばめが卵をおとしたのを見て、簡狄がとって呑むと、そのために妊娠して契を生んだ。〔「殷本紀」の冒頭〕—中国古典文学大系本、野口定男氏訳〕

右は殷の始祖伝説であるが、秦の始祖については、次の通りである。

「秦の先祖は、帝顓頊（黄帝の孫）の後裔である。顓頊の孫を女脩といった。女脩があるとき機を織っているとき、燕が卵をおとした。女脩はこれを呑んで、子の大業を生んだ。大業は諸侯の少典の子の女華を娶った。女華は大費を生んだ。大費は禹とともに洪水をおさめて土地をひらいた。

大費は子二人を生んだ。一人を大廉といい、鳥俗氏の祖であり、もう一人は若木といい、費氏の祖である。……………」

大廉の玄孫を孟戲・中衍という。中衍は身み体ていは鳥とりで、人語をよくした。……………」

（「秦本紀」の冒頭から、同前書より）

周は異なっていて、卵生神話はない。「周本紀」の冒頭は次の通りである。

「周の後稷は名を弃すという。その母は有邰うたい氏の女で、姜原という。姜原は帝嚳（黄帝の曾孫）の正妃であった。あるとき、姜原は野に出て巨こ人にんの足あしあとをみつけ、心たのしくなつて踐ふんでみたいと思つた。ふむと身体のなかに動くものを感じて、妊娠したようであった。そして、一年たつて子を生んだ。

不吉なことだと思つて、これを路地うらに棄てたところが、通りすぎる馬牛がみなさけてふまなかつた。うつつして山林の中におくと、たまたま山林の中を行きかう人が多くなつた。またうつつして溝の中の氷の上におくと、鳥が飛んできて翼を氷の上に敷いたり、上から覆つたりしてあたためた。姜原は

神異なことだと思つて、ついに手もとに収めて育てた。そして、はじめに棄てようと思つたので、『弃』と名づけたのである。』（『周本紀』の冒頭、同前書より）

高句麗の始祖東明聖王即ち朱蒙の出生伝説中に、金蛙王が、柳花女の生んだ卵について、

「大き五升許の如し、王之を棄てて大冢に与ふ、皆食はず、又之を路中に弃つ、鳥之を覆翼す、云々」とあるあたりに似た箇所があるが、卵生神話ではない。また、三国史記及び元朝秘史に見られた日光感精神話の要素は周本紀にはもちろん、殷本紀にも秦本紀にもない。

つまり、『史記』には、神話的要素は極めて稀薄なのである。だからこそ唐時代になつて『三皇本紀』が附加されたのである。しかしこれとても物語的要素は極めて稀薄である。

元来、中国の「本紀」は、国家の成立と事件の展開を、編年体によつて記述することを目的として、物語的要素を排除しているかに見えるのである。まして「神話」をや、というわけである。総じて、中国の歴史の主流は、「本紀」にあり、物語的部分は「列伝」の中に人物伝として述べられているのである。それに対して、『日本書紀』は、「本紀」の体裁をとつてはいるが、中に相当に物語的要素を含んでいるのである。これがやがて歴史物語として発展して、日本の歴史の主流になるのであるが、その源流はむしろ『古事記』であるとみてよいであろう。

中国と日本とでは、「歴史」の記述法が異つている。この事實は、歴史についての考え方そのもの——つまり、歴史意識の相違ということなのである。そこで、単純に「歴史物語」は「歴史」ではないと言ふのは、中国の歴史観に立つて、日本の歴史観を否定する、ということに終りそうである。

日本の「歴史」の主流は、編年体による本紀的なものでなく、「歴史物語」となつたのだと思ふ。

追記、補正。

『紀要』第十三号拙論冒頭の天之日矛盾説の現代語訳について、原文に「是に日の耀虹ひかりにじの如其陰上ことそのはとを指したるを」とある。「虹の如ごと」の一句を現代語訳に落した点について、その表現の美しさに注意すべき旨、広瀬誠氏の御指摘を受けた。御指摘により現代語訳「日の光」も原文の「日の耀ひかり」とあるのを生かし、「虹のように」の一句を挿入する。

(『アジア研究所報』第四六号 六二・五・一)

第七編
師友追悼詩文集



中扉カット
法隆寺金堂釈迦三尊像台座裏飛天樹木画

第七編 師友追悼詩文集

- (1) 石幡五郎教授を偲んで
- (2) 戦歿校友追悼の辞
- (3) 浜口瑛教授弔辞
- (4) 倉岡克行教授弔辞
- (5) 故松浦珪三先生の最終講義
- (6) 理事・藤原繁先生哀悼
- (7) 平戸にて―井上孚磨先生歌碑のことなど
- (8) 学長・太田耕造先生にささぐ、挽歌十二首他
- (9) 学長・早川崇先生の急逝に憶う
- (10) 稲葉昌幸教授・挽歌献詠
- (11) 浅見方舟教授追悼
- (12) 木村肥佐生先生の文章（追悼記）

(1) 石幡五郎教授を偲んで (昭和三十一年)

石幡五郎先生を教員室に見なくなつてから、幾月になるだろうか。先生は、その謹直な、ゼントルマンそのまゝの風貌の奥に、実に温かいユーモアをたゞえて終始われ／＼若いものをはげましてくれた。はじめ有井治教授の紹介で大蔵省に先生をお訪ねした時、あまりにも物静かにお話なさるので、これではじめの難関・英語の講義がうまくゆくかどうかと実は少々あやぶんだものである。ところがあとで教室の外を通つたら朗朗たる講義の声が聞えるので、見ると先生は、ゆつたりと椅子に腰掛けたまゝ、りん然として講義をしておられた。

「ヴェテランだなあ」と感歎した事だった。教員室や教授会等ではあまり多く話をされなかった。晩年殊にそうだったのは、講義を生命として、声を惜しんでいられたのだろう。プロフェッサーの名にふさわしい先生だった。それでいて実にユーモラスな話がある。

講義中ふと、うとうとされたらしい。一頁とばして訳をつけ始められた。驚いた学生が「先生頁が違つています」と注意すると、間髪を入れず先生は「失礼、風のせいです」と云つて眠りをさそう初夏の風の吹きめくつた教科書の頁を正して、また、何事もなかったように、訳をつゞけられたと云う。先生らしい良い話だったと思う。

去年は、アジア大学建設第一年度で教員にも苦しい年だったが、ある教授会で、教員のアジア大学建設資金の寄附について(不景気な話だが)減額の申合せをしたい(それでも学生諸君よりも多い)というこ

とになった時、石幡先生が、自分はその申合せ通りにはしたくない、という意見で、何時に似ず強硬な態度なので変だと思つたら、要するに先生は老年で病弱であるから何時どういふことになるか解らない、一度決めた寄附金は何とか早く完納して教員としての責任の一端を果したい、という御意見だった。そんな不吉なことを云わないで、若い者と一緒にして下さい、というような事になったが、今思えば先生の予感だったのだろうか。

亡くなられる日、先生は大学へ行くと云つて出られたそうだが、途中で気分が悪くなつて帰宅され、そのまゝ倒れてしまわれたという。教員らしい立派な最後だ。

昭和二十五年短大設立に際して、英語担当のA級教授の判定を得て、専任教授に就任し、爾来本学と苦難を共にして七年、学生からも随分慕われたらしいが、報いられる処の少ない晩年であつたのではないだろうか。

告別式の日、一時間以上も弔問の人が続いた、その多くは立派な御夫人達で、東京女子大学教授在職三十年の輝かしい半生を語るかのようにであつた。

仏典を読むことを私にすゝめたのは先生だから、学、東西にわたつておられたのだろう。

昨年大学機関誌発行の計画に参画され、久しぶりに論文を書くとはり切つておられたが、御病気のため数冊のノートを作られたまゝで、完成をみるのが無かつたのが残念である。

はかないといへば、はかない教員の一生である。せめてその面影を忘れまいとして、そこはかとなく思ひ出をしるした。

(2) 戦歿校友追悼の辞 (昭和四十一年)

今ここに、興亜・護国の神々と祭られた戦歿校友九十一柱のみ霊の諸君の、ありし日のお写真の前に立って、私はいよいよのなつかしさと深い畏敬の念にうたれます。

おひとりおひとりの立派なお顔をあおいで、そこに限りなく清らかな、ますらおの心の溢れているのを感じます。

諸君が今から二十数年の昔、興亜専門学校で鍛えに鍛えしまごころは、このお写真の面影に永久にとどめられており、私どもを見守り、みちびいて下さるものと信じます。

また、諸君の残されたいまわのお手紙の中には、祖国日本とアジアとの興隆の祈りが満ち満ち、ご両親、ご兄弟姉妹に対するあたたかいお心と強い母校愛と友情とがあふれていて、日本国民の生の模範が示されています。

諸君はその道を死をもって実現して、日本とアジアとの復興の礎となったのです。

諸君の果した偉大な行為を思いますと、諸君を教え子たちと呼ぶことのできることは、私ども教師の誇りですが、むしろ諸君は、道にいのちをささげて、私ども亜細亞学園教職員の永遠の教師となったのです。

諸君のすすまれた興亜・護国の一筋道を、諸君のみたまとともに、同時に、諸君の愛する後輩である現在および将来の学生諸君とともに、堂々と進みゆくことを誓って追悼の辞といたします。

うつし糸をあふぎまつればあなかなしありしおもわのかけにたちつ
ますらをのきよきみこころうつし糸のまみに糸まひにあふれけらずや
のこされしいまはのみことばよみまつりををしきみたまををろがみまつる

くにのためののちささげしわかうどををしへごたちとよぶぞかしこき
みちのためののちささげしをしへごのあとををしをりにいきゆかむとす
けふここにむかへまつれるみたまはもわれらがゆくてをみちびきたまへ

昭和四十一年十一月三日 亜細亜学園教職員代表・亜細亜大学教授・教養部長 夜久 正雄

(3) 浜口瑛教授弔辞 (昭和四十六年)

謹しんで亜細亜大学教授故浜口瑛先生の御霊前に申し上げます。

先生は、大正十五年八月六日和歌山県南部(みなべ)町に浜口家御三男としてお生れになり、県立田辺

中学を経て、同志社大学英文学科を御卒業になられました。先生は大学在籍中から教鞭をとられたほどの秀才であられまして、御卒業後直ちに教職に就かれ、桜美林短期大学講師を経て、昭和三十五年四月亜細亜大学講師に就任、助教を経て、四十四年四月教授となられ、英語学の研究と英語教授とに大きな業績をあげられました。

研究方面におかれましては、数々の御著書を出されたばかりでなく、研究調査のため海外に出張せられ、殊に三十九年アムステルダム大学英語研究における研究発表は、先生の得意として語られるところでありました。

教育方面におかれましては、教室における熱心な御講義ばかりでなく、教務主任、学生委員として学生を教導せられ、カリキュラムの運営に当られる等、大学の発展に貢献せられたのであります。

また、先生は御趣味が広く、競馬から油絵に及び、交友関係も広く、外柔内剛の独特の快男子で、誰からも親しまれ、慕われるお方でした。そればかりか、先生はよく友人後輩の面倒をみられ、私どもはどんなに先生の御世話になったか、はかることができません。

先生は、私ども友人にとって和合の光でした。私どもは、先生がいつまでも私どもの中にあつて、そのあたたかい御人柄の光を放つていていただきたいと願つておりましたが、思わざる御病気で倒れられ、一旦少康を得られたとのことで、安堵しておりましたところ、一昨年十一月十一日夜、奥さまがたの不眠不休の御看護の甲斐なく永眠せられました。享年四十五歳。

思わざる御知らせを承りまして、私どもは寂寥落胆言いつくしがたいものがあります。ましてや御遺族の御心情いかばかりかと推察申上る次第でございます。

先生、御生前の御友誼に對しまつり感謝の言葉を申上げ、先生が御心を残されたであろう奥さま、お子さまがた御遺族と今後とも親しくしていただき、御友誼の万一に報じたいと思う心を申上げ追悼の和歌をささげまして、お別れの言葉と致します。

思はざる知らせかなしもきのふこそ君すこやかになるとききを

おもかげは目にはたてどもとこしへに君とあひみむすべなくなりぬ

奥さまやお子さまのうへにとこしへの愛をのこして君逝きましぬ

つねのごと日はてらせれどけきはすでに君とあひみむすべなくなりぬ

をしみてもあまりありけりますらをの君これからといふときにして

先生ありがとうございました。さようなら。

昭和四十六年十一月十三日

(4) 倉岡克行教授弔辞 (昭和五十三年)

弔 辞

倉岡先生ノ先生の御靈の御前に謹んで申し上げます。

先生は、明治四十二年七月二十一日のお生れで、昭和三年、鹿児島県立川内中学校御卒業、東京外国語学校中国語部本科貿易科に入学され、昭和七年三月同校御卒業、直ちに満州国宮内府諮議室付として、風雲の満州国に赴任なさいました。爾来満州国各地に活躍され、昭和十九年満州国国務院総務庁参事官となられたのであります。やがて終戦となり、先生は、昭和二十年十一月ソ連に抑留され、筆舌に尽し難い四年間の抑留生活の後、帰国されました。

亜細亜大学には、昭和三十六年九月兼任講師として中国語を担当され、昭和三十八年四月専任教授になられました。爾来今日まで専任教授として学内外に活躍されましたが、専ら亜細亜大学における中国語の教育と留学生の日本語教育とに精根を尽されたのであります。特に昭和四十一年五月留学生別科主任となられましたからは、留学生の教育に御苦勞なさいました。また学生の課外指導にも御熱心で、昭和三十七年にはアジア学生交流会を創立され、その顧問となりました。また昭和四十七年からは準硬式野球部部长として同部の今年度一部昇格に寄与される等、懇切に学生を指導せられたのであります。

学会におきましては、中国語学会専務理事、外国人のための日本語学会理事、留学生統一試験委員等を歴任され、御著書も多数で、先生は、中国語の研究と教育と、また留学生に対する日本語教育の權威

と仰がれました。

同時に、先生の男らしいやさしいお人柄と教育に対する御熱心とは、われわれ同僚の教職員からは勿論、学生たちから深く敬慕されました。先生のお教へによって中国語で活躍する卒業生も次第に数を増すやうになりました。

かうした学問上の先生の御業績につきましては、申し尽せませんし、既に世間周知のこととも思はれますのでこれ以上、申しあげません。

先生は、今年の三月頃まで御元氣にしてをられ、この夏には御三男の勤めてをられるインドネシアに出張なさる予定で、それを楽しみにしてをられたほどでしたが、四月に入つて急にお悪くなられ、奥さまがたの不眠の御看護も空しく、この七月二日午前四時、たちまちにして世を去られました。かうして先生の御霊前に先生一代の御奮闘をお偲び申上げて御冥福をお祈り申上げようとは、夢のやうであります。

亡くなられる数日前、病院に先生を御見舞申上げました時、私の参上したことを聞かれると大きな声で私の名を呼ばれました。そばへ行くと、手をとつて、もうだめだ！と言つて絶句なさいました。亜細亜大学のことを最後までお心に掛けてみてくださったのだと思ひます。どうもありがとうございました。

先生ノどうか先生のおつくりになつた御家庭の、奥さまはじめお子さまがたまなさまがたのうへをおまもりください。また先生が、その晩年の精根をささげつくされた亜細亜大学のゆくへを、先生のお教へをうけた卒業生、学生、留學生のうへを、あのあたたかいままざしで、とこしへにおまもりください。私どもも精一杯の努力をして、先生の御霊のまもりに恥ぢないやうにしたいと思います。では、先生さ

やうなら

昭和五十三年七月四日

亜細亜学園理事・亜細亜大学教養部長 夜久 正雄

(5) 故松浦珪三先生の最終講義（昭和五十二年）

まえがき

本学の教授として、中国文学・中国研究・中国語を担当され、定年退職後は非常勤講師として中国文学・中国研究を担当しておられた松浦珪三先生は、昨年十一月三十日に急逝された。

松浦先生の巣鴨中学教師時代の教え子で、松浦先生の御面倒を看ておられた青柳隆氏から、御急逝の電話を受けた時、私は返事もできなかった。

前から御病気がちで、休講のつづくことを心配された先生は、その十日ほど前の御連絡で、十一月の中旬ごろには、進退を決するというお話だった。もちろん私は、来年の三月頃まで様子を見ていたが、たいという意味の御返事をして、御静養を願ったので、先生の御申出を諒承したわけではなかったが、その「進退」の意味がこんなことになろうとは、少しも考えなかったのである。その折の先生の御言葉は、いつもの通り実に行きとどいた、しっかりしたもので、実に堂々たるものであったから、私はむしろ安心したくらいだったのである。

先生は数年前、長く病床にあった夫人を喪つておられた。福生の大きなお宅に一人で暮しておられたのである。どなたか御最後を看取つてあげただろうか？突嗟にそう思つてお尋ねしたところ、心配した通り、亡くなつた翌日になって、ケース・ワーカーの女性に発見されたということであつた。

私は、その悲惨を悲しむよりも、むしろその孤独の壮烈さをたたえたい気持である。それには、またそれなりの理由があるが、松浦先生は夫人を喪つてから、孤独に徹して、他人の扶けを拒絶しておられる風があつた。

松浦先生は、明治三十年十一月十七日のお生れだから、享年数え年八十歳である。平戸藩主松浦家の家柄で、平戸中学校卒業後、大陸に渡り、漢口湖広学堂、北京師範大学史学科を卒業された。昭和十三年には、北京師範大学文学系教授として日本文学と中国文学の講座を担当され、終戦によつて退職されたのである。考古学・人類学の鳥居竜蔵教授と二人、北京大学の日本人教授としての双璧であつた。たしかに、日本人で北京大学の中国文学の教授となつたのだから、驚くべきことである。二十一年六月、北京から引揚げて来られ、巢鴨高校、善隣書院、日華学会を経て、昭和三十四年亜細亜大学の教授となられ、以後本学の教鞭をとりつづけられ、定年退職後の非常勤講師の現職で亡くなられたのである。本学教授となられるについては、井上孚磨先生（元教授・憲法）の御推挙による由である。

御業績の最たるものは、何と言っても、魯迅の『阿Q正伝』の本邦初訳ということであろう。昭和六年から七年にかけて、『阿Q正伝』・『狂人日記』・『旗声』等の魯迅の名作を、日本語訳されたのである。その他、日本語と中国語とについての数々の著述がある。

松浦先生は、自分は中国の近代文学の研究者というよりも、近代文学の協力者であつた、という意味

のことを言っておられた。単なる学者ではなかったのである。

興亜先覚者の一人に数えられている浦敬一（明治二十二年中国西北伊犁地区に入って、消息を絶った）のことは書いた私の文章をお見せしたところ、浦敬一は血縁なので、その手紙を持っていると言つて見せてくださったことがある。これが松浦先生の精神の系譜であつた。

松浦先生の業績については、なおまた書きたいこともあるが、別の機会にゆずることとして、たまたま入手することのできた先生の最終講義の録音の速記（その終りの部分）を左にかかげさせていただく。それはモンゴル語受講生の佐藤君が、昨年の六月十一日の先生の講義を偶然テープで録音してくれたものである。結果として、これが先生の最終講義の記録となつた。再び教壇に立つ日のないことを予感されてか、その日、切々として学生諸君に訴えられたのである。たまたま総合科目・中国研究の最終講義ではあつたが、これが一代の中国通・松浦珪三先生の最終講義となろうとは、学生諸君も知らなかつたが、何よりも得がたい先生の講義記録となつた。亜細亜大学教養部は、東洋学の世界的学者であつた岡本良知教授につづいて中国研究の権威の松浦珪三先生を喪つたが、松浦先生のこの最終講義の遺つたこととはせめてものなぐさめである。お二人とも、生前報いられるところすくなかつたが、せめてそのお志が、この亜細亜大学に遺るようになつてほしいものである。

(The Asia 五二、六、五)

故松浦珪三先生最終講義「苗族のこと」

苗族の物語として、小説としていちばん価値のあるのは「十二の太陽を射る」話であります。太陽が十二あるという物語、これは日本だけではありませんが、この苗族の太陽を射るというのは、有名なクリスチャン小説家、賀川豊彦氏が「太陽を射る者」という小説の題材にしております。彼の作った「死線をこえて」という小説がありますが、あの当時の洛陽の紙価を高からしめたと言われる程の、あの小説であります。その中編に、「太陽を射る者」というものがありますが、この題は、今の苗族の十二の太陽をよく物語ります。

今の雲南省の全人口が千二百万人です。その内八百万人が苗族であります。全体的には中国国内だけで三千万位ございます。けれども戦いに敗れて逃げます時に、あの東南アジアと中国との境の、あの尾根の所、いわゆるビルマの北、北ベトナムの北は、中国と国境を接しております、大体千メートルから高い所で千四百〜千五百メートルあります。あれを乗り越えまして、一部はビルマに下り、ラオスに下り、それからベトナムへ下りて来ます。彼らはそれぞれベトナムはベトナム、ラオスはラオス、あるいはビルマはビルマにおきまして、全部その土地において、今日苗族のいわゆる国家が建設されております。

ベトナム民族は、あの強力なる武器を持ち、強力なる破壊力を持つているアメリカと十年以上戦って、あんなに、世界人類史上いまだかつてない抵抗ぶりを示しまして、今日完全なる南北ベトナムの独立国家を造り上げた。彼らは全部苗族の子孫でございます。

彼らが南方から稲を持って日本へ来たのは、ずっと後のことでありまして、その前、敗走者として、戦いに敗れ、追われた連中として、苗族は揚子江の南の、東の海岸へ逃げました。

一隊は、今言った様に、ビルマ、タイ、ラオス、ベトナムの、あの北の国境線の尾根から登り上って、下って行き、残った者は雲南省、貴州省、海南島へ残りましたが、そうでない連中は、浙江省から黒潮に乗って日本へきました。どういう手段で、あの荒々しい荒海、言い換えれば、日本の坊さん達の留学生達、弘法大師時代あるいは鑑真和上時代の、あの荒々しい東シナ海をどうして、小さな舟で彼らが実際日本まで逃げて来れたのか、その手段、方法はどのような方法で逃げて来たのであるか、という事をお話ししなければ結論が出ません。

今、ちよつと出た海南島には、一万四千〜二万人の苗族がおります。これは、上海に、現代革命パレー団があります。日本にも来月やってきますが、その時には上演致しません、有名な『紅色娘子軍』という名前で上演されているもの、これは四十人ばかりの海南島の女の部隊が、国民党と戦ったことを書いたのが、いわゆる海南島の苗族を中心とした劇であります。彼らは、先程言ったように、三千万から三千五百万が中国だけでおります。

彼らの生活は、大分最近変わってきましたが、日本と同じように、襟を右の襟の中に入れた日本の着物と同じで、帯をしてキャハンははいております。そして、ワラジをはいています。それから、横笛を愛玩致します。それから、顔つきや体つきは二、三回前にお話しましたが、均整のとれた小柄な日本人の体であります。約百六十五センチ位であります。小柄です。北方の中国人は百七十五センチから百八十七センチ近くもありません。けれども、南方の人は高い人で、百七十センチ位、普通は百六十五センチ位。

非常に小柄であります。日本人の小柄な人の体格とそっくりであります。

このようにお話すれば、これは私の生涯かけた研究でありまして、日本にはこういうようなものがございます。

ご承知ですが、「照葉樹林」というのがあります。この「照葉樹林」というのは、まるで神様が作った様に、雲南省、貴州省から揚子江のうえを通りまして、今言った様に東シナ海を通過しまして、西九州に上陸しまして、それで北九州を通じて、今日の山口県、広島県から大体大阪当りまでに生えている樹木の事であります。この下には、必ずエンドウマメとかワラビとかマメ類というものが、ずっと出ているのであります。彼らの今の生活状態と、日本のいわゆる古代日本人がまだ稲の米なんか食べない前、いわゆる食糧というものは、まるで神様が作ったのではないかという位、同じ系統の中へすっばり入ってしまうのであります。

この後から稲を持ってきたもの、これはいわゆる中国の江南人と言われております、あの魯迅や周恩来の生れた、杭州近くの紹興当りからの、いわゆる中国人が稲を持ってまいりました。それがモチ米や何かを持ってきたのは、今の南ベトナム方面からであります。

どんな方法で、どんな舟に乗って、九州のどこへ、何という湾に上り下ったかということまでをお話しました。大体の所はこういう事です。誠に粗末で、これは何がなんだか、聞いたのか、聞かないのか分らないというお考えの方もありませんが、これは私の責任であります。私に一年間通して講義をさせたならば、皆さん達が中国人の中部中国人、南方中国人はわれらの兄弟姉妹である。田中角栄元首相がかって毛沢東に会った時に、あの『楚辞』のいう本をもらいました。あの楚の国というものの出

現等の事を書いたものであります。揚子江の人種は、われわれと兄弟姉妹であります。もちろん、朝鮮から来ました朝鮮の人達もわれらの兄弟姉妹であります。

言い換えれば、日本民族は何も天からクモが糸にぶら下つて、このタツの落し子みたいなチツポケな島に落つてこてきたわけではありません。南は南中国、あるいは、北は朝鮮経由で来た所の連中であります。そういうわれわれは大陸民族であります。勇敢な志を持った。それこそ、みはるかすと、どういう所か知らんけれども、東の国へ行くといつて、これだけの肝玉と勇気を持った連中が、日本という国にのぼり上がりまして、幾多の変遷を経て国造りをして、出来上がったのが日本民族であります。だから頭もいい、戦争しても強かった。世界中が日本人を奇蹟的人種と誉めた事がありました。太平洋戦争でボロを出してしまいました。「ナニ、アリヤー、デクノボーでねーかヨ」、それでも、太平洋戦争で裸になつてもなお、あの東シナ海を一丁櫓でやって来、あの朝鮮海峡を乗越えてやってきたあの根性だけは捨てねーだろうと、世界中の者もわれわれを期待しておつたんでありますけれども、アメリカの日本軟化政策が見事に功を奏しまして、今日の、日本人はどこへ行つたやら、私は毎日毎日さがしておりますけれども、遂に同胞というものにお目にかかる事が出来ません。

「松浦先生、あなたどここの国の人ですか?」「私でありますか。私は、昔は日本という国の人間でありました」「今はどこの国の人ですか?」「今の所チョットご返事出来ない」「あなたには、それでは同胞というものがいないのですか?」「昔はおりましたが、今はおりません。電車に乗つても、道を歩いても皆んな外国人であります。異邦人でありますヨ」「それでは、あなたは淋しいですネ」「淋しいです。年とつてから淋しいのではない。国もない、同胞もない、誰もいない。外国に来たような、そう言つ

たつてニューヨークやバリやロンドンに行つたんじゃない、どこかアラスカから北極当りにいて、何かこうトナカイかオットセイに会つたような気がして、おつかない様な、淋しいような、悲しいような気持で、毎日を過ごしているわけでありませう」

皆さん達にお願いしたいのは、もう一度、夢の中のあの輝しい大陸民族、荒海を蹴破り、日本という孤島に登り上つてきた勇敢な大陸民族の血によつて、敲き上げられ、鍛え上げられた日本民族を、もう一度取返して下さい。皆さん達の生きてる間に、私に御供養のつもりで、一つお願いします。革命でもいい、王道でもいい、何でもいい、手段は何でもいい。

今日はこれまで。来週の十七日、私は来たいのですけど、万万一の事があつて来られなかつた場合は、教務の事務の方にお願ひ致します。特別の事が無い限り私はまいります。私が来て、そして試験をします。試験の中味はどんなものだ。分つた様な、分らんようなどうも書きにくい。苗族について皆さん達が、これといったはつきりした題をつけると書きにくいのです。だから、結論で一言、二言いったんでありますけれども、九州の原住民族、北方の原住民族、北九州の原住民族と或は苗族との関係、或は苗族と漢民族との関係等について、少しばかり、十行か二十行位、書いて下さい。

私の点数は甘いと年中叱られるけれども、三人の先生が採点するのでありますから、他の先生の時もしっかりとやつて下さい。それでは、来週の十七日に試験をやります。私が来ますが、来れない時は教務の方にお願ひします。

(6) 理事・藤原繁先生哀悼 (昭和五十三年十一月三日)

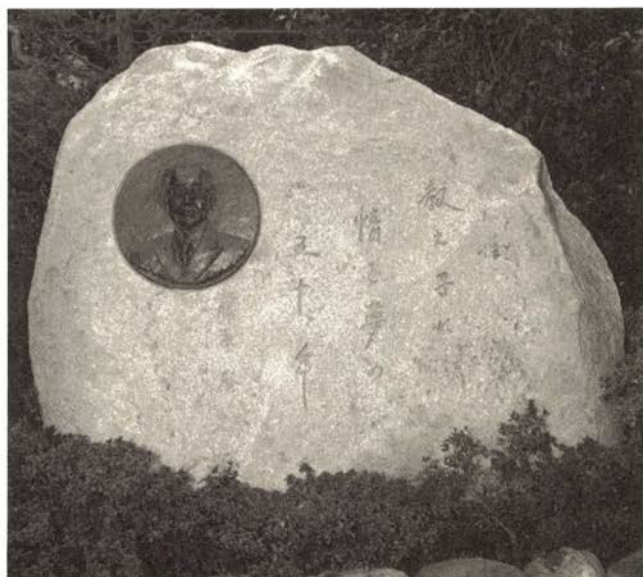
きやんばすに人ごゑしげく樂しげに
ざわめく見れどうつつともなし

祭りなど人あつまるをよろこびし
君ゆきましぬまつりのその日に

ひさに見る君のおもわは神さびて
老いたる古武士のなほ生けるかに

のこされしみころざしにそひなむと
ちかはしめられぬなきがらのへに

かにかくにはげまされつつ来しわれは
いかにかすべき君まさずして



興亜神社境内・藤原繁先生記念碑

かぞふれば三十年あまりいくとせかともにつとめし月日なりけり

やがてゆく道とおもへどもにきし年月おもへばかなしかりけり

みまかりし君のこころは大学にとはにのこるとおもへどもああ

もう少し生きながらへて大学のさかえをまさ目に見とどけましかば

けさ君の訃（ふ）を聞きてよりいくときも経（へ）ぬにさぶしも世をへだてたる

にぎやかなことをこのみし君なれどわれはこもりてひとりとむらふ

(7) 平戸にて——井上孚磨先生歌碑のことなど——（昭和五十六年）

今年の夏、平戸に行つて、ずい分勉強になった。

城あとをぶらついていたら、井上孚磨先生の歌碑が立っているのを見ておどろいた。先生は亜大の教授で、憲法学者・歌人であった。私は若い頃から師事したので、歌碑の建つたことは知っていたはずであるが、実際に見るまでは、実感がなかつたのである。

歌は、碑の表裏に次の二首が、金色で刻まれていた。先生の書かれたものを拡大して刻まれたのである。

このみゆる雲のはたてに君ありと思ふ心はたのしかりけり

神と人君と民との根ざしあひまつりまつらふ国はこのくに

前の歌は、昭和三十三年新年歌会始の預選の歌で、先生は宮中に召されて歌会始に出席せられたのである。次の歌は、戦中の作とのことで日本の国がらをうたったものである。

ところで、私が平戸に行ったのは、井上先生の郷土であるということもあつたが、先生の同僚教授の松浦珪三先生の郷土でもあるところから、できたらそのお墓にお参りしたいという気持もあつたのである。

松浦先生は、魯迅・阿Q正伝の最初の日本語の訳者として有名で、鳥居竜蔵博士の北京大学教授の時代に、北京大学の中国文学の教授をしておられた、ということである。亜大の教授をしておられたが、夫人に先立たれたあと、ずっとお独りで暮して、とうとうたった一人で亡くなられた、豪傑である。松浦の名は、藩主筋の名前である。

この松浦から松をとったのが浦氏で、平戸の出身・浦敬一は明治二十二年、いまシルクロードでやかましい中ソ国境の伊犁地方に潜入しようとして、消息をたつたのである。東亜先覚者の中のそのまた先

駆者であった。

浦敬一が平戸の出であることは知っていたが、同じ頃フィリピンに渡ってマニラで病死した菅沼貞風が、浦敬一と同郷であることは知らなかった。一方は北方へ、一方は南方へ眼を向けていたのであるが、心はひとつで、しかも郷土を同じくしていたことを知って、感慨が深かった。

また、日露戦争の時、シベリヤ鉄道を爆破しようとして、果さず、捕えられて処刑された沖禎介が同じく平戸の出身であることも、平戸に行くまでは知らなかった。

遠く古代のマツラの国から、戦国時代の松浦党の血は、明治に流れ今日につづいて、人物は輩出するということを痛いほど知らされたのである。

島かげはおぼろに見ゆれ海昏く平戸港は明けなづむなり

朝北のひた吹くらしも颯々さつさつと風の音きこゆホテルの中まで

明けなづむ島山の辺にともる灯の繁しじの色色かつうすれつつ

港の口まもとと立てる灯台の消えてはともる灯の白みゆく

師とあふぐ人のみ歌の石ぶみを平戸の城の風の中に見ぬ

金色の文字にて刻める師の君の石ぶみの歌くり返しよむ

国まもるますらをあまた生みいでし平戸の港の城あとなつかし

城あとに昔を語る老人のなき師なき人をよく知りませる

なき人の生れしはここかしことぞきくがなつかし天守閣にて

お礼するすべ知らずして何もせず別れ来にけり老いませる人に

浦敬一、菅沼貞風、沖禎介、松浦先生、井上先生

(自琢—亜細亜寮誌 第十五号 五六年三月刊)

(8) 学長・太田耕造先生にささぐ、挽歌十二首他 (昭和五十六年)

危篤との知らせなりしを君すでに靈安室に入りましきといふ

なきがらに向ひまつれば胸せきてお礼のことばも声にならざりき

君が手をふれたまひけむみすまひのもの皆かはらずとおもふもかなし

あとのことみはふりのことかにかくにかたらひをれどうつつともなし

大学にもどりてくれればあなかなし半旗はたれてそよるともせぬ

ひと夜ねて覚めたる夜半のしづけきに沈む心のたどき知らずも

物思ひ寝（い）のねらえぬにおのづから窓のとばりの明けしらみくる

天地もなげくかと思ふ、時じくに氷雨（ひさめ）降りつき昼なほ暗し

いさましきみたまかけるか屋上の半旗雨風にひとりなびける

みな人のうた声のむたみたまはも天なる人のみもとへかゆく

(前夜式二首)

天にますつまなる人のみもとへとかなしみたまはかへりますらむ

大いなるみこころざしは若き人あひつきつきで消ゆる日なからむ

(理事・学長室)

太田耕造先生「略歴」解説(覚え書)

太田耕造先生の亜細亜大学設立の御精神や経営の御苦心は、我々にとつてごく身近なことであつたので、いろいろな折に、その一端について学生諸君にも語る事があつた。その他のことについては、知ることの少ない故もあつて、ほとんど語ることをしなかつた。

ところが今度、先生の御逝去に接して、学生諸君にたずねてみると、学生諸君は先生の御生涯について、亜細亜大学学長のほかは、何も知らないことがわかつた。先生の御生涯について語る資格が私にあるとは思わないが、多少お聞きしたこともあるので、その一端を述べて、学生諸君の仰いで来た太田先生がどういふ御生涯をへてこられたかを知る参考にしてもらうことにする。

太田先生の御生涯は大きく分けて三期にわけることができると思う。第一期は、大学を出て弁護士になられるまでで、云わば修業時代ともいふべき時期である。

第二期は、弁護士として社会に出てから、いわゆる終戦内閣の文部大臣として、終戦処理に当られたまでの時期である。これは、政治家としての活動の時期である。

第三期は、戦後で、戦犯容疑で巣鴨刑務所に収容され、不起訴で釈放されてから後、亜細亜大学の設立、経営に心魂をそそがれた時期である。この間、亜細亜大学の学長としてのほかに、福島県人会会長、福島テレビ会長、憲法の会会長、明治の会の代表世話人等としての、社会的、思想的御活動があり、国際的には、東南アジア香港その他から留学生の招致、東南亜細亜訪問団の団長、中華民国訪問団団長というような御活躍がある。

第一期の、言わば先生の修業時代のことについては、私は多くを知らない。先生の御自宅での葬儀はキリスト教によって営まれたが、その際、牧師の方から、先生が十五歳の時に洗礼を受けられ、聖職者になろうとされた、というお話があった。このことは、私も先生に接する機会の多かったものでも、誰も知らなかったことである。先生はそのことは誰にも語られなかったのである。その「語られなかった」ということには大きな意味があると思うが、ともかくわれわれは知らなかったのであつて、この期のその他のことについてもあまり多くを知らない。

ただ、東大法科在学中から山川健次郎総長に私淑され、親しく薫陶を受けられたということはよくお話をうかがつたし、また、先生の文章にも書かれている。山川健次郎総長は、白虎隊の生き残りで、会津武士の典型である。

太田先生は、少年時代にキリスト教の信仰に入ったが、後、御郷里会津の先輩になる山川健次郎先生の薫陶を受けられたことでわかるが、それは、新渡戸稲造、内村鑑三たちの武士道キリスト教とでも言



太田耕造先生胸像

うべき信仰であつたにちがいない。先生は興亜神社その他神社に参拝される時、本当に敬虔なお姿で拝礼されたのである。

十五歳で洗礼を受けられたというのであるから、御家庭の信仰と関係があるのではないかと思う。先生の夫人は、七年前、急逝されたが、敬虔な信者であつたことは素振りに示されず、先生のお宅をおとづれるものを誰かれのへだてなく親切におもてなしくださつた。

先生の御活躍は夫人に支えられていたのである。先生のキリスト教の信仰は御夫人の影響かと私などは考えていたが、それだけではなかつたのである。少年の時のことであつたと葬儀の折にはじめて知らされたわけである。

先生の御生涯の第三期の、亜細亜大学学長としての先生については、多くの方が語られるであらうし、『亜細亜学園の歩み』とか、『建学の精神を語る』とか、『自助協力』（学長太田耕造先生講説集）とかの書物が刊行されているから、それを読めば、辿ることができると思う。それでいま私はここでは、第二期の戦前の先生の政治家としての活動についての概略を述べることにする。このことは言うまでもなく、私が直接先生の身边にあつて見聞したことではない。しかし、この政治家としての御経験が、亜細亜大学設立の動機となつたとも考えられるので、学生諸君にも知っておいてもらいたいと思つて筆をとつたわけである。

「略歴」によると、大正九年七月、東京帝国大学法学部英法科卒業とあり、十一年、弁護士登録となっている。このまえ、先生の御友人の大野璋五先生（元本学法学部教授・前高千穂商科大学学長）にお会いした時うかがったことであるが、太田先生は第二弁護士会の創設に尽されたということである。若手弁護士として大いに活躍されたのではなからうか。大野先生になお詳しくお話をうかがいたいものである。

終戦当時自決した明朗会十二烈士の伝記『忠烈万古薫』という書物があるが、その中に、「思想的二見タル大正昭和ノ政治動向」というおもしろい附図がある。それを見ると、大正八年六月創立の「興国同志会」に、「上杉慎吉・天野辰夫・太田耕造・鹿子木員信・紀平正美」の名が見える。その系統として、「平沼騏一郎・太田耕造・竹内賀久治」の名があげられている。『広辞苑』の「国本社」の項には、連合艦隊司令長官の加藤寛治の名もあげられている。太田先生は、国本社に拠り平沼騏一郎氏を助けていわゆる「思想善導」のため国家主義運動を展開されたのである。

平沼騏一郎氏は『広辞苑』によると、「検事総長、大審院長、法相を歴任、大正十三年枢密顧問官」とある。国本社創立当時、枢密顧問官として、法曹界のリーダーであったと考えられる。

右に述べたように、太田先生はその三十歳代四十歳代を、弁護士として、同時に国本社の重要なメンバーとして活躍されたことになる。当時の先生の政治評論は『国本』に多数掲載されていることと思う。

つづいて「略歴」に拠ると、昭和十三年四月、先生は法政大学の教授となっておられる。このままでゆけば、学者としての道を歩まれたであろうが、時代はこれを許さなかった。翌十四年一月平沼内閣が誕生し、先生は総理大臣秘書官となられた。同十四年四月には書記官長（現官房長官）となられて、政

治の第一線に躍り出られたことになる。

当時は、既に昭和十一年の二・二六事件ならびに昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件のあとで、陸軍を中心にする主戦派が時代の大勢を占めようとしていた。平沼内閣の大問題は、日独伊軍事同盟の可否をめぐって展開された。一口でいえば、陸軍賛成海軍反対で、決定することができず、たしか、六月頃から八月頃まで、数十回の会議が持たれて、なお決定を見ることができなかった。

そこに、突如として——独ソ不可侵条約が締結された。反共を旗印として、日伊と同盟を結ぼうと働きかけていたナチス・ドイツがソ連と結んだのである。平沼内閣は、「複雑怪奇」の一語を残して退陣した。欧州列国の動向について批評した「複雑怪奇」の一語は太田書記官長談話の中の一句である。日本は、この言葉の真の姿に徹し切ることができずに、やがて世界大戦の中にまきこまれてゆくが、この一語は、表現力のある——思想のある政治家としての太田先生の真価を見るべき出来事である。

のち、昭和二十年四月七日、鈴木内閣の文部大臣に就任し、終戦をむかえて、辞任するまで、約六か月は、時間的には短いが、日本史上未曾有の激動期に、先生は政治家として必死の活動をされたのである。

昭和四十年「勲一等瑞宝章」の表彰を受けられたのは、右の御活動が主たるものであったと思われる。終戦時の先生の活動については先生御自身が、「終戦事情を究めて立ちあがれ」（『建学の精神を語る』に掲載）という文章の中に語られている。その間の御苦心については、当時の文部大臣秘書官小林行雄氏（のちの文部次官）が詳しく知っておられるとのことである。

終戦に際し発せられた文部大臣談話は、青年学徒に対する激励の辞であるとともに、先生自身の御決

断の表明でもあったのである。ここに亜細亜大学創立の原点があるとみてよい。

(理事・国文学・人間と環境・日本思想史・教養ゼミ担当)

故太田耕造先生の埋葬式に参列して

埋葬式の日は、よく晴れたが寒い日だった。多摩墓地の裏門のすぐ近く、二十二区一種という地区に、質素なお墓が建っている。先立たれた夫人のために建てられたお墓で、碑面に「太田家之墓」と書かれている。沢牧師さんのお話によって、平沼騏一郎元総理大臣の筆になることを知った。太田先生の師事した方にふさわしい寛厚剛直な筆跡である。

墓前に置かれた御遺骨を前にして、讚美歌、聖書、式辞、祈禱、頌栄、祝禱のことばがしめやかにさげられた。松風の音がさわやかにひびき、讚美歌の書かれた紙の上に、枯れた松葉が落ちて来ていよいよお別れだという気持ちも悲しかった。

献花して、あとで見ると、太田先生のお名前は、墓石の側面に、夫人と並んで小さく書かれてあるだけだった。若くして、会津から東京に出て来て、一家をなして、大臣までなされたが、お子さまが無かったから、一代限りの太田家として、ここに眠られたのだな、という感想だった。大学に近い多摩墓地には、藤原先生も眠っている。ここでしずかに大学のゆくえを見守っておられる——その何とも言えぬ敬虔な、慎しみ深いお心が、いまさらのように仰がれたのである。

そして、その翌日、御遺族から、御自宅のすべてを大学に贈るといふ御遺言を承ったのである。簡素

なお墓のたたずまいに比べて遺贈されたものの大きさを思わずにはいられなかった。

先生は、御自分のためには何ものこすことなく、持てるもののすべてを——いのちも財産も、大学に捧げつくされて、先生がこの世を去ってゆかれたということが、私には痛いほど感じられた。そして、実にいさぎよい偉大な御最後だと思った。

(理事・学長室)

(9) 学長・早川崇先生の急逝に憶う (昭和五十八年)

亜細亜大学の理事会が早川崇先生を学長におむかえすることを決議したのは、一年前のことであった。しかし、当時、早川先生はわれわれ亜大に勤務するものにとつて全く未知の人であった。

ちょうどその頃、亜大教授の小田村寅二郎先生と早川先生が、昭和十年の一高三高戦・応援団事件の当事者として、往時を偲んで会談した。三高応援団事件の責任を一身に荷って退学処分を受けた三高名士の早川さんと、一高の駒場移転の折の自治寮委員長で後のいわゆる小田村問題で東大法学部の退学処分を受けた一高名士の小田村さんが、約四十数年を経て奇しくも再会会談した、というのは、当時を知るものにとつてまことに心あたたまる話だった。

この話はわれわれ当時の一高の卒業生にとつて、敵ながら天晴れだった早川応援団長の健在ぶりに、人間的な信頼を思い起させてくれたのである。そこには、戦後の学制改革によって抹殺された、旧制高校の「魂」の「友情」が生きていたからである。

早川さんが学長就任を前にして学園部長会議のメンバーとはじめて会談した際、早川さんは、一高三

高の比較論をやつて、大いに三高魂を駆歌した。亜細亜大学には一高出身者の多いことから、「三高魂」で教育していると思われたのではないかと思う。これは私も一高卒業生にはやや耳の痛い話だったが、しかし、私など、亜細亜学園の寮生活を基礎としてきた「自助・協力」の教育精神は、旧制高校の「自治と友情」とに通ずることを信じていた——初代学長太田先生は、四高出身である、——ものには、まことに力強い話であった。

亜細亜学園は、ここ二、三年、太田先生の病中のこともあつて、足踏み状態をつづけてきたので、ここで早川学長を迎えて飛躍的な発展ができるかも知れない、というのが、私どもの率直な気持だった。案の定、四月一日就任以降、早川学長は精力的に活動をはじめられ、アジア国際農林水産学部の計画、韓国との教育文化交流、バングラデシュからの留学生の招致等等、さまざまなビジョンを提案し、その予備調査にかかられたのである。

一方、教員、職員、学生との交流をはかられるとともに、同窓会との親睦をもすすめられ、新学長のもとに学園が一体化しつつあつた、その時に、病に倒れられてしまったのである。しかし、私どもは、病氣快癒を信じて、来学年度には、必ずや当初の活力を発揮していただけるものと信じていた。

学長危篤の報で、深夜、東京医科大学の病院にお見舞して、控え室に控えていた時、五島理事長、中曾根総理、三木自民党顧問のかたがたが、かけつけてこられて、一様に深い憂愁に沈んでおられるのを見て、早川学長に寄せる現代の国のリーダーたちのあつち信頼を今更ながら知らしめられたのである。われわれには夢のように見えた早川学長のビジョンも、この政財界の信頼をもつてすれば夢ではなかつたであろうとも思われた。

学長として本当にこれからという時のことで、その急逝が残念でならない。短い期間ではあったが誠心誠意、学園のために尽力されたお心は、学園の歴史に、火花のようなページを誌されたのである。

早川学長のかかげられたビジョンは直ぐには実行できないが、そのアジアに寄せるお志は、太田初代学長につぐものとして、学園をあげて継承すべきものであろうし、中でも先生が生活をかけられたパングラデシユとの友好交流の仕事は、何とか実現に結びつけて先生を記念する仕事とさせていたいただきたい、と思う。

五島理事長の親友で、生年月日を同じくするという不思議な縁をもつ早川学長の学園葬が、太田初代学長の学園葬と同月同日に、自由民主党との合同葬として営まれるのもまことに不思議な縁で、人間の運命とか使命とかについての深刻な印象を与えられるのである。

(教養部教授・学長室)

(10) 稲葉昌幸教授・挽歌献詠(昭和五十八年)

挽歌献詠

うすく目に涙にじみてうなづきし君のいまはのおもかげかなし

思ひきやわれより若き君にしてかくはにはかに世を去らむとは

こころざし実らむとするきはにして世を去りましし君ぞかなしき

君はやくタイのチェンマイおとづれてめづらしき話もたらしきたまひき

さきがけてアジアにかけし雄心の消ゆと思へやことならずとも

四十とせのながきにわたるまじはりのその折々の心に浮ぶ

君ゆきてかへらぬ今宵の望月にみ魂かけると思ふかなしき

(11) 浅見方舟教授追悼（昭和六十年八月）

夜道ゆくわが目の前に一ひらの青葉落ちたり何のしるしぞ

自転車を駆りて大学に通ひるし友のををしき面影は顕たつ

昭和五十八年二月二十八日

けふあふと思ひし友のけふのまにいのちうせむと誰か思ひし

あまりにも突然の死を前にしてわれら言なくただ嘆くのみ

わがあとのことたのめるよき友のわれより先にみまかりましき

先立ちし友らを思ふこの夕雲にさす陽の色もさびしき

心しるむかしの友のつぎつぎに世を去りますがかなしかりけり

(12) 木村肥佐先生の文章（追悼記・平成二年）

一

最近、と云っても一月くらゐ前になるだらう——人にすすめられて、石光真清の手記といふものを読んだ。四巻一気に読んで、久しぶりに読書の感動を満喫した。

石光真清といふ人は、明治元年熊本に生れて、神風連の乱、西南の役などを少年時代に体験する。元熊本藩士の父は、明治初年の国粋派欧化派の対立に際して中立的立場をとった。真清はその二男で、兄は実業に就くことになり、エビスビールの創業に当るが、本人は弟とともに軍人を志願して幼年学校に

入り、陸軍軍人となる。ロシア語を勉強して、黒龍江沿岸のブラゴエチェンスク（満州の黒河の対岸）を中心に、諜報活動に従事するが、やがて、軍務を離脱して、諜報ならびに謀略活動に従事するやうになる。

その間、ロシア人、中国人、満州馬賊とその日本人妻、大陸浪人たちとの濃密な交わりがあり、日露戦争に当っては、軍籍に復し、第二軍黒木大将の幕下に奉公する。

日露戦争後、三たび大陸にわたって、実業に当るが、挫折して帰国し、東京世田谷の郵便局長となり、しばらく平安な生活を送る。大正初年の世田ヶ谷郊外生活の描写は名文中の名文である。しかしまた、欧州大戦・シベリア出兵の前に、呼び出されて、さきの黒龍江沿岸の諜報・謀略活動に従事する。この頃、陸軍は、日露戦争当時のやうな緊張感を喪つて、石光中佐は、事志と違ふ破目になり、ロシア人ならびに在留日本人の信頼に背く結果となつてしまふ。

この間に記された壮大な手記は、著者の死後、はじめて御子息の手で整理されて、昭和三十年に日の目を見たのである。四巻あつて、「城下の人」（熊本城下の人の意である。西南戦争）「曠野の花」（日露戦争前の黒龍江沿岸における活動、「花」といふのは、馬賊の妾となつた日本人女性を名付けたのである）「望郷の歌」（第二軍司令部付副官としての従軍記。中に親友橘少佐の戦死の追悼をふくむ。やがて凱旋、失意の道、三等郵便局経営）「誰のために」（大正六年ロシア革命後シベリヤに渡り諜報謀略活動に従事した苦闘記、大正十二年帰国）

明治から大正にかけて日本の国のたどつた運命・歴史が、著者の生涯の浮沈にそのままあらはされてゐて、さながら明治・大正史そのものである。明治・大正の歴史は、教科書風のものはいくらもあるが、

血の通ったものとして、こんなスバラシイ本はじめて見た、といふのが、私の読後の感懐であった。いったい誰がこの本を推挙してくれたのか？、さう思つて、二、三問ひあはせた結果、それは木村肥佐先生だといふことがわかつた。

多少予期しないこともなかつたが、やっぱりさうか！といふ感じがした。それは、この石光真清の生涯と木村先生の生涯とがよく似てゐる、ことばかりではない、その文章の無私の力づよさが私には同質のものに思へたからである。

私は、木村先生にお会ひしたのは、先生が亜細亜大学のモンゴル語の講師になられた時である。しかし、木村先生の真価に打たれたのは『チベット潜行十年』を読んだ時である。早速書評を書いた。読み返してみるとかう書いてゐる。

「木村肥佐先生の眼力は、非常の際にあつて、ほとんど無心に近く働らいている。それが文章を美しくして、文明人の訪れることの稀なこの地方の真実をありのままに伝えてくれるように思われたい。ここにはムダな自己主張がない。頭のさがる文章である。」

そして、テンゲリ沙漠、青海（グフノール）ツァイダム娘、ラマ老僧、ラサ（チベット首都）、ゼブラ峠を書いた木村先生の文章をかかげたのである。この文章が、どれほど私の心をひきつけたか、そのところとともに。だから、その後、私は木村先生を信奉して、モンゴルのウランバートルの町中や、バングラデシユのダッカの町の雑踏の中までお供できたのである。木村先生についてゆけば安心！と思つて、云はば、文明の果つるところについてゆくことができた。

木村先生がどこからそんな文章の力や生き方の骨を学ばれたのか、——そんなことはあまり考へな

かった、それはただ「チベット潜行十年」の非常の経験がさうさせたのだらう、と考へてゐた。それ
ちがひはないのだが、今度、石光真清の四部作の自伝を読んで、さうしてこの本を木村先生が推挙して
をられたことを知って、私は、木村先生のすぐれた読書眼に改めて敬意を表するとともに、木村先生の
先輩をここに見たやうに思へたのである。石光真清は木村先生の同郷の先輩でもある。

木村先生が亡くなつて、幾月か経つたが、石光真清の本を読んで、また木村先生に会つたやうに思つ
た。石光真清に木村先生が重なつたのである。云つてみればそれは、人知れず国のために無私の努力を
つづけるますらをのかなしい姿である。

二

木村先生のお仕事といへば、『チベット潜行十年』そのものが、戦後の日本というか世界に、未知の
世界を紹介した、といふ点で偉大なお仕事であるが、それをもとにして、チベット、モンゴル、さらには
インド、ネパールの真の姿を日本に紹介したといふことがあげられると思ふ。それも、普通に「紹介」
といふ程度のものでなくて、国際交流の基盤を作つたことである。もちろんそれは一人の力で出来るこ
とではないが、モンゴル人民共和国との交流が早く出来上つたことのおかげには、木村先生とモンゴル学
者との交際があつた、と私には思へる。

チベットとの関係についても、ダライラマ殿下の来日、訪米等のおかげには、やはり木村先生があつた
のであらうと思ふ。

「訪米」といふ点を不思議だと思ふ人は、木村先生が戦後、アメリカの民間情報局に勤務したことを
思ひおこしてみればよいのである。モンゴルやチベットについてアメリカは木村先生の知見を必要とし

てゐたのである。日本にドライラマ猊下が度々来られたのは、これは木村先生と猊下との交流があつたうへに、ペマ・ギャルポ氏が（二、三カ月前までチベットの駐日代表の役職にあつた）木村先生を親とも慕ふ愛弟子であるからであらう。

亜細亜大学の西ワシントン大学との交流も、その一番はじめは、同大学のモンゴル研究学者ヘンリー・シユワルツ教授と木村先生との交際からはじまつた、と言つてよいのではないか、と思はれる。いま亜大の交流は、西ワシントン大学一校にとどまらず数校に発展してゐる。

かういふやうに、木村先生の国際交流は、その個人的交際、信頼をもとにして、国や団体の交流へと発展してゆくのである。

モンゴル・チベットの紹介、と言つたのは右のやうな意味で、紹介からはじまつて国際交流へと発展させたのである。

そのもとは、木村先生の外国語の習得がある。英語・モンゴル語・チベット語・中国語——そしてウイグル語へ向つて、そこで木村先生は倒れたが、すべて相手国の言語を駆使して語り合ふところから出発してゐる。

木村先生とさうした外国の人との会話の様子を脇で見てゐて、本当にスバラシイと思つたことが何回かある。

北京の宿泊先のホテルの前でのことであつた。我々が自動車で帰つて来て（十年ほど前のこと、北京では外国人だけタクシーが使へた）ホテルの前につくと、そこで、アメリカ人と中国人とが大声で喧嘩をしてゐる。いまにもなぐり合ひになるのではないかとハラハラしてゐると、木村先生が仲に割つて入つ

て、何かペラペラ叫んでゐるうちに、喧嘩がをさまつてしまった。

モンゴルのウランバートルの大学で、モンゴル学者との会合を持ったとき、木村先生がラマ僧の学者と実に親しく話してゐた姿も忘れがたい。ガンダン寺の中まで案内してくださった時の木村先生はラマ僧のごとくであつた。こんなことはいくらもあるが、木村先生はすごい人だな！とつくづく思ったことの二・三をあげてみる。

北京に行った時、北京の友誼商店——外国人に品物を売る店——に、スター・サファイアを売りに行く、という。そんなことをしたらつかまつてしまふんじゃないですか！と私が言つたら、大丈夫！ついてらっしゃい、と云ふ。私には、生れて初めて手にして見る本物のスター・サファイアで、いくらするか見当もつかない。それを持って、木村先生は、たしか絹の布で包んで、平気な顔をして、ヒスイ売場の係の女性に差出したものである。どうなることかとハラハラ見てゐると、それはまた、蛇へびの道はヘビといふのか、相手を見るところなのか、相手の女性は少しもさわがず、少しお待ちください、とかいつて奥に消えてしまった。しばらくして出て来て、明日の何時にもういち度お出でください、と、言つてスター・サファイアを返した。

翌日はついで行かなかつた。話は成立しなかつたらしいが、私には驚異であつた。十年前のことです効だと思ふので書いた。

北京からウランバートルへ汽車で行つた時、中国・モンゴルの国境の町・二連の駅で、軌道の関係で汽車の車輪を交換する、その間何時間かあるので、外へ出て町にも行つたが、その折、レールの間にヒスイのあることがある、といふので、探してください。そして拳大の青い石を探してくださいだったので

ある。これは、私は、木村先生の記念として大切に保管してゐる。ヒスイなら大変だが、木村先生はヒスイとは云はれなかつたが、ヒスイに似た原石であることにちがひはない。臘石のやうでもあるが、日本のヒスイに比べて中国ヒスイは軟玉であるから簡単に否定はできない。いつか私はこれで曲玉を作りたいと思つている。ヒスイの初歩も、木村先生から勉強した。ともあれ、二連のレールの間の石ころの中から、ヒスイに似た石を見付け出すなどといふ芸当を、誰ができるだらうか。その地を知悉してゐる人の仕事である。

三

しかし、木村先生の事業といふなかの最大のものは、ペマ・ギャルポ君、鯉淵信一君はじめ、何人のすぐれた後継者たちを遺したことだらう。

木村先生の葬儀に参列してゐて、両君の弔辞を聞きながら、つくづくさう思った。

木村先生が最後に入らうとしたウイグルの人の中にも、両君たちに似た木村先生のお弟子さんが出てくるのかも知れない。

ダライラマ猊下のノーベル賞受賞を木村先生は知ることができたかどうか、永遠の謎ではあるとしても、その遺志はペマ・ギャルポ君に伝えられて、現存するのである。

木村先生のモンゴルにかける思ひの一端は、いまモンゴルの「シネチレル（刷新）」となり、鯉淵君のゴルバンゴル運動（チンギス汗陵探索）となつて、進行してゐる。

最近このお二人の書いたものを読んで、つくづくさう思ふ。

それから、木村先生は、日本の古代史に興味を持つてゐて、いろいろの論文を紹介してくださった。

これは私は多少意見を異にしたが、日本の古代史に興味を持ってゐるといふ点で近しい思ひがした。日本刀についての趣味の実際は知らないが、日本刀に興味を持ってゐる点では、私も同じで、これも近い感じがしてゐた。

もっと長生きされるところだと思つてゐたが、あつというまに亡くなつてしまつて、残念でもあるし、御遺族のお心を思ふと痛惜にたへない。

私ももう余命を数へる年になつたので、死といふことを日々おもふやうになつたが、人類といふ宇宙唯一の生物の長い長い生命の進行の中で人間の出会いといふものは、実に不思議なものといふほかない。木村先生はもちろんわれわれの心の中に生きてゐるが、それは、はるかなはるかな世界のやうにも思へるし、また私の心の中といふすぐ近くであるやうにも思へる。茫洋たる思ひである。

第八編
書評集
(主として大学関係)



第八編 書評集（主として大学関係）

- (1) ユージン・ライオンズ『ソヴィエトの神話と現実』 (2) 岡本良知(本学教授)・高見沢忠雄共著『南蛮屏風』 (3) 梶村昇教授『法然』(角川選書) (4) 聖徳太子親書『法華義疏』 (5) 「聖徳太子及び二王子像」と『法華義疏』 (6) 古川哲史教授著『日本の求道心』 (7) 国民文化研究会『日本への回帰』第十集 (8) 「信することと知ること」(小林秀雄著『考えるヒント3』) (9) ウィルヘルム・ヴントとマクス・ヴント(『ブリタニカ』) (10) 木村肥佐生先生著『チベット潜行十年』を読んで (11) 新版『ブリタニカ』二題 (12) 林文月教授『源氏物語』(完訳) (13) 下島連教授『エーゲ海からテムスのほとりへ』 (14) 新刊『実りある教育を』 (15) 小田村寅二郎教授『昭和史に刻むわれらが道統』 (16) 宮脇昌三教授『権兵衛峠』 『井月真蹟集』 (17) ホイットマン『草の葉』第三版 (18) 下島連教授『ケルティック・フリンジへの旅』—西洋文学の「奥の細道」 (19) バーバラ・ロビンソン画集紹介 (20) 下島連教授『遍歴—歴史と文学の間』出版祝辞(昭和六十年) (21) 各国歴史教科書と神話—名越二荒之助教授『世界に生きる日本の心—二十一世紀へのメッセージ』にふれて (22) 『古事記』の外国語訳

(1) ユージン・ライオンズ『ソヴィエトの神話と現実』（昭和四十五年）

ソ連の現実を描く

ユージン・ライオンズ原著小穴毅訳『ソヴィエ

トの神話と現実』。原名は Worker's Paradise
「ソ」 とあるから、「失われた労働者の天国」とい
う意味で、「労働者の天国」と銘打って建国したこ
ソ連が、天国と似ても似つかぬ世界を現出したこ
とを書いている。副題が「共産主義五〇年のバラ
ンスシート」とあるとおり、ソ連革命建国以来五
〇年間の歴史がつぶさに描かれている。内容は、
マルクス・レーニン主義の標榜するところと違っ
てソ連の現実がどんなにみじめなものであったか
を、実証的に説明している。

私なども、学生時代に、マルクス主義的計画経
済が社会主義を実現する方途であると考えたこと

がある。経済学もろくに勉強しないでそう考えた
のだからお話にならないが、そんな風な考え方を
するのは私ばかりではない。

社会主義の“悪夢”

資本家、金持は利潤追求一点張りで、貧しいも
のを支配し酷使する。金で政治も道徳も破壊する。
そんな人間をそのままにしておいたら、人生は闇
になる。現に闇だ。国家も亡びてしまう。よろし
く、金持から金をとりあげて、各人がその労働に
応ずる報酬を受け、誰からも支配されない自由の
世界を生きていることができるようにしなければなら
ない。利潤を追求するようなことはやめて、必要
なものが必要なだけ作るようにしなければならな
い。国の財産は平等に分配して、お互いに侵すこ

となく侵かされることもなく、生活するのである。ざつとまあ、こんな夢を抱いて、そのためには、金持の手から権力を奪い取らねばならない、それが社会主義を実現する道であると考えてるのである。

“自覚のない理想”

なくそうとするのでなく、欲望の働かない世界を作ろうとするのである。人は悪を忘れることになる。

いま考えてみると、右のような考えには大きなまちがいがあることがわかる。簡単に言うると、右の考えの中には、人生はこれこれでなければならぬ、という考えが強く、また、そのようにできる、つまり社会とか国家とかを自分の考えるように変革できる、という考えがある。頭の中にえがいた理想のイメージというものにあわせて、社会とか国家とかを変革しようというわけである。ところで理想のイメージというのは、現実の人生の中の悪と思われるもののない世界をいうのである。人間の欲望は、自己保存につながるもので、それは悪いものであるとして、その欲望のない世界を考えるわけである。そのために、自分の欲望を

つまり、悪のない世界になるのである。なぜなら、現実の人生の悪は、社会の罪であるから、社会が変れば悪はなくなる。われわれが悪をなくそうにももう悪をすることができない世界ができるのである。自分が悪人であることを気にすることはない。それは自分が悪いのではない。社会や国家が悪いのである。自分が悪いなどと考えるのはセンチメンタルである。——こう考える。

自分の頭に描いた理想のイメージに、自分を変身できるということは、その人間に自信を与える。社会主義の活動家が、文字通り活動家でありうるのは、この自信にもとづく。これは別の言葉でいえば、無反省、傲慢というものである。人生から、

また自分の心から悪をとり去ることはできない、自分は凡夫である、という実感があると、人生がイメージ通りになるという自信は生れない。自分の力に応じたイメージを作りだすようになる。悪はいつでも自分の心の中にあると思えば、社会や国家の組織が変わっても、自分は悪人であることに変わりはないはずである。これが自覚である。

悪のない世界を描くことはやさしい。共産主義を頭の中で描くことはやさしい。しかし、それを表現できると考えることは、大きなあやまりで、要するにこれは自覚がないということに帰着する。自分でおれは聖人だと考えているものは聖人にもっとも遠い存在である。理想のイメージに社会国家を変革しようと考えることは、自己を神と化すことに他ならない。

真理と信念はちがう

マルクシズムは絶対の真理だという。絶対の真

理などというものは、抽象的な論理方式にしかない。一十一二というようなものを絶対の真理というのは、マルクシズムのよくいう必然性ということと同じで、人生に関して絶対の真理を把握したと自称するものは例外なく間違っている。絶対の真理をつかむことができないということが絶対の真理なのである。われわれには各自、信ずるところがあるのみである。これはめいめいの信念で、普遍の真理ではない。ましてや、絶対の真理などといえるものではない。

人生社会国家人類の真実は、何よりも現実の人生をありのままに観察することからはじまる。人生の観察とは人心の洞察であるが、これも他人の観察の基準になるのは自己の心情であるから、自覚・反省が思考のもととなるのである。人々、己れを知る道から出発せねばならぬ。それは他人と比較することと同じでもある。表現は自己反省で、他の観察は比較である。

まちがっていた利潤追放

利潤は悪である。こう考えて利潤を排除したソ連共産主義社会の建設に、餓死者五百万が生れたという。ソ連が、革命以来五〇年を経て、利潤とか市場とかを考えなくてはならなくなったのは、最初の考えがまちがっていたからである。そのまちがいの根本は、人生とか社会とか自己とかいう人間の真実をありのままに認めることを怠ったところから起ったもの。

むかし私は山本勝市博士の「計画経済の根本問題」という書物を読んで、そのなかでマルクス・レーニン主義にもとづく市場否定の計画経済が、国民経済を崩壊する過程を知って、学問のまちがいが恐ろしい結果を生むことを知った。山本博士の説は有名な経済計算の問題の指摘で、ミーゼスとかハイエクなどの説とともに、マルクシズムの有力な経済学的批判である。

この批判の根本は上述の思想上のあやまりの指摘で、経済生活の事実の認識を怠って空想的な計画経済をあこがれた結果のまちがいを指摘したのである。最近ソ連から帰って、ソ連における価格問題についての研究を発表した吉田靖彦氏の論文によると、コンピュータも遂に市場による価格形成に代ることができなかつたことを書いている。これはユージン・ライオンズの説を裏づけるものである。

自由も個人もない

マルクシズムは科学的真理であるとうぬばれたが、実はマルクスのうぬばれにすぎなかつたので、世界、国家の事実は、マルクスの予言のとおりにならなかつた。それどころか、プロレタリアの経済的な向上を約束したマルクシズムの経済政策は、逆に、共産党員以外のすべての人間のプロレタリアート化に終ってしまったのである。貧しき

者の解放を謳ったその革命は、すべてのものの束縛に終ってしまったのである。中国の共産主義革命が如実にこれを示している。テレビなどで見る中国大衆の大集会に、老若男女無数の人々が、手に手に毛語録をかざして、毛主席の万才を叫んでいるのを見ると、ヒトラーに率いられたナチオナーレ・ゾチアリスムス即ちナチスの大集会を思い出させる。そこに自由な個人はいない。つまり

共産主義によるプロレタリアートの解放は、共産党員以外の国民のプロレタリアート化に他ならぬことがわかるのである。
共産主義実施五十年の歴史の事実を究めて理論の是非を検討しなければならぬ。それが現代の知識階級の仕事である。

(教授、教養部長)

(2) 『南蛮屏風』(岡本良知+高見沢忠雄共著) (昭和四十六年)

最近古本の値段が高くなって明治・大正の書物でも随分高く売買されているらしい。戦前の書物でも、すぐれた書物は、書店の古書目録に載せられて、高い値段がついている。職業柄、古書目録には目を通すようにしているが、そこでよくお目にかかるのが岡本教授の著書である。戦前の書物であるから当時の定価は何円かのものであろう

が、それがいまは何千円何万円という値段がついている。

学者の価値が、古書の値段できまるわけではないが、岡本先生の昔の書物にとってもなく高い値段がついているということは、それだけその書物が求められているということだろう。いまでは、書店には「岡本良知」という名はゆきわたっている

だろうが、この岡本先生が、本学の教授（ポルトガル語・東西通商史担当）の教授だと知つたら、学生諸君はおどろくのではないだろうか。

たしかに、岡本先生は、学内より学外で有名だし、学外でも国内よりも国外で有名の方のようである。ともかく、国際的に著名の東洋学者である。

その岡本先生が最近『南蛮屏風』という大著を出された。定価四万八千円。鹿島研究所出版会刊行の豪華本である。

先生の解説によると、はじめ、海外で刊行が計画されたが、日本で画かれた「南蛮屏風」の美術印刷には日本の技術をもって当りたいということで、国内で刊行することになったとのことである。日本印刷写真株式会社による美しい写真版の「図録」と「解説」との二冊から成っている。「南蛮屏風」そのものの将来の散逸をおそれて、「この五十数年間に発見された南蛮屏風のすべてを集め」て図版に残されたものであるという。いまま

でに散逸したものであることを惜しまれての出版であった。単に豪華を求めてのものではない。国内外の「南蛮屏風」が集められているので、内外学会に裨益することはいうまでもあるまい。素人にも当時の風俗を觀賞することができてありがたい。

南蛮屏風に画かれた雄渾な波の絵で装幀した大冊は、それ自体で美術出版だが、「図録」の見開きにはこう書いてある。

「安土桃山時代より江戸初期にかけて発達した風俗画は、時代の風潮を反映した生活の種々相を濃彩をもって描いている。桃山時代に現われた南蛮屏風も、時代の流行に応じて制作され、画家・画風も一般風俗画に共通した、風俗画の一種である。しかし南蛮屏風は、一般風俗画に比べると、あまりにも特異な点が多い。その画題は日本人の生活ではなく、長崎における南蛮人の風俗である。そこに描かれるのは、世界一

を誇ったポルトガルの南蛮船であり、それより上陸する異国人たちである。云々」

「図録」の「第一図」は、大阪南蛮文化館蔵の南蛮屏風の左隻で、表紙装幀の青い波を含むもので、解説によると画家は狩野光信系とのことである。ひるがえる波の姿が雄渾で、安土桃山時代のたくましい精神を感じさせられる。また、南蛮船から降りて長崎の町を歩くポルトガル人や、そのお供をしている黒人たちを、町の商家の暖簾(のれん)のかげからのぞき見している日本人の女の姿や顔たちなど、実に生き生きと描かれていて見あきない。

最近国立博物館で、海北友松や曾我直庵の屏風絵を見て、魅せられたが、勿論作風は違うが、通う精神が感じられて、楽しい。博物館などで、原物を観られるのはありがたいが、ぼくらのような素人は、ただガラス越しに見るだけで、ここはと思うところを近づいて見るのできないのが歎

きだ。それからすると、こういう写真版はともありがたい点がある。一図一図丹念に見ることのできるのがあるがたいのである。

解説はすでに定評のある綿密な確実な研究によつてあとづけられていて、安心して読むことのできる日欧交渉史でもある。ヨーロッパというところ、どうもぼくらの頭には、すぐ英独仏が浮んできて、大航海時代のポルトガルやオランダやスペインを忘れがちである。先生の解説は、平易なことばづかいでアジアに活躍のかけをおとしている。ポルトガルやスペインとの交渉をかえりみさせてくださる。解説の文章を読みながら、私はふと万国博覧会のポルトガル館を想った。これにも岡本先生は参画された由である。それから徳島の墓地に眠るあの不運な日本学者・モラエス(ポルトガル人)のことを。

批評などとは勿論、紹介とも何とも言えない素人の書評だが、この大著の刊行を知っていただき

たいと思って一筆した次第である。図書館にあるから、学生諸君もやがて見せてもらえるだろう。

またこれを機に、岡本先生の諸著を読む学生が出てくれればなお幸いである。

解説目次は次の通り。

○南蛮屏風の考察（岡本良知）

第一章 長崎とポルトガル船

第二章 ポルトガル風俗

第三章 南蛮屏風の制作

第四章 南蛮屏風画面

終章 風俗画としての南蛮屏風

○美術品としての南蛮屏風（高見沢忠雄）

○南蛮屏風解説（高見沢忠雄）

The Asia（四六、二、一五）

(3) 梶村昇教授著 『法然』（角川選書）（昭和四十五年）

末法の世に生まれた法然

この本を開くと、巻頭に大阪一心寺の法然上人画像が掲げられている。堂々とした柔和な法然の容姿が心をひく。

第一章の書き出しは、「誕生寺紀行」で、著者が法然の誕生の地に建てられた寺を訪ねた紀行文ではじまる。

「法然が父母追孝の料のためにみずから彫った自像を、弟子の熊谷次郎直実が法然に代わってこの地まで背負ってきて、この寺を建てたというのである。それが真実であるかどうかは別として、武骨の熊谷が師の法然の等身の坐像を背負って、京からはるばる歩いてきたことを想像すると、師を思う熊谷の心情が偲ばれて心打たれるものがある。と同時に、なんとなくくほほえ



法然上人画像

ましく、ユーモラスな感じがする」(一五頁)とある。つづいて著者はこの木像に加えられた後の弾圧を述べ、法然自身の誕生を語る。

九歳の時、父時国の非業の死に逢って菩提寺に入り、十三歳の時に母に別れて上京して延暦寺に入る。そのあたりを著者は豊富な資料を検討しながら、同時に法然の心の悲しみをたどりながら語っている。

私は法然上人については、浄土宗の開祖と知っているのみで、こんなことも初耳なので、つづく法然上人の出家、修業、開宗という信仰の開展を述べる著者の説明はすべて耳あたらしい。

歴史上の人物のつながりも解明

法然上人が、法難によって土佐の国に流された時(この時弟子の親鸞上人は越後に流された)。

かつての摂政藤原兼実は、法然の身の上を心配して病気になるまで死んでしまう。兼実の弟の慈円の書いた「愚管抄」にそう書いてある。(一九七頁)——こういう著者の指摘は、読者の心をめざましめて、法然上人の生きていた当時の人々の心の交わ

りに、さそいこむ。兼実という当時の大政治家と
慈円という大歴史家、その生きた関係をよみがえ
らせてくれるのである。

また、鎌倉三代将軍源実朝に仕えて親交のあつ
た塩谷朝業が、実朝の死をいたんで、出家したこ
とは、前から知っていたが、その朝業すなわち（宇
都宮）信生法師が、嘉禄三年の法難の折に、法然
の遺骸を守る警護の弟子の中にあり、兄蓮生（か
つての武将宇都宮頼綱）とともに「法衣に軍装し
て遺骸を守っていた」（一七四頁）とあるあたり、
やはり当時の人々の信仰のつながりに思いをはせ
しめられるのである。歌人將軍実朝と、その近仕
であった典型的鎌倉武士の信生法師と、その兄で
宇都宮氏の棟梁であった蓮生法師と、法然上人と
のつながりが、生き生きと思ひつかべられる。と
いうより、ひとりひとりばらばらな人物として頭
にある歴史上の人物の心のつながりを指摘するこ

とが、生きているという実感をもたらすのであ
らう。

法然を生き生きと語る

著者は文中に桑原暁一氏の「日本精神史鈔」（国
民文化研究会発行）の文章をたびたび引用してい
るが、桑原氏の本の中に感じるあの不思議な魅力
の一つ——歴史上の人物相互の心の交わりの追跡
は、この本の中にも、法然上人を中心に、生
き生きと描かれている。

われわれが今日いろいろな思想を抱き、さまざま
まなくらしを送り、悲喜明暗の人生を送っている
——それは法然の時代でもそうであった。法然は
その中で、ともに救われる道を求めてそのために
は死をも恐れなかった——そのことが、本書に
よって、法然のことはを通してひしひしと身に
迫ってくるのである。

生きた思想家としてよみがえらせる

著者は日本仏教思想史専攻の学者であるから、専門の分野での新発見ともいえるべき説も含まれていて、その方面での批評は既に発表されている由であるが、その辺のことは私にはよくわからないので、私はただ一読者としての感想を記すにとどめた。

私にとってはこの本がはじめて、法然上人を生きた思想家としてよみがえらせてくれた。親鸞については既に多くの著述があつて、親鸞のことばを現代に生きるわれわれの心に親しませてくれるが、法然について、そうした役割を果してくれる書物は少なかつたのではなからうか。その意味でも世間の要望にこたえたすぐれた著述である。

読み易い文章

文章も読み易く、教義の説明もこなれている。

こうした書物にありがちな堅くするしきがないのが気持がよい。次にかかげる章名を見てもそのことがわかる。

第一章 末法の世に生まれて

第二章 出家と遁世

第三章 浄土開宗

第四章 念仏の声をひろめて

第五章 専修念仏の人びと

第六章 法難と示寂

第七章 信仰を今に伝えて

ところどころに写真がはさんである。岡山の誕生寺とか空也や最澄の木像とか法然上人絵伝とか、聖覚の墓とか、直筆の手紙とか、七箇条起請文の原文とか、著者の多年の研究によるものが関係記事のあちらこちらにはさまれていて興味をそそり、理解を助けてくれる。

ともかく私は、はじめて、法然上人のことばにふれることができた。親鸞と法然との師弟のつな

がりもよくわかって、親鸞にも一層近づくことができた。歴史上の人物を生き生きと語ることができるのは、著者が現代を生き生きと生きている証に感謝する。

The Asia (四五、一一、一五)

(4) 聖徳太子親筆「法華義疏」(昭和四十七年)

聖徳太子の千三百年忌を記念して、聖徳太子奉讃会から、太子親筆の御物「法華義疏」の複製版が刊行された。昭和元年十二月刊行限定四百八十部の複製本が稀覯本となったので今度の刊行となったのである。本学図書館も一本を備えたので、一言、この日本最古の著述・書物について紹介しておきたい。

聖徳太子には「法華義疏」の他に「勝鬘經義疏」「維摩經義疏」の著述があり、合して「三經義疏」と総称する。後の二つの義疏は、宝治元年(西紀一二四七年)の刊本がもとになっているが、「法華義疏」は太子親筆の御草稿本ともいべき卷子

本四巻が現存するのである。これは、明治初年に法隆寺から皇室に献納されたもので、千二百余年にわたって法隆寺に伝えられたのである。宝治元年の刊本もこの「法華義疏」に拠ったというので、当時法隆寺に伝来していたことは確かであり、さらに奈良時代の、法隆寺の記録にも残っているの

で、伝来を疑う必要はない。「勝鬘經義疏」は、平安初期の円仁(慈覚大師)が、唐僧明空の「勝鬘經義疏私抄」一巻を入手して、持ち帰ったが、これが宝治刊本「勝鬘經義疏」と同一のものであるというのであるから「勝鬘經義疏」も法隆寺には原本が伝えられていたらしい。

法隆寺の奈良時代の記録にも残っている。「維摩經義疏」についても宝治年間の刊本以前に書写された残欠本があるというから、刊本の原本は他の二經疏とともに法隆寺に伝えられたと思われる。そこで、明治時代まで、「三經義疏」が聖徳太子の著述で、日本最古の著書であることを疑う人

はなかつた。ところが近代に入ってから、津田左右吉博士がこれに疑いをもち、福井康順博士の百行章説が出て、今日多くの学者は太子親撰を疑うに至つたのである。聖徳太子の十七条憲法もまた同じ運命をたどつて、奈良時代の作であるとする説が行なわれている。

法華義疏第一

大委上宮王秘集 此是 集非海彼本

夫妙法蓮華經者蓋是捨取方便善合一回之豐田七百近
壽轉成長遠之神藥着論通釋如未應現成也之大意者
時歎宣讀此經教誦同歸之妙因令得莫二之大果但衆生
宿煩善淑神圖根鈍之五濁節於大獄六弊獲具慈眼平不
可聞一乘回果之大理所以如乘隨時而互初就鹿苑用三乘之
分別派使咸各趣之迨果從成以未離淺平說无相勸同備致
以中道而裝駁猶以三回別果之相答育初機於是衆生應
平乘月蒙教誦行漸之益解至於王城始教大衆機辨會如
未出世之大意是以如乘即勸万德之嚴軀而具全之妙口德以

聖徳太子親撰「法華義疏」卷頭

今回の「法華義疏」複製はこの問題に対する重要資料の提出の意味もあつて行なわれたものと思われるが、同時に刊行された「法華義疏・解説」は、太子親撰否定論に対する批判を行なつたものである。内容は坂本太郎「序説」、石田茂作「裝潢」(表装)花山信勝「内容」、西川寧「書法」となつて

いる。それぞれ慎重な検討にもとづいて太子親撰否定説の根拠なきことを指摘している。

三経義疏の研究は、太子親撰の真偽をめぐって論議している段階から、その思想内容の研究にむかわねばならない。そして、憲法十七条とあわせ

て日本最初の哲学的表現として、日本思想史の冒頭にこれを置く努力をしなければならないと思う。

(The Asia 四七、一、一五)

(5) 「聖徳太子及び二王子像」と『法華義疏』(昭和四十九年)

国立博物館の法隆寺宝物館で、開催十周年記念の特別展が開催されることになった。期間は九月十九日から十月六日とのことである。『博物館ニュース』によると、ここに「御物聖徳太子及び二王子像」と聖徳太子の御自筆と伝えられる「法華義疏」とが展示されるという。

国立博物館内には法隆寺宝物館というのがあって、明治十年法隆寺から皇室に献納された宝物が展示されていて、毎週定例の曜日に公開されているが、前記の二点については、宮内庁保管の御物

中の宝物で、ふだんは観ることができないのである。(法隆寺の宝物館に常時展示されている肖像は模造品であり、「法華義疏」は複製本が刊行されていて、本学図書館にもあるが、複製本も貴重図書になっている)。

聖徳太子及び二王子像は、——いろいろな研究があつて学者の意見が一致しないようであるが——奈良時代の傑作と言われている。

聖徳太子生存の飛鳥時代につづく時代である。法隆寺の再建されたのもこの時代であると言われ

ている。そうすると、法隆寺も、太子像をもとに、聖徳太子憶念のいとなみとして、太子の薨逝後、あまり遠くない時期に、太子の御精神をあらわすために製作されたものと思われる。

宝物室の村重寧氏の解説（『国立博物館ニュース』三二八号）によると、「初唐の閻立本筆と伝わる帝王図巻に近似し」という。帝王図巻にある隋の煬帝像、唐の太宗像は、いずれも曠世の英雄を描いた肖像画の傑作であるが、その画からは絶大な権勢を握った英雄の表情が感じられる。それに比して太子像には、むしろ沈痛な凝視の表情が感じられるのである。しかもそれは、くもりのない聡明なまなざしで、太子のお言葉の「神情開朗にして小乗（我執）の凝滞なし」とのお言葉さながらの表情である。あの法隆寺そのものにある、不思議な調和と充実とが感じられるのであって、村重氏も「むしろ宗教画に通ずる荘重ささえ感じられる」と書いておられる。太子像は閻

立本の帝王図巻の肖像画に優るとも劣らぬ傑作と言えよう。とすればこれは、日本最古の肖像画の傑作と言うばかりでなく、東洋美術史上の傑作とすべきことになる。

中国史の権威の貝塚茂樹博士はかつて高松塚古墳の壁画を論じて、高句麗や唐の古墳壁画と比べてなお、より美しく感ずると書いておられたことがあった。はしくも閻立本筆と伝える帝王図巻と聖徳太子像とを比べてみて、同じような感想を抱いたので、貝塚博士の言葉を思い出したのである（もつとも帝王図巻は写真で見ると見えない）。

また「法華義疏」については、複製本の刊行のときに、前に本紙でも紹介したことがあるが、花山信勝博士の詳細な研究があり、聖徳太子の御撰であることは否定できない——と、私は信じている。また、筆体も力強くしかも清爽で親鸞の字や正岡子規などと似たところがあり、私は、太子の御自筆と信じている。しかし、学者の中には否定

説をとる人もあるので、一步譲って、太子の自撰
自筆が否定されたとしても、日本人の書いた最古
の著述にはまちがいはない。

最初の聖徳太子伝ともいうべき「上宮法王帝説」
に、太子の師であった高句麗僧惠慈が、本国に帰っ
て（六一五年）三経義疏を流伝したと書いてある
ことや、慈覚大師円仁が在唐中に唐僧明空の書い
た勝鬘経義疏私抄一卷を手に入れて帰朝したこと
などを考えあわせると、聖徳太子の三経義疏は、
遠く高句麗や唐にまで伝えられたことがわかる。
大陸や半島の僧は、おそらくそこに、聖徳太子の

独自の表現を読みとったにちがいない。

とすれば、これも、日本史上の画期的な文献と
言わなければならない。

「法華義疏」というのは、それほど貴重な書物
なのである。漢文書きの仏典だから、ガラス越し
に立ち読みできるものではないが、日本人たるも
の一度は見えておくべき書物である。こういう機
会は滅多にこないのです、学生諸君に知らせたくて
いそぎ一筆した。

(The Asia 四九、一〇、五)

(6) 古川哲史教授著『日本的求道心』（昭和四十九年）

「求道心」というなつかしいコトバと、それも
日本人の求道心を扱われたということで、まず、
書名に心ひかれるものがある。

著者ははしがきに「経済的成長が生みだしたヒ

ズミのあとに来るものは、当然、求道心の復活で
なくてはならないが、この求道心の基底には、悠
久二千年にわたる日本人の真剣な求道心の伝統が
横たわっている」と述べられ、

「この本におさめた九篇は、その『日本人の求道心の伝統』をひたすら追い求めた成果の一端で、総論的な第一章にはじまり、以下年代順に考察を盛っている」

と説明しておられる。

明治以来日本の学者はとかく目が海外にそがれつばなしで、外国語と海外事情の研究とをもって能事足れりとなす人の多いなかで、教授のような学東西にわたるほんものの学者は稀である。

「はしがき」に著者が「総論的な第一章」と述べておられる第一章を目次でみるとこうなっている。

第一章 日本倫理思想の原点

一 斎藤茂吉の「全力的」

二 吉野秀雄の「全力的」

三 高村光太郎の「純粹」と『葉隠』の「死ぬ

こと」

四 全力的の芸術としての『万葉集』と『清し』

「さやけし」

五 『古事記』『続日本紀宣命』における清明心
六 『三代実録』およびその後の「清明心」の

伝統

日本の倫理思想の原点に『万葉集』や斎藤茂吉とか吉野秀雄とかいう歌人が出てくる。また『古事記』や『続日本紀宣命』における「清明心」が出てくる。このことは私どもの心の奥深くにやどっている倫理感情というものの根源を示してもらえよう。予感をさそう。

著者はまずこのふたりの歌人の「全力的」と詩人高村光太郎の「純粹」と『葉隠』の「死ぬこと」とがひとつのものであることを説かれた。

そしてその「純粹」と「全力的」とが『古事記』や『万葉集』の中の「清し」「さやけし」というコトバに連なることを説かれた。

つまり、われわれは「純粹」に、清くさやけき境地を体験できるというのである。

このことはわれわれがめいめい自己の体験をかえりみて納得しうることである。

そして著者の次の文章は、私は何度もくりかえし読んで、本当にそうだと思った。

「そのように『清し』『さやけき』は万葉人の美的・倫理的感觉であると同時に、また宗教的・神道的感觉であつたと思われるが、むろん、これは万葉時代に突如として出現したものではなかつた。日本人は『古事記』の時代にすでに

『清明心』という語を使いはじめている。この『清明心』という概念は、和辻哲郎によれば、共同体の内部において己れを全体に帰属せしめ、なんらの後めいた気持にも煩わされぬ明朗な心境であると説明されている。すなわち『和順の心境』が清明心であるというのであるが、日本の神話には、スサノオの命が高天原に姉君の天照大御神をたずねようとして、天上の国を奪おうとする『きたない心』を疑われ、その嫌

疑を晴らすために努めたところは、自分の心の『清明』（あかきこと、きよきこと）を証明することであつたという話が伝えられている。

これを読んで、聖徳太子の「和を以つて貴しとなし、さかふことなきを宗と為せ」いうお言葉、「私に背きて公に向ふは是臣の道なり」のお言葉、三経義疏の中の「清浄心」という仏語が連想されて、目の開かれる思いであつた。

スサノオの命の「出雲八重垣」の歌、須賀の宮で詠まれた歌で、歌のはじめとして伝えられたものであるが、その時スサノオの命が「ここに來てわが心すがすがし」と述べたと伝えるのも、この清明心と全力的歌作との一致を説いたものとして思ひおこさせられた。また幸田文さんが父露伴から「渾身といふこと」を教わつたという「なた」という作品を思つたりもした。詩作と倫理思想との関連は著者が歌人であつてはじめて能くせられたにちがいないが、それにしても偉大な見識であ

る。

著者はさらに年代を追って、平安朝の「まめ人」から源義経のような「情ある勇士」「兵の道」「武士道」というふうには武士の求道心まで追いつけられただのである。そして「切腹と介錯」という武士の死にざまを論じられるあたりは、惻々として迫るものがある。

(7) 国民文化研究会『日本への回帰』第十集

—— 新人生にすすめる一冊の本 —— (昭和五十年)

大学に入った新入生が一番強く感じていることは、何でも自分でしなければならないということだろう。

高校生の時は、学校のはじまる時刻に学校へ行けば、あとは学校で決めた時間割があつて、そのまま授業の終るまで、スケジュール通りに連れて行ってくれる。

あとの時間は勉強やスポーツなどに使えるが、

また第九章の「斎藤茂吉の幸福」は、やや気狂いじみたこの歌人の言動を精細に実証しておもしろく読ませながら、その底にある茂吉の強い必死の求道心を掘りおこして、すぐれた批評になっている。——理想社刊、千八百円——

(The Asia 四九、六、五)

勉強というのも教科書中心の予習・復習が主であつて、人生問題についてどういう勉強をしたらいいのか、どんな書物を読んだらいいのかというような問題は、入り込む余地が少ない。また、何を読めということも、先生が教えてくれる。遊ぶことだけが自由意志による選択というわけである。大学はそうはゆかない。

まず時間割の決定、履修カードの提出からはじ

めて、教室へ行くことから昼食のとり方、クラブへの加入から学友会活動への参加、帰る時間まで、結局はみな自分で決めなければならないのである。何から何まで自分で決めなければならない、疲れてしまう——そういう感じがするものである。

そこで読書なども自分できめることになるが、

何を読んだらいいかわからない——悪くすると、そんな状態で四年間経つてしまう。教室で休み時間に漫画を読んでいても恐らく誰も注意しないだろう。ヌード写真の載った週刊誌を見ていてもとがめるものはあるまい。何を読んでも自由である。大学の教師も、自分の授業に関しては、これを読め、というすすめ方はできるが、一般的に人間の生き方とか学問の本質についてのことになる、これを読んでみなさいということが何となく言いにくくなっている。

そんなことで、大学生の読書の選択は一般の流りにこれしたがうということになる。つまり

ジャーナリズムが大学生をみちびくという結果になるのである。

ところが現在、心ある人はマスコミに不信感を抱いている人が多い。そうした人の目から見ると、大学生の読書はとても危く見ていられないのである。

と、こんな前置きをして、私は新入生諸君に一冊の本をすすめたい。また父兄諸氏にもすすめたい。それは『日本への回帰・第十集』という本である。マスコミにはのらない本だが、既に定評のあることは「第十集」であることで想像がつくかと思う。社団法人・国民文化研究会と大学教官有志協議会の共催で毎年行なっている学生青年合宿教室の第十九回（四十九年八月）のレポートである。講演講義および講師と学生との質疑応答の速記を中心にして編集されているので、重要な問題がわかり易く書かれている。（参加学生は全国国公私立大学六十六大学三百八十名、社会人・教

員・助言者・講師を加えて総合計五百二十八名。

講義は経済界ならびに経済学の分野で著名な世界経済調査会理事長の木内信胤先生の「新しい世界と日本文化」にはじまる。

つづいて待望の文芸評論家の小林秀雄先生の「信することと知ること」の講義が行なわれた。

高校の国語教科書で周知の氏の講義が非常な感銘を呼んだことはいうまでもない。質疑応答も速記をもとに載せてある。こういう講義の文章は他に見られないであろう。

ともに、日本の内外の事情から説きおこされて日本人の進むべき道を説かれた名講義で、これから日本の国を背負ってゆく大学生に大学生、大文学者が心をこめて訴えられたものである。

主催者側の講義では、国民文化研究会理事長・本学教授（日本思想・社会思想担当）小田村寅二郎氏の「イデオロギーに勝るもの——心ことば」、元本学教授戸田義雄博士（宗教学）の「日本の

いのち」の人類史的意義」、鹿児島大学教授川井修治氏（西洋史）の「人生・学問・祖国」、福岡県立修猷館高校教諭小柳陽太郎氏（国語科）の「感ずべきことにあたりて感ずるところ——他と共にる生」。

題を見るとむずかしそうだが、いうまでもなくみな大学生に対する講義の速記をもとにして書いてあるので、わかり易く、心にひびくものである。いちいち内容を紹介する紙数がないが、学生生活の根本である「学問」について述べられたものである。

右に加えて、「青年研究発表」というのが載っている。これは、最近大学を出てそれぞれ職業について働いている三人の大学出身者の、体験的研究発表の文章である。それぞれ大学四年間の生活を反省して、そこで何をどうして得たか、大学紛争の中でどんな悩みを悩み、どうしてそれを切り抜けたか、大学生活と社会生活とはどうつながる

か、またつなげるか、——そうした大学生にとつてもっとも切実な問題について、体験を通しての研究発表が記されているのである。

それはこの発表を聴いた学生諸君にも深い感銘を与えたが、その場にいることができない諸君にも深い感銘を与えるであろう。ことに新入生にとっては大学生活の手引書となるにちがいない。

この研究発表者の一人には、本学の卒業生で神奈川県立高校の歴史の教諭をしている山内健生君

(昭和四十一年度・商学部卒) がいる。

私も合宿教室に参加したし、自分の書いたものも載っているので多少宣伝めいてとられるかも知れないが、今度この第十集を通読して、大学新入生の読書についてのとまどいと思うと、黙っていられなくなって、一文を書いたのである。(国民文化研究会刊、定価五百円・アジア書房にあり)

(教養部教授・教養部長)

(8) 「信ずることと知ること」(昭和五十一年)

小林秀雄氏の『考えるヒント』という文庫本が出た。〈小林秀雄講演集〉である。

その一番最初にある講演は、「信ずることと知ること」という題の講演で、あとがきに(昭和四十九年八月、国民文化研究会の九州霧島講演に基づく)と書かれている。国民文化研究会で毎年開

催している「学生青年合宿教室」での講演であるから、本学の学生諸君の中には聴講した人もあると思う。私もこの講演を聴講して非常な感銘を受けた一人である。それが今度こうした文庫本の講演集の最初にかかげられたということは、これが氏の名講演の一であるというばかりでなく、現代

の青年学生に語る心からの言葉であるとされたからであろうと思う。

「信ずることと知ること」という、学問の根本問題について氏は語るのである。

「この間テレビで、ユリ・ゲラーという人が念力の実験というのをやりまして、大騒ぎになったことがありましたね」という文でこの講演ははじまる。そして、「念力というような超自然的現象を頭から否定する考えは、私にはありませんでした。今度のユリ・ゲラーの実験にしても、これを扱う新聞や雑誌を見ていますと、不思議を不思議と受けとる素直な心が、何と少いかに驚く」「今日の知識人達にとって、己れの頭脳によって理解出来ない声は、みんな調子が外れているのです。その点で、彼等は根抵的な反省を欠いている。と

言っていてでしょう」。

以上がはじめのパラグラフからの引用である。

文中の「今日の知識人達」というのは、われわれ大学出身者たちを言うので、耳が痛いのが、われわれの見失った本当の精神の世界というものを、青年学生諸君の目の前に見せて、「考えるヒント」を与えたいというのが氏の念願であるにちがいない。

「信ずること」——「不思議を不思議と受けとる素直な心」を深めることこそ、人間の本当の生き方であり、学問の根本であるはずだ。それを見うしなつて、科学万能の迷信に陥つたところに、現代文明頹廢の原因がある。そのことを氏の講演は痛いほど知らせてくれる。 *The Asia 51年*

(9) ウィルヘルム・ヴントとマクス・ヴント (昭和五十一年)

ウィルヘルム・ヴントは、いうまでもなく近代実験心理学の創立者である (Wilhelm Wundt 1832~1920)。彼は同時に全十巻の『民族心理学』

をも発表して、諸科学を総合した大学者であった。近代のアリストテレスと言われたという。ちょっと必要があつて図書館の人にその著書を調べてもらつた。

ところが目録の中に、ウィルヘルム・マクス・ヴントとなっている本があつた。借り出してみると英訳本で、Wilhelm Wundt と印刷してあつて、その間に鉛筆で、Max と書きこみがしてある。

この本は『心理学概論』の英訳本であるが、この本を持っていた人は相当の学者らしくて、終りまでよく読んであつて、各所に書きこみやアンダーラインがしてある。

図書目録のカードは、このマクスという書きこみを信じて、著者名をウィルヘルム・マクス・ヴントにしたのである。

これだけならこの話はカードの作りちがい、この本を持っていた人のカンちがいということでは終つてしまふが、私にとつてはちよつとそういかなしいわくがある。

もう何年前になるだろうか。ヴントの『民族心理学原論』の日本語訳が出版された。『ヴントの民族心理学』というような解説・紹介書はあつたが、日本語の訳書ははじめての刊行なのである。

早速購入して開いてみると、扉のヴントの肖像写真の説明に、ウィルヘルム・マクス・ヴントと書いてあつた。

その時まで私はそういう名前を見たことがな



ウィルヘルム・ヴント

かった。ヴントと言えば普通ウィルヘルム・ヴントのことで、マクス・ヴントはその子どもである。父親のヴントは哲学者でもあるが、心理学の創設者として著名だから、心理学者と言われているし、子どものマクス・ヴントは哲学者で、日本ではフィヒテの研究者として著名で、『フィヒテ』という翻訳書を読んだこともある。それで、父親はウィルヘルム・ヴント、その子はマクス・ヴントとばかり考えていたから、ウィルヘルム・マク

ス・ヴントという名前を見ておどろいたのである。とんでもないまちがいかと思ったが、まちがいにしてはひどすぎるので、何かの理由があるのだろうかと思っっている調べてみた。

そうすると思わぬことがわかった。ブリタニカ、コリアーズなど英米の百科全書の中には、ウィルヘルム・マクス・ヴントとなっているものがあるということである。ドイツの人名辞典を調べてもらったら、そういうのではないということだった。

しかも不思議なことには英米の辞典には子どもの方のマクス・ヴントは出ていないのである。

ヴントの自叙伝を訳したこともおありの英学者松田福松先生におたずねしたら、一言、「一犬虚に吠えて万犬実を伝う」とのことであった。つまりブリタニカのまちがいをコリアーズなどが踏襲したというのである。

一時はブリタニカに質問しようかと思ったが、ミドルネームだと言われてしまえばそれまでの

でやめてしまった。もう七、八年前になるだろう。

そんなことがあったので、ウイルヘルム・ヴントの著書目録に「ウイルヘルム・マクス・ヴント」の名を見て、むかしの疑問が勃然と湧いて来たのである。

改めて図書館の人に相談したら、これがいいでしょうと言って、プリティッシュ・ミュージアム（大英博物館）の蔵書目録の著者別目録を持って来てくださった。

これにははつきりウイルヘルム・ヴントとマクス・ヴントとして両者の著書があてであった。

念のため、ということでブリタニカをしらべてみると、おどろいたことにウイルヘルム・ヴントとなっている。それでは私の疑問は幻想にすぎなくなる。あわてて、版を調べてみると、「ウイルヘルム・ヴント」となっているのは一九六八年版で最近版であった。前に私の見たのは旧版で、調べてみると、これにははつきりとウイルヘルム・マ

クス・ヴントとあって、一九五九年版である。コリアズーはウイルヘルム・マクス・ヴントとなっている。

つまりブリタニカは一九五九年版から一九六八年版までの間に、ウイルヘルム・マクス・ヴントからウイルヘルム・ヴントに改めたのである。マクス・ヴントについての記載がないことは同じである。

どうしてこんなことになったのか？ まちがいだったのか、まぎらわしいとしたのか？ 理由はわからないが、訂正は訂正で、文句を言ってもしょうがないが、罪造りなことではあった。

そう言えばブリタニカのヴントの取扱いはずいぶん簡単なもので、ヴントの価値を充分認めていないように思う。それに親子の名まえを一緒にしたようなやり方で扱ったわけで、イギリスの学者の独善さを露呈しているような気もした。しかしいまさらそんなことをいう必要はないので、考えて

みるとブリタニカはその名の通りイギリス人の書いた百科全書だったのである。

日本の学者がヴントの名前までブリタニカに

従ったのがまちがいのもとであると思う。

(教養部長・国文学・言語と文化など担当)

(10) 木村肥佐生先生著『チベット潜行十年』を讀んで(昭和五十一年)

明治二十二年(一八八九)、興亜の先覚者浦敬

一(亜大・松浦珪三先生の御親類筋)は、蘭州か

ら同行した藤島武彦と別れて、ただ一人、万里の

長城の嘉峪関を出発した。当時、露・支勢力の接

触点であった新疆西北境の伊犁(イリ)を目ざし

てである。そして消息を絶った。

フィリッピンで死んだ菅沼貞風(東大古典科卒

論『大日本商業史』につづけて、『新日本の凶南の夢』

を書く)の盟友でもあった浦敬一のこの最期は、

若い時から私の心に焼きついていて、中国西北地

方への夢をさそって来た。

ところが、最近、亜大講師の木村肥佐生先生の

『チベット潜行十年』(昭和三十三年刊)という書

物を読んで、当地の模様を知ることができて、見

果てぬ夢を半ばはたすことができた。

本書は、木村先生が、内蒙古を出発して、青海、

西藏、シッキム、ブータン、インドを探険した記

録でもある。

当時先生は二十一歳の興亜義塾の卒業生で、西

域地方探索の大使館の調査命令を得て出発したの

であるが、途中、敗戦となり、一層の困難を冒し

て西藏入りを敢行し、万難を排してさらにインド

に潜入したのである。すべてモンゴルの一青年ダ

ワ・サンボとしてであって、ほとんど奇蹟かと思

われるような生還をされた。

本書はその間の体験を書かれたものであるが、それまでほとんど文書に記録されたことのない地方の貴重な記録となった。

木村先生と前後して行動した西川一三氏の『秘境西域八年の潜行』（上下二巻昭和四十二年刊）について、井上靖、泉靖一、西堀栄三郎諸氏の記した賞讃の言葉は、みな木村先生の書にも該当するものと思われるので、その記録としての価値は定評のあるものと見てよい。

日本人の記録としてはじめてのものであるというばかりではない、モンゴル人になりきった日本人の記録という点で、この記録はわれわれに特別な親しみをもたせてくれる。そして、アジアの人に接するにはこういう一体感をもって親しむべきであると教えてくれるのである。

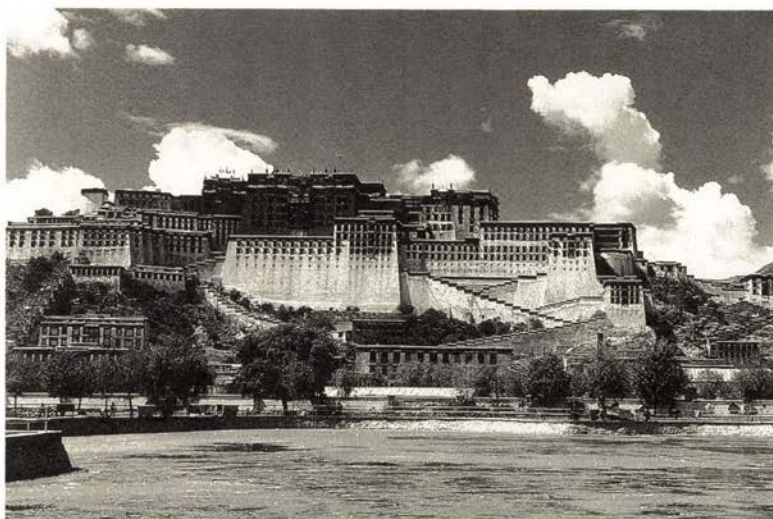
そういう意味で、——むずかしく言えば研究手法の上で欧米人の研究とはちがった——すばらしい

記録なのである。木村肥佐生先生の眼力は、非常の際にあつて、ほとんど無心に近く働いている。

それが文章を大変美しくして、文明人の訪れることの稀なこの地方の真実をありのままに伝えているように思われた。ここにはムダな自己主張がない。頭のさがる文章である。

昭和二十二年の記録であるという点でも貴重である。当時のラマ教の姿は、内外文献の中でも本書が最もよく伝えてくれるのではあるまいか。したがって、チベット、中国、ネパール、シッキム、ブータン、インド関係の戦後史の資料としても欠くことができないものだと思う。

一言で言えば、戦後の記録文学の傑作だと私は思う。アジア西域地方についての知識を得るばかりでなく、著者の人がからも多くを学ぶことができる。はじめに浦敬一のことをあげたのもその故である。竹山道雄さんの『ピルマの竖琴』などと並べて、アジアに関心の深い学生諸君に是非読



チベット・ラサ・ポタラ宮殿

んでももらいたいと思って一筆した。

中から二、三箇所引用してみる。

○テンゲリ沙漠

昭和十九年一月一日、ひとり岩山にのぼり東方に向かい「君が代」を歌う。午後出発。

一月二十三日、薄暗いうちに起きて十分腹ごしらえをした。今日の行程は有名なテンゲリ(天ヶ)沙漠(天のように広い沙漠という意味)を越えねばならない。小山のような砂丘のあいだを進む。草一本なく虫一匹いない。ふみ固められた道は少し風が吹けば、砂をかぶってわからなくなる。ただ、丸いラクダの糞が点々と砂の中から頭を出しているの、道がわかるというありさまである。砂の照り返しが暑い。この沙漠を渡っている途中、砂嵐が起きれば助かる望は少ない。砂丘の頂から谷間を見おろして、あの底からはい上がるのはアリ地獄のようにむずかしいだろうと思った。

ダンザンがラクダを引いて先頭を歩き、皆は経

文を唱えてこれに続く。この砂漠の東端は黄河に
なだれ込み、流れを赤く濁らせている。私は経文
のかわりに蒙古時代に愛誦した歌を同行の者に聞
えないように、小さく口ずさみながら一步一步熱
砂をふんでいった。

このテンゲリ沙漠を徒歩で横断すれば、大蔵経
百八巻を読んだのと同じ功德があると信じられて
いる。沙漠の幅はおよそ二〇キロ余りか。午後三
時ごろ無事テンゲリ沙漠を渡りきった。

○青海（グフノール）

二月十四日、歩いているうち、突然、行手の地
平線が真っ白に光って見えてきた。その光った白
いものは地平線一帯に盛り上がっている。凍った
青海である。何かしら圧倒される感じである。だ
んだん近づくにつれて湖はその全貌を見せてき
た。おかしな話だが湖は北から南にかけて、かた
むいているように見える（後日、氷上を歩いてみ
たが確かに南へかたむいていた。）云々。

○ツアイダム娘

青海蒙古には、チベット巡礼の途中、ツアイダ
ム娘に引つかかった内外蒙古のラマは数知れぬく
らい多い。彼らはツアイダム娘と結婚して青海蒙
古に骨を埋めねばならなくなる。また巡礼のラマ
を引っかけて、とりこにするのを娘たちは手柄み
たいに思っている。娘たちだけでなく親もまたそ
れを奨励する傾向がある。私はラクダ七頭を持っ
ているから定めしカモがネギを背負って来たよう
に見えたことだろう。桑原々々。

○ラマ老僧

いったん寢床に入った老人が『お前もラマなら、
ラマの礼儀を心得ているだろう』といてソソノ
ソと起きて来た。私に稚児さんになれるというのだ。
上からのしかかって来るのを突きとばして、まく
らをかかえて外に出た。『いたい、いたい』といっ
て起き上がる老人には気の毒だったが、ラクダを
つないである横手の物置小屋で寝た。

○ラサ（チベット首都）

頂上。ゴーラ峠に達する時は胸が踊った。頂上には大きなオボがある。われわれ一行はここで無事な道中に感謝して香をたいた。

オボを廻ればラサが見える。ラサの町の西半分は右手の尾根にさえぎられて見えないが、青々としたラサ郊外の森と、整然としたラサの町、金色に輝く寺院の屋根を見たときに、私は胸がしびれるような感激を覚えた。（遠目には整然と見えたが、市内に入ると雑然としている。）

○ゼブラ峠

チベット・インド国境のこのゼブラ峠は海拔四

八〇〇メートルでチベット人はザリーラ峠と呼ん

でいる。この分水嶺がインド・チベットの境界となっているが、オボ以外なものもない。馬を引いてあえぎあえぎ頂上に立った。風がほおを刺し、毛皮の服を通して身にしみる、足がつめたいのでつぶみすると、凍った雪がバリバリ音を立てる。手のとどくようなところにカンチェンジュンガの白銀の連峰が夕焼けに赤く映えている。チベットの山々も白雪につつまれて見える。思わず息をのむような壮大な景観である。

（アジア研究所報・第五号・五一、一〇、三二）

① 新版『ブリタニカ』二題（昭和五十二年）

（一）ブリタニカにおけるW・ヴントの運命

エンサイクロペディア・ブリタニカは、一九七

四年に大改訂が加えられて、『ザ・ニュー・エンサイクロペディア・ブリタニカ』となった。

実験心理学——科学としての心理学の祖と称せ

られるドイツのウイルヘルム・ヴントが、ブリタニカの中で、ウイルヘルム・マクス・ヴントになったり、もとのウイルヘルム・ヴントになりして、われわれブリタニカの読者を困惑させたことは、昨年の本紙に書いたが、今度の新版ではどうなっているだろうか、そう思って、一九七五年の新版を調べてみた。

新版は『マクロペディア』と『マイクロペディア』とに分かれている。マクロペディアは Knowledge in Depth とあるから、「知識の蘊奥（うんおう）」（深遠な知識）という意味だろう。マイクロペディアの方は、Ready Reference and Index とあるから「簡単な参考と索引」という意味だろう。

ウイルヘルム・ヴントは、少くとも心理学の祖と言われるくらいの学者であるから、マクロペディアにあるにちがいないと思って、引いてみたら、驚いたことに Wundt の名は見えない。ブリタニカはヴントを抹消したのかと思って、マイクロ

ペディアを引いてみたら、こちらの方にはちゃんと出ていた。

気になったので、マクロペディアに出ている人名をしらべてみたところ、カントとかヘーゲルとかファイテのあるのはもちろんであるが、日本人では、西田幾多郎、伊藤博文、山県有朋などが出ている。岡倉天心や福沢諭吉はマイクロ組である。

日本人の方は、東大教授が編集に参加して選定されたというから、彼らの判断によるのであろう。

吉田松陰は、マクロにもマイクロにも出ていない。

という次第で、W・ヴントは、遂にマクロペディアから姿を消し、マイクロペディアに姿を止めたということになる。

このヴントに対する取扱いは、ブリタニカ新版の編集スタッフの評価によるものであろうと思われる。そのことは、当然のことながら、マイクロペディアのヴントの記事にあらわれている。

そこで、さらに、旧版以来、W・ヴントが、ブ

リタニカの中で、どう取扱われてきたかを調べてみた。

ブリタニカの各版すべてにわたって調べたわけではないが、概要は掴めると思う。

①一九〇二年版

これは、第九版と第十版とを一編にしたもので、中に、Wundt, Wilhelm Max (1832-)とあって、数行の記述が出ている。ヴント生前の時のものである。

②一九六三年版

ブリタニカは、一九四六年版からシカゴ大学の管理のもとに出版されるようになったので、いわば米英協力版ということになったのである。

Wundt, Wilhelm Max (1832-20)。記述は次の一九六八年版とほとんど同じである。

③一九六八年

Wundt, Wilhelm (1832-1920)。ここでやっ

とMaxが削られた。

これでウイルヘルム・ヴントの子の哲学者Max Wundtとの混同は避けられたことになるが、ブリタニカは、マクス・ヴントをはじめから認めていないので、彼の名はブリタニカには無い。この版の書き出しは次の通りである。——「ドイツの哲学者、医者、生理学者、心理学者で、しばしば科学的心理学の祖と言われ、最初の心理学実験室を設立した。……」

④一九七五年版『新ブリタニカ』

(The New Encyclopedia Britannica)の『マクロペディア』には無く『ミクロペディア』には、次の通りに書いてある。

Wilhelm Wundt (b. Aug.16, 1832, Neckarau, now in West Germany, d. Aug. 31, 1920, Grossbothen, in modern East Germany)

書き出しは、「生理学者にして心理学者、実験心理学の創設者として一般に認められてい

る」とある。彼の哲学的著述、および民族心理学の業績についてはその著述の二、三の名はあげられているが、ほとんど評価していない。この点は、前記の六八年度版とは大きなちがいである。そして、最後に、「彼（ヴント）は、意識の内容の記述を科学的心理学の主題とし、そのために見地が余りにも狭いという批判を受けるようになったが、しかし彼の影響は大きく彼の個人的貢献は甚大である。」と結んでいる。

ヴントの心理学が、個人心理学と民族心理学とから成立することについての評価は少しも考えられていないと言つてよい。元来アメリカの実験心理学はヴントを学びヴントを超えて、ゲシタルト心理学を發展させ、同じくヴントの民族心理学を批判して社会心理学・文化人類学を發展させたので、ヴントに負うところ甚大であるが、その影響の大きさにはあまり触れたがらないような記述である。ヴントの哲学上の業績を

認めようとするのは、ヴントがドイツの愛国者であったからかも知れない。いづれにしろ、W・ヴントに対するこの評価は、極めてアメリカ的である。

以上が、ブリタニカにおけるドイツの学者W・ヴントの運命である。ヴントは、イギリスでもアメリカでも総合的な学者としての高い評価を得ていないように思われる。と同時に、エンサイクロペディアにも、自然にその国民的な意識があらわれるものであるという感じがした。学問が国境を越えるなどと簡単に言えるものではない。

(二)ブリタニカにおける日本哲学

Japanese Philosophy の登場

『新ブリタニカ』(The New Encyclopadia Britanica)『マクロペディア』を見ていたら、Japan の項目の中に、Japanese Philosophy という見出しがあつて、日本思想史について詳しく述

べられている。

明治十九年の「聖論記」の趣旨に対して当時の東大総長渡辺洪基が、「日本には哲学が無い」と応答したり、中江兆民も「日本には哲学が無い」と言ったり、B・H・チェンバレンが、「日本には独創的哲学者はいない」(Things Japanese)と言った時代に比べると、隔世の感がある。しかし、日本の学者にとっても、この Japanese Philosophy というコトバは、耳慣れないコトバとして反発をさそうのではないかと思われる。それほど、日本人の学者インテリは、日本思想に無智だったのである。

日本人自身が、日本人の学問・思想を「Philosophy」という言葉で言うのを遠慮しているうちに、『ブリタニカ』がはつきりと、欧米思想と同格の思想として、日本思想を Japanese Philosophy と呼んだことになる。

この項目の記述の最初に「The Rise of Phi-

losophy in Japan」という項目があつて、「記録された日本哲学は、六世紀の曲り角に当つて、聖徳太子の書かれたものをもって始まった」(拙訳)と書いてあることは、日本における哲学的思索の最初の文献として聖徳太子の文献をあげたことになるのである。これは重要な指摘である。

日本の学者は、聖徳太子の「十七条憲法」ならびに「三経義疏」が、誰の著述であるかということばかり議論していて、その内容が、日本の最初の哲学的表現であることを見落としているのである。『ブリタニカ』のこの辺の記述は、中村元博士の研究にもとづいていると思われるが、まことに穏当な説である。『ブリタニカ』がこれを容れたのは立派で、聖徳太子否定に傾いている日本の学者はかえってブリタニカの見識に学ぶべきであらう。

さて、ひるがえって、この Japanese Philosophy の項目を遡ってみると、一九七四年版の『ブ

リタニカ』は同じとして、このコトバは一九六八年版に登場しているのである。一九六三年版にはこの項目は無く、Japanese Religion となっている。一九〇二年版のブリタニカのジャパンの項目を見ると、もちろん Japanese Philosophy の項目も無く、日本の研究も何か外面的な研究のみ行われているように見えるが、それに比べると『新ブリタニカ』は、全体として欧米の日本研究が相当内面化してきていることがわかる。しかしなお欲を言えば、『新ブリタニカ』が東大教授の協力を得ているためなのか、日本の哲学を認めなかった東大の学風を示している、日本を真に代表するような人物と文献との論究に欠けるところがあるように思われる。

それはそれとして、こうはつきりと Japanese Philosophy と言われてみると、日本の大学はこ

れをどう受けとめるのだろうか。日本の大学で Japanese Philosophy を学科としているのは東北大学の日本思想史学科のみであるというし、講座の学科目として設置しているところもいくらかもあるまい。

日本の大学の学生は、Japanese Philosophy 日本思想について、欧米の日本研究者よりもはるかに無智である。これを何とかしなくては、日本人は国際的な文化、思想の交流に寄与できないことになるのである。Japanese Philosophy は、ただ単に「哲学」として、日本の大学の必修科目とすべきであり、いま行なわれている「哲学」は、主として「西洋哲学」であるから、それは「西洋哲学」として講義するのが本当だろう。

(教養部長・国文学・人間と環境・研修など担当)

12 林文月教授『源氏物語』(中国語完訳)

(昭和五十五年)

私は本誌12号(昭和53年11月13日号)「アジアの窓」に「日中文化交流」という題で拙論を載せてもらって、中国の知識人が(中華民国でも中華人民共和国でも)、日本の文明——特に日本の古典に対する研究に熱心でないことを指摘した。

そして、欧米の日本研究が、日本古典の翻訳をどしどし進めて、いまでは大方の「古典」がほとんどみな英訳されていると書き、それに対して、『古事記』とか『源氏物語』の中国語訳があるかと書いた。

これに対して、早速、二、三の方から御指摘をいただいた。

一つは、『万葉集』の翻訳は、錢稻孫訳『漢訳万葉集選』(一九五九年三月、東京、日本学術振興会)があるという御指摘であった。

次に、『源氏物語』の中国語訳もあったという御指摘であった。

これは、現物が見つからないので何とも言うことができなかった。

しかし、たまたま今年の二月、交流協会の委嘱で、中国文化学院の日本文化研究所で、日中文化交流についての講義をする機会があった、その際、台北で日本語を教えておられる戸田昌幸先生にお目にかかったところ、御所持の、林文月教授訳『源氏物語』(一〜五)五冊をゆずっていただくことができた。

第一冊は「第一帖・桐壺」から「第十一帖・須磨」までで、「訳本第一冊序」という序文が付いている。

この「序」には『源氏物語』の解説と中国語訳

の経緯とが書かれているが、「完整翻訳」のないことが甚だ「遺憾」であると書いてあるので、『源氏物語』の中国語訳は、これをもって最初のものということができよう。『源氏物語』の翻訳が無かったという私の指摘は半ば正しかったのである。

第一冊は、「序」が「民国六十三年九月五日識」とある。私のいただいた本は再版の本で「民国六十五年」とある。初版は、六十三年か六十四年であろう。第二冊は初版六十五年、第三冊は六十六年、第四冊は六十七年、第五冊が六十七年十二月となっている。今年は民国六十八年であるから、昨年十二月に刊行が完成したということになる。翻訳がはじめられてから七、八年がかりの刊行となろう。

昨年はサイデンステッカー氏の『源氏物語』

の完訳が注目をあびたが、林文月教授の業績も、これにおとらぬものと言えよう。

私は、よろこんで、前の言を訂正する。

そのうえで、さらに、日本古典の中国語訳が、欧米並みになるように期待したい。

また、サイデンステッカー氏に対したと同じような讃辞が、林文月教授（台湾大学中文系教授）に与えられるよう期待する。

『源氏物語』の書き出し「いづれのおほん時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとなききはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり」は次のように訳されている。「不知是在那一個朝代的時候、宮中許多女御更衣之中、有一位身並不十分高貴、却格外得寵的人。」（女御更衣には註がある）

（アジア研究所所報・第十七号・五五、一、一〇）

13 下島連教授著 『エーゲ海からテムスのほとりへ』 (昭和五十四年)

何という美しい題だろう。

下島先生が古稀の記念に本を書かれることは知っていたが、こんなにすばらしい題になるとは！ 「エーゲ海」は、ギリシア文学のことで、「テムスのほとり」は、英文学のことをいうのにちがいない。だから、「エーゲ海からテムスのほとりへ」は、ギリシア文学から二千数百年におよぶヨーロッパ文学の長い道程をしめす壮大な題名になるのである。

下島先生は、トインビーのあの壮大な『歴史の研究』二十五巻完訳の監修者として有名である。

その前は、戦後日本のアメリカ研究のリーダーであった『アメリカーナ』(後の『日米フォーラム』)のエディターとして、アメリカ文化の研究と紹介に貢献された。

最近有名になったガルブレイスなど、その論文をはじめて日本に紹介したのは、たしかこの『アメリカーナ』であったように思う。ライシャワー大使時代のことだったろうか。それを含めて、十数年間、アメリカの雑誌論文をあらゆる方面にあたって読んで、その中の主要なもの日本の翻訳・紹介を仕事とされたのである。

その前は、名訳『釣魚大全』その他、ケネディ『勇気ある人々』等の訳者として有名であった。本学の『建学の精神を語る』の中に出てくるケネディ大統領の就任演説の公式の日本語訳者は下島先生だった。

その前、つまり戦前は、『文芸春秋』の編集者として、芥川龍之介や菊池寛などの大作家のもとで働いておられたのである。

エーゲ海からテムスのほとりへ

下島 連 著



南窓社刊

つまり、先生は、文学者なのである。本書は、ギリシアから中世、ルネッサンスをへて現代に至る「西洋文学」の大きな流れを、その流れを作る古典のひとつひとつに触れながら、ごく自然な態度で、その読後感を語られたものである。

これだけ多くの西洋古典を読み味わった人は、

日本では少ないのではないかと思う。ギリシアの古典を先生はギリシア語では読めないのに、英訳で読んだ、と言っておられる。日本語訳より英訳の方が読みやすいと言っておられるので、英語の文章の読解力は、私は、先生は第一級だろうと思っ
ている。先生の訳文は、日本語としても美しく、
そして、よくわかるからである。

——いま私はこの本を読みおえて、やや沈痛な感動にふけっている。

戦前、戦中、敗戦、戦後、——という現代を生
きぬいてきた先生と一緒に、西洋文学の大きな長
い流れにそって旅をして来て、偉大な精神の流れ
をかいま見てきたよろこびと、西洋文学を語りな
がら先生がふと洩らされる現代についての憂いの
ことばに対する共感とが、ひとつになって私の心
をみたくからである。

先生は人間性の奥秘に徹するギリシアの悲劇を
語りながら、こう語られるのである。ソポクレス

の「オイディプス王の悲劇の筋をたどって」、

「オイディプスもあわれであるが、イオカステスもあわれだ。また、二人の娘たちもあわれだ。

古代ギリシアの観客の反応が手にとるようにわかるような気がする。神々を恐れよ！その救いのない暗さ、人間の無力さ、これが人間存在の一つの真実の姿なのであろう。

現代は神々の時代ではなくて人間の時代であると言われる。そして人間の浅はかな高慢と限度を知らない利己主義がはてしない悲喜劇を生みつつあることも確かだ。ギリシア悲劇にふれて、何ものかに対する畏敬の感情を、一時的にもせよ、回復することは、われわれ高慢な現代人にとって価値のある経験ではないだろうか」

「秩序のないところに美はない。古代人は確固たる神々の秩序の中に生きていた。現代をみまわすと、破壊された秩序のなかに生まれ育つて自我を神とみなす破壊された精神が、破壊さ

れた秩序をさらに破壊するためにあせりにあせっているのではないかと、さえ思いたくなる。

このような現代がやがて調和と秩序を生み出すとするならば、われわれは矢張り目に見えない神の手を予定するほかなさそうだ。

古代の精神は現代にそのことを指し示しているように思う。げに古代は現代の鏡である」

（「オイディプスの呪い」から）

ギリシアについては、私は、下島先生に刺激されて、多少の勉強をしたので、予備知識が少しはあったが、中世についての先生の文章は、全く新しい世界をのぞかせてくれる新鮮な驚きの連続であった。

その中世について先生は語る。

「近世ヨーロッパのルーツが中世ヨーロッパにあることは言うまでもない。これは判り切ったことのように思われるかもしれないが、われわれは中世ヨーロッパについてどれだけのこと

を知っているのであろうか。いや、われわれ日

本人がよく知らないだけでなく、現代のヨーロッパ人も彼らの過去をよく知らないのが実状だ。意外に思われるかもしれないが、これは本当だ。われわれの古いヨーロッパに対する理解が十分でないことはやむを得ないとしても、古いヨーロッパが現代のヨーロッパ人自身にとっても濃い偏見の霧の彼方にあることは問題だ」

著者はラテン語と宗教の時代ともいうべき中世の心を、チョーサーの『キャンタベリー物語』に見るが、その前にイングランドに伝えられたキリスト教の遺蹟について語る。著者の訪ねたダラム大聖堂についての記述はすばらしい。著者の文学研究は、このような現地の訪問と相まって美しい文章を生み出しているのだが、そのひとつの例をここに見ることができる。それはたびたび引用されるサムエル・ジョンソンの『スコットランド紀行』にも比せられる日本人著者の「ヨーロッパ

行」の一節である。

「私はワーズワーズの詩で若いときからその名を知っていたワイ川のはとりのティンタン・アベイの廃墟に立った日のことを思い出す。今なおイギリスには中世の修道院の廃墟が各地に雨ざらしで建っている。そしてわれわれを驚かすのはその廃墟の規模がきわめて大きいことだ。その盛時にはそれがどんなに盛大であったかを思わせるに十分である。ターナーも描いているティンタン・アベイの廃墟は過去の日を雄弁に語っている。

中世は去った。しかし、現存する大聖堂やこれらの廃墟を見て、西欧人の物の考え方、倫理感、正義感、あるいは社会福祉に関する考え方などの基礎が中世につちかわれたものであることを、強く感じると同時に、これらの修道院の破壊につづいてイギリスを訪れるルネッサンスが全面的に祝福すべきものではないと感じた。

そしてシェイクスピアの一部の作品の暗さは私のこの危惧を十分に裏づけるものであると信じる。私がここで言わんとしていることは、「リア王再考」の章でもって具体的に述べられているはずだ」（「中世とその終焉まで」から）

こうして著者はシェイクスピアに入る。そして、主として「リア王」をあげて、二つの自然観——価値感の対立と相克とを説明して、こう結んでいる。

「シェイクスピアという人は中世と近代の境にそびえ立っているように思われる。そして、エドマンドのような神を恐れぬ人間がやがて横行するように至るであろう近代のはて、すなわち現代を見抜いていたのではないかと思われるふしがある」

こうして著者の西洋文学研究は、現代に対する警告と自戒とに至るのである。私が、最初に、先生を文学者——本来の意味の学者——と呼んだの

はこの意味であった。

右につづく「トインビーの文体と用語とについて」が、第一編の主題の本筋で、そのほか研究余滴ともいふべき「シェイクスピアの大観」「リチャードⅡ世の一句」「英国の諺とシェイクスピア」の章があつて、興味がつきない。しかも、その中に出てくるヒースとか、毒いら草ステインギング・ネットルとかを、カットで先生の夫人が描いておられる。「装画下島友子」と目次に書いてあるのを改めて見直して、つくづくいい本だなあ……と感動するのである。

第Ⅱ編の「旅情」の紀行文は、前にも読ませていただいたことがあつたが、今度、こうした西洋文学の流れの中で読み直してみると、また尽きることのない味わいを感じられて、名文だと思つた。

第Ⅲ編「バストラルの心」は、先生得意の「アイザク・ウォルトンの『釣魚大全』について」であつて、もはや申し上げることはない。

最後に一言。先生はこれでもう本を出すことは
おしまいにしようとお考えかも知れないが、まだ、
アメリカのことがあるということをお忘れなく
——、と申し上げて、終わりにしたい。本当に立
派なご本をお書きくださって、どうもありがとう
ございました。(南窓社刊)

14 新刊『実りある教育を』(昭和五十四年)

戦後の日本の教育は、小・中・高の教育は、占
領軍の日本歴史・日本地理の抹殺教育と日教組の
左翼イデオロギーにふりまわされ、大学教育は過
激派学生の暴力行為で破壊され、すっかり荒れ果
ててしまった。

しかし、その中で、真剣に教育に取り組んで来
た教師もあつた。この書物は、そうした小・中・
高の先生が三十七人の教育体験の記録である。

教師と生徒との間の魂のふれあいこそが教育の
真髄であることを、この本は痛いほど強く教えて
くれる。その魂のふれあいを表現するためにこの
教師たちは必死の努力をしたのである。涙の出る

ような文章にいくつも出あう。大部分が若い教師
であることにも感動する。大学の教員にも反省の
資であるが、特にこれから教職につこうとしてい
る人には是非読んでもらいたいと思う。

本学卒業生の山内健生君(神奈川県立新城高校
教諭、昭和四十二年商学部卒)と岩越豊雄君(神
奈川県湯河原町立吉浜小学校教諭、昭和四十二年
経済学部卒)との二人も、すぐれた文章を寄せて
いる。また、例の福岡県の若松高校の「君が代」
事件についても、黛敏郎氏その他の正しい報告が
載せられている。(日本教文社編・刊、定価九百
八十円九月二十日初版)

(15) 小田村寅二郎教授著『昭和史に刻むわれらが道統』(昭和五十三年)

著者の名をとって「小田村事件」とか「小田村

があるとも云へるのである。

問題」とか呼ばれる「事件」が起きたのは、昭和十三年のことである。これは当時東大法学部の学生であった小田村氏が、当時の総合雑誌『いのち』

現在、東京大学の構内には、東大批判の文書が貼り出されてゐるであらう。もし、いまのいま、それが無いとしても、大学紛争の頃の東大構内には各所にベタベタと大学批判——むしろ誹謗といふやうなビラが貼つてあつたことは、誰にも否定

に「東大法学部に於ける講義と学生思想生活——精神科学の実人生的総合的見地より——」といふ論文を発表して、東大法学部の学風を批判したのに対して、東大法学部がこれを無期停学処分にしたことをいふのである。

できない事実である。ビラばかりではない、学生の各種文書に東大批判の声は一杯であつたはずである。東大教授に対してその学生が、オマエ呼ばはりして非難したことも、最近の事実である。

一大学生が、自己の属する学部の教授の講義内容をとりあげて、これに学問的な批判を加へた論文を発表した、それに対して大学がこの学生を無期停学処分にした。——これだけがなぜ「問題」とか「事件」とかいはれるのであらう。さう考へられる人も多いかと思ふが、そこにこの問題の鍵

かうした学生を、東京大学法学部は、その言論の故に、一人でも処分したか。調べてはゐないが、一人も処分してゐない。処分したら、それこそ、学生の人権擁護とかで、大問題になるだらう。だから処分はしない。そればかりか、その誹謗に対

してさへも大学教授は黙認してゐるのである。いま、話は、限定しておくが、東大の法学部、法学部から出た経済学部は、一言で言へば、左翼に甘いのである。何故か？ 日本の左翼運動のリーダーたちは東大から出てゐるのである。東大新人会などがいい例だらう。東大の法経学部は社会主義を進歩的とする学風なのである。

ともかく、東大法学部が、学生の発表した論文によつて処分を行なつたのは、小田村氏が最初で最後と言へるのではあるまいか。小田村氏について、田中耕太郎氏の仏領印度支那特派大使派遣に反対して言論活動を行なつた吉田房雄（法学部・戦死）浜田収二郎（経済学部・現国会記者会館事務局長）の両氏に対する退学処分がこれにつづくが、こちらは、ピラマキ講演会等を含むので、純粹に論文といふ点からすれば、小田村氏が、最後になるのではないか。戦後、あれだけの学生の大学批判の言論に対して処分しなかつたし、し

ないのであるから最後と言つてよいだらう。

結論だけ言つておけば、小田村氏の論文は東大法学部の急所を突いたのである。その論文は、本書附録に当時のままコピーで掲載されてゐるから読者諸氏に読んでいただきたいと思ふ。そしてこれが、処分の理由になるのか考へてみていただきたいと思ふ。「言論自由」「大学自治」をあれほど叫び立てる東大が、一学生の学風批判の論文に対して処分するとは、ほとんど考へられない暴挙ではないか。それに、小田村氏の所論がただイデオロギーを主張するといった独断的な暴論ではないことは、その論文を読めばわかることであるが、その傍証の一つとして、矢部貞治教授との試験答案をめぐつての論争の書簡があり、矢部教授が、小田村氏の所論を容れて、その「政治学」を「欧州政治原理講義案」と改めたことをあげることができよう。

かうして、いはゆる「小田村事件」は社会的政

治的問題となり、議会における質問の形で大きな問題とはなつたが、東大は少し姿勢を低くした程度であつた。

田中角栄氏が失脚した時、何かの週刊誌の車内広告ピラに、角栄氏のお母さんの言葉として、「やはり東大出でなければダメなんだ」と書いてあつた。当時、東大は大学紛争の中心大学で、その存続が危ぶまれてゐた。東大の正門には毛沢東の写真が掲げられてゐた。それでも、「東大出でなければダメなんだ」と言はれる。最近、東大の精神病科の病棟がセクトに占拠されてゐるといふ。それでもそのままでもいいといふ。これを理由に税金の不払ひ運動でも起きたら、文部省は何と答へるのだらう。

さて、日本は、明治以来、欧米の文明を導入して国家の独立を守り国民生活を向上させてきたのであるが、その欧米文明導入のパイロットの役割を果したのは東京帝国大学（東京大学の前身）で

あつたと言へよう。もちろん東京帝国大学だけではないが、東大が日本における最初の近代的大学で、他の大学はほぼこれに倣つて出来たのである。

さてまた、東大の学部の中で、東大法学部といふのは、官僚の養成機関であつた。そして、近代日本は官僚政治の国であると言つてよい。そこで、明治以後の殊に明治後半以後の日本の政治上の指導層は官僚であつたと言へよう。

官僚に東大の改革を求めるのは、卵に親鳥に意見してもらはうといふことと同じである。日本は欧米文明に追隨してきたが、政治とか経済とか文化とか、国民生活そのものの向上のうへで、内側から欧米文明をそっくり模倣しようとしても結局できないし、また文明にはそれぞれ伝統があつて、伝統にしたがふことは文明の独立の基礎であるから、自国の文明と伝統とをふりかへつてみなければならぬことが今日やうやくわかつてきたのである。

東大の学風は改革されなければならない。小田村氏の論文は、かういふ意味での、東大風改革論である。

しかし、明治以来、東大ほど強いものはない。

軍も政党も栄枯盛衰をくり返すが、東大のみはいつも頂点にゐる。そして批判を受けつけない。東大を批判するのは気狂ひあつかひされるのである。小田村事件はその一つである。

さて、此の間の小田村氏の行動は実に立派なものであった。つまり、責任を自分がとるといふ点で一貫してゐる。このことは、言ふは易く、行ふは難い。殊に小田村氏のお家で、御両親御兄弟姉妹たちと小田村氏がどういふ語りあひをしなごら志を貫いてゆかれたか——その消息は、私など四十年來の友人も本書で初めて聞くことが多い。一進一退、全心を集中して思想にしたがつて行動し、行動を記述し反省し、次の行動へ向ふ姿が、詳細に本書に記されてゐて、感嘆させられるのである。

これが小田村氏がその血脈からも思想の系譜の上からも学んだ吉田松陰の学問にもとづくかと思はれるが、——われわれも学ぶが——若い人たちにほんとに学んでほしいところだと思ふ。

小田村氏が、国民文化研究会といふ言はば思想運動のリーダーとなりながら、過激派などの無責任な集団行動をもつとも嫌悪して、運動をマン・ツ・マンの運動と名づけるのは、小田村氏がいはゆる運動家ではなく、右のやうな真の意味の思想家であるからなのである。

思想といふのは、イデオロギーではなくて、個性と体験とにむすびついたものでなければならぬ。それが、「小田村問題」についての小田村氏の文章にはつきりとあらはれてゐる。私もその一部分を経験した「小田村事件」から、実には、四十年経つて、本書を読みながら、感ずるのは、小田村問題はまだ終らない！といふことと、事件をつらぬいてゐる小田村氏の個性とである。つくづく、

えらいもんだなあ!と思ふ。

ほめついでにもうひとつ言はしてもらはう。本書のもう一つの「隠された事件」は、「憲兵隊事件」

(昭和十八年)である。これについても本書にその概略が記されてゐるのでそれを読んでいただきたいが、その中に小田村氏が書かなかつたことが一つある。

本書に書かれてある通り、小田村氏は新婚旅行から帰宅して、家宅捜査があつたことと禁足令の来たことを知られ、結婚式の「お礼参り」に托して、精神科学研究所(日本学生協会)支援の有力者——反東条的な——方々に憲兵隊の一斉検挙を知らせる。これは戦時中の憲兵隊を相手にしての行動であるから、決死の勇気がなければできないことである。そのことは本書に書いてあるが、次の一事は、書いてない。

小田村氏は、憲兵隊に留置されると取調べに先立って、「精神科学研究所の所員その他の給料の

手配をさせてほしい、それができなければ取しらべに應ずることはできない」と言つたといふことである。

私は当時——病後の故だつたと思はれるが——検挙を免れて精神科学研究所の留守を守つてゐたが、これを聞いて、友人ながら、本当にえらいやつ!だと思つた。

黙否権などといふものの認められてゐない時代の出来事で、警視庁より何倍も恐ろしい憲兵隊に拘留されてゐて、言はば死命を制せられてゐながらとつた小田村氏の言動は、一身をすてて友人のためにする友情と大勇との発露であつた。事実、憲兵隊に拘留された所員の家族は大変で、なかには夫人が発狂する人さへあつたほどで、精神的にも経済的にも言ひやうのない悲境におかれたのである。しかし、強烈な弾圧のもとに、精神科学研究所が、最後まで分裂せず、裏切りもなく、半歳後の田所広泰理事長の出所を待つて、言はば整然

と解散できたのは、実に小田村氏のこの一言と、それにもとづく拘留中の所員たちの活動とによってであったと言ってもよからう。

私は友人として小田村氏の文章に期待するのは、その文章が、言はば事件であるやうな、さういふ文章を期待する。前述の小田村問題の発端となつた論文がそれであるし、憲兵隊に拘留される原因となつたのも、同様に政府の戦争指導思想に対する批判の「文章」であつた。さういふ行動と同じ力をもつた文章を期待する。本書もまたさうした力を持つものである。学生の生きる道が左翼的な集団的な学生運動しかないといふ現代の風潮に対して、本書が、巖のやうにその流れを堰き止めて、

大学生ひとりひとりの思想的転換の契機となることを、私は心から期待する。

それと同時に、戦前戦中戦後へかけて国民思想覚醒のために人知れず努力したわれわれの努力を書きのこしてくれたことを衷心から感謝する。死んだ同志も草葉のかげでよろこんでゐるにちがひない。御遺族もよろこんでくださつてゐるにちがひない。戦後四十年、憲兵隊の弾圧下に苦闘したわれわれの憂国の情はやうやくその表現を得たのである。戦中学徒遺稿遺文集『いのちささげて』（国民文化研究会叢書No19）と併せ読まれば幸ひである。（『国民同胞』五三・一〇・一〇号）

16 宮脇昌備教授著 『権兵衛峠』 井月真蹟集（昭和五十五年）

昨年は倉前教授（国際環境論）の『悪の論理』がベストセラーになったが、今年、宮脇教授

（国文学・国語表現法）他の『一茶全集』が、まづ五島育英会の研究奨励を受け、文部大臣賞をう

け、遂に毎日新聞の出版文化賞を受けた。いずれも長年月の努力が報いられたことで心からお祝いをしたが、こういう社会的評価の定った仕事について、今さら何か言うのは遅いので私は好きではないが、宮脇教授のその他の著述について紹介したい。

『権兵衛峠』

宮脇教授が小説を出した。『権兵衛峠』という本である。「権兵衛峠」と「和宮助郷」と「山岳修羅記」との三篇が収めてある。まず、「権兵衛峠」を読んで、強く心を打たれた。

権兵衛峠というのは、信州の伊那と木曾との間をつなぐ峠を開いた百姓の名である。大力で無口なこの男が、貧賤から身を起して、この峠の開発に生涯をかけ、遂に成功した物語が書かれている。これを読んだある女性が、「重い……作品」と言ったが、たしかに、文章といい構成といい重厚

な作品で、私には、現代文学の名作の一つとして残るにちがいないと思われる。

現代は、エロ小説万能、軟派文学の花ざかりのようであるが、ほとんどの作品は、ただ人の欲望を刺激するだけで、うたかたのように消えてゆく。その中で、この「権兵衛」は、硬派の、本格的な歴史小説である。

歴史小説というのも、いまは多く、ありきたりの口語で書かれるので、キザで軽薄な感じのする作品が多い。ところが宮脇さんのこの作品は、正確な考証に裏づけられているばかりでなく、方言が自由に使いこなされていて、しつかりした時代色と濃い地方色とが読者をして、遠い昔の世界にひきづりこんでゆく。われわれの生きている世界とはちがった遠い歴史の世界に、しかも人の知らない片田舎の農村世界にひきいれる。それは一に文章（文体）の力である。

さて、そして、しかも、その中で扱われる問題

は、人間の本質的な問題なのである。それは、人間一生の事業についてであり、家庭であり、愛であり、運命であって、今日われわれが直面している問題と少しも変らない。

権兵衛という男の生涯を読んで、何とも言えない深い感動を覚えるのである。実に作者の渾身の技が発揮されて作品は独立している。

宮脇さんは、学生時代に、ロシア文学に心酔し



て、ドストエフスキーとかトルストイの長編小説を読破した。これは一口では言えるが、容易なことではない。そこでわれわれ友人は、将来、長編作家になると期待していた。しかし、大学を出るとすぐ軍隊にいき、敗戦によってソ連に抑留され、日の丸部隊で帰って来た。その苦闘の生活は、若い時代に長編を書くゆとりを許さなかったのである。シベリアから帰った氏は、郷里の伊那の中学校の教師を皮切りに、長野県の高校の先生をつづけ、校長を最後に定年退職して、本学に來られたのである。

郷土の生活に骨を埋める決心とシベリア抑留下の極限状況の生活経験が、この作品にある、と私は思った。享保年間に木曾谷を襲った悲惨な飢餓の状況が書かれているのを読みながら、私は、遠くシベリアで苦しんでいた氏の数年間の捕虜生活の苦しみを、思った。

また、束の間の愛に己れを焼き尽くしてしまつた茶屋女を氏が描くのを読みながら、私は、遠く外地でいのちを落としたあわれな娼婦たちの運命に涙する作者を思わないではいられなかつた。その意味でもこれは、現代小説なのである。しかも、郷土としての信州の風土にしっかりと根を持つている。そういう意味では、長塚節の「土」とか岩下俊作の「無法松の一生」とか、いくつかある地方文学の傑作の一つである、と思う。実生活の重みが重々しく迫ってくるのである。人生は、重いからである。

書き出しの一節だけ引用しておこう。

元禄九年正月（旧暦）十五日早朝、信州木曾神谷村の百姓権兵衛は、木曾代官山村甚兵衛の呼出しを受けて福島に赴くべく、家を出た。

「父（とう）、飾（やわ）ってどこへいく」

伴の、当年七つの権太郎がとび出してきた。

「福島だ。いい子をして待たれ。お土産買つ

てきてやるから」

六尺近い赫顔（しゃがん）の巨軀に、菅笠をかぶり、合羽をおおい、こうかけ足袋に草鞋ばきで表に出ると暦の上では春立つたとはいえ、木の山奥は根雪固く地面について、寒気一しおきびしい」

この「権兵衛」の姿が、二木六徳氏の版画に現わされて、本の表紙になっている。

「権兵衛」の次は、「和宮助郷」である。孝明天皇の妹にあたられる和宮内親王（後の静寛院の宮）が、公武合体のため將軍家茂に降嫁されたことは、当時の政治的な大事件であったが、それはその道筋にあたる中仙道一帯にとつてまた、生活の上の大事件となつたのである。その一地点であった伊那地方の人員動員（助郷）の模様を書いたのがこの作品である。

私の母は、長野県の出身で、明治十七年生れであつたが、生前よく、この和宮様の道中の模様が

その地に語りつがれたことを物語っていた。

「助郷」のことは歴史の正史には残らないが、地方史には強烈な印象を残した事件である。これを地方史の立場からとりあげて、その荒筋をたどったのがこの小品で、史料を列記したような形であるが、将来さらに小説としての構成がとられるのであろう。

その次は「山岳修羅記」で、これも「権兵衛峠」に劣らず、私には有難かった。題からは想像されないが、これも信州・高遠の宗良親王を描いた歴史小説である。『李花集』の作者で、『新葉和歌集』の撰者、しかも戦塵の中に生涯を送られた南朝の宗良親王を、こういうふうを描いた小説は他にあらまいと思われる。私は感嘆した。そして、これらの作品をいつごろ書いたのかと思って調べてみたら、みな昭和三十年代の作品ということだった。当時地方雑誌に発表されたものを、今度一つに集録したものである。そう言えば、その頃掲載誌を

私にも送ってくれたような気がする。しかし少しずつ発表されたので、通読する機会が与えられなかった。そのために今回のような強い感動を覚えなかつたのだらう、と思われた。

戦後の生活をかえりみると、昭和二十年に戦争が終つて、二十年代、三十年代、四十年代、五十年代と、ほぼ十年ごとに生活が楽になったことがわかる。

三十年代は、どん底はどん底でも、やっと復興の目安がたちはじめた時期なのである。私のこととくらべてあれだが、『歌人・今上天皇』という拙著を出してもらつたのがその時期だった。それで私にはよくわかる。

これだけ書いておかねば、そういうつもりで書かれたものにちがいあるまい。その意味では、もう二度とは書かれない作品だらう、とも思う。

『井月真蹟集』

さて、『権兵衛峠』に感嘆した私は、著者の好

意で前から大学の教員控室に供えられていた大冊

『井月真蹟集』（三万円）を読まないではいられない気分になった。これは、俳文学の研究者井本農一博士が、何かの新聞で批評して、すぐれた文学であると言ってくれた、と宮脇さんがよろこんで私に話していたからでもある。真蹟の写真が並べてあつて、その考証がしてある研究書だとばかり思っていたのとは、ちがうらしい。私の期待は完全になえられた。たしかに、これは、立派な伝記文学である。文学作品でもあり一種の総合芸術である。

この本は、伊那の俳人・乞食坊主の井上井月の真蹟を写真版で掲げて、それに解説を附したものである。ということになるが、その解説にあたるところが、宮脇さんの井上井月伝である。

したがって、逆に言うると、著者の「井月の生涯と芸術」という作品に、年月を追って井月の「日記」「短冊」「書簡」などの真蹟をかかげて、これ

を解説し批評したものである。

この一冊を読むと、三十までのことがごくわずかしかわからない井月という人物が、漂然として伊那谷に現われて、そこで後半生三十年の落魄の生涯を送るわけだが、無一物の乞食状の人間が、和漢にわたる博大の教養を持ち、芭蕉を崇拜して、生活の感懐を俳句に托した、その生涯の一コマ一コマの思いが、この書の各ページに彷彿としてあらわれてくる。それを宮脇さんは限りない愛惜のこころをこめて描いたのである。

何かしらないが、人には語らぬ暗い深い思いを秘めて生涯を送ったと思われるこの人物に、作者はその思いを傾けている。おそらく作者も、誰にも言えぬ、何かの深い経験をしているのであろう。そしてそれは誰でもそうであろう。それが何であるか、ということとは、詮索してもつまらないことであるから、作者は、井月の三十まへのいわばその半生について、あまり深い詮索はしない。それ

以後の作品を、心をこめて味わうのである。だからその鑑賞には、何とも言えぬ同情、いたわりがあり、尊敬さえも感じられるのである。これが、伝記を美しいものにした。つまり文学としたのである。「権兵衛峠」の「権兵衛」を描いたと同じ

思いが、井上井月に傾けられたのである。しかも、その真蹟を配列して井月の思いが、ぢかにあらわれるように工夫されている。その意味で、前に、総合芸術と言ったのである。これは前著『俳人の書画芸術・一茶篇』で試みられたものではあるが、伝記文学の傑作だと思われる。長篇小説の勉強がこうした大作に実ったと言っていると思う。しか

も、この井月伝は、下島空谷先生―下島連教授の敵父―の『漂泊俳人・井月全集』を発展させたものであるということである。こういう因縁に心あたたまるのを感じる。

『権兵衛峠』（伊那毎日新聞社・五五・八・一五刊）（定価千二百円）『井月真蹟集』（伊那毎日新聞社・五五・五・一刊）（定価三万円）『俳人の書画芸術・一茶篇』（集英社、五三・一一・三〇刊）鈴木勝忠氏と共編）（定価四千五百円）

（教養部長・国文学・日本思想史・人間と環境・教養ゼミ担当）

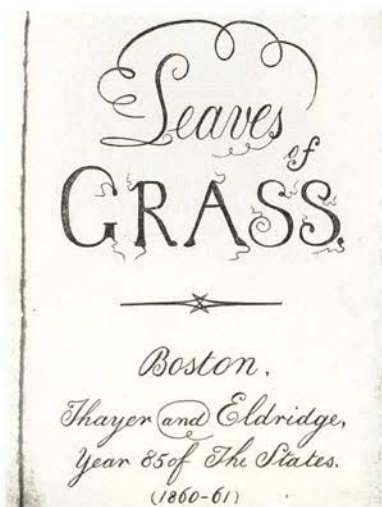
17) ホイットマン 『草の葉』 第三版（昭和五十五年）

十年も昔のことになるだろうか。イギリスに行ってこられた浅見方舟教授から電話があつて、

の葉』（Leaves of Grass）の初版（一八五五）を手に入れたから差し上げる、というのである。

ホイットマン（W. Whitman, 1819～1892）の『草

これには私は驚いた。というのは、『草の葉』



『草の葉』第三版 (1860~1861)

の初版というのは、天下の稀覯本の一つで、日本ではホイットマンの図書の蒐集家として知られていた石井氏が探し求めていたもので、当時——昭和20年代——1万ドルと言われていた。現在では、その所在は世界的に明瞭で、各図書館はその所蔵を自慢にしているのだから、時価数万ドルはするだろう。金では買えない貴重品と言っているものである。(最近大阪外国語大学が入手して、同図書館の最大貴重書としたとのことである。)

これを浅見教授がロンドンで購入した、というのでは、ちよつと話がオカしい。

それで、これは、『草の葉』初版の複製版のことだろう、と私は考えた。コロンビア大学プレスから一九三九年に複製版が出ているのである。それにしても有難いものだから、遠慮なく頂戴することにした。

さて、浅見教授の持つて来られたのは、実際は、『草の葉』の第三版であった。ボストンのセイヤー・アンド・エルドリッジ刊行で、合衆国八五年(一八六〇―六一)と扉に書いてある。もちろん第三版とは書いてない。研究者がこれを第三版とするのである。というのは、ホイットマンは、詩集としては『草の葉』という書名の詩集しか出さなかつた。ただこの『草の葉』が、初版から最後の第九版に至るまで、版を重ねるにしたがつて内容が増補改訂をつづけたのである。初版の詩の数が一二篇に対して、第七版(一八八一―八二)

は詩の数二九三篇となつてゐる。というわけで、ホイットマン自身は、その時々「草の葉」として出すものを、研究者があとで、第〇版と名づけるのである。したがつて、当然のことながら、この一八六〇〜六一年版も、研究者によつて、第三版と名づけられてゐるのである。いまから百年以上も前の書物で、もちろん私の持つてゐるものではないので、ありがたく頂戴した。

話はこれで終るように見えたが、終らなかつた。というのは、この『草の葉』第三版というのが、また問題なのである。ホイットマン研究家の第一人者として知られてゐる長沼重隆氏が、英文学者児玉晃一教授との対談の中で、この『草の葉』の海賊版を所持していることを自慢しておられた。

——これは菊地教授が以前コピーしてくださいましたもの——そのことを私は思ひだした。調べてみると、その中に、イギリスの海賊版とアメリカの本物とのちがいが、書いてある。扉にあるホイット

マンの肖像にある黄色のボカシの有無がちがいだ、というので、見ると、黄色いシミのようなボカシがある。すると、これは『草の葉』第三版の原本ということになる。長沼氏が、海賊版を持つてゐることを自慢するならば、原本の方がもっと価値のあるはずだ、そう考えられる。

そこで、私は、浅見教授に対するお礼を考えた。そして、ちょうどその頃、研究社からもらつてゐた『アメリカ古典文庫』を全巻浅見教授に贈呈することにした。まだ全部出てゐなかつたから何とも言えなかつたが、全部揃えば数万円はするだろう、と思われた。そして、この第三版を、何十萬かで売りたいと思つて、努力した。と言つても、よほどよく知つてゐる人に頼まないと、途中で、本物と海賊版と替えられてしまふような気がするのでウツカリたのめない、そのうえ、英語の古書に通じてゐる人、というので、知り合ひもいままにしてゐた。ところが、去年になつて、竹前教

授が、ついであるので〇〇書店に頼んでしらべてもらってあげよう、と言ってくれたので、お願

いした。

その結果、——多少時間がかかっていたのは、

〇〇書店で海外の価格なども調べたのであろう

——売値八十万円でどうか、とのことであった。

もちろんOKで、しばらく〇〇書店の店頭の上

18 下島連教授著「ケルティック・フリンジへの旅」

——西洋文学の「奥の細道」——（昭和五十六年）

スコットランド篇

下島教授の前著は『エーゲ海からテムズのはと
りへ』という。輝くエーゲ海に臨むギリシャの文
学から、ラテン語の中世の文学を経てイングラ
ンドのシェイクスピアの文学に至る、言わば西洋文

に置かれていたらしい。

しかし結局、買い手がつかずに、最近、私の手
もとに帰って来た。私は、もともと売れなくても
いいと思っていた。ただ私の眼力に対して満足で
きたのがうれしいのである。しかし、売ればそ
れに越したことはないので、黙って、買い手を待つ
ている。

（教養部教授）

学の大道をたどった名著である。そのことは題名
からも想像がついた。

ところが、今度の「ケルティック・フリンジ」
はどういう意味なのだろうか？私には想像もつか
なかった。

著者は言う。——

「大ざっぱに言うと、ケルト族は紀元前の千年も前から西ヨーロッパ全土に住んで、鉄器文化を發達させ、紀元前のある時期にはローマをさえ脅やかしたことがある。……」

フランスでは、ゴール人と呼ばれていたケルト族はローマに支配されたのち、ゲルマンの一派であるフランク族に征服されこの二つが混血して近代のフランス人を形成した。

イギリスについて言えば、これまたケルト族が占拠していたのであるが、ローマの支配に続いて、ゲルマンの一派であるアングロ族とサクソン族が大陸からこの島に侵入して、先住ケルト人をブリテン島の東部や南部から西方のウエールズ、コーンウォール、北方のスコットランドに追った。

また、アイルランドはローマに支配されたことがなく、歴史の後の時代に至って、イギリス人に支配されることになるが、比較的純粹にケ

ルト族の言語や神話を守って今日に至っている。」

これに、「コーンウォールに追い詰められたケルト族が、海を渡って」逃れたフランスのブルターニュを加えて、

「ブルターニュ、ウエールズ、スコットランドの北西部、マン島、アイルランドを一括して、ケルティック・フリンジと呼ぶのである。それはケルト族が住んでいるブリテン島の外辺部」という意味であろう。」

著者はさらにつけ加えて、こう言っておられる。——「したがって、これはイングランドを中心に考えるイングランド人の呼び方であるということには忘れない方がよい。」と。

私などは、イギリス人と言えばみなゲルマン系のイングランド人のことで、イングランド人とかスコットランド人とかウエールズ人とか、——アイルランド人でも、みな同じ英語を話す同一民族

と考えていたのであるが、そう簡単にはいかないことを、著者は注意されるのである。

著者の「ケルティック・フリンジへの旅」は、スコットランドを代表する文人ロバート・バーンズの生れ故郷「バーンズの里」訪問記からはじまる。「蛍の光」の曲でわれわれ日本人にも親しまれている「オールド・ラング・サイン」が、スコットランド人が「三人寄ると、乾杯して、歌う」歌であるという。また、

「バーンズの時代に、スコットランドが、この詩人のほかにジェームズ・ワット、アダム・スミス、デイヴィッド・ヒュームといった学問の大物を生んだのも偶然ではなかったと思われる。」

カーライルとかサー・ウォルター・スコットも、スコットランド人である。

バーンズの里から著者は、スコットランドの古城をいくつか訪ねて、いよいよオパンからヘブリ

ディーズ諸島に向う。マル島を経てアイオーナ島を目指すのである。

「クリスチャンでもない私が、ご苦労にも何故こんなところまで来たのだろうか。」

著者はそう自問して、

「世界中で私の一番好きな場所は明日香と山の辺の道である。その理由は、それらの土地が豊かな歴史的・文学的連想を喚び起こし、のびのびと想像力を遊ばせてくれるからである。」

……」
と自答し、さらに問う。

「さて、私にとってアイオーナの魅力は何であるか。」
そして答える。

「前にも述べたように、この島は古代に在っては、アイルランド、スコットランドを結ぶケルト世界の中央に位し、この小さな島が、キリスト教時代の初期において、アーノルド・トイ

ンビーをして極西キリスト教文明と呼ばせた文明の中心であったという事実は、いくつかの連想を伴って私の想像力を刺激してやまない。

ここでは、私はイングランドではなく、アイルランドに絶えず思いを馳せなければならない。」と。

著者は、アイオーナの聖堂とケルト式十字架とを観に行くのである。すると、「聖堂の見える石垣の曲り角に、ジョンソン博士の有名な句が銅版に刻まれて打ちつけてあった。」その文は、次の通りであったという。

「マラトンの野に立つて愛国心が高まらないような男、アイオーナの跡に立つて信仰心が一段と堅固にならないような男は頼もしくない。」その文句を読みながら、著者はそのすぐ前の文を想いおこすのである。

「人間の英知、勇氣、美徳によつて貴くされて
いる土地に対して、私たちを冷淡にし、そして

無感動にする不感症的哲学ほど私と私の友にとつて無縁なものはない。」

そして著者は附記している。

「日本の歴史から感激を奪つたマルクス主義的歴史家、もしくは科学的と称する歴史家の書いたものを見るたびに、私はジョンソン博士のこの文章を思い出したものだ」と。

著者の愛国の思いが思わず噴き出している一節である。日本から西の果ての英国の、その「ケルティック・フリンジ」に立つて、著者の心に去来するものは祖国の現状に対する限りない憂国心である。

六世紀の聖コロンバンによつて建てられたこの島の僧院は、全ヨーロッパに高い名声を得ていたという。アイオーナの盛衰を叙べて、前篇の「スコットランド篇」は終る。次は、「アイルランド篇」である。

アイルランド篇

昭和十年代だったと思う。マン・オブ・アランという記録映画が上映された。たしか、オ・フラーティールという監督だった。記録映画の傑作ということで、私は、若かったので、何回も見た。

登場人物は、アラン島の漁師とその妻と息子の少年の三人で、終日、北海の荒浪が絶壁の下に碎け散って、その水しぶきが、絶壁の上の彼らの住まいまで押し寄せてくる。ただ荒れ狂う浪の音だけがあって、会話はほとんど無かった。イギリスに、こんな暗い貧しい生活があるのか！という驚きと、その生活と自然とをありのままに凝視してたじろぐことのない監督の眼に対して畏敬の心を抱いたものである。現代文明の、正に辺境の、別世界といった感じであった。

このアラン島に下島教授は行かれたのである。私は、敬服せざるを得なかった。アラン島はアイ

ルランドの西方の小島である。

アイルランドと言えば、私はもう一つ当時の映画を思い出す。「密告者」という題名だったかと思う。アイルランド独立運動の志士が、金のためだったと覚えてるが、同志を裏切って密告する。運動は弾圧される。やがて、生きのびた運動家たちは密告者を秘密裡に追跡する。復讐と逃亡とのこの恐ろしい劇の印象も、私には忘れることができなかった。

この二つの映画から得たアイルランドについての私の印象は、全くバラバラで、長い間、何の統一も得られなかった。今度、下島教授のこの本を読むまでは。

著者のこの度のアイルランド紀行は、アークローからはじまるがその圧巻は、「ジョン・F・ケネディ公園での私的追想」とみてよいであろう。

著者は、ジョン・ケネディ大統領との交際についてさりげなく語っているが、公私からする哀惜

の思いが、文章にあふれるようだ。

つづく「飢餓と疫病」の項は、一八四〇年代の
アイルランドの悲劇についてである。それに「キ
ルケニー城での歴史回顧」が続くので、「アイル
ランド篇」の記述は、「倒叙」式になっていると
もみられる。

ジョン・ケネディの追想からはじまるので、自
然にそうだったのであろう。しかしアイルランド
のキリスト教文明は早くひらけたのである。著者
は言う。

「アイルランドのキリスト教は四三二年の聖パ
トリックの布教から始まり、アイオーナを開いた
た聖コロンバ、後述のグレンダロツホを開いた
聖ケヴィン、ここキルケニーの僧院の建設者聖
ケインニーホ、その他多くの聖者が聖パトリッ
クのとに続いた。実に、アイルランドの黄金
時代、すなわち、九世紀十世紀にヴァイキング
によって荒らされる前のアイルランドは、著者

と聖者の国”としてヨーロッパ大陸に、その名
声がとどろき、多くの留学僧を大陸から集めて
いた。……また、この時代にアイルランドの僧
院は古代ケルトの神話や伝説を記録して後世に
伝えるという重要な役割を果たした。」

この後のアイルランドの歴史を概観した後に、
グレンダロツホの遺跡や「ムイリーダツハの十字
架」についての印象が述べられている。

そして、このアイルランドに寄せる著者の深い
思いが、著者にとって恩師ともいつてよい菊池寛
の研究に発することを述べたのが「補遺」の「菊
池先生」である。本書は「アラン島」をもって終
る。

造本刊行には久我教授が当たったということ
も、私には、心暖まることである。表紙の図版は、
ブック・オブ・デイマの写真版のようである。裏
表紙のシャムロックはアイルランドのシンボルと
いう。一一五ページの小冊子ではあるが実に心の

ゆきとどいた、美しく楽しい書物である。ジャーナリズムの目にふれない世界で、こういう立派な業績が成就しているのである。イギリス人の研究に比しても決してひけをとることはあるまいと思われる研究成果が、著者の自費出版のような形で公刊されていることを思うと、感慨ひとしおのものがある。

書評の表題は、著者の談の中からいただいたものである。芭蕉が「奥の細道」で得ようとしたもの、訴えたかった心を、著者は、西欧文明の「奥の細道」で得ようとし、訴えようとせられたものであろう。それは、貧困に耐えて屈することのない強靱な精神 宗教的な志といったものであろうか。欧米文明に対して「ケルティック・フリンジ」の文化の意味を語る著者は、爛熟した現代日本文明に対して、警告を発しているのである。

最後に一言。文中に引用されているバーンズの

詩やジョンソン博士の言葉など、みな著者の訳かと思われるが、さすがによくこなれた日本文で、名訳である。著者の文章と同じように美しい。これは西洋文学が著者の単なる知識でなく、教養の糧となつている現われで、文学の研究方法をも暗示していると言えよう。

読み終えて私は何となく芭蕉の句を憶つた。

山路来て何やらゆかしすみれ草

しかしまた、エールすなわちアイルランド共和国の独立の意味や近頃新聞をさわがしている北アイルランドの暴動の意味など、現代の政治的背景をも、私はこの書によつてはじめて納得したので、そのことを言い洩らしてはなるまいと思う。(北星社刊、限定三百部、頒価千二百円。購読希望者は亜大教養部・久我教授まで)

19 バーバラ・ロビンソン画集紹介 (昭和六十一年)

バーバラ・ロビンソン女史の画集がフランスのティール社から去年発行された。

バーバラ・ロビンソン女史は、拙著『古事記のいのち』を英訳してくれたワルター・ロビンソン氏の夫人である。

ワルター・ロビンソン氏はロンドン大学の東洋アフリカ学部で極東アジア史の講師をしたこともあるイギリスの著名な東洋学者である。日本の古典『旧事本紀』の英訳・研究や中国の王維の詩の英訳(ペンギン・ブックス POEMS OF WANG WEI)などで有名で、坂本太郎博士の長文の批評もあるくらいである。(坂本太郎博士著『日本古代史の基礎的研究・上・文献篇』『古典の研究』について——旧事本紀に関するロビンソン氏の研究)

惜しいことに、一九八一年九月二五日亡くなられた。亡くなられる前に、バーバラ夫人の「富士山」の絵と、「歌右衛門」「舞楽」の絵、三点の絵を送って来てくださった。東京で個展を開くように斡旋してほしい、というお話だった。多少の努力はしたが、もちろん私にそんな力のあるはずもない。ロビンソン氏の逝去の報を知ったので、残念ではあったが、その貴重な三点は送り返すほかなかったのである。バーバラさんには、何と力のないものよと思われたであろうが、致し方ないことであった。そのうちの一点 Ulraemon V は今度の画集に載っている。

今度の『画集』に、画集の編集者でもあるローレンス・ダレル氏が書いているのを読むと、彼女も夫君と同じく国際的な著名人であることがわか

バーバラ・ロビンソン画集紹介



バーバラ・ロビンソン画 Utaemon V

る。

「彼女の名声というものは今日まで常にトッ
プ・フライトの画家たちと並んできた、しかも
この忘れ難い評判は、彼女が最近の二、三年間、
比較的仲間から離れていたにも拘らず、彼女
に与えられたのである。いくつかの要因が彼女
に行動の自由を与えなかった。ただ単に彼女が
遠くはなれた地方の村落に住んでいるというば
かりではない、偉大なものに必要な緊張した集
中力の中にとじこもって、批評や公的な世界か
ら遠くはなれていたためでもある。しかもなお
彼女の作品の震えるような抒情性は、作品がそ
の中で作られた沈黙とか遠隔さとかとほとんど
相反するかに思われる。

絵そのものは、形式的な意味では、象徴的で、
絵画的には印象主義的であるが、目のくるめく
ような正確さのスタイルで仕上げられているの
で、それが人に絵画に訳された純粹な直観の閃

光という効果を与えるのである。その絵は決し
て饒舌なものでもなく、いいかげんに誇張した
ものでもない。常に詩的な緊張に満ちており、
完璧に表現されている。よろこばしい自然さと
素朴なヴィジョンの感情が、見る者の最初の印
象である。

それはちょうど彼女が果物を木から振り落し
たようにして絵が書かれたという印象なのであ
る。

しかし、もう少し近よって見ると、次にこう
いう考えが見る人をさらに一層、それぞれの絵
のベースのための彼女の手法の中心へと、近づ
けるのである。それは、堅固な、ほとんど何か
にとりつかれたような構成と妥協のない真実さ
——それはほとんど動物的と言えるほどのもの
である。そういう描写の堅固な基礎の上に色彩
が積みあげられる。それは根にしっかりと安定
してそして自在に喜んだり悲しんだり、または

その主題となる事物を抒情的に解釈する。

ソフィステイクーションというものは、モードやスタイルについてのものではなくて、洗練された直観と誤りのない手と目についてのものである。今や彼女は、ひとり絵の中に沈潜していた十年間の果実を、発表する決心をしたのである。——パリ、ニューヨーク、ロンドンに計画されている展覧会とともに、彼女はやがて当然のことながら国際的な人物となるにちがいない。これまでは小グループや私的な収集家の手に属していたが、今やもつともつと広い世界に属するものとなるだろう。この、どちらかというといかめしい評判が国際的な光景のなかで次第に広がってゆきつつあるのを見るのは、とても魅力的なことである。その最もよい点は、この画家はまだ若い女性で、これからさき多年にわたって製作することができるという点である。とはいうものの、彼女の地位はこの時代の

より豊富な感受性の作家たちにおいて既に安定している。”

あとの叙述はフランス語のためいまの私には紹介できない。また、彼女の風景画の、するどくきびしい緑や青を基調にする色彩の美しさについても、私には表現の能力がない。しかし、特にその中に、舞樂を書いた数点の絵と、歌舞伎を画いたもののあることについては、どうしても説明が必要だろうと思う。この点については、数年前、アジア研究所の紀要に書いたことがあるので、それの中から一部引用させていただくことにする。いままも考えに変わりはない。

○

ワルター・ロビンソン氏が、拙著『古事記のいのち』英訳の仕上げのために来日された時、たまに宮内庁楽部の舞樂演奏が一般公開されたので、御一緒に観覧した。

私は舞樂ならびに雅樂は日本の代表的古典芸術

で、東洋芸術の粹であると信じてゐたので、日本ならびに中国の古代史を専攻されるロビンソン氏に是非これを鑑賞してもらひたいと考へた。しかし当日、ロビンソン氏は、雅楽の音色がサツド *sato* であると言つて、聞くのもつらさうで、喫煙室に入ってしまった。ところが、バーバラ夫人は、舞楽の美しさに熱中してしまつて、さかんにデッサンを描いてをられた。円をいくつもいくつも描いていってだんだん形をあらはずといった描き方で、さかんに鉛筆を走らせて、舞楽の動きをあらはさうと夢中になつてをられた。その中の一枚を所望して秘蔵してゐるが、実にすばらしいデッサンだと思つた。

さて、それから三年たつて、突然、バーバラ夫人のロンドンでの個展の案内書をいただいたのである。それは主として日本滞在中の題材による油絵であつたが、その相当部分を占めてゐるのが舞楽の絵なのである。Japanese Imperial Court

Dancerと書いてあつた。しかし、その案内書には舞楽の絵の写真が載つてゐなかつたので、お願ひして、御自宅所蔵の油絵の写真を何枚か送つていただいた。原作ではないから、感じが十分にはわからないが、舞楽の楽人たちの一斉に動作する時の、調和にみちた動きといふやうなもの一瞬がとらへられてゐる、といった感じの絵で、昔から日本に伝へられてゐる舞楽の絵は、日本には古くから沢山あるが、絵画的な、完成された形を示す視覚的な絵とは、何かちがふものがある。線そのもの輪郭そのものが動いてゐる、走つてゐる、といった感じの絵であつた。

舞楽を題材にしてあれだけの絵を描いた欧米画家ははじめてではないかと思ふ。日本人の画家でも油絵で舞楽を描いた人を私は知らない。

これをロンドンで展覧されたのである。その後、舞楽の欧州公演が行はれて多大の感銘を与へたといふので、欧米人の中には、舞楽から東洋舞踊音

楽・日本舞踊音楽の粹を感じた人も多いと思ふ。
パーバラさんはその先駆者とも言えるだらう。

御主人ロビンソン氏の日本古典の翻訳、王維の
翻訳とならんで、パーバラ夫人の舞楽の油絵（歌
舞伎の絵もある）を見ると、このお二人の日本文
化の理解と紹介の業績は、相当のものであると思
ふ。

イギリス人のアジア研究は、早くからはじまっ
ている、偉大な業績をあげてゐるが、その伝統を

(20) 下島連教授著『遍歴——歴史と文学の間』出版祝辞（昭和六十年）

(一)

下島先生がすばらしい本を出された。『遍歴

——歴史と文学の間』という。

まず装幀が美しい。薄紫色の箱の表紙は、夫人
の描いた薄墨色の草花スイートピーで縁取りして

つぐこのご夫妻の業績に私は心から敬意を表した
い。お二人とも極めて謙遜な人で、宣伝めいたこ
とは全くしない。英訳『王維詩集』の訳者として
のロビンソン氏の略歴の中にも、研究業績ならび
に他の訳書のことについては一言もふれられてゐ
ないので、敢へて拙い一文を書いた次第である。

〔G・W・ロビンソン氏英訳・王維詩集
POEMS OF WANWEI 随想〕から〕

（アジア研究所所報・第四二号・六一、五、一五）

あって、中に薄黄色のボカシがある。その中にま
た、穏やかな薄墨色で書名と著者名が書かれてい
る。著者の人柄を示すような柔らかな上品な気品
を漂わせている。書物そのものは、細かなモザイ
ク模様のある白表紙で、背表紙にだけ、金文字で
書名・著者名が押しこんである。表紙を開くと、

鮮やかな臙脂（えんじ）色の見開きである。そして、洋書らしい大冊の書物を手にとっている著者の近影が、これもセピア色で載せてある。すべて縹渺（ひょうびょう）たる気品に包まれていて、実にすばらしい出来栄えというほかない。

私は、凝った細工の本とか豪華な本は好かない。書物は内容とと思うからである。しかし、この美しい装幀は、おごらず、かといって卑下もせぬ、まことに卓然とした気品にあふれていて、生涯を文学と歴史の「遍歴」にささげた、著者の喜寿の記念の書にふさわしい。

これは、この本を出すのに心を傾けた久我雅紹教授の誠意と趣向と南窓社の岸村さんの造本の技と、夫人の挿絵とが渾然とひとつになって、こんな見事な本を作りあげたのである。先生も満足されたろうが、私どもも心からお祝い申し上げるしだいである。

□

さて、最初、私が「まず装幀の美しさ」を言ったのは、それが内容とひとつに溶け合っていることを知っていたからである。

下島先生の書かれたものには、前々から私は親しんできた。それは私にとっていわば、欧米文明についてこの上ない教科書なのであった。

英文学でいうエッセイ——これが、この書物の様式であるが、この中におさめられた「桜橋のほとりに住みて」という文章の中に、先生が亜細亜大学に来られるようになったいきさつが書かれている。その端初になったのは、昭和二十五年の年で、私が、下島先生と同郷の宮脇昌三君（現客員教授）と二人で、先生をお訪ねしたことから始まるのである。

「それはわれわれにとっていろいろな意味で冬の季節で、私はバラと釣りで自らを慰めてい

た」

と先生は当時のことを美しい言い回しで書いておられる。

そのとき先生は、すでに英文学の名著として名高いアイザク・ウォルトンの『釣魚大全』を訳出しておられたらしいが、当時私は知らなかった。

私が先生の文章に親しむようになったのは、昭和三十年八月から先生が、米国大使館U S I S編集顧問として勤務され、『アメリカーナ』（後『日米フォーラム』）を編集されたころからである。

『アメリカーナ』は、昭和三十年代における日本唯一の、また最高のアメリカ研究誌で、私などはこれだけを頼りに現代アメリカについての知識を得たのである。それは多く翻訳であったが、その中で、よく意味の通る日本文として練れた訳文を書かれる学者が、編集長の先生その人であることを知ったのである。私は脱帽して、以来、先生の訳文に親しむようになった。

翻訳なんか、という人があるかもしれないが、

われわれは、明治以来どれほど難解な訳文に悩まされてきたかしののである。哲学書の訳文など最たるものであるが、ほかにも社会、人文の学において甚だしい。

このことについては、やはり本書の中の「松永安左衛門翁とトインビー『歴史の研究』」を読まれるとよい。ともあれ、私は、昭和三十年以来、先生の文章の、——殊に翻訳文の愛読者である。

その中にはのちに有名になったライシャワー博士の近代化論や、ガルブレイス教授の経済論などのあることが、この翻訳の持つ価値を示している。

またこの「文章」の重要性ということについては、本書の「ラグビー、クラーク先生、ラフカディオ・ハーン」という文章の中に、先生はさりげなく、しかし、熱っぽく、語っている。

さて、本書は、著者の「あとがき」に記されている通り、右に述べた「桜橋のほとりに住みて」

と「ラグビー、クラーク先生、ラフカディオ・ハーン」と、もう一篇——これは巻頭的一篇であるが、——「シェイクスピア『お気に召すまま』をめぐって」の三篇を、書きおろしとして、喜寿の記念にと、周辺の求めに応じて上梓されたものである。

それについて、同じく「あとがき」に、

「……三篇を書きおろして一卷として上梓するについては、私なりの理由と自負がないわけではない」

と、著者にしては、恐らく使ったことのない「自負」という言葉を使って、述べておられるのである。読者は、ここに、著者の、欧米文学研究の生涯を通じての結論を、読みとるべきであろう。

「著者の観るところでは、日本におけるヨーロッパ系の言語、文化、思想の教授において、大きく欠けているものがある。それぞれの国が割拠しているように、それらは互いに割拠して、その背景にある共通のヨーロッパ文化と

いう観点が見のがされがちである。

ギリシア、ローマの文化遺産とキリスト教を共通に受け入れているヨーロッパは、それ自体が一つの文明圏を形成しているのだ。

本書に多少採るべきものがあるとするならば、本書に収められている文章の多くがそのような観点に立つて書かれていることであろう。そして、このことが、ヨーロッパの歴史に対する理解、ひいてはヨーロッパ各国の文化をばらばらものとしてではなく、総合的に眺めることに多少の貢献を致すであろうと考え、且つヨーロッパを一つのものとして把握しようとするとき、東洋が対照的に浮かびあがってくるのは自然のなりゆきであろう。散漫のせしりを免れないかもしれないが、本書に収められている文章の多くは、少なくとも、このような意図のもとに執筆されたものであることを諒とされたい。」

右の意図が、理論的ではなく、実践的に表現

されているのが下島先生の文章の魅力なのである。

例えば、著者の芥川龍之介との出会いを書いた

「芥川さんのこと」の中に、「帰りぎわに、二冊

の英書にローマ字でサインしたのを手渡された。

それは現在も岩波文庫に収められているブルフィ

ンチの『ギリシア・ローマ神話』とヴァン・ルー

ンの『聖書物語』の原文であった」とあるのは、

直ちに、前の「あとがき」の文章に応ずるもので

あろう。

また「ヨーロッパを一つのものとして把えよう

とするとき、東洋が対照的に浮かびあがってくる

のは自然のなりゆきであろう」という——これも

美しい文章であるが——のは、「弟橋比売とイピ

ゲネイア」「絵画——東と西」「トゥールの戦と白

村江の戦」「桂林紀行」などの文章に表れている。

そして、さらに著者は己れの魂の原点を求めて、

それを御郷里伊那駒ヶ根の日本農村に見出した

「原風景の重み」という一篇を書いておられる。

これなど、私は感涙を禁じえなかった文章である。

機械なき農耕民や春霞

この句がそれを語っている。

この句は、作者が昭和五十九年の桂林紀行の中

で得た句であるが、欧米の文明を、歴史と風土と

の中で、正しく理解しようとして著者の果たした、

長年にわたる欧米の紀行の経験に裏づけられている

のである。

欧米の文明や文学や思想を、書物だけからでな

く、風土との関係において理解するために、著者

は何回かの欧米および中国紀行を行ったのである。

これが著者の欧米文学理解の特徴をなしている

もいえよう。著者が、欧米古典の現代における最

高の読書人であることを私は知っているが、それ

だけならば、あるいは明治・大正の英米文学者の

中に著者と比肩する人があるかもしれない。しか

し、それを風土の中にしっかりと位置づけてその

眞実を解明することのできた人は、戦後の日本人にして初めて可能であつたことに違いない。「ヒューстонからアラモへ」や「シェイクスピア『お気に召すまま』をめぐって」の「アーデンの森」、「ジャンヌダルクの生と死」などは、われわれの目を欧米文明の眞実に開かせてくれる名篇である。ということは、本書が戦後日本の名著として、永久の価値を持つことを示すのである。騷然たる戦後ジャーナリズムの圏外にあつて、著者はひとりしずかに、東西文化の比較融合の事業を果たされたのである。

(三)

最後に、私事にわたるが、拙著『白村江の戦』を「トゥールの戦と白村江の戦」の題下の書評で扱っていただいたことは、誠にありがたいことで、この書評の出たときに、東西文明の比較の上から、も実に重大な指摘をして頂いたことと感謝申し上げますが、それを今回の著書に取り上げて頂いたこ

とは、さらにありがたいことであつた。著者のその文章にこめた篤い励ましの心がひしひしと迫つて、言い表しがたい感銘を覚えたのである。

ともかくにも、すばらしい本である。しかも先生は今日まで大学の授業を一日も休まれたことがないという、教育者として完べきな生活の中から本書を作り上げられたのである。

書きたいことはなお尽きないが、久我さんの求めに応じて書かせて頂いた拙文をここに一旦擲筆する。今後とも座右の書として折にふれて開き見て、楽しみともし、教への書ともしたい。

〈五月二十四日〉

(昭和六十年五月二十日 先生喜寿の誕生日に
——南窓社刊『遍歴——歴史と文学の間』定価
二千円)

なお 本書は、久我雅紹教養部教授の研究室(一
号館五階)および、アジア書房で販売している。

(21) 各国歴史教科書と神話（昭和六十二年）

名越二荒之助氏の新刊『世界に生きる日本の心』にふれて

名越二荒之助教授の『世界に生きる日本の心』——二十一世紀へのメッセージ』（展転社六二・一〇刊）は、近来の快著だと思った。

表紙に、イザナギノミコト・イザナミノミコト男女両神の国生み神話の絵が掲げてあって、英文の説明が記されてゐる。読んでみると、

Izanagi and Izanami, standing in heaven, watch the creation of Japan.

とある。ポストン美術館のビゲロー・コレクション所蔵の作品であるといふ。

しかもこれは、アメリカの世界史の教科書に掲げてある絵だといふことである。この絵についての詳しい説明は、本書中にある。それを見ると、この絵は、明治年間、当時有名な画家であった小

林鮮斎・永濯の画譜・古事記物語（明治十七年）の一コマであることがわかる。これは著者の貴重な発見でもある。明治十七年といへば、B・H・チェンバレンが『古事記』の英訳を発表した年（明治十五年）のすぐあとのことになる。フェノロサや岡倉天心の親友であったビゲローがこの絵を買ひとつたのにも理由があるのである。アメリカ人の日本文化研究の曙の時代の出来事である。

そこで著書名越氏は、さらに広く各国の世界史教科書の中の「日本」の項目を調べてみたところ、みな、最初に、日本の神話についての説明のあることを発見したのである。日本の「日本史」の教科書から疎外された日本神話が、外国の「日本史」の教科書の中に発見されるといふ、——日本人に

とつても奇妙に感じられるこの事実を、著者は
『非日本的日本教科書』といふ痛烈な言葉で、批
評する。

表紙の説明から、少し本文の紹介に入つてしまつたが、本書は、開くと、「世界に開かれた神道」といふ章の第Ⅱ項「感応する世界と日本——世界各國の『伊勢神宮』（国民的聖地の意）」といふ題で、文明諸國の「国民的聖地」のカラー写真が、何頁にもわたつて掲載されてゐるのである。そしてこれに対する説明が記されてゐる。おほよそ次の通りである。

ソ連のレーニン廟及びモスコのクレムリン、
中国の北京・毛首席記念堂、

アメリカのワシントン記念塔、

イスラエルの嘆きの壁、

フランスのバリ・ノートルダム大聖堂、

スペインのトレド大聖堂、

ビルマのシエタゴン・パゴタ、

タイのエメラルド寺院（ワット・ブラケオ）、
フィリピンのホセ・リサル記念館、
インドネシアのインドネシア独立記念塔、
ギリシャのパンテノン神殿、

イスラエルの千早城マサダの丘、

スペインの千早城アルカサル。

以上である。これら現代文明各國の、国民的アイデンティティーの原点である聖地の写真——これは大変な努力の結晶である——を締めくくつて著書はいふ。——「各國は共通の原理で成りたつてゐる。日本が解れば世界が解る。」と。

「国際化」が叫ばれてゐる今日、世界文明の現状においてまづ知つておかなければならない基本的知識を、本書は提供したのである。殊に写真集のやうな体裁をとつたことは、現代恰好の読みものとして受けとられるにちがひない。日本史ならびに世界史の副読本としても、こんな面白い本は滅多にあるまい。国際化の叫ばれる今日、必読の

書といふべきであらう。

さて、名越教授の快著を夢中になつて読みつづけた、そのあと、ふと私は、欧米諸国の歴史教科書の中に、日本をとりあげる際、どうして神話をとりあげたのだらうか、と考へた。それで、各国がそれぞれ自国の歴史をどう書いてゐるのか、調べてみた。それには「全訳・世界の歴史教科書シリーズ」といふ叢書（帝国書院）があるので、概略のことはすぐわかる。

それを見て驚いたことは、イギリス・フランス・ドイツ・イタリアそれぞれの自国の歴史教科書は、文明の原初から説きはじめてゐて、エジプト・アラビア・ギリシャ・ローマ等の古代文明を説き、つづいて中世のキリスト教文明といふふうに展開して、その中から各国が自立してくる趣が書いてあるのである。特に、ギリシャ文明、ローマ文明、ユダヤ文明に大きな比重を与へてゐるので、ギリシャの神話・伝説、ヘブライの神典が、

各国文明の源流として大きく取扱はれてゐる。かうしてギリシャ神話の知識と、『旧約聖書』の知識とは、ヨーロッパ人の教養となつてゐるのである。それを各国歴史教科書ははっきりと認めてゐる。

スペインは、イベリア半島の原始からはじめてゐて、やや調子がちがふが、神話を歴史教育の中から排除するなどといふ態度をとるのは、日本だけではあるまいか。

アメリカの教科書は、アメリカ大陸の先史文明からはじめて、独立戦争を建国の史実とするから、ギリシャ神話やヘブライの神典については述べてゐない。しかし、アメリカ史の背景をなすヨーロッパ史ならびに世界史といふことになれば当然、ギリシャ・ローマ・ユダヤ文明から説かねばなるまい。日本の神話が、アメリカの「世界史」の中に登場するのは右のやうな文脈に拠るのである。神話は文明の源流として重視されてゐる。

私は、アメリカのジャーナリストから拙者『古事記のいのち』（英訳）の神話の扱ひ方を、アメリカ・インディアンが神話を信仰するのと同じだと言つて、アナクロニズムと揶揄されたことがある（『日本人たちの「神話」』—昭和四十八年三月ダイヤモンド社）ので、アメリカ人には神話がわからない人が多いのだらうと思つてゐたが、名越教授の著書で、歴史教科書の中の日本歴史の項に神話をとりあげてゐることを知つて、ヨーロッパ諸国民と同じ健全な教養の存在を知らされたのである。ヨーロッパの各国民にとつては、神話は、親しい内容なのである。そのことは芸術作品を見ればすぐわかる。

ちなみに、唯物史観で書かれた中国の教科書—「中国歴史」—が、「史記」の記述をそのままとりあげて、「五帝」から説きおこしてゐるのを知つて、これにも驚いた。『史記』は神話を否定したが、「五帝」（黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜）は、伝説

であつて、史実からは相当に遠いと思ふが、これを史実と見て、ここから中国史をはじめてゐる。

黄河上流の黄帝が生れたといふ陝西省で、黄帝を祀るお祭りが、現在も行はれてゐる（NHKテレビ「大黄河を行く」）が、そのお祭りに、省の代表者が黄帝の子孫として祭文をあげてゐるのを見て、それにも驚いたことがある。中国でも、黄帝はじめ堯も舜も歴史教科書の中に生きてゐるのである。

インドについては、「人類史・世界史」の教科書しか見ることができなかったが、それでもその中の古代インド文明については、神話ならびに宗教についての相当の説明が行はれてゐる。自国史であれば、もっと詳しい解説が行はれてゐるにちがひない。インド独立の親と言はれるネルル首相（一八八九—一九六四）が、古代叙事詩の『マハーバラータ』（バラタ戦争詩）と『ラーマヤナ』（ラーマー王子紀行詩）との二つを挙げて、これこそイ

ンド国民のアイデンティティの源である（ネール著『インドの発見』）と言っていることを見れば、わかるのである。（拙論インド古代文明における神話・叙事詩・歴史の関係）—アジア研究所報（四・四号）

かう見てくると、現代文明諸国の中で、何故日本だけが、歴史教科書から神話を排除するのか、不思議に思はれてくる。もつともこれは「神話」を「史実」として教へよ、などと言っているのでは

(22) 『古事記』の外国語訳（昭和六十三年、平成元年）

ポーランド語訳

読売新聞六二年一月一〇日の夕刊「ジャパネスク新世紀」は、「東欧の日本熱」といふ見出しで、見ると、ポーランド・ワルシャワ大学のコタンスキー教授のことが書かれてゐた。

はない。「神話」と「歴史」とちがふことは記紀の作者たちの知つてゐたことである。

もつとも、ソ連の歴史教科書は、ソ連領土内の原始共産社会・封建社会・ブルジョア革命・社会主義革命といふ階級史観で書かれてゐるので、神話・伝説は否定されてゐる。

日本の歴史教科書はこれにならつたのであらうか。
（名誉教授）

コタンスキー教授は、『古事記』のポーランド語訳のために来日したことがあつて、戸田義雄博士の紹介でお会ひしたことがある。アジア大学にも来ていただいで講演をしてもらった。十年以上も昔のことだから、今度、近況を聞いてまことになつたかした。

記事によると、『古事記』のポーランド語訳を完成して、ワルシャワ大学東洋研究所教授として活躍中、七十二歳、ポーランド日本学の第一人者とある。

コタンスキー教授は、読売記者に、「古事記こそ日本文化の高さの証拠」と語り、『古事記を研究して、日本文化はやはり古事記から始まったと思う』と語って、「熱をおびた口調はとどまることを知らない」と、書かれてゐる。愛国の学者コタンスキー教授の健在ぶりを知って、実にうれしかった。

中国語訳

中国の学者は、日本の古典の研究をやらない、その証拠には、日本古典の英訳は実に沢山あるが、中国訳は皆無だ、『古事記』の訳も無い、”と言つてゐたら、中文大学の譚汝謙教授が『古事記』の中国語訳を送ってくれた。これで私は前言を取消

さなければならなくなつた。

『古事記』（日本）安万侶著 鄒（鄒）有恒・呂元明訳、人民文学出版社一九七九年・北京”とある。

「出版説明」を見ると「本書中訳本曾由本社出版過。這次出版的訳本、是云々」とあり「重新翻訳」とある。前にも訳書があつたのであらう。いづれにしろこれで『古事記』の中国訳も出たことになる。

英米語訳

英米語訳にはチェンバレン訳とフィリップバイ訳の二冊その他がある。チェンバレン訳は、欧米語訳のはじめである。同時に、外国語訳のはじめでもあると言つてよからう。フィリップバイ訳の『古事記』KOJIKIの巻末文献表に次の通りに記されてゐる。

Chamberlain, Basil Hall, trans. Kojiki or

Records of Ancient Matters. Supp. to T'ASJ. Vol. X. 1882. Reprint ed., Tokyo: Asiatic Society of Japan. 1906.

一八八二年（明治十五年）、日本・アジア研究協会会報（*Transactions of the Asiatic Society of Japan*）第十卷附録（一九〇六年—明治三十九年—東京・日本アジア協会再版）とある。翻訳も初めてなら、その「総論」は、ヨーロッパ諸国の神話学的方法をもつてした日本神話研究のはじめでもある。

『古事記』の外国語訳

この「総論」は、独立して、「英人・チャンパーレン著、日本・飯田永夫訳」『日本上古史評論全—原名英訳古事記』として、明治二十一年印刷されてゐる。明治三十三年には、右の書を「更に訂正シテ頒布ス」とある版が出てゐるが、それには、「田中頼庸君、木村正辞君、小中村清矩君、黒川眞頼君、栗田寛君、飯田武郷君、批評」とあつて、同書の頭註に、本文のチェンバレン説に対す

る諸家の「批評」が書き加へられてゐる。原翻訳そのものも、脚註に『古事記伝』はじめ諸説を記入してゐる。問題はいろいろあるが、大きな翻訳であり研究であることに疑ひはない。チェンバレンは日本の近代史学・近代言語学の祖であつたと言つてよからう。

二冊目のフィリップイ訳といふのは次の通りである。

KOJIKI. Translated with an Introduction and Notes by DONALD L. PHILIPPI

東京大学出版会一九六八年（昭和四十三年）刊である。

はしがきに拠れば国学院大学の日本文化研究所の顧問、中でも亀井孝、倉野憲司両博士の指導のもとに出来たものといふので、戦後の古事記研究の成果——特に古代音韻上——が大いに活用されたものと思はれる。フィリップイ氏は近況は知らないが、同書によればカルフォルニアのロサンゼ

ルス生れて、南カルフォルニア大学でアジア研究

のB・A・取得、『ノリト』の著書があり、『古事記』の訳のほかに、アイヌの叙事詩の翻訳を進めてゐるといふ。(一九七七年版 KOJIKI の著者紹介による)

なほ英訳には他に、The National Union Catalog Pre-1956 Imprints に拠ると次のようなものがあるといふ。現物に当つてゐないが、紹介のみしておく。

。ポスト・ホイラー (Wheeler, Post, 1860-) 訳、一九五二年ニューヨーク

。インベ・ヤイチロー (一八六一—一九五二) 訳
著シブカワ・ゲンジ (一八七二—一九二六) 『古
代日本物語—古事記物語ほか』一九二九年、東
京サン・カク・シヤ

なほ馬場辰猪 (一八五〇—一八八八) がロンドン留学中 (明治十年頃) 『古事記』を英訳した、と『日本文学大辞典』にあるが、内容は未調査であ

る。

ドイツ語訳

。カール・フロレンツ訳 『Kojiki』—『神道宗教の歴史的文献』(ライプチヒ、一九一九年) 中の『古事記』(三—二〇ページ) Kojiki・Florenz, Karl Adolf, (1865—)

。木下祝夫訳 『Kojiki』第一巻原典、第二巻ローマ字テキスト、第三巻ドイツ語訳。(日独文化協会並日本学会、一九四〇年、昭和十五年、東京及び伯林にて)

KOZIKI, Älteste Japanische Reichsgeschichte 古事記 übersetzt und erläutert von IWAO KINOSHITA

フランス語訳

。『Kojiki』レオン・ド・シニー編 一八八三年
パリ出版 Le Kojiki Chronique de choses

anciens, Masumi et Maryse Shibata. Paris, 1962.

イタリア語訳

。『Kō-shi-ki』一九三八年マリオ・マレガ編

エスペラント語訳

。KOJIKI (東京) 日本エスペラント協会

周作人(周啓明)訳『古事記』

『古事記』の中国語訳に魯迅の弟の周啓明(周作人)訳のあることを聞いてゐたが、なかなか手に入らなかつた。幸いに中文大学の譚汝謙教授がコピーを送ってくださったので見る事ができた。

一九六三年・北京の人民文学出版社の出版である。新字体で印刷されてゐる。

周作人は、支那事変中、錢稻孫と並んで、日本文学研究の双壁とうたはれてゐたが、日本の敗戦

後に、「国民政府の手で〈漢奸裁判〉」にかけられ、南京の獄に投じられた。共産党の勝利が彼の釈放をもたらし、人民共和国では、魯迅に関する著述、日本・ギリシャ古典の翻訳、香港で発表された自伝等を残したが、政治ならびに道義上の汚名はついにそぞぐことができなかつた。(平凡社『大百科事典』木山英雄)といふ。釈放後も表立つた活動はできなかつたらしい。一九六七年死。

さきに、本所報五〇号(昭和六三年五月二日号)で紹介したのは、同じ出版社の鄒有恒・呂文明訳の一九七九年出版のものである。そこに「重新訳」とあつたのは、この六三年版の周啓明訳に対するものであつたのである。

周啓明は一九六七年に死んでゐるから、本書は生存中の出版といふことになる。

まへがきの「引言」とある文章は、『古事記』の紹介だけで、翻訳の経緯について書かれてゐない。また、巻末の跋(思行)——「関『古事記』」

『古事記』に関して——一九六二年十一月も、

起八重宮垣、啊、那个八重宮垣！

『古事記』の解説であつて、翻訳の経緯についてはふれてゐない。

私には中国詩の良否を論ずる資格がないので、何とも云へないが、一例としてあげてみた。

したがつて、本書によつては、周作人がどのやうにしてこの翻訳を作つたのかはわからないので

韓国語訳『古事記』

ある。獄中での翻訳といふ噂もあつたが真偽のほどはわからない。

『古事記』などのやうな文学的作品の翻訳の良

否は、訳の正誤以上に、訳文の芸術的価値によつて決ると思はれる。

日本と韓国とは言語がよく似てゐる、宗教や文化も似たところが多いので、『古事記』の韓国語訳が待たれてゐたが、一九八七年九月序文、同年十月十五日出版で、次の書が発行された。

一例として、和歌の最初の作品とされるスサノヲノミコトの「八雲立つ 出雲八重垣、妻ごみに八重垣作る、その八重垣を」の訳をあげてみよう。

周作人訳

云気何蒙茸、出云的八重垣、造那八重垣、与妻

魯成煥訳註・古事記上巻

『古事記』の原漢文を併せ載せてゐるので、それを韓国訳で訓むやうな体裁になつてゐる。詳しい補註・索引が付してある。

日韓比較文明の研究に大いに貢献するものであらう。

共居的、那个八重垣呵！

鄒・呂共訳

騰起层层云彩、出云的八重宮垣、和妻同住、造

私は韓国語が読めないのが残念だが、本書の出版を心からお祝ひしたい。それに、かういふ出版には日本から大いに応援してあげてほしいもので

ある。

訳者ノース・ハン・魯成煥氏は、巻末の著者略歴によると、「一九五五年韓国大邱市出生。啓明大学校日本学科卒、韓国外国語大学大学院修了、日本大阪大学文学部博士課程修学、蔚山大学外国学科準教授」とある。

イノウエ・シユンジ英訳『古事記』

知人から頭書の訳書を送られた。初版は一九五八年謄写印刷。私のいただいた本は、一九六六年、山口県田布施町の神道天行居発行の第九版、タイプ印刷本である。第八版からこの形になったと「あとがき」にある。

同じ「あとがき」に、「第九版を出すに当って、亡き妻のこの偉大な仕事に対するねんごろの協力を、思ひ出さないではあられない、彼女の魂に心からの感謝を表はしたい。」(拙訳)と書いてある。一九五八年の初版、謄写印刷と云へば、昭和三十

三年のことで、フィリップ・パイ氏の英訳(一九六八)よりも前である。したがってチェンバレン訳(一八八二、一九〇六)だけが参照されたのであらうから、大変な労作であったにちがひない。発表するのには、謄写版でするほかなかったのであらう。恐らく自筆の謄写版刷であったにちがひない。戦後私も自筆謄写版印刷の歌集を出した思ひ出があるので身につまされた。

本紙五〇号の古事記の「英米語訳」の項のフィリップ・パイ氏訳の前に、本書を入れるべきであった、ここに追補する。

冒頭に訳者の序文(一九六六・九)と、一九六一年八月ニューヨークのパウル・リチャード博士の手紙がかけてある。パウル・リチャード博士がどういふ人か知らないが、手紙の内容は示唆に富むものである。直訳する。

私はすぐさま本書を検討しはじめました。

——神々の国の伝説(サガ)——日本の歴史の

且つ歴史以前のバイブルを、細部にわたって文章を追ひながら。西洋の研究者にとつて、祖先

たち神々のもろもろの行動、行為の深いパターンを洞察することは容易なことではありません。

——彼らのものの考へ方の意味は、彼らの詩的な記録の人生観上のシンボルに具現されてゐるのですから。しかし、本書は実におもしろいのです。例へば、「カ・ミ」といふ二つづりのしるしの中に、相対するものを己れに統一（インテグレイト）する（絶対者）ゴッドといふ概念と、物理的なまた超物理的な、宇宙的なまた超宇宙的な超越的なリアリズムの相補的（コムプレメンタリー）な視点との、深刻な二柱の一元論（バイポーラー・モニズム）を見出すのです。このやうに、神聖な名の中に、見えるものも見えないものもすべての相補ふべき対立者が、象徴的に集められてゐるのです。限りあるものと限らないものと、目に見える物質的なものと主観的

な靈的なものと、「陰」と「陽」の二柱の一元論……本質と形体、無と全と。

今日まで、抽象的な哲学（考へ方）だけが相対するもの一つにしてきた（インテグレイト）のです、——多く古代中国の伝統において。しかし、今や、もっとも具体的な哲学（考へ方）

——新しい医術のそれ——が人類の新しい科学的な宗教となり、相対するものを相補はしめる（コムプリメンタリー）といふ基礎的な概念の堅固な基礎の上に、うち建てられるのです。

ですから、もはや過去の神話的シンボリズムにしがみついてゐる必要はありません。反対に、その深い詩的な意味あひを、現代の明白な正確なテクノロジーの中に、翻訳する、さうして、人類の心を一つに結ぶことが必要なのです。

直訳でわかりにくいのが、相対するもの一つにする（インテグレイト）のではなく、相対するものを相補はしめる（コムプリメンタリー）はたら

きを、『古事記』の神々の行動に見るといふのは、氏の卓見であると想ふ。

翻訳の良否については、これも私にはちかつかないので、例によつて、『八雲立』の歌の訳を例示しておかう。

。Shunji Inoue (KOJIKI) 1958, 1966

Clouds of lucky signs are rising,

Round my new abode for my bride,

Brightly greeting in congratulating

On our happy life in gold braids!

。B.H.Chamberlain (Kojiki) 1882

Eight clouds arise. The eight-fold fence of

Idzumo makes an eight-fold fence for the

spouses to retire [within]. Oh! that eight fold

fence.

。W.G.Aston (Nihongi) 1896

Many clouds arise:

On all sides a manifold fence:

To receive within in the spouses,

They form a manifold fence —

Ah! that manifold fence!

。Donald L. Philippi (Kojiki) 1968

The many fenced palace of Idumo

Of the many clouds rising

To dwell there with my spouse

Do I build a many fenced palace

Ah, that many fenced palace!

ロシア語訳

以上で、英、米、独、仏、伊、ポーランド、中国、韓国語訳が出たことになる。ロシア語訳は、あるといふが、現物が見つからない。(平成元年十二月記)

第九編
論說・講話抄

(昭和四十三年～平成二年)



第九編 論説・講話抄

青々論壇（卒業生会青々会機関誌『青々会報』学寮機関誌等）

- (1) いはゆる「神話の復活」について（昭和四十三年）
- (2) 日本思想とB・H・チェンパレン、和歌、その他（昭和四十六年）
- (3) 短歌のすすめ（学寮研修会）・（昭和四十八年）
- (4) ネパール・インド初印象（昭和五十一年）
- (5) 建学の精神について（学寮委員研修会）・（昭和五十五年）
- (6) 昭和天皇の最後のお歌（平成元年三月）
- (7) 平成二年年頭の今上御製を拝誦して（存稿未発表原稿）（平成二年一月）

(1) いはゆる「神話の復活」について（昭和四十三年十月・青々論壇）

(一)、「教育黒書」

最近「教育黒書」といふ、いやな感じの題の本が出た。「教育の反動化・軍国主義化の実態と全貌の告発」といふ宣伝文句で「国防教育、指導要領改訂、教科書統制など一連の安保教育体制の全貌」と実態を総合的に事実資料で説明し、民主主義教育の課題を提起」と新聞広告に書いてあった。

たまたま梶村さんから「神話教育」について書くように言はれてゐて、資料をさがしてゐたので、「指導要領改訂」とあるのが目だったのである。編者は「宗像誠也・野村平爾・宮之原貞光編」となつてゐる。

編者の宗像誠也氏は東大教授で日教組の指導者として——あるいは日教組のお抱へ講師として有

名である。野村平爾氏は早大教授、労働法専攻のマルキスト学者で、日教組の反体制運動を呼びかけてゐる。宮之原貞光氏は日教組委員長である。

つまり、この本は「神話復活」などと騒がれた小学校教育課程改革を含む指導要領改訂に対抗する日教組の指導理念を示すものであらう、と考へられる。それに「指導要領改訂などの……全貌と実態を……事実資料で説明し」と宣伝文に書いてあるから、少くとも話題となつた「神話教育」を含む「指導要領改訂」の「事実資料」が掲載されてゐるに違ひないと思つて取り寄せてみた。しかし、問題の小学校教育課程の改善に関する「教育課程審議会の答申全文」（昭和四十二年十月三十日発表）も、「新しい小学校学習指導要領の案」（昭和四十三年



「青々会報」昭和60年3月号

思っていない。
 しかし、平和と民主主義と人間の尊厳や基本的人権の尊重は人間として誰でもが持たねばならぬものである。それ故にこうした教育の基本的姿勢が、憲法や教育基本法の精神となつているにもかかわらず、祖国愛とか国防意識とかいうことを強調して逆転させ

六月発表)も、「学校教育法施行規則の一部改正および小学校学習指導要領の改正」(昭和四十三年七月十一日・文部省告示)も、掲載されてゐない。さうして、概括的にこんな批評を加へてゐる。「今年になり、一九七〇年安保問題を目前に控えて小学校学習指導要領を改訂して建国神話と天皇敬愛とを謳い、一方で明治百年のお祭り。

……安保教育体制と私が名付けたのは右のよう
 な一連の実態を総括してのことなのである(「宗
 像誠也氏」「安保教育体制白書」なるが故に、「教
 育」の内容が、軍国主義的反動的だから、「白書」
 に代へて「黒書」だといふのである。
 また、野村氏はかう言ふ。
 「……私は「反動」などという言葉を無制限に使
 うことは決して好ましいとは思

ること、科学的思考力を神話によってあいまいにすることは、やはり「反動」と呼んでもいいのだと思う。」

野村氏の論文の題目は「教育の反動化・軍国主義化と教育労働者」といふので、お里が知れるといふものだ。

宮之原委員長の論調も同じやうに独断的で、

「政府・独占は過去十数年にわたって戦後の教育の中心理念である平和主義・民主主義を空洞化することに力をそいできたが、彼らは今年の『明治百年』の慶祝騒ぎのなかに教育と教師を巻きこむことよって、一気に『教育で始末する』という考え方で決着をつけようとしているのだ。そして、彼らはすでにここ二、三年そのための布石をしいてきた。

すなわち、『期待される人間像』づくりをめざして、昨年十月の小学校教育課程の大改訂の中心目標に、『国民の育成』と『神話の復活』

をおき、近く明らかにされる中学校の教育課程の大改訂で『公民科』設置を中心にするなどして、往年の『富国強兵』の素材となった『忠良なる臣民』を連想させる一連の布石をうちおわって、『建国記念の日』設置二年目の今年にその仕上げを期待している……。

いふなれば、彼らはこのように組織的・計画的に推し進めてきた教育の権力支配・反動化と軍国主義を『明治百年』、『沖繩問題』、『ベトナム戦争』という政治的命題の中で、こみにして政治の暴力で始末をつけようとしてきているのである。」

だから『日教組』は『具体的行動』として、いま全国で『総学習・総抵抗』の運動が取り組まれているのである、と書いてある。

わかりにくい文章だが、要するに、今度の小学校指導要領の改訂は『政府・独占』（この言葉ははっきりわからないが、政府は独占資本の代弁者

として人民を弾圧する権力である、といふ意味らしい。共産主義の見解にもとづく言葉で共産主義者以外にはこういふ言葉の使ひ方はすまいが、教育の反動化と軍国主義化とを進める権力行動である、と断じて、日教組はこれに「総抵抗」すると宣言するわけである。

他にもいろいろ問題はあるが、いまは主として神話の取扱ひについて考へたいと思ふから、小学校指導要領改訂について論をすすめよう。

そもそも、東大の教育学教授宗像センセイとか、日教組委員長が、「教育の反動化、軍国主義化」の証拠と名付けて「日教組に結集した六十万の教師」に「総抵抗」を呼びかける「小学校の学習指導要領の改訂」とは、どういふものなのか。

それから説明してかからないと議論にならない。

(二) 小学校教育課程の改善（教育課程審議会の答申）から指導要領改訂まで

昭和四十二年十一月十五日官報。資料版によると、

「文部大臣の諮問機関である教育課程審議会は、小学校・中学校の教育課程の改善について慎重に審議してきたが、このたび小学校の教育課程の改善についての結論を得て、答申した」とあつて、答申全文が掲載された。

それは、

「現行の小学校の教育課程は、昭和三十三年に定められたものであるが、その後における国民の生活や文化の向上、社会情勢の発展にはめざましいものがある。また、わが国の国際的地位の向上とともに、その果すべき役割もますます大きくなりつつある。

このような事態に対処するとともに、将来の

わが国を背負う国民の教育の基礎をいっそう充実するため、次の方針により、小学校の教育課程の刷新を図る必要がある。」

といふ書き出しで、「小学校教育課程改善の基本方針」として、

「小学校教育は、教育基本法および学校教育法の示すところにもとづいて……人間形成における基礎的な能力の伸長を計り、国民育成の基礎を養うものである。」

このため、小学校の教育課程の改善にあたり、次の諸点をとくに強調する必要がある」とし、①②③④の四点を列挙し、

「④家庭社会および国家について正しい理解と愛情を育て、責任感と協力の精神をつちかい国際理解の基礎を養うこと。」

とある。その「具体方針」を各教科別に示してあって、みな至極もつともな方針だと思はれる。

問題の「神話復活」といはれる個所の原文は、「社

会」の中の（中・高学年の社会科）といふ標題の下に

「(ア)歴史に関する学習については、人物や神話、伝承等のとりあげなどにもくふうを加え、全体としてその充実を図る。」

といふ、至極穏当な一文であるのみである。

さて、文部省は右の答申にもとづいて、昭和四十三年六月十九日官報資料版に、「新しい小学校学習指導要領の案」を、「七月に予定される正式告示に先立ち」公表した。「実施までの日程」には次のように書いてある。

「文部省においては、以上の改定案についての各方面の意見をも参考として、本年七月には正式に学校教育法施行規則の一部改正および小学校学習指導要領の改正を行なう予定である。」

そして、問題の「神話」教育に関する点については、「社会」の(2)に、「歴史学習の充実等」の題目下に、次のように書いてある。

「歴史に関する学習については、国家、社会の発展に尽した先人の業績や、すぐれた文化遺産などについての関心と、理解を深め、わが国の歴史と伝統に対する理解と愛情や国民的、心情の育成を図るため、歴史上の人物の働きや代表的な文化遺産などを中心にして、わが国の歴史を重点的に理解させるようにしている。小学校のこれまでの歴史学習の事態には、ともすれば表面的な史実の列挙に走ったり、やや抽象的なとりあげ方に流れる傾向にあったので、このような傾向を是正するため、人物や神話、伝承のとりあげ方などにもくふうを加え、いっそう豊かな歴史の見方を育てようとするものである。

このような観点から、古代から中世にかけての歴史に関する学習の指導にあたっては、日本の神話や伝承もとりあげ、わが国の神話はおよそ八世紀のはじめごろまでに記紀を中心に集大成され、記録されて今日に伝えられたものであ

ることを説明し、これらは古代の人々のもの、見方や国の形成に関する考え方を示す意味を持つて、理解させることとしている。」

とある。学界の定説であつて何の文句のあるはずもない。次に「天皇について」かう書いてある。

「また、わが国の歴史の全般的な指導については、わが国の歴史を通じてみられる皇室と国民との関係について考えさせるよう配慮することとしており、さらに天皇については、国の政治の働きに関する学習において、日本国および日本国民統合の象徴としての天皇の地位について指導するとともに、憲法に定める天皇の国事に関する行為など児童に理解しやすい具体的な事項をとりあげて指導し、歴史に関する学習との関連も図りながら、天皇についての理解と敬愛の念を深めるようにすることとしている。」

そして、七月十一日の官報号外は、文部省告示

第二百六十八号で「小学校学習指導要領」昭和三十三年文部省告示第八十号の全部を次のように改正し、昭和四十三年四月一日から施行する」と改正指導要領の全文を発表した。前述「黒書」が、「反動化・軍国主義化」と批評してゐる個所は、次の諸点である。

例へば、国語教科の中に、話題や題材の選定に当って選ぶものとして、

「日本人としての自覚をもって国を愛し、国家、社会の発展に尽くそうとする態度を養うのに役立つもの」

といふ項目があつて、これが前記「黒書」によると「天皇への敬愛」と結びついて、「教育の反動化と軍国主義化の基調となつてゐる」とされてゐる。

ところが、改定指導要領の原文をみると、この「日本人としての自覚云々」の項目は、国語教材の話題や題材の選択についての観点十項目の(9)としてかかげられてゐるものである。この項目自体、

何の問題もない当然の選択事項の一であるが、それにしても他の項目にふれず、これ一項目を取り上げて「反動化・軍国主義化」の証拠の一とするのは、為にする議論にすぎない。

ジャーナリズムなどで「神話復活」としてとりあげられた歴史教育の個所は、指導要領では第六学年の「1、目標、2、内容、3、内容の取り扱い」の項目の(3)として、次のように書かれてある。

「(3)内容の(2)のイについて、すぐれた文化遺産や人物の働きを中心として指導を行なうに当つては、日本の神話や伝承も取り上げ、わが国の神話はおよそ八世紀のはじめごろまでに記紀を中心に集大成され、記録されて今日まで伝えられたものであることを説明し、これらは古代の人々のものの見方や、国の形成に関する考えなど示す意味を持つてゐることを指導することが必要である。」

なほ、ついでに問題になつたからあげておくが、

「君が代」については、要領第四章特別活動の中の「学校行事」にかうある。

「国民の祝日などにおいて儀式などを行なう場合には、児童に対してこれらの祝日などの意義を理解させるとともに、国旗を掲揚し、『君が代』を斉唱させることが望ましい。」

(三)、「反動化・軍国主義化」

日教組の指導者が異口同音に「教育の反動化・軍国主義化」の証拠とした「改訂指導要領」といふのは右のごとくである。「指導要領」といふのは各教科にわたつてゐて、相当の分量のものであるが、その中から、「教育黒書」が「反動化・軍国主義化」として「告発」した個所が右のとほりである。これが「反動化・軍国主義化」などととても常識では考へられないが、「六十万の教師の総抵抗」を煽らうといふのであるから、もう少しくわしく考えてみよう。

まずこの人たちのいふ「反動」といふ言葉の意味は、ずいぶんあいまいなものだ。「反動」といふのは、「進歩」に対する言葉であらうが、ただの「進歩」ともちがふ、一定の「進歩」があつて、その「進歩」に逆行するといふ意味だらうと思ふ。

一般に社会主義、共産主義の方向に対して批判矯正しようとする動きを彼らは「反動」といふ。最近問題になつたチェコの自由化などもソ連は「反動」ときめつけるのである。一定のイデオロギー、主としてマルクス・レーニン主義に反する動きを、共産主義者たちは「反動」といふのである。したがつて、「教育の反動化」といふ言葉は、具体的な教育の変化を客観的に述べるのではなくて、ある教育行動に対する語り手の価値感を述べたものにしてすぎない。

(二)に述べたやうな、歴史教育の内容の取り扱ひ方の改善、日本の歴史を通して皇室と国民との關係を理解させ、天皇に対する敬愛の感情を持たせ

るやうな教育、儀式に国旗を掲揚し「君が代」を斉唱することが望ましいとする程度の教育は、日本国民育成のために当然なすべきことであつて、これを「反動」と呼んで非難するならば、その人の見地は、故意に国家生活を無視し、皇室に対する反感を煽り、ことさら国家意識を薄弱化し、あるいは歴史教育において人物不在の歴史、すなはち「指導要領」が批判する「表面的な史実の列挙に走つたり、やや抽象的なとりあげ方に流れる傾向」をよしとするものである。これは、日本歴史をそのありのままの開展にしたがつて理解することではなくて、一定の形式つまり唯物史観とか考古学的の時代区画などによつて歴史を解釈しようとする立場をさすものである。

また、日本国憲法に「天皇は日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴である」と規定される天皇を、日本の歴史の全開展に示される天皇と国民とのつながりによつて「理解し、敬愛する」ことが「反動」

であるといふなら、「進歩」とはその否定に他ならぬことになる。野村平爾センセイは「平和と民主主義と人間の尊重や基本的人権の尊重は、……祖国愛とか国防意識とかいうことを強調して逆転」せしめられるといふのだらうか。また、「科学的思考力を神話によつてあいまいにする」といふが、「神話」を「神話」としてみる指導要領の立場がどうして科学的思考力をあいまいにするのだらう。「神話学」といふ学問があることをご存じないのであるか。全くばからしいにもほどがある、と思ふが、それは、この人たちの考へが左翼的な政治的なイデオロギーによつて支配されてゐるからなのである。

次に「軍国主義化」といふ評価も言ひがかりにすぎない。大体、指導要領においては国家についてはふれてゐるが、「国防」についてはふれてゐない。われわれはむしろあきたりないが、国防について書いてゐない文章を「軍国主義化」と評することが

できようか。

軍国主義といふのはミリタリズムの翻訳で、簡単にいへば、軍人ばっこ、軍備優先の政治思想をいふものだらう。宗像氏などは戦時中、国防教育なる訓練をジャステファイしてゐたといふから、「軍国主義」の何たるかは知つてをられよう。指導要領の中に「軍国主義」を見つけるのは困難だらう。

念のため「広辞苑」を引いてみると、「ミリタリズム」一国の政治・経済・法律・教育などの組織を戦争のために準備し、戦争を以て国家威力の発現と考ふる立場」とある。

したがつて、この改訂指導要領に対して「反動化・軍国主義化」といふのは、無内容のお題目にすぎない。要するに、日本歴史の教育を充実すること、国家の意味を説くこと、天皇を敬愛することに対する日教組指導者の反感を露呈したものにすぎない。かういふ思想によつて教へられた児童が、やがて大学生になつてマルクス主義的的革命運

動に熱中するのも無理はないと思ふ。日本歴史をありのままに教はることがないからである。

民主主義とか、共産主義とかが最高理想のようにいふが、アメリカの民主主義も国家の独立といふ点では一歩も譲らぬ態度で、その軍備は同国を超大国として世界に君臨させたのであつた。

軍国主義は、戦後は民主主義の祖国アメリカと、共産主義の祖国ソ連が世界に誇示するところである。指導要領改訂がどこで軍国主義と結びついてゐるのだらう。馬鹿らしくて話にならない。

しかし、この馬鹿らしい考へ方で「六十万の教師」が「総抵抗」をするといふことは本当に恐ろしいことである。文部省が指導要領でいくら方針を定めても、現場の教師が教室でこれを批判し、教育の「反動化・軍国主義化」を児童に訴へれば、児童の心情は逆の方向になるだらう。いや、一般教師はもつと常識的だらう、と考へたいが、教師養成機関の中核としての大学の現状を見ればさうは

いへない。教科書問題の家永三郎教授を擁する東京教育大学の文学部は、今日最も尖鋭な学生運動を進めてゐるし、東京学芸大学では学生活動家が高坂正顕学長を取りこめて失神させたのである。東京教育大学の卒業生が東京都の高校教員となり、学芸大学の卒業生が小・中学校の教員になる。かうして日教組の一員として教育に当るのだから、常識的に考へれば、事実としての「教育黒書」は「改定指導要領」を空洞化し、むしろ国家に対する反撃の材料とすることができる。児童生徒の教育をわれわれはどこに託したらよいのだらうか。本当に恐ろしいことである。

四、神話と歴史

前置きがだいぶ長くなってしまったが、前述のとほり「神話」を六学年の日本歴史の中で教へることになった「改訂指導要領」にはかうあつたわけである。重複するがもう一度引用しよう。社会科第

六学年の「内容の取り扱い」の第(3)項として示されたものである。

「内容の(2)のイについて、すぐれた文化遺産や人物の働きを中心として指導を行なうに当つては、日本の神話や伝承も取り上げ、わが国の神話はおよそ八世紀のはじめごろまでに記紀を中心に集大成されて今日まで伝えられたものであることを説明し、これらは古代の人々のものの方や、国の形成に関する考え方などを示す意味をもっていることを指導することが必要である。」

冒頭の「内容の(2)」といふのは、社会科の「内容」の第(2)項の意味で、第(1)項が国の政治の働き(日本国憲法)であるのに対し、第(2)項日本歴史をいふが、その「イ」は次の通りである。

「イ、大和朝廷の成立、大陸文化の摂取、大化改新による政治の改革と国家組織の確立、飛鳥、奈良、平安などの文化の発展に尽した人

物の業績について理解し、すぐれた文化遺産
や人物の動きを中心として当時のわが国の様
子について関心を深めること」

つまり、第六学年の社会科の内容は、大別する
と、(1)国の政治の働き(2)日本歴史(3)世界地
理となつている。その(2)の日本歴史のイ——す
なわち、日本の古代史の教育について、「日本の
神話や伝承も取り上げ云々指導することが必要で
ある」といふわけである。

これが今日前述のように日教組の指導者によつ
て「日教組六十万教師の総抵抗」をうながすやうな
反響を呼んだところをみると、「日本の神話や伝承」
は今日まで取り上げられなかつたことを意味する
のであらう。あるいは取り上げられたとしても、
非科学的の迷信のやうに教へられたのではなから
うか。さうでなければ、改訂指導要領の記述のや
うな穏当な神話観がこんなに大きな問題になるは
づはない。

元來、日本の神話といふのは、ある学者が「古
典神話」と名付けてゐるように、記紀すなはち『古
事記』『日本書紀』といふ二冊の古典に記録され
てゐる神話をさすのが普通である。

その他の書物にも記録されてゐるが、中心は記
紀である。その点中国の甲骨文字などから推察さ
れる中国神話とか、あるひは新しく探訪された未
開民族の伝承する神話などは違ふ。他民族の神
話については私はよく知らないので何ともいへな
いが、記紀の神話に関する限りは、それが主とし
て「国の形成に関する考え方」を表現したものであ
ることは間違ひのないことである。

一般的にいつて、自民族による神話の記録とい
ふことは国家の形成と不可分なものだと思ふが、
これはもつと諸民族の神話の記録の事実について
調べてみなければ言へない。しかし、記紀に見ら
れる日本の神話を、未開民族の神話と比較して日
本神話が「国の形成」を主題としてゐるから政治的

な作為である、信するに足りぬといふのは、神話といふものは、国家形成以前の未開民族の伝承であるとのみ解するからであらう。それならば記紀の神話は、文明神話とでもいふべきもので、国家の起源を中心にまとめられた神話であつて、神話の断片は未開民族の神話と共通点をもつが、その総合的全体の性質は文明の段階に入つたもので、未開社会の所産ではない。

『古事記』が出来たのが西暦七二二年、『日本書紀』が七二〇年であるから、当時の日本が奈良時代初期で壮麗な平城京を中心に文明の華咲く時代であつたことは、当時の堂塔伽藍の今日に残るのを見れば一目瞭然であらう。

さかのぼつて、最初の日本歴史を編纂されたと考へられる推古朝・聖徳太子の時代を考へてみても、六二〇年は仏教伝来の五三八年より約百年を経過してゐる。明治百年といふ、西洋文明撰取のこの百年間に、日本の文明がどれほど西洋化した

かを考へれば、記紀の神話の成立した時代の国民生活が、文明に取り残された今日の未開民族の生活と同じであるとはとても考へられない。

われわれの抱いてゐる諸観念の中に、記紀の神話にあるやうな観念が残存することがあるやうに、記紀の神話には国家形成以前の未開時代の諸観念が残存するが、それは部分としてさうなのであつて、記紀神話の主題は、あくまで日本国家の形成といふ文明史の事実の説明である。

記紀の神話は、『日本書紀』の「神代上下」―「古事記」の上巻をさすものとみられる。「改訂指導要領」の中にある「伝承」の意味は、歴史・伝承の意味で、両書、神武天皇以降の、記紀の伝説・歴史の叙述をさすものと考へられる。

そこで一番問題になるのは「日本神話は歴史か？」といふ問題である。いまこれに應へるには「歴史とは何か？」といふ問題に應へなければならぬ。小林秀雄氏は「歴史とは思ひ出である」とい

ふ。その考へはさらに「歴史とは歴史文学である」といふ考へにつづくが、さう考へれば日本神話は「歴史」である。しかし、歴史を過去の人の出来事であつて、思想ではない、と考へれば、日本神話是一種の意識であるから歴史事実ではない、といふことになる。

今日流行の歴史科学は、実証主義の名の下に、過去の外面的事実の追求とその抽象的整理とを事としてゐる。それからすれば、日本神話は歴史ではないといふことになる。神は、人間ではないといふことである。しかし、このことは、神話を記録した人にはもちろん、神話を生み出した人々も知つてゐたことである。だからこそ、カミと名付けてヒトと区別したのである。いまさらわれわれが鬼の首でも取つたやうに威張ることではない。さて、過去の出来事が歴史であると言つたが、過去の出来事にはその動機と動機の発展といふ精神的・思想的内容が存在し、また、出来事の叙述

には必ず出来事に対する評価がつきまとふものである。われわれにとつて歴史とは必ずさうしたものであつて、精神的内容をとまわらない単なる過去の事実といふやうなものは無限大であつて、とても人間の認識しうるものでもなく、究明しうるものでもない。われわれは過去の出来事を選択して記憶し、思ひ出すのである。われわれの過去とわれわれとはいつてもそのやうにむきあつてゐるはずである。しかも、われわれが過去に目をむけるのは、未来に目をむけることにほかならないのである。

未来にむかつて努力しようとするなら、そして、その努力に実を結ばせようとするなら、われわれは過去からの自らの姿を凝視しなければならぬ。未来に向ふ目に歴史が意識されるのである。さうでなければ空想にすぎない。真の改革が必ず歴史意識をとまふのは、この働きが人間の心情の真実に根ざすからである。過去と切断された現在な

いし未来といふものは、空想にすぎない。過去は現在につづき、未来は現在の延長以外にはないからである。

そこで、日本の神話は、日本の国家の成立の事実に對する日本民族の反省を表現したものと言へる。

それは、坂本太郎博士の言はれるように、あるいは大和朝廷の統一国家の絶頂期四世紀後半から五世紀へかけての応神・仁徳兩朝の直後に、あるいは六世紀継体・欽明朝の国家的危機に、さらには推古朝の重大転機に、日本民族はその国家的統一の原理を過去の歴史に求めたにちがひない。さうして天皇を中心とする国民生活といふ一点に国家の原理を見出したのであった。

この心は、神武天皇から日本武尊・神功皇后・応神天皇・仁徳天皇たちの英雄伝説として、国家建設に従事した皇室祖先の物語を語り伝へたが、さらにさかのぼって、神々の世界を創造すること

によつて、現実国家生活の永遠の規範を表現したのである。

その意味で、歴史伝説は、歴史事実の直接的な裏付けが予想されるが、神話は、歴史的現実の反映と見るべき点が強いと思ふ。

天照大御神は、皇室の祖先として、全国民からあがめらるべき理想像として創造された神であつて、天照大御神に該当する歴史的人物が、歴史年代に存在したかどうかはわからない。

高天原は、天上の世界に想定された地上の国家の規範的世界であつて、大陸とか朝鮮半島とか九州とかいふ地理上の一地点といふことができない。しかしそれらは、全く仮空の空想ではなくて、日本の国家の歴史のさらにはるか遠くから角ぐんできた国家を生み出した理想であり規範としての意味をもつものである。

したがつて、神話の方が歴史よりもより強烈に日本人の国家思想を表現するとみられるのである。

そこで、神話は、いはゆる歴史的事実としての国家の形成の、内面的思想的な自覚を示すことになる。西暦〇〇年、大和のイハレ地方に大和朝廷の

初代天皇が即位した、といふ記述だけでは、その天皇の地位も性格もそのことに對する国民的意識も知ることができない。それに対して、イザナギ・イザナミ両神の物語には国土や文化の起源を、天照大神と須佐之男命(スサノヲノミコト)の物語には国家の成立と独立とを、天孫降臨の神話は、民族移動や国民国家形成の過程を……一種の模型のやうな形で語るのである。

その意味で神話は、今日使はれる言葉の意味からすれば、歴史よりも文学に近いが、元来神話は文学と歴史の母なのである。神話は歴史の事実ではないが、歴史の眞実であると言った人の言葉が正しいと思ふ。過去から現実を貫いて未来に進んでゆく日本国家の内面的いのちを内側から表現したのが日本の神話である。その意味で神話のいの

ちは今日まで生きつづけてゐるのである。これが日本神話の特徴である。神話と歴史と現在とは一貫する国のいのちの流れである。

われわれは今日、戦前の一部教科書のやうに神話から歴史をはじめめる必要はない。しかし、われわれの祖先が、建国の英雄の祖先神としてあがめた神々の姿に、古代の人々の理想の姿を憶ひ、そこにこれらの神話を語り伝へた雄々しい祖先の心情をおもふことは、正しい国民育成の教育に欠いてはならないと思ふ。さうしなければ全国無数ともいふべき神社の存在を理解することもできない。また皇室と国民とのつながりについても事実と則して理解することはできない。

天照大神と書いてテンシヨウダイジンと読んで何のことかわからぬと言ひ、神社祭祀を迷信くらゐにしか考へない状態は、国民をして歴史から断絶せしめ根なし草のやうにしてしまふであらう。

神話についての私の考へ方は、宣伝めいて恐縮

だが『古事記のいのち』といふ書物に書いたので、足りないところは、参照してほしい。

本文のかなづかいは歴史的かなづかいに拠ったが、それは、現代かなづかには賛成しかねるからである。理由については、人の書き物を引き合ひに出して恐縮だが、福田恆存氏『私の国語教室』を参照していただきたい。

(2) 日本思想とB・H・チェンバレン、和歌、その他

(昭和四十六年十月・青々論壇)

一、チェンバレンの日本思想観

「日本思想史」というテーマを出版界が大きく取りあげたのはごく近年のことである。一昨年に入ってはじめて筑摩書房から『日本の思想』（全二十巻）、中央公論社から『日本の名著』（全五十巻）が、それぞれ叢書として刊行されはじめ、昨

国語教育、歴史教育、——日本人の自覚を養ふべき最も重要な教科がなほざりにされ、左翼思想家に牛耳られた結果が、今日の教育の大混乱になり、やがて、経済的繁栄をほこる日本が、かへつて鉄のごとき必然性をもつて社会革命への道をすべり落ちてゆくやうに思はれて、心配でならない。

年の五月からは岩波書店の『日本思想大系』（全六十七巻）が配本を開始した。各叢書とも継続刊行中である。国民文化研究会の『日本精神史鈔』（桑原暁一著）、『日本思想の系譜』（全五巻、小田村寅二郎編）は、前記叢書の先駆であった。ともあれ、岩波の広告に「一般読書人の日本思想に対する関心も、広汎に目覚めつつあります」とい

A TRANSLATION OF THE "KO-JI-KI,"

OR

"RECORDS OF ANCIENT MATTERS."

(古事記)

BY BASIL HALL CHAMBERLAIN.

[Read before the Asiatic Society of Japan April 12th, May 10th, and
June 21st, 1882.]

INTRODUCTION.

Of all the mass of Japanese literature, which lies before us as the result of nearly twelve centuries of book-making, the most important monument is the work entitled "*Ko-ji-ki*"¹ or "Records of Ancient Matters," which was completed in A. D. 712. It is the most important because it has preserved for us more faithfully than any other book the mythology, the manners, the language, and the traditional history of

¹Should the claim of Accadian to be considered an Altaic language be substantiated, then Archaic Japanese will have to be content with the second place in the Altaic family. Taking the word Altaic in its usual acceptation, viz., as the generic name of all the languages belonging to the Mantchu, Mongolian, Turkish and Finnish groups, not only the Archaic, but the Classical, literature of Japan carries us back several centuries beyond the earliest extant documents of any other Altaic tongue.—For a discussion of the age of the most ancient Tamil documents see the Introduction to Bishop Caldwell's "Comparative Grammar of the Dravidian Languages," p. 91 *et seq.*

AP. VOL. X.—I.

うとおりである。

近代日本の国語学・国文学・国史学の「教師」

ともいうべきB・H・チェンパレンに『日本事物

誌』(Things Japanese) という名著があるが、

その中で「哲学」(Philosophy)の項を見ると、

「日本人は未だかつて自分自身の哲学をもったこ

とがない。昔彼らは孔子や王陽明の聖堂の前に額

づいていた。今では彼らはハーバート・スペン

サーやニーチェの聖堂の前に額づく。」(高梨健夫

氏訳)と書いてある。「日本の哲学者(と称せら

れる人びと)は、外来思想の単なる解説者にすぎ

なかった」(同前)とも言っている。

さて、「哲学」が有るとか無いとか議論するには、

「哲学」とは何かという点で意見が一致していな

ければならない。ところが「哲学とは何か?」は、

哲学上の根本テーマだそうだから、哲学の定義の

問題は、議論がさらに議論を生むことになる。そ

こでいまはまずチェンパレンがどういう意味で

「哲学」という言葉を使っているかを調べてみる。

彼は前記引用文の中で、哲学者として、孔子、

王陽明、ハーバート・スペンサー、ニーチェをあ

げたわけである。また、この「哲学」の項目で、

日本におけるほとんど唯一の独創的哲学者として

福沢諭吉をあげている。また、「儒教」の項目で

は「旧式哲学者」として、仁斎、東涯、白石、徂

徠をあげている。つまり、仁斎、東涯、白石、徂

徠は、「哲学者」ではあるが、「自分自身の哲学」

をもたなかった、「外来思想の解説者にすぎなかつ

た」というわけである。

孔子や王陽明をハーバート・スペンサーやニー

チェと並べて「哲学者」というのだから儒教の学

者を中国の哲学者として認めているわけで欧米に

しか哲学は無いというような狭い考えではない。

日本人の哲学者として福沢諭吉以外を認めなかつ

たのは、諭吉以外は「外来思想の解説者にすぎな

かった」と判断したからなのである。

二、日本に哲学がないという考えの誤り

この程度に「哲学」という言葉を使うなら、白石や仁斎はしばらくおくとして、聖徳太子や山鹿素行や吉田松陰は、——さらに道元も親鸞も、哲学者といふことができると思う。そうして、この人々の思想内容を日本の哲学といふことができよう。私は、チェンバレンのいう仁斎、東涯、白石、徂徠についてよく知らないで、チェンバレンの説の当否を正確に判断できないが、太子、素行、松陰についていえば、「外来思想の解説者に過ぎなかった」という判断はまちがっている。形の上からみると聖徳太子の「三経義疏」は、「義疏」すなわち解説書であり、松陰の「講孟余話」は「孟子」の講義である。山鹿素行の「聖教要録」も、孔孟の教義の抜粋とみられぬこともない。しかし、実際にその文章を味読すれば、解説を超える著者の生きた独創的な思想表現がみられるのである。

「講孟余話」が獄中の講義であり、「聖教要録」が素行配流の原因であることを考えただけでもその独創性は想像がつく。また、別に、太子の「十七条憲法」、素行の「謫居童問」、松陰の「留魂録」などには直接的に独創的な思想が生き生きと表現されていて、どうみても「外来思想の解説」とはいえない。親鸞、道元、日蓮についても同じことがいえよう。慈円の「愚管抄」親房の「神皇正統記」も、とうてい外来思想の受け売りとはいえない。このような日本の思想家たちの独創性が認められないなら福沢諭吉一人を例外的に日本の哲学者といふことはできないはずである。小林秀雄氏の最近の研究「考へるヒント」などをみると、仁斎、徂徠などの言葉にも生きた独創的思想家の面影がうかがわれるので、結局、チェンバレンはその点不勉強だったにちがいない。

チェンバレンは英国生れの英国人であるから、日本語の文法的研究の開拓者でありえても、日本

語の語感の味読は不充分であったかと推察される。そこで右のようなまちがった見解をとったとしてもしかたがない。しかし日本の学者思想家がこれに追随したのは情ない。

中江兆民は「一年有半」(明治三十四年)に「我日本古より今に至るまで哲学無し」と放言している。正岡子規が「一年有半」を「浅薄」と評したのは、こんなところにもよろうが、子規の考えは在野の意見で、兆民の考えが明治時代の進歩的文人の代表的意見である。大学出身者はこれに追隨して、今日に到るまで、「日本には哲学が無い」と卑下しつづけてきたようである。卑下すべきは日本ではなくて、自己の無知であったのに。

明治天皇の東京大学の教学についての御言葉を記録した「聖諭記」(元田永学記、明治十九年)は、大学教育に倫理道德の学なきを指摘せられて、よく知られているが、その聖旨を伝達した徳大寺侍従長の日記によると、当時の東大総長渡辺洪基は

「日本には哲学が無い」と言ったということである。(鳥巢通明氏の指摘による)

三、「哲学」ということば

元来この「哲学」という言葉はフィロソフィーの訳語であることはいままでもないが、この訳語を作った西周は、「本訳中二称スル所ノ哲学ハ、即チ欧州儒学也。今哲学と訳ス、以テ之ヲ東方儒学ニ別ツ所也。」と言っている。これで見ると、「哲学」とは、「欧州儒学」のこと、つまり欧州の人生学をいうものである。また、「此語原ト斐魯蘇非ト名ヅク。希臘語・斐魯ハ求ノ義、蘇非亜ハ賢ノ義、賢徳ヲ求ムルヲ謂フ也。」とも言っている。(小田村寅二郎編「欧米名著邦訳集」——「明治時代の翻訳について」)。

フィロソフィー＝哲学とは「希賢学」(賢人たらんことを希求する学問)で、要するに人生の学問ということになる。「儒」という漢字の意味は、

道を守る人、道を教える人という意味である（「角川・漢和辞典」）というから、賢者、智者と同じことで、「儒学」は「希賢学」すなわち「哲学」と同じ意味になってしまふ。「哲」は「智、賢」の意味である。「孔門の十哲」とは、孔子門下の賢者たちをいう。そこで、西周は「哲学」を「欧州儒学」としたのである。

こう考えれば、孔子も孟子も「哲学者」ということができるし、釈迦も仏教諸派の祖師たちも哲学者といふことができる。勿論、国民文化の影響があるから、欧州哲学と儒学（中国哲学）と仏教（印度哲学）とは同一のものではない。国民文化、民族文化にはそれぞれ独自の思维方法があり、感受性の相違があるであろう。しかし、本質を抽象して、賢を願うとか道を求めるとか、智を求めるとかすとすれば、同じ言葉でいうこともできるはずである。だからこそチェンバレンは、孔子や王陽明を哲学者と呼んだのである。それなら聖徳太

子も最澄も空海も親鸞も道元も、素行も松陰も、福沢諭吉もみな「哲学者」と呼んでいい。ただ「欧州儒学」には、それなりの特質があつて「東洋儒学」と異なる点があるから区別して「哲学」というのなら、それはわかる。「欧州哲学」が東洋にはなかつたというのも当り前のことである。しかし、東洋や日本に「哲学」が無いというとか、「哲学的思索」が無いとか、独創的思索が無いとかいうことになるは大変である。

日本にドイツ哲学を輸入した井上哲次郎（「独逸哲学輸入の思ひ出」——昭和十六年八月「新指導者」）は早く『日本朱子学派の哲学』『日本陽明学派の哲学』という著書を出して、近世日本儒学者の哲学を論じ、東洋哲学とドイツ観念論とを最高の哲学とすると云つて、総合的見識を示した。しかし、これは東大哲学科の学風とはならず、そのドイツ哲学輸入の方面のみが発展して、哲学といへばカント、フイフテ、ヘーゲル流のドイツ観

念論が近代日本哲学界の主流となり、それに英仏の哲学が傍系となるといった程度で、要するに「哲学」といえば、ヨーロッパ哲学をさすことになつた。

東京大学の学科課程でも「哲学科」といえば西洋哲学科のことで儒教や仏教の哲理の研究は、

「支那Ⅱ中国Ⅱ哲学」「印度哲学」と言うのである。そして「日本哲学」とか「日本思想」の学科は無い。

後述の通り、日本の学問は、総合的で実践的直観的傾向が強く、思弁的偏向をきらう傾向が主流をなしてきた。だからいまさら聖徳太子を哲学者と呼んでもはじまらないし、儒教 Confucianism 仏教 Buddhism を、支那哲学 Chinese Philosophy 印度哲学 Indian Philosophy と訳してもつまらないが、中国にも印度にも欧米哲学に劣らぬ深い思索があつたし、また日本にもこれらに劣らぬすぐれた思索があり、その思索が人心をみちび

いてきたものであることを忘れてはならない。

「哲学」という言葉は、欧米崇拜、日本蔑視の明治初期のインテリの風潮と結びついて、爾来、多くの人をあやまらせたと思う。「日本に哲学が無い」という考えがそれである。

四、日本思想史研究の先駆者

大正十三年のころ、東京帝大の文学部国文学科で沼波瓊音講師（一高瑞穂会の創立者）が、「日本精神」の講義をしたいと申し出た。それに対して藤村作教授が教授会にはかつたところ「まだ一個の学として十分に成立していない『日本精神』に関する君の研究を自由講義として容ゆるされることとなつた」（「憶 瓊音沼波武夫先生」より）と書いてある如きを見ると、日本精神史とか日本思想史とかいうテーマが国文学科でさえ主要な科目とならなかつたことがわかる。これは「日本に哲学

が無かった」とする考えによるものであろう。瓊音師の「自由講義」は彼が一高教授になって東大講師を辞するとともに自然になくなってしまった。

この瓊音師の創立した一高瑞穂会の会員となつた黒上正一郎先生が聖徳太子の三経義疏の研究を国文学研究に加えるべきことを主張し、東大国文学科の機関誌ともいふべき『国語と国文学』誌上に、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」その他を發表したのは、昭和四、五年のことである。これは異例のことであつたに違ひない。日本思想の研究はなかなか学界の主流に入つてこなかつたのである。

和辻哲郎教授の『日本精神史研究』（大正十五年、岩波書店）所収の「沙門道元」について、玉城康四郎教授は筑摩書房の『道元集』（昭和四十四年）参考文献に、「それまで宗門の中でのみ問題にされてきた道元の思想及び『正法眼蔵』を、日本思想史の中に位置づけて取りあげた最初の論文であ

る。以後宗門以外の一般の思想家、哲学者が道元を取り上げるようになった。」と書いている。また田辺元『正法眼蔵の哲学私観』（昭和十四年、岩波書店）について、『正法眼蔵』を日本哲学の先蹤として取り上げ、哲学的観点から道元の宗教を考察したものである。」と書いている。これで見ると、道元を「哲学者」ということは、現代の哲学専門家によつても承認されていることがわかる。その承認は大正十五年頃だといふのである。

これより早く、慈円の「愚管抄」の史論をもつて「歴史哲学」としたのは大正二年のことであつたと、松本彦次郎教授はその著『日本文化史論』（昭和十七年）の序文に記している。道元の「弁道話」は「人生と表現」大正二年一月号に、三井甲之氏によつて哲学的に論ぜられていることも注意すべきであらう。

大正初年の『人生と表現』誌上の三井甲之、松本彦次郎氏による鎌倉時代の思想家——親鸞、

慈円、道元たちの研究は、西洋哲学と対照しての研究であったが、学界の主流とはならなかった。

しかし、前述の通り、大正十五年には和辻哲郎『日本精神史』が出て、その後、阿部次郎、村岡典嗣、津田左右吉諸氏によって、日本精神史、日

本思想史の研究が発表されるに至ったのである。

三枝博音氏の『日本哲学全書』（昭和十一年、第一書房）はまだ読んでいないが、「日本哲学」という言葉を思い切って使っている。

戦後には、亀井勝一郎（『日本人の精神史』）小林秀雄（『無常といふ事』、『考へるヒント』）、竹山道雄（『昭和の精神史』等）唐木順三（『中世の文学』等）諸氏の研究が発表されて、学界やジャーナリズムに於ける日本思想の関心が深まってきたのである。

一方、現在の日本の大学における学科はあらゆる方面にわたっているが、「日本思想史」という学科課程をもつのは東北大学文学部史学科のみで

ある（全国大学案内）のを見ても、「日本思想史」が学界には新しい関心事であることがわかる。

五、戦後の日本思想史研究

日本人が日本人の思想の歴史に対して無関心であったというのは、日本の歴史そのものに対して無関心であったのと同じで、これではチェンバレンに「日本には哲学が無い」と言われてもしかたがない。たしかに近代日本の大学出身者は、欧米の科学と哲学と宗教とを追うのに急で、わが立つ大地たる日本思想の伝統に立つべきことを忘れていたのである。その代表が東京帝大の学風である。私なども国文学を専攻しながら、近世儒学者の著作などほとんど読んでこともなく、また道元のものなどもほとんど読んでいない。日本文学史に親鸞や道元の思想表現が登場するようになったのはごく最近のことである。また、学生時代には日

本史の中核をなす歴代天皇の詔勅や御製を精読する機会もなかった。別に多読が学問ではないと思うものの、我ながら恥ずかしいと思う。

さて、戦後は、前記和辻、亀井氏のほかに、左翼的文化人の中にも日本思想の研究業績を發表する学者が出て来た。家永三郎、丸山真男氏などで、岩波の『日本思想大系』も、この家永、丸山、石母田という人たちが編集者になっているのを見ると、その方面からの企画のようにも見える。イデオロギー的の視点を去って、代表的日本思想文献にむかえば、左右両翼の思想的対立など消しとんでしまいうようなものだが、それもゆかないらしい。

小田村寅二郎氏が指摘している（『愛国の論理』

所載——「丸山真男氏の思想と学問の系譜」）のを読むと、丸山真男氏の『日本政治思想史研究』は、

『封建体制の崩壊の必然性』を、上部構造たる

「徳川時代政治思想史」にあとづけるといったもので、しかもそれは、「超学問的動機」にもとづ

くというのだから、これでは「思想史」は研究者の意図によって操作されるにすぎない。「希賢学」すなわち「哲学」でも何でもない。自分が聖賢で真理の把持者で、その真理で過去を裁くというだけのことである。真理でも何でもないのに、たしかに超学問的動機にもとづくものにほかならない。さすがに丸山氏は「超学問」と言つて「超哲学」とは言わなかった。同じはずだが「超学問」とは言えても「超哲学」と言えないところに「哲学」迷信がある。こんなことでは、日本思想史研究もマルクス主義革命運動の材料集めにすぎなくなってしまう。日本思想史から学ぶところはなくなってしまうのである。

また中央公論の『日本の名著』は、大思想家の系列に、日本には哲学が無いと書いた前述の中江兆民を大きくとりあげている。チェンバレンが書いていたが、明治時代の進歩主義者たちは日本人が外国人からけなされるのが好きだったという。

ケーベル博士の書いたものの中には「日本には歴史がない」と言った知識人のことが書かれている。中江兆民が思想家としてもものをいうわけである。

六、短歌の日本思想研究に持つ意義

さて、日本思想と言えば、どうしても日本人の思想表現の文献の価値を判断することになるが、それは要するに、言語表現に対する価値判断ということである。そこに学者の嫌いな「和歌」が登場する。「短歌」が「日本思想」の中心に位置することは否定できないが、近代の大学出身者は、短歌の創作という点で、大方が未経験者ということになってしまった。

さきに述べたチェンバレンは明治十九年から当時の東京帝国大学の教師として日本語及び博言学（言語学）を講じて、近代の国語国文学、国史学の開祖的存在となったが、彼の『日本事物誌』の

「短歌」の項には「一八六八年の革命（明治維新）によつて社会的変革がなされるまでは、日本の紳士の必要不可欠な教養の一つは、詩歌を作ることのできることでありと考えられていた。」と書いている。そして、その上で彼はこの「教養」を否定したのである。彼自身は、日本文学研究に際して歌を作ることからはじめて、国学の研究方法にならおうとしたらしいが、彼に短歌の創作および研究の日本思想における意義を説明し指導する彼の教師がいなかったのである。彼は遂に和歌の価値について味識することができなかつたらしい。

これが、後の国語、国文学、国史学に与えた悪影響は甚大である。歌を詠むことから学問に入るという国学の方法論上の伝統は近代国文学界には伝わらなかつた。したがって、近代日本の学問——文化科学とか精神科学とか呼ばれる——人生の学問の中に、歌をよむという教養は入ってこないことになった。大学出身者がカントやゲーテを

知らないで笑われることはあつても、歌が作れなくて笑われることはない。

歌は日本独特の道である。歌の価値がわからないと、日本独特の精神の価値はわからないだろう。したがって、日本の国がらの価値もわからなくなる。日本人が、その建国創業の日から今日まで、もつとも広汎な国民同胞の間に通ずる表現形式として、あらゆる階層あらゆる職業、老若男女がうたいかわしてきた心の通路がわからないということになると、日本人の心のわかるはずはない。

『週刊時事』の昨年元日号から連載された小田村寅二郎氏の「日本思想の系譜」は、日本思想史のはじめに、スサノヲノミコトの「八雲立つ出雲八重垣」の歌を置いて、そこからはじめている。突飛に見えるが重大な指摘である。物量本位の物質主義で考えれば、この小論文が、岩波書店

の『日本思想大系』に対抗しうるわけではないが、質的にみると、明治以来の日本思想史研究の誤りを正す画期的な論文になったと思う。理由は前述の通りである。この論旨は敷衍されて近刊の『日本思想の源流』（教文社刊）となった。

同じ趣旨はまた、近刊の同氏編『新輯、日本思想の系譜』（時事通信刊、上下二巻）の大冊にあられて、その中核として「歴代天皇の御歌と時代背景」を、古代、中世、近世、近代各編の冒頭に置くことになった。

日本思想史の文献資料に、歴代天皇の御製を掲げたことはそれだけで正に画期的な事業であり、素晴らしい発見であつて、日本思想の研究と実践とに洋々たる展望を与えることになったのである。両著の内容についてはいずれ稿を改めて述べてみたい。

(3) 短歌のすすめ (学寮委員研修会講演・昭和四十八年三月)

歌の話をするようにというお話がありました。

歌のはなしなんか聞きたくないんじゃないかと、いうことを言いましたら、いろいろ研究した結果、今日は歌をみんなが作るんだというお話で、皆さん全部が歌を作るということであれば、それでは行ってお話しようということになりました。諸君の方でどの程度徹底しているのかよくわからないのですけれども。——従ってこの歌の話というのは、ただ聞いてそれに対して感想を述べたりするということだけではなくて、みんな歌を作る、それで、作るための話だという風に私は諒解しています。それで良いでしょうか。

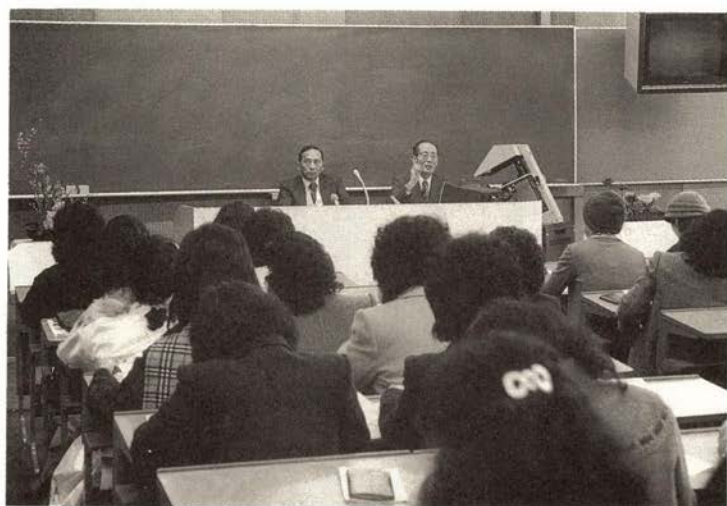
それではひとつ聞いていただきたいと思います。歌を作ることについての話というのは、私もち

ろいろ頼まれて若い時からすることがありますけれども、今度特に考えたのは、こういう寮生の指導者諸君の研修会のような所で、しかも歌を全然作ったことのない人が集ってきている、ともかく一度作ってみようということで、こういう話をするのは初めてのことです。これは大きなことだと思うのです。

大体、明治になる前までは、歌を作るといふことは、学問の中心に考えられていて、学者はもちろん、教養のある人は必ず歌を作るといふことになつてきていたんです。

で、これはよくお話することなんですけれども、戦国時代の武將は、本当に荒々しい連中が多くて、学問もないし、優しい歌を作るような心は持っていないんだろう、——秀吉とか家康とか、信玄と

か謙信とか、そういう人達は無学で歌を作るなど
ということとは、到底考えられない、こんな風に考



韓国研修団に対する講演「日本文化について」(裴徳煥先生と)

えていると思うんですが、しかしそういう人達を
みてみると、実際には、当時の専門歌人というの
ではないのですが、その時代の歌としては最高級
の歌を作っているということが、ハッキリとわ
かっているんです。

それでこれもよく知られた話ですが、江戸城を
作った太田道灌が狩に出ていて、急に雨が降って
きたので、とある農家に入って、蓑を借りたいと
言ったというんです。そしたらその農家の娘が、
山吹の花が咲いていたのを折って差出したから、
太田道灌が怒った。蓑が借りたいと言ったのに山
吹の枝を出したのですから。蓑一つ貸せないのか、
非常に不親切だといってぶりぶり怒って帰ったと
いうんです。そしてその話をほかの人にしたらとこ
ろが、それは

七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無き
ぞ悲しき

という有名な歌があったというのです。——七

重八重に山吹の花は咲くけれども実がならないということで、花は咲くけれども、実が一つもないのが悲しいんだ、と。こういう意味があるので、その実というのを、この「実の一つだに無きぞ悲しき」にかけて言った、とこういう事なんです。実が一つも無いといって山吹を示す事によって——これは懸詞(かけことば)といって一種のしゃれなんですけれども、——こういうしゃれの歌を作れという意味でいっているのではなくて、貧しくて養もありませんからそれで貸してあげられないんですと、こういう事をいったというわけです。今の諸君は知らないかも知れませんが、我々の頃は、この話は小学校の読本か何かに出ていて、有名な話になっているんです。

そして江戸城を作った太田道灌は、その後その話を聞いて非常に恥ずかしく思って、自分の教養というのはあの名もない貧しい農婦の教養に及ばなかったということで、一生懸命に歌を作るよう

になって、ついに戦国時代の初めを飾る武人としての第一級の歌人に成長するわけです。

この話の意味はどういうことかというところ、結局、戦国時代の各地を領して、政治的指導者あるいは支配者になっていった人が、歌についての教養が無いということを取じいって、その教養を身につけるような勉強をしたと、こういう事になっているんです。従って太田道灌以来の武将は皆、歌を作る勉強をしているわけです。

今日の言葉で言えば、西洋文明の吸収に急で、日本の文化というものを忘れた、日本人の心というものを忘れてしまった、そこで改めて日本思想や日本精神を学ぼうというようなことですね、これとよく似た話になっているわけです。こういう話は他にも沢山あります。これはその中の一つのタイプを構成しているんです。話の中の名も無い農家の娘というのは、これは日本人が永く土着して伝えてきた文化を持っている人という事なんです。

すね。そして太田道灌のような人は政治的指導階層にある人であって、勿論漢文で書かれた中国の学問をしているわけですから、外来の学問というものはしていたに違いない。しかし彼は、農婦、農家の娘のなかに宿っているような、そういう日本本来の精神というものを持っていなかった、それに目覚めるという話なんです。

ついでにちよつとそれに似たような話を一つして、この話の持っている意味を付言しておきたいと思ひます。これは諸君もよく読む本ですから、また名前くらいは聞か映画なんかでも見た事があるでしょう、ドストエフスキーの「罪と罰」という有名な小説のことです。小説ですからよく読む事によつて、我々は、その中からいろいろなことを感ずるわけですが、これを一つのタイプに考へてみると、ラスコリニコフという極めて近代的な社会主義的人間が、ソーニヤという娼婦の魂に目覚めるという物語なんです。ラスコリニ

コフという人が自分の頭の中で考へて、イデオロギーから人殺しをする、そして、ついに、極めて貧しく苦しい境涯にあつた一人の少女の純な魂、——ドストエフスキーはロシアの魂とこういう風
に考へているわけですよ。——そういう魂によつて救われるという……これが「罪と罰」の全体のタイプなんです。これに似た話がちょうどいまお話した、——時代なんかも違っているんですけど、どわれる方もあるかも知れませんが——太田道灌の物語の中にあるというわけです。

さて、歌というものは、日本文学、日本文化そのものといつてもいい、そういうものです。日本文化の中核を形造つてきたものであつて、それが我々の文化の底にあつた、また、あるんだと、考へていただきたい。ところがごく大ざっぱに言いますと、要するに、近代の大学、あるいは大学を中心にするものの教育というものは、もつぱら知

識を与え、また学ぶというそういう傾向にあって、しかも知識学問というものは、西洋の近代の科学を中心にするものになりましたから、そこで、日本では日本文化の伝統を身体に吸収するというような事は、重んじられなくなる。

明治以来の大学の学問の中からは短歌というものが外に出てしまったということなんです。これはくわしくお話することもできるんですけども、大雑把に言えば、江戸時代までは日本の教養の中心であって、誰でも、学者になる人でも、ならない人でも、あるいは武士でも、それから町人でも、坊さんでも儒学者でも、みんな歌を詠む事を教養の中心として考えてきたものなんです。明治以来そういうことがなくなってしまうと、そして短歌が、少くとも大学出身者の中からは除外されてしまつて今日に至っているわけです。

ところが今度亜細亜大学の寮の研修会があつて、その寮の研修に参加する学生諸君がみんな歌を詠

んでみようということですから、だからそれは、極めて画期的なことである、こういう風に私は考えて、その意味というものを大きなものに考えているわけです。歌を詠むということの意味はこれで大体のことはおわかりいただけたんじやないかと思ひますが、細かい事についてもいろいろ説明したいことがあるんですけども、それは省略いたします。

それから歌を詠むという事は一体どういう意味があるのかといひますと、(歌の作り方というのはいすべにして)、その一番大事なことはどういう事かという、それぞれめいめいが自分の感じたことを歌に詠んでそれを人に伝えること、それから自分も人の歌を詠んで人の気持を知ることなんです。これはもうごく簡単なことなんですけれども、しかし世の中でこれほど大切な事はないわけでしょう。

お互いに気持が通じ合う、自分としては人の気持を知り、また自分の気持も知ってもらいたい、そうしてお互いの心が通うということ——心が交流するということが、これが非常に大事なことで、人生というのはそうやって成り立っているわけです。

一つの事例を挙げて考えてみてもいい。例えば、同室の者同士がお互いに心が通い合わなければ、毎日不愉快だろうと思うんです。これは家庭内だって同じでしょう。自分の気持が親に分らないと自分で考え、親の方でも親の気持が子供に分らない、という風になってしまえば、毎日不愉快な思いをしなけりやならない。ところが、それが分った時に——なかなか分ってもらえないという気持をずうっと持っていた時に、自分の気持が分ってもらえたといつて、泣いて喜んだりする。それは気持が通うという事です。これは世の中、人生で一番大事なことなのであって、その事を歌

というのは中心にしているんです。

ですから歌というのは叙景の歌だとか、自分の感情をよんだ歌とかいろいろありますけれども、その中で恋愛の歌が歌というものの中心になつている。それはなぜかという、一人の男と一人の女とが、それまでお互いに知らなかった人間が心を通わせあうという、知らない人間が二人いてその間に心の通路を求める。恋愛とはそういうものですから、従つて恋愛の歌は、歌の中心になるのです。そのことは今言つたような意味があるんです。恋愛の感情というようなものを中心にして、親子の感情をよんだものもあるし、また友人と心を通わせあうというような、そういう歌もあるし、そういうものがそれぞれ自然に写つて、自然と自分とが、いつてみれば心を通わせると、こういうようなものが歌の内容になつてくるわけです。だからこれは人生というものの中で大変重要なものだと考えてみて良いと思います。

これで大体歌についての概論を終りますが、私の『短歌のすすめ』という本を皆さん読んで下さったようですが、それに今言ったような事が細かく書いてあります。何かこれについて質問などを出してくれると、大変話し易いことになるんですけども、何か質問はありませんか？

この本を読んでもらったという段階で、何か聞く事はありませんか？と言うと、たいてい質問が出ないのが例ですから、これも仕方のないことです。しかし本をよんで、あつたら一ヶ所くらい質問をする程度に考えて読んでもらいたいと思いますね。何か質問はありませんか？

それでは質問はないということで先へ進みますが、これがたとえば水泳についての講習会かなんかで、話が終つたらみんな海へ飛びこんで、泳げる者も泳げないものもみんな背の立たない所へ飛

び込むんだと、こういうような話であれば、おそらくまだ海に入ったことのないような者は、夢中になって聞くだろうと思うんですね。しかし歌なもんだから、まだ作ったことのない人もニコニコ聞いていますけれども、しかし実際に作るとなると、作らなきゃならないという事はなかなか大変な事で、たゞ人の歌をなぞつてもしょうがないでしょうから、今度は歌の本当の作り方を本日は伝授いたしますから、よく聞いて実際に作る時にあまりもたもたすることのないように、それから大學生として恥かしいような歌ができないように、しっかりとひとつ聞いてもらいたい。

ところで、歌の極意も口で言えば、ごく簡単で、ともかく自分の思う事を思っている通りに詠むという事。……しかし、なかなか思っていることを思っている通りに言うという事はできないもんですね。

何故できないかと言いますと、まずこんな事を

言ったら人から笑われるんじゃないかという、こういう考え方があつた。それは、そういう事を歌によめば人に笑われます。それは本当にそういう風に考えているという所まで行っていないから。自分の考えはばかばかしいんだと思つてゐるんであれば、人もばかばかしいと思つたのであつて、自分が真剣になつてある感動を覚えてゐる時には、それをよむということは人に笑われるというような事のない、もつとせつばつまつた思いというのが大事なんです。で、そのせつばつまつた思いというものを自分が感じていけば、たとえみんながそれで笑うような事があつても、自分は本当に自分の気持を述べるんだというふうになる。思つた事を思つた通り述べるという事は極く簡単な事のようにすがなかなか出来ない。思つたものは切実なものでなければいけない。普通感動という言葉をしますが、感動するとか感受性というものゝが非常に大事なものだと言つて

おります。感動するとか、感受するとか、感激するとか、そういう事が人生では本当に大事なんです。感激するというのがあつたから人間というのは生きていられるわけです。これは先程も言つたように自分の気持が人に通ずるといふ事もそうだし、人の気持が本当によくわかるということも、これも感動するといふ事ですね。人生というのは、感動することがあつたからそれで生きてゐるのであつて、感動することの無い生活、感受するといふ事の無い生活というものは、いずれにしろ実に殺伐たるもので、何んとも言ひのない荒涼たるものになるわけです。だからこの感動するといふ事は大事なことです。感動した事を歌によむといふ事が大事なのです。

自然に向つて歌を作る時——これからこの後で散歩に行つて歌を作るといふ事なんです、散歩に行つておしゃべりなんかしてたらとても歌なんかできません、そうかといつて歌がおつちこち

るわけでもないですから、あちこちきよろきよろしながら、それで、何か感動しないか、なんて思いながら歩いてもなかなか感動しないかも知れません。けれども、ただ自然がきれいだという事はありますから……。

山なんか見ればですね。やはり自然というものは人間の精神というものを導いてゆく力を持っているもので、山を見れば山は美しいと思ひ、花を見れば花も美しいと思うというのが、これが人情の自然です。

花を見て憎らしいとか、その花にむしゃぶりついでとつちやおうと思うようなのは、大体気がちがつている人間です。自然というのは、人間に就いては、人間の間違つた心をいやす力を持つているものなんです。だから散歩に出て歌を作るというような時でも、自然を眺める、ちよつと自然を見てまたおしゃべりをしてるなんてことではなしに、美しい花ならその花の美しさをじーつとなが

めるということになってくるわけで、それが自然の美しさに感動するということでしょう。美しいものに感動する、そういう気持を歌によむという事が大事です。

その感動というものも無理に作つた感動は困りますけれど、しかし始めのうちには、いろいろ自分が経験したことで感動したことを諸君が歌によむうとしますね、で、自分の心もちが人に通わないで非常に苦しかったとか、あるいは失恋して非常に悲しかったとか（失恋というのもやっぱり自分の心が人に通わなかつたことですから）だから悲しかったとか、大体歌というものの中心は、悲しみの心です。人生における悲しみの心というものが、これが歌の中核をなしているものなのです。それは何故かという悲しい出来事があつた時に人は真剣になるからなんです。たとえば、自分が親しくしていた友人が死んだというようなことを経験すると、その人は「死」ということについ

て真剣に考え感ずる事ができてくるものなんです。ですからそういう深い感動を味わったことを、表現の題材にするという事が、これがこの歌の極意といえは極意なんです。しかしそうだからといってみんな悲しい歌をよめという事になると、これもまたどうにも仕方のない、妙な事になってしまいますから、まあ、自然を眺めて美しいと思うような事、これも一つの感動なので、それを詠むわけなんです。

ところが、よく言われますけれども、花が美しいという事は、これは誰でもみんなそうなんです。しかし花が美しいと言ったからって、その花をみんなどれほど見ていられるでしょう。なかなか見ていられないのです。

例を言いますと、国立博物館で「はにわ展」というのがあって、非常に立派なはにわが沢山並んでいました。

埴輪が飾ってある下に説明文があって、これは

大体四世紀頃群馬県で出てきたというような事が書いてある。すると埴輪を一寸見て、下の方の説明文を一生懸命読んで、「ああこれは群馬県で出たのか」とか、「ああこれは誰が書いた絵だ」とかいう事で、埴輪をゆっくり見ている人はそう多くない。

梅の花がきれいだという所でも、それじゃあ梅の花を五分くらいじっと見ている人がいるかという、案外ない。ただ遠くからちよつと見て、ああきれいだなと思って、そしてすぐ忘れてしまふんですね。それで、心はどんどんどんどん他の所に行ってしまう。その美しい自然というものを本当に心で味わってみるといふ事が、ゆっくり味わってみるといふ事がおろそかになりがちなんです。

それでその自然というものをゆっくり味わうという心の持ち方、山を見て美しいと思つてじつといつまでも山を見ているという、その時、心で味

わっているものは、他の事を考えちゃ別ですけれども、五分間くらいでもじっとその美しさを味わう事ができれば、その人はそこで何を見ていたかという、山だけじゃないんです。山と一緒に自分というものをそこでじっと見ていることになるんです。

先程お話したように、例えばある悲しい経験をした、その悲しい経験を歌に詠もうとして、そしてその事をもう一べん自分でじっと思いかえしているという時に、人はそこに何をみているかという、自分の経験というものを見ているわけなんです。

自分の経験を見ているという事は何をみているかという、言ってみれば自分そのものを見ているという形になるわけです。それで自分で自分を見た姿というものが、歌になったり、言葉になったりしていくという事なので、その経験というのが非常に大事な経験なんです。

自分で感動した事を言葉に現わそうとするけれども仲々うまい言葉が見つからない。しかし何んとかいい言葉を見つけようと考えて、そしていろいろ頭の中で言葉を選択して、そして努力して、自分の感じというものが何んとかうまく言葉に出るようにと思って、いろいろ努力するわけです。

で、その努力しているということがどういふことなのかというと、その時に自分の経験というものを思い返して、自分の経験と言葉とが一つになるように努力するわけです。そして言葉が自分の感じていることと一つになればそれは「まこと」というものなんです。それが「まこと」というもので、俺はまごころがあるとかないとかいう事は問題外なんです。まごころというものは誰にでもある。そのまごころというものを正しくそのままに言葉にする事ができるかどうかという事が大変な事なのであって、これは努力、非常な努力というものがそこで積まなければならないのです。

この努力というのは終点のない努力です。何時完成するという事がなく、人は生涯その努力をつづけなければならぬのです。自分の本当の事を言うというそういう努力は、年をとっても若くても同じように繰り返される努力です。自分の言葉と、自分の心とを一致させる努力、これが歌の根本なんです。

そこで実際の経験を少しずつお話してみましよう。今朝こちらに来る時に、どんな話をしようかと考えながら来ました。途中でこんな事も参考になるかなと一寸考えた事をお話しておきます。

丁度私の家を今朝出た時、桃の花が、すぐそばの幼稚園の茂みの向こうにふくらんだ赤いつぼみがきれいに見えました。私はよく散歩をします。梅の花とか桃の花とかどれでもきれいだから花見をします。花を見に行くという事は大事な事として私の日課の中に入れていくくらいに考えてます。

深大寺公園の梅なんかもここらではいい梅が咲きますし、その梅を見にいった時に桃がものすごく沢山あって、あの桃が咲いたらどんなにきれいだろうと思つて、一番良い時に行こうと今考えているわけですけれども、それはそれとして、ちょうど家から出てきたら、桃が咲いていたというので、何んとなく心が明るくなって良い気持になつてきて、これを歌に作ろうと考えた。ほんのささいな感動なんです。しかし、その桃がきれいなあとと思つて、今日のように春で天気も良いし何んとなく豊かな気持、それについて歌いたいと思つて、じつと見てきたわけです。幾つか立っている木の向うに全部見えるのではなくて、僅かにです。それも桃がすっかり開いているのではなくて、つぼみが赤らんでいるというような事なものですから、うまく歌にうたえないんです。木々の間に見えるのと歌つたらいいのか、繁みの間の桃という風に言えいいのか、大分考えてバスに乗つ

てこちらに来たわけです。ごくつまらない事なんです。大した事ではないんですけども、そういう経験をみんなしているわけでしょう。一番最初の言葉がどうもうまくできないんですね。それで、これは頭の中でいろいろ考えてきて、あゝそうか、街路樹なんだから、だから木々の繁みとか繁りた木々とかいろんなことを考えたからうまくいかないんで、「街路樹の間に見ゆる榊の木の」、沢山のつぼみですからこれはちよつと考えたわけです。「千々のつぼみの赤らみにけり」。紅色の赤らんだ

街路樹の間に見ゆる桃の木の千々のつぼみも赤らみにけり

とこういう風に、大した歌ではないけれども、しかし自分としては歌になったなあ、という感じがしたわけです。

それで丁度電車が止ったから、とび降りたら、それは国分寺の駅で、立川で降りるはずのものが、

一台遅らしてしまつてちよつとこつちへ来るのが遅れてしまったのはそのためだったので。

しかしそれでも僕は歌がなんとかできたんで非常に気持がさっぱりして、それからあと、そういう気持のもとに、いろいろそこらに花の咲いているのを次々に見ながら歌を作りながらここにやってきました。ここで諸君が歌を作るという事になつていから、従つて僕も歌を作らなきゃならないだろうと考えていたので、そういう歌も出来たんだらうと思います。

普通は最初のことばがうまく出てこないからそれであきらめてしまうわけです。あきらめる場合に二つあるんです。自分が感動もしないのに、涙も流さないのに涙を流したとか詠もうなんていろいろ言葉をさがしている場合は、途中で自分が嫌になつてしまいます。何んのためにそんな事やっているんだと自分の方がよくわかるわけだから、それを人にみせて喝采を博そうと思うなら別です

よ。それは一番まずい事なんですね、人に見せて喝采を博そうとする積りで歌をよむなら、それはやめた方がよい。これは歌が悪い意味で利用されるという例です。

自分がろくに相手の女性のことを考えてもいないのに何んとかひっかけてやろうと思って、そしてよその人の歌なんかを書いて、自分のラブレターの一番最後に、その人間にしてはとんでもない出来のよい歌なんかをのせて人にやるとか、あるいはこんな事を言ったらさぞかし心を動かすであろうというような事を、自分で作ってやってしまう。自分でうそを、はつきりうそと知っていることを努力するという事は、これはもう馬鹿げていますから、だから努力できないことなのです。それから感情が非常に単純な事だと歌にならないんです。腹が減って飯が食いたいなんでいうことは、食べりやあいんだという事になります。それで完結してしまうことは歌にならないんです。

完結できない事がある、例えば、人が死んだ、その人を悲しむという感じは、何をしても慰める事ができない、そこから本当の表現ということになつてくるわけです。

ところが、極く単純に済んでしまうことは、これは一生懸命歌に詠んで努力するより、そこまできけばいいんだから——例えば散歩に行きたいなんていうのも、いくら言葉でいろいろやっていってそんな事を努力するより、実際に散歩に行けばいいんだから。

あの人にあまりりたいななんていう事があったら、それもだめなんですよ、あやまりなければあやまればいいのだから。そういう行為、行動でもって片のつく事、これは歌にはなかなかならない。行動だけでは本当に相手に通じないというか、自分の心が晴れないという、そういう本当のものがいい歌のもとになるわけなんです。

それで、ともかく、自分がこういう歌をうたお

うと思つたら、あきらめずに努力するんです。努力するだけの気持にならないような対象であれば、さつき言いましたようにつまらない。本当につまらないことと考えるなら、自分でやめてしまふですね。

それから、三十一文字にならないで、その途中で終つてしまふ。これは不思議なもので、三十一文字というのはある限界があるんです。だから途中で終つてしまつて五、七、五、七、七なんて数えながらやっているわけですけども、五、七、五でいいいた事が全部終つてしまつた、そうするとあと七、七どうしようかと思ふよりも、自分がやろうとしている事が、言おうとしている事が、まだ十分、本当に自分ではわかつてないんだなと考へて、より深い感動を詠むという事が大事なんですね。

それからもう一つ。二つのことを一遍に一首の中に詠まないということです。これが言葉では簡

単なのでですけども、あつちの事を言つたり、こつちのことを言つたりする。朝雨が降つて夕方天気になった。——朝雨が降つて夕方天気になったというなら歌になるんですけども、朝の事態で詠んで、それから夕方の事態で詠む。五、七、五は朝のことで、七、七は夕方の時のことだと、これはだめなんです。朝こうで夕方こうなつたというなら、これは関係があれば一首になるんですけども、二つのことは歌にはならない。一つのことを歌に詠むんです。

それから一首一文ということをよく我々は言いますけれども、歌は一首が一文でなければいけないです。和歌は一首一文が原則で、俳句は二つのものが一つになるといふことなんです。それが原則で、その原則のところは四十三ページ位からずうつと書いてあつて説明してあります。ちよつとここで読んでみておきます。

「歌の姿は腰折れでは困るので」——歌のまず

いのを「腰折れ」という風に言うんです。「腰折れ」とはどういうのをいうのかという腰が折れている、二つになっているということなんです。上と下が二つになっている。「腰折れでは困るので奈良時代にできた菩薩の仏像のように——というのはこれはやや高級な比喻で、奈良時代の仏像というのは、例えば有名な阿修羅とかその他のいろいろな仏像があります。その奈良時代にできた菩薩の立像はみんなすつと立っている。これが平安朝時代になると、みんなデブデブしちゃって、満足したようなだらつとしたものになってくるんです。奈良時代の仏像は、諸君のように姿勢正しく立っている。まことに姿勢よく「すつくと立っている。」これが「歌の原則」なんです。

「もちろん一首二文の名歌がないというのではありません。前に申しましたように万葉集の中の古い歌などには一首二文の名歌があります。その万葉集でも全体として見れば一首一文

の短歌が圧倒的に多いと思われまます。その他の有名な歌集についてみても同じことがいえるのですから、歌は一首一文、一息で詠めるように詠むことを原則にすべきだと思います。その点から言えば「五、七、五、七、七」の音律は多少の凹凸があつても苦になりません。」

凹凸というのは五、八、五、八、八位になって、五、七、五、七、七とするために妙な言葉を使つてみたり、意味が全然取れなくなつてしまふよりも、字足らずがあつたり字余りがあつても、そうそれに拘泥しなくてもよろしいと思ひます。だんだん歌を作るようになれば何ですが、始めのうちはやつぱり意味が通ずる事が大事です。言葉を縮めたりして、コップなんかをコップにしたのでは困るけれども、多少の凹凸があつても苦になりません。

「一首が分裂しているのが一番困るんです。ですから、歌を書く時にも一首一文の形で書く

短歌のすすめ

べきで、上の句と下の句とを分けて五、七、五
Ⅱ七、七と二行に書くのは「書」としての美し
さを表わすためにした書き方で、元来の短歌の
書き方ではありません。」

これは人に見せる体裁上一首を上下二行に分け
て書くということが行なわれてるんですけれど
も、元来の歌の書き方というのは、一首を一文に
書いていくのが良いんです。それで途中で行を替
えなければならぬんだつたらその所で行を改
めれば良いわけです。

最近私は明治天皇の詔勅の研究に参加しまし
たが、明治天皇さまは、お聞きになったでしょう
けれど、ご生涯に今日残っているお歌の数が九万三
千三百何首というぼう大な歌をお残しになって日
本歴史始まって以来の大歌人、数の上から言っ
ても俗な言葉で相すまないことですが、不世出の歌
聖と申し上げるべきお方です。十万首歌を作っ
たらそれは大変な事になりますけれども、普通はそ

んな事はとても出来ませんから、そういういい方
もできる位大変な歌人で、しかも歌ということに
ついての、歌の意味という事について、本当に深
く解明なさったお方です。

明治天皇がご自分の歌をお書きになった色紙の
ようなもの——余りたくさん無いのですけれども、
人にお与えになる為に書いていらつしやる。その、
今日残っているものを拝見する機会がありました
けれども、それは上下二行書きではありません。
ご自分で草稿として書かれているものはどうか知
れませんが、恐らくそれは一首きれ目なく書かれ
ているんじゃないかと思えます。

明治天皇が十万首残された、そのもとの原稿と
いうのは、おそらく今日残っていないのだろうと思
います。明治天皇は紙を非常に大事になさいまし
たから、それで反故にした書類の裏紙を使ってい
らつしやるということなんです。そこに感じられたま
まをドンドン書いていかれたものようです。人

と話をしておられるような時に、あることについて非常に深い感動があった、と、すぐそこにある裏紙に書かれて、それをお歌所の女官の人が整理した、それが今日残っているんです。九万三千三百何首というのは、その歌の整理されたものの数を言っているわけですけども、その女官が書いたのは全部一行にかいてある。ですから明治天皇が書かれたのは一行に書くものとして書かれたものだろうと思います。

その他に明治天皇が色紙とか短冊なんかにお書きになったものは、行を分けて書かれても、上の句と下の句とに別けて二行に書かれたというものが残っていないんです。途中で行を変える必要が出来た時は、どこでもかまわず行を変えるのです。いわゆる上の句、下の句を分け、五、七、五で切って書くということを、一回もなさない。

昭憲皇太后の方は違います。明治天皇の皇后であられてこの方もまた非常に御歌がすぐれてい

らっしゃるのですが、皇太后の御歌には、書道の面から上の句と下の句に別けてお書きになったものがあります。

しかし明治天皇には今日まで私の見たところありません。恐らく他にも無いと思うんです。ですから、歌を一行書きにする。そうでなければ行をかえるのはその紙の下のところまでいって行を変える、こういう書き方をするというのは歌が一首一文であることをはっきりさせるために必要なことなんです。

そこでそんな事を私が書いてみたんです。例えば石川啄木は一首を三行に書いています。これは歌人としての考えから一首三行にしていますが、この特種の書き方は感心しません。

「上の句と下の句に分けて二行に書いたり、三行に書いたり、またはその他の書き方を考えるより、まず一行に書き下しに書く事を根本にして歌の勉強をしてほしいと思います。何故か

という短歌は一首一文を原則とするからなんです。一首一文について疑問のある人は簡単な実験してみるとすぐわかります。前にあげた一首一文の歌を中途できつてしまうのです。

そこで一番最初に

東の野にかぎろひのたつ見えてかへりみす

れば月かたぶきぬ

というのですね。柿本人麻呂のこの有名な歌を

東の野にかぎろひのたつみえぬ。かへりみ

すれば月かたぶきぬ

これは歌じゃあないということです。これは「東の野に立つみえて、かへりみすれば」というふうに続いていくから、これが歌なんですね。二つに切れてしまったものは歌ではないということです。途中に「。」のあるのと「、」があるのとでは全く違うのです。その次の歌も有名な歌を直したものです。

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士

の高嶺に雪は降りける
これを

田子の浦ゆうち出でて見ぬ。真白にぞ富士
の高嶺に雪は降りける

こういふのは歌じゃないですね。

大海の磯もとゞろによる波のわれてくだけ
て裂けて散るかも

これも

大海の磯もとゞろに波よする。われくだけ
て裂けて散るかも

これも駄目だということ。

さしのぼる朝日のごとくさわやかに持たま
ほしきは心なりけり

これも

さしのぼる朝日のごとし。さわやかに持た
まほしきは心なりけり

これでは歌にならないと言っんです。切つてあるのちやんと立派な歌ではないか。前のとちつと

も変らないではないかというのは、感受性が無いという事です。これはむずかしいのですけれど、前の方は一首一文であつて、全部調子があるので

す。

歌というのは調べで感情というものが表われるわけです。歌というものは、意味はそのことがらを説明しているわけです。歌の調子というものが、感情ですが、その調子というものが一首一文であるということによつて始めて調子が全体としてあるんで、途中で切れてしまつたのでは、どれだけ切れているかわからない。「東の野にかぎろひのたつみえぬ。かへりみすれば月かたぶきぬ」これもすぐ続けているからいいですけど「東の野にかぎろひのたつみえぬ。」しばらくしてから「かへりみすれば月かたぶきぬ。」こういう風になるのでは、その間に完全に調子が切れてしまうわけですね。だから二つになつてしまうという意味なんです。俳句との違いが現われているのは、四十

五ページにあります。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

という柿本人麻呂のこの歌を、蕪村という江戸時代の非常に勝れた俳人が

菜の花や月は東に日は西に

とこうよみかえたのです。これは俳句と短歌との違いを非常によく現わしているんです。「菜の花や」、これで切れちゃうんですね、「月は東に日は西に」というのはこれも一つなんです。「菜の花や」で一句、そして「月は東に日は西に」で一句で、両方合わさつて二句で俳句というものができる。これはどういふのかというと、「菜の花や」というのは地上に咲く菜の花やということですね。「菜の花」というのは諸君も知つてるように菜種油を作るために菜の花を栽培しているんですから、農村の春の風景です。そうして「月は東に日は西に」ということは空の状況でしょう。月が東に出

てきて、日が西に沈もうとしているという状況です。地上の美しい春の風景と、それから天空の非常に広い大自然というものが呼応するのが、「菜の花や月は東に日は西に」という俳句のもっている意味なんです。意味といってもいいですね、感じなんです。だから人生とそれをくるんでいる大自然との対照という所に蕪村は永遠の自然と、この細々とした人間社会とを対照させて、そうしてそこに人生というものの、一言で言えば、はかなさというようなものを詠んだのです。ところで、人麻呂の方は

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば
 月かたぶきぬ

という、東の空の方に「かぎろひ」の——「かぎろひ」というのは「暁の光」、東の野の果てに暁の光がさしこめるのが見えて、ふとふり返ってみると、月は傾いていた、この月は前の歌との関係もあつて満月の月です。それで皎々と一晩、雪の

野を照していて、月が山の端に傾いて、東の空の方では明け方の光がさし込めてきたというのです。人麻呂という人が、時代の前方を眺めながら、ふり返って歴史を回顧したというのが、この歌のもっている内容なのです。つまり人麻呂という一人の人が、自分の時代というものにしつかりと足を立てて、そして時代の前方という未来を望み、また歴史を遠くふり返って見た、そういう人麻呂がもっている歴史感覚がこういう自然を詠む歌から自然と現われ出たというのがこの歌であつて、それはどこに一番よく現わされているかというところ「立つ見えてかへりみすれば」というところが切れないでつながっているという所に、人麻呂という人が前方を見ていると同時に後をふり返って見たというそういう感じが現われたのであつて、前を見たというのがそれで切れ、後をふり返ってみてというのがそれで切れるというのでは、前後をつなぐ人麻呂自身の立っている地点が無になつて

しまう。それを二つに切ってしまうと歌でもないというものになってしまう。こういう事になるのです。

歌を作る時には良い歌というものがみんな心の中にあるものです。そういうものがなければできない。だからめいめい自分がそれぞれ良い歌だと思っているものが心であって、そしてその調子に合わせる感じで、歌をつくるものなんです。全然歌というものを知らない人が歌をよめるかということ、そうではなく、歌というものはいい歌がなるとなく心にあるものです。一人一人これはいい歌だと思っっているという歌を聞いて、それについてお互いに考えてみるという事が非常に勉強になるわけです。

この中で正岡子規の歌が誰でも高く評価する歌ですから百三十八ページの歌を詠んでみます。たゞし、正岡子規のこの歌の背景は、重病人人であったいつ死ぬかもわからない、来年の春までもつか

どうかわからない、自分は今年中に死んでしまうだろうと覚悟して詠んでいる歌で、死に直面している人の歌です。その点は、我々が何十年か先に死ぬだろうと考えている歌とは性質が違いますが、歌の調子というものが非常にいい調子です。歌の模範になるものですね。

佐保神の別れかなしも来む春にふたび逢はむわれならなくに

「さほがみ」は春の事ですから、春との別れが悲しい、「来む春」来年の春に二度と会うであろう私ではありませんから。

いちはずの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす

いちはずの花が咲き出して私の目には今年ばかりの春が逝こうとしている。「今年ばかりの春」というのは子規だから言っているのであって、これは来年はとても命がないと思っっているのであって、それで「我が目には今年ばかりの春ゆかんとす」

となるのです。

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を

見れば悲しも

これもほとんど説明不用です。病む自分をなぐさめ顔に開いている牡丹の花を見ると悲しい。

世の中はつねなきものと我愛づる山吹の花
ちりにけるかも

これは第二句三句のかかり具合がちよつとやつか
いですが、「世の中は常なきものと」「ちりにける
かも」とこういうふうにつづけた方がよいと思
います。人生は無情であると、わが愛する山吹きの
花が散ってしまった。

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵に
かけるかも

別れゆく春のかたみに藤の花のあの長いふさを私
は絵に書いたことだなあ……

夕顔の棚つくらんと思へども秋まちがてぬ我
いのちかも

夕顔の棚を作ろうと思うけれども「まちがてぬ」

——「まちがてぬ」とは「まつことのできない」

という意味です。秋をまつことのできない私の命
だなあ、その夕顔の花を自分が見ることが出来な
い。

くれなるの薔薇ふゝみぬ我が病いやまさるべ
き時のしるしに

赤いバラの花がふくらんだつぼみをつけた、つぼ
みがふくらんできて私の病がだんだん重くなるし
るしの時として、春から夏にかけて、結核だつた
のですから、その病気が重くなる、毎年例でそ
の重くなる時のしるしとして。

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽つみし
昔おもほゆ

薩摩下駄というのは下駄の一種ですから、その薩
摩下駄を、今は病気で寝たきりで庭に立つ事もで
きないけれども、前に薩摩下駄をはいてそして萩
の芽をつんだあの昔の事が思い出されてなつかし

い、もう二度とあゝいう事は出来ないなあ。

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

若松の芽の長いように長い春の日を夕方になって自分は熱が出てきた。

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭へに秋草花の種を蒔かしむ

病気の癒ゆる日も知らずに、せまい庭に秋草花のタネをまかせた。これは子規が亡くなるまで看病したお母さんと妹さんに秋草花のタネを庭にまかせたが、しかしその秋草花を見ることは出来ないであろうという。調子の沈んだ所がある歌ですが、ありのままの事ですし、勝れた歌で、歌の調子を見る面でもまことにいい歌です。

百七十二ページ以後は学生諸君の作品です。この歌を作った人達はもう世の中に出て立派に活躍している人達ですけれども、学生時代にこういう歌を作ったのです。歌を作る時に参考になるだろ

うと思います。

大村合宿にて

忙しい身にありけむに來給へる師の御姿に胸はつまりぬ

いそがしい身であるのにいらっしやって下さったお姿に胸がつまった。

はろばろと疲れも見せず集ひ來ぬ彦根の友も熊本の友も

はろばろと來し友どちの顔みるにいつしか気持は和みゆくなり

ひたすらに眞の道を求めむとする友達はどこにあるなり

過ぎし日の苦しきことも今はただ集ひしことのうれしさに消ゆ

天地の生れし様を思はする空あり海あり山もありけり

琴の海をへだてて見ゆる山路を幼き時に通ひしものを

なだらかなかの山路を越えゆかばわが故郷は
ありと思ふに

のどやかな光をうけて父母は今日も畑に働き
いまさむ

学生諸君のこういう歌をみると、諸君が歌を作る時の参考になるだろうと思います。

歌は一番最初に作るからといって下手な歌が出来、何十年歌を作っているからといってうまい歌が出来ものでもないのです。それはそれぞれの技術が違うから技術の勝れているものは、すぐれている技術を全面的に駆使して歌というものは作らねばならない。技術の無い人は、ない技術なり

(4) ネパール・インド初印象 (昭和五十一年)

カトマンズ

今年の三月二十日に羽田を発って、ネパールに

に歌を作りますから、かえっていい歌が出来るのです。かえって真剣な歌が出来るのです。技術的に言葉を覚えてしまふとかえってその言葉に於いて変な飾った歌が出来るのです。

諸君はこの機会にそれぞれの全力をあげてやってみる、集中して一生懸命にやるという事によってしか、その価値はわかりません。そういうつもりで精神を集中してやってください。失敗するという事はないから。集中出来るかどうかの問題だから、がんばってください。

(教養部長)

向った。カトマンズに直行する飛行便はないので、バンコックに寄って一泊することになっている。その二十日はアメリカ軍のタイからの撤収の日と

のことで、パンコック空港はどうなるのだろうか？

——これが羽田を発つ時の不安であった。

飛行機はマニラに寄つて給油した。マニラでは写真は撮らないようにということだった。機外に出られなかったせいもあつて、何となくものものしかった。

機内から窓ごしに、はじめて見るマニラの風物に目をこらした。

パンコックは心配したようなこともなく平静に見えた。しかし、街の人はどこか浮足立っている——という感じだった。戦争直後の東京——そんな感じがした。

二十一日にカトマンズに着いてホテルに荷物を置き、ひと休みして、すぐトリヴヴァン大学に向つた。王宮前の立派な道路を行くと、道路はさらに北に向つて行く。これがさらに北上して、中共との国境の町コダリに通じ、そこからチベットのラサに通じるということである。

この道路は、中共の援助によつて出来たという。

カトマンズから南へ通ずる自動車道路は、インドの援助によつて出来たのだそうである。これは、ヘア・ピン型の道路でインドの工兵隊の作ったものであるという。

いずれも距離としてはそれほど大したことはないが、ネパールは南北に高低の差がはげしいので、山を越え谷をわたりということが大変である。

ともかくカトマンズを起点として、北に中共援助の道路が出来、南へインド援助の道路が出来ている。ネパール滞在中は何回もこの道路の御厄介になつたが、これが今日のネパールの政治的国際環境を暗示していると思つた。

ネパールという国は、多民族多言語の国だから一概に言うことはできないが、少くとも、カトマンズ盆地は、文明の早くひらけた国なのである。

カトマンズの旧市街は、七・八世紀からの煉瓦建ての町並みが残っていることだし、寺院

の中には西暦紀元前後の創建のものがあるというから、文明は日本などより古いと見てよい。

しかしその寺院というのがまた複雑で、ヒンズー寺院、仏教寺院、ラマ教寺院、土俗の祠堂——が混然として、雑然として並存している。

だから一概に言うことはむずかしいが、文化・文明も、南からのものと北からのものが、このカトマンズ盆地で混合しているというふうに思われる。

ネパール語が、共通語とされているが、このネパール語自体が、——私にはまだ系統のよくわからない言語であるが——チベット・ビルマ語族の土着のネワール語とヒンズー語との複雑に混合したものとと思われる。

地方に出かけると色々な言語が使われているが、人口一千万人ということだから、やがて、共通語としてのネパール語が普及するだろう。

ネパールにはチベット難民が何十万人もいると

いうことである。カトマンズには、一万人いるという。それだけチベットとは関係が近かった。チベット難民のいるところはラマ教の旗が立っているのですね。

ネパールの隣のブータンは、チベット語が公用語であるという。ネパールの高原地方の、タマン語とかグルン語などは、みなチベット語と同じ系統の言語であるということである。

だからネパールの人のなかにはチベット民族に近い人々が多いということになる。カトマンズの市街を歩いているチベット人も多勢見かける。服装ですぐわかる。

現ネパール王朝は、言うまでもなく、グルカ族のシャハ王朝である。このグルカ族というのは、北インドからいまのグルカ地方に入った印政系のインド人が、やがてカトマンズ盆地のマルラ王朝を征服して、ネパール全土を統一した、その民族ということである。

この民族の文化はヒンズー教とヒンズー語系だと思われる。しかしマルラ王朝の文化はネワール語であったということである。

そう考えると、現在のカトマンズの文化と言語の背景には、ヒンズー語とネワール語とがあるともてよかろう。それが混合して、今日のグルカ語すなわちネパール語になっているのであるまいか。

ネパール語は、ヒンドスターニと同じく、デヴァ・ナガリー（ヒンズー文字）で書かれている。ネワール語にも文字があったというので調べてみたいと思つたが、わからなかつた。したがって、ネワール語、ネパール語、ヒンズー語の関係はよくわからない。

ネパール語は、言葉の順序や文法が日本語とよく似ているので、日本人には覚えやすい。しかもネパール人は人種的にモンゴロイドが多いので、親しみやすい。ろくに言語が通じなくても街中に

出て行ってさして不安がない。

話がそれてしまったが、カトマンズという古い文明の都市が、北と南の両大国に自動車道路を通じているのは、ネパールの政治的環境の象徴である。一旦事が起ると、ネパールと中共との国境から、相当数の軍が四・五時間でカトマンズに到着しうることなのである。インドはこれを黙認することはできない。もし万一、ネパールに親中共政権ができるとカトマンズから南方のタライ平原を経て、インドのガンジス平原までだれのように中共勢力が進出するだろう。

インドとネパールとの国境は簡単に越えられるが、ネパールと中共との国境・ヒマラヤ地帯は、監視がきびしくて、簡単に越えられないという。チベット独立運動があるからである。

中共はチベットに対して、モンゴルに対すると同じ、完全な同化政策をとっているらしい。国語も独自の文化も認めないのである。自国文化の代

表的表現者である孔子を認めないのであるから、チベット固有の文化を認めるはずがないとも言える。

しかし、一民族の文化・言語がそう簡単に滅ぼされることはない。チベットの独立運動がおこるのはもつともなことである。

チベット文明というのは、シナ文明の単なる変形ではない。固有の言語にもとづく高度の文明である。この存在を認めまいとするのは、文明共存の原則に反することである。

ネパールはまたその独立を防衛するにちがいない。東洋のスイス——ネパールはそんな風になるのではなからうか。

ヒンズー寺院

ネパールのヒンズー寺院をいくつか訪ねたが、その印象を一口で言うと、良く言えば豊饒、悪く

言えば猥雑である。

「豊饒」というのは、岡倉天心が『東洋の理想』の中で、インドの芸術を評した言語である。インドの芸術というのは、ヒンズー教の寺院を言ったものだと思う。ネパールの寺院も同じである。

ヒンズー寺院には、よく知られているように、男女交合の彫刻がある。ミトラというのである。日本の歓喜仏はただ抱き合っているだけだが、ミトラ彫刻は、陰部が露出しているのが最大の特徴だ。徳川末期の春画の彫刻と言ったらよからう。一時、——いまでも——日本でも騒がれている性交体位とか何とかいうそれが、寺院の欄杆などに彫りこんであつて、とても正視できるものではない。

「春画」は秘密の画であるが、ミトラ彫刻は、空高く仰ぎ見るようになっていた。大らかと言えば大らかだが、みんなで一緒に観賞するようないものではない。

私の泊ったカトマンズのホテルの部屋から、朝早く街路をながめると、街路を通る人たちが、街角にあるお堂に、花をささげたり、呪文のようなものをとなえたり、食べものをささげたり、呪術のようなしぐさをして拜んだりしているのが見える。毎朝のことであるが、敬虔な態度で行なわれているのである。

何だろうと思つて行つてみると土俗的なお堂のようなところで、ヒンズー教のカミさまらしい像が石に彫りこんであつて、その前に男根のようなものが、まつてある。こういった性器崇拜は街のそこそこに見られる。

タライ平原のパイラワという街を朝早く散歩した。ここはカトマンズとはちがつて宗教的雰囲気非常に少ない町で、お堂や寺院など見当らない。しかしどこか寺院があるだろう、と思つて、街の人に聞いて行つてみた。

中央のお堂には、ヒンズー教のカミさまらしい

像が石に彫つてある。その横に、何か変なものまつてある。外形はちょうど洋式トイレそっくりで、その凹形がコンクリートでうめてあつて、そこに丸い石がはめこんである。トイレのカミさま、というところである。

これと同じものが、ジャナカポールのヒンズー寺院に並べてあつて、その前で、背広を着た紳士が敬虔な祈りをささげていた。

これはあとでわかったが、子宮と男根との交合の象徴と見られる。

カトマンズの王宮前の街路に、コンクリートで囲んだ小さな聖地のような場所がある。荒れはたつていて、囲いのコンクリートの壁に落書などしてあつて、きたならしくなっているが、よく見ると、その中央に、樹の根っこをコンクリートで固めてあるのが、何かを象徴しているらしい。その何かが性器であるのは一目でわかる。樹霊ヤクシーは女神である。これと同じ樹根崇拜は、中央高地の

村落でも見る事ができた。その大木の前が祭りの場所であるということであった。そこで改めて私は、箱根神社の「子育て杉」というのが、樹根を女陰に見立てたものであったことを思い出した。

性器崇拜はどこの国の土俗的信仰にもあるもので、それはそれで不思議なことではないが、ヒンズー教ほどそれを彫刻化して豊饒にした宗教はあるまいと思われた。この中の有名なのがインドのカジラホとかコナクラとかいうのである。

カーマ・スートラは、私は猥褻文章かと思つていたが、とんでもない。これはまぎれもなく性の聖典なのである。カーマは愛、スートラは經典の意味である。階級社会の性交体位を規定したヒンズー教の經典が、カーマ・スートラである。

仏教は、この性の快楽を追求するヒンズー教に抵抗したが、遂に破れ去つたのではあるまいか。きびしい禁欲と、空という思想は、この豊饒・猥

雑な文化を抑制しようとしたものにちがいない。

しかし、仏教はその発生地のガンジス河流域からは、消えさつてしまった。ヒンズー教に呑みこまれてしまったらしい。シャカ仏は、ヒンズー教の沢山の神さまの一柱となつてしまったのである。

仏教が、つまりシャカが、ヒンズー教の本拠ともいうべきガンジス河流域の、東北の一角におこつて、南下したことに仏教の運命が暗示されているように思われる。

キリスト教がユダヤ教に容れられないで、ギリシャ、ローマに伝えられたように、シャカの仏教も生国に容れられないで、シナ、朝鮮、日本へと、あるいはビルマ、タイ、セイロンへと伝えられたのであろう。

しかも、シャカの生国カピラ国はシャカの生前に滅び、キリストの祖国イスラエルもローマの治下に呻吟していたのである。孔子もまた魯の国に容れられなかった。世界的宗教の始祖が亡国の英

雄であることは偶然ではあるまい。

たまたまポンペイ展を見る機会があつて、秘儀の部屋という遺物の壁画の写真を見たところ、そこに男根崇拜の様相があからさまに描かれていた。古代ローマの宗教と思われるが、これも文明の頹廢であろうと思つた。ヒンズー教の文明と似ている印象をうけたのである。キリスト教が一夫一妻を主張して姦淫を禁じたのは、こうしたローマ文明の快樂主義に対するものではないかと思つた。

そうすると、現代のボルノ文明というものも、宗教の無力化にともなう文明の頹廢とでも言うほかあるまい。

このボルノ文明はアメリカや北欧などがすごいところから、日本だけの現象ではない。戦後の文明の頹廢は世界的現象であることがわかる。

自由主義は個人の自由意志を尊重するが、自由詩人W・ホイットマンがフリーエスト・アクション

ン・アンダー・ザ・ローズ・デイヴァインFirest
action under the laws divine という通り、聖なる法則にしたがう自由こそ眞の自由である。わがまま勝手を「自由」と言つて、自分の自由を人に尊重しろというような考えは、幼児の考えで、人生觀とか思想とか言えるしろものではない。そういう勝手な欲望——仏教で言う煩惱からの「自由」が尊ばれるのである。本能的欲望のままにうごめくのは、本能に束縛されているというだけのこと
で、自由でも何でもない。自由な精神というのは、とらわれない心をいうのである。平等とはかたよらない心をいうのである。自由平等とは、自分にとらわれない心、自己中心にかたよらない心をいうと思つたらよい。自分勝手とは、むしろ反対の心持を「自由」というのである。

ところが、こういう宗教的教養としての「自由」が、わがまま勝手の「自由」になつてしまつて、エロ文学——とも言えない猥褻な文章が巷に氾濫

して手がつけられない。裸の男女が抱きあう映画が上映され、そのポスターがところどころあらずはり出されている。

こういう文明の頹廢におちいらぬのは、いまのところマルキシズム国家ということになる。ヴェトナムとかカンボチャでは、アメリカ流の文明の頹廢を、ブルジョア文化と言つて排撃している。それはよくわかるが、今度は、思想の画一化をはかるから、マルキシズムを謳歌しないと生きられないという破目におちいる。そこで人はみなウソをつく。選挙をすると九九パーセントの投票率ということになる。日本の戦争中の大政翼賛会の選挙みたいなもので、革命政府の候補者だけの選挙をするのである。

そうした選挙に九九パーセントの投票が行なわれた、ということは、投票しないと殺されるかも知れないということで、投票する人が多勢いることをあらわすのである。そこで人はウソを言わな

ければ生きてゆけない、ということになる。これはエロ文明よりももっと恐ろしい人間精神の荒廢をもたらしたものである。

マルキシズム批判小説、ゲオルギューの『一九八五年』を読むと、マルキシズム全体主義は、性的感覚をも抹殺しようとする。

個人快樂主義のエロ文明と、自由無視の全体主義マルキシズムと——大変なことになってしまった。

ルンビニ

釈迦牟尼シャカ・ムニ生誕の地ルンビニには、バイラワというインド色の濃いネパールの地方都市から行った。バスで一時間半、土埃にむせながらやつと着いた。いわば、タライ平原のオアシスである。オアシスというと、まわりが砂漠ということになるが、乾季の平野は乾き切つて、土砂が

堆積し歩くだけで埃が立つ。砂漠のようだといえるだろう。

シャカ・ムニとは、シャカ族の賢人という意だそうである。そしてシャカ族は、カトマンズ原住のネワール人なのだそうです。ということは、お釈迦さまはネパール人ということになる。もっとも、お釈迦さま——つまり、ゴータマ・シツダルタの生れた紀元前五世紀頃は、まだネパール王国が無かったので、シツダルタ王子の生れたカピラ国は、ガンヂス河流域のコーサラ国の一王国、——つまり古代インドの一国と見ればよい。しかし、シャカ・ムニ誕生の地が、現在のネパール国内であることには意味があると思う。

ゴータマ・シツダルタの生国の言語は何語だったのだろう。サンスクリットであったとは一概に言えないのではないか。——いまのシャカ族はネワール人だというから。ネワール語は、チベット・ビルマ語属に属する。日本語と同じ膠着語である

らしい。

ルンビニ園にはシャカ誕生を記念する白堊の祠堂が立っている。階段をのぼるとコンクリートのテラスになっていて、菩提樹が一本立っている。このテラスの下には古い僧院——『大唐西域記』の玄奘の訪ねた——の寺趾が埋れているのだそうである。靴をぬいでテラスにのぼり、また階段をおりると、地下室のようなところに、誕生仏のレリーフが飾ってある。摩耶夫人の右手の脇の下から、童形のシャカ・ムニの生れおちるところを彫ってある。

外に出て見廻すと、すぐそばにシャカ・ムニが産湯の水をつかったという池がある。アシヨカ王のたてた記念の石柱がある。前三世紀というが、ブラーミー文字の刻文がはつきり見える。

その意味は次の通りであるという。

「デヴァスの最愛の人、ピアダツシ王（アシヨカ）は、即位二十年目に御自身この地に巡幸さ

れた。ブダ・シヤカムニはこの地に生れたので、石垣をめぐらし、石柱が建てられた。バガヴァンはここの生れなので、ルムミニ村は租税を免ぜられ、八番目の地方としての権利が与えられた。」(高田三九三氏訳)

そして、ずっと向うの森のあたりがマヤ夫人の里だという。石柱を見たり、こういうことを耳にすると、お釈迦さまの生涯というものが、なまなましく迫って来た。いまから二千五百年ほど前ここでシヤカ・ムニが生れたのだという感じが強く迫って来たのである。大乘仏教に登場するおシヤカさまは、全く理想化されていて、何か現実ばなれがしているが、ルンビニ園で想像するおシヤカさまは、現実的人格の姿である。

そこでいまシヤカの生涯を地図の上でたどってみよう。

まずシヤカが生れ育ったカピラ国の首府カピ

ラ・バस्तゥーはどこか？これはネパール国内にあると思われてきたが、ごく最近インドの考古学の発表によって、インド・ネパール国境のインド領内、ピプラーワに遺趾が発掘されたということである。ゴードマ・シツダルタ太子はここでヤシオーダラ姫と結婚し、やがてシヤカは人生の無常を痛感して、二十九歳の時、王城を出て出家した。

三十五歳まで修行したが、南の方のブツダ・ガヤの菩提樹の下で悟りを開いた。最初の説教をしたのは、ガヤの地方のサルナート鹿野苑である。

『勝鬘経』の勝鬘夫人(シュリ・マラー)は、コーサラ国の首府シラヴァースティ(舍衛城)の波斯匿王(プラーセナシッド王)と末利夫人(マツリツカー夫人)との間に生れて、孝養をつくし、後、隣国の阿踰闍国(アヨーディヤ国)の友称王(ヤシヨミトラ王)の夫人となったのである。『勝鬘経』は、舍衛城の両親が、大乘をすすめる手紙をアユジャ国の友称王のもとにある勝鬘夫人

に送ったところからはじまる。その時仏シヤカは、舎衛国のギダ太子と給孤独長者の二人が寄進した

祇樹給孤独園——祇園精舎におられたのである。

『維摩経』はコーサラ国の隣国ヴァジー国、ヴァシヤリー市の村落ビヤリに住んでいた大資産家・維摩詰ウアイラム・キールライの物語である。

『観無量寿経』は、マガダ国の王妃韋提希夫人が、その子阿闍世王に幽閉された時の物語であるから、その舞台はマガダ国の首都王舎城（ラージャガハ）である。

シヤカの最後の説法と言われる『法華経』もまたこの王舎城を舞台として説かれたのである。霊鷲山——わしの峯は、王舎城をかこむ五山の最高峰・耆闍崛山である。「わし」というのはコンドル（はげたか）であろう。

そしてシヤカは病気にかかり、ヴァイシヤリーを経て故郷の近くクシナガラまで来たが、その地の沙羅双樹の下で涅槃に入った。サラの樹も菩提

樹と同様、よく見る樹木である。紀元前四八六年、シヤカ八十歳の入滅である。

シヤカの行動範囲は、ガンヂス河（恒河）流域、マガダ国中心の国々で、地図で見るとせいぜい日本の本州くらいである。したがってその足跡は、日本武尊の足跡くらいにはあるまいか。

このシヤカの教えをもって国を治めたのがアシヨカ王で、シヤカ入滅後二百年、紀元前三世紀ごろマガダ国に君臨した孔雀朝（マウリア朝）第三世君主で、やがて仏教が全インドにひろまることになった。

前記の大乗仏典は、紀元二世紀頃、この地で結集され、サンスクリットで記載されたらしい。南方の小乗教の個人救済を主とするに対して衆生救済、平等教化の道が説かれたのであるが、シヤカを中心とする古代叙事詩と見られよう。

これが四・五世紀ごろから盛んに漢訳されて中国にひろまり、五・六世紀ごろ、三韓、日本へと

伝えられたのである。一方、南のセイロンからピルマ・タイに伝えられたのは南伝で、パリー語の經典による仏教である。大乘仏教からは小乗と
言っている。

ところが、今日のネパール・インドは、ヒンズー教が盛んで、仏教はほとんど滅びてしまった。

シヤカの生地ルンピニに立つてシヤカの生涯とその教えを想いみることは、私にはむずかしいことであった。それはちやうど、記念堂の地下に埋もれているという二千年まえの僧院をおもいみるようなものであったのである。

インド

インドはヒンズー教が代表しているように思われる。

ここに入って来た文明は、仏教のようにヒンズー教にとけこみ呑みこまれてしまいか、ヒン

ズー教と混合しないかのどちらかしかない。タジマ・ハールを造ったムガル帝国の建築でも、ニューデリーを造ったイギリスの近代建築でも、インド文明とは無関係に造られているのである。これは、ヒンズー教の中に埋没してしまった仏教の轍を踏むまいとしてなのではあるまいか。

紀元前十世紀ごろから興ったというインド文明は、その豊饒さの故に、何ものをもとかしこんでしまふといった表情である。その点インドはシナに似ていると言えよう。

ヒンズー教では、人が死ぬとその骨は焼いて、ガンヂス河に流すのだそうである。あとに何も残さないということである。

デリーで、ガンヂー翁のお墓に参拝したが、そこに遺骸があるのではない、ということだった。すべてがガンヂスの流れに帰してしまふのである。個人の墓を見ることはなかった。

このことは、現世の富と快樂とを求める信仰と



ガンジー記念碑の前にて（武部教授、梶村教授と）

うらはらである。この世がすべてである。そういう徹底した快楽主義が、カースト制の基盤なのだろう。このカースト制に対して、一切の平等を説いた仏教は力を失ったのである。

キリスト教も、日本や朝鮮やシナのようにはひるまらない。七億のインドの民衆はどうなるのだろうか？と、つくづく思った。

ふりかえって、最近の日本の文明が、エロに明けエロに暮れるその果が、どうなるのかと思つて、ぞつとした。

快楽の追求は人間の本能的な力であるから、これを無くすことはできない。しかし、本能のおもむくままに行動すれば、個人について言えば短命となり、国について言えば亡国につながるほかない。抑制力が働かないと生命は滅びるのである。

こんなことは、誰でも言っていると思うが、インドにいと、そのことがおそろしく思われる。肌でわかるのである。つまり、インドの民衆の中

に、統一的な生命を感じられないのである。インドの民衆の間には、国のいのちを感じられないのである。

ヒンズー語がわかれば、インドのどこでも通じるかと思うと、そうはゆかない。したがって、治安も、国がすべてを保証はできない。——そうになると、結局は、お金ということになる。

インドの商人は執拗である。土産物店の店員など、わずかな土産物売るにも、客の手を強く握ってはなさないことがある。土産物商人はどこでもがらが悪いが、特にインドはすごいと思う。

インドもまたソ連やシナと同じように全体主義的独裁でないとやってゆけないのかもしれない。

ハゲタカ

ネパールのタライ平原——ジャナカプールから農場センターにむかうタクシーの中から、道路わ

きにいるハゲタカをはじめて見た。十数羽ずつ群がっているのが見えた。パニニヤ村という原始的な村落の村はずれに、牛の骸骨らしいのがころがっていたが、牛が死んで、——ヒンズー教では牛を食べることは禁じられているので、手がつけられないが——ハゲタカが掃除してしまったということがある。ネパールやインドには鳥葬があるが、それはこのハゲタカによって行なわれる、とも言えよう。インドのアグラのムガル帝国の古城アグラ城の城壁にも、ハゲタカが群れていた。死んだら、あのハゲタカにおそわれるというのは、気持のいいものではない。しかし野生のハゲタカをはじめて見ることの出来たのはうれしかった。ヒマラヤのことは、多数の人が書いているので、ここには書かない。私のウタを見てほしい。

水と木

ネパール、インドでは、——東南アジアはどこでも同じらしいが——日本人旅行者は生水に注意しなければならぬ。ホテルでも、ボイルド・ウォーターと頼まなければならない。

台湾に行つた時は、中華料理の油でやられたし、韓国では結局、扶余のウナギの食べすぎでやられたので、今度は、節食と決めていた。そのうえ、入歯のかみ合せがうまくゆかなくて、食べようにも食べられない。それが幸いしてか節食また節食で、腹をこわすことはほとんどなかったが、酷暑の世界で生ま水の飲めないのには閉口した。

ヒマラヤから流れてくる水なのだからきれいな水のはずだが、これがいけないとのことである。

今度同行の武部（啓）教授からそのワケをうかがって感心した。——

つまり、日本は火山帯なので、湧き水が火山の

砂礫で濾化されるというのである。地下水の含んでいる有機質の一部が濾化されるために、水がきれいなのだということである。

ヒマラヤなどは、火山で出来た山ではなくて、地球の収縮で出来たシワなのだそうだ。それで、岩の中から出てくる澄んだ水でも、濾化されることがない。だから、硫化……などが水の中に入っていて、これを飲むとたちまち下痢をする、とのことであつた。

なるほど、そう言えば、日本の山は、多く富士山型で、頂上が平らだが、ヒマラヤの山は、頂上が尖り立っている。

日本は火山帯による地震が多く被害も多いが、この、水がきれいだということは、この上なくありがたいことである。

生ま水の飲めることは、つくずくありがたいことである。それが富士山のあの美しさとむすびついているとは知らなかつた。

「清らか」ということは、日本人の美感のもとでもあるし、道徳感情のもとでもある。「にごつている」「けがれている」というのは、不道徳のことでもある。これもきれいな水とむすびついているように思われる。

そう言えば、どこの国の文化もそうだろうが、とくに、水は日本の文化と、かたくむすびついている。

きれいな水の出るところが人の集まるところであり、宗教の生まれるところである。水は人の身心を清めるものである。

神社や寺院や教会——つまり、宗教上の聖地は、ほとんどこの水とむすびついている。

仏教の灌仏とかヒンズー教の沐浴とか、ネパールやインドでも、宗教と水とはむすびついているが、日本の水のような、誰でも飲めるきれいな水ではないようだ。

ネパールの山地の村に入って、村づくりを手

伝っているえらい女性がいるが、そのひとがただ一つグチめいたことを洩らしていた。——この人はきたないということを知らないのじゃあないかと思います、と。

しかし、見ていると、よごれている、というのともちがつているのである。

私は、たまたま早朝、水汲みに行く女性のあとについて顔を洗いにいったが、その女性は入念に顔を洗い、指で歯をみがいていた。また、母親は、朝、赤ちゃんをまっばだかにして、あたまから足からお尻まで、これも入念に水で洗ってやっている。

だから、ネパールのその山村の人たちは、よごれているのはちがう、と私は思っているが、水そのものが日本の水とちがうことはたしかである。乾季のせいもあるが、たまり水のような水を使うのである。

生ま水が飲めるというのは、ありがたいことだ、

と、——ネパール、インドの旅をして来て、つくづく思つたことだつた。

ついでに一言、——草木の繁つていることも、日本の風土の特徴である。

イギリスなど石造の建築が多いので、至極先進的に見えるが、あれは、木を切つてしまったのだ、と、トレヴェリアンという大歴史家が指摘している。朝鮮ではオンドルのために木を切つてしまつたと言われている。これが洪水の原因となつて、土地を荒らしてしまう。木は一番手に入れやすいので、燃料や建築材料として使つてしまうのである。そうすると、大地は荒廃してしまい、それが逆にまた文明をチェックするのだ。

いまイギリスなどでは、勝手に大木を切ると罰

金だそうだ。緑を回復するのは大変なことなのである。日本でも自然林などというのはもうほとんど無いらしいが、あとに人間の作つた森林が残つている。せめてこの辺で立ち止つて、こういう森林をまもらないと大変なことになる。

森の中の清水——これが日本の自然の中心だ。木を使うのに木炭を使ったのがよかつたらしい。祖先が、寒いのを我慢して暮してくれたおかげでいまだわれわれは、緑の多い世界に住んでいられるのである。こういうのをアリガタイ！というのである。

インドやネパールに、大木というのはあるが、森や林は、めつたに見られない。

(5) 「建学の精神」について（寮生に対する講演速記）（昭和五十五年）

「建学の精神」という事について話す訳ですが、

建学の精神は学長が『建学の精神を語る』という

「建学の精神」について

本の中に非常にはつきり書かれている事です。私も学長の云われる事をよく読み、学長のお話を聞き、学長の行動に身近く接して、そしてその精神を学んでいるという事であつて、私が建学の精神を体して、そしてそれを話すという事ではありません。私も、毎日学んで努力していますから、そういう意味では諸君と変わらないと思います。

ただ、最近特に感じている事がある、——それは学生諸君が亜細亜大学の事について、よく知らないという事を感じるので。それは、我々が亜細亜大学の歴史の話とか、大学が扱つて立っている基本的な精神について話をしないという、そういう事もあるのだと思います。

しかし、本も何冊も出ています（『亜細亜学園の歩み』、藤原繁先生著『亜細亜学園生い立ちの記』等）。そういうものをよく読んで、そこから大学がどんな道を辿つて来たかという事を知る努力を

よくやつてもらいたいと思います。

我々が、日本人として生きていくという点でも同じであつて、日本の歴史についてよく知らない、日本人が今日まで辿つて来た長い道筋についてよく知らない、という事であれば、自分が生きていく背景を知らない訳です。そういう事では、自分というものが一体どういうものであるかという事が判らない訳です。従つて日本人として生きていくには、自分達の両親も含めて、祖先達がどんな事をして来たかという事を、よく知らねば、自分の生きていく路線が判りません。

諸君は亜細亜大学の学生として考えてみれば、大学に入つてきて、そして大学の流れの中で生きている訳です。だからその流れが今までどんな風になつて来たかという事が判らないでは、ただ他から一寸来て、そしてそこに浮んでいるという事にすぎません。それでは生きているとは言えないでしょう。だから我々も、色々な事に触れて、大

学の事について学生諸君にお話するという労を惜しんではいけないと感じました。それは、繰り返しますが、日本の歴史についても同じ事であつて、やはり日本の歴史をよく勉強するという事をしなければいけないと、こう思います。

諸君が、そういう努力をすれば、寮に入つてきた新入生諸君も、そういう努力を惜しまないだらうと思います。ところが、諸君があまりそういう努力をしないで、そして新入生に対して、大学の事をもっと知れとか、建学の精神をよく知る様とか云つても、後からついて来る者は、従わないと思います。それは、上級生は口で云っているだけであつて、実際に行なっている事は違つてゐるという事になります。私はこういう事が、(一つの例ですが)リーダーの性質だという風に考えています。こういう言葉があります。「人の言う事を聞くだけでなく、行なうところを見ろ」といいますね。人がどういう事を言っているかという事

よりも、むしろその人がどういう事を行なつてゐるかという事を見る、そうするとその人の本質がよく判るという事です。これは、お互いに随分痛い云い方であつて、口ではいい事を云つていても、行つてゐる事は違ふという事は、これは一番酷いことになりますから、その行なうところを見るのだという事です。ここが、我々が人と付き合つたりしていくところで非常に重要なことだらうと思ひます。従つて下級生は、上級生の行なうところを見、自分達もああいう風にやつていきたいと、こう下級生が思うところを上級生は行なうようにつとめなければならぬのです。

これは友達付き合いでも、こんな事が必ず行なわれていると思ひます。あいつ、いい事ばかり云つてゐるが、やる事は、悪い事をやつてゐる、という事では、指導力というものが無いという事が分かる訳です。だから人にこうしてほしいと思つたら、まず自分が率先してやるという精神が、指導の一

「建学の精神」について

番重要な事だと思えます。これをそうしないで、自分が出来ないのに、人にやらせるという事をやると、これは、やらせられた者は恨みます。上級生を恨み、その結果がむしろ非常に悪い結果になると思えます。だから何でも自分で率先してやる。苦しい事があれば、その苦しい事に自分でぶつかって行くのだ、と。こういう気持で行かない限り、後からついて来る者は、自分の思う通りには——自分の願う様にはならないと思えます。

寮で上級生が下級生を導く、指導するという様な事の上では、これがやはり一番根本だろうと思えます。

そういう事で、大学の歴史あるいは寮の歴史、あるいは大学のよって立つ精神等について、諸君がよく知る努力を払ってもらいたい。そして知ってそれを行なうという事だと思えます。

「建学の精神」というと、すぐに諸君は「自助・協力」という事で、これは耳に聒^た聒^たが出来る程、

聞かされている事でしょう。これは、難しいと云えばそうでしょうが、しかし考え方としては、比較的易しい事です。「自助」とは、自分で自分の事をやるという事です。「協力」とは、銘々が自分で自分の事をやるという上に立って、そしてお互いに協力していくのだという事です。だから人に助けてもらうというのではないのです。ある目的を立てて、お互いに自分の事が出来る人間同士が集まって、そして力を合わせて行くというのが協力なのです。

自分で自分の事をやるという事です。自分の事は、自分の責任でやるのだと云う事は、一番重要な事だと思えます。そして、非常に根の深い考え方に立っていると思えます。その事は学長が繰り返してお話になっておりますから、学長の言葉は後で諸君が亦読まれるだろうと思えます。

今日は、私自身が自分の経験等からも、すこしお話ししていこうと思っておりますが、要するに、

他人に責任を転嫁しないという事です。失敗した時は、自分が間違つたと思う事が自助の精神です。よい事は、どんどん自分でやっていくという事です。が、間違つた様な時に、これは自分が間違つたんだという事を、はっきり認める、そうすれば向上します。ところが、我々はそういう風にはいかず、何か失敗すると必ず人に責任を転嫁します。そういう様に逃げないで、自分の力が足りなかったのだと思わねばなりません。この次に力を発揮すればいいのです。そういう風に考えて行くという事が、自助の一番の基本だろうと思います。私も学校で色々な経験をしてきて（最近では直接そういう事にタッチしませんけれど）よくカンニングをした学生に会い、カンニングをしたから、全科目ダメになるという話しをするのです。すると、たいてい、そこまで処分が行なわれる事を知らなかつた、という様な事を云つたりします。それから必ず、自分が何故カンニングをしなければ

ならなかつたかという事の説明をします。自分は、これこれこういう事をやっていて、カンニングをしないと単位が落ちるから、だから自分はどうしても、カンニングをせざるをえなかつたという事を云います。自分が間違つた事をしたのだから、それに対して処罰を受けるのは、仕方のない事です。けれども、それを何とか他に責任を転嫁しようとしません。こういう事情があつたので、自分は勉強できなかった。もう色々な理由をそれにつける。これは、自助の精神とは全く違います。自分のやつた事に、自分で責任をとらず、自分でやらねばならぬ事をやらずに、人にやらせるという事は、自助ではありません。あくまで自分というものに責任をもつてきて、自分でもつてやっっていくという事が、自助の基本だと思えます。これは易しい様で、大変難しいことです。

我々お互いのつきあいにおいても、世の中全体から云つてもそうですが、ある人が自分で決心し

て、そして行なった行動に対して人は感激します。集団的に行なったという事に対しては、あまり感激しません。集団的に行なわれた事でも、一人一人がよく考えて、そして充分に自分の行方を見ずえて、行なった協力というものについては、感激します。例えば、忠臣蔵です。四十七士が最後まで行動を共にするでしょう。あれに対し世の中の人々は非常に感激します。一人二人ではなく四十七人も生死を共にして、亡君の恨みを晴らしたという事です。そして最後には死を命ぜられて皆、従容として死んで行ったという話は、非常な感激をもたらします。けれども、あの四十七士が大石蔵之助の命令で皆がそういう風に行ったのだという事であれば、それ程感激しないでしょう。一人一人が判断して大石蔵之助という人と生死を共にし、行動を協力するのだという事です。一人一人、銘々自分で判断して、それに向かって行き、しかも一人一人、最後まで自分のたてた志が崩れない

かったという事に対し、世間の人々はそこに大きな精神の働いた姿をみていくのだと思うのです。従って集団的な行動をとって、一致してやっているという場合に、これは皆と一緒にやっているという事で、割合に簡単に出来る事ですが、一人一人になったときにはダメだという事では、困ります。だから寮のリーダーになる諸君は、自分で事をやって行くのだという決心を一つ立てて、努力を重ねていてもらいたいと思います。

諸君もよくテレビはみると思いますが、私もよく見ます。最近「いじめっ子と、いじめられっ子」というテーマでテレビをやっていました。我々が子供の時にも、いじめっ子というのがいましたが、最近はいじめられっ子というのがいるそうです。特別にいじめられるのだそうです。そして、そのいじめ方が集団的ないじめ方をするという事です。これが最近の特徴です。それからもう一つの特徴は、クラスでいじめられた事があるか?と聞くと、

皆手を上げるというのです。一人残らず手を上げるそうです。逆に、いじめた事があるか？と問うと、二、三人しか手を上げないのです。全員がいじめられているのに、二、三人がいじめられているという事はありません。全員がいじめられているという事は、全員がいじめたという事です。しかし、苛められた方の責任はとらず、苛められた方は、俺は苛められたという風に考えている。これは自助の精神とは、全く反しています。

苛められたという事は、本当だったら、癪にさわるからだから、「苛められたのか？」と聞かれた時には、むしろ歯を喰いしばって、「苛められた事なんか無い」と云っている方が強いですね。それから、「苛めた事があるか？」というのは、悪い事をしたのは事実だから、「俺は苛めたんだ」と云える方が、本当だと思えます。

それから、苛める時に、一人対一人ではないそうです。皆で苛めるのだそうです。まあ、そんな

事をみながら、私の子供の頃を思い出しました。

私は東京で育ちました。東京は、山の手と下町という風に大きく分れます。下町というのは、銀座、浅草、神田といった所がそうです。それに対し、渋谷、新宿、巣鴨等は山の手であり、下町は、海抜の低い、東京湾に近い町です。下町は江戸の町場です。山の手と下町というのは人情が大分違っています。下町というのは古くから江戸の市民がずっと住みついている所です。よく言葉で、

「べらんめえ」とか、「なに云っちゃんでえ」とか、「こんちきしょう」といった色々な言葉があります。これは、下町の言葉で江戸の市民がずっと使っている言葉です。古くからの伝統を持っている江戸市民の集まりですから、丁度地方の村とか、町と同じです。そこには、よく云われる様に、非常に濃やかな人情と、お互いの付き合いというものがあり、人情の厚いところだと云われています。女優の場合などでも下町生まれだという事は、よ

く云います。下町というのは独特の気分を持って
いるところでは。

ところが山の手というのは、江戸が東京になつてから、地方から東京に出て来た人の集まつたところなのです。だから沢山地方から色んな人が出てきて、山の手の方に住まいをつくつたところでは、現在の標準語というのは、山の手で使われた言葉です。何故そういう風になつたかという、日本中の人が集まつて来ましたから——薩長を中心——こういう人々が下町の中に住いを持つてくる事は中々難しく、山の手の方に住いを持つてきます。そこに日本全国の言葉が集まつて来たのです。その状態でお互いに、意思の疎通を計らねばなりません。よく今でも、鹿児島の人と青森の人とが、それぞれの方言で話すと、お互いにも判らないし、それを聞いている東京の人間は、全然判らないという事になります。皆、方々から集まつて言葉が通じませんので、自然にそこで共通語が

できてきます。共通の言葉が残り、それぞれの方言の箇所だけがとれていきます。それで、もとの言葉が残るといふ形になります。簡単に云えばそうです。それが山の手の言葉です。これが現在の標準語の基礎になっています。標準語というのは、それだけの事です。だから標準語が使えるからと云つて、別にいばる必要はありません。方言と標準語の両方が使える方がよいのです。

私は山の手生まれです。渋谷で生まれましたから、標準語については自信があります。しかし、残念ながら方言の一つもできません。聞くところによると、ドイツでは標準語の他に必ず一つ方言が出来なければ、国語の教師にはなれないそうです。だから地方からの人は、皆ドイツでいう国語の教師になれる資格を持っています。

山の手と下町では環境が一寸違います。下町の人が聞くと、山の手生まれの者の云っている事なんかは、なんだ、つまらない野暮ったい様な事を

云う、という風に感ずる環境があるのです。

それで子供の頃の事を思い返したのです。昭和の初めに小学生でしたが、その頃、クラスの中で何か云いあいがあつて喧嘩をするというと、学校が終つてから、二人で撲り合いをやれというのです。それでクラスの連中が皆近所の鎮守の森に出かけていきました。そこに相撲場があり、そこでやりましたが、たいいてい毎日一組や、二組はありました。クラスの中で殴り合いをやるといけないから、あそこへ行つてやれという事でした。そして泣いた方が負けという事です。それ以上はやらなかつた。見ていると、さんざん撲つているのに泣き出すのがあつたり、撲られて泣くのがあつたり、色々いました。とにかく、そんな風でしたから集団でやるという事は、非常に恥だと思つていました。二人で一人にかかるという事も同じです。子供のときから、そういう精神があつた。

しかし最近、集団で苛め、しかもやる時に顔

を見られない様にしてやるそうです。顔を伏せさせておいて、後ろから殴つたりすると云います。だが殴つたかわからない様にやるそうです。これは非常な精神の荒廃だと思ひます。それについて学校の先生が色んなことを云つていました。

それで思い出すのが、学園闘争とか大学紛争と云われた学校騒動であります。諸君も小、中学生の頃写真等で見たことと思ひます。例の、学校を占拠したりする時に、皆覆面してヘルメットを被つていたでしょう。顔を出しません。目だけ出して、誰かわからない様にしています。つまり個人の責任を取らないというやり方です。子供が友達を苛めるのに、後ろから顔を見られない様にするというのと、すこしも変わりません。それから、いわゆる大衆団交と称して、沢山の学生が集まつて教師に対して、「馬鹿やろう」とか何とか勝手な事を云います。誰が云つたか判らないという風にしてやる動きがあつた訳です。それと同じだと

「建学の精神」について

思います。

最近時々、新聞に出て来ますが、集団的なリンチを行なうという様な事がありました。あるいは、非常に残酷な内ゲバにしても、結局だれか一人の者を殺してしまうというのが記事になっています。たいてい数人で鉄パイプを持って、やにわに叩いて殺して逃げているでしょう。誰がやったか判らない訳です。だから、ああいうのを見ると私は本当に酷いものだと思います。本当に酷い犯罪であるのに、やった者が責任をとりません。自分達で責任をとるといふ事をしない為にそういう風になる訳です。責任を分担するのです。一人で一人を殺れば、自分がやったといふ事で、自分の責任でしょう。いい悪いは別ですよ。自分の責任になります。ところがこれを十人でやれば、自分にかかる責任は十分の一にしかありません。あるいは百人でやるという事になれば、百分の一しか自分の責任にならないといふ事で、結局責任を自分に感

ずるといふ事が無くなってしまふ訳です。これが現在の風潮だと思います。

自助といふ事は、今申したことは全く違うといふ事です。自分が正しいと判断してやる事は、自分に責任を持ってやらねばなりません。これが一番の基本であり、そして自分が間違つたら、その事を自分で認めるといふ、そういう精神が必要です。

これは単純に判つた等という風には、仲々行かない事ですし、今の世の中の風潮は、そういうものとは、違う形で動いています。例えば新聞記者もそうでしょう。言論の自由といふ事と関連させて、記者が書いたものは、だいたい無記名のものが多い。(最近では署名記事も多少出てきた様ですが)。それで結局一番最後に、いつたいこれを誰が書いたかといふ事になると、取材源を守るといふ様な事を云って、誰が書いたかといふ事を明らかにしない。つまり、書いた者の責任が、最終的

にそこにかないという形になっています。これがジャーナリズム一般の傾向です。あくまで自分で書いたものは自分が責任を持ち、自分がやった事は、自分がその責任を取るのだという精神からすると、随分違つた事だろうと思います。

世の中全体がそんな風に個人の責任というものを回避して——個人の責任を別にして、その責任をすべて集団に押しつけるという風潮です。あるいは、他人にそれを押しつけるという様な精神が世の中を大きく覆っている状態です。そういうところで、「自助」という事が、どんなに重要であるかという事が、判るでしょう。「自助」という事は、ただ自分の利益を自分でやるという事とは違います。

「自助」という事を学長先生が、亜細亜大学の建学の精神とされました。学長先生から直接聞いた訳ではありません。が、やはりこれは、明治初期、日本が欧米の文明に触れた時に、イギリスの

「セルフ・ヘルプ」という本の言葉をそのまま取つて来られたものと思います。英国で「自助精神」とか「自助論」と云われている著述があつて、著者は「スマイルズ」という人です。これを「自助論」としたものもありますが、「西国立志伝」という題名に翻訳しました。「セルフ・ヘルプ」が「西国立志伝」と訳されると随分おかしく思いますが、要するに、自助の精神でもつて世の中に出入人達の伝記です。自助というのはどういふ精神で、誰がこの自助の精神で活躍したかという事を述べたのが、「セルフ・ヘルプ」といふ本です。欧米において、自分の力でもつて技術を取得して世の中に出て行つて、大きな仕事をした人の伝記を訳したものです。明治の青年は、この「西国立志伝」を非常によく読みました。そして自分の力でもつて人に頼らない、人に使われぬ、あるいは自分の技術、知識、能力によつて、世の中に立ち、そして一家をなしてやつて行こうという精神

でもって明治の青年は、活躍した訳です。

明治の実業家の精神、いわゆる政府の援助を受けないで、自分達でもって商売をし、自分の家をなし、もし政府がこうしろと云っても、それがいやならそうはしないというぐらいの精神です。あるいは世の中がこういう風に流れていっても、自分はそういう風に思わないというのであれば、自分の志を通す。つまり自分の考えを通していく地盤をしっかりとつくる。だから会社と云うものを作るにしても、商売の世界で独立してやって行き、たとえ大臣がこうしろと云っても、云われるままにされないという事です。つまり独立という事です。

福沢諭吉はこの独立という事を、非常に強調した訳です。そして福沢諭吉が欧米の学問を取り入れたのは、立身の為です。後にこの「立身」が「出世」に結びついて、「立身出世」とこう云ってますが、「出世」というのは元来坊さんになるとい

う事です。世の中を出るといふ事です。この中で偉くなるという事、つまり独立するという事を強調したのである。後で又、お話ししますが、独立するという精神を、国民が持たなければ、国の独立はできないのだというのが、福沢諭吉の基本的な考え方です。本当は福沢諭吉は、国の独立を求めたのです。国を独立させる為には、国を構成している国民の一人一人が、独立の精神をもたなければいけないというのが、彼の考えの基本です。

明治の初年には、日本には沢山偉い人が輩出できますが、その中の一人で当時、日本のピスマルクと云われた「副島種臣」という大外交官、大政治家がいました。これは西郷隆盛の無二の親友であった人です。彼は漢学者です。福沢諭吉に比べれば、保守的な、頑迷固陋な保守主義の様に人から云われておりました。その人が終始云っていたのは「独立の民」という事です。そして「独立不羈」といふ事です。

「不羈」は「たよらない」という意です。人の名前前で「不羈夫」という人名があります。独立して依存しないという事です。「独立不羈の民」という事を言っています。

こういう精神が明治初年の青年達を動かしていた精神です。自分で技術を取得し、そして自分で生活をし、自分の生活を立てて、人に頼らず生きて行ける様にするという事です。それでないと、金でもって人から動かされてしまいますから。例えば、ある会社で首になっても、他の会社に必らず行ける様な風になっているという事は、自分が技術を持っているということです。それだけのものをつかんで、やっていけという事です。

福沢諭吉の言っている事も同じであって、独立の精神を強調しています。この独立というのは、我々自身の独立であると同時に、日本の国の独立というものも言っています。学長先生が亜細亜大の建学精神として、「自助・協力」ということ

を言われました。ことに、「自助」ということを、もっとも強く言っておられ、この精神を大学の建学の精神とされたというこの背景には、こういう明治の初年に日本が新たに世界に出ていく時の精神というものを思いおこして、そこに精神の根本を求めるという事であったと思います。

明治初年の精神が、日本人の生活の基本になっているので、日本はもっているのだと思います。五ヶ条の御誓文は、明治の精神の一番の基礎です。そして、戦争が終わって、最初に出された今上天皇（昭和天皇）の詔勅があります。それ以後憲法が出来ますが、国民に天皇が訴えられる意味でのいわゆる詔勅というものは、これ以後はなくなりました。二十年が終戦の年ですが、次の二十一年の新年に、「人間天皇宣言」という風に諸君は聞いているかもしれませんが、実際には、「新日本建設に関する詔書」という詔勅です。戦争に負けて、そして日本の再建の基礎を、どこに求め

るかということを出された詔書です。この詔書の精神にほぼ基づいて、その後の日本は動いているとみていいと思います。

この詔書の中に、今上天皇は、一番最初に五ヶ条の御誓文の全文を挙げて、明治天皇はこれを新日本の基礎におかれましたが、これに何も加える事はない、この精神でもって、日本の復興を計るべきであるという事を、最初に述べてあります。

それ程、近代日本というものの一番基礎になったのが五ヶ条の御誓文です。その中に、「官武一途、庶民に至るまで各々その志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す」（役人も武士も——武士も朝廷も——一緒になって、一般人民に至るまですべて、銘々自分の立てた立身出世の志を生かして、商売をやる者は商売をやる、工場を立てた者は、工場を立てる、そういう事をやって皆自分の志すところを立てて、そして、それに従って行動をして、——こういう事をやりたいのだが、

それが出来ないという事であれば、皆、嫌気がさしてしまいますし、自分がやっただけの努力が報いられないということであれば、それも嫌になつてしまう——という事のない様にするのだということ。銘々自分の精神を思う存分にいかす努力をする様にするという一条があります。これは独立という事とか、自由という事に関係してくる事です。言論の自由という様なことも関連してきますが、むしろこの一条は、職業選択の自由を確保しているのです。何をするのかという事は、銘々自分で決めてやればいいという事です。これ等は、精神的にはそういうことだと思っています。最近になって、二回、中華人民共和国に行く機会がありました。中国では今のところ、職業選択の自由ということはありません。これは社会主義国では、ほぼそれに近い形になります。職業選択の自由はありません。だから、中国の人は与えられた仕事をやらねば処罰が来るので、やっている

という事です。農村に行くと、積極的に働いている人はほとんどありません。例えば集団的にやっている仕事といつても、これはもうひどいものです。こっちで働いていても、あっちで腰掛けて休んでいるとか、そういう事があります。自分の畑を作る場合は、一生懸命やっています。そこでは働いています。しかし、広い集団農場では、あまり働いている人はいない。そしてただその脇にある自分達でやるべき畑は、ずい分ひどい所なのに、一寸した野菜か何かでもって、それを作る為に一生懸命やっているのです。強制的に与えられて、そしてやらされている仕事については、極めて怠慢です。例えば、ホテルの従業員等は、働くのがいやだという様な顔をしてやっています。何か買に行つても、売子が他の売子と色々話しをしています。雑談している訳です。そしてその、雑談が終わる迄、絶対に私の方に向いてくれないのです。

「これほしいのですけれど」と言つても、雑談が終わらないと、ダメです。その雑談は特別に必要なことでやっているのかと思いましたが、今度は拭き掃除をしている時に、「この絵葉書が欲しいのですけれど」と言つても、売つてくれません。拭き終わつてしまわなければ、売つてくれません。

何故そうなるかという、だいたい職業選択の自由がない訳ですから、そこに命令で行かされているからそうなります。従つて、自分がそこで働いているのは、自分の自由意思でやっている訳ではありません。国の命令でやっているのです。

今の中華人民共和国でも、失業はあります。しかし失業とは言いません。職業をくれるのを待つていふというのです。だから、本人の努力によつて失業から免れるという訳にはいきません。職業をくれるのを待つていふ訳ですから。ところが、国家は、そんなに沢山の職業を作る訳にはいかないのです。それができません。その為、失業問題

は大きな問題になっています。

しかし、自分の畑で作ったごく僅かな物売る為には、非常な努力をします。だから、暑い日盛りのところで、それこそトマトを五十コ位置いて、そしてこれ売る為に努力しています。暑い中で、じつと売れるのを待っています。それを見ると、先程の五ヶ条の御誓文にある「人心をして倦まざらしめんことを要す」という事がどれ位大事な事であるかという事が判ります。と同時に、独立するという事が大切だと思います。銘々が自分の事を自分でやっていくという精神が無ければ、近代化という事はできません。という事が判る迄に、明治維新以来百年を要した。

これは、中華人民共和国自体が共産主義、社会主義体制に入った為に、今言った様なおかしな事が出来たのであって、これが中国が日本と同じ様な、言ってみれば、自由主義——自由主義の基礎というには、各個人の独立——の国になれば解

決することと思います。その独立という事の上に、銘々が自分の生活を自分でやっていくということであり、職業の選択の自由があるということです。自分の生活には、自分の責任があるということです。これに反し、社会主義は、職業選択はできず、国家がその職業を与えるということです。そして与えられた職業についての収入は決まっています。だから、自分で自分の生活に責任をとることはできません。与えられたごく小さな範囲だけで取るだけです。本質的に取っている訳ではありません。つまり、人の言う通りに働いて、人の言う通りのお金を取って人の言う通りの生活をしている訳です。全く、画一化された人間に成り終わってしま

います。中国では、大富豪とか、中農といわれる地主階級をなくしてしまって、全部が零細農奴になりました。つまり何も持っていない。全部国のものです。その中に人間が配置されているという生活

なっている訳です。

工場労働者は、全部が工場長の命令下に入っています。だから、それに反対したら、生きていく事ができません。そういう非常に画一的な生活の中に入ってしまったのです。

言論の自由なんていうことは、これは問題外の事です。今の中国でも相当のことは言えますけれども、その様なことを言っても、別に何の力にもなりません。ただお互いに、お話しをしているというだけであります。最近でみると壁新聞も、新聞が無いから、壁新聞を作るのでしょうか。新聞は党の新聞だけなのだから。だから党とは違う意見を述べようとしたら、日本だったら他の新聞が出来る訳です。政府の代弁ばかりしている新聞があるのに対して、それに反対する新聞ができる訳です。だから、それでもって、競争もあるし、皆、色々聞く訳です。しかし中国では、そういうものを作らない訳です。だから壁新聞という事をやっ

ている訳です。それを日本では壁新聞を真似したりして、やっている大学等がいくらでもあります。反対なら反対のものをつくればいい。日本では、できる訳ですから。

明治の独立という精神は、近代日本の基礎にありました。しかし、最近の集団いじめっ子とか、覆面ゲバルト学生運動等、明治の精神を蝕む精神が強くなってきています。そういう精神に抵抗しながら、そういう精神では国は興るはずもないので、我々は、「自助」の精神というものを、甘くみないで、これの重要性をよく考えて、頑張っていくたいと思います。

「自助」の精神を蝕むものは、いくらでも例は挙げられます。去年も、ここで一寸お話ししましたが、現在日本の大学入試で行なわれている共通一次試験の問題です。これ等も自分でやるという事をやらない様になっています。共通一次試験の基本は、コンピューターにかけるという事です。

コンピュータにかける時に銘々に「字」を書かれると困る訳です。「○」「×」とか■は読みとれるけれども、他のものは読みとれません。字を書かせると、コンピュータは分らなくなります。人間は、色々な字を書きますから。例えば、「正」しいという漢字を楷書で書く人もありますし、少しくずして行書で書く人もありますので、同じ字であるとは読み取れません。場所を指定しておいても、そこに皆が書いてくれるとは限りません。又、小さい箇所大きく書く人もあり、大きい所に小さく書く人もあるでしょう。まるまる一杯に書く人もあります。こういった不統一ではコンピュータは読みとれません。だから字を書かせないのです。現在の試験は、該当する欄を鉛筆で消す様になっています。それをコンピュータが読み取る訳です。

諸君は幸に、共通一次を受けた人は殆どいないと思いますが、共通一次は字を書かせません。

文字を書くという事は、非常に重要な事です。人が言葉を話すと同じ様に字を使います。符号でもって、お互いに手紙は書けません。必ず文字を書かねばなりません。文字を人にできるだけ分る様に美しく書くという事は、文字の倫理です。人に判る様に書くという事は、相手を重んじてやっている事です。勝手、気儘に書かず、略字を書くにしても、ちゃんとそれが判る様に書くということとは、お互いに話しをする時に、相手に判る様に話すという事と同じ心構えでしょう。

昨日、小田村先生から言葉についてのお話があったと思います。言葉が一番の基本ですが、人類が文明社会に入るといふ事は、文字を使うという事です。文字を書くという事は、非常に重要なことです。そしてしかも、言葉を使うと同じ様な心構えを持って、なさるべき事であるし、文字をみると人の心が判るとさえ言われています。だから書道を勉強する人は、自分の心が書に表われ

る様に書く訳です。

昔の人は（明治時代位までの人は）文字を書いたて、書道を勉強しています。書道を勉強するという事は、自分で字を書いて、その字に表われてくる自分の心を正す訳です。例えば、心が乱れていると、文字も乱れる訳です。文字を書き、自分の心がそこに出ているという事をみて、そして、自分でちゃんとした字を書こうと努力する訳でしょう。自分の心を正しくする努力をやります。そういう努力をすることによって、文字を覚えてゆく訳です。諸君も小学生の時に、手本の字があつて、そしてそれをなぞつて、できるだけ同じ様な字を書く努力をしてきたでしょう。正しいものに対して、自分の書く字も正しくするという事です。正しい行ないをする為に努力をするということと同じ努力が、正しい文字を書くという事によって行なわれているのです。だから、文字を書くという事は非常に重要なことです。

その文字を書かないですむ試験です。従つて、

これは試験でも何でもないと云つてもいい程の愚劣な試験だと思えます。筆記試験というのは、文字を書く試験でしょう、普通は。ところが、文字を書かない試験というものをつくり出してしまつた訳です。何故つくりだしたかというところ、コンピューターにかける為です。コンピューターにかける為にやったという事を、何故やったか。これは、先生の採点が大変だからです。教育者がそれだけの努力を惜しんだ為に、今の様なコンピューターの為の試験が行なわれ、そしてそれをやる為に、これからの高校生は、えらく勉強しないといけなくなりました。

世間は、先生が見ると間違いがおこるからと言うのでしょうか。確かに間違いはおこるでしょう。一万枚のものを見ている中に、どうしてもまちがいがおこってくるでしょう。しかし、それで、その間違いを全く無くす為に文字を書かせなくなつ

「建学の精神」について

てしまいました。基本的に言えば、試験等は、すべてやめた方がいいですよ。そうすれば、間違いはなくなる訳ですから。この事をつきつめていくと、教師を信頼していいという事になります。作文を書くとき、客観的判断が出来ない、教師は、銘々自分達の主観的な判断によって採点をするから、従って、客観的には正しいものはできないといえます。では教師を信頼していいところに何故学生が入るのですか。間違いの採点をする様な大学に別に学生が入る必要がないでしょう。はっきり言えばそうです。

そういう事をなくす為に、コンピューターでやる、あるいは先生が採点の努力をしない為にコンピューターでやるという様なことになっています。これ等も、やはり学生に自分で判断し、自分で字を書くという事を軽視させ、失なわせる働きをしています。

それから「○」「×」でやる試験です。(これは、

亜細亜大学でも、そういう問題を出さざるを得ない様になっています)が、これは、自分に分らない時には、どちらかにつけておけという事をやります。普通判らない時には、書かない方がいいのです。本当は、判らない時には、白紙で提出してくれると、教師は楽です。

ところが、最近判らなくても、何か書いておけば、点をくれるのではないかと思ったり、先生は答案をちゃんと読まないのでは、と妙なことを考えて、そして、全然別のことを書いてあります。そういうのは困りますが、これは書く試験ということで、まだいい方です。「○」「×」ですと、判らなくても、必ず全員がつけます。うまくいけば当ると思っっていますから。だから自分の責任でやっている訳ではありません。

分らないという時に、何も書かないというのは、自分に責任をとってやっている訳です。ところが分らなくても、「○」「×」をどこかにつけていけ

ば、何とかなるのでは、という精神は、これは判断を人に任せる訳です。非常に細かい心理に立ち入る訳ですが。

自分の力というものを、あくまでも發揮しようというものでなくなってきたしまいました。これも、自己責任というか、自助というか、そういうことを蝕んでくる大きな働きだと思えます。

そういう風に考えてくると、学長先生が建学精神として、自助ということをおげられたという事は、非常に重要な事だと思えます。それも、日本の教育思想というか、日本人の明治以来辿つて来たところの精神の流れ、思想の流れの上において、大変重要な事を学長は言っておられるということが、分ると思えます。それは単に我々の心構えの問題ばかりではありません。日本の明治以来辿つている大きい思想の流れの上での事です。

それでは、学長先生が何故又、そういうことを言い出されたかということをお話しします。一

つは、今申しました様に、明治以来の日本の精神の流れの上で、学長先生はそれを言っておられると思う訳です。

今、我々は『建学の精神を語る』という本で、学長の云われる建学の精神を知る訳です。

亜細亜大学には、商学部が一番最初に設立された訳です。創立は三十年です。この時に一方で学長は「自助・協力の精神」というものを、はつきり掲げて、そしてそれまでの歴史というものの上で立つて、それを述べておられます。それまでの歴史についても、詳しく説明する必要があると思えますが、一寸時間がありませんから、お話ししません。これについては、藤原先生が『学園生たちの記』というものを書いておられるので、これをよく読むと、判ると思えます。

この本を是非読んでほしいと思えます。非常に面白いといえは面白いものです。殊に寮の歴史がよく判りますから、これを是非読んで下さい。そ

「建学の精神」について

れから、『建学の精神を語る』という本の前半の部分は、大変よく読んである事と思いますが、『建学の精神を語る』の後半に、「国民よ誇りと自信を持って」という文章があります。

『建学の精神を語る』という本は、二つから成り立っています。「国民よ誇りと自信を持って」、副題として、「——終戦事情を究めて立ちあがれ——」という文章があります。これも是非、読んで下さい。

例年、三、四年生の大学の講義で「日本文化と天皇」という科目があつて、私が担当しておりますが、その時に、必ず、学生に「——終戦事情を究めて立ちあがれ——」を読んで来る様にしていることを言います。そうすると、三年や四年生ですから、もうたいてい、この本を持っていません。それで、「あつたかなあ」とか、「建学の精神を語る」の方は読んだけど、等と言っています。この二つは、学長の考えの非常に大きな柱を成しています。

さらに、宿題を出しますが、太田先生には『回顧と前進』という本があります。これは、明治以来の日本の動きを、ずっと展望した著述であります。これは恐らく、各寮とも、それぞれ文庫の様なものがあれば、そこにあるでしょうし、もし今なければ、備える様にして読んでほしいと思います。これは、明治百年記念連続講演会を明治百年を記念して行なつた時のものです。この時には、色々有名な人達に来て戴いて話してもらいました。実業家では、出光佐三氏、文壇では、小林秀雄氏、福田恆存氏、山岡荘八氏といった人達に来て戴き、明治百年を辿ってもらいました。その時に、学長先生が話された事を本にして、大学で出したものがこの本です。

これは、先程言った五ヶ条の御誓文で始まる明治時代からの今日の歴史を学長が書かれたものです。こういうものは、亜細亜大学に学ぶ学生諸君には、是非読んでもらいたいと思います。殊に、

寮生活を行なっていて、その精神を中心にしておいて、やっ行ってこうという人達には、読んでもらいたいと思います。それは何故かという、諸君も学長の『回顧と前進』を読まれるとすぐに判ると思いますが、高等学校で教わっていた日本史というものは、或いは日本の現代史というものは、非常に違うことが書いてあると思います。又、日本の敗戦前後の事情についても、恐らく、高等学校の日本史で教わっていた事とは、非常に違うことが書かれています。

私は、「日本思想史」という講座を持ちましたので、最近その答案をずっと見て来ましたので、高校で教えられている事は、ある程度見当が付きますから、あまり驚きません。

例えば五ヶ条の御誓文について書けという問題を出しますと、「五ヶ条の御誓文は絶対主義的な天皇制を確立したものである」と答えが書かれています。先程私が言っている様に、国民の自由も

そこに確保されているし、議会政治の一番基本的な方針も明示されている訳です。むしろ、日本の民主主義的な政治体制の基本がそこにおかれている訳です。アメリカ自体が、戦争が終わった時に日本に対する「ポツダム宣言」——日本の戦後を決定した「ポツダム宣言」——の中に、日本の政治は民主主義的な傾向を復活するのだと言っています。つまり、明治の初年あたりからの、日本の政治体制の基本にある民主主義的な精神というものを復活するのだと言っています。

ところが、今の高校の授業を受けてきた人に、ポツと出すと、それとは全然逆な、絶対主義的天皇制というものを確立した基本になっていると、こういう風に言います。知らない訳です。

その他、「日露戦争が侵略戦争だった」とか言います。その当時、ロシアは殆んど満州全土を侵略したのです。それを止め様として、やったという事は、世界の各国が認めて、英国が援助してい

ます。それを日本自身が侵略したと言っている。結果として、日本は、遼東半島を手に入れました。しかし、日露戦争の基本は、帝制ロシアの満州に對する侵略を排除するという目的をもって行なわれたということ、世界の歴史家の全員が認めていることです。それを侵略戦争だというのは、別に学生が悪い訳ではありません。そう教わっている訳です。何も知らない訳です。

五ヶ条の御誓文にしても、先程言った様な民主主義的な原則、職業選択の自由とか、議会議主義とか、国際関係の開放といった様な、後の共産主義国家が行なっている事とは全然反対の生活原理というものが示されているという事については、これを知らない訳です。だから、そういう事を言う訳です。知らないのです。従って、明治からの歴史というものも、よく知ってもらわなければ、大変だと思えます。

『建学精神を語る』の後にある「国民よ、誇り

と自信をもて」、これは、——終戦事情を究めて立ちあがれ——という副題がついています様に、終戦事情についての説明が一番基本です。それから『回顧と前進』は、明治以来の日本の主として政治について、学長がお自身で経験したり、考えたりしてこられたことを、書かれたものです。共によく読んでほしいと思います。

一方、藤原先生の書かれた学園生い立ちの記を中心として成っている『藤原繁先生遺稿集』は各寮に一冊ずつおいてあるという事ですから読んでほしいと思います。

太田先生は、福島県二本松市で出生されました。福島県人会の人は、よく知っていると思います。そして、大正九年七月に、東京帝国大学法科大学英法科を卒業され、東京地方裁判所々属弁護士登録で弁護士になられた。その時の東大総長は、山川健次郎という理学博士でした。この方は、会津の出身です。会津藩は、幕末に京都を守る役を行

なっていた藩です。幕府方の最大雄藩であった訳です。それで薩長に対して戦った藩です。

学長の先生であるこの山川健次郎という方は、十五才で白虎隊に参加をし、自分の兄、あるいは同僚の多くは、ここで死にます。しかし山川先生は生き残ります。明治時代には、会津藩の出身者は、非常に迫害されます。これは、新政府に最後迄抵抗したという理由からです。ですから、政治家として世の中に出るといふ事は、殆ど困難でありました。そこで、生き残ったあと、英語を勉強して、後に米国のエール大学に留学をします。米国における中国研究の一番草分けの大学であるエール大学に入って、物理学を勉強するので、明治時代に幕府方の人達とか、薩長土肥といわれる、明治新政府を形づくった雄藩の人以外の人材は、学問とか、文芸とか、新聞とか、そういった方に非常に活躍をします。つまり、反政府的な形で活躍する基礎になるのです。今の新聞は、そう

いうものとは違います。どちらかといえば、政府寄りの大学を出て、そして新聞社等に入っていく訳です。昔はそうではありませんでした。政府筋では、出世できないと思つて、むしろその政府の力の及ばない世界で活躍しようとしたのでした。福沢諭吉もその中の一人です。そういうところで活躍するのが常でありました。例えば正岡子規とか、夏目漱石もそうです。正岡子規は愛媛、夏目漱石は江戸っ子です。従つて、政治に出ようと思つても、薩長が押えていて出来ません。そういう事で、山川先生は物理学を勉強して、後に理学博士になります。そして東京帝国大学——後の東京大学と、京都帝国大学——後の京都大学の総長を兼任されるという様な事になります。教育界の最高の地位につきました。

太田先生は、おそらく会津出身であつたという事もあつて、山川先生の薫陶を非常に受けられました。大学で講演されたものの中にも、山川先生

につれられて、旅行した時に、こういう教えを受けたとか、こういう風に云っておられたとかいう事が何回か出てきました。つまり白虎隊の生き残りの教育者の薰陶をうけて武士的な躰を精神的にもしつかり、つけられたそうです。山川先生は、枢密院議員になります。昭和に入ってから、「国本社」という思想団体が結成されます。この団体は、平沼騏一郎という法曹界の大ボスと云われた政治家と、連合艦隊司令長官をやった加藤寛治海軍大将等が中心としてつくった思想団体ですが、学長はこれに入られます。そして一種の国家主義的な政治的、思想的な活動をする様になる訳です。どうして、そういうものが出来てきたかという、明治時代から、ずっと日本の歩みと関係する訳です。

日露戦争までは、英国と米国はロシアに対抗する為に、日本に対して全面的に援助をしました。日露戦争講和条約締結についても、米大統領の

ルーズベルトが援助をしておます。それから英国は、日英同盟を通じてロシアに対抗するという事になっていました。

しかし日本がロシアに勝ち、アジアの北で（満州の方で）力を振いはじめると。中国の市場を中心として英・米共に、日本をpushしえにかかります。その為に、いわゆる軍縮条約というものが締結されて、日本海軍の膨張をpushするという風になった訳です。これには色々細かいこともありますが、ともかく日本の海軍を、米英の海軍勢力に対抗できない様にした訳です。国で保有する軍艦の数を制限しました。これが有名な軍縮会議です。この結果、五・五・三と保有比率が決められた訳です。そういう英米の圧力に対して、日本の海軍は非常な努力をしました。若い人は、割合に戦争の事が好きな面があつて、色々聞いているでしょうが、「月月火水木金金」という様に、日曜も土曜もないという猛訓練を海軍がやります。それで沢山の

人が、訓練中に死ぬのです。その結果が後で真珠湾の攻撃で発揮される訳です。ともかく海軍は非常な圧力を受ける事になる訳です。

日本は海国ですから海軍が無ければどうにもし方がないという国です。従って海軍が外国の圧力のもとに屈伏しているという事であれば、日本はどうしても米・英に対抗できないという事が一つです。

それから、明治末年に、日本に入ってきた共産主義勢力というものが、日本の天皇の打倒というところまで、目標を集結し、日本に対して非常に大きな思想的宣伝を行なってきました。それから大正七、八年の頃、ソビエト・ロシアが成立する訳ですから、それまで共産主義とか、社会主義というのとは実際には行なわれていなかった訳です。しかしソビエト・ロシアという共産主義の国家が出来たということが、これが世界に対して世界を共産主義化する様に、大宣伝を行なうという事

になります。大正の末から日本国家の基本的な体制というものに対する破壊活動、宣伝活動が行なわれていました。

この様に北の方からはソ連が出てくるし、南の方からは米英が協力して日本海軍を圧迫してくるという風になったのに対し、国家の基本的な生命を守って、日本の発展を計ろうという動きとして出て来たのが、これが「国本社」というもの動きです。

世間がこの「国本社」をどういう風に評価しているかと思ひ、広辞苑で「国本社」を引いてみましたら、案の定そこには「右翼団体」と書いてありました。

国の事を思うという事が右翼という事であれば、確かにその通りでしょうけれども、一方は海軍大將、一方はその当時の司法界の総帥です。この人達が、昭和の初年につくった国家の為の団体に、太田先生が入っていて、平沼先生にずっと教えを

受けたという事です。

平沼さんは、それだけの地位についておりましたし、大東亜戦争のすこし前に平沼内閣を形成します。太田先生はその内閣の書記官長（今の官房長官にあたる地位）、内閣の要になる役職につかれます。その時に、日独伊軍事同盟というものが、日本の政治の日程に上って来ます。独・伊と軍事同盟を結ぶべきかどうかという事が議せられていました。陸海軍の意見が違っていた為に仲々結論が出ませんでした。それで何十回かの会議を重ねて、決まらないという事で、我々も多少知っておりましたが、早く政府は決めると、世間は云っていましたが、仲々決まりませんでした。

太田書記官長は、その時ともかく陸海軍の意見が違うのだけれども、これは徹底的に議してやるのが本当だという事で、百何回かの実務者会議を陸海軍の参謀その他が行なうところまでやる訳です。その時に急に、独ソ不可侵条約という

のが出来てしまいました。それまでは、日本とドイツとイタリーが結んで、むしろ共産主義国家のソ連を東西から押さえ様とする動きでした。ところが突然、ナチス・ドイツとソ連とが、提携してしまうのです。その為に、日本の外交は進路を失ってしまいます。ドイツとソ連とは相反するものと思つて日本は外交政策を行なつてきていたので、そこから、そこで有名な「複雑怪奇」という言葉を残して、内閣は退きました。つまり「複雑怪奇」というのは、倉前先生の云われるところの「悪の論理」です。とても日本人には考えられない様な、力だけで政治を押し切つて行こうという、主義主張というものの全くない世界の論理によつて、ドイツとソ連とは結びついたということです。

「複雑怪奇」、これは日本人の普通の常識からみた欧米の国の外交的取り引きに対する批判の言葉です。

その後、終戦時に、いわゆる敗戦内閣（軍事力

をほとんど失って、どうしたら戦争を収束するこ
とが出来るかという重要問題をかかえた内閣)の
文部大臣に太田学長はなられた訳です。文部大臣
になったというのは、平沼騏一郎氏が重臣——当
時の政治を非常に大きく動かす力のある人——で
したから、そのことをバックにして、終戦内閣の
文部大臣をやられました。

現在、この終戦内閣の入閣者で生き残っている
のは、太田先生と、もう一人、安部源基という当
時の内務大臣の二人です。従って終戦の事情とい
うものを、現在生き証人として語りうるのは、そ
の二人。

それから、今上天皇があられます。

太田学長は、日本国家の近代政治の本当の動き
の中で働いてこられた人です。そして戦後は、今
度は学長は色々考えて、もう政治の世界で自分は
働くことはないので、教育をやらなければ、どう
しても日本の将来はない、——日本の将来は教育

にかかっているのだという事を決心して政治から
離れて、教育にうち込もうという決心で乗り出し
てできたのが、これが亜細亜大学というものです。
政治家として、そのままずっと頑張っていれば、
やがては、普通のコースから云えば、総理大臣と
いう様な風になるべき人の一人です。しかし、そ
の政治というものではむずかしいと、日本の将来
について、学長は考えられたと思います。力をもっ
てやっても、限度があると。だから、教育をやり、
次代を背おう人々にしっかりやってもらいたい
のだというのが、学長の考え方であつたと思います。
爾来、もう二十五年になる訳ですが、学長は、
終始一貫それを貫いてこられている訳です。我々
は、学長のそういう精神をよく勉強し、そしてそ
れに応える事をやっていきたいと思ひます。
私のお話ししたい事は以上です。

(理事)

(6) 昭和天皇の最後のお歌 (青々論壇 平成元年三月)

(一) はじめに

さきの天皇さまがお亡くなりになると、新聞、テレビは一齐に追慕の番組となつて、極く一部ではあるが、苦情が出るほどであった。

日本の新聞の取り扱ひの大ききだけから云ふと、中華人民共和国毛沢東主席の逝去以来の大ききであつた。それ以上になるのは当然のことである。

日本国の元首に相当する、しかも御治世六十四年の、大激動の世界の渦潮の中で、日本の国を守り通されたお方の御逝去である。

戦前の平和の御意志、戦中の御苦悩、敗戦による亡国寸前の状態の折に、マッカーサー占領軍司令官と会見して、一身を投げうって国民に代らうと申し出でられた——実に万死に一生を得られた

と云つてよいその「捨身」の御高德、さらに戦後の責を一身に負はれて、復興への御意志からの御巡幸、植樹祭、国民体育大会への御出席、——嘗ての敵国・欧米諸国御訪問、外国元首との御交際、生物学御研究等々、陛下の御德行は新聞・テレビにすべて語られた、と云つてよい。もちろん、お歌についても多くの人からその感動が語られたのである。

私の目にしたものだけを挙げて、読売と産経は全紙両面に数十首の御製を掲載した。またお歌の評価についても歌会始の選者で歌人として世にみとめられてゐる岡野弘彦、上田三四二、窪田章一郎その他の諸氏が、異口同音に、陛下は歌人として第一流のお方であつたと、語つてをられた。岡野弘彦氏の文章は、「歌人・昭和天皇」(読売一



昭和天皇御製歌碑（東京・富岡八幡宮境内）

月九日夕刊」とあって、先帝ご生前に「歌人・今上天皇」の書を刊行した私は、その「歌人」の名が、少しも誇張でなかったことを証していただいたやうな感じで、何かほっとした思ひがした。また、今年の一月一日の各新聞に発表された三首の先帝御製についても、江藤淳氏のすぐれた奉悼の解説（読売夕刊一月十七日「字余りのお歌」）があつて、感動した。また外国の方の中にも、お歌への讃嘆の情がのべられてゐる（アリフィン・ベイ氏「伝統保持の重要性を学んだ」産経一月二十一日正論欄）。

それでいまさら私が述べることもないのであるが、御依頼に応じて一文を載せていただくことにした。御参考になれば幸ひである。

(二) 「歌人・昭和天皇」

先帝陛下は、新年の宮中歌会始を摂政の時代か

ら主宰されて、戦中戦後の激動の時代にもたやすことなくお続けになった。和歌を通じて天皇さまと国民の心とが交流するこの会を最も重要な行事として営まれたのである。預選者がこの会に出席させていただくことも、テレビで放映されることも、多数の有識者が列席を許されるのも、皆、先帝陛下のお考へによるものであつたと思はれる。

戦前は、この会が、天皇さまのお歌を一般国民が知ることのできる唯一の機会であつたが、戦後は折にふれて御製が公表されるやうになつた。これも先帝陛下のお考へによるものにちがひない。天皇さまのお心はかうして国民に告げられたのである。戦後の混乱の時期にお示しになられた数々のお歌が、敗戦にうちひしがれた国民の心をどれだけ感動させたか、はかりしれないものがある。

終戦直後に発表されたお歌は、

海の外(と)の陸(くが)に小島にのこる民

の上安かれとただいるのなり（「折にふれて」）

であって、これは当時の痛切な国民感情をそのまま代弁して下さったお歌である。

同じ御趣旨の次のやうなお歌もある。

国民とともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ（昭和二十四年「開拓地」）

昭和二十一年——つまり終戦後、占領軍政治下に迎へた新年に、「新日本建設ニ関スル詔書」が發布されるとともに、歌会始の御製として発表されたお歌は、次のお歌であつた。

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

そして、翌二十二年一月には

「あけぼの」の御題で、

たのもしく夜はあけそめぬ水戸の町うつ槌の音も高くきこえて

そして始まつた御巡幸は、以後、御一生にわたつて、沖縄県をのこして全部の県に及んだが、その御巡幸がまだどれほど国民の心を励ますものであつたか、数々のエピソードが語られてゐる。いまそれについていちいち語ることもできないが、その後、全国各県に二百基に近い御製歌碑の建立されたことが、何よりも雄弁にその時の民衆の感激を物語つてゐるのである。

それから、たしか昭和二十五・六年頃からではないかと思ふが、御製は、当年度のお歌が一括して年末に宮内庁詰め新聞記者に発表され、一日の新聞に発表されることになつたのである。

私どもは丹念にそのお歌を集めてお心をしのびま
つたのである。

御製集も『天皇歌集みやまきりしま』（昭二十六
年十一月三日、毎日新聞社刊）『天皇后両陛下御集・
あけぼの集』（昭和四十九年一月二十六日、読売新聞
社刊）の二冊がある。その他、民間団体によつて
発行された御製集もあつて、今日まで六百二十余
首のお歌が公表されてゐるのである。歌人・国学
院大学教授岡野弘彦氏によれば、「生涯のお歌の
総数は、一万首にもおよぶであろうと思う。」（読
売一月九日夕刊「歌人・昭和天皇」とある。

したがつて、先帝陛下には、和歌について、長
年にわたる御造詣とその意義についての深いお考
へがおありであつたと拝察されるのである。これ
は陛下が、皇室の伝統としてその道をお守りにな
られたのであつて、単なる御趣味と申上げるやう
な性質のものではない。科学者天皇は同時に歌人
天皇であられたのである。

(三) 先帝陛下の御発表・最後のお歌

前述のように、先帝陛下はお歌の発表を重要な
こととしてお考へになつていらつしやるとは、私
は信じてゐたが、今年の一月一日の新聞紙上に、
三首の御製の発表を見たときは、心の震へをの
くのを禁ずることができなかった。

昨年来の御重病の中で、既に今日あるをお考へ
になつて、新年恒例の和歌の発表をお決めになつ
てをられたのである。他日、新聞で見ると、歌会
始の「晴」の御製も用意してをられたといふこと
であるから、あの御闘病の中に、和歌の発表につ
いては、恒例の御発表を欠かされまいとして御努
力になられたのである。その御責任感と和歌につ
いての御考への深さときびしきとに、私は、文字
通り拝読する思ひであつた。そしてそれが御生前
最後のお歌の発表となつたのである。
それは次の三首のお歌である。

《伊豆須崎の春》（三月、須崎御用邸にて）

みわたせば春の夜の海うつくしくいかつり舟
のひかりかがやく

《道灌堀》（七月、皇居にて）

夏たけて堀のはちすの花見つつほとけのをし
へおもふ朝かな

《那須の秋の庭》（九月、那須御用邸にて）

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさ
びしうつりしならむ

「みわたせば」（三月）のお歌

第一首目の「三月・須崎御用邸にて」のお歌。

「何といふ美しい光景のお歌であらう。一読、誰し

も、お歌に詠まれた光景の美しさに驚嘆しないで
はをられまい。「うつくしい」とのほかに言ひや

うもない、夢のやうに美しい光景である。「いか
つり舟」であるから、まだ寒さの残つてゐる春の
夜の海原で、漁火を輝やかせて働らいてゐる伊豆
の漁民たちにおよせになる深いうつくしみのお心
も、この「うつくしく」との一言にこめられてゐ
るのである。

「うつくし」といふ言葉は、御製にはしばしば
使はれてゐる言葉であるが、それは単に感覚的な
美にとどまつてゐるのではない。次のお歌などを
合はせて拝誦すればその間の微妙な味はひがわか
るのである。

うつくしく森をたちてわざはひの民におよ
ぶをさげよぞおもふ（昭和二十二年「帝室林野
局移管」）

この美の世界は、理想的な世界ではあるが、し
かしそれは空想的な快楽のみの世界ではない、勤

昭和天皇の最後のお歌

労の中から生み出されてゐる現実の世界なのである。私は、一昨年の御製——同じく須崎の御用邸での、(恐らく屋上から海をながめられた御製と思はれるが、)次のお歌を拝して深い感動を味はったが、このたびの御製は、それにもまして、深く深く心に銘記されるお歌である。

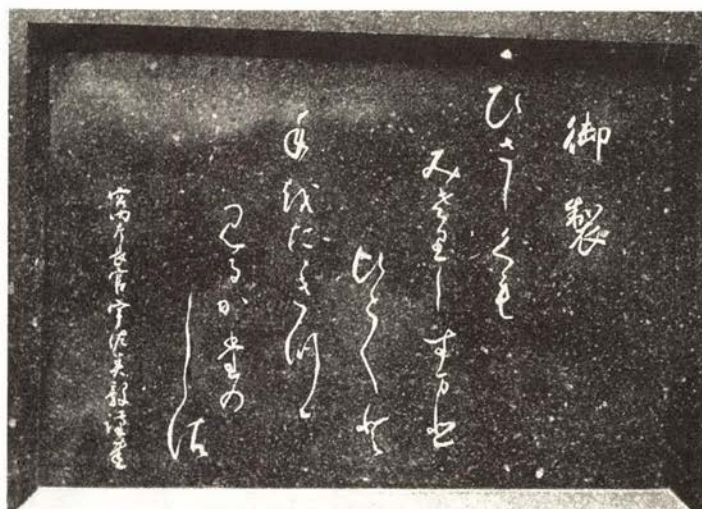
伊豆の海あまたかがやくいさり火に海人(あま)らのさちをこひねがふなり(昭和六十一年)

もとにもどって、「三月須崎御用邸にて」の御製の第一句は、「みわたせば」であるが、第一句に「みわたせば」を置くお歌は何首かあるが、中に私の愛誦してやまない次のお歌もある。

みわたせばしづかなる朝をちかたに白き煙の
たつ桜島(昭和五十九年「鹿児島にて」)

いづれも絶唱と申上げるほかない。第一句「み

わたせば」もまた作者の広大なお心をそのまま示してをられるのである。



昭和天皇御製歌碑(東京・国技館)

「夏たけて」（七月）のお歌

「道灌堀」の御製について、——は、まづこの第一句「夏たけて」が、季節感を正しく示されることに注意したい。昭和天皇の御製は、季節が鮮明に示されるお歌の多いのが、云はば一種の特色である。動植物の名や地名を明瞭にお示しになると共に、季節を正しく示されるのである。日本の風土は春夏秋冬・季節のうつりゆきが微妙にあつて、それが風土の特徴の一つになつてゐる。そのため、日本の自然を具体的に詠まうとすれば、すべて季節をはつきりさせなければならぬことになるが、私などは、天地自然のうつりゆきの意識が薄いから、つまり生の意識がとぼしいので、いい加減になり勝ちである。ところが、昭和天皇さまはちがふ。季節のうつりゆきといふ日本の風土にしっかりと身をお置きになつて、それを詠んでいらつしやる。季節の中に生きていらつしやる

…といふわけである。

「夏たけて」の句は、尋常な句ではない。「堀のはちすの花見つつ」といふ言葉もまた具体的である。そして、下の句は「ほとけのをしへおもふ朝かな」と、佛教についての深い御思索をお詠みになつたのである。

日本の天皇は神道一辺倒の排他的宗教人ではない。佛教思想に深い理解を示された天皇さまが多い。昭和天皇の御製には、「高野山にて」の次のお歌や、奈良の大佛をよまれた次のお歌もあることを忘れてはなるまい。

史（ふみ）に見るおくつきどころををがみつ
つ杉大樹並（な）む山のぼりゆく（昭和五十二年）

いくたびか禍（まが）をうけたる大仏もたち
なほりたり皆のさちとなれ（昭和五十六年）「奈

良東大寺」)

「あかげらの」(九月)のお歌

三首のお歌の最後の「那須の秋の庭」のお歌は、あるいはこのお歌が昭和天皇のお歌の最後のお歌になったのかも知れない。

あかげらの叩く音する朝まだき、

音たえて さびし。

うつりしならむ。

「あかげら」(キツツキの一種)に寄せられる限りない御愛情の、そのお声の聞えるばかりのお歌である。

あかげらが、木を叩く音がする、しづかな「あさまだき」、その音がたえたのを「さびし」とうたはれ、一たん文を切られて、やがて、アカゲラ

の行く方に思ひをはせられて、つぶやくやうに、場所をうつしたのであらう——と、御体験をありのままに御表現なさるお言葉、つかひのリズムが、その時そのままに感じられるお歌であつて、芸術の至極が達成されたと拝される。しかも科学者天皇は同時に歌人天皇であられたことをまざまざとお示しになられたのである。将来にわたつて、芸術と科学とが両立することを、また科学と宗教(自然愛)との一致することを示されたお歌を、陛下は、最後にお示しになられたのである。私には、この三首は先帝陛下の御遺言のやうに拝されて感激に堪へないものがある(ここまで書いた一月十七日夕刻、読売夕刊に江藤淳氏の「字余りのお歌」といふ、このお歌についての哀悼の心こめたすばらしい解説を読んで、私の読みの浅いことを恥づかしく思った。是非江藤氏の文章を読んでいただきたい。)

四 「車」のお歌

昭和六十三年の歌会始は、昭和天皇の最後の歌会始となったのである。御題は「車」で次のお歌である。

国鉄の車に乗りておほちちの明治のみ世をおもひみにけり

「車」の御製は、前述の通り、昭和六十三年一月十日の新年歌会始に発表されたお歌である。その時「国鉄」の名は消えてJRといふ名になってゐたのであるが、お歌はその前の「国鉄」時代に詠まれたお歌である。昭和六十二年三月、静岡県須崎御用邸から特別列車でお帰りになる時の感慨を詠まれた、と解説されてゐる。

「国鉄」がJRに改名する直前のお歌で、それをそのまま六十三年の歌会始に御発表になったわ

けである。長い間親しんで来た「国鉄」の名を惜しまれたのであらうと思はれる。「国鉄」の最後の年の、その「国鉄」の列車にお乗りになって、祖父君の明治天皇さまの御代を回想されたのである。

昭和天皇の御製には、明治天皇をお偲びになるお歌が何首もあるが、その中に、このお歌とよく似た歌がある。次の歌である。

明治村を訪ねて

人力車瓦斯燈などをここに見てなつかしみ思ふ
明治の御代を（昭和五十四年）

「国鉄」——日本国有鉄道は、明治五年、新橋・横浜間の鉄道開設に始まって、日本全土の鉄道となった。日本近代化の大動脈として、日本文明の発展に偉大な貢献をしたのであるが、戦後、社会主義運動の激化するなかで労資紛争をくり返して、

遂に、俗に云ふ「親方日の丸」の経営が破綻し、世の指弾を浴びて民有会社J.Rに移行せざるを得なくなつたのである。

先帝陛下は、その「国鉄」の最後の頃の車にお乗りになって、国鉄の創設され発展した明治時代からの歴史を回想され、明治天皇さまの統治なさつた盛んな明治の時代を回想なさつたのである。その無量の御感慨が、平易なお言葉にこめられてゐる。何の奇もないが、深く納得せられるお歌である。

昭和天皇さまの明治天皇さまに寄せられる御敬慕のお心は、お歌ばかりでなく、詔勅にも、お言葉の記録にも、随所に拝せられるところである。

殊に、敗戦後、「新日本建設に関する詔書」（昭和二十一年一月一日）の冒頭に、「五箇条の御誓文」をお示しになり、「勅旨公明正大、又、何ヲ力加ヘン」——日本復興の原理はここに尽きる、とまで述べられたのである。

また、昭和天皇の皇太子時代、大年十年の歌会始に初めて詠進なさつたお歌は、その前年の大正九年に創立された明治神宮についてお詠みになつた次のお歌である。

社頭暁

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

「代々木の宮」は明治神宮のことである。

大正十年といへば一九二一年のことである。それから、約六十七年、昭和六十三年一九八八年、昭和天皇御年満八十六歳の「歌会始」のお歌が、前記の「車」の御製なのである。

かうしてみると、昭和天皇の歌会始のお歌は、皇太子時代の明治神宮をお詠みになつたお歌に始まって、最御晩年とも申上げるべき昭和六十三年の「車」のお歌——昭和天皇さまの、しかも「お

ほちち」(お祖父さま)といふなつかしいお言葉をかぶらせての、明治のみ代を回想されるといふお歌に終るわけで、昭和天皇御一代のお歌の起承転結の、起となり結となったと拝せられる。(その後、本年一月十日に予定されてゐた「歌会始」は、新天皇御服喪中につき行はれず、御題「晴」の御製は、御大葬後に発表されると新聞に書かれてゐたので、「車」の御製のあとにその「晴」の御製がつづくことになるであらう。)

(五) 終戦直後の御製

敗戦直後、昭和天皇がマッカーサー元帥と会見して、戦争に関する一切の責任を負ふといふお話をされたことは、逆に、天皇の存在意義を占領軍司令官ならびに諸外国に知らせることになり、かくて、天皇の権威は守られたのであるが、当時一般の風潮は、さながら革命前夜の様相を呈してゐ

て、天皇処刑論、天皇退位説、天皇制打倒の議論が、内外に沸騰したのである。

陛下のマッカーサー元帥との会見の内容は、当時は全く公表されず、昭和三十年になって、重光葵元外相が既に引退してゐたマッカーサー元帥に會つて、始めて公表されたのである。それは国民に衝撃を与へて、天皇の戦争責任の問題にも終止符を打ったかに見える。天皇の崩御に際して、各紙またその「捨身」の御決意をたたへる論説をかがけてゐる。有名な話であるが、当時の記事を載せておく。マッカーサー元帥が重光元外相に語つた内容である。

「私は戦前には、天皇陛下にお目にかかったことはありません。初めて御出会ひしたのは、東京の米国大使館内であつた。

どんな態度で、陛下が私に会われるかと好奇心をもつてお出会ひしました。しかるに実に驚きました。(much to my surprise)

陛下は、まず戦争責任の問題を自ら持ち出され、つぎのようにおっしゃいました。これには実に

びっくりさせられました (to my utter astonish

ment)。すなわち、私は、日本の戦争遂行に伴

ういかなることにも、また事件にも全責任をとり

ます。また私は、日本の名においてなされた、す

べての軍事指揮官、軍人および政治家の行為に対

しても直接に責任を負います。自分自身の運命に

ついて貴下の判断が如何様のものであろうとも、

それは自分には問題ではない。(go ahead) 私は

全責任を負います。これが陛下のお言葉でした。

私は、これを聞いて、興奮の余り、陛下にキスし

ようとした位です。もし国の罪をあがのうことが

出来れば進んで絞首台に上ることを申出るとい

う、この日本の元首に対する占領軍の司令官とし

ての私の尊敬の念は、その後ますます高まるばか

りでした。」(天皇陛下を讃えるマ元帥「重光葵、昭

和三十年九月十四日読売新聞朝刊寄稿)

右に対応するものが、「終戦直後」の次の四首のお歌である。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめ
けり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただた

ふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくと

もいくさとめけり

外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれと

ただいのるなり

終戦の折のご決心をそのまま直接におよみになられたありがたいお歌であって、前記のお言葉の真実であることをこのお歌が証明してゐると拝されるのであるが、このお歌の公表されたのも、ずっと後の昭和四十年代のことであった。昭和天皇の御徳について、「鹿児島湾上の聖なる夜景」「荒天

下の分列式」等の名文をのこした木下道雄先生（元侍従次長・故人）の『宮中見聞録』（昭和四十三年一月一日初版）がこのお歌の典拠である。私は先生から直接にお話をも伺ってゐるので、語句に多少の相違はあるかも知れないが、全体として間違ひはない。事の次第は拙著『歌人・今上天皇』増補・新版に書いたので、疑念を持たれる人はお読みいただきたい。この御製が最後の一首を除いて、『天皇皇后両陛下御集・あけぼの集』（昭和四十九年一

月二十六日、読売新聞社刊）に載らなかつたのは、マッカーサーとの御会見の内容をお話にならなかつたと同じやうなお気持からであつたらうと拝察されて、畏敬の心を一層深める次第である。宮中歌会始の披講を長くやってをられる坊城俊民氏もそのやうに言ってをられるし、侍従の方の中にこのお歌をあげて終戦時の御心境を仰いでをられる方もあることを附記しておく。

（理事）

(7) 今上天皇御製・平成二年年頭のお歌について（存稿 平成二年一月記）

(一) 今上天皇のお歌の元日各紙発表

元旦は、先づ、神棚に向つて、元日の新聞発表の天皇さまのお歌を朗誦する。——これが私の事はじめであり、例年のならはしでもある。

中のことではあるし、いつも前に知らせてくれる友人からの連絡もなかつたしするので、御製の発表はあるまい、と思つてゐた。あるいは、といふ期待がなかつたわけではないが——そんな気持ちで、元日の新聞の皇室記事を見た。

しかし、今年—平成二年—の一月一日は、諒闇

すると、御製がかかげてあるではないか！私

のところは読売だったので、三首のお歌であった。
〈殯宮祇候ひんきゅうしこう〉〈原爆慰霊碑〉〈一年祭近付きて〉三首のお歌である。中の〈慰霊碑〉のお歌は、やや複雑な内容のお歌で、すぐに心にはひびかなかったが、二首のお歌は平明なお歌で、一読意味もすぐわかって、強く心打たれた。

ありし日のみ顔まぶたに浮べつつ暗きあらしの宮にはべりぬ（殯宮祇候）

父君をしのび務むる日々たちてはや一年の暮れ近付きぬ（一年祭近付きて）

とある。御諒闇中の陛下のお気持ちが、ありのまま卒直に現はれてゐて、昭和天皇のお歌さながら、平易なお言葉そのまま、一首のしらべに無限の御感懐がうかがはれる。

「父君をしのび務むる日々たちて」とくり返して読むにつれて、陛下の一年間の御追憶とお務めの

情が痛切に仰がれる。とともに、昭和天皇のはじめられた元日新聞への御歌発表をそのままおつづけになられたことのありがたさに、思はず感涙のこみあげてくるのを覚えたのである。

昭和天皇が元日の新聞にお歌をはじめてお示しになったのは、昭和二十一年、敗戦の翌年の一月一日のことであった。世上「天皇の人間宣言」といはれた「新日本建設の詔書」とともに、次のお歌が発表になったのである。

外国の陸に小島にのこる民のうへやすかれとた
だ祈るなり

一気呵成の直情そのままのお歌は、当時の全国民の衷心からの願ひを御代弁くださったものでもあって、われら国民の肺肝に徹した。

このお歌の発表の経緯については、昭和天皇がおなくなりになってからはじめて発表された故木

下道雄当時侍従次長の『側近日誌』によって、はじめて明らかになったのである。それは、敗戦国民を激励する思召であったことは勿論であるが、占領軍の許可を得た上で、発表になったものと思はれるのである。『側近日誌』によれば、右のお歌は次の、今日人口に膾炙する三首のお歌につづく一連のお歌であったのである。

爆撃にたふれゆく民のうへを思ひいくさとめけり
身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただまもらんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

右の三首の、敗戦に際しての大みごころの直接

の御表現は、『側近日誌』によると、木下侍従次長が、陛下のおゆるしを得てをりながら、当時発

表できなかつたらしい。(恐らく占領軍当局の承諾が得られなかつたのであらうと思はれる。あるいは遠慮されたのか。)この三首のお歌が木下道雄先生によって民間に発表されたのは、昭和三十一年八月、九年になつてからのことである。終戦直後の昭和天皇のマッカーサー元帥との御会見の折、戦争の責任についてのお言葉が、重光葵元大使によつてはじめて明らかにされたのが昭和三十年読売紙上であつたことと似た経緯である。

右のやうな、敗戦ならびに占領軍施政の下で、昭和二十一年元日新聞紙上のお歌の発表があつたことをわれわれは忘れてはならない。

その後、歌会始以外の御製の公表は、折にふれて行はれるやうになつた。昭和二十七年四月二十九日各紙は「平和条約発効の日を迎へて五首」を掲げた。

元日新聞のお歌公表が恒例となつたのは、昭和二十八年「独立後はじめて迎える元日」の各紙か

らである。昭和天皇はその後、御公表を欠かされることはなかった。

とりわけ、昨年、つまり昭和六十四年（平成元年）の一月一日の新聞紙上に、昭和天皇の御病中の三首のお歌を拝したことは、言ひやうもない感動であった。当時、昭和天皇はほとんど御危篤の由であったので、この御製はわれわれに一縷の望みをいだかせたが、また一面、昭和天皇さまが、この新年のお歌の公表を、どれほど大事にお考へになられたかを示されたものでもあつて、畏しとも畏しとも言ひやうがなかつたのである。

右のやうに拝察される昭和天皇のお考へをそのままお継ぎになつたのが、今回の、今上陛下の御製の公表である、と私は思ふ。ありがたいといふか——これによって代々の天皇さまのお心もちを一般国民がちかに拝することができるのであつて、まことにありがたいことである。

私が感激の涙に目のうるむのを覚えたのは、右

のやうな次第である。

(二) お歌五首

さて、前にもどつて、読売の記事には、三首のお歌が発表されてゐるが、「陛下が詠まれたお歌五首も発表された」とある。読売は五首の中の三首だけを発表したわけである。

そこで五首のすべてを見たいと思つて、他紙をしらべてみたところ、東京、産経、日経、朝日各五首、読売と毎日とだけ三首の掲載といふことがわかつた。

昭和天皇の時代もさうであつたが、どういふわけか、大新聞の取り扱ひには、何か十分なものが感じられない。今年は、「五首発表」とあつて、毎日・読売以外は五首のすべてを掲載してゐるのでよかつたが、各紙とも御歌全部の掲載を期待したいものである。さうすれば私のやうなものも一

紙で安心してゐられるのである。

そんなわけで、私は各紙の、御歌の掲載を含めて「皇室記事」を検討する機会を持ったが、中で一番丁寧なのは日経新聞であった。そこから引用する。(なほついでに一言しておく。ジャパン・タイムズはお歌には一言もふれてゐないで、三面に「即位が論争を結晶する——最先端の天皇論争」(Enthronment Crystallizes Controversy—Debate over Emperor at forefront.)といふ記事をかかげてゐた。前には時々御製の翻訳をかかげてゐるが、今年はない。)

天皇陛下が平成元年中に行事やお出かけなどに際してよまれたお歌五首

▽殯宮祇候(ひんききゅうしこう)

ありし日の み顔まぶたに浮かべつつ 暗きあらきの宮にはべりぬ

▽原爆慰霊碑

死没者の 名簿増えゆく慰霊碑の あなた平和の灯は燃え盛る

▽広島赤十字・原爆病院

平(たひ)らけき 世に病みあるを訪れて ひたすら思ふ放射能のわざ

▽ジンバブエ国大統領閣下を国賓としてお迎へして

まれびとを 迎へて開くうたげにて 彼の国人(かのくにびと)の経し道を聞く

▽一年祭近付きて

父君を しのび務むる日々たちて はや一年(ひととせ)の暮れ近付きぬ

お歌の表記法

さてここでまた本題から離れて和歌の表記法について一言しないではをれない。といふのは、各紙それぞれがなつてゐるからである。

和歌は一首一文が原則である。そこで句間字間

をあけないで、一行に書きくだすのが本来の姿である。二行三行にわたる場合も書きくだしを本則とすべきであらう。読売・産経・朝日はこの書き方である。

しかし、前に引用した日経の御歌のやうに句の間をあけたり、上の句と下の句を分けて書いたりする（東京・毎日）のは、読み易いやうにといふ配慮からであらう。あながち非難するわけではないが、和歌には音調といふものがあつて、一首一首異なるものであるから、一首一文が原則であることを忘れると、思はぬ混乱をおこしかねない。日経は、前にあげたやうに第一句のあとと、第三句のあとに字間を作った。――「ありし日のみ顔」、「死没者の名簿」、「平らけき世に」、「まればとを迎へて」と、第一句に直ぐにつづく第二句のはじめの語を一字あけたため、語調と語意とが一致しなくなりました。

今回の御製は、みな第一句から一気に述べられ

た御表現であるから、上の句と下の句とを二分した書き方も、音調語調の上に問題を残してゐる。

例へば、〈原爆慰霊碑〉のお歌の第三句「慰霊碑の」で切つて、「あなた平和の灯は」としてゐるが、これは、意味の上からすれば「慰霊碑のあなた」「平和の灯は燃え盛る」とした方がよいのであらうか。そのほかも上の句と下の句との間のあきは、一息のお歌に、休止をおいたやうになつて、私はよくないと思ふ。

和歌の音調は作者の声を示すものである。五首のお歌のうち、もし句切れを作るとすれば、第三首の「ひたすら思ふ」が、倒置法であるとするなら、第五句の「放射能のわざ」は、「わざを」の「を」が省略されたものとなるから、「ひたすら思ふ」で字間をあけてもいいのかも知れない。しかし、このお歌は、「ひたすら思ふ放射能のわざ」とつづける体言止めのお歌のやうにも拝されるので、いまにはかに断じがたい。

したがって、今回のお歌についてだけ言へば、字間をあけない原則通りの書き方がよいと思ふ。強いて句間をあければ、読み易くするため、機械的に、第一句、第二句、第三句、第四句、五・七・五・七・七といふふうに、句のあいだをすべてあけるやうな書き方もあらう。

発表の原稿がどういふものかわからないのではつきりしたことは言へないが、要は、和歌は一首一文を原則とする、といふことを見落さないでほしいと思ふ。

次に、ふりがなの件。産経は字の脇に振って、「彼の国人」といふやうにしてゐる。これが恐らく原稿通りであらう。新聞だから、日経のやうに字のあとに括弧で入れるのもやむを得まい。

かなづかひは、歴史的かなづかひである。これも原稿通りであらう。昭和天皇の御歌もみな歴史のかなづかひであった。現代かなづかひといふのは、現代語を書きあらはす時の標準を示したもの

であつて、俳句や和歌のやうな文語体的な韻文の表記法としては、ふさはしくない。原稿のまま歴史的かなづかひで表記するのが当然である。

漢字の字体は、常用漢字体になつてゐるが、私には、これも原稿通りと思はれる。もつとも「殯宮」「祗候」といふやうな常用漢字以外の正漢字が用ひられてゐることはいふまでもない。これをカナで書き直したりしたら大変だ。

さて、和歌の表記法のこととてくだくと説明したが、各紙まちまちなので言はないではをられないかつたのである。

要は、一首一文一行の書き下しを原則とすることを忘れぬことである。

(三) お歌を読んでの感想

はじめに書いたことではあるが、お歌を読んで先づ強く心打たれたのは、「殯宮祗候」(ひんきゅ

うしこう)のお歌と「一年祭近付きて」の二首であつた。

「殯宮」は「あらしの宮」のことで、昭和天皇がお亡くなりになつて(一月七日)後、一月十九日、御尊体の靈柩が皇居正殿松の間の殯宮にお移された、それから二月二十四日の斂葬、葬場殿の儀の行はれるまでの間、正殿松の間に於て皇族・縁故者の方々が「祇候」(つつしんでお側に奉仕すること)したのである。民間仏式葬儀のお通夜によつて理解できる。我々一般国民も参詣して正殿前に掲げられた御尊影を拝した。

たまたま皇室警察官の亀井孝之君の「殯宮に祇候して」といふ連作の歌があつて、その中に「浄闇」といふ言葉があつた。それで一層その場のさまが想像されたのである。御製の「暗き」とあるのは、その浄闇を御表現になられたのであらう。

註(文末掲載)

いづれにしる、御言葉づかひは、実に単純で明

快で、素直な御表現で、調子に無限の感動を波うたせてゐる。

今上陛下は、昭和天皇の御大葬、葬場殿の儀の折の御誄を、「悲しみの極みであります」と結ばれたのである。さうした極限の感動は、表現を、純化・単純化するであらうか、——御製はさういふ意味での単純・純粹な御表現になつてゐると、拝される。「殯宮祇候」といへば概念的形式的であるが「暗きあらしの宮に侍りぬ」は体験そのままの御表現である。ありのままにして全し、といふ表現と拝する。

「一年祭近付きて」のお歌も同じである。

「父君をしのび務むる日々たちて」といふ御表現なども、実に具体的でお言葉が生きてゐる。例へば、「父君をしのぶ務めの日々」などといふ表現に比べてみればわかるのである。「日々たちて」の「たちて」も口語的で、「日々すぎて」に対して、生きてゐる——つまり直接的でありのままのお言

葉づかひと拝される。そして一首を読みくらすと、重い御感慨がそのしづかな音調から迫ってくるのである。

私はこの二首を拝誦して、昭和天皇が敗戦直後にお詠みになったお歌の歌風を想った。

戦に敗れし後の今もなほ民のよりきてここに草
とる（昭和天皇のお歌、昭和二十一年）

わざはひを忘れてわれを出むかふる民の心をう
れしとぞ思ふ

極度に単純化された和語の御表現で、深い深い感動を一首の律動に托す歌の姿が、実によく似てゐると思はれるのである。

さういへば、「ジンバブエ大統領閣下を国賓としてお迎へして」のお歌の「まれびと」といふお言葉の使ひ方も、昭和天皇のお歌の中のお言葉そのままである。

まれびとを迎へて開くうたげにて彼の^か国人の^{くにびと}経^へし道を聞く

「国賓」は和語で正に「まれびと」である。しかし、現代短歌の中では耳なれない言葉であるが、昭和天皇のお歌には次のお歌がある。「迎賓館」（昭和四十九年）と題するお歌である。

たちなほれるこの建物に外つ国のまれびとを迎へむ時はきにけり

ジンバブエ大統領をお迎へしての宮中の宴会は洋風の盛大なものであることが、写真などで想像されるが、このお歌は、すべて和語であらはされてゐる。「かの国の歴史」といはずに「彼の国人のへし道」と言はれて、強い具象といふものがあらはされてゐる。そして結句の「聞く」は、実

に重く一首を結んでゐる。一語に千鈞の重みがある、といふが、この結句には正にさうした重みがある。「聞く」といふことを作者がいかに重んじてをられるかがこの結句で感じられるのである。

これは天皇のお心構への伝統であらう。とてもわれわれには及ばない御表現である。今上天皇のお歌の御表現のお力といふものは、技術的にも実にも高度なものであると拝される。それにつけても皇太子時代以来の平素からの容易ならぬ和歌についての御修養が偲ばれて、何ともありがたいことがある。

ジンバブエは、南アフリカのローデシアが「一九八〇年独立。英連邦に属する共和国。面積三九万平方メートル、人口七三六万（一九八〇）」（『広辞苑』第三版）。私などは辞引を引いて知ったやうなわけであるが、今上陛下は皇太子時代にアフリカには何ヶ国か御訪問なさつていらつしやる。今上天皇の世界的視野の中にはかうした遠隔の国々

もあり、その国の人々の経験して来た歴史を心をこめてお聞きになる——かういふお歌を読むと、今上陛下こそ日本の国際化の最先端を歩いていらつしやる、さう思はれてくる。

このお歌は、先にも述べたやうに、洋式の宴会の折の御表現を、すべて和語で表現なさつてゐることに、私は打たれた。和歌の中に漢語を使ふことは、音調を強める効果もあるしするので、いま現代短歌では盛んにといつてよいほど普通に行はれてゐることであるが、明治天皇以来、御製には少い。明治天皇以前は勿論のことである。私も若い頃はそれを古めかしくあき足りぬことに思ったが、段々年をとつてくると、和語の持つ魅力といふものに深くひかれるやうになって、改めて和語中心の御製に心うたれるのである。

「ジンバブエ大統領閣下を賓客としてお迎しへて」その宴会の席上のお心もちを歌によむ、といふことは、未曾有のことである。宴会もすべて洋

式で行はれてゐたのであらう。しかし、その折の天皇のお心もちが、すべて和語で詠まれてゐる、といふことは、考へてみると、随分、不思議な感じがする。生活の形式は現代文明の最先端にあるが、その折の人の心持は、昔ながらの何千年来の和語によつて詠まれてゐるのである。万葉時代の人がよみがへつて来ても、その人々が、このお歌を、今日われわれが理解するやうに、理解できるといふことは、不思議なことではないか！

目に見えるものは、すべて変つた、と言つてよい。しかし、その中身の人の心は少しも変わらないのである。

さうすると、和歌に漢語は入れないのか、といはれる。そんなことはない。漢語しかない言葉もあるし、外来語そのままの言葉もある。次の慰霊碑のおうたがそれだ。その点、日本語は、名詞に漢語、外来語を自由に使つてゐる。テレビとかラヂオとかカレンダーとかソニーとか、かういふも

のを和語で言ひかえる必要など全くないのである。「原爆慰霊碑」「放射能」なども同じである。

昭和天皇のお歌の中では「平和」といふ言葉は「平らぎ」と使はれてゐるが、次の「広島」のお歌のやうに「平和の鐘も鳴りはじめ」といふお言葉がある。今回の今上天皇のお歌では、「平和の灯」となつてゐる。これは、「平和の灯」といふ名称なのだと思ふ。同時に「死没者の名簿」「慰霊碑」「放射能」すべて、その場の名称であつて、他に言ひかへやうがないのであらう、と思はれる。

「死没者の名簿」は、慰霊碑の中に収められた名簿であらうし、「平和の灯」もそこに建てられてゐた記念碑の名称であらう。つまり具体的な名称をそのままお歌の中に詠みこんでをられたにちがひない。——ただ、「灯」がもえさかつてゐたのを、作者の考へでそれを「平和の灯」と言つたのではあるまい、といふことである。「死没者の名簿」といふのはちよつとはつきりしないが、「死

没者の名簿」と題して、名前が書き並べてあったものであらう、と、私には思はれるのである。これらの漢語は具体的な名称を示してゐるのであらう、といふのが、私の解釈である。したがって、私は、第一首を写生の歌とするのである。しかも、そこに理想的な考へ——原爆被災の悲劇によって世界の平和が支へられてゐる、といふ考へが表現されてゐるのである。写实的であつて同時に思想的である——さういふ意味での思想詩と拝するのである。ただ単に作者の思想を観念的に詠んだものではない、と私は思ふ。

次のお歌も、ただ観念的に「放射能のわざ」について考へてゐるのではない。「平らけき世に病みゐるを訪れて」といふ具体的行為の経験によつて、「ひたすら思ふ」といふ痛切な経験がつづいてゐるのである。

「平らけき世にやみゐる」といふ、戦後四十数年を経ても快癒せぬ原爆傷害者の苦悩の姿を短い

言葉で御表現になつたのである。「ひたすら思ふ」といふ耳なれぬ強いお言葉で、何とか快癒の道はないものかと一途にお考へになつていらつしやるお心がうかがはれる。今上天皇も昭和天皇と同じやうに生物学者でいらつしやるから、その折のお考へは、私などには推測できぬ強い一途なお心持であつたかと思はれる。そして最後に、「放射能のわざ」と言ひ放つやうに言はれて、「放射能のわざを」と「を」を省略されたのも、「放射能のわざ」に対する深刻な思想が、未解決のまま作者の心につづいてゐるやうに、私には思はれる。

原爆についてのお歌は、昭和天皇にも

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめ立ちなほる見え
てうれしかりけり（昭和二十二年）

といふ深いお悲しみと御同情のお歌があるが、今上天皇のお歌にも、このやうなお歌を拝して、二

代にわたる深刻な御同情御悲哀を拝するのである。

また、川出麻須美の悲歌がある。

平和とはかなしみに咲く花なるか神みそなはせ

この広島を（昭和二十一年五月、広島にて）

御製のお考へに通ふものがある。これはどちらかといふと純粋な思想抒情詩である。

沖繩についても同じである。沖繩については皇太子時代に数々のお歌を拝してゐるのでお心持は天皇さまとしても同じであらう。

㊦

殯宮に祇候して

龜井孝之

松の間の殯りの宮にすすみきて拝みて入る齋庭の清しき

をろがみてまなこひらけば殯宮の大真櫛の紙垂の目

今上天皇は昭和天皇について二代にわたって戦争の犠牲といふか惨禍についての責を負はうとしていらつしやる！ このキリストのやうなお姿を仰いで、私には申上げることばはない。

原爆慰霊碑

死没者の名簿増えゆく慰霊碑のあなた平和の灯は燃え盛る

広島赤十字・原爆病院

平らけき世に病みゐるを訪れてひたすら思ふ放射能のわざ

（平成二年一月二十八日稿了）

に入る

御簾の奥にはのうかびたるみひつぎを現つに見れば
悲しみましぬ

現し世に在しましし日の御姿を浄闇の中に偲びまつ

りぬ

刻の過ぎ祗候を終へてみひつぎに御姿偲びつつ拝礼し

まつる

松の間の殯りの宮に去りがたき心残して齋庭を出で

来ぬ

第十編

自撰・執筆文献目録
—年代順—

(昭和八年—平成二年)



凡 例

- 一、*印は後に単行本に収録したものを。
 - 一、俳句、和歌、詩については歌集の発行についてののみ記載。
 - 一、編集に従事した人の書物は参考のため記載した。
 - 一、昭和年数の下の漢字数字は西暦年数、アラビア数字は筆者の年齢(数へ年)
 - 一、「」は単行本及び雑誌名、無記号乃至「」は論説題目。
 - 一、論説題目下の数字は所載誌の発行の年月日もしくは○月号等による発行年月を示す。
 - 一、ゴチック体は、本書掲載のもの。
- 論説所載主要機関誌一覧
- 『伊都之男建』第一高等学校昭信会(黒上正一郎先生創立)発行(昭和六年、昭和十六年)
 - 『学生生活』東大文化科学研究会のうち日本学生協会発行(昭和十三年十月創刊号、昭和十五年六月号、日本学生協会発行)、昭和十六年一、二月合併号)
 - 『新指導者』日本学生協会発行(昭和十六年四月号、『学生生活』改題、昭和十八年六月号)
 - 『思想界』(『新指導者』改題)(昭和十八年八月号をもって廃刊となる)
 - 『愛国新聞』『愛国学生』『愛国評論』はいづれも愛国社(石田愛之助先生盟主)の機関誌(終戦により廃刊、戦後の『民主公論』につづく)
 - 『民生新聞』(『帝国新報』の後を継ぐものとして滝口堯氏編集、昭和二十一年、二十二年)
 - 『興風』興風会——日暮里駅・沢岡実也編集発行(昭和二十一年一月創刊、昭和二十四年三月号)
 - 『新公論』興風会発行のち小田村寅二郎氏編集発行(昭和二十八年三月創刊号、昭和三十年二月)
 - 『国民同胞』社団法人・国民文化研究会発行(昭和三十六年十一月第一号、通巻三五一号)
 - 『復刊・アカネ』後藤積氏編集発行(一九七四年五月第一号、第二十二号)
 - THE ASIA 亜細亜学園学内誌(昭和四十四年六月九日第一号、略称ASIA)(改題「アジア」)
 - 『諸学紀要』亜細亜学園発行紀要(一九五九年三月三十日創刊、第十五号をもって廃刊)
 - 『亜細亜大学教養部紀要』亜細亜大学教養部発行(『諸学紀要』に続く、一九六六年第一号、略称『教養部

紀要(一)

○『アジア研究所紀要』亜細亜学園アジア研究所発行(昭和五十年三月十五日発行)

○『アジア研究所所報』アジア研究所発行(昭和五十年六月三十日)

○『青々会報』亜細亜学園同窓会青々会発行(昭和三十一年第一号)

○昭和八年(一九三三) (19) 昭和十二年(一九三七) (23)

論説題目上のアラビア数字は昭和年代を示す。

『伊都之男建』(第一高等学校昭信会機関誌) 所載

8 山中(湖畔) だより(八・九・二五)

9 ことのはのいのち(鎌倉から)(九・五・一〇)

天地のはじめの時(古事記とバイブル)(九・九・一八)

10 キリストの生の記念(一〇・一〇・一〇)

11 思念独白(文草、宮沢賢治、聖徳太子、明治天皇御製)

(一一・八・三〇)

田安宗武研究摘録(一一・九・二五)

協力の真道を求めて(一一・一一・二七)

現代俳句の展望(同前)

中村草田男論(一一・二二・二五)

12 * 防人を憶ふ(一二・一・二九)

○昭和十三年(一九三八) (24) 昭和十五年(一九四〇) (26)

『学生生活』(東大文化科学研究会発行、昭和十五年六月号から日本学生協会発行・機関誌) 所載

13 天皇親政の意義を歴代御製に拝す(一三・一〇・一)

大学の股鑑と日本教育界(一三・一一・一)

14 目覚めよ、国民的感情に(一四・二・一)

実朝の敬神思想(一四・五・一)

古事記を現代に復活せしめよ(一四・七・一)

高校分科制度批判(一四・九・一)

教育改革の一課題としての英語問題(一四・一〇・一)

天孫降臨・神功皇后三韓征服と事変処理原則(一四・一一・一)

正岡子規論(一四・一二・一)

偽装マルキスト(一五・一・一)

15 流行日本主義陣営点検(一五・一・一)

国体明徴思想言論戦の急務を論ず(一五・五・一)

高等教育に国民宗教を確立すべし(一五・一〇・二七)

○この間、日本学生協会幹事・出版部長として、従事。

『文芸世紀』(一五年六月号)に「百鬼乱舞の言論界」

掲載

○文化映画『文化の戦士』(三巻)(フジワラ・ラポラトリ撮影・合宿記録映画——竹脇アナウンサー——)脚本作成ならびに編集に従事(今井善四郎氏と共同)

○日本学生協会発行の学生生活叢書の編集執筆に従事。

第一輯『新学生生活論』第二輯『世界観の戦』第三輯『精神科学の根本問題』第四輯『日本文化の勝利』第五輯『進めこの道』(全国合同合宿感想文集)第六輯『黒上正一郎先生遺歌集』

○電気吹込レコード『古事記朗詠』(天孫降臨・神武天皇東征・日本武尊)

○昭和十六年(一九四二)〔27〕昭和十八年(一九四三)

(28)

『新指導者』(『学生生活』改題、日本学生協会発行、一般思想雑誌)(*印は後『三条実美公歌集』のかたとその研究)に収載。

国民精神崩壊の危機(二六・五・一)

『支那事変解決を阻害するもの』(精神科学研究所刊)に編集執筆協力。

「藤原邦夫兄追悼のり」と(「靈戦」)

門出のうた(ホイットマン Starting From Pauman-

*)の訳詩(一七・二・一)

信綱、茂吉の歌(一七・二・二)

『うたと消息』(一七・二・八)編集刊行

『野中孝夫遺稿』(二七・九・一〇)

愛国百人一首について(二八・一・一)

*維新の曙光——「梨のかたえ」研究(二八・五・二)

*「梨のかたえ」研究(二八・六・一)

○この間、昭和十六年四月応召、即日帰郷、五月東京市中野結核療養所に入院、入院中大東亜戦争開戦、萩市にて発行の『日本太郎』に、和歌及び詩を多数発表する。十八年二月、精神科学研究所ならびに日本学生協

会の幹部役員東京憲兵隊に拘留され、『新指導者』は、『思想界』と改題する。『思想界』編集発行。

『思想界』と改題する。『思想界』編集発行。
ささなみ抄(一八・七・三〇)

「たより」常盤松尋常小学校同窓会『松影』創刊号(昭和十八年五月発行)

*三条実美公とその同志(一八・七・三〇)

○昭和十八年八月三十一日、東京憲兵隊長の命により、二カ年間の期限を以て、精神科学研究所・日本学生協会の解散ならびに『思想界』その機関誌の発行禁止及

び集団的思想運動の禁止。以後、書簡等検閲される。

○昭和十九年（一九四四）（30）九月、昭和二十年（一九四五）（31）三月頃

『愛国新聞』（岩田愛之助先生主宰愛国社機関誌）に
毎号執筆。（*印は後『詩と政治——明治の詩魂』（昭和四十九年三月刊）に収録。）

ムツソリーニの言葉。*子規の学校教育論。*明治の精神。*滝廉太郎をめぐって。*浦敬一小論。*正岡子規のうた。正岡子規小論。第二次ブーゲンビル島沖航空戦（叙事歌謡）。たたかひの歌上下。米英鬼畜の野蠻性（ホイットマンの言葉）。無疲倦戦闘意力々源。*三条実美論抄上中下。万邦無比の精神力振起の時。

思想戦線（敵国非望の依拠、ル大統領の教書、イギリスの反省、イーデンの奸詐、黄昏の英国、ムツソリーニとイタリア、ドイツ第三帝国の底力、チャーチル論抄、イギリスとソ連、アングロサクソンの自由、アングロサクソンの根本気質、アメリカデモクラシーの鬼畜性格、ビオルソン魂喚び、南北戦争美化の偽購宣傳）。英国と欧洲赤化問題。*詩と政治上中下（戦国時代和歌集研究）。ことのはぐさ（若桜集抄）。*詩と

政治（秀吉の和歌上下）。*国木田独歩論。ムツソリーニとイタリア。国難突破の力源（戦国時代より織豊時代への思想的考察）。山桜集小論。社説・戦時言論の任務。*子規と漱石。敵前回頭（小磯内閣論）。危急時局の要請（上和下睦の聖訓）。『憲法義解』の帝

議会原論。憲法義解論序。正岡子規論上。国民道義の根拠。*梧陰井上毅素描。文教非常態勢私見。

単行本『三条実美公歌集・梨のかたえとその研究』（昭和十九年五月二十日初版二〇〇〇部、愛国新聞社出版部刊）

『愛国学生』所載

タケミカヅチノヲノ神（一九・一・一五）（一九・二・一五）

『愛国評論』

古代の表情（埴輪論）（一九・一一・八）

人麿の信仰思想（一九・一二・——）

障害の打開（二〇・一・八）

○昭和二十年八月終戦。昭和二十一年（一九四六）（32）
昭和二十二年（一九四七）（33）

『民生新聞』（『帝国新報』の復刊、滝口堯氏編集）に

寄稿。

阿部知二「緑衣」(『新潮』一月号)批判、デモクラシーの詩人・ホイットマンの言葉(『民主主義展望』抄訳、シエクスピアに関する一考察)。或る復員兵士の話。『草の葉』抄訳。書評(鈴木貞太郎述「終戦の表情」、岩波文庫『草の葉』、同、『憲法義解』、小林秀雄著「無常といふ事」、亀井勝一郎「聖徳太子」、エドガー・スノー「中国の赤い星」等)黒の青春(自伝)『鹿菅渡川出麻須美先生歌集』(伊藤真三郎君贈写刷)刊行。

○昭和二十二年(一九四七)(33)四月〜昭和二十四年(一九四九)(35)

南波惣一氏と『興風』の編集に従事、執筆。
ホイットマン作バイオニア・オオ・バイオニア(訳)、読書メモ、シーホークと南部の人(映画評)、鹿菅渡の歌三首、画展逍遙、ホイットマン歷程回顧訳、宗良親王「李花集」研究ノート、邦訳ホイットマン全集書評、『草の葉』抄訳
○後、昭和二十四年五月、松田福松先生(木口公十)と共著にて『ホイットマン詩撰』(吾妻書房)を刊行、

(のち『草の葉抄』と改題)

共産主義私見——その克服のために——国鉄労組上野支部・組合資料一九四九・三・三一発行

○この間、東方書局及び国立書院にて次の諸著の編集に従事。特に記載なきものは国立書院刊。

『終戦一年』(日米太平洋協会——東方書局)、矢野峰人著『途上』、『有明研究』関口鯉吉著『太陽新説』(二三年一月)、『天空憧憬』(二三年四月)、高山岩男著『理性・精神・実存』(二三年三月)、勝本正晃著『文芸と法律』(二三年二月)、文寿堂編集部(寺島友之編)『新日本文学読本』三部作(二三年五月〜六月)、田辺寿利責任編集『社会学大系』全十四卷(二三年)協力、有井治著『現代社会主義批判』(日本経済専門学校、二四年九月)。宮内府図書寮編『図書寮典籍解題・文学篇』(国立書院刊、二十三年十月)

○昭和二十五年(一九五〇)(36)

一月結核再発、三月入院、胸郭整形手術を受け、六月退院。爾後一年間、自宅療養。
秋ふけて(日本経済短大校友会誌)

○昭和二十六年（一九五二）(37)

自選歌集・自筆謄写印刷・三部作『武蔵野』（五月）・

『戦後』（八月）・『流星』（十月）自費出版。

○日本学術会議事務局長新谷武衛氏のもとにて『原子爆弾災害調査報告書（日本学術会議編集）』（二十六年八月刊行）の編集に従事。

○日本経済短大校歌作詞

○昭和二十七年（一九五二）(38)

三井甲之著『天皇御歌解説』謄写印刷刊行に従事、同時に『今上御製集』謄写印刷刊行す。（昭和二十七年三月）

文学概論・講義テキスト『ホイットマン草の葉初版序文訳』、『言語・文体』謄写印刷刊。

○昭和二十八年（一九五三）(39) 一月〜昭和三十年（一九五

五）(41)

『新公論』（三井甲之追悼号二八年一〇月号）に『今上御製研究序説』を、二九年二月号に『今上御製研究（一）』を、六号に『（二）』を、三〇年二月号に『（承前）』を掲載す。

他に、二八年一月号に『川出麻須美詩歌集』『天地四方』刊行について』を掲載。

川出麻須美詩歌集『天地四方・昭和篇』（二八・一〇）
（二）刊行。（広瀬誠氏と共編）

○昭和三十一年（一九五六）(42)

石幡先生を偲んで『亜細亜学園新聞』三一・六・三〇）抒情詩論（国民文化研究会、全国学生青年合同合宿教室レポート『混迷の時代に指標を求めて』に掲載）
「古事記ところどころ」（『神社新報』三一・二・一八）
「こんなことがあった」（ドタ靴の思い出、三人だけの入学式『青々会報』三一・四・一）

○昭和三十二年（一九五七）(43)

川出麻須美詩歌集『天地四方・明治篇』（三一・一・一）刊行。

○昭和三十三年（一九五八）(44)

『三井甲之歌集』（三三・二・一一）編集刊行に協力。

○昭和三十四年（一九五九）(45)

単行本『歌人・今上天皇』（三四・一一・二〇明治書院刊）

「はしがき」

「今上天皇の御製について」（講演要旨、謄写印刷）

○昭和三十五年（一九六〇）(46)

歌人・今上天皇（師と友）通巻一二六号三十五年四月号）

天皇御歌「光」の解釈と批判（亜細亜大学『諸学紀要』

第三号三五・六・三〇）

源氏物語ノート（同前）

体験と思想（講演要旨、国民文化研究会編『国民同胞

感の探求』に収載）

○昭和三十六年（一九六一）(47)

連作短歌の形成（子規・左千夫・愚庵）（『諸学紀要』

第五号三六・一・三二）

今上天皇御歌の研究（『歌人・今上天皇』補正）（『諸

学紀要』第六号三六・一二・一五）

中大兄三山歌と古事記の形成（『諸学紀要』第七号三

六・一二・一五）

『古事記』の講義・和歌の創作と鑑賞（『ある合宿の

記録』早稲田大学学生有志・国武忠彦氏他発行、三六・一・一五）

源氏物語（帚木空蟬）論（『宗教公論』——宗教問題研究所発行——三六年六月号）

○昭和三十七年（一九六二）(48)

○宮中歌会始の儀始めてテレビにて実況放送せられ、

TBSにて藤愷準二氏と解説に当る。

短歌の哲学と技術（国民文化研究会・全国青年学生合

宿教室レポート『新しい学風を興すために——第一

集』所載）

友情の歌・黒上正一郎先生の歌（国民文化研究会機関

誌『国民同胞』三七年八月号）

秋になると（『伊勢春秋』三七・一〇・五）

大正の歌人・田代順一寸描（『国民同胞』三七年一二

月号）

西行と実朝との連作短歌（『諸学紀要』第八号三七・

一一・一五）

○昭和三十八年（一九六三）(49)

新春御発表の両陛下御歌・同上あとがき（『国民同胞』

三八年二月号)

短歌創作について(『新しい学風を興すために——第

二集』所載)

国士の悲歌・田所広泰寸描(『国民同胞』三八年七月号)

師友寸描(中井淳・江頭俊一・百武礼之)(『国民同胞』

三八年八月号)

師友寸描(学徒戦死者の歌)(『国民同胞』三八年一

月号)

記紀万葉の内的関連——神話・伝説・歴史・文学の交

点(『諸学紀要』第八号三八・九・三〇)

歌集『いのちありて』(桑原暁一氏の友情出版)(三八・

五・一五)

真実性こそ短歌の心(『亜細亜学園新聞』三八・一・

二一)

「宮中歌会始」に思う(『共同通信』及び各紙)

神社めぐり(1)氏神さま(2)乃木神社(『宗教公論』七月

号)

○昭和三十九年(一九六四)(50)

新春御発表の両陛下御歌について(『国民同胞』三九

年二月号)

絵と歌と——田代二見画伯寸描(『国民同胞』三九年

六月号)

ますらをの歌——歴代名歌選(『国民同胞』三十九年八

月号)

短歌と歴史——詩と政治(『国民同胞』三十九年二月号)

思想の形成(合宿レポート)『新しい学風を興すために

——第三集』所載)

雑質博愛『鹿野歌稿』を読む(日南、格堂、鹿野)(『流

れ』三十九年四月五月連載)

聖徳太子御歌考(『諸学紀要』第一一号三九・三・五)

田安宗武論(『諸学紀要』第二二号三九・九・二〇)

今上天皇の御歌について(新日本協議会機関誌『世界

と日本』一九六四年八月号)

『歌よみに与ふる書』解題(国民文化研究会三九・三・

一刊)

『今上陛下御製集』(盲人に提灯)新年特別号——三

九・二〇・一五宮内庁許可——謹編

○昭和四十年(一九六五)(51)

教養部の夢と特色(『亜細亜学園新聞』四〇・四・一)

歌心(『国民同胞』四〇年一月号)

聖徳太子の御言葉（『国民同胞』四〇年三月号）

『葦牙』を読む（『国民同胞』四〇年四月号）

聖徳太子・勝鬘経義疏について（合宿レポート『日本への帰帰——第一集』）

柿本人麿の短歌と思想（『諸学紀要』第一三号四〇・三・五）

小田村寅二郎氏との共著『天皇と天皇制についての基本的思考』（四〇・四・二九斑鳩会——亀井孝之氏——発行）

○昭和四十一年（一九六六）（52）

新刊の『今上天皇御製集』（青山新太郎氏謹編）について（『国民同胞』四一年一月号）

*副島蒼海先生の和歌上下（『師と友』四一年二月三月連載）

慰霊祭は学園全体で（『亜大新聞』四一・六・二〇）
聖徳太子の御言葉と『古事記』のいのち（合宿レポート『日本の帰帰——第二集』）

歌集紹介——坪井道興『白山黒水』と川並将慶『水華——ソ連にありて』（『国民同胞』四一年二月号）

単行本『古事記のいのち』（国文研叢書N〇・1、四一・

三・二五初版、国民文化研究会刊）

○昭和四十二年（一九六七）（53）

桑原暁一氏『日本の精神史鈔——親鸞と実朝の系譜』紹介（『国民同胞』一月号）

川出麻須美先生（追悼）（『国民同胞』四二年二月号）
明治天皇御製について（『国民同胞』四二年一月号）

今上天皇の御歌について（合宿レポート『日本への帰帰——第三集』）

大学における人間教育の回復（亜大『学友会雑誌』四二年四月教養部長挨拶）

川出麻須美の詩歌（『教養部紀要』第二号四二年）
三井甲之著『今上天皇御歌解説・附『万葉集論』』解題（斑鳩会四二・四・二九）

『日本思想の系譜——文献資料集』（国文研叢書N〇・4、四二・三・二五刊）の文献解題（聖徳太子・古事記・菅原道真、平家物語・親鸞・源実朝）

『茂木一郎歌集』の「あとがき」（四二年一月四日記）

○昭和四十三年（一九六八）（54）

孝明天皇の御製について（『国民同胞』四三年五月号）

いはゆる神話の復活について(亜大同窓会『青々会報』

四三・一〇・一五)

『君が代』に憶ふ(亜大『明治百年記念講座・広報第

6号』四三・一〇・一三)

武蔵境で降りて(国木田独歩の『武蔵野』ほか)(A

SI A 四三・一一・二五)

ホイットマン受容の歴史(『教養部紀要』第三号四三年)

『日本思想の系譜』(近世その一、その二)文献解題(戦

国武将の和歌、徳川光圀、与謝蕪村、田安宗武、幕

末志士の和歌、鹿持雅澄、孝明天皇「御述懐一帖」、

近世における歴代天皇御歌のうち)(四四・三・二

五)

○昭和四十四年(一九六九)(55)

『大学の運営に関する臨時措置法案』寸感ASIA(四

四・九・一〇)

亜細亜学園学生諸君に告ぐ(不法学生の処分について)

(草案作成)(四四・九・一〇)

自然(ASIA 灯台欄四四・九・一九)

最近のアジビラを分析する(ASIA 四四・九・一

九)

大学を選ぶ(ASIA 四四・一一・二六)

今上天皇と孝明天皇の御歌(合宿レポート『日本への

回帰——第四集』)

『日本思想の系譜』近代その一、その二(四四年刊)

に分担執筆

その一(三条実美、副島蒼海、岩倉具視、正岡子規)

その二(岡倉天心、『山桜集』抄、『国民同胞和歌集・

明治篇』、明治天皇の御歌)

単行本 THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN 東

洋文庫ユネスコ東アジア文化センター(『古事記の

いのち』の英訳、G・W・ロビンソン氏訳、一九六

九年初版、九〇年第四版、東アジア文化研究叢書

No 13)

○昭和四十五年(一九七〇)(56)

いつだったか(頼朝の墓その他ASIA 四五・四・

一〇)

散佚した明治天皇御製——孝明天皇追悼四十余首(『国

民同胞』四五年五月号)

大正天皇の御歌について(『国民同胞』四五年七月号)

和歌は日本文化の精髓である(合宿レポート『日本へ

の回帰——第五集」)

東大五月祭を見て——大学問題を考える (ASIA

四四・六・二二)

梶村昇著『法然』評 (ASIA 四五・一一・一五)

読書余録 (ユージン・ライオンズ原著、小穴毅訳『ソ

ビエトの神話と現実』ASIA 四五・五・二六)

和歌と学問 (ASIA 四五・一一・五)

○昭和四十六年(一九七二)(57)

ポエムジカ『天と海』覚書(『国民同胞』四六年二月号)

『南蛮屏風』——岡本良知・高見沢忠雄共著——につ

いて (ASIA 四六・二・一五)

浅野晃著詩集『観自在讃』紹介(『国民同胞』四六年

三月号)

広瀬誠氏著『立山と白山』紹介(『国民同胞』四六年

六月号)

小田村寅二郎氏の講義と近著『日本思想の源流』につ

いて(『国民同胞』四六年九月号)

孝明天皇御製拾遺四十一首(『国民同胞』四六年一一

月号)

神話・伝説の天皇像——主として神武天皇物語につい

て——(日本教文社刊『天皇・日本のいのち』)に収

録 四六・四・一五)

敷島の道(明治神宮刊『代々木』四六年二月号)

御製歌碑頌(『新日本春秋』四六・九・一五)

日本思想とB・H・チェンバレン・和歌・その他

(『青々会報』四六・一〇・一五)

亜細亜大学創立準備の思い出(同前)

『人生と表現』創刊前後(『教養部紀要』第六号四六年)

明治天皇と和歌(合宿レポート『日本への回帰——第

六集』)

単行本『短歌のすすめ』(山田輝彦氏と共著)(国文研

叢書No12、四六・四・一)

『短歌のあゆみ』(同前)(国文研叢書No13、四六・一

二・一)

○昭和四十七年(一九七二)(58)

聖徳太子親筆『法華義疏』(ASIA 四七・一・一五)

師友遺歌抄——戦後の死闘の中から——上下(未安悟

郎君、副島昌一君、稲垣武一君、杉浦直樹君)(『国

民同胞』四七年四月号・六月号)

歌と思想(『国民同胞』四七年八月号)

大学の存在意義 (ASIA 四七・四・五)

建学の精神と教養部制について (ASIA 四七・八・二五)

わが仰ぎまつる明治天皇御製『代々木』(四七・九・一) 国を支へる力——孝明天皇御述懐一帖 (合宿レポート)

『日本への回帰——第七集』

浜口瑛先生追悼吊辞 (ASIA 四六・一・二五)

『天地四方』(川出麻須美遺稿集) (四七・五・二二刊) の編集に従事し、次の二点を寄せる、「研究ノート二題」、「編集後記」。

○昭和四十八年(一九七三)(59)

教育の中心——台湾を訪ねて—— (ASIA 灯台 四八・一・二五)

ヴントのマルクシズム批判 (桑原暁一編『ヨーロッパにおけるマルクス主義批判論集』四八・一・一〇刊に収録)

今上陛下の御製『子ども』(『養生民報』一九号四八・四・

一)

短歌のすずめ (亜大四八年度学寮委員研修会における

講演速記)

桑原暁一大兄追悼記 (『国民同胞』四八年六月号)

『卒業してから』(四十年後) (『昭八・如蘭会四十年史』昭和四十八年)

皇后さまの「やつがしら絵巻」の御歌 (『国民同胞』四八年一月号)

皇神の厳しき国・言霊の幸はふ国・上 (『国民同胞』

四八年二月号)

回顧と展望 (ASIA百号記念号 四八・一・一・五)

日本の神話と歴史 (『教養部紀要』第八号四八年)

皇室と「しきしまのみち」の歴史 (小田村寅二郎・小柳陽太郎氏共著『歴代天皇の御歌』一四八・九・一刊——寄稿)

和歌全体批評 (合宿レポート『日本への回帰——第八集』)

『明治天皇詔勅謹解』(明治神宮編著一四八・一・二) ○、講談社刊に編集委員として参加、語釈担当) 単行本『日本文学における魂の行方』(南窓社四八・

一〇・一五刊)

『古事記のいのち・改訂版』(国文研四八・一・一・一)

○昭和四十九年(一九七四)(60)

- 皇神の厳しき国・言靈の幸はふ国・下（『国民同胞』
四九年一月号）
- 天皇皇后両陛下御集『あけぼの集』について（『国民
同胞』四九年八月号）
- 言靈の幸はふ国の信（合宿レポート『日本の回帰』
第九集』四九年）
- 近況を報ずる文（『青々会報』四九・三・一五）
- 「敷島の道」といふ言葉をめぐって（『教養部紀要』
第九号四九年）
- 白村江の戦（週刊・世界と日本』一〇六号四九・四・
一五―五回連載）
- 研究余滴 G・W・トレヴェリアン（ASIA 四九・
四・一五）
- 研究余滴 ソルジェニーツインとドストエフスキー（A
SIA 四九・五・一五）
- 書評・古川哲史博士著『日本の求道心』（ASIA
四九・六・五）
- ロダンとホイットマンとステイーヴンソン（『復刊・
アカネ』第一号四九年五月）
- ウイルヘルム・ヴントの思想と学問（『復刊・アカネ』
第二号四九年九月）
- 『古事記』神代七代の神話の意味（『神道学』八二号
四九・八・一）
- 日本文学の中の天皇像・序説（『浪漫』四九年七月号）
- 聖徳太子及び二王子像と『法華義疏』（ASIA 四
九・六・五）
- 桑原暎一著『国史の地熱——聖徳太子と楠氏の精神』
（書評）（『国民同胞』四九年一〇月号）
- 戸田義雄博士著『日本の感性』（書評）（『国民同胞』
四九年一一月号）
- 国際社会と国家意識（『国民同胞』四九年一二月号）
- 単行本『白村江の戦』（国文研叢書 N. 15、四九・一・
一〇）
- 単行本『詩と政治』（南窓社四九・三・三〇第一刷）
- 拙著『白村江の戦』資料摘要（『アジア研究所紀要』
創刊号四九年）
- 百済の戦蹟を訪ねて、歌と文（同前）
- 近代文学と尊皇思想（『浪漫』〇月号）
- 昭和五十年（一九七五）（61）
- 『あけぼの集』について（『濟寧』五〇年一月号）
- ASIA IS ONE（ASIA 灯台 五〇・一・五）

Whitman An American (ASIIA 灯台 五〇・五・

一五)

書評『日本への回帰——第十集』(新入生にすすめる本)

(ASIIA 五〇・五・一五)

『狂人日記』の系譜(『復刊・アカネ』第三号五〇年五月)

国民文化の自覚と国際主義(ASIIA 五〇・六・五)

人生観と国家観と世界観——聖徳太子、松陰、ウント

の言葉をめぐって(『国民同胞』五〇年四月号)

鏡と歌(『国民同胞』五〇年四月号・再録)

神話と歴史(『アジア研究所報』五〇・六・三〇)

生命の論理(『国民同胞』五〇年六月号)

気になる言葉Ⅱ人文科学(『國語國字』八十八号)

韓国の国楽(ASIIA 五〇・一〇・五)

掖玖の人(『アジア研究所報』五〇・一一・三〇)

聖徳太子十七条憲法と神話・伝説・歴史(『教養部紀

要』第二号五〇年)

書評、戸田義雄博士著『宗教と言語』(『教養部紀要』

第一二号五〇年)

舍利弗の念食——維摩経義疏から(『国民同胞』五〇

年一二月号)

輪読の意味(合宿レポート『日本への回帰——第十集』)

今上陛下と昭和五十年(『昭和史の天皇・日本』五〇・

一一・四初版)

国際社会と国民文化(亜細亜学園『留学生文集』五〇

年一〇月頃)

○昭和五十一年(一九七六)(62)

草の葉初版序の訳(アメリカ古典文庫『ウオルト・ホ

イットマン』五一・三・二〇初版に収録)

文明の相互理解と国民文化(ASIIA 五一・一・二

五)

国を守る心——木下道雄先生の遺墨について(『国

民同胞』五十一年一月号)

膠着語の分布についての夢(ASIIA 五一・五・一

五)

膠着語の分布についての補説(ASIIA 五一・六・

五)

お歌会始に見る日本の心(『生政連ニュース』〇月号)

「信ずることと知ること」「ピンクのカーテン」「こと

ば!」(ASIIA 灯台)

日本文明の密度(『アジア研究所報』五一・五・三一)

木下道雄先生遺墨『城南文集』『遺墨集』（『国民同胞』

五一年六月号・七月号）

ウイルヘルム・ヴェントとマクス・ヴェント（A S I A

五一年・一〇・一五）

『松本・和歌森・小倉氏らの聖徳太子論——その思想
性格と学術的欠陥』——（『じゅん刊・世界と日本』

No. 一・二二、三月五日号）

アレキサンダー・ソルジェニーツィン『西方世界に警

告する』訳（『国民同胞』五一年七月号）

中国の動向について（A S I A 灯台 五一年・一〇・五）

ネパール・インド初印象（『青々会報』五一年・一〇・

一五）

御製に拝する今上陛下五十年の御歩み（『生政連ニュー

ス』五一年十一月号）

木村肥佐先生旧著『チベット潜行十年』を読んで

（『アジア研究所所報』五一年・一〇・三二）

佐藤司氏『エール大学東洋学部のことども』補説（『ア

ジア研究所所報』五一年・一〇・三二）

今上天皇のお歌について——和歌と学問（合宿レポー

ト『日本の回帰——第十一集』）

ご在位五十年記念式典と天皇の歌（『マスコミ文化』

十二月号「わたしの提案」）

いのちのうた（『理想世界』五十年十月号から五回連載）

学問と修養と和歌——『若鷲の賦』（『国民同胞』五一

年十一月号）

日本文化における天皇像（『教養部紀要』第一四号五

一年）

○昭和五十二年（一九七七）（63）

カーター大統領の就任演説（A S I A 灯台 五二・

二・五）

学寮委員研修会歌集（A S I A 五二・四・五）

明治天皇御製の英訳出版について（『国民同胞』五二

年二月号）

山背大兄王のお墓（『復刊・アカネ』第六号五二年四

月から連載）

豊長清宗老師のこと（『国民同胞』五二年六月号）

『雲上の声』について 補記（『国民同胞』同右）

甘露寺受長先生追悼（『国民同胞』五二年七月号）

フィリップ・カール・ベータダ先生（A S I A 灯台 五

二・六・二五）

『君が代』の語義について（『世界と日本』五二・七・

二五)

故松浦珪三先生の最終講義 (ASIA 五一・六・五)

新版ブリタニカ二題 (ASIA 五二・一〇・一五)

教育近代化に成功モンゴル (『毎日新聞』五二・一二・

一五)

中国の古代銅器と古墳の壁画 (『アジア研究所報』

五二・一〇・二九)

今上天皇のお歌について——和歌と学問 (合宿レポ—

ト 『日本への回帰——第十二集』に収録)

中国モンゴル紀行—歌と文— (『アジア研究所紀要』

第四号五二年)

吉田松陰渡海エール密書について (『教養部紀要』第

一五号五二年)

○昭和五十三年(一九七八)(64)

語順から見たアジア諸国語 (『アジア研究所報』五

三・一九)

しきしまのみちと人間形成 (平和教授アカデミー)

短歌のすすめ (寮研修講義録)

日本への回帰 (亜細亜寮誌 『自琢』第十二号)

読書のすすめ (F・O・C参加学生に対するパンフ

レット)

語順から見たアジアの諸言語 (『アジア研究所報』

五三・一・九)

中蒙国境の緊迫状態 (ASIA灯台 五三・五・二五)

ゴンチャロフの言葉から (ASIA灯台 五三・六・

五)

外国語熟と国語の問題 (ASIA灯台 五三・六・二

五)

戦死した友の思ひ出 (近藤正人さん、吉田昇さん、名

川良三君、清水重雄君) (『国民同胞』五三年四月号)

故田所廣泰先輩と憲兵隊事件 (『国民同胞』五三年五

月号)

故岡岡克行先生弔辞 (ASIA 五三・七・四執筆)

共産主義社会の実態と日本のマスコミの報道 (ASIA

A 一九二号)

太安万侶の『古事記』序の現代語訳 (『国民同胞』五

三年八月号)

小田村寅二郎氏著『昭和史に刻むわれらが道統』書評

(『国民同胞』五三年一〇月号)

日中文化交流について (『アジア研究所報』五三・

一一・一二)

しきしまのみちとの出会い（『国民同胞』五三年一月号）

「共通一次試験問題」の問題（『言論春秋』五三・一一・一三）

藤原繁先生を悼む・弔辞（ASIA 五三・一一・一九）

三井甲之先生書簡抄（編註）（『復刊・アカネ』第七号五三年一月）連載）

『三経義疏』における経典解釈の進め方について（『教養部紀要』第一七号五三年）

『勝鬘経義疏』歎仏真実功德章の現代語訳（『教養部紀要』第一七号・一八号五三年）

歴代天皇の御歌（一隅会速記録第五回、五三・七・二〇）

現代流行思想とその批判——しきしまのみち（『日本への回帰——第十三集』）

日本思想史と国文学（『日本思想史講座・研究方法論』五三・五・一）

『古事記』全巻朗読吹込カセットテープ（五三・一二・一五製作五四・四・一五発行）

○昭和五十四（一九七九）（65）
国際文化交流について（『亜大』留学生文集』五四・一・一〇）

アイヌ語の語順について（『アジア研究所報』五四・一・一〇）

今年の御製御歌（『言論春秋』五四・一・二九）

『古事記』の全巻朗読・編集を終へて（『国民同胞』五四年二月号）

共通一次試験問題（『言論春秋』五四・二・一九）
ASIA IS ONE（ASIA 五四・四・五）

林文月教授訳『源氏物語』（『アジア研究所報』五四・五・一〇）

『エーゲ海からテムスのほとりへ』書評（ASIA 五四・五・一〇）

神話と歴史（『言論春秋』五四・六・一五）
長谷川如是閑の和歌（ASIA 五四・六・二五）

カーター大統領と御製（『言論春秋』五四・七・三〇）
『民族と文化の発見』書評（『国学院雑誌』八巻3号）

『古事記』の下巻について（『復刊・アカネ』第九号五四年六月）

吉田松陰「究理の学」（『国民同胞』五四年八月号）

秦始皇帝陵と毛首席記念堂 (ASIA 五四・一〇・

五)

南洲と蒼海 (『教養部紀要』第一九号五四年)

しきしまのみち略史・覚書 (『教養部紀要』第二〇号

五四年)

古事記と太安万侶 (一隅会速記録第102回、五四・二・

一五)

輪読導入講義 (『日本への回帰——第十四集』)

『日本思想と中国思想の係り合い』(『アジア研究所紀要』

第六号五四年)

○昭和五十五年 (一九八〇) (66)

八十年代年頭の展望 (ASIA 五五・一・一〇)

膠着語をたずねて——再びネパール語へ (『アジア研

究所所報』五五・一・一〇)

社会主義論と独立自由思想との戦ひ (『国民同胞』五

五年三月号)

研究余滴Ⅱ 高安の城・冷泉家と「敷島の道」・日本語

は独立しているが孤立しているのではない (ASIA

A 五五・四・二五) 連載)

Oh, East is East, and West is West (ASIA 灯台

五五・六・五)

インドの膠着語を訪ねて——ドラヴィダ語とムンダ語

—— (『アジア研究所所報』五五・六・二〇)

ホイットマンの「民主主義の展望」(『弘道』五五年五、

六月号)

蒼海の和歌 (佐賀県弘報誌 五五・八・五稿)

大野晋博士著『日本語の文法を考える』を読んで (『国

民同胞』五五年八月号)

宮脇昌三教授の近刊『権兵衛峠』、『井月真蹟集』書評 (A

SI A 五五・一一・一一)

聖徳太子『勝鬘経義疏』の現代語訳と研究——『攝受

正法章』(一) (『教養部紀要』第二一号五五年・第

二三号五六年)

共通一次試験の問題点 (『教養部紀要』第二二号五五年)

文明と樹木、精神病とノイローゼのちがい (ASIA

灯台 五五・一〇・五)

シンハリ語も膠着語 (『アジア研究所所報』五五・一

一・一〇)

『建学の精神』について (『学寮委員研修会講話集』

五五年度版)

平戸にて——井上孚庵先生歌碑のことなど (『自琢』

第十五号)

大学入試共通一次試験マーク・シート方式とは(『言論春秋』五五・一二・一五)

黒上正一郎先生遺著『聖徳太子の信仰思想と日本文化

創業』講読(『日本への回帰——第十五集』)

砂鉄の道・幻想(『アジア研究所紀要』第七号五五年)

○昭和五十六年(一九八二)(67)

広辞苑の中のマルクシズム(『言論春秋』五六・三・

二及び『日本を守る会研究情報』五六・五・一)

新年の御製御歌を拝聴して(『祖国と青年』四月号)

日本語与諸国語之比較紀要(『東語双週刊』中華民國

七〇年三・二五)

漢字の危機(『アジア研究所所報』五六・五・一〇)

西洋文化の『奥の細道』(下島連教授著『ケルティック・

フリンジへの旅』書評(ASIA 五六・六・一五)

法隆寺の御製と中宮寺の御歌(『法隆寺刊』聖徳』八九

号)

日本史教科書はなぜ横書きか(『言論春秋』五六・七・

二〇)

蘆溝橋事件とエドガー・スノー(『アジア研究所所報』

五六・一一・一一)

太田耕造先生『略歴』解説(ASIA 五六・一二・五)

大日本帝国憲法と井上毅の国典研究(『教養部紀要』

第二三号五六年)

日本思想与外国思想関係(林素卿訳)(淡江大学一九

八一年九月)

○昭和五十七年(一九八二)(68)

流行の天皇観に触れて(『国民同胞』四月号・五月号)

日本文明の危機、「一次型人間の出現」、秘本玉くしげ、

国語問題は社会問題である、マンガ・暗算・日本歴史

など、経済大国は失速するのではないか(『経済論壇』

四月号より九月号まで『社会時評欄』)

膠着語の旅——バスク語(『アジア研究所所報』五

七・六・二二)

古事記朗読その他(『国語国字』百十二号)

『太田耕造全集』第二巻はしがきその他(昭和五七年

一月二二日発行)

創作和歌全体批評(『日本への回帰——第十九集』)

古語のーと二題(『教養部紀要』第二六号五七年)

瀬上安正君のこと（『国民同胞』五七年一二月号）

国学の流れとしまのみち（一隅会講演記録五七・

二・一八）

日本人の自然観（『比較思想研究』第九号五七年二月）

日中両国歴史思想の比較（『アジア研究所紀要』第九

号五七年）

序に代へて（山内健生氏著『古事記神話の思想』序文、

五八・七・一五）

松田福松先生著『英米思想研究抄』（国文研叢書N・

25、五八・一二・二〇、松本幹男氏と編集）

○昭和五十八年（一九八三）（69）

早川崇学長の急逝に憶う（ASIA追悼号 五八・

一・一五）

新年の御製御歌について（生長の家『生政連誌』一月

号）

日本の国の国がらについて（『国民同胞』五八年八月号）

感想二題（一、著の持ち方から 二、入江侍従長の『鈴

木貴太郎』）（『国民同胞』五八年一〇月号）

中華人民共和国の歴史教科書（『アジア研究所報』

五八・一一・一五）

阿部隆一君追悼（『国民同胞』五八年一二月号）（遺稿

集に収載）

随想四篇——後藤積氏著『交通と文化』その他——（『復

刊・アカネ』第一四号五八年四月）

盤城・湯本の御製歌碑（ASIA 五八・一一・四）

『三経義疏』の文章構造について（『教養部紀要』第

二八号五八年）

『太田耕造全集』第一巻はしがき（五八・一一・二六）

○昭和五十九年（一九八四）（70）

五浦紀行（『国民同胞』五九年一月号）

昭和の御代の力の源——御唱和の御製御歌——（『聖

使命』五九・一・一一）

「君が代」の語義について（『弘道』五九年一・二月号）

宮良当壮先生の思ひ出（『宮良当壮全集』月報五九年

一月）

『古事記』とホーマーの英雄叙事詩と『旧約聖書』と

の類型的対比・試論（『アジア研究所紀要』第一一

号五九年）

『太田耕造全集』第三巻（五九、一一、二六）

○昭和六十年（一九八五）（71）

小林秀雄ノート——聖徳太子と小林秀雄と岡潔——

（『復刊・アカネ』第一六号六〇年三月）

神話・叙事詩・歴史の關係への考察——文明の類型的

対比から（『経済論壇』六〇年二月号）

歌会始の御儀（『祖国と青年』三月号）

感想三題——まことは・一生一句・愛国心と戦争

——（『国民同胞』六〇年二月号）

和歌創作の意義についての新発見——『しきしまの

道』研究』補遺（『国民同胞』六〇年四月号）

歌会始入選の栄を賜はりしに際していただいた師友

諸氏のお歌（『国民同胞』六〇・五・一〇）

下島連教授著『遍歴——歴史と文学の間』出版祝辞（A

S I A 六〇・六・一）

『古事記』の中の葛城地方（『教養部紀要』第三一号

六〇年）

共通一次試験の抜本的改革を（週刊『世界と日本』六

〇・八・五）

『定本浅野晃全詩集』頌（『経済往来』六〇年八月号）

谷口雅春先生を偲んで（『聖使命』六〇・八・一）

自撰・執筆文献（散文）目録——年代順——亜細亜大

学教養部紀要32号（六〇・一一・三〇）

単行本

歌集『旅遠く』（亜細亜大学内刊行委員会六〇・一・

三〇）

『しきしまの道』研究（国文研叢書N.26、六〇・

三・一一）

『歌人・今上天皇 増補・新版』日本教文社（六〇・

一一・一〇）

『太田耕造全集』第四卷（補遺）はしがき（六〇・一

一・二六）

附記、なほ昭和四〇年代のはじめから、亜大入試の現

代文の出題採点に当たったので、現代国語の問題を五、

六〇題近く作成した。私の国語教育の一環である。

○昭和六十一年（一九八七）（72）

歌集『旅遠く——アジア巡礼紀行の歌』（刊行委員会）

（六〇・一・三〇）

花巻・遠野・平泉紀行の歌（〇〇年二月二日―四日）『白

壁』創刊号（一月）

阿蘇の一夜（小林秀雄講演カセットテープ『本居宣長』

附録一月二十四日)

大御歌Ⅱ天皇陛下国民と共に(『代々木』一月〜二月連載)

今上陛下御製の歌碑(『神社新報』六〇年一月六日)

『歌人・今上天皇』増補新版・補正(『国民同胞』二月号)

『歌人・今上天皇』(増補新版)刊行次第(『国民同胞』三月号・四月号)

マークシート廃止論の行方(『世界と日本』三月三二日号)

バーバラ・ロビンソン画集紹介(『アジア研究所報』四二二号)

今こそ共通一次の改革を(『世界と日本』七月七日号) 神話は当然扱うべきだ(『世界と日本』八月二五日号)

私の八月十五日(『国民同胞』七月号八月号) 今上陛下の御製について(『青葉会叢書第十九卷七月十日号)

御製歌碑追補(『国民同胞』連載)

昭和六十年歌会始に参列して(『日本への回帰』第21集) 『人生と表現』誌とその主張(『アカネ』18号)

三井甲之先生書簡鈔 追補(同)

序にかへて——成煥氏著『韓国の古典短歌』序

山本勝市先生の病床での最後の録音を拝聴して(『国民同胞』三〇〇号)

『歌人・今上天皇』(一偶会にての講話速記パンフレット) 日本能率協会 八月二八日)

昭和六十二年(一九八七)(73)

大御歌「あけぼの」から「代々木」連載13号〜24号) 皇太子同妃殿下御歌集「ともしび」について(『神社新報』一月一九日号)

インド古代文明における神話叙事詩歴史の關係(上)(下) 『アジア研究所報』44号・45号

『史記』紀本の始祖卵生伝説(前記・補説) 歌会始御題「木」の御製御歌を拝誦して(『日本の息吹』第15号)

『建国記念の日』と「紀元節」上・下(『国民同胞』五月号六月号)

『古事記』と『日本書紀』——その成立事情をめぐって(同十月号)

『太田耕造先生略伝』(『アジアの夢と青年への期待』あとがき、六一・三・三一)

古事記の中の但馬の国（『アカネ』19号）

禁煙の次第（同前）

明治天皇御製の訛伝について（『国民同胞』二月号）

歴史物語と和歌——歴史の表現法（『国民同胞』十二月号）

月号）

東洋史学の先駆者・那珂通世博士と『古事記』と吉田

松陰と（『アジア研究所報』六二年七月一日）

○昭和六十三年（一九八八）（74）

膠着語の旅・抄（『アジア研究所紀要』第十四号）

『古事記』の中国語訳（『問題と研究』五月号）

日中文明比較論考（同 三月号）

『聖徳太子・佛典講説・勝鬘經義疏の現代語訳とその

研究』上巻（国民文化研究会・聖徳太子研究会著二

月十一日大明堂刊）

同書解題（『国民同胞』二月号）

神話と歴史・余話（『アジア研究所報』五月号）

信時潔先生の『古事記』作曲（『国民同胞』五月号）

最近わかったことでお伝えしたいことの二、三（『惜

春賦』——高卒五十年記念誌）

青木繁と『古事記』（『国民同胞』六月号）

『勝鬘經義疏の現代語訳とその研究』あとがき（『国民同胞』十二月号）

聖徳太子の国史編纂と『古事記』成立（『アカネ』20号）

国際化とナショナルリテュー（『月曜評論』十二月十三

日号）

○平成元年（一九八九）（75）

聖徳太子の国史編纂と古事記の成立（『アカネ』20号

——『中外日報』三月十六日号再録）

私の宗教は？——何教といふのでせうか（『知恩』一

月号）

年頭ご発表の三首のお歌（『祖国と青年』（昭和天皇を

しのびまつりて）三月号）

昭和天皇の御製四首（『言論春秋』平成元年二・一三）

神道と和歌・しきしまの道（『国民同胞』二・一〇号）

昭和天皇の最後のお歌（『青々会報』三・一五号）

昭和天皇に対する責任追求とマルクシズム（『問題と

研究』三月号）

昭和天皇のお歌百五十首（謹選抄）（『弘道』昭和天皇

崩御特別号）（二・四月号）

聖徳太子十七条憲法とブツダのことは（スッタニパー

タ)蛇の章(『亜細亜大学アジア研究所報』五月号)
新聞による天皇陛下のお言葉(『言論春秋』六月五日号)
「みどりの日」制定記念式典における天皇陛下のおこ
とば全文ならびに昭和天皇のお歌(緑化植樹祭関係)
謹鈔(『国民同胞』六月十日号)

昭和天皇御製研究補説(『国民同胞』十月号)

太田耕造先生ご略伝(『自助協力』パンフレット)

「信頼関係に終始努力」(太田先生百年祭談話)(『ア
ジア』)

山背大兄王のお墓・追補(『アカネ』21号)

昭和天皇を偲びまつりて(平成元年歌日記抄)(『同』)

『聖徳太子・仏典講説・勝鬘経義疏の現代語訳とその
研究』下巻(国民文化研究会・聖徳太子研究会著)

二月十一日刊(大明堂)

○平成二年(一九九〇)(76)

今上御製・平成二年年頭のお歌について(存稿、本書

に収録)昭和天皇の最後のお歌(『日本への回帰』
第二十五集)

昭和天皇の「晴れ」の御製を拝して(『祖国と青年』

三月号)

ビデオ「末代皇帝」(十巻)を観て(『問題と研究』五
月号)

歴史物語の源流としての『古事記』と編年体史の源流
としての『日本書紀』——附、那珂通世博士の『日
本書紀』記年論(『国民同胞』四月号)

『古事記』の外国語訳(『アジア研究所報』58号)

富士山型神々系譜図への修正意見(『国民同胞』五月号)

高校の国語教育とマークシート入試(『高校と教育』

七月号)

バリ語も膠着語!アシヨカピラー銘文の言語(『ア
ジア研究所報』七月号)

歴史教育と国立大学マークシート入試の問題(『国
民同胞』八月号)

木村肥佐先生をしのんで(『木村肥佐先生追悼集』

大地・ひと・ロマン』(十月)

「はしがきに代へて」——広瀬誠氏著『和歌と日本文化』
はしがき(平成二年刊行)

貧乏の話(『アカネ』22号)

文明論二題(日印禊神話と日希編年体史)(『アジア研
究所紀要』(平成三年刊行予定)

研究紀要』(平成三年刊行予定)

執筆文献目録

○平成三年（一九九二）（77）

あとがき——刊行の経緯について

本書『年々歳々』は、夜久正雄先生が亜細亜大学の前身である興亜専門学校の教壇にお立ちになって以来四十八年にも及ぶ講義生活に、平成二年度をもって終止符を打たれるのを記念し、あはせてまた先生が平成三年（一九九一年）にお元氣に喜寿をお迎へになるのを祝して、先生の警咳に親しく接するご縁にあづかった人たちを中心に記念出版されたものである。

先生が亜細亜大学の教壇に立たれるのも今年限りとなった四月早々、これを機に、これまで夜久先生がお書きになったものを一つにまとめて出版し、もってお祝ひとさせていただきたい、——このやうなお気持をいろいろな御方がお持ちでいらっしやうである。なかには、これまで夜久先生が学内で発表になられたものを丹念に収集し特にこの日のために保存してくださいと下さってゐた御方までいらっしやうと聞く。

そこで、亜細亜大学にお勤めになってもっとも古い世代の先生方が世話人となられて、「夜久正雄名誉教授喜寿詩文集」（仮題）の刊行に向け鋭意取り組まれることとなった。世話人となられたのは、神沢有三教授（教養部）、山田清市教授（同上）、山口年一教授（経営学部）、関口甲子男教授（経済学部経済学科）、梶村昇教授（経済学部国際関係学科）、清瀬信次郎教授（法学部）、飯島正教授（国際関係学部）、鰐坂芳文事務局長（事務局）の八名の方々である。教養部のみ二人となったのは夜久先生がかつて教養部に在籍されてゐたことから国文学といふ同じご専攻の山田教授にも特にお加はりいただいたことによる。かうして、「夜久正雄名誉教授喜寿詩文集」（仮題）の刊行に向け、より多くの方々に刊行

発起人となっていたただくための願ひが、八名の世話人の方々によって行なはれることとなった。それが次の書簡である。

○

謹啓 春も五月となり若葉が緑に映えて美しい時節となりました。先生方におかれましてはいかがが過ぎでございますでしょうか。突然のお願いにて誠に恐縮に存じますが、名誉教授の夜久正雄先生が来年三月をもちまして教壇を去られるご予定です。顧みますと、夜久先生は、戦前（昭和十八年）に亜細亜大学の前身である興亜専門学校に奉職されて以来、ご定年で昭和六十一年に退職されるまでの凡そ四十二年間を、文字どおり亜細亜大学とともに歩んで来られました。そしてその後も、名誉教授兼理事として週何回か教壇に立つて学生の教育に当って来られるとともに、深いご研究に基づいたご著書ご論文を数多くご発表になつていらっしゃいました。そのような先生の半世紀に及ぶご研究生活から『歌人今上天皇』等といった歴史に残る名作が生み出されてきたことは、改めて申し上げるまでもなく周知のことです。しかし先生が学内において広報紙「アジア」や「アジア研究所報」「青々会報」等にこれまた多くのご論考をお寄せになつてこられ、しかもそこに珠玉の文章がたくさんあるということは、意外と知られてないことかと存じます。そこで先生が最終講義と喜寿（数え年）をお迎えになられる前に、先生が、日経専・日経短大・亜細亜大学教授時代にご発表になられたものを主として先生ご自身にご選抜いただき、それを昭和二十年から平成元年まで年代順に編纂させていただいて、「夜久正雄名誉教授喜寿詩文集」（仮題）という題のもと、一冊の御本として来年の三月頃までに刊行いたしたいと、先生に親しく接することを得た関係者一同ころから願つていらっしゃるような次第でございます。つきましては何

とぞご趣旨をご理解賜り、発起人としてお力をおかし願いたくこもとご案内かたがたお願い申し上げます。小生ら、ただ古くから在職していたことをもって僭越ながら世話人となり御願い申し上げます次第でございます。ご多用中誠に恐れ入りますが、同封の葉書にて、六月末日までに諾否のご返事を賜りますよう宜敷くお願い申し上げます。

平成二年五月吉日

世話人

敬具

神沢 有三（教養）

山田 清市（国文学）

山口 年一（経営）

関口甲子男（経経）

梶村 昇（経国）

清瀬信次郎（法）

飯島 正（国関）

鯨坂 芳文（事務局）

世話人の呼び掛けに応じて快く発起人となって下さった方々は、およそ一ヶ月のあひだに、二五二名の多きに上った。発起人はじめ、事務的な作業に加はつてゐた私どもにとり、かくも多くの方々にご賛同いただいたといふことは、本当に有り難いことであつた。そのお名前は、夜久先生の「はしがき」に記されてゐる通りである。そこで、改めて、世話人ならびに発起人の連名で、夜久先生のご友人や、夜久ゼミをはじめとする教へ子の方々にまで呼び掛け、本書「年々歳々」の刊行計画のお知らせと御協賛の依頼が行はれたのである。以下にそれを記すと――。

「夜久正雄名誉教授喜壽詩文集」（仮題）の発刊に當つて

謹啓 盛夏の候となりましたが、いよいよご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび名誉教授夜久正雄先生が来年三月に教壇を離れられるのを機に、「夜久正雄名誉教授喜壽詩文集」（仮題）を刊行することになりました。

顧みますと、夜久先生は、戦前の昭和十八年に亜細亜大学の前身である興亜専門学校に奉職されて以来、ご定年で昭和六十一年に退職されるまでの凡そ四十三年間を、文字どおり亜細亜大学とともに歩んで来られました。そしてその後も、名誉教授として週何回か教壇に立つて学生の教育に當つて来られるとともに、深いご研究に基づいたご著書ご論文を数多くご発表になつていらしゃいます。そのような先生の半世紀に及ぶご研究生活から『歌人今上（昭和）天皇』『古事記のこのち』（G.W. Robinson 氏による英訳 THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN）等々ごつた名作が生み出されてきたことは改

めて申し上げるまでもなく周知のことです。しかし先生が学内において広報紙「THE ASIA」、「アジア研究所報」、「青々会報」、「亜細亜大学新聞」等にそのときどきの問題についてご論考をお寄せになってこられ、しかもそこには、時代の流れを表現するような文章がありながら、これまでのところ未だ単行本としてまとめられてはおりません。(なお「亜細亜大学教養部紀要」、「アジア研究所紀要」にご発表の学術論文については今回は割愛されるということです。)

そこで先生が最終講義と喜寿(数え年)をお迎えになられる前に、先生が、日経専・日経短大・亜細亜大学教授ならびに名誉教授時代にご発表になられたものを、前記のなから先生ご自身にご選択いただき、それを編纂して、「夜久正雄名誉教授喜寿詩文集」(仮題)という題のもとに刊行する運びとなりました。

つきましては右の趣旨をご理解賜り、左記により、前記詩文集をお求めいただけますと幸甚に存じます。

平成二年七月吉日

敬具

発起人一同

各位御中

記

一、一口五千円 (一口以上お願いたします)

一、申込方法 郵便振替にて、口座番号「東京八一六八六七二」

「夜久教授詩文集刊行会」宛

(同封の振替用紙をご利用ください)

一、申込期日 平成二年九月末日

一、刊行日 平成三年三月予定

○

これに应へて全国からお寄せくださった御協賛は日を追ふごとに増えていった。本当に有り難いことであつた。その数、平成三年一月現在で、四百名余の多きを数へ、お寄せいただいたご寄付金は私たちの想像を遙かに越える額となつた。これほど、多くのご浄財をお送りいただいたといふことは、ひとへに、夜久先生のご人徳の賜物であり、またそのご人徳にたいする多くの方々の謝恩の結晶でもあらう、——さう、しみじみと、思はないではゐられなかつた。その四一五名の方々のお名前は既に夜久先生が「はしがき」に記されてゐるので以下に記すことは割愛させていただきます、ここに、皆様方の御協賛にたいし改めて世話人ならびに発起人から深甚の謝意を申し上げ次第である。

平成三年(一九九一年)は亜細亜大学にとって創立五十周年の年にあたる。この記念すべき年に、ひきつづき夜久先生は、創立五十周年記念事業五十年史編集顧問として、平成四年十一月までお勤めいただくと聞く。今後とも夜久先生におかれては、お元気で、後進の私たちをこれまで同様ご指導くださいますよう心から願はないではゐられない。最後に、夜久先生のご健康を、皆様とともに心から祈念申し上げますながら、以上の経過報告を以て、あとがきに代へさせていただきますと思ふ。

平成三年二月

(東中野修道)

年々歳々 亜細亜大学名誉教授夜久正雄 喜寿記念詩文集

平成三年三月二十一日発行

著者 夜久正雄

東京都武蔵野市桜堤一三三七五―三

〒一〇〇 電話〇四三―五二九二四九

編集 『年々歳々』―亜細亜大学名誉教授

発行 夜久正雄 喜寿記念詩文集刊行会

東京都武蔵野市境五二四―一〇

亜細亜大学内

〒一八〇 電話〇四三―五三三二一代

印刷 (株)松井ビ・テ・オ印刷

宇都宮市平出町四二八七―七

〒三三三 電話〇二六六―二二五一一代



